

下 田 東 遺 跡

— 本文編 —

2011. 3

香芝市教育委員会

序 文

香芝市は奈良県の北西部に位置し、古代から穴虫越えや関屋越えが通じて大和と河内を結ぶ交通の要衝であり、また、市の南西部には『方葉集』にもうたわれた二上山がそびえ、人々に安らぎを与えています。市内には鉄道が縦横に走り、さらに、高速道路などの交通網の整備も進んでいることから、大阪のベッドタウンとして急速に人口が増加し、現在でも増加の一途をたどっております。それに伴って市内各地で盛んに開発が行われ、それにつれて発掘件数も増加しております。須恵器と瓦を焼成した窯跡が見つかった白鳳台や、奈良時代の火葬墓や石切場が見つかった高山台などの土地区画整理事業をはじめとする大規模な宅地開発も次々に行われ、市内各地で貴重な発見が相次いでいます。

さて、本書は「人和都市計画・五位堂駅前北第二土地区画整理事業」に伴って平成13年度から平成20年度まで発掘調査を行った報告書です。今回の土地区画整理事業は、近鉄五位堂駅の北西に広がる静かな水田地帯で、かつて縄文時代の土器が採集されるなどしていました。調査を開始した初年度には帆立貝型の前方後円墳である下田東1号墳と、その周濠から人物や馬などの形象埴輪がみつき、平成17年度には平安時代の井戸から「種蒔日」や「田刈」など農作業に関する記載がある木簡が出土しました。さらに、平成19年度には下田東2号墳の周濠から木棺の底板が完全な形で出土し、木棺材が年輪年代測定によって450年頃に伐採されたことが判明するなど、全国的に貴重な遺物が出土しました。

最後に、これまで発掘調査にご協力を賜りました関係者の皆さまに方に感謝申し上げますとともに、この報告書の刊行が今後の学問進歩の一助となり、さらに、香芝市の文化財がより一層周知されることを願います。

平成23年3月

香芝市教育委員会
教育長 中谷 彪

例 言

1. 本書は、奈良県香芝市下田東3丁目および狐井に所在する下田東遺跡、瓦口森田遺跡、未命名の遺物散布地2ヶ所における、五位堂駅前北第二十地区西整理事業に伴う発掘調査の報告である。なお、昔名を「下田東遺跡」としたが、これは平成18年3月に「下田東遺跡発掘調査概報1」として当事業における概報を初めて刊行して以来「下田東遺跡」として報告してきたことによる。実際には、下田東遺跡のほか瓦口森田遺跡と2ヶ所の遺物散布地にまたがる4遺跡の報告書である。

2. 発掘調査は、国土交通省国庫補助金事業の一環として実施した。

事業名	大和都市計画・五位堂駅前北第二十地区西整理事業に伴う発掘調査		
事業者	香芝市		
調査体制	香芝市教育委員会事務局教育部 生涯学習課		
主査	佐藤良二	(平成13・14年度)	
	山下隆次	(平成15年度以降)	
臨時職員	海木 整	(平成14・15・16・17年度)	
	金松 誠	(平成14・15・16年度)	
	波多野篤	(平成14・15・16年度)	
	福田由甲子	(平成17年度)	
	藤田智子	(平成17・18年度)	
	辰巳陽一	(平成18・19・20・21年度)	
	清岡廣子	(平成19・20・21年度)	
	三好栄太郎	(平成20年度)	
	小島晴彦	(平成22年度)	
	箕 義夫	(平成14・15・16・17・18・22年度)	

3. 本書で使用した方位は真北を示し、挿図の座標軸は世界測地系による。海拔高は東京湾の平均海面を基準にしている。また、遺構の略称はSA=塀、SB=建物、SD=溝、SE=井戸、SK=土坑、SP=ピット、SR=自然流路、SX=その他遺構である。
4. 発掘作業にかかわる土木作業は(社)香芝市シルバー人材センター、(株)アートおよび安西工業(株)、航空写真撮影および測量作業は(株)アコード、(株)ウエスコ、(株)アスコ、(株)パスコ、日本テクノ(株)、写測エンジニアリング(株)、かんこう(株)、遺構実測、実測図作成作業、一部の遺物実測図作成、遺構実測図および遺物実測図のデジタルトレースは(株)文化財サービス、遺物写真撮影はファーム、遺物保存処理、樹種特定は(財)元興寺文化財研究所、(株)吉田生物研究所にそれぞれ委託した。
5. 発掘調査に係る遺構実測図作成作業、及び遺物整理に係る復元、実測図作成作業は、以下の調査補助員が行った。
- 大倉利子、入竹正裕、金村茂子(故)、近藤真紀、國木田大、黒沼保子、小林山弥、須崎憲一、須田友喜、竹川静子、田中久美子、戸室怜央、中川香織、渡岡久恵、西口祥人、野水宏美、原田うの、山根弓果、米澤陽一、赤松住奈、有馬純子、池田貴之、奥見佳央、島村果苗、清水隆、中川清一、古崎純史、古武紗代、納谷静夏、田中純一郎、三岡伸吉、松木治郎、松原真弓(順不同・敬称略)
6. 発掘調査及び本書の作成にあたり、以下の方々の御助言、御協力を得た。記して感謝する。
- 森 郁夫、大脇 潔、松藤利人、和田 華、和田晴吾、光谷拓実、泉森 蛟、花谷 浩、千賀 久、関川尚功、豊岡卓二、宮原晋一、中井一夫、清水昭博、林部 均、坂 靖、廣岡孝信、岡林孝作、鶴

見泰幸、大西政夫、今尾文昭、小栗明彦、水野敏典、小池香津江、松田純一、西藤清秀、森下志介、立石昭夫、藤田孝二郎、宮崎正裕、井上諒平、名倉 聡、吉村公男、前澤祐浩、山田 均、青木勉時、徳藤重聖、井川 聡、伊藤健司、大野 薫、奥山誠哉、岡田憲一、金子裕之、神谷正弘、鈴木裕明、竹内菜見男、田中正利、平賀野村、福田さよ子、丸山信夫、米田 一、龍田修一、宮岡正浩、小泉優夫(故)、伊津宗泰(故)、常陸歴史考古学研究会、本館学会、菟喜式輪茶会(順不同・敬称略)

7. 平成 13 年度～平成 17 年度調査の成果については、調査担当者の解釈および意図を考慮し、概要報告書(以下、概報)の記述を踏襲し、加筆、修正は最低限に止めた。
8. 平成 13 年度～平成 17 年度調査についての図面は、調査担当者が退職しているため、原則として概報に掲載されたものを転載している。
9. 遺物については清岡、辰巳、小島が執筆し、編集は小島、辰巳(平成 21 年度)が行った。

目 次

第1章 遺跡の位置と環境	1
第2章 調査の契機と経過	2
第3章 平成13年度調査	4
1 遺構(湯本)	4
2 遺物(清岡・小島)	8
第4章 平成14年度調査	37
1 遺構(湯本・金松・波多野)	37
(1) 第25～第27・第35トレンチ	37
(2) 本調査北区	38
(3) 本調査中央区	41
(4) 本調査南区	42
(5) 本調査北西区	43
2 遺物(清岡・小島)	44
(1) 第25～第27・第35トレンチ	44
(2) 本調査北区	44
(3) 本調査南区	58
第5章 平成15年度調査	61
1 遺構(湯本・金松・波多野)	61
(1) A地区	61
(2) B地区	61
(3) C地区	62
(4) D地区	64
(5) E地区	66
2 遺物(清岡・小島)	66
(1) C地区	66
(2) D地区	71
(3) E地区	73
第6章 平成16年度調査	74
1 遺構(湯本・金松・波多野)	74
(1) C地区	74
(2) F地区	75
(3) G地区	75
2 遺物(清岡・小島)	76
(1) C地区	76
(2) F地区	84
(3) G地区	86
第7章 平成17年度調査	89

1 遺構	89
(1) H地区(福岡)	89
(2) I地区(藤田)	91
(3) J地区(藤田)	93
(4) K地区(福岡)	96
(5) L地区(福岡・藤田)	97
2 遺物(清岡・小島)	98
(1) H地区	98
(2) I地区	106
(3) J地区	111
(4) K地区	113
(5) L地区	114
第8章 平成18年度調査	116
1 遺構(辰巳)	116
(1) L地区	116
(2) M地区	118
(3) K地区	119
(4) N地区	120
2 遺物(清岡・小島)	122
(1) L地区	122
(2) M地区	130
(3) K地区	131
(4) N地区	133
第9章 平成19年度調査	138
1 遺構	138
(1) K地区(清岡)	138
(2) J地区(清岡・辰巳)	141
2 遺物	144
(1) K地区(清岡)	144
(2) J地区(清岡・辰巳・小島)	159
第10章 平成20年度調査	163
1 遺構(三好)	163
(1) K地区	163
2 遺物(清岡・小島)	166
(1) K地区	166
第11章 主な遺構・遺物の詳細	174
1 下田東1号墳	174
(1) 遺構(湯本)	174
(2) 遺物	174
①埴輪(湯本)	174

②土師器（清岡）	179
③須恵器（小島）	179
④石製品（小島）	182
2 下田東2号墳（辰巳・小島）	182
(1) 遺構	182
(2) 遺物	183
①木棺底板	183
②土師器	183
③須恵器	184
(3) まとめ	185
3 井戸（辰巳）	185
(1) 挿入式円形丸太割り抜き型	185
(2) 組立式方形縦板組型	186
(3) 組立式横板組型	187
(4) 積み上げ式横板組型	187
(5) 積み上げ式曲物組型	187
(6) 積み上げ式結桶組型	188
(7) 積み上げ式土器・埴輪組型	188
4 旧河道	188
(1) SR03	188
①遺構（小島）	188
②遺物（清岡・小島）	189
(2) SR15	206
①遺構（小島）	206
②遺物（清岡・小島）	206
5 瓦埴類（辰巳）	224
(1) 軒丸瓦	225
(2) 軒平瓦	226
(3) 丸瓦	227
(4) 平瓦	229
(5) 鵞尾	235
(6) その他	236
(7) 埴	236
(8) まとめ	237
6 縄文土器（小島）	239
(1) 平成13年度調査	239
(2) 平成14年度調査	240
(3) 平成15年度調査	241
(4) 平成16年度調査	242
(5) 平成17年度調査	243

(6) 平成 20 年度調査	211
7 弥生土器 (清岡)	244
8 石器 (小島)	247
(1) 平成 14 年度調査	247
(2) 平成 15 年度調査	248
(3) 平成 16 年度調査	249
(4) 平成 18 年度調査	250
(5) 平成 19 年度調査	251
(6) 平成 20 年度調査	252
第 12 章 まとめ (展覧)	253

図面図版 I 目次

- 第 1 図 周辺遺跡分布図
- 第 2 図 下田東遺跡調査区配置図
- 第 3 図 第 4～13・24 トレンチおよび各拡張区 遺構配置図
- 第 4 図 下田東 1 号墳平面図
- 第 5 図 下田東 1 号墳遺物出土状況図
- 第 6 図 下田東 1 号墳各土層断面図 1
- 第 7 図 下田東 1 号墳各土層断面図 2
- 第 8 図 第 17～23 トレンチおよび各拡張区 遺構配置図
- 第 9 図 古墳拡張区・墳丘土第 4 層出土遺物実測図
- 第 10 図 第 5 トレンチ 出土遺物実測図
- 第 11 図 第 5 トレンチおよび第 9 トレンチ 出土遺物実測図
- 第 12 図 第 10 トレンチ 出土遺物実測図
- 第 13 図 第 11 トレンチ 南端第 4 層出土遺物実測図 1
- 第 14 図 第 11 トレンチ 南端第 4 層出土遺物実測図 2
- 第 15 図 第 11 トレンチ 南端第 4 層・SD01 埋土出土遺物実測図
- 第 16 図 第 12 トレンチおよび第 13 トレンチ 出土遺物実測図
- 第 17 図 第 13 トレンチ SR01 出土遺物実測図 1
- 第 18 図 第 13 トレンチ SR01 出土遺物実測図 2
- 第 19 図 第 5-13 トレンチ間 第 4 層・SR01 出土遺物実測図
- 第 20 図 第 5-13 トレンチ間 SR01 出土遺物実測図 1
- 第 21 図 第 5-13 トレンチ間 SR01 出土遺物実測図 2
- 第 22 図 第 5-13 トレンチ間 SR01 出土遺物実測図 3
- 第 23 図 第 16 トレンチおよび第 17 トレンチ SR01 出土遺物実測図
- 第 24 図 第 17 トレンチ SR01 出土遺物実測図 1
- 第 25 図 第 17 トレンチ SR01 出土遺物実測図 2
- 第 26 図 第 17 トレンチ SR01 出土遺物実測図 3
- 第 27 図 第 18 トレンチ SE03・SD03 出土遺物実測図
- 第 28 図 第 18 トレンチ SD03 出土遺物実測図
- 第 29 図 第 18 トレンチ SD02 出土遺物実測図 1
- 第 30 図 第 18 トレンチ SD02 出土遺物実測図 2
- 第 31 図 第 18 トレンチ SD02 出土遺物実測図 3
- 第 32 図 第 18 トレンチ SD02 出土遺物実測図 4
- 第 33 図 第 18 トレンチ SD02 出土遺物実測図 5
- 第 34 図 第 18 トレンチ SD02 出土遺物実測図 6
- 第 35 図 第 18 トレンチ SD02 出土遺物実測図 7
- 第 36 図 第 18 トレンチ SD02 出土遺物実測図 8
- 第 37 図 第 19 トレンチ SD02 出土遺物実測図

- 第38図 第20・21・23トレンチ 出土遺物実測図
第39図 第23トレンチ SR01 出土遺物実測図1
第40図 第23トレンチ SR01 出土遺物実測図2
第41図 第23トレンチ SR01 出土遺物実測図3
第42図 第23・24トレンチ 出土遺物実測図
第43図 第25～27トレンチ 遺構配置図
第44図 第28～30トレンチおよび本調査北区・中央区・南区下層 遺構配置図
第45図 本調査北区南東部 SB11 半断面図
第46図 本調査北区南東部 SB12 半断面図
第47図 本調査北区南東部 SB16 半断面図
第48図 本調査北区南東部 SB17 半断面図
第49図 本調査北区 SE08 半断面図
第50図 本調査北区 SE10 半断面図
第51図 本調査北区 SE11 半断面図
第52図 本調査北区 SE12 半断面図
第53図 本調査北区 SD38 遺物出土状況図
第54図 本調査北区 SR03 上層遺物出土状況図
第55図 本調査南区 SE13・SE15 半断面図
第56図 本調査南区 SE14 半断面図
第57図 本調査南区 SK24・SK25・SK36 半断面図
第58図 第31～34トレンチおよび本調査北西区 遺構配置図
第59図 第36トレンチおよび第37トレンチ 遺構配置図
第60図 第27トレンチおよび本調査北区 包含層出土遺物実測図
第61図 本調査北区 耕作溝出土遺物実測図
第62図 本調査北区 SK・SE 出土遺物実測図
第63図 本調査北区 SE 出土遺物実測図
第64図 本調査北区 SD 出土遺物実測図1
第65図 本調査北区 SD 出土遺物実測図2
第66図 本調査北区 SD 出土遺物実測図3
第67図 本調査北区 SD 出土遺物実測図4
第68図 本調査北区 SD 出土遺物実測図5
第69図 本調査北区 SD 出土遺物実測図6
第70図 本調査北区 SD 出土遺物実測図7
第71図 本調査北区 SD・SR 出土遺物実測図
第72図 本調査南区 包含層・SD・SK 出土遺物実測図
第73図 本調査南区 SE 出土遺物実測図
第74図 A地区第35トレンチおよび本調査西区 遺構配置図
第75図 A地区第38トレンチ SD73・SK17・P40 断面図
第76図 B地区第38トレンチ 遺構配置図
第77図 C地区第44～52トレンチ 配置図

- 第78図 C地区C調査区 第1～2遺構面遺構配置図
- 第79図 C地区C調査区 SK52 半断面図
- 第80図 C地区C調査区 SE25 平面・立面・断面図
- 第81図 C地区C調査区 SE30・SE31 平面断面図
- 第82図 C地区C調査区 SE26 平面・立面・断面図
- 第83図 C地区C調査区 SE28 平面・立面・断面図
- 第84図 C地区C調査区 SE29 平面・立面・断面図
- 第85図 C地区C調査区 環濠居館 SD67 十層断面図 1
- 第86図 C地区C調査区 環濠居館 SD67 土層断面図 2
- 第87図 C地区C調査区 環濠居館 SD67 上層断面図 3
- 第88図 C地区C調査区 環濠居館 SD68 十層断面図
- 第89図 D地区第40・43・53トレンチ 遺構配置図
- 第90図 D地区第40トレンチ 北半西壁上層断面図
- 第91図 D地区第40トレンチ SE20 平面・立面・断面図
- 第92図 D地区第40トレンチ SE21 平面・立面・断面図
- 第93図 D地区第40トレンチ SE22 平面断面図
- 第94図 D地区第43トレンチ SE24 平面断面図・第53トレンチ SD56 平面図
- 第95図 E地区本調査中央西区・中央東区 上層遺構配置図
- 第96図 E地区本調査中央西区・中央東区 下層遺構配置図
- 第97図 E地区本調査中央西区 SB63 平面断面図
- 第98図 E地区本調査中央東区 SE36 平面・立面・断面図
- 第99図 C地区C調査区 包含層・耕作溝出土遺物実測図
- 第100図 C地区C調査区 SE 出土遺物実測図
- 第101図 C地区C調査区 SD67 出土遺物実測図 1
- 第102図 C地区C調査区 SD67 出土遺物実測図 2
- 第103図 C地区C調査区 SD68・69 出土遺物実測図
- 第104図 C地区C調査区 SR16 出土遺物実測図 1
- 第105図 C地区C調査区 SR16 出土遺物実測図 2
- 第106図 C地区C調査区 SR16 出土遺物実測図 3
- 第107図 D地区第40トレンチ 包含層・SR14 出土遺物実測図
- 第108図 D地区第40トレンチ SE20 出土遺物実測図 1
- 第109図 D地区第40トレンチ SE20 出土遺物実測図 2
- 第110図 D地区第40トレンチ SE22 およびE地区 山上遺物実測図
- 第111図 C地区C調査区 第3遺構面遺構配置図
- 第112図 C地区C調査区 SE43・SE44 平面断面図
- 第113図 C地区C調査区 SR15 土層断面図 1
- 第114図 C地区C調査区 SR15 土層断面図 2
- 第115図 F地区第54トレンチ 遺構配置図・断面図
- 第116図 F地区F調査区およびG地区G調査区 遺構配置図
- 第117図 F地区F調査区 SB67 半断面図

- 第118図 F地区F調査区 SD82 平断面図
- 第119図 F地区F調査区 SK63 平断面図
- 第120図 F地区F調査区 SK66 平断面図
- 第121図 G地区G調査区 SB80 平断面図
- 第122図 G地区G調査区 SB81 平断面図
- 第123図 G地区G調査区 SB83 平断面図
- 第124図 G地区G調査区 SE45 平面・立面・平断面図
- 第125図 G地区G調査区 SE46 平断面図
- 第126図 G地区G調査区 SE47 平断面図
- 第127図 G地区G調査区 SE48 平断面図
- 第128図 C地区C調査区 SE43・SD67・SD68 出土実測図
- 第129図 C地区C調査区 SR16 出土遺物実測図1
- 第130図 C地区C調査区 SR16 出土遺物実測図2
- 第131図 C地区C調査区 SR16 出土遺物実測図3
- 第132図 C地区C調査区 SR16 出土遺物実測図4
- 第133図 C地区C調査区 SR16 出土遺物実測図5
- 第134図 C地区C調査区 SR16 出土遺物実測図6
- 第135図 C地区C調査区 SR16 出土遺物実測図7
- 第136図 C地区C調査区 SR16 出土遺物実測図8
- 第137図 C地区C調査区 SR16 出土遺物実測図9
- 第138図 F地区第54トレンチ 出土遺物実測図
- 第139図 F地区F調査区 出土遺物実測図
- 第140図 G地区G調査区 SB・SE45 出土遺物実測図
- 第141図 G地区G調査区 SE46 出土遺物実測図1
- 第142図 G地区G調査区 SE46 出土遺物実測図2
- 第143図 G地区G調査区 SE47・48 出土遺物実測図1
- 第144図 G地区G調査区 SE48 出土遺物実測図
- 第145図 H地区H調査区 遺構配置図
- 第146図 H地区H調査区 SK72 平面図
- 第147図 H地区H調査区 SK75 平断面図
- 第148図 II地区II調査区 SE49 平断面図
- 第149図 H地区H調査区 SE51 平断面図
- 第150図 II地区II調査区 SE52 平断面図
- 第151図 H地区H調査区 SE53 平断面図
- 第152図 H地区H調査区 SE54 平面・立面・断面図
- 第153図 I地区I調査区 遺構配置図
- 第154図 I地区I調査区 掘立柱建物平断面図
- 第155図 I地区I調査区 SE57 平断面図
- 第156図 I地区I調査区 SE59 平断面図
- 第157図 I地区I調査区 SE60 平面・立面・断面図

- 第158図 I地区I調査区 SE61 平断面図
- 第159図 I地区I調査区 SE63 平断面図
- 第160図 I地区I調査区 SE64 平断面図
- 第161図 J地区J調査区 上層遺構配置図
- 第162図 J地区J調査区 下層遺構配置図
- 第163図 J地区J調査区 西壁上層断面図
- 第164図 J地区J調査区 SE66 平面・立面・断面図
- 第165図 J地区J調査区 SE67 平面・立面・断面図
- 第166図 J地区J調査区 SD98 遺物出土状況図
- 第167図 J地区J調査区 SA21 平立面図・SK78 遺物出土状況図
- 第168図 K地区K調査区 遺構配置図
- 第169図 K地区K調査区 河道平面図
- 第170図 K地区K調査区 SD103・SX19～21 平面図
- 第171図 L地区第59 トレンチ 遺構配置図
- 第172図 L地区第60 トレンチ 上層遺構配置図
- 第173図 L地区第60 トレンチ 下層遺構平面図
- 第174図 L地区第60 トレンチ SK71 平断面図
- 第175図 L地区第60 トレンチ SX11 遺物出土状況図
- 第176図 II地区H調査区 SK・SE49 出土遺物実測図1
- 第177図 H地区II調査区 SK・SE49 出土遺物実測図2
- 第178図 II地区II調査区 SE50・51 出土遺物実測図
- 第179図 H地区H調査区 SE52 出土遺物実測図
- 第180図 H地区H調査区 SE53・54 出土遺物実測図
- 第181図 H地区H調査区 SE54 出土遺物実測図1
- 第182図 H地区II調査区 SE54 出土遺物実測図2
- 第183図 II地区H調査区 SE54 出土遺物実測図3
- 第184図 II地区H調査区 SE55・56 出土遺物実測図
- 第185図 I地区I調査区 SP・SX・SE57 出土遺物実測図
- 第186図 I地区I調査区 SE59 出土遺物実測図1
- 第187図 I地区I調査区 SE59 出土遺物実測図2
- 第188図 I地区I調査区 SE59 出土遺物実測図3
- 第189図 I地区I調査区 SE60 出土遺物実測図1
- 第190図 I地区I調査区 SE60 出土遺物実測図2
- 第191図 I地区I調査区 SE60 出土遺物実測図3
- 第192図 I地区I調査区およびJ地区J調査区 出土遺物実測図
- 第193図 J地区J調査区 SE66 出土遺物実測図1
- 第194図 J地区J調査区 SE66 出土遺物実測図2
- 第195図 J地区J調査区 SE66 出土遺物実測図3
- 第196図 J地区J調査区 SE66 出土遺物実測図4
- 第197図 J地区J調査区およびK地区K調査区 出土遺物実測図

図面図版Ⅱ目次

- 第198図 K地区K調査区 出土遺物実測図
- 第199図 L地区第59・60 トレンチ 出土遺物実測図
- 第200図 L地区第61 トレンチ 平面図および南壁・東壁断面図
- 第201図 L地区第61 トレンチ SX22 平断面図
- 第202図 L地区第63 トレンチ 遺構配置図および北壁・東壁断面図
- 第203図 L地区第63 トレンチ SF69 平断面図
- 第204図 L地区第62 トレンチ 遺構配置図および西壁・南壁断面図
- 第205図 L地区第61 トレンチ拡張区およびM地区62 トレンチ拡張区 平断面図
- 第206図 M地区第64 トレンチ 遺構配置図および北壁・南壁・東壁断面図
- 第207図 M地区第65 トレンチ 遺構配置図および東壁・南壁十層断面図
- 第208図 K地区第66 トレンチ 遺構配置図および南壁上層断面図
- 第209図 M地区第65 トレンチ P68、K地区第66 トレンチ SX24 遺物出土状況図
- 第210図 N地区第67 トレンチ 遺構配置図
- 第211図 N地区第67 トレンチ 東壁・西壁・南壁・北壁断面図
- 第212図 N地区第67 トレンチ サブトレンチ土層断面図
- 第213図 N地区第67 トレンチ SA26・27 平断面図
- 第214図 N地区第67 トレンチ SH95 平断面図
- 第215図 N地区第67 トレンチ SD96 平断面図
- 第216図 N地区第67 トレンチ SB97 平断面図
- 第217図 N地区第67 トレンチ SH98 平断面図
- 第218図 N地区第67 トレンチ SB99 平断面図
- 第219図 N地区第67 トレンチ SB100 平断面図
- 第220図 N地区第67 トレンチ SE71 平断面図
- 第221図 L地区第61 トレンチ SX22・23 出土遺物実測図1
- 第222図 L地区第61 トレンチ SX22・23 出土遺物実測図2
- 第223図 L地区第61 トレンチ SX22・23 出土遺物実測図3
- 第224図 L地区第61 トレンチ SX22・23 出土遺物実測図4
- 第225図 L地区第63 トレンチ 包含層・SK 出土遺物実測図
- 第226図 L地区第63 トレンチ SE69 出土遺物実測図1
- 第227図 L地区第63 トレンチ SD69 出土遺物実測図2
- 第228図 L地区第63 トレンチ SE69 出土遺物実測図3
- 第229図 L地区第63 トレンチ SE69 出土遺物実測図4
- 第230図 M地区第62・65 トレンチおよびK地区第66 トレンチ 出土遺物実測図
- 第231図 K地区第66 トレンチ SX24 出土遺物実測図
- 第232図 N地区第67 トレンチ 出土遺物実測図
- 第233図 N地区第67 トレンチ SE71 出土遺物実測図1
- 第234図 N地区第67 トレンチ SE71 出土遺物実測図2

- 第235図 N地区第67トレンチ SE71 出土遺物実測図3
- 第236図 N地区第67トレンチ SE71 出土遺物実測図4
- 第237図 N地区第67トレンチ SE71 出土遺物実測図5
- 第238図 N地区第67トレンチ 出土遺物実測図
- 第239図 K地区第68トレンチ 遺構配置図
- 第240図 K地区第68トレンチ SK88 平断面図
- 第241図 K地区第68トレンチ 土坑土層断面図
- 第242図 K地区第68トレンチ SE73・75 平断面図
- 第243図 K地区第68トレンチ SE74 平断面図
- 第244図 J地区第69トレンチ 遺構配置図
- 第245図 J地区第69トレンチ 西壁土層断面図
- 第246図 J地区第69トレンチ SK95 平面・立面・断面図
- 第247図 J地区第69トレンチ SE76 平面・立面・断面図
- 第248図 J地区第70トレンチ 遺構配置図
- 第249図 J地区第70トレンチ 東壁・西壁・南壁・北壁土層断面図
- 第250図 J地区第70トレンチ 下田原2号墳平面図および周濠断面図
- 第251図 J地区第70トレンチ 下田原2号墳木棺底板および直下遺物出土状況図
- 第252図 J地区第70トレンチ SX25 遺物出土状況図
- 第253図 K地区第68トレンチ SK87 山上遺物実測図1
- 第254図 K地区第68トレンチ SK87 出土遺物実測図2
- 第255図 K地区第68トレンチ SK88 山上遺物実測図1
- 第256図 K地区第68トレンチ SK88 出土遺物実測図2
- 第257図 K地区第68トレンチ SK89・90 出土遺物実測図
- 第258図 K地区第68トレンチ SK90 出土遺物実測図
- 第259図 K地区第68トレンチ SK91 出土遺物実測図1
- 第260図 K地区第68トレンチ SK91 山上遺物実測図2
- 第221図 K地区第68トレンチ SK91 山上遺物実測図3
- 第262図 K地区第68トレンチ SK91 出土遺物実測図4
- 第263図 K地区第68トレンチ SK92・SE73 山上遺物実測図
- 第264図 K地区第68トレンチ SE74 出土遺物実測図1
- 第265図 K地区第68トレンチ SE74 出土遺物実測図2
- 第266図 K地区第68トレンチ SE74 出土遺物実測図3
- 第267図 K地区第68トレンチ SE74 出土遺物実測図4
- 第268図 K地区第68トレンチ SE75・SD106 出土遺物実測図
- 第269図 K地区第68トレンチ SD106・107 出土遺物実測図
- 第270図 K地区第69トレンチ SK・包含層山上遺物実測図
- 第271図 J地区第69トレンチ SE76 出土遺物実測図1
- 第272図 J地区第69トレンチ SE76 山上遺物実測図2
- 第273図 J地区第69トレンチ SE76 出土遺物実測図3
- 第274図 J地区第69トレンチ SE76 出土遺物実測図4

- 第275図 J地区第70トレンチ 山上遺物実測図
第276図 K地区第71トレンチ 上層遺構配置図
第277図 K地区第71トレンチ 下層遺構配置図第278図 K地区第71トレンチ 断面図
第279図 K地区第71トレンチ SX34 平面・立面・断面図
第280図 K地区第71トレンチ SE77 平面断面図
第281図 K地区第71トレンチ SE77 平面・立面図
第282図 K地区第71トレンチ 包含層・耕作溝出土遺物実測図
第283図 K地区第71トレンチ P・SX 山上遺物実測図
第284図 K地区第71トレンチ SX 出土遺物実測図
第285図 K地区第71トレンチ SE77 出土遺物実測図1
第286図 K地区第71トレンチ SE77 山上遺物実測図2
第287図 K地区第71トレンチ SE77 出土遺物実測図3
第288図 K地区第71トレンチ SE77 出土遺物実測図4
第289図 K地区第71トレンチ SE77 山上遺物実測図5
第290図 K地区第71トレンチ SR31 出土遺物実測図
第291図 K地区第71トレンチ 南支流山上遺物実測図
第292図 K地区第71トレンチ 南支流・攪乱出土遺物実測図
第293図 下田東1号墳周濠出土埴輪実測図1
第294図 下田東1号墳周濠出土埴輪実測図2
第295図 下田東1号墳周濠出土埴輪実測図3
第296図 下田東1号墳周濠出土埴輪実測図4
第297図 下田東1号墳周濠出土埴輪実測図5
第298図 下田東1号墳周濠出土埴輪実測図6
第299図 下田東1号墳周濠出土埴輪実測図7
第300図 下田東1号墳周濠出土埴輪実測図8
第301図 下田東1号墳周濠出土埴輪実測図9
第302図 下田東1号墳周濠出土埴輪実測図10
第303図 下田東1号墳周濠出土遺物実測図
第304図 下田東1号墳・下田東2号墳出土遺物実測図
第305図 下田東2号墳出土木棺底板実測図
第306図 下田東2号墳組合式木棺復原模式図
第307図 井ノ井構造物模式図
第308図 旧河道流路想定図
第309図 SR03 出土土師器実測図1
第310図 SR03 出土土師器実測図2
第311図 SR03 出土土師器実測図3
第312図 SR03 出土土師器実測図4
第313図 SR03 出土土師器実測図5
第314図 SR03 出土須恵器実測図1

- 第315図 SR03 出土須恵器実測図 2
第316図 SR03 出土須恵器実測図 3
第317図 SR03 出土須恵器実測図 4
第318図 SR03 出土須恵器実測図 5
第319図 SR03 出土須恵器実測図 6
第320図 SR03 出土須恵器実測図 7
第321図 SR03 出土須恵器実測図 8
第322図 SR03 出土須恵器実測図 9
第323図 SR03 出土須恵器・石製品実測図
第324図 SR15 出土人面墨書土器実測図 1
第325図 SR15 出土人面墨書土器実測図 2
第326図 SR15 出土人面墨書土器実測図 3
第327図 SR15 出土墨書土器実測図 1
第328図 SR15 出土墨書土器実測図 2
第329図 SR15 出土ミニチュア土器・土師器実測図
第330図 SR15 出土土師器実測図 1
第331図 SR15 出土土師器実測図 2
第332図 SR15 出土土師器実測図 3
第333図 SR15 出土土師器実測図 4
第334図 SR15 出土土師器実測図 5
第335図 SR15 出土土師器実測図 6
第336図 SR15 出土土師器実測図 7
第337図 SR15 出土土師器実測図 8
第338図 SR15 出土土師器実測図 9
第339図 SR15 出土土師器実測図 10
第340図 SR15 出土土師器実測図 11
第341図 SR15 出土土師器実測図 12
第342図 SR15 出土黒色土器実測図 1
第343図 SR15 出土黒色土器実測図 2
第344図 SR15 出土須恵器実測図 1
第345図 SR15 出土須恵器実測図 2
第346図 SR15 出土須恵器実測図 3
第347図 SR15 出土須恵器実測図 4
第348図 SR15 出土須恵器実測図 5
第349図 SR15 出土須恵器実測図 6
第350図 SR15 出土須恵器実測図 7
第351図 SR15 出土土製品・鉄製品実測図
第352図 SR15 出土木製品実測図
第353図 下田東遺跡出土軒丸瓦実測図 1
第354図 下田東遺跡出土軒丸瓦実測図 2

- 第355図 下田東遺跡出土軒平瓦実測図
第356図 下田東遺跡出土玉縁式丸瓦実測図 1
第357図 下田東遺跡出土玉縁式丸瓦実測図 2
第358図 下田東遺跡出土行基式丸瓦実測図
第359図 下田東遺跡出土平瓦実測図 1
第360図 下田東遺跡出土平瓦実測図 2
第361図 下田東遺跡出土平瓦実測図 3
第362図 下田東遺跡出土平瓦実測図 4
第363図 下田東遺跡出土平瓦実測図 5
第364図 下田東遺跡出土平瓦実測図 6
第365図 下田東遺跡出土平瓦実測図 7
第366図 下田東遺跡出土平瓦実測図 8
第367図 下田東遺跡出土平瓦実測図 9
第368図 下田東遺跡出土平瓦実測図 10
第369図 下田東遺跡出土平瓦実測図 11
第370図 下田東遺跡出土平瓦実測図 12
第371図 下田東遺跡出土平瓦実測図 13
第372図 下田東遺跡出土平瓦実測図 14
第373図 下田東遺跡出土平瓦実測図 15
第374図 下田東遺跡出土扇尾・特殊瓦実測図
第375図 下田東遺跡出土埴実測図 1
第376図 下田東遺跡出土埴実測図 2
第377図 下田東遺跡出土埴実測図 3
第378図 平成 13 年度調査出土縄文土器実測図
第379図 平成 14 年度調査出土縄文土器実測図
第380図 平成 14・15 年度調査出土縄文土器実測図
第381図 平成 15 年度調査出土縄文土器実測図
第382図 平成 16・17 年度調査出土縄文土器実測図
第383図 平成 17・20 年度調査出土縄文土器実測図
第384図 下田東遺跡出土弥生土器実測図 1
第385図 下田東遺跡出土弥生土器実測図 2
第386図 下田東遺跡出土弥生土器実測図 3
第387図 平成 14 年度調査出土石器実測図 1
第388図 平成 14 年度調査出土石器実測図 2
第389図 平成 15 年度調査出土石器実測図 1
第390図 平成 15 年度調査出土石器実測図 2
第391図 平成 16 年度調査出土石器実測図 1
第392図 平成 16 年度調査出土石器実測図 2
第393図 平成 18 年度調査出土石器実測図
第394図 平成 19・20 年度調査出土石器実測図

表目次

- 第 1 表 下田東 1 号墳周濠断面土色
- 第 2 表 L 地区第 61 トレンチ 南壁土層断面土色
- 第 3 表 L 地区第 61 トレンチ 東壁土層断面土色
- 第 4 表 L 地区第 63 トレンチ 北壁土層断面土色
- 第 5 表 L 地区第 63 トレンチ 東壁上層断面土色
- 第 6 表 M 地区第 62 トレンチ 西壁土層断面土色
- 第 7 表 M 地区第 62 トレンチ 南壁土層断面土色
- 第 8 表 L 地区第 61 トレンチ拡張区および M 地区第 62 トレンチ拡張区南壁上層断面土色
- 第 9 表 M 地区第 64 トレンチ 北壁土層断面土色
- 第 10 表 M 地区第 64 トレンチ 南壁土層断面土色
- 第 11 表 M 地区第 64 トレンチ 東壁上層断面土色
- 第 12 表 M 地区第 65 トレンチ 東壁土層断面土色
- 第 13 表 M 地区第 65 トレンチ 南壁上層断面土色
- 第 14 表 K 地区第 66 トレンチ 南壁土層断面土色
- 第 15 表 N 地区第 67 トレンチ 東壁土層断面土色
- 第 16 表 N 地区第 67 トレンチ 西壁土層断面土色
- 第 17 表 N 地区第 67 トレンチ 南壁土層断面土色
- 第 18 表 N 地区第 67 トレンチ 北壁土層断面土色
- 第 19 表 N 地区第 67 トレンチ サブトレンチ A 地区土層断面土色
- 第 20 表 N 地区第 67 トレンチ サブトレンチ H 地区土層断面土色
- 第 21 表 N 地区第 67 トレンチ サブトレンチ C 地区土層断面土色
- 第 22 表 J 地区第 70 トレンチ 北壁土層断面土色
- 第 23 表 J 地区第 70 トレンチ 東壁・西壁・南壁上層断面土色
- 第 24 表 K 地区第 71 トレンチ 北壁上層断面土色
- 第 25 表 K 地区第 71 トレンチ 北部東壁土層断面土色
- 第 26 表 K 地区第 71 トレンチ 北部東側南壁上層断面土色
- 第 27 表 K 地区第 71 トレンチ 東壁土層断面土色
- 第 28 表 K 地区第 71 トレンチ 南壁土層断面土色
- 第 29 表 下田東遺跡出土縄文土器観察表
- 第 30 表 下田東遺跡出土石器観察表
- 第 31 表 下田東遺跡出土瓦観察表
- 第 32 表 木棺計測比較表

写真図版目次

- 巻頭図版 1 調査地周辺航空写真
巻頭図版 2 下山東1号墳全景
巻頭図版 3 下田東1号墳出土 馬形埴輪・馬形埴輪
巻頭図版 4 C地区C調査区 SR16 出土木製輪
C地区C調査区 SR15・16 出土木製輪
巻頭図版 5 H地区H調査区 SE54 出土木簡
巻頭図版 6 J地区第70トレンチ 下山東2号墳全景
巻頭図版 7 下田東2号墳東周濠内 木棺出土状況
下田東2号墳木棺直下 須惠器出土状況
下田東2号墳南周濠内 土師器出土状況
巻頭図版 8 下田東2号墳出土木棺
巻頭図版 9 下田東遺跡出土軒丸瓦 素弁八弁蓮華紋軒丸瓦 (GM1)
下田東遺跡出土軒丸瓦 単弁十六弁蓮華紋軒丸瓦 (GM2)
巻頭図版 10 下田東遺跡出土軒丸瓦 複弁八弁蓮華紋軒丸瓦 (GM3)
下田東遺跡出土軒丸瓦 複弁八弁蓮華紋軒丸瓦 (GM4)
巻頭図版 11 下田東遺跡出土軒丸瓦 複弁八弁蓮華紋軒丸瓦 (GM5)
下田東遺跡出土軒丸瓦 複弁八弁蓮華紋軒丸瓦 (GM6)
巻頭図版 12 下田東遺跡出土軒丸瓦 三巴紋軒丸瓦 (GM7)
下田東遺跡出土軒丸瓦 三巴紋軒丸瓦 (GM8)
巻頭図版 13 下田東遺跡出土軒平瓦 四重弧紋軒平瓦 (GH1)
下田東遺跡出土軒平瓦 四重弧紋軒平瓦 (GH2)
巻頭図版 14 下田東遺跡出土軒平瓦 四重弧紋軒平瓦 (GH3)
下田東遺跡出土軒平瓦 四重弧紋軒平瓦 (GH4)
下田東遺跡出土軒平瓦 四重弧紋軒平瓦 (GH5)
巻頭図版 15 下田東遺跡出土軒平瓦 均整唐草忍冬紋軒平瓦 (GH6)
下田東遺跡出土軒平瓦 均整忍冬紋軒平瓦 (GH7)
巻頭図版 16 下田東遺跡出土鳥尾
- 図版 1 第1～13・24トレンチおよび各拡張区全景
図版 2 下田東1号墳全景
図版 3 下田東1号墳周濠内 人物埴輪出土状況
図版 4 下田東1号墳周濠内 武人形埴輪出土状況
下田東1号墳周濠内 巫女形埴輪出土状況
図版 5 下田東1号墳周濠内 馬形埴輪出土状況
図版 6 下田東1号墳周濠Ⅰ・Ⅱ区 埴輪出土状況
図版 7 下山東1号墳周濠Ⅰ区 遺物出土状況
下田東1号墳周濠Ⅲ区 遺物出土状況

図版 8	第 18 トレンチ SD03 馬鍬出土状況 第 18 トレンチ南東拡張部 敷全景
図版 9	下田東 1 号墳周濠出土馬剣形埴輪 下田東 1 号墳周濠出土巫女形埴輪
図版 10	下田東 1 号墳周濠山上武人形埴輪
図版 11	下田東 1 号墳周濠出土家形埴輪 下田東 1 号墳周濠山上馬形埴輪
図版 12	下田東 1 号墳周濠出土鶏形埴輪 下田東 1 号墳周濠出土馬形埴輪・人物埴輪
図版 13	下田東 1 号墳周濠山上円筒埴輪 下田東 1 号墳周濠出土土器
図版 24	第 18 トレンチ SD02 出土遺物 第 18 トレンチ SD03 出土遺物
図版 15	第 18 トレンチ SD03 出土馬鍬 第 5・10・11・12・13・16・17・23 トレンチ SR01 出土遺物
図版 16	第 25～27 トレンチ全景
図版 17	本調査北区・南区全景
図版 18	本調査北区南東部 SR03 遺物出土状況
図版 19	本調査北区南東部 SR03 遺物出土状況
図版 20	第 31～34 トレンチ・本調査北西区全景
図版 21	第 36・37 トレンチ全景 本調査北区・中央区・南区出土遺物 平成 14 年度調査出土縄文土器
図版 23	A 地区第 35 トレンチ・本調査西区および B 地区第 38 トレンチ全景 C 地区 C 調査区全景
図版 24	C 地区 C 調査区 環壕居館全景
図版 25	C 地区 C 調査区 SE25 半截状況 C 地区 C 調査区 SR16 出土木製輪出土状況
図版 26	D 地区第 40・43・53 トレンチ全景
図版 27	D 地区第 40 トレンチ SE20 井戸枠検出状況 D 地区第 40 トレンチ SE21 井戸枠検出状況
図版 28	E 地区本調査中央西区・東区全景 E 地区本調査中央東区 SE36 井戸枠検出状況
図版 29	C 地区 C 調査区 SD68 出土遺物 C 地区 C 調査区 SD69 出土遺物
図版 30	C 地区 C 調査区 SE32 出土遺物 D 地区第 40 トレンチ SE20 出土遺物
図版 31	C 地区 C 調査区 SR15 出土遺物 E 地区本調査中央東区 SR03 出土遺物
図版 32	F 地区本調査中央東区 SR03 出土縄文土器

- 図版 33 C地区C調査区 SR16 出土縄文土器
平成15年度調査出土石器
- 図版 34 C地区C調査区 SR15 全景
C地区C調査区 SR15 内堤防状遺構検出状況
- 図版 35 C地区C調査区 SR15 遺物山上状況
- 図版 36 C地区C調査区 SR15 木製輪検出状況
- 図版 37 C地区C調査区 SR16 木製輪・建築部材山上状況
- 図版 38 F地区F調査区全景
G地区G調査区全景
- 図版 39 G地区G調査区 SE45 井戸枠検出状況
G地区G調査区 SE46 半葦状況
- 図版 40 G地区G調査区 SE48 検出状況
G地区G調査区 SE48 下層半葦状況
- 図版 41 C地区C調査区 SR15 出土人面墨書土器
- 図版 42 C地区C調査区 SR15 出土人面墨書土器
- 図版 43 下田東遺跡出土墨書土器および円面硯
G地区G調査区 SE46 出土木製横櫓
- 図版 44 C地区C調査区 SR15 出土遺物
C地区C調査区 SR16 出土遺物
- 図版 45 H地区 H調査区全景
H地区II調査区 SE56 井戸枠検出状況
- 図版 46 II地区H調査区 SE51 下底曲物検出状況
- 図版 47 H地区H調査区 SE54 井戸枠検出状況
II地区H調査区 SE54 半葦状況
- 図版 48 H地区H調査区 SE54 最下層遺物出土状況
II地区II調査区 SE54 井戸枠内完細状況
- 図版 49 II地区II調査区 SK72 全景
H地区H調査区 SK72 遺物出土状況
- 図版 50 I地区 I調査区全景
I地区 I調査区 SE59 井戸枠検出状況
- 図版 51 I地区 I調査区 SE60 井戸枠下段
I地区 I調査区 SE60 最下底検出状況
- 図版 52 J地区 J調査区全景
- 図版 53 J地区 J調査区 SH66 半葦状況
J地区 J調査区 SH67 井戸枠検出状況
- 図版 54 K地区K調査区全景
K地区K調査区 SX19・20・21 検出状況
- 図版 55 L地区第59トレンチ全景
L地区第60トレンチ全景
- 図版 56 I地区 I調査区 SE60 出土子持ち勾玉
H地区H調査区 SE54 出土墨書土器
J地区 J調査区 SR24 出土遺物

図版 57	H地区II調査区 SE54 出土遺物 I地区I調査区 SE60 出土遺物
図版 58	H地区H調査区 出土縄文土器 H地区II調査区 出土石器
図版 59	K地区K調査区 出土縄文土器 K地区K調査区 出土石器
図版 60	L地区第60トレンチ 出土石器 L地区第60トレンチ 出土縄文土器
図版 61	L地区第61トレンチ全景 L地区第63トレンチ全景 L地区第61トレンチ SX22 全景
図版 62	L地区第63トレンチ SE69 検出状況 L地区第63トレンチ SE69 最低部
図版 63	L地区第63トレンチ SE69 断ち割り状況
図版 64	M地区第62トレンチ全景 M地区第64トレンチ全景
図版 65	M地区第65トレンチ全景 N地区第67トレンチ全景
図版 66	N地区第67トレンチ SE71 検出状況 N地区第67トレンチ SE71 底部
図版 67	N地区第67トレンチ SE71 半裁状況 N地区第67トレンチ SE71 枠内上層断面
図版 68	K地区第66トレンチ全景 K地区第66トレンチ SX24 遺物山上状況
図版 69	L地区第61トレンチ SX22 出土遺物 K地区第66トレンチ SX24 出土遺物
図版 70	L地区第63トレンチ SE69 出土遺物
図版 71	L地区第63トレンチ SK82 出土遺物 L地区第63トレンチ SK83 出土遺物
図版 72	N地区第67トレンチ SE71 出土遺物
図版 73	K地区第68トレンチ全景
図版 74	K地区第68トレンチ SE73 断ち割り状況 K地区第68トレンチ SE74 半裁状況
図版 75	K地区第68トレンチ SE74 断ち割り状況 K地区第68トレンチ SE74 井戸枠下段部
図版 76	J地区第69トレンチ 第2遺構面全景 J地区第69トレンチ 第3遺構面全景
図版 77	J地区第69トレンチ SE76 井戸枠検出状況 J地区第69トレンチ SE76 断ち割り状況

図版 78	J地区第69トレンチ SE76 下段検出状況 J地区第69トレンチ SE76 下段内曲物検出状況
図版 79	J地区第70トレンチ全景
図版 80	K地区第68トレンチ SE74 出土地輪 J地区第70トレンチ SX25 出土遺物
図版 81	下田東2号墳東周濠 木棺直下出土遺物 下田東2号墳南周濠 出土遺物
図版 82	K地区第71トレンチ全景
図版 83	K地区第71トレンチ SX34 羽釜検出状況
図版 84	K地区第71トレンチ SE77 平裁状況 K地区第71トレンチ SE77 遺物検出状況
図版 85	K地区第71トレンチ SE77 内側曲物検出状況 K地区第71トレンチ SE77 出土遺物
図版 86	軒丸瓦(2186) 瓦当接合部凸面 軒丸瓦(2186) 瓦当接合部凹面
図版 87	軒丸瓦(2187) 瓦当接合部
図版 88	下緑式丸瓦A 凸面 玉緑式丸瓦A 凹面 玉緑式丸瓦A 側面
図版 89	下緑式丸瓦B 凸面 玉緑式丸瓦B 凹面 玉緑式丸瓦B 側面
図版 90	下緑式丸瓦C 凸面 玉緑式丸瓦C 凹面 下緑式丸瓦C 側面
図版 91	縄叩き平瓦A~H
図版 92	横縄叩き平瓦A~G
図版 93	斜格子叩き平瓦A~F
図版 94	斜格子叩き平瓦G~L
図版 95	陰溝逆転斜格子平瓦A~C
図版 96	鴟尾(2252) 表面 珠紋針痕跡 鴟尾(2252) 裏面 鴟尾(2252) 側面

参考文献

- 泉森皎 1976「古墳時代」『香芝町史』香芝町役場
- 泉森皎 1977「歴史時代の遺跡」『上牧町史』上牧町役場
- 泉森皎 1993「了持勾玉」『遺物が語る人との古墳時代』六興出版
- 伊藤寿和 2005「産の生業」『暮らしと生業 列島の古代史 ひと・もの・こと2』岩波書店
- 宇野隆夫 1982「井戸考」『史林65巻5号』史学研究会
- 岡林孝作 1994「木棺系統論-釘を使用した木棺の復元的検討と位置づけ-」『橿原考古学研究所論集第
十一巻』吉川弘文館
- 尾上実・森嶋康雄・近江俊秀 1995「瓦器碗」『概説 中世の土器・陶磁器』中世土器研究会編
- 香芝市教育委員会編 2006『香芝市埋蔵文化財発掘調査概報21』香芝市教育委員会
- 香芝市教育委員会編 2006『香芝市埋蔵文化財発掘調査概報22』香芝市教育委員会
- 香芝市教育委員会編 2007『香芝市埋蔵文化財発掘調査概報25』香芝市教育委員会
- 香芝市教育委員会編 2008『香芝市埋蔵文化財発掘調査概報27』香芝市教育委員会
- 香芝市教育委員会編 2009『香芝市埋蔵文化財発掘調査概報28』香芝市教育委員会
- 加藤優 1983「1982年出土の木簡 奈良・藤原宮跡」『木簡研究5号』木簡学会
- 鎌方正樹 2003『井戸の考古学』同成社
- 川端誠 1996「曲物容器の推移-北筑地方を中心として-」『月刊 考古学ジャーナル40』ニューサイ
エンス社
- 小泉俊夫 1994「香芝市に閉わる古代の郷」『ふたかみ史遊2』ふたかみ史遊会
- 小泉俊夫 1994「原始時代の生活を語る遺跡」『ふたかみ史遊3』ふたかみ史遊会
- 小泉俊夫 1994「香芝市内の糸屋復元」『ふたかみ史遊4』ふたかみ史遊会
- 小泉俊夫 2000「香芝市にみる「荘園制」の展開」『ふたかみ史遊20』ふたかみ史遊会
- 小泉俊夫 2002「下田東遺跡の発掘調査と地域史の課題」『ふたかみ史遊28』ふたかみ史遊会
- 小泉俊夫 2003「下田東遺跡の出土瓦とその背後に秘められた諸課題」『ふたかみ史遊30』ふたかみ史遊会
- 小谷徳彦 2003「川原寺の丸・平瓦」『飛鳥白鳳の瓦づくりVI-川原寺式軒瓦の成立と展開(1)-』
奈良文化財研究所
- 小谷徳彦・笠和也 2004「Ⅲ 山上遺物 4瓦埴類」『川原寺寺城北限の調査 飛鳥藤原第119-5次
発掘調査報告』奈良文化財研究所
- 桜井市文化財協会編 2000『大和の縄文時代-奈良盆地の狩人たちの足跡展-』桜井市文化財協会
- 桜井市文化財協会編 2000『三輪山周辺の考古学』桜井市文化財協会
- 千田稔 1971「古代大和国の郡家と交通路」『織田武雄先生退官記念人文地理論叢』織田武雄先生退官記
念事業会
- 籠野和己 1991「村落の歳時記」『日本村落史講座6巻』日本村落史講座編集委員会
- 籠野和己・鈴木景一・繁森浩幸・大庭精 1998「日本の木簡」『木簡 古代からのメッセージ』大修館書
店
- 田中彩太 1978「古銅時代木棺に用いられた繫結金具」『考古学研究25巻2号』考古学研究会
- 田中清美 1994「河内地域における弥生時代の木棺の形式と階層」『文化財学論集』文化財学論集刊行会
- 奈良県教育委員会編 1962『奈良縣史蹟名勝天然記念物調査報告 第12期』奈良県教育委員会

- 奈良国立文化財研究所編 1993『曲物』、『木器集成図録 近畿古代編』奈良国立文化財研究所
- 波多野篤 2005「奈良県香芝市下田東遺跡出土の土偶について」『ふたかみ14』香芝市二上山博物館
- 花谷浩 2003「飛鳥の川原寺式軒瓦」『飛鳥白鳳の瓦づくりVI—川原寺式軒瓦の成立と展開(1)—』奈良文化財研究所
- 樋口知志 2005「川と海の生業」『暮らしと生業 列島の古代史 ひと・もの・こと2』岩波書店
- 平川南 1999「新発見の「種了札」と古代の稲作」『国史学169』国史学会
- 平川南 2003「木簡と農業」『古代地方木簡の研究』吉川弘文館
- 福永伸哉 1985「弥生時代の木棺墓と社会」『考古学研究32巻1号』考古学研究会
- 藤原光輝 1962「組合式木棺について」『近畿古文化論攷』奈良県立橿原考古学研究所編
- 松村恵司・高永里菜 2004「Ⅱ 検出遺構 3川原寺の遺構」『川原寺寺域北限の調査 飛鳥藤原第119-5次 発掘調査報告』奈良文化財研究所
- 真弓常忠 1977「古代製鉄祭祀の神々」『神道史研究25巻2・3号』神道史学会
- 山下隆次 2006「奈良・下田東遺跡」『木簡研究28号』木簡学会
- 古田晶 1980「家父長制と個別経営」『日本古代村落史序説』塙書房

第1章 遺跡の位置と環境

香芝市は奈良県北西部に位置し、奈良盆地西部の一角を占める。東に人和高田市、北葛城郡広陵町、上牧町、西に大阪府柏原市、羽曳野市、南河内郡太字町、南に葛城市、北に北葛城郡王寺町が接している。大阪府側から鉄道、国道、高速道路などの交通網が発達し、都市通勤圏のベッドタウンとして人口が増加したことを受け、平成3年に県内10番目の市制を施行した。

下田東遺跡は、市の南西部にひろがる標高 52,000m～54,000mの沖積平地に所在する。宅地開発が進む以前の当該地域には、10～11世紀ごろに奈良盆地一帯で施行された、条里制地割に則した水田地帯が明瞭に残されていた。その地割の南北軸に沿って各々が熊谷川、山崎川、杉橋川、初田川、鳥居川といった北流する小河川が並んでおり、葛下川に注ぎ込んでいる。平地の北側には標高 60,000m～80,000mのなだらかな馬見丘陵が横たわり、その南西麓縁端を葛下川が北西に流れ、平地と丘陵の境界をなしている。

周囲を概観すると、西方には旧石器時代の遺跡として知られる二上山北麓遺跡群があり、馬見丘陵南西の鈴山遺跡ではナイフ形石器が出土している。また、北白川下層 1a 式～大藏山式の土器や石器、獣骨が大量に出土した狐井遺跡、下田遺跡、宮滝式～滋賀甲 1 式の土器が出土した瓦口森田遺跡など、縄文時代の遺跡が複数確認されている。一方、弥生時代においては遺跡の存在が稀薄であり、法楽寺山遺跡で後期の土器を伴う土坑、下田味原遺跡で後期の土器が出土する溝など、少数の遺構が検出されている程度である。古墳時代にはいと市内の土地利用は汎発化し、護岸遺構などが検出された前期から中期の鎌田遺跡、土坑や水路などが確認された中期から後期の藤ノ木丁遺跡など、既往の発掘調査により集落の存在が判明している。また、馬見丘陵とその南西側の平地には、前期に比定される前方後円墳の土山古墳、直径約 10m の円墳である長谷山古墳が築造され、中期後半には全長約 140m の前方後円墳である狐井城山古墳や狐井稲荷古墳、当遺跡で確認された下田東 1・2 号墳が造営された。後期になると御坊中第 1～3 号墳、御坊山第 1・2 号墳、勘平山第 1・2 号墳のような、直径 10m～25m 程度の円墳が根根上に築かれる。また、中世には平地に荘園「平田庄」が開発され、丘陵上に瓦城跡、鈴山城跡、下田城跡、古墳を利用した狐井城跡や、防衛的機能を備えた良福寺薬濠、五位堂薬濠、瓦口薬濠などが成立した。

第2章 調査の契機と経過

下田東遺跡は縄文時代早期から江戸時代までの遺構からなる複合遺跡であり、香芝市下田東3丁目から狐井にかけてひろがっている。昭和53年の水路改修の際、縄文土器片などが採集され、その存在が知られるようになった。その後、永らく未調査のままであったが、平成13年度から開始された香芝市による五位堂駅前北第二土地区画整理事業に伴い、本格的な発掘調査の機会を得た。調査は平成13年度に第1次調査を実施して以降、平成20年度まで計8次にわたって実施した。

平成13年度の第1次調査は山崎川以東の事業地北東区域において実施し、総調査面積は6,097㎡である。その結果、墳丘長21mの帆立貝型古墳である下田東1号墳を検出し、その周濠内からは円筒埴輪のほか家形、人物形、馬形、鶏形など多彩な形象埴輪が出土した。さらに、古墳が築かれた微高地の南側で検出した自然河道内には、古墳時代後期から奈良時代にかけての土師器、須恵器の完形品が多量に遺存していた。それらに加え、飛鳥時代の軒丸瓦、軒平瓦、鴟尾、埴などが出土し、平安時代頃までの掘立柱建物、井戸も検出している。

平成14年度の第2次調査は山崎川以西の事業地西側区域に木調査北区、南区、中央区、北西区を設定し、延べ16,264㎡について調査を実施した。その結果、自然河道に挟まれた微高地上において、古墳時代後期から平安時代にかけての掘立柱建物跡を多数確認した。自然河道は、その埋土内に古墳時代の土師器、須恵器の完形品を多量に包含しており、水辺祭祀が行われたと考えられる。

平成15年度の第3次調査では、前年度調査区の隣接区域をA地区およびB地区、事業地東端をC地区、中央南端をD地区、本調査中央区の東西をE地区として設定し、総面積8,596㎡を調査した。当調査では自然河道を3条、古墳時代から平安時代にかけての溝、土坑、掘立柱建物跡などを検出したが、それらの他に顕著な遺構を確認することはできなかった。なお、C地区C調査区については、第1、2遺構面を上層調査として当年度に、第3遺構面を下層調査として翌年度に行った。第3遺構面では飛鳥時代から平安時代にかけての自然河道を検出し、調査区西域で橋脚、堰、魚人状の各施設と考えられる木製杭列を、南東、中央、北西の各区域で護岸施設を検出した。遺物はササカイト刺片、土師器、須恵器、被熱痕のある凝灰岩切片が出土している。これらに混じって円筒埴輪、蛇紋岩製の勾玉、古墳時代の遺物に加え、飛鳥時代の軒丸瓦、埴、畜串などがある。また、橋脚、堰遺構周辺では軒丸瓦、軒平瓦、黒土器、人面黒土器、土馬、馬歯、木製鋤など奈良時代の遺物が主で、これらの他に祭祀関係のものが多数出土している。

平成16年度の第4次調査は、C地区に西接してF、G地区を設定し、C調査区第3遺構面と併せて4,743㎡を対象として実施した。C調査区では前年度調査で検出した自然河道の西岸を確認し、土師器、須恵器、血物側板などの遺物が出土した。これより西側では、東西、南北に走る耕作溝以外に柱穴、区画溝、井りなど約450基の遺構を検出

している。柱穴は、掘立柱建物約20棟分を含む。これらは、区画溝と平行位置で建てられるものと、方位に則して配列されたものとに分けられる。前者はその上層埋土から飛鳥時代、後者は建物群中央に位置する井戸出土の土器から奈良時代のものと考えられる。また「天」、「東」、「西」などと墨書された土器が出土している。

平成17年度の第5次調査では、E、FおよびG地区に挟まれた区域をH、I地区、その南にL地区、事業地東南端部にK地区、北東部にJ地区を設定し、計4,764.5㎡を対象とした。II地区では、耕作溝以外にピット、奈良時代から平安時代のものと思われる掘立柱建物、井戸、土坑などを検出した。また、井戸は江戸時代から現代のものまで計10基を検出しており、平安時代の1基からは木簡が出土している。この木簡は表裏両面に墨書があり、破片ではあるが情報量が多く、遺跡の性格を考えるうえで重要な資料となった。また、調査区を縦断して東側に延伸する自然河道の埋土上に井戸が密集して築かれている。この自然河道には数回にわたる堆積が認められ、一定期間流路となっていたことが理解されるが、遺物は底部から縄文土器の細片が僅かに出土したのみであった。この自然河道上に井戸が密集して築かれている。

平成18年度の第6次調査は新葛下川流路の南、事業地ほぼ中央南よりの一帯において、I地区東部にM、N地区を設定し、計2,737㎡を対象とした。主な遺構は、井戸、ピット、土坑、掘立柱建物、II河道であった。遺物は土師器皿、黒色土器が中心であるが、複数のピットおよび柱穴から、根石として用いたと思われる石、瓦が出土している。L地区で検出した井戸からは、内面がかなり良好に燻され、むしろ瓦器に近い黒色土器が枠内から出土している。これは、黒色土器から瓦器への過渡期に位置するものと考えられる。この他に、同じ井戸から7世紀第II四半期に比定される軒丸瓦片も出土しており、これは第1次調査で出土した鴫尾の年代に合致する。また、N地区では河の氾濫と、耕作地としての開発が交互に繰り返されていた様子が埋土の堆積状況から復元される。このことは、中世における当地域の土地利用を考えるうえで有意義な成果であった。

平成19年度の第7次調査はK地区、およびJ地区において、計1,856㎡を対象に実施した。K地区に設定したトレンチでは、ピット、井戸、土坑を主に検出し、遺物は古墳時代の土器類が多く、相対的に黒色土器、瓦器などの占める割合は低い。また、当該トレンチでは円筒埴輪を転用した井戸を検出した。さらにJ地区では墳丘規模が一边約8.0mの方墳を検出し、その東周濠内から組立式木棺の底板が出土した。この底板は短辺両端に縄掛け突起状の造出しを備えており、古墳時代の組立式木棺構造を考察するうえで有用な資料になるとと思われる。

平成20年度の第8次調査は、事業地南東部K地区に第71トレンチを設定して実施した。調査面積は553㎡である。検出遺構は、中世から近世の耕作に伴う素掘小溝、河川の旧流路、そしてそれに伴う杭列、井戸、少数の土坑などであった。主な遺物は縄文土器、埴輪、土師器、須恵器、黒色土器、瓦、石器などである。

第3章 平成13年度調査

平成13年度は、事業地北東部から中央部北側にかけて、任意に幅4.0mのトレンチを計24本設定し、試掘、確認調査を実施した。なお、各トレンチには設定順にトレンチ番号を付しているが、第1～第3、第4～第13・第24、第14、第15・第16、第17～第23トレンチでそれぞれ設定方位が異なる。総調査面積は6,097㎡である。

1 遺構

第1～第3トレンチ

明瞭な遺構、および遺物包含層の存在は認められなかった。すべてのトレンチにおいて、現地表面から掘削深度0.7m～1.0mに黄褐色粘質土が分布し、1.9m～2.2m掘り下げたところで青灰色シルト層に達する。上記黄褐色粘質土は南端から北へ5.0m～7.0mの地点で急激に落ち込み、トレンチ北端まで砂の堆積がみられた。この砂層中には土師器、須恵器の小片が微量に含まれるが、詳細な堆積時期は不明である。現地形を鑑み、北に隣接する葛下川の旧河道と推定される。

第4トレンチ

現地表面下約0.7mで黄褐色粘質土がひろがり、東西および南北方向の耕作溝群を検出した。また、上層には部分的に薄い砂層が存在し、偶蹄類および鳥のものを含む多数の足跡がみられた。地表面から1.9m～2.0m掘削したところで青灰色シルト層に達するが、その直上に層厚約0.4mの灰黄色砂が堆積しており、縄文土器片とサスカイト片を少量包含していた。また、トレンチ西端では土師器、須恵器、瓦片などを含む、層厚0.15m前後の遺物包含層を検出した。

第5トレンチ

第4トレンチ西端で検出した遺物包含層が全域に分布しており、南へいくに従い層厚を増す。この時点で遺構検出面までの基本層序を以下のように確定した。

第Ⅰ層：現水田耕作土、第Ⅱ層：現水田床土、第Ⅲ層：黄灰色砂質土～シルト、第Ⅳ層：暗褐色粘質土（遺物包含層）、第Ⅴ層：黄褐色粘質土（遺構面、基盤層）。

本トレンチ北端から南へ30.0m～45.0m地点で第Ⅳ層中の遺物に埴輪片が急激に増加した。これを受けて当該範囲を精査したところ、L字状を呈する幅5.0m前後の溝を検出した。この溝について、内側の屈曲角度がやや鋭角を呈すること、埴輪が大量に出土していることから前方後円墳の前方部端および周濠と推定した。この古墳の詳細については章を改めて述べる。また、この南部で幅15.0m前後、深さ約1.8mの南東から北西方向へ流下するSR01を検出した。埋土は、主として飛鳥時代から平安時代の土師器、須恵器、瓦を包含しており、最も新しい時期のものとして10世紀後半から11世紀に比定される黒色土器、土師質の小皿がある。これらの遺物には完形品が含まれ、ローリングによる磨滅も非常に少ないことから、比較的近隣の地点において河

道内に投棄された、あるいは混入したと考えられる。その他に、軒瓦、陶尾、埴、凝灰岩切石などが出土している。

第6トレンチ

第5トレンチに分布する第IV層がトレンチ西端約6.0m～7.0mの範囲にひろがり、円筒埴輪片が出土した。この遺物包含層はトレンチ東端から西へ約10.0m～25.0mの範囲にも分布し、その上面および下面(第V層上面)で耕作溝群、足跡群を検出した。

第7トレンチ

第IV層は分布せず、第III層は深は砂質土～砂が堆積する。遺物の出土量は少ない。

第8トレンチ

後半の本調査を考慮し、調査は第IV層上面の耕作溝群までにとどめた。

第9トレンチ

東部に幅約4.5m、深さ0.3m前後の南北方向の溝、西部で第5トレンチからひろがる第IV層を検出した。

第10トレンチ

SR01の北東肩部を検出、第5トレンチとの交差部以西にひろがることを確認し、東端部にも別の旧河道であるSR02を検出した。

第11トレンチ

中央部でSR01とほぼ並行に走る、幅約2.0m～3.0m、深さ約0.75mのSD01を検出した。埋土中には多量の土師器、須恵器が含まれ、7世紀後半の軒丸瓦片が1点出土した。また、南部でSR01の北東肩部を確認している。

第12トレンチ

東部でSR01、その肩部から西方において溝、少数の土坑、柱穴を検出した。

第13トレンチ

第9トレンチとの交差部以南でSR01、以北で溝、土坑を少数検出した。また、第5トレンチとの間、東西7.0m分を拡張して旧河道の調査を行った。遺物は河道底部から畜串、銅銭などが出土している。

第14トレンチ

尙下川付替部分に位置するため、第V層上面で遺構の存在を確認しただけにとどめた。トレンチ中央部に柱穴が集中している。

第15・16 トレンチ

葛下川付林部分に位置するため、該当箇所は第IV層上面における耕作溝群の調査にとどめ、第16 トレンチから5.0m北方の地点以北については第V層上面の遺構群を調査した。

第17 トレンチ

南端から北方10.0mあたりでSR01の南西肩部を検出した。その南東延長部は第5、第10～第13 トレンチで検出したSR01と一致する。遺物は砂層下部から下底にかけて、同時期幅の上師器、須恵器が多数出土した。

第18 トレンチ

SD03

東端部で幅10.0m近くの人溝を検出し、南へ拡張したところ幅約5.0m～8.0mの、南東から北西へ向かう水路であることを確認することができた。深さはトレンチ南東部で約1.3m、北西部で約2.6m、流路内には流れの方向に対してやや斜めに堰が設置されていた。これは東岸から約6.0mにわたって築かれており、西岸側に開いた幅約2.0m部分に水を通していたと考えられる。水路底は堰設置部から北方が急激に落ち込み、堆積土は砂とシルトが互層をなし、最上層は暗褐色粘質土である。堰は水路北半部に砂が堆積した段階で設置されたと考えられ、先端を加工した径約3.0cm～12.0cm、現存長0.8m～1.7mの自然木を合掌形に打ち込み、さらに枝状のものを横木として編み込んで構築されていた。加えて、一部で網代の痕跡を確認しており、施設が被覆されていた可能性もある。水路南東部の一角では、底部において偶蹄類のものと推定される足跡を検出している。遺物は7世紀～8世紀の上師器、須恵器、瓦が目立ち、それらに加えて凝灰岩切石、木製品が数点出土している。

この他、トレンチ西部では幅約8.0m～9.0mのSD02を検出している。深さは0.2m～0.45mで、埋土は暗褐色粘質土である。埋土中からは5世紀末～6世紀前半に比定される多量の土師器、須恵器が出土した。ほぼ完形のものや、その場で破損した状態の個体が多く見受けられ、近隣から投棄されたものと思われる。その他、西部に集中して掘立柱建物の柱穴が多数分布する。

第19 トレンチ

南部には第18 トレンチで検出したSD02が続く。北部では第IV層直下に砂～砂質土が堆積し、第V層は分布していない。第23 トレンチとの交差部から南へ18.0m拡張し、青灰色シルト層まで掘り下げたところ、砂層の厚さは1.0m～1.3mであることが判った。その下部を中心に、早期～晩期の縄文土器片とサヌカイト片が包含されていた。

第20 トレンチ

第V層はひろがるが柱穴などの遺構は少なく、幅0.2m～0.7m、深さ0.15m～0.2

mの、北で西に振る斜行溝を数条検出したのみである。

第21 トレンチ

トレンチ東端から10.0m地点から15.0m地点の範囲に第V層が分布し、柱穴などを検出したが、その他は砂～砂質土が堆積し、遺構は耕作溝群のみである。

第22 トレンチ

南端から約15.0mまでの範囲に堆積した第V層で柱穴などの遺構を検出した。一方、北半には第19、第21トレンチと同様の砂～砂質土がひろがり、その上面で耕作溝群を確認したのみであった。

第23 トレンチ

西半は砂～砂質土上面に耕作溝群がひろがるのみであるが、東半には第V層が分布し、溝や柱穴などを検出した。第20トレンチとの交差部付近では2棟の掘立柱建物(SB02、SB03)を確認した。この両建物跡の柱穴と重複して、先行する南北方向の斜行溝を検出している。これらの規模は幅0.5m～1.3m、深さ0.15m～0.4mで、出土遺物から古墳時代の遺構と考えられる。また、トレンチ東端から西へ8.0mの範囲は第17トレンチから続くSR01の流路内であり、南北方向の西岸を確認した。よって、この旧河道は第17トレンチ南端から北へ向けて流下していたことが判る。

SB02

柱穴の掘形は一边0.5m～1.0mの隅丸方形で、梁間2間、桁行3間、柱間は梁間2.0m、桁行1.6mの南北棟である。南西隅の柱穴には柱根が遺存しており、腐蝕部を加味すると径0.2m前後と推定される。柱穴のひとつから平安時代の土師器皿が出土していることから、この建物跡は平安時代のもものと推定される。

SB03

一边0.3m～0.5mの隅丸方形掘形を有する柱穴群からなり、梁間2間、桁行3間、柱間は梁間2.0m、桁行1.6mの南北棟である。

第24 トレンチ

第7、第8トレンチの間に設けた、南へ続くトレンチである。トレンチ南部の第V層上面で、北で西へ振る南北方向の斜行溝を検出した。溝の幅は1.0m～2.0m、深さ0.15m～0.3mである。出土遺物は少ない。一方、トレンチ東壁に沿って検出した、幅0.5m～0.9m、深さ0.2m～0.35mの南北溝は、その埋土中に平安時代の土器を多数包含する。また、トレンチ中央部において、この溝と重複する後出の上坑を検出している。遺構の規模は径約0.6m、深さ約0.4mで、輪の羽口が出土した。

以上、各トレンチの調査成果から、第17トレンチから第23トレンチの範囲について、北西部分においては古墳時代～平安時代にわたる遺構の密度は低いと推定されるが、より下層に縄文時代に機能した河道の存在が想定される。

2 遺物

古墳拡張区

耕作溝

1、3、4は墨書土器である。

1は土師器皿で、口径19.2cm、器高1.8cmである。口縁端部が肥厚し、口縁部はヨコナデ、体部外面はケズリ、体部内面はナデで調整され、底面に墨書が施されている。

4は土師器杯で、口径14.2cm、器高3.5cm、口縁端部は外に突出する。口縁部にヨコナデ、体部外面にナデを施し、体部内面に指頭圧痕を残す。内面に文字ないし記号を墨書している。

3は土師器杯で、口径16.6cm、器高3.5cm、口縁端部が肥厚する。口縁部をヨコナデ、体部外面をケズリで調整し、体部内面には指オサエの後にナデが施される。また、底面に墨書がある。

5～8は土師器皿である。

5は口径15.0cm、器高2.0cm、口縁端部が肥厚する。口縁部はヨコナデ、体部は内外面ともに指オサエの後、ケズリで調整される。また、煤が付着している。

6は口径18.4cm、器高1.7cm、口縁端部が肥厚する。口縁部はヨコナデで調整され、体部外面にはナデが施されるが指頭圧痕を残す。体部内面には指オサエの後、ナデを施す。

7は口径15.0cm、器高2.3cmで煤が付着している。8は口径16.2cm、器高2.5cmである。両者とも口縁部にヨコナデ、体部外面にケズリ、体部内面にはナデが施される。

9～12は土師器杯である。

9は口径15.8cm、器高3.4cm。10は口径16.6cm、器高3.5cm。11は口径15.3cm、残存高2.6cm。何れも口縁部にヨコナデ、体部外面にケズリ、体部内面にはナデが施される。

12は口径17.5cm、器高4.2cm。口縁部をヨコナデ、体部外面をケズリ、体部内面をヨコミガキで調整する。

15は土師器甕で、口径25.8cm、残存高11.3cm。口縁部は外反し、端部が肥厚する。口縁部にヨコナデ、胴部外面にはナデが施され、胴部内面は指オサエの後、ナデで調整される。

墳丘上第4層

2は土師器皿で、口径16.7cm、器高1.8cm、口縁端部が肥厚する。口縁部をヨコナデ、体部外面を指オサエ、体部内面を指オサエの後、ナデで調整する。底部外面に墨書がある。

13は黒色土器A類皿で、口径14.5cm、器高2.2cmである。口縁部はヨコナデ、体部は内外面ともナデで調整される。また、底部外面にはナデを施し、高台を貼り付ける。

14は鉄製のミニチュア刀子もしくは鉄鎌で、最大長4.2cm、最大幅1.0cmである。

第5トレンチ

第4層

29は鉄鍔で、全長7.0cm、鍔身長4.9cm、茎部長2.1cm、鍔身部長最大幅1.8cm、最大厚0.35cmで、方頭鍔である。鍔身部長一部破損しているがほぼ完形であると考えられる。茎に木質が一部付着しており、矢柄と考えられるが口巻は残存していない。鍔身部長、茎部ともに断面は長方形であるが、茎部は縦長長方形となり、鍔はわずかに弧を描いている。片平造である。

第10トレンチ交差部砂層

25は土師器杯で、口径21.6cm、底径14.0cm、器高3.7cmである。口縁端部は肥厚し、底には貼り付けによる高台を有する。口縁部はヨコナデ、体部外面はヨコミガキで調整され、体部内面にはナデの後、二段放射線状および二重連弧状の暗文が施される。

26、27は土師器甕で、26は口径14.6cm、残存高14.9cm、27は口径24.4cm、残存高9.8cmである。外反する口縁部にヨコナデおよびヨコハケ、胴部外面にタテハケを施す。胴部内面は指オサエの後、ナデで調整される。また、煤が付着している。

南端砂層

16、17、18、19、20、21は土師器皿で、口縁部は何れも「て」字状を呈する。

16は口径10.6cm、器高1.7cm、口縁部はヨコナデ、体部内外面は指オサエ後ナデで調整される。

17は口径9.7cm、器高1.9cm、18は口径9.6cm、器高1.3cm、19は口径9.6cm、器高1.5cmである。何れも口縁部にヨコナデ、体部外面に指オサエ、体部内面には指オサエ後ナデを施す。

20は口径10.0cm、器高1.5cm、21は口径9.5cm、器高1.7cmである。ともに、口縁部はヨコナデ、体部外面は指オサエ、体部内面はナデで調整される。

28は土師器甕で、口径17.8cm、残存高20.5cmである。外反する口縁部にヨコナデ、胴部外面にナデを施し、胴部内面には指頭圧痕が残る。また、煤が付着している。

22、23、24は黒色土器B類碗である。

22は底径6.6cm、残存高1.8cmで、底部のみ残存している。外面はナデ、内面はミガキで調整され、底に貼り付けの高台を有する。

23は口径15.4cm、残存高5.1cm、口縁部にヨコナデ、体部は内外面ともヨコミガキで調整される。

24は口径14.2cm、残存高4.6cm、口縁部にヨコナデ、体部内外面にヨコミガキを施す。

南端包含層

30は黒書土器である。土師器杯で、体部のみ残存している。体部外面に「○」に「十」を重ねた黒書がある。体部外面は指オサエの後ナデで調整され、体部内面にはナデの後、放射線状の暗文が施される。

34は土師器杯で、口径15.2cm、器高3.3cmである。口縁端部は外に突出し、口縁部をヨコナデ、体部外面を指オサエ、体部内面は指オサエ後ナデで調整する。

37は土師器甕である。口径は26.4cm、残存高が18.6cm、口縁部が外反し、口縁端

部は肥厚する。また、胴部に把手がとりつく。口縁部はヨコナデ、胴部外面はナナメハケ、胴部内面は上半を板ナデ、下半を指オサエ後ナデで調整される。また、煤が付着している。

SR01

35は土師器杯で、口径14.5cm、器高3.2cm、口縁端部が肥厚する。口縁部はヨコナデ、体部外面は指オサエで調整され、体部内面にはナデの後、放射線状暗文に加えて、連弧状の暗文を2重に施す。

32は土師器杯で、口径11.7cm、器高3.5cmである。口縁端部が肥厚し、口縁部にヨコナデ、体部外面にヨコミガキ、底部には指オサエを施す。また、体部内面にはナデの後、放射線状および連弧状の暗文を施す。

SE01

36は土師器長胴甕である。掘形埋土下部から出土した。口径が16.6cm、器高は22.9cm、口縁部は外反する。口縁部にヨコナデ、胴部外面に指オサエ、胴部内面には指オサエ後ナデを施す。また、煤が付着している。

第9トレンチ

31、33は第4層から出土した。

31は土師器皿である。口径10.4cm、器高1.9cm、口縁部はヨコナデ、体部外面は指オサエ、体部内面はナデで調整される。

33も土師器皿で、口径15.2cm、器高3.3cm。口縁部はヨコナデ、体部外面は指オサエ後ケズリで調整される。体部内面にはナデの後、放射線状および連弧状の暗文を施す。

第10トレンチ

第5層

48は砥石で、残存長9.5cmである。一面は湾曲しているが、他の面は平面に作られている。

SR01

第10トレンチSR01からは、主に土師器皿、杯、須恵器では壺の底部、擂鉢、平瓶などが出土しているが、出土量は少ない。38～45は土師器、46、47は須恵器である。

38は土師器皿で、口径13.6cm、器高2.9cm。口縁部はヨコナデ、体部外面はヨコミガキ、体部内面はナデで調整される。

39、40、41、43は土師器杯である。

39は土師器杯である。口径14.8cm、器高3.5cm、口縁部にヨコナデ、体部外面に指オサエ、体部内面にはナデの後、放射線状の暗文を施す。

40は口径13.8cm、器高3.4cm、41は口径13.0cm、器高4.1cm。ともに口縁部にヨコナデ、体部外面に指オサエ、体部内面に指オサエの後ナデを施す。

43は口径が28.8cm、器高は3.8cm。口縁部はヨコナデ、体部外面はケズリ、体部内面はナデで調整される。

42は土師器鉢である。口径は15.5cm、器高が6.3cm、口縁端部は肥厚する。口縁

部にヨコナデ、胴部外面に指オサエ後ケズリ、胴部内面にはナデを施す。碗の可能性もある。

44 は土師器甕で、口径 12.8 cm、残存高 5.3 cm、口縁部が外反する。口縁部は外面をヨコナデ、内面をヨコハケ、胴部は外面をタテハケ、内面をナデで調整される。

45 は土師器長胴甕で、口径 24.0 cm、残存高 31.1 cm である。口縁部は外反し、口縁部にヨコナデ、胴部外面にタテハケを施す。胴部内面は上半を板ナデ、下半を指オサエ後ナデで調整される。また、煤が付着している。

46 は指鉢である。埋土上部、砂層から出土した。復元口径 17.0 cm、底径 9.0 cm、器高 14.0 cm で、胴部は外上方に伸びる。端部は丸く仕上げられ、内外面はヨコナデで調整され、文様帯や沈線を有さない。また、底部には、指オサエ後にナデを施している。

47 は平瓶である。埋土上部、砂層から出土した。口径 11.5 cm、残存高 17.3 cm で、胴部の中心から離れて口縁部が存在する。口縁部が漏斗状を呈し、胴部は扁平である。底部は残存していないため様相がわからない。内外面ともにヨコナデが施されており、文様帯は確認できない。TK48 型式にあたると思われる。

第 11 トレンチ

南端 第四層

49～62 は墨書土器、63～78 土師器、79～82 は黒色土器である。

49 は土師器皿で、口径 19.0 cm、器高 2.0 cm、口縁端部が肥厚している。口縁部にヨコナデ、体部外面にケズリ、体部内面にナデを施し、底部外面に「一」と墨書されている。

50 は土師器杯で、口径 18.0 cm、器高 4.1 cm。口縁部にヨコナデ、体部外面に指オサエ、体部内面にナデを施す。口縁部外面に墨書を確認することができるが、文字は判読できない。

51 は土師器杯で、口径 15.4 cm、器高 3.0 cm、口縁端部が肥厚している。底部外面に墨書されており、「川」と読むことができる。口縁部にヨコナデ、体部外面に指オサエの後ケズリ、体部内面にナデを施す。

52 は土師器杯で、口径 18.0 cm、器高 4.1 cm、口縁端部が肥厚している。口縁部にヨコナデ、体部外面に指オサエの後ケズリ、体部内面にナデを施す。底部外面に墨書があり、2 文字を確認することができるが、判読は不能である。

53～56、59～62 は土師器杯ないし皿の体部片である。

53 は厚み 0.4 cm、体部内外面にナデが施される。「川」と墨書される。

54 は厚み 0.3 cm、体部外面にケズリ、体部内面にナデを施す。墨書は 51、53 と同様の筆跡で書かれており、「川」と読み取ることができる。

55 は厚み 0.3 cm、体部外面にケズリ、内面にナデが施され、「西」と墨書されている。

56 は厚み 0.5 cm、体部外面にケズリ、内面にナデが施され、「東」と墨書されている。

59 は厚み 0.3 cm、体部外面にケズリ、内面にナデを施す。文字の判読はできない。

60 は厚み 0.4 cm、体部外面にケズリ、内面にナデを施す。文字の判読はできない。

61 は厚み 0.3 cm、体部外面にナデ、内面に指オサエの後ナデが施される。墨書は「最」とも思われるが判読できない。

62 は厚み 0.3 cm、体部外面にケズリ、内面にナデを施す。墨書は 2 文字あるようだが判読できない。

57、58 は土師器甕である。

57 は残存高 4.7 cm、口縁部にヨコナデ、胴部外面にタデハケ、胴部内面には指オサエの後ナデを施す。口縁部外面に墨書がある。

58 は残存高 7.4 cm、胴部外面にハケ、胴部内面には指オサエおよびナデを施す。胴部外面に、顔の輪郭を表現したと思われる墨書がある。

63、64、68 は土師器皿で、口縁部が「て」字状を呈する。

63 は口径 15.2 cm、残存高 2.2 cm、口縁部はヨコナデ、体部外面は指オサエ、体部内面はナデで調整される。

64 は口径 14.0 cm、器高 2.8 cm、68 は口径 16.0 cm、器高 2.5 cm。両者とも口縁部にヨコナデ、体部外面に指オサエ、体部内面には指オサエ後ナデが施される。

65 は土師器皿で、口径 15.4 cm、器高 2.5 cm。口縁部をヨコナデ、体部外面をケズリ、体部内面をナデで調整する。

71 は土師器皿で、口径 13.6 cm、器高 3.3 cm。口縁部にヨコナデ、体部外面に指オサエの後ケズリ、体部内面には指オサエ後ナデを施す。

66、70 も土師器皿で、66 は口径 15.2 cm、器高 1.8 cm、70 は口径 19.2 cm、器高 2.0 cm。両者とも口縁端部が肥厚し、口縁部にヨコナデ、体部外面にケズリ、体部内面にはナデが施される。

67 は土師器皿で、口径 15.6 cm、器高 1.9 cm。口縁端部は肥厚し、口縁部にヨコナデ、体部外面に指オサエの後ケズリ、体部内面には指オサエの後ナデを施す。

69 は土師器皿で、口径 18.6 cm、器高 2.2 cm。口縁端部は肥厚し、口縁部にヨコナデ、体部外面に指オサエの後ケズリ、体部内面にはナデを施す。

72 は土師器杯で、口径 15.2 cm、器高 3.3 cm。口縁端部は肥厚する。口縁部にヨコナデ、体部外面には指オサエの後ケズリ、体部内面にナデを施す。

73 は土師器杯で、口径 14.5 cm、器高 3.6 cm。口縁部にヨコナデ、体部内外面に指オサエ後ナデを施す。

74、75 は土師器碗で、74 は口径 12.6 cm、器高 3.6 cm、75 は口径 16.0 cm、器高 4.4 cm。口縁部をヨコナデ、体部外面を指オサエ、体部内外面をナデで調整する。

76 は土師器甕で、口径 25.2 cm、残存高 11.0 cm。口縁部は外反し、端部が肥厚する。口縁部は外面にヨコナデ、内面にヨコハケ、胴部外面に粗いナメハケ、胴部内面には指オサエの後ナデを施す。

77 は土師器甕で、口径 23.7 cm、残存高 14.8 cm。口縁部は外反し、口縁端部が肥厚する。胴部は球形を呈し、口縁部は外面にヨコナデ、内面にヨコハケ、胴部は外面に粗いヨコハケおよびナメハケ、内面には指オサエの後ナデを施す。

78 は土師器台付鉢で、口径 29.6 cm、底径 15.9 cm、器高 18.7 cm である。口縁部は外反し、口縁端部が肥厚する。また、底に高台を貼り付ける。口縁部をヨコナデ、胴

部外面をタテハケおよびナナメハケ、底部外面をナデ、口縁部内面をヨコハケ、胴部内面を指オサエおよびナデで調整する。

79～82は黒色土器B類碗で、79～81は底部のみ残存している。

79は底径7.2cm、残存高2.0cm、底部外面にナデ、内面にミガキを施す。また、底に高台を貼り付ける。

80は底径7.2cm、残存高1.8cm、81は底径7.4cm、残存高3.1cm。ともに体部外面をヨコミガキ、底部外面をナデ、内面をミガキで調整する。また、底に高台を貼り付ける。

82は口径14.8cm、残存高4.5cm、口縁部にヨコナデ、体部内外面にはヨコミガキを施す。

SD01 埋土

88は土師器甕で、口径22.3cm、底径31.8cm、器高27.3cm。前面の器高28.7cm、背面の器高27.3cm、前面幅8.9cmである。口縁部にヨコナデ、胴部外面には指オサエの後に粗いたテハケ、胴部内面に指オサエの後ナデを施す。また、胴部下半に一对の透かし孔が穿たれている。

83は黒色土器A類皿で、口径13.9cm、底径6.6cm、器高1.9cm。口縁部をヨコナデ、体部外面をケズリ、体部内面をミガキで調整する。また、底に高台を貼り付ける。

84～86は黒色土器A類碗である。

84は底径6.3cm、残存高3.0cm、86は底径7.4cm、残存高1.6cm。底部のみ残存しており、体部外面にケズリ、体部内面にミガキ、底部にはナデを施す。高台は貼付けである。

85は口径11.9cm、底径4.4cm、器高3.5cmで、口縁部にヨコナデ、体部内外面にナデを施し、高台は貼付けである。

SD01 埋土下層

87は土師器碗で、口径17.1cm、器高5.9cm。口縁部にヨコナデ、体部外面にヨコミガキ、底部にケズリ、体部内面にはナデの後、一段放射線状暗文および、2重の連弧状暗文を施す。

第12 トレンチ

砂層

89～97は土師器皿で、何れも口縁部が「て」字状を呈する。

89は口径8.7cm、器高1.2cmで、口縁部にヨコナデ、体部外面に指オサエ、体部内面にナデを施す。

92は口径9.8cm、器高1.45cmで、口縁部にヨコナデ、体部外面に指オサエおよびナデ、体部内面には指オサエの後ナデを施す。

90は口径9.6cm、器高1.5cm。91は口径9.8cm、器高1.3cm。93は口径10.2cm、器高1.3cmで残存率30%。94は口径9.5cm、器高1.5cm。95は口径9.7cm、器高1.8cm。96は口径10.1cm、器高1.7cm。何れも口縁部にヨコナデ、体部外面に指オサエ、体部内面に指オサエの後ナデを施す。

97は口径10.4cm、器高1.8cmで、口縁部にヨコナデ、体部外面に指オサエ、体部

内面に指オサエおよびナデを施す。

98は土師器杯で、口径11.8cm、器高3.8cm、口縁部はヨコナデ、体部外面は指オサエの後ナデ、体部内面はナデで調整される。

104は土師器羽釜で、口径17.6cm、残存高7.2cm。口縁部は外反し、胴部に罫を貼り付ける。口縁部にヨコナデ、胴部内外面にナデを施す。また、煤が付着している。

99は黒色七器A類碗で、底径6.2cm、残存高1.1cm、底部のみ残存している。底部外面にナデ、内面に平行ミガキを施し、高台を貼り付ける。

第13トレンチ

SK01

100は瓦器碗で、口径15.6cm、底径6.8cm、器高5.5cm。口縁部にヨコナデ、体部外面に指オサエの後ヨコミガキ、内面には圏線状ミガキ、見込みに平行ヘラミガキを施す。また、底に高台を貼り付ける。

SR01

当遺構からは、主に土師器、黒色土器、須恵器が出土している。当トレンチで検出した旧河道が第5トレンチに続いていることが確認されたため、後にトレンチを拡張した。第5トレンチでは遺物の出土量はさほど多くないが、第5トレンチと第13トレンチ間で人面墨書土器を含め、土師器および須恵器を主とした多量の遺物が出土した。そのため、ここで出土したものは、後述する第5トレンチと第13トレンチ間で出土した遺物と関連すると思われる。101～103は人面墨書土器、105～120は土師器、121～127は黒色土器、128～131は須恵器、132は石材である。

101は土師器甕で、残存高は8.4cm。胴部外面にタテハケ、胴部内面に指オサエの後ナデを施す。胴部外面に、顔の一部を表現したと思われる墨書を確認することができる。

102は土師器甕で、残存高は10.6cm。胴部外面にタテハケ、胴部内面に指オサエの後ナデを施す。胴部外面に、顔の輪郭を描いたと思われる墨書を確認することができる。

103は土師器甕で、残存高は5.1cm、口縁部を欠損している。口縁部にヨコナデ、胴部外面にタテハケ、胴部内面に指オサエおよびナデを施す。口縁部は外反し、胴部外面に眉と眼が描かれている。

105～109は土師器皿で、どれも口縁部が「て」字状を呈する。

105は口径9.0cm、器高1.7cmで、口縁部はヨコナデ、体部外面は指オサエおよびナデ、体部内面はナデで調整される。煤が付着していることから、灯明皿と考えられる。

106は口径10.4cm、器高1.6cmで、口縁部にヨコナデ、体部外面に指オサエ、体部内面にはナデを施す。

107は口径9.5cm、器高1.9cm、口縁部にヨコナデ、体部外面に指オサエの後ナデ、体部内面にはナデを施す。

108は土師器皿で、埋土下部から出土した。口径9.9cm、器高1.7cmで、口縁部は「て」字状を呈する。口縁部にヨコナデ、体部外面に指オサエの後ナデ、体部内面に

はナデを施す。煤が付着していることから、灯明皿と考えられる。

109は口径10.5cm、器高2.7cmで、口縁部にヨコナデ、体部外面に指オサエ、体部内面に指オサエの後ナデを施す。

110は土師器皿で、口径15.6cm、器高2.2cm。口縁部にヨコナデ、体部外面にケズリ、体部内面にはナデを施す。

111は土師器皿で、口径16.5cm、器高2.8cm。口縁部にヨコナデ、体部外面にケズリ、体部内面には指オサエの後にナデを施す。

112は土師器皿で、口径22.0cm、器高2.6cm、口縁端部は肥厚する。口縁部にヨコナデ、体部外面にケズリ、体部内面にはナデの後、放射線状の暗文を施す。

113は土師器杯で、砂層から出土した。口径12.6cm、器高2.6cmで、口縁端部が肥厚する。口縁部はヨコナデで調整され、体部外面にヨコミガキの痕跡が残る。底部外面には指オサエの後にナデ、体部内面にはナデの後に二段放射線状に暗文を施す。

114は土師器杯で、砂層から出土した。口径14.4cm、残存高4.4cmで、口縁部にヨコナデ、体部外面に指オサエおよびナデ、体部内面には指オサエの後ナデを施す。

115は土師器甕で、口径12.4cm、残存高5.3cmで、口縁部は直立する。口縁部にヨコナデ、胴部外面にタテナナメハケ、胴部内面に指オサエの後ナデを施す。

116は土師器甕で、口径24.8cm、残存高11.2cmである。口縁部は外反し、外面にヨコナデ、内面にヨコハケが施される。胴部は外面をタテハケおよびヨコハケ、内面を指オサエおよびナデで調整される。

117は土師器把手付甕で、口径12.8cm、残存高8.5cm。口縁部は外反し、把手は胴部に1つ貼り付けられる。口縁部にヨコナデ、胴部外面にタテハケ、胴部内面にナデを施す。

118は土師器甕で、口径28.6cm、残存高14.0cm。口縁部は外反し、端部が肥厚する。口縁部外面にヨコナデ、内面にヨコハケ、胴部は外面にナメハケ、内面に指オサエおよびナデを施す。

119は土師器甕で、口径12.2cm、残存高7.5cm。口縁部は外反し、外面にヨコナデを施す。胴部は外面をタテハケ、内面を指オサエの後ナデで調整される。また、煤が付着している。

120は土師器羽釜で、口径は24.2cm、残存高が11.7cm。口縁部が外反し、口縁端部は肥厚する。また、胴部に鏝を貼り付ける。口縁部にヨコナデ、胴部は内外面ともに、指オサエの後ナデを施す。

121は黒色土器A類碗で、口径14.5cm、底径6.1cm、器高6.0cmである。口縁部はヨコナデ、外面はナデの後ヨコミガキ、体部内面にヨコミガキ、見込みに平行ミガキを施す。高台は貼付けである。

122、123も黒色土器A類碗で、122は口径14.4cm、器高4.3cm、123は口径14.8cm、器高4.5cmである。ともに口縁部にヨコナデ、体部内外面にヨコミガキを施す。

124は黒色土器A類碗で、口径14.0cm、底径5.2cm、器高6.4cm、底に高台を貼り付ける。口縁部にヨコナデ、体部内外面にヨコミガキ、見込みに平行ミガキを施す。

125は黒色土器B類碗で、口径13.6cm、底径5.5cm、器高6.3cm、底に高台を貼り付ける。口縁部にヨコナデ、体部は外面にヨコおよびナメミガキ、内面にヨコミガ

キ、見込みに平行ミガキを施す。また、底面に「X」の線刻がある。

126 は黒色土器B類碗で、底径は 6.8 cm、残存高が 2.2 cm。底部のみ残存し、高台を貼り付ける。体部外面にヨコミガキ、底部は外面にナデ、内面に平行ミガキを施す。

127 は黒色土器B類碗で、口径 13.6 cm、器高 5.4 cm。口縁部にヨコナデ、体部内外面にヨコミガキを施す。

須恵器は杯蓋、杯身、大甕、双耳壺などが出土し、飛鳥～奈良時代の須恵器が多く見られる。

128 は杯蓋で、埋土砂層から出土した。復元口径は 16.4 cm で残存高が 2.9 cm である。口縁端部は下方へ屈曲して短く、鈍い。また、内面にかえりは持っていない。天井部には粗く回転ヘラケズリが施され、扁平な宝珠つまみが付くと思われるが、残存していない。TK48～MT21 のものと考えられる。

129 は杯蓋で、埋土砂層から出土した。復元口径 18.8 cm、器高は 3.4 cm である。口縁端部はほとんど屈曲せず、断面形は丸い。内面にかえりは持っておらず、体部と口縁部の間にかすかに沈線を観察することができる。天井部の狭い範囲に粗い回転ヘラケズリが施され、極めて扁平な宝珠つまみが付されている。全体的に扁平で、MT21 型式にあたるものであろう。

130 は杯身で、埋土砂層から出土した。口径は 15.6 cm、器高が 4.3 cm で高台を有する。口縁部は大きく外傾し、端部は丸く仕上げられている。底部全体に回転ヘラ削りが施されており、外方へ踏ん張る高台は短く、脚端面は水平である。TK48 型式のものと考えられる。

131 は双耳壺である。上部、下部ともに欠損しており、残存高 17.6 cm である。器体の中央に、焼成時のものではない煤が付着している。

132 は凝灰岩切石で、高さ 17.5cm、残存長 19.5cm、幅 15.2cm である。平らな平面を作り出しており、一部煤が付着している。

第5トレンチー第13トレンチ間

第4層

135 は土師器皿で、口径 9.8 cm、器高 1.8 cm、口縁は「て」字状を呈する。口縁部にヨコナデ、体部外面に指オサエ、体部内面には指オサエの後ナデを施す。

136 は土師器皿で、口径 9.1 cm、器高 1.5 cm、口縁は「て」字状を呈する。口縁部にヨコナデ、体部外面には指オサエの後ナデ、体部内面にナデを施す。

SR01

前述の通り、第5トレンチと第13トレンチを拡張したトレンチで検出した、第13トレンチ SR01 の延長上にあたる遺構である。ここでは人面墨書土器、土師器皿、杯、甕、黒色土器、須恵器では杯蓋、杯身、高杯、壺、甕、大甕、円面硯などが出土している。それらの年代は、第13トレンチ SR01 と同様、飛鳥から奈良時代のものが多く見られる。154 は人面墨書土器、148、150～153 は墨書土器、133～147、149、155～172 は土師器、173～179 は黒色土器である。

154 は土師器甕の人面墨書土器で、口径は 12.9 cm、器高が 11.0 cm、口縁端部を欠損している。口縁部が外反し、胴部は球形を呈し、把手がとりつく。口縁部にヨコナ

デ、胴部外面にタテハケ、胴部内面には指オサエの後に板ナデを施す。胴部外面には人面が2面描かれている。1面は両眼、眉、鼻、髭、口が表現され、男性とわかる。その反対側に描かれているもう1面はやや左上がりに描かれており、眉、眼、鼻、口を確認することができるが、左眼部分を欠損している。

148、150～153は胴部外面に墨書がある。

148は土師器杯で、口径11.8cm、残存高2.8cm、口縁部にヨコナデ、体部外面に指オサエの後ナデ、体部内面にナデを施す。口縁部外面に墨書がある。

150は土師器甕で、残存高は6.8cm。胴部外面に指オサエおよびタテハケ、胴部内面にはナデを施す。顔の輪郭を表現していると思われる墨書が見られる。

151は土師器甕で、残存高は7.0cm。胴部は外面にタテハケ、内面にナデを施す。顔の一部を表現したものであると思われる墨書を確認することができる。

152は土師器杯の体部片で、残存高は0.6cm、体部外面にケズリ、内面にはナデを施す。底面に「口美」と墨書されている。

153は土師器甕で、残存高3.7cm、口縁端部を欠損している。口縁部にヨコナデ、胴部は外面にタテハケ、内面にナデを施す。

133、134、137～147は土師器皿で、何れも口縁部が「て」字状を呈する。

133は土師器皿で、口径は9.1cm、器高が1.0cm。口縁部にヨコナデ、体部は内外面とも、指オサエの後ナデを施す。

134は口径8.8cm、器高1.6cm、残存率25%、口縁部にヨコナデ、体部外面に指オサエ、体部内面にはナデを施す。

137は口径9.6cm、器高1.45cm、30%、口縁部にヨコナデ、体部外面に指オサエ、体部内面にはナデを施す。

138は口径9.9cm、器高1.4cm、口縁部にヨコナデ、体部外面に指オサエ、体部内面にはナデを施す。

139は口径10.1cm、器高1.2cm、口縁部にヨコナデ、体部外面に指オサエ、体部内面にはナデを施す。煤が付着していることから、灯明皿と考えられる。

140は口径9.7cm、器高1.7cm、口縁部にヨコナデ、体部外面に指オサエ、体部外面に指オサエの後ナデを施す。

141は口径9.0cm、残存高1.8cm、残存率25%、口縁部にヨコナデ、体部外面に指オサエ、体部内面にはナデを施す。

142は口径8.4cm、器高1.5cm、口縁部にヨコナデ、体部外面に指オサエ、体部内面にはナデを施す。

143は口径9.4cm、器高1.8cm、口縁部にヨコナデ、体部内外面に指オサエの後ナデを施す。

144は口径14.4cm、器高2.6cm、残存率20%、口縁部にヨコナデ、体部内外面にはナデを施す。

145は口径13.0cm、器高2.2cm、口縁部にヨコナデ、体部外面に指オサエ、体部外面に指オサエの後ナデを施す。

146は口径11.7cm、器高2.6cm、口縁部にヨコナデ、体部外面に指オサエ、体部内面にはナデを施す。

147は口径12.8cm、器高2.7cm、口縁部にヨコナデ、体部外面に指オサエ、体部外面に指オサエの後ナデを施す。

149は土師器皿で、口径18.7cm、器高3.4cm、口縁端部が肥厚する。口縁部にヨコナデ、体部外面に指オサエの後ケズリ、体部内面にはナデの後に放射線状の暗文を施す。

155は土師器皿で、口径23.6cm、器高2.6cm、口縁端部が肥厚する。口縁部にヨコナデ、体部外面に指オサエ、体部内面にはナデの後、放射線状の暗文を施す。また、底面に木葉文の線刻がある。

156はミニチュアの土師器鉢で、口径は9.3cm、残存高が5.2cm。口縁部は外反し、胴部は丸底を呈する。口縁部はヨコナデ、胴部は内外面ともにナデで調整されている。

157は土師器杯で、口径は17.6cm、残存高が4.6cm、口縁端部が肥厚する。口縁部にヨコナデ、底部にケズリ、体部内面にはナデの後、二段放射線状の暗文を施す。

158は土師器杯で、口径17.0cm、残存高4.7cm、口縁端部が肥厚する。口縁部にヨコナデ、口縁部外面にヨコミガキ、体部は外面に指オサエの後ナデ、内面にはナデの後に二段放射線状の暗文を施す。

159は土師器杯で、口径13.8cm、残存高3.3cm、残存率20%。口縁部にヨコナデ、体部外面に指オサエ、体部内面にはナデを施す。

160は土師器杯で、口径12.8cm、器高4.1cm、口縁端部が肥厚する。口縁部にヨコナデ、体部外面に指オサエ、体部内面にはナデの後、放射線状の暗文を施す。

162土師器杯で、口径18.4cm、器高5.2cm、口縁端部が肥厚する。口縁部にヨコナデ、体部外面に指オサエの後ナデ、体部内面にはナデの後、二段放射線状、および3重の連弧状暗文を施す。

163は土師器杯で、砂層上部から出土した。口径20.4cm、残存高4.6cm。口縁部にヨコナデを施す。体部外面に指オサエの後ケズリで調整し、さらにヨコミガキを施す。体部内面はナデで調整されている。

161は土師器碗で、口径は13.4cm、器高が4.4cm。口縁部にヨコナデ、体部外面に指オサエを施す。

166は土師器甕で、口径18.6cm、残存高7.1cm。口縁部は外反し、口縁端部が肥厚する。口縁部は外面にヨコナデ、内面に粗いヨコハケ、胴部は外面に粗いタテハケ、内面にナデを施す。また、煤が付着している。

167は土師器甕で、口径21.6cm、残存高9.3cm、口縁部は外反する。口縁部にヨコナデ、胴部外面にタテハケ、胴部内面には指オサエの後ケズリを施す。

168は土師器甕で、口径15.6cm、残存高8.5cm。口縁部は外反し、外面にヨコナデ、胴部外面に指オサエの後ナデ、胴部内面にはナデを施す。また、煤が付着している。

169は土師器甕で、口径19.4cm、残存高11.2cm。口縁部は外反し、口縁端部が肥厚する。口縁部にヨコナデ、胴部外面に指オサエの後ナデ、胴部内面には指オサエおよびナデを施す。また、煤が付着している。

170は土師器甕で、口径は24.8cm、器高が22.3cm。口縁部は外反し、端部が肥厚する。胴部は球形を呈し、把手がとりつく。口縁部は外面にヨコナデ、内面にヨコハケ、胴部は外面にタテハケ、内面に指オサエおよび板ナデを施す。また、煤が付着し

ている。

171 は土師器甕で、砂層上部から出土した。口径は 14.2 cm、器高が 13.5 cm。外反する口縁部は端部が肥厚し、胴部は球形を呈する。口縁部にヨコナデ、胴部外面にタテハケおよびナナメハケ、口縁部内面にはヨコハケ、胴部内面には指オサエの後ナデを施す。

172 は土師器甕で、砂層上部から出土した。口径は 28.4 cm、残存高が 10.5 cm。口縁部は外反し、端部が肥厚する。口縁部外面をタテハケの後ヨコナデ、胴部外面をタテハケ、胴部内面を指オサエの後ナデで調整する。

164 は土師器羽釜で、口径 16.2 cm、残存高 5.8 cm。口縁部は外反し、口縁端部が肥厚する。口縁部にヨコナデ、胴部内外面にナデを施す。また、煤が付着している。

165 は土師器羽釜で、口径 22.0 cm、残存高 4.8 cm。口縁部は外反し、口縁端部が肥厚する。口縁部にヨコナデを施す。また、煤が付着している。

173 は黒色土器A類碗で、底径 4.8 cm、残存高 1.2 cm。底部のみ残存しており、高台を貼り付ける。体部は外面にナデ、内面にミガキを施す。

174 は黒色土器A類碗で、底径 7.0 cm、残存高 2.2 cm。底部のみ残存しており、高台を貼り付ける。体部は外面にナデ、内面にミガキを施す。

175 は黒色土器A類碗で、底径 8.4 cm、残存高 1.8 cm。底部のみ残存しており、高台を貼り付ける。体部は外面にナデ、内面にミガキを施す。

176 は黒色土器A類碗で、口径 13.8 cm、底径 8.3 cm、器高 3.7 cm、底に高台を貼り付ける。口縁部はヨコナデ、体部は外面を指オサエの後ナデ、内面をミガキで調整される。

177 は黒色土器B類碗で、口径 15.6 cm、残存高 4.4 cm。口縁部にヨコナデ、体部内外面にヨコミガキを施す。

178 は黒色土器B類碗で、底径 6.6 cm、残存高 1.9 cm。底部のみ残存しており、高台を貼り付ける。体部は外面にナデ、内面にはミガキを施す。

179 は黒色土器B類碗で、底径 7.4 cm、残存高 1.1 cm。底部のみ残存しており、高台を貼り付ける。体部は外面にナデ、内面にはミガキを施す。

SR01 内砂層下部

180～186 は須恵器である。

180 は杯蓋で、口径は 13.5 cm で器高が 3.9 cm である。口縁端部と体部は一体成形で、丸みを帯びているがやや扁平である。天井部の狭い範囲に粗い回転ヘラケズリが施され、宝珠つまみはない。TK217 型式にあたるものであろう。

181 は杯蓋で、口径は 16.2 cm で器高が 3.8 cm である。口縁端部は短く、下方へ屈曲してやや丸みを帯びている。また、内面にかえりは持っていない。天井部の狭い範囲に粗い回転ヘラケズリが施され、極めて扁平な宝珠つまみが付されている。全体的に扁平で、MT21 型式にあたるものであろう。

182 は杯身である。復元口径 10.6 cm、器高が 3.9 cm で高台は付されていない。口縁部はやや外傾し、端部は丸く仕上げられ、体部との間に凹みが見られる。底部は、狭い範囲に回転ヘラケズリの後ナデが施される。TK46 型式のものと考えられる。

183 は杯身である。復元口径は 14.0 cm、器高が 4.1 cm で高台が付されている。口縁

部は外傾し、端部は丸く仕上げられている。高台は短く外方へ踏ん張り、貼り付け後ナデを施す。底部全体に回転ヘラケズリが施されるが、糸切り痕を確認することができる。TK48 型式のものと考えられる。

184 は杯身である。口径は 16.0 cm、器高が 3.9 cm で、高台が付されている。口縁部は大きく外傾し、端部は丸く仕上げられている。高台は短く、外方へ踏ん張り、脚端面には沈線を入れるが、断面形は平らに近い。また、底部全体に回転ヘラケズリ後ヨコナデが施されている。MT21 型式のものと考えられる。

185 は高杯である。上部と下部を欠損しており、残存高は 8.7 cm。杯底部には、狭い範囲で回転ヘラケズリが施されている。長脚化が始まっており、脚部には透かしは存在しないが、二条の沈線が施されている。飛鳥時代のもので推定される。

186 は土馬で、脚部のみ残存している。一辺 2.7 cm、残存高は 7.0 cm。ナデ、面取りを施し、断面は楕円形である。

第 16 トレンチ

SB01

187 は土師器皿で、口径 12.8 cm、残存 2.0 cm。口縁部にヨコナデ、体部は外面にケズリ、内面にナデを施す。

SK02

197 は土師器甕で、口径 15.6 cm、残存高 7.1 cm。口縁部にヨコナデ、胴部は外面にナデ、内面に指オサエを施す。

198 は土師器甕で、口径 20.5 cm、残存高 12.0 cm、口縁部はくの字状を呈する。口縁部にヨコナデ、胴部外面にタテハケ、胴部内面にはヨコハケを施す。

199 は土師器甕で、口径 21.2 cm、残存高 10.8 cm、口縁部はくの字状を呈する。口縁部にヨコナデ、胴部外面にタテハケ、胴部内面には指オサエを施す。

SE02

188 は土師器皿で、口径 12.0 cm、残存 2.1 cm。口縁は「て」字状を呈し、口縁部にヨコナデ、体部外面に指オサエ、体部内面にナデを施す。

189 は土師器皿で、口径 11.4 cm、残存 2.0 cm。口縁は「て」字状を呈し、口縁部にヨコナデ、体部外面に指オサエ、体部内面にナデを施す。

その他

201 は須恵器高杯蓋で、第 5 層埋土から出土した。復元口径 15.4 cm、器高 6.1 cm で扁平なつまみが付されている。端部は丸く、非常に甘い印象を受ける。縁は鈍く、形骸化している。天井部には、反時計回りの回転ヘラケズリを施している。TK10～MT85 型式のものと考えられる。

第 17 トレンチ

SR01

土師器は皿、杯、甕に加え、盤、羽釜など、須恵器は杯蓋、杯身、直口壺、長頸壺、壺、甕、大甕、提瓶などが多量に出土した。ここでも飛鳥から奈良時代の須恵器が多量に出土しているが、古墳時代後期のものも含まれる。200 は人面墨書上器、190～196、

202～221 は土師器、222 が黒色土器、223～235 は須恵器である。

200 は土師器甕で、口径 15.6 cm、器高 8.7 cm。口縁部は外反し、口縁端部が肥厚する。口縁部外面にヨコナデ、内面にはヨコハケ、胴部外面にタテハケ、胴部内面は指オサエの後に板ナデを施す。胴部外面に眉と眼が墨書で描かれており、左眼部分のみ残存している。

190 は土師器皿で、口径 11.6 cm、器高 2.4 cm、残存率 25%、口縁は「て」字状を呈する。口縁部にヨコナデ、体部外面に指オサエ、体部内面にはナデを施す。

191 は土師器皿で、口径 9.6 cm、器高 1.6 cm。口縁部にヨコナデ、体部外面に指オサエ、体部内面にナデを施す。

192 は土師器皿で、口径 14.9 cm、器高 2.8 cm。口縁部にヨコナデ、体部は外面にケズリ、内面にはナデを施す。

193 は土師器皿で、口径 19.8 cm、器高 2.4 cm、口縁部にヨコナデ、体部外面に指オサエ、体部内面にナデを施す。

194 は土師器皿で、口径 20.1 cm、器高 3.0 cm、口縁端部が肥厚する。口縁部にヨコナデ、体部外面に指オサエ、体部内面にはナデの後に放射線状および連弧文状の暗文を施す。

195 は土師器皿で、口径 22.5 cm、器高 3.7 cm、口縁部にヨコナデ、体部外面に指オサエ、体部内面にナデを施す。

196 は土師器皿で、口径 22.4 cm、器高 3.2 cm、口縁端部が肥厚する。口縁部にヨコナデ、体部外面にケズリ、体部内面にはナデの後に放射線状および連弧文状の暗文を施す。

202 は土師器杯で、口径 12.0 cm、器高 3.0 cm。口縁部にヨコナデ、体部外面に指オサエの後ナデ、体部内面にナデを施す。

203 は土師器杯で、口径 12.4 cm、器高 2.9 cm。口縁部にヨコナデ、体部外面に指オサエの後ナデ、体部内面にナデの後に放射線状の暗文を施す。

204 は土師器杯で、口径 13.4 cm、器高 3.2 cm、残存率 20%。口縁部にヨコナデ、体部外面に指オサエの後ナデ、体部内面ナデの後に放射線状の暗文を施す。

205 は土師器杯で、口径 12.5 cm、器高 3.5 cm。口縁部にヨコナデ、体部外面に指オサエ、体部内面には指オサエの後ナデを施す。

206 は土師器杯で、口径 17.6 cm、器高 5.0 cm、口縁端部が肥厚する。口縁部にヨコナデ、体部外面に指オサエの後ナデ、体部内面にはナデの後に放射線状の暗文、底部にはケズリを施す。

208 は土師器杯で、口径 26.8 cm、残存高 6.3 cm。口縁部にヨコナデ、口縁部外面にはヨコミガキ、体部は外面に指オサエの後ナデ、内面にはナデの後に二段放射線状の暗文を施す。

207 は土師器碗で、口径 17.5 cm、残存高 5.6 cm。口縁部にヨコナデ、体部外面に指オサエの後ケズリ、内面にナデの後に放射線状の暗文を施す。

209 は土師器鉢で、外面に指オサエおよびタタキ、内面には指オサエおよびナデを施す。

210 は土師器甕で、口径 28.6 cm、器高 7.5 cm。口縁部にヨコナデ、体部外面は指オ

サエの後に板ナデ、体部内面にはナデを施す。

211 は土師器甕で、口径 37.2 cm、器高 6.5 cm。口縁部が大きく外に開き、口縁端部は肥厚する。口縁部にヨコナデ、体部外面にナデの後ヨコミガキ、体部内面にはナデを施す。

212 は土師器把手付鉢で、口径 30.0 cm、残存高 6.8 cm、口縁部は直立し、胴部に把手がとりつく。口縁部にヨコナデ、胴部外面には指オサエの後ナメハケ、胴部内面にナデを施す。

213 は土師器甕で、口径 13.4 cm、器高 12.8 cm。口縁部は外反し、端部が肥厚する。口縁部にヨコナデ、内面にヨコハケ、胴部外面にはタテハケ、胴部内面に指オサエの後ナデ、底部にはハケの後ナデを施す。

214 は土師器甕で、口径 13.9 cm、器高 15.2 cm。外反する口縁部は端部が肥厚し、胴部は球形を呈する。口縁部をヨコナデ、内面をヨコハケ、胴部外面をハケ、胴部内面を指頭オサエの後ナデで調整する。

215 は土師器甕で、口径 16.2 cm、器高 16.2 cm、口縁部は外反し、端部が肥厚する。口縁部にヨコナデ、胴部外面に粗いタテハケ、胴部内面には指オサエおよび板ナデを施す。また、煤が付着している。

216 は土師器甕で、口径は 15.9 cm、器高が 18.5 cm。外反する口縁部は端部が肥厚し、胴部は球形を呈する。口縁部にヨコナデ、口縁部内面にヨコハケ、胴部は外面上半にタテハケ、下半から底部にかけてヨコハケ、内面には指オサエの後ナデを施す。また、煤が付着している。

217 は土師器甕で、口径 14.2 cm、残存高 12.5 cm、口縁部は外傾する。口縁部はヨコナデ、口縁部内面はヨコハケ、胴部外面は指オサエの後タテハケ、胴部内面は指オサエの後ヨコハケおよびナメハケで調整される。

218 は土師器甕で、口径 15.1 cm、残存高 12.9 cm、残存率 20%、口縁部は外傾する。口縁部にヨコナデ、胴部外面にタテハケ、胴部内面には板ナデを施す。また、煤が付着している。

219 は土師器甕で、口径 17.8 cm、残存高 10.4 cm、残存率 12.5%、口縁部は外傾する。口縁部にヨコナデ、口縁部内面にヨコハケ、胴部は外面にタテハケ、内面に指オサエおよび板ナデを施す。

220 は土師器羽釜で、口径 20.4 cm、残存高 7.2 cm、口縁部は外反し、端部が肥厚する。胴部には罫を貼り付ける。口縁部にヨコナデ、胴部は内外面ともにナデを施す。また、煤が付着している。

221 は土師器羽釜で、口径 25.4 cm、罫部径 36.4 cm、残存高 6.8 cm。口縁部は外反して端部が肥厚し、直下に罫が貼り付けられる。口縁部にヨコナデ、口縁部内面にはヨコハケ、胴部は外面に指オサエの後ナデ、内面に板ナデを施す。

222 は黒色土器A類碗で、口径 15.4 cm、底径 9.0 cm、器高 5.2 cm。口縁部にヨコナデ、口縁部外面にはヨコミガキ、体部は外面に指オサエの後ケズリ、内面にヨコミガキを施す。また、底に高台を貼り付ける。

223 は杯蓋である。復元口径 12.0 cmで、器高が 3.9 cmである。やや鈍い感じを受ける端部に沈線を施し、稜はやや鈍いが、突出して段を成している。天井部は扁平で丸

みがなく、広い範囲に回転ヘラケズリが施されている。TK23 型式のものと考えられる。

224 は杯蓋である。復元口径 13.8 cm で、器高が 4.9 cm である。端部は丸く仕上げられるが、沈線の名残を見て取ることができる。稜は非常に鈍く、やや突出して段を成している。天井部にはやや広めの範囲に回転ヘラケズリが施されている。MT15 型式のものと考えられる。

225 は杯蓋である。復元口径 15.0 cm で、器高が 3.6 cm である。端部はやや鋭く仕上げられ、稜は鈍いが、やや突出して段を成している。天井部の回転ヘラケズリは極めて狭い範囲に施され、粗雑感がうかがえる。MT15～TK10 型式のものと考えられる。

226 は杯蓋である。復元口径 14.8 cm で、器高が 4.2 cm である。端部は丸く仕上げられ、稜は完全に失われている。天井部の回転ヘラケズリは狭い範囲に施され、粗雑感がうかがえる。TK43 型式前後のものと考えられる。

227 は杯蓋で、口径は 10.8 cm、器高が 3.4 cm である。口縁端部は外下方へ短く張り出し、断面形は丸い。内面にかえりを持ち、口端部より下方に突出している。天井部は回転ヘラケズリによって成形され、きれいな宝珠つまみが付されている。器径や宝珠つまみから、TK46 型式のものと考えられる。

228 は杯蓋である。口径は 10.4 cm、器高が 3.0 cm である。口縁端部は外方へ短く張り出し、断面は丸形を呈する。内面にかえりを持つが、口端部より下方には突出していない。天井部は回転ヘラケズリによって調整され、宝珠つまみが付されている。器径および宝珠つまみから、TK46 型式のものと考えられる。

229 は杯身である。復元口径は 11.4 cm、器高が 4.3 cm である。立ち上がりはやや内傾して短く伸び、端部断面は丸形を呈する。底部に回転ヘラケズリを施しており、受部は短く、ほぼ水平に伸びている。全体的に扁平であり、TK43 型式と考えられる。

230 は杯身である。口径は 8.5 cm、器高が 3.0 cm である。立ち上がりはやや内傾して非常に短く、端部は丸く仕上げられている。底部には回転ヘラケズリが施され、かなり小型で TK217 型式のものと考えられる。

231 は杯身である。復元口径は 8.5 cm、器高が 3.4 cm で高台は付されていない。口縁部はほぼ垂直に伸びるが、わずかに外傾している。端部は丸く仕上げられている。底部の狭い範囲に回転ヘラケズリ後ナデが施される。TK217 型式のものと考えられる。

232 は杯身である。口径は 10.0 cm、器高が 3.3 cm で高台は付されていない。口縁部はわずかに外傾し、直線的に伸び、端部は丸く仕上げられている。底部はヘラ切り後未調整である。TK46 型式のものと考えられる。

233 は長頸壺である。口縁部のみ欠損しており、残存高は 20.0 cm である。口頸部は細長く、上方へ向かって外反する。肩部は屈曲し、沈線が施される。底部に付された高台はやや短く、外へ踏ん張る。TK48 型式のものと考えられる。

234 は提瓶である。口径 8.0 cm、残存高 8.0 cm である。短い口縁部は外反し、端部は段を成す。胴部両側に付く耳は短く、形式化した鈎形のものが付されている。胴部前面はふくらみを有するが、背面は残存していないため、確認できない。外面にはカキ目を施す。TK10 型式にあたるものであろう。

235 は人甕である。復元口径 20.8 cm で、残存高が 9.4 cm である。短い口頸部は大きく外反し、端部には段が付けられている。胴部外面は全面にカキ目が施され、内面に

は同心円文の当て具痕が残る。TK10 型式前後にあたと推定される。

第 18 トレンチ

SE03

241 は土師器甕で、井戸枠内下部から出土した。口径 17.2 cm、残存高 14.5 cm、口縁部が外反し、胴部は球形を呈する。口縁部にヨコナデ、胴部は外面に指オサエの後タテハケ、内面に指オサエに板ナデを施す。また、煤が付着している。

242 は土師器甕で、井戸堀形内最下層から出土した。口径 28.0 cm、器高 30.8 cm、口縁部は外反し、端部が肥厚する。胴部は球形を呈し、胴部に把手がとりつく。口縁部にヨコナデ、口縁部内面にはヨコハケ、胴部は外面にタテハケおよびナメハケ、内面に指オサエおよびナデを施す。

SD03

土師器および須恵器が主に出土している。土師器は皿、杯、高杯、甕、須恵器では杯蓋、杯身が多く、その他碗、高杯、長頸壺、直口甕、甕、鉢、平瓶、円面碗などが出土している。その年代は田辺編年のⅡ期末からⅢ期初頭が多い。236～240、254 は土師器、243～253 は須恵器である。

238 は土師器皿で、口径 22.0 cm、器高 2.9 cm。口縁部にヨコナデ、体部外面にケズリ、体部内面にはナデを施す。

236 は土師器杯で、口径 11.4 cm、器高 3.4 cm、内面にヘラ描きがある。口縁部にヨコナデ、体部外面に指オサエ、体部内面にはナデを施す。

237 は土師器杯で、口径 11.8 cm、器高 3.4 cm。内面にヘラ描きがあり、直線を並列させて円弧を描く。口縁部にヨコナデ、体部外面に指オサエ、体部内面にはナデを施す。

239 は土師器高杯で、口径 18.4 cm、残存高 3.7 cm、杯部のみ残存している。口縁部にヨコナデ、杯部外面に指オサエの後ナデ、杯部内面にはナデの後に放射線状の暗文を施す。

240 は土師器甕で、口径 13.3 cm、器高 13.8 cm、口縁部が外反し、胴部は球形を呈する。口縁部にヨコナデ、口縁部内面にはヨコハケ、胴部は外面にタテハケおよびナメハケ、内面に指オサエおよび板ナデを施す。

254 は土師器長胴甕で、口径 20.9 cm、残存高 27.4 cm、口縁部は外反し、端部が肥厚する。口縁部にヨコナデ、口縁部内面にヨコハケ、胴部外面に粗いタテハケおよびナメハケ、胴部内面には指オサエの後ナデを施す。また、煤が付着している。

243 は杯蓋で、復元口径 11.5 cm、器高が 4.3 cm である。端部はやや鋭角に仕上げられ、稜は非常に鈍く、突出せず形骸化している。天井部には回転ヘラケズリが施され、TK10 型式のものと考えられる。

244 は杯蓋で、下底部から出土した。口径 11.0 cm で、器高が 3.9 cm である。端部は丸く仕上げられ、稜を完全に失っている。天井部はヘラ切り後の調整がされず、粗雑である。全体的にシャープさに欠け、TK209 型式前後のものと考えられる。

245 は杯蓋で、口径 9.8 cm、器高が 3.5 cm である。端部は丸く仕上げられ、稜は完全に失われている。天井部は未調整で、粗雑である。かなり小型で TK217 型式のもの

と考えられる。外面に漆による記号が描かれている。

246は杯蓋で、下底部から出土した。口径は10.5cm、器高が2.7cmである。口縁端部は外方へ短く張り出し、丸く収められる。内面にかえりを持ち、口端部と同じ長さである。天井部は回転ヘラケズリによって調整され、宝珠つまみが付されている。器径や宝珠つまみから、TK46型式のものと考えられる。

247は杯蓋で、口径は11.2cm、器高が3.2cmである。口縁端部は外方へ短く張り出し、丸く収められる。内面にかえりを持つが、口端部より下方に突出していない。天井部は回転ヘラケズリによって調整され、きれいな宝珠つまみが付されている。外面に3条のヘラ記号を刻み、器径や宝珠つまみからTK46型式のものと考えられる。

248は杯身で、埋土中層部から出土した。口径は9.0cm、器高が2.5cmで、高台は付されていない。立ち上がりはやや内傾して短く伸び、端部は丸く収められている。底部の狭い範囲に回転ヘラケズリを施しており、受部は短く、やや上方に伸びている。かなり小型であることから、TK217型式と考えられる。

249は高杯で、下底部から出土した。杯部以外を欠損している。杯部の口縁部はわずかに外傾し、直線的に伸びる。端部は丸く仕上げられ、底部はヘラケズリによって調整される。有蓋高杯と思われるが、立ち上がりは存在しない。宝珠つまみが付されている杯蓋とセットになるとと思われる。TK217~TK48型式のものと考えられる。

250は碗で、口径18.4cm、器高が7.9cmである。外面の大部分に回転ヘラケズリを施し、体部中央に沈線を描いている。端部断面は丸形を呈する。

251は長頸壺で、底径10.2cm、残存高12.3cm、頸部以上を欠損している。高台はやや長く、外方へ踏ん張っている。肩部はやや張っており、沈線が施されている。TK48型式前後のものと考えられる。

252は甕で、口径が12.0cm、残存高が19.9cmであり、底部を欠損している。口端部に段を有し、頸部は短いが「コ」の字状に屈曲し、文様帯を有さない。胴部外面に不定方向のヘラ描きを施し、内面には同心円文の当て具痕が残る。

252は円面硯である。復元口径21.2cm、底径が23.5cm、器高が6.9cmである。体部は内外面ともにヨコナデ、天井部内面は一定方向のナデで成形されている。天井部外面は磨滅している。透かし窓は長方形で6箇所、あるいは7箇所と考えられ、割り付けの失敗によると思われるヘラ描きの痕跡が確認できる。

SD02

縄文土器、土師器、須恵器などが多量に出土しており、これらは縄文時代～平安時代に比定される。255～302、319、320は土師器で、須恵器は321～337で特にMT15のものが多く、303～314は製塩土器、317、318は土製品、339が木製品、338が石材である。

255はミニチュアの土師器碗と思われる。口径が2.6cm、残存高は1.9cm。口縁部にヨコナデ、体部外面に指オサエ、体部内面にナデを施す。

256はミニチュアの土師器碗と思われる。口径が2.2cm、残存高は1.8cm。口縁部にヨコナデ、体部外面に指オサエ、体部内面に指オサエの後ナデを施す。

257はミニチュアの土師器鉢で、口径が7.6cm、残存高は5.7cmである。丸底を呈し、口縁部は外反する。口縁部にヨコナデ、胴部外面にナデおよびハケが残る。胴部

内面にはナデを施す。

261 は土師器皿で、口径 24.2 cm、器高 2.8 cm、口縁端部が肥厚する。口縁部にヨコナデ、体部外面に指オサエの後ケズリ、体部内面にはナデを施す。底部外面にヘラで直線と弧を描く。

258 は土師器杯で、口径 12.4 cm、器高 3.4 cm。口縁部にヨコナデ、体部は外面に指オサエの後ナデ、内面にナデを施す。

259 は土師器杯で、口径 10.3 cm、器高 2.9 cm。口縁部にヨコナデ、体部は外面にケズリ、内面にナデを施す。

260 は土師器杯で、口径 12.9 cm、器高 3.4 cm。口縁部にヨコナデ、体部外面には指オサエ、体部内面にナデを施す。

262 は土師器杯で、口径 12.7 cm、器高 3.4 cm。口縁部にヨコナデ、体部外面に指オサエの後ナデ、体部内面にはナデの後に放射線状および連弧状の暗文を施す。また、内面にヘラで直線と弧を描く。

263 は土師器杯で、口径 13.6 cm、器高 5.5 cm、口縁部が内湾する。口縁部にヨコナデ、体部外面に指オサエ、体部内面にナデを施す。

264 は土師器杯で、口径 16.6 cm、残存高 4.8 cm、口縁端部が外に突出する。口縁部にヨコナデ、体部外面に指オサエ、体部内面にナデを施す。

265 は土師器杯で、口径 13.4 cm、残存高 4.9 cm、口縁端部が外に突出する。口縁部にヨコナデ、体部外面に指オサエ、体部内面にナデを施す。

266 は土師器杯で、口径 12.0 cm、器高 4.0 cm、口縁端部が外に突出する。口縁部にヨコナデ、体部外面に指オサエ、体部内面にナデを施す。

267 は土師器杯で、口径 12.0 cm、器高 5.4 cm、口縁端部は外に突出する。口縁部にヨコナデ、体部外面にナデ、体部内面に板ナデを施す。また、煤が付着している。

268 は土師器高杯で、残存高 7.1 cm、脚部のみ残存している。脚部の外面は面取りされており、内面にはしぼり痕が残る。

269 は土師器高杯で、口径 16.7 cm、底径 10.6 cm、器高 13.6 cm、口縁端部が外に突出する。脚部は外面を面取りし、内面にしぼり痕が残る。

270 は土師器高杯で、口径 15.0 cm、底径 9.8 cm、残存高 13.2 cm、杯部口縁端は外に突出する。口縁部にヨコナデ、杯部は外面に指オサエの後ナデ、内面にナデを施す。脚部は外面を面取りし、内面にしぼり痕が残る。また、底部外面にはヨコナデ、底部内面に指オサエの後ナデを施す。

271 は土師器高杯で、口径 16.7 cm、底径 10.6 cm、残存高 13.6 cm、杯部のみ残存している。口縁端部は外に突出し、口縁部にヨコナデ、杯部内外面ともにナデを施す。

272 は土師器高杯で、脚部のみ残存している。底径が 10.2 cm、残存高は 9.9 cmである。外面をナデで調整し、内面には指頭圧痕としぼり痕を残す。

273 は土師器高杯で、底径 16.0 cm、残存高 11.4 cm、脚部のみ残存している。外面を面取りし、底部に指オサエの後ナデを施す。内面はナデで調整され、しぼり痕が残る。

274 は土師器甕で、口径は 12.1 cm、残存高が 8.3 cmである。口縁部にヨコナデ、胴部外面にナデ、胴部内面は指オサエの後ケズリを施す。

279 は土師器台付壺で、底径 17.5 cm、残存高 21.9 cm、口縁部を欠損している。胴部は球形を呈し、把手がとりつき、底に高台を貼り付ける。胴部外面はナデの後ヨコミガキ、胴部下半はヨコナデで調整される。また、胴部内面上半にナデ、下半には板ナデを施す。

275 は小型の土師器甕で、口径 9.8 cm、残存高 5.7 cm、口縁部は外反する。口縁部にヨコナデ、胴部外面に指オサエの後ナデ、胴部内面には指オサエの後ケズリを施す。

276 は土師器甕で、口径 12.2 cm、器高 11.4 cm、口縁部は外反し、胴部は球形を呈する。口縁部にヨコナデ、胴部は外面にタテハケおよびナナメハケ、内面には指オサエの後、板ナデを施す。また、煤が付着している。

277 は小型の土師器甕で、口径 10.4 cm、器高 9.5 cm、口縁部は外反し、端部が肥厚する。胴部は球形を呈し、把手が 1 つとりつく。口縁部にヨコナデ、胴部外面に指オサエの後タテハケおよびヨコハケを施す。また、胴部内面には指オサエの後、板ナデを施す。

278 は土師器甕で、口径 12.9 cm、器高 12.3 cm、口縁部が外反し、端部が肥厚する。胴部は球形を呈し、底部に穿孔が認められる。口縁部にヨコナデ、口縁部内面にはヨコハケ、胴部外面にタテナナメハケ、胴部内面にはナデを施す。

280 は土師器甕で、口径 13.2 cm、器高 12.9 cm、口縁部が外反し、端部が肥厚する。胴部は球形を呈し、底部に穿孔が認められる。口縁部にヨコナデ、胴部外面にタテハケおよびヨコハケ、胴部内面には指オサエの後、板ナデを施す。また、煤が付着している。

281 は土師器甕で、口径 27.6 cm、残存高 11.0 cm、口縁部は外反する。口縁部にヨコナデ、口縁部内面にはヨコハケ、胴部は外面に指オサエの後に粗いたテハケ、内面には板ナデを施す。

282 は土師器甕で、口径 27.2 cm、残存高 13.0 cm、口縁部は外に開き、端部が肥厚する。口縁部にヨコナデ、口縁部内面にヨコハケ、胴部外面にタテハケを施すが、胴部外面下半には指オサエの後ヨコハケが施され、胴部内面は板ナデで調整される。

283 は土師器甕で、口径 24.0 cm、残存高 15.5 cm、口縁部は外反し、端部が肥厚する。口縁部にヨコナデ、口縁部内面にヨコハケ、胴部外面にタテハケ、胴部内面には板ナデを施す。また、煤が付着している。

284 は土師器甕で、口径 28.4 cm、残存高 16.5 cm、口縁部は外反し、端部が肥厚する。また、胴部には把手がとりつく。口縁部にヨコナデ、口縁部内面にはヨコハケ、胴部は外面にタテハケ、内面には指オサエの後ナナメハケを施す。また、煤が付着している。

285 は土師器甕で、口径 26.0 cm、残存高 23.0 cm、口縁部は外反し、胴部に把手がとりつく。口縁部にヨコナデ、胴部は外面にタテハケ、内面にナデを施す。

286 は土師器甕で、口径 12.1 cm、残存高 8.5 cm、口縁部は外反する。口縁部をヨコナデで調整し、胴部は外面に指オサエの後、粗いたテハケ、内面にナナメハケを施す。

287 は土師器甕で、口径 12.6 cm、残存高 9.3 cm、口縁部は外反する。口縁部にヨコナデ、胴部は外面に粗いたテハケの後タテハケ、内面にナデおよびナナメハケを施す。

288 は土師器甕で、口径 14.4 cm、器高 13.4 cm、口縁部が外反し、胴部は扁球形を

呈する。口縁部にヨコナデ、胴部外面にナデ、胴部内面には板ナデを施す。

289 は土師器甕で、口径 14.8 cm、器高 12.0 cm、外反する口縁部は端部が肥厚し、胴部は扁球形を呈する。口縁部にヨコナデ、口縁部内面にはヨコハケ、胴部外面にナメハケ、胴部内面に指オサエの後ナデを施す。また、煤が付着している。

290 は土師器甕で、口径 13.4 cm、器高 13.4 cm、外反する口縁部は端部が肥厚し、胴部は扁球形を呈する。口縁部にヨコナデ、胴部は外面に指オサエの後タテハケ、さらに下半のみナメハケ、内面には指オサエの後ナデを施す。また、煤が付着している。

291 は土師器甕で、口径 15.7 cm、残存高 8.2 cm、口縁部は外反する。口縁部は外面にヨコナデ、内面にヨコハケ、胴部は外面にタテハケ、内面に指オサエの後ヨコハケを施す。

292 は土師器甕で、口径 18.4 cm、残存高 7.9 cm、口縁部は受け口状を呈する。口縁部にヨコナデ、胴部は内外面にナデを施す。

293 は土師器甕で、口径 20.2 cm、残存高 9.4 cm、口縁部は内湾する。口縁部外面にヨコナデ、口縁部内面にヨコハケ、胴部は外面にヨコハケ、内面には指オサエの後ナデを施す。

294 は土師器甕で、口径 19.0 cm、残存高 10.6 cm、口縁部は内湾する。口縁部外面にヨコナデ、口縁部内面にヨコハケ、胴部外面にはヨコハケおよびナメハケ、胴部内面に指オサエの後ナデを施す。

295 は土師器甕で、口径 19.0 cm、残存高 10.4 cm、口縁部は外反し、端部が肥厚する。口縁部にヨコナデ、胴部外面にナメハケ、胴部内面には指オサエの後ナメハケを施す。

296 は土師器甕で、口径 26.0 cm、残存高 15.1 cm、口縁部は外反し、胴部に把手がとりつく。口縁部にヨコナデ、胴部外面にナメハケ、胴部内面には指オサエを施す。また、煤が付着している。

297 は土師器甕で、口径 22.8 cm、残存高 10.0 cm、口縁部が外反する。口縁部にヨコナデ、胴部外面にはナメハケ、胴部内面に指オサエの後ヨコハケを施す。

298 は土師器甕で、口径 23.8 cm、残存高 9.4 cm、口縁部が外反する。口縁部にヨコナデ、胴部外面にはナメハケ、胴部内面に指オサエの後ヨコハケを施す。

299 は土師器甕で、口径 23.0 cm、残存高 12.0 cm、口縁部は外反する。口縁部にヨコナデ、胴部外面に粗いヨコおよびナメハケ、胴部内面には指オサエおよびナデを施す。

300 は土師器甕で、口径 21.4 cm、器高 9.1 cm、口縁部はくの字状を呈し、端部が肥厚する。口縁部外面にヨコナデ、口縁部内面にヨコハケ、胴部は外面に指オサエの後タテハケ、内面に指オサエの後ヨコハケを施す。

301 は土師器甕で、口径 24.4 cm、底径 11.5 cm、器高 20.2 cm。胴部に把手が付き、底部には透孔を穿つ。透孔は、中央に円形、その周囲に半円状の孔を配する。口縁部にヨコナデ、胴部外面にタテハケ、胴部内面にはヨコハケおよび板ナデの後タテケズリ、底部にはケズリを施す。

302 は土師器甕で、口径 22.0 cm、器高 17.8 cm、底部に透孔を穿つ。口縁部にヨコ

ナデ、胴部外面にタテハケ、胴部内面にはナデを施す。

319 は土師器甗で、口径 21.5 cm、底径 8.8 cm、器高 17.8 cm。胴部に把手がとりつくが欠損しており、底部には透孔を穿つ。口縁部にヨコナデ、胴部は外面にタテハケ、内面にヨコハケ、下半のみ指オサエの後ナデを施す。

320 は土師器羽釜で、口径 24.2 cm、残存高 6.8 cm、口縁部は外反して端部が肥厚し、直下に鏝を貼り付ける。口縁部にヨコナデ、胴部外面にナデ、胴部内面には指オサエの後ナデを施す。また、煤が付着している。

303 は碗形の製塩土器で、口径 8.3 cm、器高 5.6 cm、口縁端部は内湾する。口縁部にヨコナデ、体部外面にナデ、体部内面には条痕を施す。

304 は碗形の製塩土器で、口径 7.4 cm、残存高 3.9 cm、底部を欠損している。

305 は碗形の製塩土器で、口径 7.0 cm、残存高 4.1 cm、底部を欠損している。体部外面にナデ、体部内面に条痕を施す。

306 は製塩土器で、残存高 3.8 cm、口縁部および底部を欠損している。胴部外面にナデ、胴部内面に条痕を施す。

307 は製塩土器で、残存高 2.1 cm、口縁部および底部を欠損している。胴部外面にナデ、胴部内面にハケを施す。

308 は製塩土器で、残存高 3.0 cm、口縁部を欠損している。胴部外面にナデ、胴部内面には指オサエの後ナデを施す。

309 は製塩土器で、口径 5.8 cm、残存高 2.7 cm、底部を欠損している。外面にタタキ、内面には指オサエを施す。

310 は製塩土器で、残存高 3.2 cm、胴部のみ残存している。外面にタタキ、内面には指オサエを施す。

311 は製塩土器で、口径 5.8 cm、残存高 5.0 cm、底部を欠損している。口縁部に指オサエ、胴部は外面にタタキ、内面に指オサエを施す。

312 は製塩土器で、残存高 5.0 cm、口縁部および底部を欠損している。胴部外面にタタキ、胴部内面に指オサエを施す。

315 は製塩土器で、口径 7.6 cm、残存高 5.0 cm、底部を欠損している。胴部外面にタタキ、胴部内面に指オサエを施す。

313 は製塩土器で、残存高 2.5 cm、口縁部、底部を欠損している。胴部外面にタタキ、胴部内面に指オサエを施す。

314 は製塩土器で、残存高 2.7 cm、口縁部を欠損している。胴部外面にタタキ、胴部内面に指オサエを施す。

316 は土製品で、鋳造遺物と思われる。口径 12.8 cm、残存高 7.4 cm、口縁部にヨコナデ、胴部は外面にタテケズリ、内面は指オサエの後ナデを施す。

317 は輪羽口で、器高は 7.5 cm である。

318 は輪羽口で、器高は 9.3 cm である。

321 は杯蓋で、口径 13.6 cm、器高が 4.6 cm である。端部は丸く仕上げられ、沈線の名残を確認することができる。稜は鈍く、やや突出して段を成している。天井部に回転ヘラケズリが施され、MT15 型式的ものと考えられる。

322 は杯蓋で、口径 14.4 cm、器高が 5.3 cm である。端部は比較的平らに仕上げられ

ているが、沈線を確認することができる。稜はやや突出し、段を成している。天井部には回転ヘラケズリが施され、内面に同心円文の当て具痕が残る。大型であることから、MT15 型式のものと考えられる。

323 は杯蓋で、口径 15.6 cm、器高が 4.9 cm である。端部はやや鋭角な丸に仕上げられている。稜は非常に鈍く、やや突出している。天井部に回転ヘラケズリが施され、TK10 型式のものと考えられる。

324 は杯蓋で、口径 14.6 cm、器高が 4.2 cm である。端部は丸く仕上げられ、稜は突出しておらず、ほぼ形骸化して痕跡程度になっている。天井部には回転ヘラケズリが施され、外面にヘラ記号、内面に同心円文の当て具痕が残る。大型であることから MT15～TK10 型式のものと考えられる。

325 は杯蓋で、口径 16.3 cm、器高が 6.3 cm である。端部は鋭角に仕上げられ、稜はほぼ消滅している。天井部に回転ヘラケズリが施され、TK10～MT85 型式のものと考えられる。

326 は杯蓋で、口径 14.9 cm、器高が 3.8 cm である。端部は丸く仕上げられ、稜は完全に失われている。天井部に回転ヘラケズリが施され、内面に同心円文の当て具痕が残る。MT85 型式のものと考えられる。

327 は高杯蓋で、復元口径 15.2 cm、器高 6.6 cm でつまみが付されている。端部は非常に甘い印象を受ける。稜は鈍く、形骸化している。天井部には回転ヘラケズリ後、櫛描き列点文を施している。MT15～TK10 型式のものと考えられる。

328 は高杯蓋で、復元口径 15.6 cm、器高 5.6 cm でつまみが付されている。端部は丸く仕上げられ沈線が描かれる。稜は非常に鈍く、形骸化している。また、天井部に回転ヘラケズリ後、櫛描き列点文を施している。MT15～TK10 型式のものと考えられる。

329 は杯身で、口径は 11.5 cm、残存高が 4.2 cm である。立ち上がりはやや内傾して比較的短く伸び、端部は丸く収められている。底部に回転ヘラケズリを施しており、受部は短く、ほぼ水平に伸びる。やや小型であり、TK47～MT15 型式と考えられる。

330 は杯身で、口径は 12.8 cm、器高が 5.3 cm である。立ち上がりは比較的長く、ほぼ垂直に伸び、端部は丸く収められている。底部に回転ヘラケズリを施しており、受部は短く、ほぼ水平に伸びている。大型であることから、MT15 型式と考えられる。

331 は杯身で、復元口径は 13.2 cm、器高が 5.4 cm である。立ち上がりは内傾してやや短く伸び、端部は丸く収められている。底部の狭い範囲に回転ヘラケズリを施しており、受部は短く、やや上方外に伸びている。TK10 型式と考えられる。

332 は杯身で、復元口径は 13.6 cm、残存高が 4.9 cm である。立ち上がりはやや短く、ほぼ垂直に伸び、端部は丸く収められている。底部に粗い回転ヘラケズリを施しており、受部はほぼ水平に短く伸びている。大型で全体的に扁平であることから、TK10 型式前後のものと考えられる。

333 は杯身で、復元口径は 12.7 cm、残存高が 3.4 cm である。立ち上がりは内傾して短く伸び、端部はやや鋭角な丸に収められている。底部に回転ヘラケズリを施しており、受部は短く、ほぼ水平に伸びている。全体的に扁平であり、TK43 型式と考えられる。

334 は杯身で、復元口径は 12.5 cm、残存高が 3.1 cm である。やや内傾する立ち上が

りは非常に短く、端部はやや鋭角に丸く収められている。底部の狭い範囲に回転ヘラケズリを施しており、受部はほぼ水平に短く伸びている。扁平であることから、TK43型式と考えられる。

335 は丸底壺で、胴部径 10.7 cm、頸部以上を欠損している。頸部には波状文、胴部には列点文を巡らせ、やや張った肩部には沈線を施す。甕の可能性もある。MT15 型式にあたるものと推定される。

336 は器台で、底径 26.4 cm、残存高 30.8 cm、脚部のみ残存している。3 段の突帯を巡らせ、突帯間に波状文、長方形の透かし窓を施している。ただし、上部形態をみると、外面を平行叩き日文の叩き板で調整していることから、壺の可能性も考えられる。

337 は甕で、口径が 16.8 cm、器高が 26.0 cm である。口端部は段を成し、外反する口頸部は短く、文様帯を有さない。胴部外面は格子風叩き日文の叩き板で調整され、内面は同心円文の当て具痕が残る。また、焼成後、胴部下部に穿孔を施している。TK10 型式前後のものと推定される。

338 は凝灰岩切石で、幅 45.5 cm、長さ 38.2 cm、高さ 10.8 cm である。

339 は馬鉄で、柄と歯が一部欠損しているがほぼ完存している。柄は長さ 123.5 cm、幅が 5.5~6.5 cm、6.5~9.0 cm で、10ヶ所に 3.0 cm ほどの歯を取り付ける方形の孔が穿たれている。歯は 21.0~23.0 cm の長さで先端は尖っている。材質は、柄がヒノキ、歯はカシを使用している。

第 19 トレンチ SD02

第 19 トレンチ SD02 は前述の通り、第 18 トレンチ SD02 の延長に存在し、須恵器を中心に、縄文土器、土師器などが出土した。須恵器は杯蓋、杯身、高杯蓋、有蓋高杯、無蓋高杯など、古墳時代から飛鳥時代のものが出土しているが、特に古墳時代のものが多くを占めている。345~348 は土師器、340~344 は須恵器、349、350 は製塩土器、351 が石材である。

345 は土師器杯で、口径 16.3 cm、器高 5.3 cm、口縁端部が外に突出する。口縁部にヨコナデ、体部外面には指オサエの後ナデ、体部内面にナデを施す。

346 は土師器甕で、口径 15.3 cm、残存高 8.2 cm、口縁部が外反し、端部は肥厚する。口縁部外面にヨコナデ、口縁部内面にヨコハケ、胴部外面にヨコナメハケ、胴部内面には指オサエの後ナデを施す。また、煤が付着している。

347 は土師器甕で、口径 23.8 cm、残存高 8.6 cm、口縁部はくの字状を呈する。口縁部にヨコナデ、胴部外面にナメハケ、胴部内面にはナデを施す。

348 は土師器甕で、口径 19.2 cm、残存高 11.5 cm、口縁部は受け口状を呈する。口縁部にヨコナデ、胴部は外面にタテハケ、内面には指オサエおよびナデを施す。

349 は製塩土器で、残存高 4.1 cm、口縁部および底部を欠損している。胴部外面にタタキ、胴部内面に指オサエを施す。

350 は製塩土器で、残存高 2.6 cm、口縁部および底部を欠損している。胴部外面にタタキ、胴部内面に指オサエを施す。

340は杯蓋で、口径12.7cm、器高が4.4cmである。端部は甘い、水平に仕上げられている。稜はやや鈍いが、突出して段を成している。また、天井部の広範囲に回転ヘラケズリが施されている。TK47～MT15型式のものと考えられる。

341は高杯蓋で、口径11.8cm、器高5.7cm、天井部にはつまみが付されている。端部はやや甘い印象を受け、沈線が施される。稜はやや甘いが突出している。また、天井部に回転ヘラケズリを施す。TK47型式のものと考えられる。

342は杯身で、口径は11.3cm、器高が5.0cmである。立ち上がりは比較的長く、やや内傾して伸び、端部には沈線が施されている。底部のやや広い範囲に回転ヘラケズリを施しており、受部は短く、やや外上方に伸びている。大型であることから、MT15型式と考えられる。

343は有蓋高杯で、口径は10.6cm、器高が8.5cmである。短脚で3方向に方形の透かし窓があり、底部は段を成して下方に屈曲している。やや短い立ち上がりはほぼ垂直に伸び、端部には沈線が施される。杯底部にはやや狭い範囲で反時計回りの回転ヘラケズリを施し、受部は短く、ほぼ水平に伸びている。全体的に甘い作りであるが、小型かつ短脚であることから、TK47型式と考えられる。

344は有蓋高杯である。口径は10.6cm、器高が10cm、短脚三方透かしで、方形の窓が穿たれている。立ち上がりはやや内傾して短く伸び、外反する端部に沈線を施す。杯底部には広い範囲で回転ヘラケズリを施しており、受部は短く、やや上方に伸びている。小型でありTK47型式と考えられる。

351は砥石で、残存長12.5cmである。4方向に面取りをしているが、欠損部分が大い。

第20 トレンチ

第IV層

361は土師器壺で、残存高9.9cm、胴部のみ残存している。胴部は球形を呈し、外面に指オサエの後ヨコミガキ、下半のみケズリを施す。内面は指オサエの後、板ナデで調整される。

SD04

359はミニチュアの土師器鉢で、口径7.9cm、器高5.1cm、口縁部は外反する。口縁部にヨコナデ、胴部外面には指オサエの後ハケ、胴部内面に指オサエを施す。

357は土師器皿で、口径19.8cm、器高3.1cm、残存率10%、口縁端部が肥厚する。口縁部にヨコナデ、体部内外面にナデを施す。

第21 トレンチ

358は須恵器杯身で、第4層埋土から出土した。復元口径18.0cm、器高が4.4cmで、高台が付されている。口縁部は外傾して直線的に伸び、端部は丸く仕上げられている。底部は回転ヘラケズリ後ヨコナデで調整され、高台は短く、やや外方に踏ん張る。TK48型式のものと考えられる。

第23 トレンチ

SD05

365は土師器羽釜で、口径20.4cm、残存高15.0cm、残存率は約15%である。外反する口縁部は端部が肥厚し、胴部には鏝を貼り付ける。口縁部にヨコナデ、胴部外面にナデ、胴部内面には指オサエおよびナデを施す。また、煤が付着している。

SRO1

第17トレンチで検出したSRO1の延長部にあたる。須恵器、土師器、黒色土器、縄文土器、弥生土器などが出土し、その年代は縄文時代から平安時代のものが出土し、特に古墳時代後期から飛鳥時代前半のものが多く出土している。器種は杯蓋、杯身、高杯、甕、小壺、短頸壺、丸底壺、壺、甕、大甕、平瓶、横瓶などがある。352～356、360、362～364、367～373は土師器、366は黒色土器、374～390、401は須恵器である。

353は土師器杯で、口径は12.4cm、器高が3.9cm。口縁部にヨコナデ、体部外面に指オサエ、体部内面には指オサエの後ナデを施す。

354は土師器杯で、口径は12.3cm、器高が3.6cm。口縁部にヨコナデ、体部外面に指オサエ、体部内面には指オサエの後ナデを施す。

355は土師器杯で、口径14.4cm、器高2.8cm、口縁部にヨコナデ、体部は外面にケズリ、内面にはナデを施す。

356は土師器杯で、口径15.5cm、器高3.9cm、口縁部にヨコナデ、体部は外面に指オサエの後ナデ、内面にはナデを施す。

352は土師器碗で、口径は11.4cm、器高が3.8cm。口縁部にヨコナデ、体部外面に指オサエ、体部内面にはナデを施す。

364は土師器碗で、口径は13.6cm、残存高が7.0cm。口縁部にヨコナデ、体部は外面に指オサエの後ナデ、さらにヨコミガキを施す。体部内面にはナデの後、放射線状の暗文を施す。

362は土師器高杯で、口縁部および底部欠損しており、残存高は13.0cm。杯部は外面にタテハケ、内面にはハケを施す。脚部は外面を面取りし、内面にしぼり痕が残る。

363は土師器高杯で、口径17.7cm、残存高6.6cm、杯部のみ残存している。杯部は稜を有し、口縁部にヨコナデ、胴部外面に指オサエの後ナデ、内面にはナデの後、放射線状の暗文を施す。脚部は外面をナデ調整され、内面にはしぼり痕が残る。

360は土師器壺で、口径9.7cm、残存高10.4cm、胴部のみ残存している。胴部は扁球形を呈し、外面はナデ、下半のみケズリ、内面は指オサエおよびナデで調整される。

367は土師器甕で、口径は12.9cm、器高が12.0cm。外反する口縁部は端部が肥厚し、胴部は球形を呈する。口縁部にヨコナデ、胴部は外面に指オサエの後タテハケおよびナメハケ、内面には指オサエの後ナデを施す。また、煤が付着している。

368は土師器甕で、口径10.0cm、残存高10.6cm、口縁部が外傾し、胴部は扁球形を呈する。口縁部にヨコナデ、胴部は外面に指オサエの後タテハケ、内面には指オサエの後、板ナデを施す。

369は土師器甕で、口径12.9cm、残存高10.8cm、外反する口縁部は端部が肥厚し、胴部は球形を呈する。口縁部にヨコナデ、胴部外面にタテハケおよびナメハケ、胴

部内面には指オサエの後ナデを施す。また、煤が付着している。

370 は土師器甕で、口径は 13.0 cm、器高が 14.5 cm。外反する口縁部は端部が肥厚し、胴部は球形を呈する。口縁部は外面にヨコナデ、内面にヨコハケ、胴部外面にタテハケ、胴部内面には指オサエの後、板ナデを施す。また、煤が付着している。

371 は土師器甕で、口径 15.5 cm、器高 17.9 cm、外反する口縁部は端部が肥厚し、胴部は球形を呈する。口縁部にヨコナデ、口縁部内面にヨコハケ、胴部は外面に指オサエの後タテハケ、下半のみナメハケ、内面には指オサエの後ナメハケを施す。また、煤が付着している。

372 は土師器甕で、口径 16.0 cm、残存高 11.0 cm、口縁部は外反し、端部が肥厚する。口縁部は外面にヨコナデ、内面にヨコハケ、胴部は外面にタテハケ、内面には指オサエの後ナデを施す。また、煤が付着している。

373 は土師器甕で、底径が 12.9 cm、残存高は 10.8 cm。底部のみ残存しており、丸みをおびた平底を呈する。内外面ともに指オサエの後ナデを施す。

366 は黒色土器A類碗で、底径 7.5 cm、残存高 2.1 cm、底に高台を貼り付ける。体部外面にナデ、内面に平行ミガキを施す。

374 は杯蓋で、埋土砂層から出土した。口径 14.5 cm、器高が 4.6 cm である。端部に沈線が施されるが、稜は非常に鈍く、形態化している。また、天井部のやや広範囲に反時計回りの回転ヘラケズリが施される。TK10 型式のものと考えられる。

375 は杯蓋で、埋土砂層から出土した。復元口径 11.6 cm、器高が 3.2 cm である。端部は丸く仕上げられ、稜は完全に失われている。天井部には回転ヘラケズリが施されるが、粗雑であり、その範囲も非常に狭い。TK209 型式前後のものと考えられる。

376 は杯蓋で、埋土砂層から出土した。口径 11.5 cm、器高が 3.0 cm である。端部は丸く仕上げられ、下方へ屈曲する。稜は完全に消滅しており、天井部と口縁部の境界は明瞭さを欠く。また、天井部の非常に狭い範囲に粗雑な回転ヘラケズリが施される。TK209 型式前後のものと考えられる。

377 は高杯蓋で、埋土砂層から出土した。口径は 11.7 cm、器高が 3.1 cm であり、口縁端部はやや丸く、水平に伸びる。また、つまみ、およびかえりを有する。つまみはⅢ期から出現するいわゆる宝珠つまみではなく、古式から見られるものが簡略化されたものと推定される。また、かえりを持っていて作りがやや粗雑なことから、TK217 型式に相当する製品と推定される。

378 は杯身で、埋土砂層から出土した。復元口径は 10.8 cm、器高が 4.9 cm である。立ち上がりは内傾して比較的長く伸び、端部には沈線が施されている。底部にはやや広い範囲で時計回りの回転ヘラケズリが施され、受部は短く、やや外上方へ伸びている。TK47 型式のものと考えられる。

379 は杯身で、埋土砂層から出土した。口径は 12.6 cm、器高が 5.1 cm である。立ち上がりは比較的長く、やや内傾しているがほぼ垂直に伸び、端部には沈線が施されている。底部に時計回りの回転ヘラケズリを施しており、受部は短く、ほぼ水平に伸びている。大型であり、MT15 型式と考えられる。

380 は杯身で、埋土砂層から出土した。復元口径は 12.6 cm、器高が 4.0 cm である。立ち上がりはほぼ垂直であるがやや内傾し、やや短く伸びる。端部は丸く収められて

いる。底部に反時計回りの粗い回転ヘラケズリを施しており、受部はほぼ水平に伸びているが短い。全体的に扁平で、大型であることから、MT85 型式前後のものと考えられる。

381 は杯身で、埋土砂層から出土した。口径は 10.2 cm、器高が 2.8 cm である。立ち上がりは短く、著しく内傾しており、端部は非常に甘い。底部は未調整で、受部はほぼ水平に伸びているが短い。非常に粗雑な作りであり、TK209 型式と考えられる。

382 は杯身で、埋土砂層から出土した。口径は 10.2 cm、器高が 3.4 cm である。立ち上がりはやや内傾して短く伸び、端部は非常に甘い。底部は未調整で、受部は短く、ほぼ水平に伸びている。非常に粗雑な作りであり、TK209～TK217 型式と考えられる。

384 は高杯で、埋土砂層から出土した。杯部を欠損しており、残存高は 15.1 cm、復元底径は 15.0 cm である。長脚二段透かしで、長方形の透かし窓が穿たれている。脚部は中央に 2 条、下部に 1 条の沈線が描かれている。また、杯底部は回転ヘラ削りで調整されている。MT85～TK209 型式のものと考えられる。

385 は高杯で、埋土砂層から出土した。口径は 12.3 cm、器高が 15.1 cm である。脚は短く、「ハ」の字型を呈し、端部は段を成している。杯底部は時計回りの回転ヘラケズリによって調整されている。9 世紀前半のものと考えられる。

386 は小壺で、埋土砂層から出土した。口径は 3.9 cm、器高が 8.3 cm、底径 4.0 cm である。低い高台が付されており、下方へ踏ん張っている。わずかに外反する口頸部はあまり長くなく、端部は丸く収められている。古墳時代のものと考えられる。

387 は壺で、埋土砂層から出土した。口縁部を欠損しており、残存高が 11.9 cm、器幅は 9.3 cm である。頸部が非常に細く、口縁部はラップ状に開くと想定される。肩部は張りが非常に強く、屈曲している。口頸部上半に沈線およびハケ目、胴部には 2 条の沈線を施し、その間に刺突文、円形の透かし孔を配する。底部を時計回りの回転ヘラケズリで調整している。MT15 型式前後のものと思われる。

388 は短頸壺で、埋土砂層から出土した。復元口径が 7.7 cm、器高が 10.5 cm である。短い口縁がわずかに外反して垂直に伸びている。底部を時計回りの回転ヘラケズリ、胴部をヨコナデで調整する。MT15 型式前後のものとして推定される。

389 は甕で、埋土砂層から出土した。口径が 15.2 cm、器高が 29.0 cm である。口縁端部はやや甘い段を成し、外反する口頸部は短く、文様帯を有さない。胴部外面は平行叩き目文の叩き板で調整され、内面には同心円文の当て具痕が残る。MT85 型式前後と推定される。

390 は甕で、埋土砂層から出土した。復元口径 18.4 cm、器高 28.6 cm、器幅が 29.8 cm である。口端部は非常に甘いが段を成し、短い口頸部は「く」の字状に外反し、文様帯は施されない。胴部外面は平行叩き目文の叩き板、内面上部は同心円文の当て具痕を半すり消しで調整される。一方下部には、すり消しを施さず、同心円文を残す。MT85～TK217 型式前後と推定される。

401 は大甕で、埋土砂層から出土した。口径が 25.0 cm、器高が 29.3 cm である。短い口頸部は外反度が大きく、端部は甘い印象を受ける。胴部外面に平行叩き目文の叩き板で調整後カキ目を施し、胴部内面には同心円文の当て具痕を残す。TK217 型式と推定される。

383は横瓶で埋土砂層から出土した。口径が12.4 cm、器高が26.9 cm、器幅33.2 cmである。口端部は段を成し、短い口頸部は外反度が非常に大きく、文様は施されない。胴部外面に上部へ向かってカキ目を施し、内面に残る同心円文の当て具痕はすり消されていない。MT85～TK217型式前後と推定される。

第24 トレンチ溝

391は土師器皿で、口径16.4 cm、器高2.8 cm、口縁部にヨコナデ、体部内外面にナデを施す。

392は土師器皿で、口径16.8 cm、器高2.8 cm、口縁部にヨコナデ、体部内外面にナデを施す。

393は土師器杯で、口径14.8 cm、残存高4.2 cm、口縁部にヨコナデ、体部は外面にケズリ、内面にはナデを施す。

394は土師器杯で、口径11.9 cm、器高3.4 cm、口縁部にヨコナデ、体部は内外面にナデを施す。

395は土師器杯で、口径12.8 cm、器高3.6 cm、口縁部にヨコナデ、体部は外面にケズリ、内面にはナデを施す。

396は土師器杯で、口径12.3 cm、器高4.2 cm、口縁部にヨコナデ、体部外面に指オサエの後ナデ、体部内面にはナデを施す。

397は土師器碗で、口径13.4 cm、残存高4.2 cm、口縁部にヨコナデ、体部は外面に指オサエの後ナデ、内面にはナデを施す。

398は杯身で、口径は17.0 cm、器高が4.0 cmで高台が付されている。口縁部は外傾して直線に伸び、端部は丸く仕上げられている。底部はヘラケズリ後ヨコナデで調整され、高台は短く外方に踏ん張る。MT21型式のものと考えられる。

399は輪羽口で、残存高は11.0 cm。

400は用途不明土製品であるが、穴が穿たれており、馬面を表現している。残存高12.0 cm。

第4章 平成14年度調査

事業地西側区域を対象に、計13本のトレンチおよび本調査北区、中央区、南区、北区を設定した。総調査面積は14,622㎡である。

1 遺構

(1) 第25～第27・第35トレンチ

第25トレンチ

南北6.0m、東西75.0mの東西トレンチである。標高51.000m～51.200mの現地表面から0.5m掘削したところで、オリーブ褐色粘質土の基盤層に到達する。東半から第26トレンチにかけては、東西、南北方向の耕作溝群や暗渠施設SD06、07以外に顕著な遺構は存在しない。西半では円形の素掘井戸SE04を検出している。

第26トレンチ

東西4.0m、南北66.0mの南北トレンチで、現地表面は標高51.100m～51.200mである。基盤層は第25トレンチ同様オリーブ褐色粘質土からなるが、南端から北へ16.0m地点以南は灰色シルトに変化する。東西、南北方向の耕作溝群以外に顕著な遺構は検出されなかった。

第27トレンチ

南北12.0m、東西50.0mの東西トレンチ。現地表面は標高50.900mで基盤層は鈍い黄褐色粘土で形成されている。この基盤層上で遺構を確認することができるが、当トレンチには耕作溝群が存在しない。

SE05

直径1.0m、深さ1.2mの円形井戸であるが、SD10によって破壊されていた。掘形底部には縦板を方形に組んだ井戸枠が残存しており、須恵器甕が1点出土した。上部の枠材は抜き取られており残存していなかった。

SD10

最大幅3.5m、深さ1.1mで、長さ6.5m分を検出した。

SD11

幅0.25m、深さ0.2m。SE05に取り付くことから、一連の遺構と思われる。

SD13

幅3.0m、深さ1.0mで、長さ11.0mにわたって検出した。埋土中から布留式の土師器甕が1点出土した。

第35トレンチ

本調査北区の西に設定した、南北4.0m、東西35.0mの東西トレンチである。表土から0.7m下で黄褐色粘土の地盤に達する。東端でSR11を検出し、埋土からはサヌカ

イト剥片がごく少量出土した。西半では標高がやや上がって東西方向の耕作溝、ピットが検出された。

(2) 本調査北区

事業地の中央西寄り計画された1号調整池設置箇所を設定した調査区で、面積は8,943.0㎡である。

基本層序

5層に分かれる。第Ⅰ層は現水田耕土の褐色灰色砂質土で層厚は約0.2m、第Ⅱ層は明褐色砂質土の現水田床土で層厚約0.05m、第Ⅲ層は層厚約0.05mの灰オリーブ砂質土、第Ⅳ層は層厚約0.1mの黄灰色砂質土で、いずれも古墳時代から近世の遺物を含む層、第Ⅴ層は層厚約0.2m～0.4mの黄褐色粘質土である。第Ⅴ層は古墳時代から中世の遺構基盤層であり、古墳時代後期から平安時代の集落跡および鎌倉時代の耕作遺構を検出した。主な遺構は旧河道、溝、孤立柱建物跡、井戸、土坑、耕作溝などである。

SA01～13

3間を1単位とした塀である。最小のものは全長2.8m、最大で全長8.0m。SA01～SA05はSB11、SB12の南界をなし、SD35とも関連する。SA06～SA08は、その南側の東西界であり、SA09、SA10はSD35の埋没後に築かれている。SA11～SA13はSB13周辺の北壁である。

孤立柱建物群

北西から南東側、および南区を中心に柱穴群を検出した。それらのうちで建物と確認されたものは塀を含め、34棟である。建物には、斜め方向のものと正方位を意識したものがあがり、その軸線方向から以下の6タイプに分けられる。

Ⅰ類：地形の制約を受け、北で西へ約30°振れる

Ⅱ類：地形の制約を受け、北で西へ約20°振れる

Ⅲ類：地形の制約を受け、北で西へ約10°振れる

Ⅳ類：方位を意識し、北で東へ約5°振れる

Ⅴ類：方位を意識し、北で西へ約5°振れる

Ⅵ類：正方位にのる

出土遺物の年代観から、Ⅰ類が古墳時代中期末から後期、Ⅱ類が古墳時代後期、Ⅲ類とⅣ類が飛鳥時代、Ⅴ類は奈良時代、Ⅵ類は平安時代初頭の建築と考えられる。

SB04

梁間2間、桁行2間以上の東西棟で、柱間は梁間1.6m、桁行2.0m。Ⅵ類、北西区。

SB05

梁間2間以上、桁行3間の南北棟で、柱間は梁間1.4m、桁行1.6m。柱穴は方形掘形、Ⅳ類、北西区。

SB06

梁間2間、桁行4間の南北棟で、柱間は梁間2.0m、桁行1.4m～1.6m。間仕切りが存在する。Ⅳ類、北西区。

SB07

梁間2間、桁行2間の南北棟で、柱間は梁間1.4m、桁行2.0m。方形掘形の柱穴を

含む。IV類、北西区

SB08

梁間1間、桁行1間の南北棟で、柱間は梁間、桁行ともに2.2m。IV類、南西区。

SB09

梁間1間、桁行1間の南北棟で、柱間は梁間2.6m、桁行2.2m。V類、南西区。

SB10

梁間1間、桁行1間の南北棟で、柱間は梁間、桁行ともに約2.8m。IV類、南西区。

SB11

梁間3間、桁行3間、南北棟の総柱建物で、柱間は梁間1.2m、桁行2.0m。南辺柱列のみ建て替えの痕跡があるが、隣接するSB12の火災が飛び火したためと思われる。I類、南東区。

SB12

梁間3間、桁行3間、南北棟の総柱建物で、柱間は梁間1.2m、桁行1.6m。建て替えの痕跡がみられ、柱穴埋土に焼土が混じることから、小規模な火災があったと考えられる。I類、南東区。

SB13

梁間2間、桁行3間の東西棟で、柱間は梁間、桁行ともに約2.0m、柱穴は方形。I類、南東区。

SB14

梁間2間、桁行1間以上の南北棟で、柱間は梁間1.6m、桁行2.0m。I類、南東区。

SB15

梁間2間、桁行3間の東西棟で、柱間は梁間1.6m、桁行1.8m。隠し扉の可能性がある。I類、南東区。

SB16

梁間2間、桁行4間の南北棟で、柱間は梁間2.0m、桁行は北2間が2.0m、南2間が1.6m、方形掘形の柱穴を有する。V類、南東区。

SB17

梁間2間、桁行5間の南北棟で、柱間は梁間2.4m、桁行2.0m～2.4m、方形掘形の柱穴を有する。SB16の建て替え。VI類、南東区。

SB18

梁間2間、桁行2間の南北棟で、柱間は梁間2.0m、桁行1.6m～2.0m。I類、南東区。

SB20

梁間1間、桁行2間の南北棟で、柱間は梁間3.2m、桁行は北1間が2.2m、南1間が1.4m、柱穴は方形。I類、南東区。

SB21

梁間2間、桁行2間の東西棟で、柱間は梁間1.6m、桁行は東1間が2.0m、西1間が1.6m。I類、南東区。

SB22

梁間2間、桁行3間の南北棟で、柱間は梁間2.0m、桁行2.0m、方形掘形の柱穴を

有する。Ⅳ類、南東区。

SB23

梁間1間、桁行2間の南北棟で、柱間は梁間2.8m、桁行3.6m、柱穴は方形掘形。Ⅵ類、南東区。

SB24

梁間1間、桁行2間の南北棟で、柱間は梁間2.8m、桁行2.0m。Ⅱ類、南東区。

SB25

梁間2間、桁行1間、総柱の東西棟である。柱間は梁間の北1間が2.8m、南1間が1.2m、桁行は6.0m。Ⅵ類、南東区。

SB26

梁間2間、桁行2間の南北棟で、柱間は梁間、桁行ともに2.0m、総柱の可能性はある。Ⅱ類、南東区。

SB27

梁間2間、桁行3間、東西棟の総柱建物で、柱間は梁間1.8m、桁行2.0m～2.4m、方形掘形の柱穴。Ⅵ類、南東区。

SB28

梁間3.6m、桁行3間の南北棟で、柱間は桁行1.4m。Ⅲ類に属すが、扉の可能性が高い。南東区。

SB29

梁間3間、桁行3間、南北棟の総柱建物で、柱間は梁間1.6m、桁行は北2間が2.0m、南2間が2.4m。SB30の建て替えて、Ⅲ類に属す。南東区。

SB30

梁間3間、桁行3間、南北棟の総柱建物で、柱間は梁間の外2間が2.0m、中央1間が1.6m、桁行2.0m。Ⅱ類、南東区。

SB31

南北2間分を検出した。隠し扉の可能性はある。柱間は2.0m、Ⅱ類、南東区。

SB32

梁間2間、桁行3間の南北棟で、柱間は梁間の西1間が2.0m、東1間が1.2m、桁行は、北1間が0.8m、中央が2.0m、南1間が1.4m。Ⅱ類、南東区。

SB33

南北2間分を検出、隠し扉の可能性が考えられ、柱間は1.4m。Ⅲ類、南東区

SB34

梁間1間、桁行2間の、間仕切りをもつ南北棟で、柱間は梁間4.4m、桁行は北1間が4.6m、南1間が4.0m。Ⅱ類、南東区。

SB35

梁間2間、桁行1間以上で、東西棟と思われる。柱間は梁間2.4m、桁行は2.6m。Ⅲ類、南東区。

SB36

梁間2間、桁行1間以上で、東西棟と思われる。柱間は梁間が2.6m～2.8m、桁行は2.8m。Ⅲ類、南東区。

SE08

南東側で検出した、縦板組隅柱留め枠を有する井戸である。10世紀中頃に比定される完形の黒色土器が出土した。

区画溝

15条を検出した。これらは出土遺物からみていずれも5世紀後半から7世紀中頃のものであり、流路とほぼ同時期の遺構と考えられる。矩形に配置されることから、古墳時代から飛鳥時代の建物群の周囲を巡っていたと考えられる。

SR11

当調査区南西側および本調査南区西端で検出した。

SR03

北東部、南東部および南区東側で検出した。埋土は二層に分かれ、上層は古墳時代、下層は縄文時代の堆積である。上層は暗褐色砂質土を埋土とする、幅5.0m～10.0m、深さ0.2m～0.4mの古墳時代の蛇行流路である。5世紀後半から6世紀中頃に比定される土師器、須恵器などが大量に出土したことから、古墳時代後期に営まれた集落の南東から北を限る流路として機能したと考えられる。下層は砂と礫を埋土とする、幅3.0m～5.0m、深さ0.2m～0.5mの縄文時代から弥生時代にかけての流路である。石製品、縄文土器、弥生土器の細片を包含していた。

(3) 本調査中央区

北区と南区を隔てる市道部分に設定した調査区である。市道は条里制地割の葛下郡二一条三里内の坪界にあたり、近世には下田村と狐井村、現在では下田東3丁目と大字狐井との境界として継承されている。

区画溝

本調査区では、北区から延びてくるもの以外に3条を検出した。これらは出土遺物からみて、いずれも5世紀後半から6世紀中頃のもので、古墳時代後期の建物区画していたと考えられる。

掘立柱建物群

北区で検出した建物群と同じく、軸線方向によって6タイプに分類される。

SB37

梁間1間、桁行1間以上の東西棟と思われる。柱間は梁間4.4m、桁行は不明。II類。

SB38

梁間1間、桁行2間の南北棟で、柱間は梁間4.0m、桁行2.8m。III類。

SB39

梁間1間、桁行2間の南北棟で、柱間は梁間4.0m、桁行2.0m。VI類。

SB40

梁間2間、桁行2間の南北棟で、柱間は梁間1.8m、桁行2.0m。V類。

SB41

方形掘形を有するものを含め、南北3間分の柱穴を検出した。塀の可能性もある。II類。

SB42

梁間1間以上、桁行2間以上。VI類。

(4) 本調査南区

北区と道路を隔てた南に隣接する、公園予定地 840.0 m²に設定した調査区である。また、周囲の試掘、確認調査第 28～第 30 トレンチを含めた総調査面積は 1,290.0 m²になる。

耕作溝

第3層～第5層上面の各面で、調査区全域にわたって縦横に開削されていた。いずれも正方位を指向しており、条里地割を意識したものと思われる。

掘立柱建物群

先述の2調査区と同様に、軸線方向によって6タイプに分けることができる。

SB43

梁間2間、桁行5間の東西棟で、柱間は梁間、桁行ともに2.0m。柱穴掘形は方形、最大で一辺1.2m。V類。

SB44

梁間2間、桁行2間の東西棟で、柱間は梁間1.8m前後、桁行2.0m。南面は1間になっている。柱穴の掘形は方形で、一辺1.0mのものが最大。VI類。

SB45

梁間1間、桁行2間の東西棟で、柱間は梁間3.8m、西1間が3.6m、東1間は約3.0m。IV類。

SB46

梁間2間、桁行3間の東西棟で、柱間は梁間1.8m前後、桁行2.0m。IV類。

SB47

2間×2間、柱間は東西、南北ともに2.0m。V類。

SB48

梁間2間、桁行3間の東西棟で、柱間は梁間1.6m、桁行2.0m。SB47に附属する庇あるいは隠し扉と考えられる。V類。

SB51

梁間1間、桁行2間の東西棟で、柱間は梁間、桁行ともに2.4m。IV類。

SB52

梁間1間、桁行2間の南北棟で、柱間は梁間2.8m、桁行2.0m。V類。

SB53

梁間2間、桁行3間の南北棟で、間仕切りが付く。柱間は梁間、桁行ともに2.0m。桁行V類。

SB54

2間×2間、柱間は1.6m～2.0m。IV類。

SB55

南北2間分を確認した。柱間は3.2m、扉と考えられる。III類。

SB56

東西4間分を検出した。柱間は2.8m～3.6m、塀と考えられる。Ⅲ類。

SB57

梁間1間以上、桁行3間の南北棟と思われる。柱間は梁間は不明、桁行は2.0m。V類。

井戸

古墳時代後期のものを4基検出した。

区画溝

北区および中央区から延伸してくるものに加え、新たに1条を検出した。出土遺物が北区、中央区と同様の傾向を示すことから、これらは5世紀後半から6世紀中頃に比定され、古墳時代後期の建物に伴う区画溝と考えられる。

第28 トレンチ

南北6.0m、東西19.0mの東西トレンチである。東半でSR03の延伸部を検出し、埋土中から須恵器がまとまって出土した。他に溝、柱穴を確認した。

第29 トレンチ

東西4.0m、南北55.0mの南北トレンチ。トレンチ北端でSR03の延伸を確認した。古墳時代の遺物を含む黒褐色粘質土の下層に、縄文土器を包含する砂層が堆積する。トレンチ中央東半では、現在の山崎川に向かう落込みを検出し、盛土による整地を確認した。

第30 トレンチ

本調査南区の南中央から南へ延伸した、東西6.0m、南北20.0mの南北トレンチ。中央部でSR03の西端を検出した。

(5) 本調査北西区

第31～第34 トレンチ

本調査北区の北西に位置する外区道路敷設予定地に設定した。第31トレンチは南北トレンチ、第32、第33、第34トレンチは東西トレンチである。各トレンチとも、縦横に走る耕作溝以外に顕著な遺構は存在しないが、第32トレンチにおいて南東から北西へ流れる幅1.0mのSD16を確認し、第34トレンチ北東隅の落込みから遺物が出土した。周辺調査区で検出しているSR13の下流部分と推定されたため、両トレンチ間を拡張調査した。その結果、落込みは流路であり、古墳時代前期に比定される古式土師器の甕を含む堆積土、古墳時代後期の須恵器杯を含む堆積土、縄文土器を含む堆積土によって埋没していることが明らかになった。なお、第32、第34トレンチの北東側636.0㎡について、本調査北西区として本調査を実施した。

第36 トレンチ

東西4.0m、南北25.0mの南北トレンチ。基本層序は、第1層が表土(耕作土)で層

厚 0.2m、第Ⅱ層は床土で厚さ 0.1m、部分的に存在する第Ⅲ層は層厚 0.15m、第Ⅳ層は厚さ 0.2mである。基盤層である第Ⅴ層には、地表面から 0.5m掘削したところで到達した。この第Ⅴ層を遺構面として調査を行い、幅 0.3m～0.7m、深さ 0.1m～0.3mで、東西 43 条、南北 6 条の耕作溝群を検出した。他に、黒褐色粘質土を埋土とするビットなど古代の遺構を数基検出している。

SD17

トレンチ中央で検出した、幅 2.6m、長さ 12.5mの溝である。西から北東方向へ流下しており、古墳時代から平安時代にかけて機能していたと考えられる。

第 37 トレンチ

東西 4.0m、南北 15.0mの南北トレンチで、基本層序は第 36 トレンチと同様である。幅 0.3m～0.7m、深さ 0.1m～0.3mの耕作溝を東西 28 条、南北 4 条検出した。また、SD18 が南東から北西方向に蛇行して走ることを確認した。この溝は、第 36 トレンチで検出した SD17 の延長にあたる。

SD19

幅 2.8m、距離 4.5m分を検出した。

2 遺物

(1) 第 25～第 27・第 35 トレンチ

第 27 トレンチ

SE05

須恵器のみ出土している。

406 は壺で、残存率 80%、口径 19.1 cm、器高 30.1 cmである。口縁端部はわずかに上下に突出し、外反する頸部は非常に短い。肩部はほとんど振らず、全体的に丸みを帯びている。頸部から胴部中央までカキ目を施し、胴部外面は平行叩き目文の叩き板、内面は無文の当て具で調整されている。古墳時代後期のものと推定される。

SD09

407 は土師器鉢で、口径 21.4 cm、底径 8.5 cm、器高 13.4 cm、口縁部は外反し、底部は平底である。口縁部にヨコナデ、胴部外面に指オサエの後タテハケ、内面は口縁部から胴部上半にかけてヨコハケ、胴部下半に指オサエの後ナメハケを施す。また、煤が付着している。

SD10

須恵器、瓦器などが少量出土した。

405 は須恵器杯身で、下層から出土した。残存率 55%、口径 13.1 cm、器高 4.9 cmである。立ち上がりは内傾してやや短く伸び、端部は丸い。底部には反時計回りの回転ヘラケズリを施している。受部は鈍く、やや外上方へ短く伸びる。MT85 型式にあたると思われる。

(2) 本調査北区

第Ⅳ・Ⅴ層

403 はミニチュアの土師器碗で、口径 6.1 cm、器高 4.6 cm。手捏ねで成形され、体部外面に指オサエの後ナデ、体部内面にはナデを施す。

402 は土師器皿で、口径 8.6 cm、残存高 1.4 cm。口縁部にヨコナデ、体部外面に指オサエ、体部内面に指オサエの後ナデを施す。

404 は土製品で、最大幅は 7.7 cm、残存高が 5.1 cm である。宝珠のような形状を呈しており、装飾品と思われる。外面に指オサエの後ナデを施し、内面にはしぼり痕が残っている。

408 は鉄製品で、釘と推定される。全長 5.35cm、最大径 0.9cm である。

409 は鉄製品で、全長 5.3cm、最大幅 0.5cm である。

410 は緑色凝灰岩製の管玉である。全長 1.6cm、直径 0.5cm、孔径 0.1cm である。ほぼ完形と思われる。

411 は石帯で、残存率 20% である。表面および側面は研磨により光沢があるが、裏面は 4 箇所穿孔されるが、光沢があまりない。

耕作溝

412 は土師器皿で、口径 7.9 cm、器高 1.4 cm、口縁部にヨコナデ、体部外面に指オサエ、体部内面には指オサエの後ナデを施す。

413 は土師器皿で、口径 10.2 cm、器高 2.3 cm、口縁部にヨコナデ、体部外面に指オサエ、体部内面には指オサエの後ナデを施す。

414 は土師器皿で、口径 10.8 cm、器高 1.65 cm、口縁部にヨコナデ、体部内外面に指オサエの後ナデを施す。

415 は土師器皿で、口径 9.7 cm、器高 2.2 cm、口縁部にヨコナデ、体部外面に指オサエ、体部内面には指オサエの後ナデを施す。

416 は土師器皿で、口径 9.7 cm、器高 2.4 cm、口縁部にヨコナデ、体部外面に指オサエ、体部内面には指オサエの後ナデを施す。

417 は土師器皿で、口径 10.8 cm、器高 2.6 cm、口縁部にヨコナデ、体部外面に指オサエ、体部内面には指オサエの後ナデを施す。

418 は黒色土器 A 類碗で、底径 8.8 cm、残存高 1.7 cm、底部のみ残存している。外面にナデ、内面にミガキを施し、底に高台を貼り付ける。

419 は黒色土器 A 類碗で、底径 7.8 cm、残存高 1.5 cm、底部のみ残存している。外面にナデ、内面に平行ミガキおよび連弧状の暗文ミガキを施し、底に高台を貼り付ける。

420 は瓦器碗で、口径 9.7 cm、残存高 10.4 cm、口縁部にヨコナデ、体部外面に指オサエ、体部内面には指オサエの後ナデを施す。

421 は瓦器碗で、底径 4.0 cm、残存高 2.3 cm、底部のみ残存している。外面に指オサエ、内面に圓線状ミガキ、見込みに平行ミガキおよび放射線状ミガキを施し、底に高台を貼り付ける。

422 は土師器土釜で、口径 15.0 cm、残存高 2.3 cm、口縁部は外反し、端部が肥厚する。また、口縁部にヨコナデを施す。

423 は土師器土釜で、口径 15.3 cm、残存高 3.5 cm、口縁部は外反し、端部が肥厚する。また、口縁部にヨコナデ、胴部は内外面にナデを施す。

424 は土馬の前右脚と思われる。残存長 9.4 cm、径 2.7 cm、先端に刻みを入れ、蹄を表現している。

425 も土馬の脚部と考えられる。残存長 3.9 cm、径 2.6 cm、刻みによって蹄が表現されている。

SK06

438 は土師器杯で、口径 13.9 cm、器高 4.2 cm。口縁部にヨコナデ、体部は外面に指オサエの後ナデ、内面にナデを施す。

SK07

434 は土師器皿で、口径 14.5 cm、残存高 1.3 cm、口縁部にヨコナデ、体部外面に指オサエの後ナデ、体部内面にナデを施す。

433 は土師器皿で、口径 14.3 cm、残存高 3.6 cm、口縁部にヨコナデ、体部内外面に指オサエの後ナデを施す。

SK08

436 は黒色土器A類碗で、口径 19.6 cm、残存高 7.8 cm、底部のみ残存している。外面にナデ、内面にミガキを施し、高台を貼り付ける。

SK10

440 は土師器小型丸底壺で、口径 8.8 cm、残存高 7.0 cm、胴部を欠損している。口縁部はくの字状、胴部は球形を呈する。口縁部にヨコナデ、胴部内外面にケズリを施す。

SK12

435 は土師器杯で、口径 13.9 cm、器高 4.8 cm、口縁部は外反する。口縁部にヨコナデ、体部外面にタテハケ、体部内面にはナデを施す。

443 は碗形製塩土器で、口径 6.7 cm、器高 3.5 cm。口縁部にヨコナデ、体部外面にケズリ、体部内面に指オサエの後ナデを施す。

SK18

441 は土師器高杯で、底径 9.6 cm、残存高 7.0 cm、脚部のみ残存している。外面に面取り、内面に指オサエ、底部外面にナデを施し、内面にしぼり痕が残る。

442 は土師器甕で、口径 14.9 cm、器高 21.0 cm、口縁部が外傾し、胴部は扁球形を呈する。口縁部にヨコナデ、胴部外面に指オサエの後タテハケ、下半にはナメハケ、胴部内面に指オサエの後ナメハケを施す。

SK21

439 は土師器鉢で、口径 18.0 cm、残存高 6.8 cm、残存率 10%である。口縁部にヨコナデ、胴部外面にタテハケ、胴部内面にケズリを施す。吉備系、布留型式に比定される。

SE08

426～432 は土師器、437、444～447 は黒色土器である。

426 は土師器皿で、口径 13.2 cm、器高 2.8 cm、口縁部にヨコナデ、体部外面に指オサエ、体部内面に指オサエの後ナデを施す。

427 は土師器皿で、口径 13.4 cm、器高 2.8 cm、口縁部にヨコナデ、体部外面に指オサエ、体部内面に指オサエの後ナデを施す。

428は土師器皿で、口径12.6cm、器高3.0cm、口縁部にヨコナデ、体部外面に指オサエ、体部内面に指オサエの後ナデを施す。

429は土師器皿で、口径12.8cm、器高2.7cm、口縁部にヨコナデ、体部外面に指オサエ、体部内面に指オサエの後ナデを施す。

430は土師器皿で、口径13.4cm、器高3.1cm、残存率25%、口縁部にヨコナデ、体部外面に指オサエ、体部内面に指オサエの後ナデを施す。

431は土師器皿で、口径12.8cm、器高2.3cm、口縁部にヨコナデ、体部外面に指オサエ、体部内面に指オサエの後ナデを施す。

432は土師器皿で、口径12.0cm、器高2.4cm、残存率5%、口縁部にヨコナデ、体部外面に指オサエ、体部内面に指オサエの後ナデを施す。

437は黒色土器A類碗で、口径13.7cm、器高6.5cm、口縁部にヨコナデ、外面にミガキ、体部下半には指オサエおよびナデ、体部内面にミガキを施す。

444、445は黒色土器A類碗で、444は口径15.9cm、底径7.6cm、器高5.3cm、445は口径15.3cm、底径8.3cm、器高4.5cm。口縁部にヨコナデ、体部は外面にナデ、内面にヨコミガキおよび平行ミガキを施し、底に高台を貼り付ける。

446は黒色土器A類碗で、口径14.3cm、底径7.2cm、器高4.3cm。口縁部にヨコナデ、体部外面にナデ、体部内面にヨコミガキを施し、底に高台を貼り付ける。

447は黒色土器B類碗で、口径13.3cm、底径6.7cm、器高4.9cm。口縁部にヨコナデ、体部外面にナデの後ミガキ、体部内面にヨコミガキを施し、底に高台を貼り付ける。

SE09

450は土師器杯で、口径17.6cm、器高3.7cm、口縁端部が肥厚する。口縁部にヨコナデ、体部外面にケズリ、体部内面にナデの後、放射線状および連弧状の暗文を施す。また、黒漆が付着している。

451は土師器杯で、口径12.9cm、器高4.4cm、口縁部にヨコナデ、体部は外面に指オサエ、内面に指オサエの後ナデを施す。

SE11

448は土師器皿で、口径10.1cm、器高2.1cm、口縁部は「て」字状を呈する。口縁部にヨコナデ、体部外面に指オサエ、体部内面にナデを施す。

449は土師器皿で、口径14.4cm、器高2.3cm、口縁部にヨコナデ、体部内外面にナデを施す。

454は土師器羽釜で、口径22.6cm、残存高2.8cm、口縁部のみ残存している。口縁部は外反して端部が肥厚し、外面にヨコナデを施す。また、煤が付着している。

452は瓦器皿で、口径19.6cm、残存高1.7cm、口縁部にヨコナデ、体部は外面に指オサエ、内面に圈線状ミガキ、見込みに鋸歯状の暗文ミガキを施す。

453は瓦器碗で、口径19.6cm、残存高7.8cm、底部のみ残存している。外面にナデ、内面に圈線状ミガキ、見込みに連弧状の暗文ミガキを施し、底に高台を貼り付ける。

SE12

455は土師器壺で、口径16.4cm、残存高27.0cm、内湾する口縁部は端部が肥厚し、胴部は球形を呈する。口縁部外面にヨコナデ、内面にヨコハケ、胴部は外面にタテハ

ケの後ヨコハケ、下半のみナメハケ、内面に指オサエの後ケズリを施す。また、煤が付着している。

区画溝

本調査北区、中央区、および南区の全てで検出された溝である。これらは時期差を伴いながら建物を区画していたと考えられる。遺物は須恵器、土師器などが出土しており、古墳時代後期のものが多い。須恵器は杯蓋、杯身、高杯蓋、有蓋高杯、無蓋高杯、壺、甕、台付把手付碗などが出土している。

SD21

456は須恵器杯蓋で、残存率95%、口径11.6cm、器高が4.5cmである。内に傾斜する端部はほぼ平らで、浅い沈線が施される。稜はやや鋭く、突出して段を成している。天井部の広範囲に反時計回りの回転ヘラケズリが施されている。全体的に分厚く、TK23型式のものと考えられる。

457は須恵器杯蓋で、残存率95%、口径13cm、器高が4.9cmである。端部は外側が尖り、稜は鋭く、突出して段を成している。天井部には広範囲に反時計回りの回転ヘラケズリが施されている。TK23型式のものと考えられる。

458は須恵器杯蓋で、残存率80%、口径13.2cm、器高が4.8cmである。内に傾斜する端部は平らに仕上げられ、鋭い。稜はやや鋭く、突出している。天井部の広範囲に時計回りの回転ヘラケズリが施されている。TK23型式のものと考えられる。

459は須恵器杯蓋で、残存率60%、口径11.25cm、器高が4.0cmである。内に傾斜する端部には沈線が施すが、平らに近い断面形を呈する。稜はやや鋭く、突出している。天井部の広範囲に反時計回りの回転ヘラケズリが施されている。TK47型式のものと考えられる。

461はほぼ定形の須恵器杯身で、口径10.6cm、器高が3.95cmである。立ち上がりはやや長く、ほぼ垂直に伸び、端部はやや内傾して平らである。底部には時計回りの回転ヘラケズリを施しており、受部はやや長く、外上方へ伸び、鋭い。TK208型式と考えられる。

462はほぼ定形の須恵器杯身で、口径10.6cm、器高が4.4cmである。立ち上がりはほぼ垂直で、やや長く伸び、端部はやや内傾して平らである。底部には反時計回りの回転ヘラケズリを施しており、受部はやや長く、水平に伸び、鋭い。TK208～TK23型式と考えられる。

463はほぼ定形の須恵器杯身で、口径10.9cm、器高が5.3cmである。立ち上がりは垂直に長く伸び、端部はやや内に傾斜して平らである。底部には時計回りの回転ヘラケズリが施されており、受部は水平に長く伸び、やや鋭い。TK23型式と考えられる。

464は須恵器杯身で、残存率70%、口径10.8cm、器高が5.3cmである。立ち上がりは垂直で、やや長く伸びる。端部はやや内傾して平らであるが、やや鈍い印象を受ける。底部には時計回りの回転ヘラケズリを施しており、受部は短く、水平に伸びるが鈍い。TK47型式と考えられる。

SD23

467は土師器高杯で、口径21.3cm、残存高8.7cm。杯部のみ残存しており、口縁部は外反する。口縁部にヨコナデ、杯部内外面にナデを施す。

SD25

460 は須恵器杯蓋で、残存率 25%、復元口径 11.2 cm、残存高 3.5 cm である。口縁端部と体部の間は屈曲するが、稜、沈線ともに確認できない。天井部には粗い回転ヘラケズリの後ナデを施し、宝珠つまみは付されていない。飛鳥時代のもつと推定される。

SD28

465 は土師器高杯で、口径 16.4 cm、残存高 5.3 cm、杯部のみ残存している。口縁部にヨコナデ、胴部外面にヨコハケ、胴部内面にはナデを施す。

466 は土師器高杯で、口径 16.2 cm、残存高 6.0 cm、杯部のみ残存しており、口縁端部が突出する。口縁部にヨコナデ、胴部内外面にナデを施す。

468 は手捏ねの土師器壺で、残存高 8.0 cm、口縁部を欠損しており、胴部は扁球形を呈する。口縁部にヨコナデ、胴部外面はケズリの後ハケ、胴部内面に指オサエ、底部外面には指オサエの後ケズリを施す。

469 は土師器壺で、口径 15.8 cm、器高 14.2 cm、口縁部が外反し、胴部は球形を呈する。口縁部にヨコナデ、胴部外面にナデ、胴部内面には指オサエを施す。また、煤が付着している。

470 は土師器甕で、口径 13.8 cm、残存高 5.7 cm、口縁部は外反する。口縁部にヨコナデ、胴部外面にタテハケ、胴部内面には指オサエの後ナデを施す。

471 は土師器甕で、口径 20.0 cm、残存高 9.7 cm、口縁部はくの字状を呈し、端部が肥厚する。口縁部にヨコナデ、胴部外面にヨコハケ、胴部内面にナデを施す。

472 は土師器甕で、口径 18.3 cm、残存高 14.0 cm、くの字状の口縁部は端部が肥厚し、胴部は球形を呈する。口縁部にヨコナデ、胴部外面にタテナメハケ、胴部内面に指オサエを施す。また、煤が付着している。

488 は土師器甕で、口径 23.0 cm、残存高 8.6 cm、口縁部はくの字状を呈し、端部が肥厚する。口縁部にヨコナデ、胴部外面にハケ、胴部内面にはナデを施す。

490 は土師器甕で、口径 22.8 cm、残存高 8.3 cm、口縁部はくの字状を呈し、端部が肥厚する。口縁部にヨコナデ、胴部外面にヨコハケ、胴部内面には指オサエを施す。

475 は完形の須恵器杯蓋で、口径 13.6 cm、器高が 4.8 cm である。端部は内に傾斜して平らに仕上げられ、鋭い印象を受ける。稜は非常に鋭く、突出している。天井部には反時計回りの回転ヘラケズリが施されている。TK23 型式のもつと考えられる。

481 は須恵器杯身で、残存率 95%、口径 11.1 cm、器高が 4.9 cm である。立ち上がりは垂直に長く伸び、端部には沈線が施され、やや鋭い印象を受ける。底部には反時計回りの回転ヘラケズリを施しており、受部は長く、ほぼ水平に伸び、鋭い。TK23 型式と考えられる。

SD31

489 は土師器甕で、口径 9.7 cm、器高 12.2 cm、口縁部はくの字状を呈する。口縁部にヨコナデ、胴部外面に指オサエの後タテハケ、胴部内面には指オサエを施す。

480 は須恵器杯身で、残存率 50%、復元口径 10.3 cm、器高が 4.8 cm である。立ち上がりは内傾してやや長く伸び、端部には沈線が施されるが、鈍い印象を受ける。底部には反時計回りの回転ヘラケズリを施しており、受部は長く、外上方に伸び、鋭い。TK47 型式と考えられる。

SD33

476 は須恵器杯蓋で、残存率 45%、復元口径 12.6 cm、器高が 4.55 cm である。端部はわずかに尖っているが、鈍い印象を受ける。稜はやや鋭く、突出して段を成している。天井部には時計回りの回転ヘラケズリが施されている。TK23 型式のものと考えられる。

SD34

491 は土師器、477、482、483 は須恵器である。

491 は土師器甕で、口径 19.6 cm、残存高 7.8 cm、口縁部は外反する。口縁部にヨコナデ、胴部は外面にヨコハケ、下半のみナメハケ、内面に指オサエの後ナデを施す。

477 は高杯蓋で、残存率 45%、復元口径 12.4 cm、器高 5.3 cm で扁平なつまみが付されている。端部は丸く取められ、稜はわずかに突出しているが、非常に鈍い。天井部に時計回りの回転ヘラケズリが施されている。MT15 型式のものと考えられる。

482 は杯身で、残存率 60%、復元口径 10.4 cm、器高が 5.2 cm である。立ち上がりはやや内傾して長く伸び、端部は平らに仕上げられている。底部には時計回りの回転ヘラケズリを施しており、受部は長く、外上方へ伸び、鋭い印象を受ける。TK23 型式と考えられる。

483 は有蓋高杯であるが、脚部を欠損している。口径は 10.9 cm、残存高 5.3 cm で、脚部は 3 方向透かしである。杯部の立ち上がりはやや内傾してやや長く伸び、端部は平らであるが、浅い沈線が施されている。受部は非常に短く、水平に伸びる。底部は時計回りの回転ヘラケズリで調整される。TK23 型式と推定される。

SD35

486 はミニチュアの土師器壺で、残存高 3.4 cm、口縁部を欠損している。手捏ねで成形されており、胴部内外面に指オサエを施す。

487 は土師器杯で、口径 11.9 cm、器高 5.5 cm。口縁部にヨコナデ、体部外面に指オサエ、体部内面にはナデを施す。

492 は土師器甕で、口径 22.8 cm、残存高 8.3 cm、口縁部は外面にヨコナデ、内面にヨコハケ、胴部は外面にタテハケ、内面には指オサエの後ケズリを施す。

484 は製塩土器で、口径 6.0 cm、器高 6.2 cm、口縁部にヨコナデ、胴部外面に指オサエおよびナデ、胴部内面に指オサエの後ケズリを施す。

485 は製塩土器で、口径 5.0 cm、器高 6.0 cm、胴部外面にタタキおよび指オサエ、胴部内面に指オサエおよびナデを施す。

473 は須恵器杯蓋で、残存率 95%、口径 12.8 cm、器高が 5.2 cm である。端部は浅い沈線を施し、稜はやや鋭く、突出して段を成している。天井部は反時計回りの回転ヘラケズリで調整される。TK23 型式のものと考えられる。

474 は須恵器杯蓋で、残存率 80%、口径 12.0 cm、器高が 4.4 cm である。端部にはやや浅い沈線が施され、稜はやや鋭く、わずかに突出している。天井部には時計回りの回転ヘラケズリが施されている。TK23～TK47 型式のものと考えられる。

478 は完形の須恵器杯身で、口径 10.8 cm、器高が 4.8 cm である。立ち上がりはやや内傾して長く伸び、端部は内に傾斜し、平らである。底部には時計回りの回転ヘラケズリを施しており、非常に長く伸びる受部は水平で鋭い。TK208～TK23 型式と考えら

れる。

479 は須恵器杯身で、残存率 90%、口径 11.0 cm、器高が 5.2 cm である。立ち上がりは垂直に長く伸び、端部はやや内傾して平らであるが、浅い沈線を施している。底部には時計回りの回転ヘラケズリを施しており、水平に伸びる受部はやや長く、鋭い印象を受ける。TK23 型式と考えられる。

SD36

493 は須恵器杯身で、残存率 80%、口径 10.9 cm、器高が 5.1 cm である。立ち上がりはやや内傾して長く伸び、端部もまた内傾して平らであるが、浅い沈線を施している。底部には時計回りの回転ヘラケズリを施しており、水平に伸びる受部はやや短く、鈍い印象を受ける。TK23 型式と考えられる。

SD38

494～516、520～525 は土師器、526～558 は須恵器、517～519 は製塩土器、559 は石製品である。

494 は土師器高杯で、口径 15.4 cm、残存高 5.3 cm、杯部のみ残存している。口縁部にヨコナデ、杯部外面には指オサエの後タテハケ、杯部内面にナデを施す。

495 は土師器高杯で、口径 16.7 cm、残存高 5.4 cm、口縁端部が外に突出する。口縁部にヨコナデ、杯部外面に指オサエの後ナデ、内面にナデを施す。

496 は土師器高杯で、底径 10.6 cm、残存高 10.3 cm、脚部のみ残存している。杯部は外面をタテハケ、内面をナデで調整する。脚部は外面に面取りを施し、内面にはしぼり痕が残る。また、脚底部内面に指オサエの後ハケを施す。

497 は土師器高杯で、底径 10.6 cm、残存高 8.0 cm、脚部のみ残存している。杯部外面にタテハケ、杯部内面にナデ、脚部内面に指オサエを施す。脚部外面を面取りし、内面にはしぼり痕が残る。

498 は土師器高杯で、底径 10.7 cm、残存高 7.6 cm、脚部のみ残存している。外面に面取り、内面に指オサエを施し、しぼり痕が残る。

499 は土師器高杯で、底径 10.1 cm、残存高 6.5 cm、脚部のみ残存している。外面に面取りを施し、内面にはしぼり痕が残る。脚底部内面には指頭圧痕を確認することができる。

500 は土師器高杯で、底径 18.6 cm、残存高 8.6 cm、脚部のみ残存している。外面に面取り、底部内面にヨコハケを施す。また、内面にはしぼり痕が残る。

501 は土師器高杯で、底径 9.7 cm、残存高 7.0 cm、脚部のみ残存している。外面に面取り、底部内面に指オサエの後ナデを施す。また、内面にはしぼり痕が残る。

502 は土師器碗で、口径 12.5 cm、器高 4.3 cm、口縁部にヨコナデ、体部外面に指オサエの後ナデ、体部内面にナデを施す。

503 は土師器碗で、口径 12.5 cm、器高 5.1 cm、口縁部にヨコナデ、体部内外面にナデを施す。

504 は土師器碗で、口径 10.9 cm、器高 5.9 cm、口縁部にヨコナデ、体部内外面にナデを施す。

505 は土師器碗で、口径 12.6 cm、残存高 4.9 cm、口縁端部は外に突出する。口縁部外面にヨコナデ、内面にハケ、体部は外面に指オサエの後ナデ、内面にナデを施す。

506は土師器碗で、口径13.2cm、器高5.9cm、口縁端部は外に突出する。口縁部にヨコナデ、体部は内外面ともに指オサエの後ナデを施す。

507は土師器碗で、口径13.0cm、現存高6.0cm、口縁部にヨコナデ、体部は外面に指オサエの後ナデ、内面に指オサエの後ヨコハケを施す。

508は土師器鉢で、口径9.4cm、器高8.0cm、口縁部が外傾し、胴部は球形を呈する。口縁部にヨコナデ、胴部外面にタテハケおよびヨコハケ、胴部内面には指オサエを施す。

509は手捏ねの土師器鉢で、口径10.0cm、器高6.3cm、口縁部は直立し、底部は平底を呈する。口縁部にヨコナデ、胴部外面に指オサエ、底部は外面にケズリ、内面に指オサエを施す。

510は土師器直口壺で、残存高10.0cm、口縁部を欠損しており、胴部は扁球形を呈する。口縁部にヨコナデ、胴部は内外面に指オサエおよびナデを施す。

511は土師器直口壺で、口径8.5cm、器高14.7cm、口縁部が外傾し、胴部は球形を呈する。口縁部にヨコナデ、胴部外面にハケの後ナデ、胴部内面に指オサエおよびナデを施す。

512は土師器直口壺で、口径9.8cm、器高12.2cm、口縁部が外傾し、胴部は扁球形を呈する。口縁部は外面にヨコナデ、内面にヨコハケ、胴部は外面にヨコハケ、下半のみナデ、内面には指オサエおよびナデ、下半のみハケを施す。

513は土師器甕で、口径11.6cm、残存高11.1cm、口縁部が外傾し、胴部は球形を呈する。口縁部にヨコナデ、胴部外面にタテハケ、胴部内面には指オサエの後ナデを施す。

514は土師器甕で、口径12.3cm、器高15.1cm、くの字状の口縁部は端部が肥厚し、胴部は球形を呈する。口縁部にヨコナデ、胴部外面には指オサエおよびハケ、胴部内面に指オサエの後ナデを施す。

515は土師器甕で、口径11.6cm、残存高11.1cm、くの字状の口縁部は端部が肥厚し、胴部は球形を呈する。口縁部にヨコナデ、胴部外面にハケ、胴部内面には指オサエおよびナデを施す。

516は土師器甕で、口径19.0cm、残存高8.4cm、口縁部は内湾する。口縁部にヨコナデ、胴部外面にナデ、胴部内面にケズリを施す。

520は土師器甕で、口径11.2cm、残存高11.8cm、口縁部はくの字状を呈する。口縁部にヨコナデ、胴部外面に指オサエおよびハケ、胴部内面に指オサエの後ケズリを施す。

522は土師器甕で、口径16.5cm、残存高6.8cm、口縁部は外反する。口縁部にヨコナデおよびヨコハケ、胴部内外面にナデを施す。

521は土師器甕で、口径21.3cm、残存高13.4cm、口縁部は外反する。口縁部にヨコナデ、胴部外面にタテハケ、胴部内面には指オサエの後ナデを施す。

523は土師器甕で、口径18.6cm、残存高10.0cm、口縁部は受け口状を呈する。口縁部にヨコナデ、胴部外面にヨコハケおよびナメハケ、胴部内面に指オサエの後ナデを施す。

524は土師器台付長胴甕で、口径12.6cm、底径10.0cm、器高26.3cm、口縁部がく

の字状を呈し、底に脚台がつく。口縁部にヨコナデ、胴部は外面に粗いナメハケ、下半のみタテハケ、内面にはナデ、脚台部外面に指オサエの後ナデ、脚台部内面にはケズリを施す。

525 は土師器甕で、口径 28.7 cm、残存高 17.6 cm、口縁部は外反し、端部が肥厚する。口縁部にヨコナデ、胴部外面に指オサエの後ナデ、胴部内面に指オサエおよびナデを施す。また、煤が付着している。

517 は製塩土器で、口径 3.0 cm、残存高 6.0 cm、胴部内外面に指オサエを施す。

518 は製塩土器で、口径 4.2 cm、残存高 5.4 cm、胴部外面にナデ、胴部内面には指オサエおよびナデを施す。

519 は製塩土器で、口径 4.2 cm、残存高 5.5 cm、胴部外面にタタキ、胴部内面にナデを施す。

526 は杯蓋で、残存率 60%、復元口径 13.0 cm、器高が 4.5 cm である。端部は屈曲し、外側へ突出している。稜は鋭く、突出して段を成している。天井部には反時計回りの回転ヘラケズリが施されているが、TK208 型式のものと考えられる。

527 は完形の杯蓋で、口径 13.0 cm、器高が 4.9 cm である。端部に沈線を施し、稜はやや鋭く、突出して段を成している。天井部には時計回りの回転ヘラケズリが施されている。TK23 型式のものと考えられる。

528 は杯蓋で、残存率 60%、口径 12.0 cm、器高が 4.4 cm である。端部はわずかに内傾して平らな断面形を呈し、稜は鋭く、突出して段を成している。天井部には時計回りの回転ヘラケズリが施されている。TK23 型式のものと考えられる。

529 は杯蓋で、残存率 80%、口径 11.5 cm、器高が 4.7 cm である。内に傾斜する端部には沈線を施し、稜は鋭く、突出して段を成している。天井部には時計回りの回転ヘラケズリが施されている。TK23 型式のものと考えられる。

530 は完形の杯蓋で、口径 12.4 cm、器高が 4.8 cm である。端部は内に傾斜して平らであるが、やや外側へ突出し、稜はやや鈍く、突出している。天井部には時計回りの回転ヘラケズリが施されている。TK23 型式のものと考えられる。

531 は杯蓋で、残存率 75%、口径 11.8 cm、器高が 4.75 cm である。端部は内に傾斜して平らな断面形を呈し、稜は鋭く、突出して段を成している。天井部には時計回りの回転ヘラケズリが施されている。TK23～TK47 型式のものと考えられる。

532 は杯蓋で、ほぼ完形である。口径 12.3 cm、器高が 5.05 cm、やや内に傾斜する端部は平らで、稜は鋭く、突出して段を成している。天井部には時計回りの回転ヘラケズリが施されている。TK23～TK47 型式のものと考えられる。

533 は杯蓋で、残存率 95%、口径 12.3 cm、器高が 4.2 cm である。端部に浅い沈線が施され、稜は鈍く、突出していない。天井部には時計回りの回転ヘラケズリが施されている。TK47 型式のものと考えられる。

534 は杯蓋で、残存率 80%、口径 12.2 cm、器高が 5.05 cm である。内に傾斜する端部はほぼ平らで、稜は鈍く、あまり突出していない。天井部には反時計回りの回転ヘラケズリが施されている。TK47 型式のものと考えられる。

535 は杯蓋で、残存率 60%、口径 12.9 cm、器高が 4.8 cm である。端部はほぼ平らであるが、甘い印象を受ける。ほとんど突出しない稜は鈍く、直下の沈線によって表現

される。天井部には反時計回りの回転ヘラケズリが施されている。MT15 型式のものと考えられる。

536 は杯身で、残存率 70%、口径 10.7 cm、器高 4.9 cm である。外反する立ち上がりはほぼ垂直に長く伸び、鋭い端部はほぼ丸く収めらる。底部には時計回りの回転ヘラケズリを施している。受部はやや長く、ほぼ水平に伸び、鋭い。ON46 型式と推定される。

537 は杯身で、残存率 95%、口径 11.5 cm、器高が 5.5 cm である。立ち上がりは垂直に長く伸び、端部は外側につまみ上げられる。底部には反時計回りの回転ヘラケズリを施しており、受部は短く、ほぼ水平に伸び、鈍い。TK208~TK23 型式と考えられる。

538 は杯身で、残存率 90%、口径 9.9 cm、器高が 5.6 cm である。立ち上がりは長く、わずかに内傾しながら伸び、端部は平らであるが、浅い沈線が施されている。底部には反時計回りの回転ヘラケズリを施しており、受部はやや長く、水平に伸び、やや鋭い印象を受ける。TK23 型式と考えられる。

539 は杯身で、残存率 80%、口径 10.4 cm、器高が 5.0 cm である。立ち上がりは長く、垂直に伸び、端部はほぼ水平で、平らに仕上げている。底部には時計回りの回転ヘラケズリを施しており、水平に伸びる受部は長く、鋭い印象を受ける。TK23 型式と考えられる。

540 は完形の杯身で、口径 11.2 cm、器高が 5.1 cm である。立ち上がりは長く、わずかに内傾しながら伸び、内に傾斜する端部は平らである。底部には時計回りの回転ヘラケズリを施しており、受部はやや長く、水平に伸び、やや鋭い印象を受ける。TK23 型式と考えられる。

541 は杯身で、残存率 70%、口径 10.3 cm、器高が 4.5 cm である。立ち上がりは短く、わずかに内傾しながら伸び、端部は平らであるが、浅い沈線が施される。底部には反時計回りの回転ヘラケズリを施しており、水平に伸びる受部は長く、やや鋭い印象を受ける。TK23 型式と考えられる。

542 は杯身で、残存率 80%、口径 10.8 cm、器高が 5.1 cm である。立ち上がりはやや長く、ほぼ垂直に伸び、端部には深い沈線が施されている。底部には時計回りの回転ヘラケズリを施しており、受部はやや短く、やや外上方へ伸び、やや鈍い印象を受ける。TK23 型式と考えられる。

543 は杯身で、残存率 95%、口径 11 cm、器高が 5.1 cm である。立ち上がりはやや長く、やや内傾しながら伸び、平らな端部は内に傾斜する。底部には反時計回りの回転ヘラケズリを施しており、受部は長く、ほぼ水平に伸び、鋭い印象を受ける。TK47 型式と考えられる。

544 は杯身で、残存率 80%、口径 9.5 cm、器高が 4.9 cm である。立ち上がりはやや長く、やや内傾しながら伸び、端部には沈線が施されている。底部には反時計回りの回転ヘラケズリを施しており、受部はやや長く、ほぼ水平に伸び、鋭い印象を受ける。TK47 型式と考えられる。

545 は杯身で、残存率 60%、復元口径 10.8 cm、器高 5.2 cm である。立ち上がりはやや長く、わずかに内傾しながら伸び、端部は内に傾斜して平らな断面形を呈する。底部には反時計回りの回転ヘラケズリを施しており、ほぼ水平に伸びる受部はやや短く、

やや鋭い印象を受ける。TK47 型式と考えられる。

546 は杯身で、残存率 75%、口径 11.8 cm、器高 5.5 cm である。立ち上がりは内傾し、端部は鈍い印象を受ける。底部には反時計回りの回転ヘラケズリが施され、受部は非常に長く、ほぼ水平に伸びている。MT15 型式のものと考えられる。

547 は杯身で、残存率 90%、口径 12.9 cm、器高 5.4 cm である。立ち上がりはやや短く、ほぼ垂直に伸び、端部はやや鋭いが丸い。底部には反時計回りの回転ヘラケズリを施しており、受部は長く、やや外上方へ伸びるが鈍い。MT15～TK10 型式にあたると考えられる。

548 は杯身で、残存率 65%、口径 12.6 cm、器高 4.5 cm である。ほぼ垂直に伸びる立ち上がりは非常に短く、端部は丸いがやや鋭い。底部には反時計回りの回転ヘラケズリを施しており、受部は短く、やや外上方へ伸びるが鈍い。TK10 型式にあたと考えられる。

549 は杯身で、残存率 60%、口径 12.4 cm、器高 4.6 cm である。立ち上がりはやや短く、ほぼ垂直に伸び、端部は丸いがやや鋭い。底部には反時計回りの回転ヘラケズリを施しており、受部は鈍く、やや外上方へ短く伸びる。TK10 型式にあたと考えられる。

550 は完形の杯身で、口径 12.5 cm、器高 3.4 cm である。内傾する立ち上がりは非常に短く、外反しながら伸び、端部は丸く収められている。底部には反時計回りの回転ヘラケズリを施しており、受部は短く、外上方へ伸び、鈍い。TK43 型式にあたと考えられる。

551 は有蓋高杯で、残存率 60%、口径 9.9 cm、底径 8.7 cm、器高 8.9 cm。脚部は短脚 3 方向透かしで、窓は方形である。杯部の立ち上がりは長く、内傾しながら伸び、端部はやや外側に突出して尖っている。受部はやや短く、水平に伸びるが鈍い。底部は時計回りの回転ヘラケズリで調整されている。脚端部は上下に鋭い稜を設け、段を成している。TK208～TK23 型式と推定される。

552 は有蓋高杯であるが脚部を欠損しており、口径 10.4 cm、残存高 5.3 cm である。脚部は 3 方向透かしで、杯部の立ち上がりはわずかに内傾してやや長く伸び、内に傾斜する端部はほぼ平らであるが、浅い沈線が施されている。受部は短く、水平に伸びている。底部は時計回りの回転ヘラケズリで調整されている。TK23 型式と推定される。

553 は有蓋高杯で、残存率 50%、口径 11.3 cm、底径 10.1 cm、器高 9.9 cm で、脚部は短脚で、3 方向に方形の透かし窓が穿たれている。杯部の立ち上がりは長く、やや内傾して伸び、端部には沈線が施される。受部はやや長く、水平に伸びるが鈍い。底部は反時計回りの回転ヘラケズリで調整されている。脚端部に突帯を設け、下方に加曲する。TK23～TK47 型式と考えられる。

554 は無蓋高杯で、残存率 75%、口径 15.8 cm、器高 11.1 cm である。杯部の口縁部は外上方へ向かって直線的に伸びるが、端部でわずかに外反している。また、杯部外面に 2 条の突帯を巡らせ、その間に波状文を施紋する。底部外面は回転ヘラケズリ、内面がロクロナデ、その他はヨコナデで調整されている。脚部は短脚 4 方向透かしで、方形の透かし窓が穿たれ、下方へ屈曲する端部は、やや甘い印象を受ける。調整は全てヨコナデである。また、十字のヘラ記号を確認することができる。TK208～TK23 型

式のものと考えられる。

555 は台付把手付碗で、口径 10.6 cm、底径 9.4 cm、器高 9.7 cm である。口縁部は垂直に立ち上がり、端部は内側に傾斜して平らであるが、非常に甘い印象を受ける。体部は漏斗状になっており、把手および円盤状の台が付されている。底部外面は未調整、底部内面はナデ、台の側面は横方向のケズリ、その他はヨコナデで調整されている。

556 は壺であるが、胴部を欠損している。残存率は 20%、口径 15.1 cm、残存高 7.5 cm である。口縁端部は上下に稜を持ち、突出して段を成す。この段付近に突帯を設け、頸部に波状文を施している。TK208 型式前後のものとして推定される。

557 は壺で、残存率 90%、復元口径 9.9 cm、器高 15.0 cm である。口縁端部は丸く収められ、鋭い。頸部に 2 条の突帯を設け、その間に波状文、下部にカキ目を施している。肩部はやや張っているが、全体的に丸みを帯びている。胴部に 2 条の沈線を描き、その間に列点文を施している。また、底部に重ね焼きの粘土が残る。TK23 型式前後のものとして推定される。

558 は甕で、残存率 20%、口径 20.4 cm、残存高 12.5 cm である。口縁部付近に突帯 1 条を付け、端部上下に鈍い稜を設ける。頸部は非常に短く、文様帯は施されない。また、肩部はほとんど張っていない。外面は平行叩き目文の叩き板で調整され、内面は同心円文の当て具痕をすり消していない。TK23～TK47 型式のものとして推定される。

559 は双孔円盤で、楕円形を呈していたと考えられる。孔は 1 つ残存しており、孔径 0.2 cm で、穿孔の際欠けたことが確認できる。

SR13

564 は須恵器杯蓋で、口径 11.6 cm、器高が 5.1 cm である。端部はやや尖り気味で、稜はやや鋭く、突出して段を成している。天井部には時計回りの回転ヘラケズリが施されている。また、体部にヘラ記号を描いている。TK47 型式のものと考えられる。

568 は須恵器杯蓋で、口径 15.2 cm、器高が 4.5 cm である。端部はほぼ丸いが、外側がやや尖る。稜はほぼ消滅しており、天井部には反時計回りの回転ヘラケズリが施されている。TK10 型式のものと考えられる。

573 は須恵器杯身で、残存率 80%、口径 11.9 cm、器高 5.2 cm である。立ち上がりは内傾し、端部は鈍い印象を受ける。底部には反時計回りの回転ヘラケズリが施され、受部はやや長く、ほぼ水平に伸びている。MT15 型式のものと考えられる。

574 は須恵器杯身で、口径 13.9 cm、器高 6.1 cm である。やや短い立ち上がりはやや内傾し、端部は丸い。底部には反時計回りの回転ヘラケズリを施しており、受部は非常に短く、やや外上方へ伸び、鈍い。TK10 型式にあたるものと考えられる。

570 は須恵器高杯蓋で、口径 15.95 cm、器高が 6.5 cm である。内に傾斜する端部はほぼ平らに仕上げられるが、鈍い印象を受ける。稜はやや鈍く、あまり突出していない。天井部には時計回りの回転ヘラケズリが施され、扁平なつまみが付されている。MT15 型式のものと考えられる。

577 は須恵器壺で、残存率 35%、口径 19.1 cm、残存高 17.9 cm である。口縁端部は低い段を成し、非常に短い頸部にはカキ目を施している。肩部はほとんど張っておらず、全体的に丸みを帯びている。胴部外面には平行叩き目文、内面には同心円文の当て具痕が残っている。TK10 型式前後のものとして推定される。

SR14

575 は須恵器杯身で、ほぼ完形。口径は 13.8 cm、器高 5.2 cm である。立ち上がりは内傾して短く伸び、端部は丸い。底部には反時計回りの回転ヘラケズリを施しており、受部は非常に鋭く、外上方へやや長く伸びる。TK10 型式にあたると考えられる。

578 は紡錘車で、直径 4.7 cm でそれぞれの端部は面取りを施している。中央に穿孔し、その径は 0.7 cm である。

SD39

563 は須恵器杯蓋で、残存率 90%、口径 12.6 cm、器高が 4.6 cm である。端部は内に傾斜し、沈線が描かれる。稜はやや鋭く、突出して段を成している。天井部には時計回りの回転ヘラケズリが施される。TK23 型式のものと考えられる。

565 は須恵器杯蓋で、残存率 90%、口径 12.9 cm、器高が 4.4 cm である。沈線が施される端部はやや鋭い印象を受け、稜はやや鋭く、突出して段を成している。天井部には時計回りの回転ヘラケズリが施されている。TK23 型式のものと考えられる。

566 は須恵器杯蓋で、残存率 80%、口径 11.9 cm、器高が 4.8 cm である。端部は内に傾斜し、ほぼ平らな断面形を呈する。稜は鋭く、突出している。天井部には反時計回りの回転ヘラケズリが施されている。TK47 型式のものと考えられる。

567 は須恵器杯蓋で、残存率 85%、口径 13.6 cm、器高が 4.2 cm である。端部はほぼ丸く、稜は完全に消滅しているが、口縁部と天井部の境界で屈曲している。天井部には反時計回りの回転ヘラケズリが施されている。MT85 型式のものと考えられる。

569 は須恵器杯蓋で、残存率 95%、口径 15.8 cm、器高が 4.5 cm である。端部はほぼ丸いが、外側がやや尖る。稜は完全に消滅しており、口縁部と天井部の境界が曖昧である。天井部には回転ヘラケズリが施されているが、一部未調整の部分もあり、粗雑である。TK10 型式のものと考えられる。

571 は須恵器杯身で、残存率 75%、口径 9.9 cm、器高が 4.6 cm である。立ち上がりはやや内傾して長く伸び、内に傾斜する端部はほぼ平らな断面形を呈するが、鈍い印象を受ける。底部には反時計回りの回転ヘラケズリを施しており、ほぼ水平に伸びる受部は短く、やや鈍い。また、底部外面にヘラ記号が描かれている。TK47 型式と考えられる。

572 はほぼ完形の須恵器杯身で、口径 10.7 cm、器高が 4.5 cm である。立ち上がりは長く、ほぼ垂直に伸び、端部は丸みを帯びて鈍い印象を受ける。底部には反時計回りの回転ヘラケズリが施され、短い受部はやや外上方に伸び、やや鈍い。TK47 型式と考えられる。

576 は須恵器杯蓋で、残存率 80%、口径 10.5 cm、器高 12.8 cm である。胴部と口縁部はほぼ同じ器幅で、壺と同形であるが穿孔はされていない。口縁端部は丸く仕上げられている。頸部は非常に短く、外傾して直線的に伸びる。2条の突帯を設け、その間に波状文を巡らせている。胴部は肩部の張りが弱く、丸みを帯び、上部はカキ目で調整されている。TK23 型式のものと思われる。

SR11

560 は土師器高杯で、底径 11.0 cm、残存高 8.4 cm、脚部のみ残存している。杯部内面にナゲ、脚部は外面に面取りを施す。また、内面は指オサエおよびヨコハケで調整

されるが、しぼり痕が残る。

561 は土師器高杯で、口径 21.3 cm、残存高 5.5 cm、杯部のみ残存している。外反する口縁部にヨコナデ、杯部内外面にナデを施す。

562 は土師器小型丸底甕で、口径 11.2 cm、残存高 6.4 cm、底部を欠損している。口縁部はくの字状を呈する。口縁部は外面にヨコナデ、内面にヨコハケ、胴部は外面にタテハケ、下半のみ細かいハケ、内面には指オサエの後ケズリを施す。

(3) 本調査南区

包含層

579 は土甕で、胴部のみ残存している。

580 は土鉢で、筒状を呈する。全長 5.2 cm、径 1.9 cm。

581 は石帯で、滑石製か礫土製と考えられ、形状は楕円形に近く一辺のみ直線の面をなしている。片方の面は 0.2cm ほどの穿った孔が確認できる。

柱穴

SP05

582 は黒色土器B類碗である。底径 6.8 cm、残存高 1.85 cm、底部のみ残存している。底部外面にナデ、内面見込みに連弧状の暗文を施し、底に高台を貼り付ける。

SP06

587 は土師器甕である。口径 20.7 cm、残存高 6.2 cm、口縁部がくの字状を呈し、端部は肥厚する。口縁部外面にヨコナデ、口縁部内面にはヨコハケ、胴部は外面にタテハケ、内面に板ナデを施す。

SP07

586 は土師器杯である。口径 17.6 cm、器高 2.1 cm、口縁部にヨコナデ、体部外面にナデ、体部内面にナデの後、放射線状暗文を施す。

SB56-SP01

583 は須恵器杯蓋である。口径 7.9 cm、器高 2.8 cm で宝珠つまみが付されている。口縁部と天井部の境界は不明瞭で、口縁部はわずかに外方へ屈曲し、端部は丸く取められている。また、口縁部内面のかえりはわずかに下方に伸びている。天井部には粗い回転ヘラケズリが施され、宝珠つまみの形は崩れていない。TK46 のものと考えられる。

SK24

589 は土師器甕で、口径 15.8 cm、残存高 8.2 cm、口縁部はくの字状を呈する。口縁部にヨコナデ、胴部外面にナデ、胴部内面に指オサエを施す。

590 は土師器甕で、口径 17.7 cm、残存高 7.8 cm、口縁部はくの字状を呈し、端部が肥厚する。口縁部にヨコナデ、胴部外面にハケ、胴部内面には指オサエを施す。

591 は土師器甕で、口径 14.3 cm、器高 22.1 cm。内湾する口縁部は、端部が肥厚し、胴部は扁球形を呈する。口縁部にヨコナデ、胴部は外面にナメハケ、内面には指オサエの後ケズリを施す。

592 は土師器甕で、口径 24.8 cm、残存高 10.2 cm、口縁部は内湾し、端部が肥厚する。口縁部にヨコナデ、胴部外面にナデ、胴部内面にケズリを施す。

SK32

588 は土師器甕で、口径 19.8 cm、残存高 5.8 cm。口縁部はくの字状を呈し、端部は肥厚する。口縁部外面にヨコナデ、口縁部内面にナナメハケ、胴部は外面にナナメハケ、内面にタテハケを施す。

SK36

584 は土師器皿で、口径 10.8 cm、器高 2.0 cm、口縁部は「 Γ 」字状を呈する。口縁部にヨコナデ、体部外面に指オサエ、体部内面には指オサエの後ナデを施す。

585 は土師器皿で、口径 10.6 cm、器高 1.7 cm。口縁部にヨコナデ、体部外面に指オサエ、体部内面にナデを施す。煤が付着していることから、灯明皿と考えられる。

SE13

600 は土師器碗で、口径 12.2 cm、器高 6.3 cm、口縁端部が外に突出する。口縁部にヨコナデ、体部は内外面に指オサエおよびナデを施す。

598 は土師器壺で、残存高 10.3 cm、胴部のみ残存している。胴部は球形を呈し、外面にナデ、外面下半にハケ、内面にナデ、内面下半に指オサエを施す。

605 はほぼ完形の須恵器高杯蓋で、口径 12.1 cm、器高が 5.6 cm、扁平なつまみが付されている。内に傾斜する端部はほぼ平らに仕上げられ、稜はやや鋭く、突出している。天井部には時計回りの回転ヘラケズリが施されている。TK23 型式のものと考えられる。

606 は須恵器甕で、残存率 80%、器高 10.9 cm である。二段口縁を呈し、端部は水平で、浅い沈線を施すがほぼ平らな断面形を呈する。頸部は短く、外傾して直線的に伸び、やや太い。肩部はやや強く張り、底部は尖らず丸みを帯びており、胴部は全体的に楕円形を呈する。頸部に波状文、胴部中央に列点文、および円孔透かしを施している。また、胴部に穿孔を施した後、同じ箇所を打ち欠いている。TK23 型式のものと思われる。

SE14

602 は土師器甕で、口径 14.8 cm、残存高 9.3 cm、口縁部はくの字状を呈する。口縁部にヨコナデ、胴部外面にナデ、胴部内面には指オサエの後ハケを施す。

607 は須恵器甕で、胴部以下を欠損している。残存率 40%、口径 19.1 cm、残存高 15.2 cm である。口縁端部は上下にやや鈍い稜を持ち、頸部は非常に短く、カキ目が施される。肩部はほとんど張っていない。外面は平行叩き目文の叩き後カキ目で調整され、内面には同心目文の当て具痕が残る。MT15 型式のものとして推定される。

SE15

593～596、601 は土師器、603、604 は須恵器である。

593 は土師器高杯で、底径 9.6 cm、残存高 6.2 cm、脚部のみ残存している。外面に面取り、内面にケズリ、底部外面にハケの後ナデ、底部内面には指オサエの後ケズリを施す。

594 は土師器高杯で、底径 10.5 cm、残存高 7.4 cm、口縁部を欠損している。杯部外面に指オサエの後ナデ、脚部は外面に面取りを施し、内面にはしぼり痕および指頭圧痕が残る。脚底部は外面にハケの後ナデ、内面に指オサエの後ナデが施される。

595 は土師器高杯で、底径 9.7 cm、残存高 6.5 cm、脚部のみ残存している。外面に

面取りを施し、内面はケズリで調整されるが、しぼり痕が残る。脚底部は外面にナデ、内面に指オサエの後ナデを施す。

596 は土師器高杯で、底径 8.4 cm、残存高 6.7 cm、脚部のみ残存している。外面に面取り、内面に指オサエを施し、しぼり痕が残る。脚底部は外面をナデ、内面を指オサエの後ナデで仕上げる。

601 は土師器直口壺で、口径は 14.8 cm、残存高が 9.3 cm。口縁部は直立し、胴部が扁球形を呈する。また、底部に穿孔が施される。口縁部にヨコナデ、胴部は外面にナデ、外面下半にケズリ、内面に指オサエ、内面下半には指オサエの後ケズリを施す。

603 は杯身で、残存率 85%、口径 11.4 cm、器高が 4.9 cm である。ほぼ垂直の立ち上がりは外反しながらやや長く伸び、内に傾斜する端部は平らな断面形を呈する。底部には反時計回りの回転ヘラケズリを施しており、ほぼ水平に伸びる受部はやや短く、やや鋭い。TK23 型式と考えられる。

604 は高杯蓋で、残存率 70%、口径 12.1 cm、器高が 5.4 cm である。内に傾斜する端部は断面をほぼ平らに仕上げられる。稜はやや鈍く、あまり突出していない。天井部には反時計回りの回転ヘラケズリが施され、扁平なつまみが付されている。TK23 型式のものと考えられる。

SE16

599 は土師器杯で、口径 11.8 cm、器高 4.1 cm。口縁部にヨコナデ、体部外面にナデ、体部内面にはナデの後、放射線状の暗文を施す。

597 は土師器高杯で、底径 10.1 cm、残存高 7.0 cm、脚部のみ残存している。外面に面取りを施し、内面にはしぼり痕が残る。脚底部は外面をハケの後ナデで仕上げ、内面には指頭圧痕が残る。

第5章 平成15年度調査

前年度調査から継続して事業地西側区域を中心として調査を実施した。総調査面積は8,596㎡である。調査にあたって事業地西端の初田川に面する河川部分をA地区、その南に隣接してB地区、事業地東端の河川および道路用地をC地区、事業地中央南端の区画道路部をD地区、B地区に東接する河川、道路用地区域をE地区とした。

1 遺構

(1) A地区

第35トレンチ

本調査北区に西接する、南北4.0m、東西35.0mの東西トレンチである。

基本層序

現地表の標高は52.100mで、第Ⅰ層は層厚0.2mの耕作土、その床土が第Ⅱ層で層厚0.05m、第Ⅲ層は層厚0.3mの褐色砂質土、第Ⅳ層は暗褐色灰色砂質土で層厚0.4m、第Ⅴ層は黄橙色粘質土である。

第Ⅴ層上で縦横に走る耕作に伴う素掘小溝、トレンチ東半でSR11延伸部の屑を検出した。耕作溝は東西方向のものが15条、南北方向のものが22条である。その他にピットを6基検出したが、いずれもほぼ無遺物であった。

本調査西区

第35トレンチに西接する位置に設定した675.0㎡の調査区である。

基本層序

基本的に第35トレンチと同様であるが、第Ⅴ層上に第Ⅱ層が堆積しており、第Ⅲ層および第Ⅳ層は存在しない。

第Ⅴ層上に東西方向208条、南北方向56条の耕作溝が走り、その下層でピット12基、土坑2基を検出した。また、調査区中央にSD73と湿地が存在する。ピットのうち南半で検出した5基は3.0m間隔で並んでおり、柵の可能性はあるが、これら以外に顕著な遺構はない。全体として遺構密度が低く、遺物の出土量が極めて少ない。以上のことから、古代の遺構面は存在しない可能性が高いと考えられる。

(2) B地区

第38トレンチ

南北4.0m、東西25.0mの東西トレンチである。

基本層序

現地表面は標高53.000mで、層厚0.2mの第Ⅰ層、0.05mの第Ⅱ層直下が第Ⅴ層となる。また、第Ⅰ層上には最大で厚さ1.0mに及ぶ造成土が置かれていた。

第Ⅴ層上でピット7基、流路1条を検出した。ピットの深さは0.05m程度と浅く、耕作溝が全く存在しないことから、遺構面自体が削平されている可能性が高い。トレ

ンチ西半を南西から北東へ流れる、幅3.0m、深さ1.0mのSD52は、A地区本調査西区中央で検出したSD73の延伸とみられる。A地区同様、古代の遺構は稀薄であったと考えられる。

(3) C地区

現況で3つの高まりが確認されており、これらにそれぞれ試掘トレンチを設定した(第14～第49トレンチ)が、埋土堆積状況、包含遺物の様相から、何れも近代の盛土であることが判明した。また、東半に第50～第52トレンチを設定して試掘調査を行った結果、遺構の存在が予想されたため全面調査に切り換えた。総調査面積は6,730.0㎡である。

第50トレンチ

調査区東半に設定した、東西6.0m、南北55.0mの南北トレンチ。褐色砂質土から土師器の細片、第Ⅶ層から在地産山陰系の古式土師器、第Ⅹ層からは前期から晩期の縄文土器片、サヌカイト剥片、サヌカイト製石器が出土した。

第51トレンチ

第50トレンチ北端と直交し西へ延びる幅6.0m、長さ15.0mの東西トレンチである。褐色砂質土から土師器の細片が出土した。

第52トレンチ

第50トレンチ南端と直交し西へ延びる幅6.0m、長さ30.0mの東西トレンチ。褐色砂質土から土師器の細片が出土した。

C調査区

本調査への切り換えにともない、第52トレンチを拡張して設定した。主に遺構が残るのは、標高52.000m前後の黄褐色粘質土の固い地盤(第3遺構面)である。第1遺構面は標高52.300m、第2遺構面は標高52.100m前後から多くの遺構が掘り込まれている。第1、第2遺構面では、調査区北東部および南西部において東西、南北方向の耕作溝群と井戸を検出した。また、南部の第2遺構面上で栗濠の存在が確認された。

SK52

SE26の南西側で検出した、一辺2.0m、深さ0.6mの方形土坑。遺物は出土していない。

SK54

西側区画のSD67付近で検出した。一辺1.0m、深さ0.3mの方形土坑で、埋土に遺物は含まれていなかった。

SE25

環濠西側区画の北西隅で検出した、掘形直径6.0m、深さ5.0m以上の井戸。井戸枠上部は建築部材の古材を格子状に組んだ葦材で覆われていた。結桶を重ねて井戸枠を構築しており、枠の外側には「郡役所」と墨書されていた。

SE26

SB61の北西側で検出した一辺2.0m、深さ0.6mの方形土坑で、溜井戸と考えられる。瓦質土器の羽釜、火鉢の細片、土師質土器の小皿8点が出土した。

SE27

調査区中央で検出した、直径0.8m、深さ0.2mの円形溜井戸。掘形中央に曲物を配しており、溜橋の機能を果たしていたと考えられる。

SE28

調査区中央で検出した、長径0.9m、短径0.8m、深さ0.4mの楕円形溜井戸。底部中央に直径0.35m、高さ0.15mの円形曲物側板の井戸枠材が据えられていた。土層断面の観察結果から、上部にもう一段積み上げられていたと考えられる。

SE29

SE28の北西に隣接して検出した。長辺0.95m、短辺0.9m、深さ0.55mの溜井戸である。底部北西隅に直径0.2m、深さ0.2mの円形曲物側板を使った集水施設が据えられていた。

SE30

調査区中央で検出した、直径1.0m、深さ1.2mの円形井戸。下部から漆器碗1点が出土した。

SE31

長辺1.1m、短辺0.9m、深さ2.5mの平面長方形で、調査区中央で検出した。上方をSE30に破壊されている。

環濠

SD67とSD68によって構成される東西96.0m以上、南北20.0m以上の中世環濠である。東西南北の北面濠、南北方向の東面濠、西面濠、中央濠を検出した。濠によって区画される内側には、標高52.600mまで盛土を施された屋敷地が存在し、東側区画と西側区画に分けられる。西側区画で掘立柱建物1棟と井戸、土坑を各々2基検出したが、東側区画では遺構は確認されなかった。

SD67

幅5.0m～7.0m、深さ1.5m～2.0m。北面周濠西半、中央周濠、西面周濠の一部である。西側区画には建物が存在するためか、濠の規模が大きいの。中央の濠ではこぶし大の石が出土しており、これは東側区画から投棄されたものと考えられる。

SD68

幅3.6m～4.1m、深さ1.0m～1.2mで、北面周濠東半と東面周濠の一部である。

SB61

西側区画で検出した、梁間4間、桁行1間以上、柱間寸法2.6mの総柱建物で、柱穴底部には礎盤が据えられていた。屋敷地の中心に位置することから、主屋に相当すると考えられる。

SD69

調査区中央を南東から北西に向かって走る素掘りの溝である。幅2.0m、深さ0.5m、距離50.0m分を検出した。埋土中から須恵器や土師器の杯、甕、壺が出土しており、それらの年代から、5世紀中頃から後半の開削と考えられる。遺物はそれぞれが間隔をおいて単体で出土しており、意図的に配置された可能性がある。

SD71

SD69に並行して走る。幅2.0m、深さ0.5m、距離20.0m分を検出した。遺物は土師器、須恵器の細片が出土しており、SD69と同時に掘られたと考えられる。

SD60～66

調査区北東、SR16西岸で検出した、斜行する素掘溝である。幅0.3m、深さ0.2m、長さ10.0m～40.0mで、約2.0m間隔で南西から北東方向に向かって掘り込まれていた。土師器、須恵器の細片のほか、7世紀代の平瓦が出土している。SR16に並行して走ることから、川岸を意識しているものと考えられる。

(4) D地区

事業地南東の区画街路予定地上に第40、第43、第53トレンチを設定して調査を行った。

第40トレンチ

東西6.0m、南北100.0mの南北トレンチ。基本層序は第1層が層厚0.2mの耕作土、第2層がその床上で厚さ0.1m、第3層および第4層は層厚0.4m～0.5mの遺物包含層となっている。第4層下に、標高52.600m～52.800mの明灰褐色砂質土～粗砂を基盤層として、遺構面が形成される。この遺構面上で5世紀から8世紀にかけての流路、土坑、井戸、柱穴、溝など、約250基の遺構を検出した。

SP17

直径0.5mで、北半で検出した遺構。埋土中から土師器1点が出土した。

SB58

梁間2間、桁行3間の南北棟。柱間は梁間1.6m、桁行約2.0mである。

SK39

トレンチの中央北寄り検出した、長径1.2m、短径1.0m、深さ0.8mの楕円形土坑である。土坑の中央には、口縁を南にして横倒しに埋納された、古墳時代中期の土師器甕2点、壺1点が出土した。

SK44

北半で検出した、長径1.4m、短径1.2m、深さ0.6mの楕円形土坑である。埋土は5層に分かれてレンズ上に堆積し、第4層中に瓦質土器皿1点が含まれていた。平安時代末期の遺構と考えられる。

SE18・19

トレンチ中央やや北寄りで検出した素掘りの円形井戸である。SE18は直径1.5m、深さ1.5m、SE19は直径1.1m、深さ1.4m。SE18がSE19を破壊して構築されている。中近世のものと考えられる。

SE20

長径3.0m、短径1.5m、深さ2.1mの楕円形井戸で、中央部で検出した。井戸枠構造は縦板組横棧梁柱留めで、一辺1.4mの方形に組んでいる。枠内には一辺0.8m、高さ0.4mの方形曲物を転用した集水枡が据えられていた。遺物は土師器甕数点である。

SE21

トレンチ北半で検出した、長径2.2m、短径2.0m、深さ2.5mの円形井戸。井戸枠

には、直径 1.0m のケヤキを半裁して削り抜き、合わせ口にしたものが用いられている。土師器、須恵器のほかにシイノミ、クルミなどの堅果類が出土している。

SE22

トレンチ北半で検出した、長径 2.0m、短径 1.8m、深さ 1.8m の楕円形井戸である。埋土最上層から須恵器甕が 1 点出土した。

SD53

南西から北東へ蛇行する、幅 4.0m、深さ 0.5m の溝。埋土は流路方向と平行に筋状の堆積を示し、川底形状も流路に沿った形になっていることから、自然流路を改修した可能性がある。また、溝左岸の耕作溝は東西方向に走り、右岸のものは南北方向に掘られている。これは、埋没後の土地境界にあたる位置として意識されていたためと考えられる。遺物は、土師器の壺、鉢が各 1 点出土した。

第 43 トレンチ

第 40 トレンチ中央から西に延びる街路予定地に設定した、南北 6.0m、東西 36.0m の東西トレンチである。東半で柱穴、ピット、区画溝を検出した。

SP23

直径約 0.6m、深さ 0.35m の円形掘形で、直径 0.15m の柱根が残存している。

SP24

直径約 0.7m の円形掘形で深さは 0.36m、柱根の直径は 0.2m。

SB59

梁間 2 間、桁行 3 間の総柱建物。柱間は梁間、桁行ともに 1.6m。

SE24

一辺 0.8m、深さ 1.4m の方形掘形をもつ素掘井戸で、埋土中層から扁平な石が 1 点、底部から土師器甕口縁の破片 1 点が出土した。

SD55

検出全長約 8.0m、残存幅約 0.3m、深さ 0.1m～0.3m の矩形の溝。この内側に柱穴が複数あり、建物の存在が想定される。

第 53 トレンチ

第 43 トレンチの西延長上に設定した、南北 6.0m、東西 15.0m の東西トレンチである。層厚 0.2m の整地上、耕作土とその床土 0.3m を除去した段階で暗褐色粘質土(砂を含む)の遺物包含層に達する。包含層は厚さ 0.4m～0.6m で、直下が黄褐色粘質土～シルトからなる基盤層である。この基盤層上で南北 40 条、東西 10 条の耕作溝、流路 1 条、ピット 10 基を検出した。包含層からは瓦質土器片、黒色土器片、流路およびピットからは古墳時代後期の土師器片が出土した。

SP35

直径 0.5m、深さ 0.15m で、SD56 内で検出した。

SD56

最大幅 3.3m、深さ 0.2m で、南西から北東へ蛇行しながら走る。古墳時代の土師器片が出土している。

(5) E地区

前年度で調査を実施した本調査中央区の東および西に隣接して、本調査中央西区、本調査中央東区を設定した。

本調査中央西区

調査面積は123.0㎡。黄褐色粘質土の基盤層上で、本調査北区で検出したSR11の延伸部を確認した。このSR11上に、2棟以上の掘立柱建物が方位に則って築かれている。

SB62

梁間2間、桁行1間以上の南北棟で、柱間は梁間1.5m、桁行3.2m。Ⅲ類に属す。

SB63

梁間2間、桁行2間の南北棟で、柱間は梁間1.6m、桁行1.4m。Ⅵ類。

本調査中央東区

総面積418.0㎡。本調査北区北半で検出したSR03の延伸部、掘立柱建物群、井戸を検出した。上記旧河道からは縄文土器、サヌカイトが多数出土した。

SE36

直径2.6m、深さ5.1m。枠構造は、隅柱横棧留枠を2段に重ねたもの。近世以降の農業灌溉用と思われる。

2 遺物

(1) C地区

C調査区

包含層(第2～5層)

608は銅製の碗で、復元口径15.0cm、残存高2.4cmである。

第V層耕作溝

609は土師器皿で、口径11.8cm、器高2.3cm、「て」字状口縁を呈する。口縁部にヨコナデ、体部外面に指オサエ、体部内面に指オサエの後ナデを施す。

610は土師器杯で、口径14.2cm、器高2.9cm、口縁端部が肥厚する。口縁部にヨコナデ、体部外面にヘラケズリ、体部内面には指オサエの後ナデを施す。

611は土師器甕で、口径22.0cm、残存高18.0cm、口縁部は外反する。口縁部にヨコナデ、胴部外面にナナメハケ、胴部内面にナナメハケの後ケズリを施す。また、煤が付着している。

619は土師器甕で、口径34.0cm、残存高8.5cm、残存率15%、胴部に鏝を貼り付ける。口縁部にヨコナデ、胴部外面にナデ、胴部内面に板ナデを施す。

612は黒色土器A類碗で、底径7.9cm、残存高1.6cm、残存率40%、底部のみ残存している。底に高台を貼り付け、底部外面にナデ、内面に平行ミガキを施す。

613は黒色土器B類碗で、底径8.9cm、残存高1.9cm、底部のみ残存している。底に高台を貼り付け、底部外面にミガキ、内面に平行ミガキの後、連弧状の暗文ミガキを施す。

614は瓦質土器播鉢で、口径26.6cm、残存高8.5cm、残存率25%。口縁部にヨコナ

デ、胴部外面に指オサエ、胴部内面にナデを施す。

615、617、618 は瓦質土器土釜である。

615 は瓦質土器土釜である。口径 23.0 cm、残存高 8.4 cm、残存率 23%、内傾する口縁部に銕を貼り付ける。口縁部にヨコナデ、胴部外面にナデ、内面にヨコハケを施す。

617 は瓦質土器土釜である。口径 21.0 cm、残存高 7.1 cm、率 10%、内傾する口縁部に銕を貼り付ける。口縁部にヨコナデ、胴部外面にナデ、内面にヨコハケを施す。また、煤が付着している。

618 は瓦質土器土釜である。口径 18.0 cm、残存高 5.6 cm、残存率 15%、口縁部のみ残存している。口縁部に銕を貼り付け、ヨコナデを施す。また、煤が付着している。

616 は土鍾で、全長 5.3 cm、径 1.7 cm。

620 は土馬で、残存高 6.6 cm、脚部のみ残存している。残存高 6.6 cm。

SE25

621 は陶器碗である。底径 4.2 cm、残存高 2.4 cm、底部のみ残存しており、高台がつく。染め付けが施され、内外面に釉薬がかかる。

622 は陶器甕で、口径 16.2 cm、残存高 3.9 cm、残存率 10%、口縁部のみ残存している。内外面に釉薬がかかる。

623 は磁器碗である。底径 4.0 cm、残存高 1.5 cm、底部のみ残存しており、高台がつく。染め付けが施され、内外面に釉薬がかかる。

SE26

624～635 は土師器皿である。

624 は口径 9.4 cm、器高 1.7 cm、残存率 40%。最上層から出土した。口縁部にヨコナデ、体部外面に指オサエの後ナデ、体部内面にナデを施す。

625～635 は口縁部にヨコナデ、体部外面に指オサエ、体部内面に指オサエの後ナデを施す。

625 は口径 7.7 cm、器高 2.0 cm、残存率 35%。

626 は口径 7.5 cm、器高 1.4 cm。

627 は口径 7.8 cm、器高 1.4 cm、残存率 50%。

628 は口径 7.8 cm、器高 1.4 cm。

629 は口径 7.8 cm、器高 1.5 cm。

630 は口径 7.8 cm、器高 1.9 cm。

631 は口径 9.7 cm、器高 1.9 cm。

632 は口径 9.7 cm、器高 1.9 cm。

633 は口径 9.7 cm、器高 1.9 cm。

634 は口径 9.8 cm、器高 1.8 cm、残存率 40%。

635 は口径 9.5 cm、器高 2.0 cm。

636 は土師器土釜である。口径 30.0 cm、残存高 5.3 cm、残存率 25%、内傾する口縁部に銕を貼り付ける。また、口縁部にヨコナデを施す。

SE28

637 は曲物側板で、長径 39.0 cm、短径 36.4 cm、高さ 11.3 cm、厚さ 0.4 cm である。材質はヒノキ科アスナロ属を使用している。

SD67

638～643、646 は土師器、647 は瓦質土器、644、645 は木製品、648、649 は石製品である。

646、647 は上層出土。638～643 は中層出土。

638 は土師器皿で、口径 7.6 cm、器高 1.7 cm、口縁部にヨコナデ、体部外面に指オサエ、体部内面に指オサエの後ナデを施す。

639 は土師器皿で、口径 9.0 cm、器高 1.8 cm、残存率 30%。口縁部にヨコナデ、体部外面に指オサエ、体部内面に指オサエの後ナデを施す。

640 は土師器皿で、口径 9.8 cm、器高 2.2 cm、残存率 30%。口縁部にヨコナデ、体部外面に指オサエ、体部内面に指オサエの後ナデを施す。

641 は土師器皿で、口径 9.1 cm、器高 2.1 cm、口縁部にヨコナデ、体部外面に指オサエ、体部内面に指オサエの後ナデを施す。

642 は土師器皿で、口径 9.7 cm、器高 2.0 cm。口縁部にヨコナデ、体部内外面に指オサエの後ナデを施す。煤が付着していることから、灯明皿と考えられる。

643 は土師器皿で、口径 9.4 cm、器高 1.7 cm、残存率 40%。口縁部にヨコナデ、体部外面に指オサエ、体部内面に指オサエの後ナデを施す。

646 は土師器羽釜で、口径 20.8 cm、残存高 8.4 cm、残存率 30%。口縁部が内湾し、胴部に鐙が貼り付けられる。口縁部にヨコナデ、胴部外面にナデ、胴部内面に指オサエおよびナデを施す。また、煤が付着している。

644 はほぼ完形の漆器碗で、口径 12.2 cm、器高 8.6 cm である。外面は N2/0 黒色、内面は 7.5R3/4 暗赤色で、底部には朱彩文字が確認できる。

645 は漆器碗で、復元口径が推定 17.0 cm、残存高 3.6 cm である。内外面は 10R4/4 赤褐色、高台以下が N2/0 黒色である。

647 は瓦質土器楯鉢で、口径 32.8 cm、残存高 12.3 cm、残存率 25%。片口で、口縁部にヨコナデ、胴部外面に指オサエ、胴部内面に板ナデを施す。

648 は凝灰岩切石で、最大長 43.2 cm、最大幅 25.2 cm、22.0 cm である。被熱によって変色したと考えられる箇所が確認できる。

649 は凝灰岩切石で、最大長 54.0 cm、最大幅 24.0 cm、19.0 cm である。被熱によって変色したと考えられる箇所を確認でき、鹿谷寺産と考えられる。

SD68

660 は上層出土。659 は中層出土。658 は下層出土。

658 は土師器羽釜である。口径 18.0 cm、残存高 11.3 cm、残存率 30%、内傾する口縁部に鐙を貼り付ける。口縁部にヨコナデ、胴部外面に板ナデ、胴部内面には指オサエおよびナデを施す。また、口縁部に 2 方の円孔が 2 対穿たれている。

660 は瓦質土器風炉である。口径 29.8 cm、残存高 17.8 cm、残存率 25%、口縁部は直立する。口縁部および胴部にスタンプによる紋様帯を巡らせ、胴部に透孔を穿つ。口縁部にヨコナデ、胴部外面にナデ、胴部内面に指オサエおよびナデを施す。

659 は瓦質土器風炉である。口径 21.8 cm、残存高 4.7 cm、残存率 30%、口縁部は直立する。口縁部にスタンプによる文様帯を巡らせ、胴部に透孔を穿つ。スタンプは 660 と同様のものを使用していると思われる。口縁部および胴部外面にナデを施す。

SD69

調査区中央を南東から北西に向かって流れていたと思われる素掘溝である。埋上からは須恵器、土師器などが出土している。650、651、656、657は土師器、652～655は須恵器である。

650は土師器杯で、口径10.1cm、器高4.4cm、残存率10%、口縁部は内湾する。口縁部にヨコナデ、体部外面にケズリ、体部内面にナデを施す。

651は土師器高杯で、底径11.6cm、残存高9.2cm、脚部のみ残存している。内外面にナデ、底部にヨコナデを施す。

656は土師器甕で、口径12.8cm、残存高16.8cm、口縁部がくの字状を呈し、胴部は球形を呈する。口縁部外面にヨコナデ、口縁部内面にヨコハケ、胴部外面にナメハケおよびタテハケ、胴部内面に指オサエの後ナデを施す。また、煤が付着している。

657は土師器長胴甕で、口径13.0cm、残存高19.5cm、残存率20%、口縁部は外反する。口縁部にヨコナデ、胴部外面に粗いタテハケ、胴部内面に指オサエの後ケズリを施す。

652は杯身で、残存率20%、復元口径11.0cm、残存高が4.3cmである。やや長い立ち上がりはほぼ垂直に伸び、端部はほぼ水平で、しっかりしている。底部全体に反時計回りの回転ヘラケズリを施しており、受部はほぼ水平に伸び、やや鋭い。TK208型式と考えられる。

653は杯身で、残存率90%、口径11.6cm、器高が4.9cmである。立ち上がりはやや内傾してやや長く伸び、端部には沈線を施しているが、断面形はほぼ平らである。底部の広範囲に反時計回りの回転ヘラケズリを施しており、受部は長く、上方向に伸び、比較的鈍い。小型であり、TK23型式と考えられる。

654は有蓋高杯で、残存率は杯部50%、脚部はほぼ完形で、口径11.5cm、器高が9.3cmである。短脚3方向透かしで、透かし窓は長方形である。底部は段を成し、端部は鋭い。杯部の端部はほぼ水平で、短い受部は鋭く、外上方へ伸びる。杯部底部の回転ヘラケズリはほぼ全体に及び、方向は時計回りである。脚部の透かしが3方向ではあるが、TK208型式のものと推定される。

655は甕で、残存率70%、復元口径9.4cm、器高が10.3cmである。二段口縁を呈し、端部の断面は丸い。頸部に波状文を描き、肩部は振りが弱く丸みを帯び、沈線が描かれている。胴部にも波状文を巡らせ、円形の透かし孔を穿つ。底部は回転ヘラケズリ後ナデで調整し、やや尖っている。全体的に丁寧な作りである。TK23型式のと思われる。

SR16

調査区東端で検出された旧河道である。16年度調査においても継続して調査を実施した、同一の遺構である。3次調査での出土量は少ないが、土師器、須恵器、縄文土器などが出土している。661～668、671～673は土師器、669、670は須恵器、674は木製品である。

661は土師器小型丸底甕で、口径10.0cm、器高7.55cm。口縁部から胴部外面にかけてヨコミガキ、口縁部内面にヨコミガキ、胴部外面下半にケズリの後ミガキ、胴部内面に指オサエの後、板ナデを施す。また、煤が付着している。

662 は土師器壺で、残存高 6.0 cm、胴部のみ残存している。外面にヨコハケの後ナデ、内面にケズリ、胴部外面に竹管文を施す。

663 は土師器甕である。口径 10.6 cm、残存高 10.4 cm、口縁部はくの字状を呈し、胴部は球形を呈する。口縁部外面にヨコナデ、内面にヨコハケ、胴部外面にタテハケおよびナナメハケ、胴部内面に指オサエおよびケズリを施す。

664 は土師器甕である。口径 9.8 cm、残存高 13.9 cm、口縁部がやや内湾し、胴部は球形を呈する。口縁部にヨコナデ、胴部外面にタテハケおよびナナメハケ、胴部内面に指オサエの後ナデおよびケズリを施す。また、煤が付着している。

665 は土師器甕である。口径 11.6 cm、器高 15.5 cm、口縁部が外傾し、胴部は扁球形を呈する。口縁部にヨコナデ、胴部外面にナデの後ヨコミガキ、胴部外面下半にナナメハケ、胴部内面に指オサエの後ナデ、胴部内面下半にケズリを施す。

666 は土師器甕である。口径 13.6 cm、器高 18.0 cm、口縁部がくの字状を呈し、胴部は球形を呈する。口縁部にヨコナデ、胴部外面にタテハケおよびナナメハケ、胴部内面に指オサエの後ケズリを施す。また、煤が付着している。

667 は土師器甕である。口径 15.6 cm、残存高 20.5 cm、口縁部は内湾し、端部が肥厚する。口縁部にヨコナデ、胴部外面にヨコハケおよびナナメハケ、胴部内面に指オサエの後ケズリを施す。また、煤が付着している。

668 は土師器甕である。口径 13.1 cm、器高 24.0 cm、口縁部が外反し、胴部は扁球形を呈する。口縁部にヨコナデ、胴部外面にタテハケ、胴部内面に指オサエの後ケズリを施す。また、煤が付着している。

671 は山陰系土師器甕で、残存高 9.3 cm、口縁部を欠損している。二重口縁をもち、胴部は長胴を呈する。口縁部から頸部にかけてヨコナデ、胴部外面にタテハケ、胴部下半にナデ、頸部内面にヨコハケ、胴部内面に指オサエおよびナデ、胴部下半には指オサエの後ケズリを施す。また、煤が付着している。

672 は山陰系土師器甕である。口径 24.6 cm、残存高 9.3 cm、二重口縁を呈し、稜をもつ。口縁部にヨコナデ、胴部外面にタテハケ、胴部内面にはケズリを施す。

673 は山陰系土師器甕である。口径 23.2 cm、残存高 20.0 cm、残存率 45%、二重口縁を呈し、稜をもつ。口縁部にヨコナデ、胴部外面にタテナナメハケおよびヨコハケ、胴部内面に指オサエの後ケズリを施す。

669 は高杯蓋で、残存率 90%、口径 12.0 cm、器高が 5.3 cm である。扁平なつまみが付されている。端部に明瞭な沈線が施され、稜は鈍く、やや突出している。また、天井部は反時計回りの回転ヘラケズリで調整され、扁平なつまみが付されている。小型であり、TK47 型式のものと考えられる。

670 は杯身で、口径は 10.3 cm で器高が 5.2 cm である。やや長い立ち上がりはほぼ垂直に伸び、端部には沈線が施され、垂直に立ち上がる。底部に反時計回りの回転ヘラケズリを施しており、受部はほぼ水平に伸び、やや鋭い。小型であり、TK23 型式と考えられる。

674 は木製の鞍で後輪と考えられる。幅 41.2cm、高さ 20.2cm、厚さ 1.0~1.8cm で 2ヶ所に方形の穿孔を施している。表面はほぼ全面が剥離していると考えられ、炭化している箇所も確認できる。

(2) D地区

第40トレンチ

包含層

675 は土製紡錘車で、全高 2.4 cm、径 3.6 cm。平面円形で、側面が台形を呈し、中央に孔を穿ち、外面にナデを施す。

SP17

677 は黒色土器A類碗で、口径 15.8 cm、残存高 4.3 cm、残存率 40%。口縁部にヨコナデ、体部外面に指オサエおよびナデ、体部内面にはミガキを施す。

SK39

680 は土師器直口壺である。口径 10.0 cm、器高 16.5 cm、口縁部が外傾し、胴部は扁球形を呈する。口縁部にヨコナデ、口縁部外面にミガキ、胴部外面にヨコハケ、胴部下半にはナナメハケ、胴部内面に指オサエの後ケズリを施す。

681 は土師器長胴壺である。口径 18.2 cm、器高 32.2 cm、口縁部は外傾する。口縁部に外面タテハケの後ヨコナデ、内面にヨコナデ、胴部は外面にヨコハケおよびタテハケ、内面にケズリを施す。

682 は土師器長胴壺である。口径 21.0 cm、残存高 14.3 cm、口縁部がくの字状を呈する。口縁部にヨコナデ、胴部外面に粗いナナメハケ、胴部内面にケズリを施す。

SK44

678 は土師器杯で、口径は 14.0 cm、器高が 3.5 cm。口縁部にヨコナデ、体部内外面に指オサエの後ナデを施す。

679 は土師器杯で、口径が 14.9 cm、残存高は 3.0 cm。口縁部にヨコナデ、体部外面に指オサエ、体部内面に指オサエの後ナデを施す。

676 は瓦器皿で、口径 9.7 cm、器高 1.4 cm。口縁部に指オサエの後ヨコナデ、体部外面にミガキ、内面には圓縁状ミガキ、見込みに平行ミガキの後、速弧状の暗文ミガキを施す。

SE20

683～687 は土師器、688～697 は木製品である。

683～685 は土師器皿で、口縁部は「て」字状を呈する。

685 は口径 9.7 cm、器高 1.4 cm、口縁部にヨコナデ、体部外面に指オサエ、体部内面に指オサエの後ナデを施す。

683、684 は口縁部にヨコナデ、体部内外面に指オサエの後ナデ、体部内面指オサエの後ナデを施す。

683 は口径 9.2 cm、器高 1.0 cm、残存率 30%、体部内外面に指オサエの後ナデを施す。煤が付着していることから、灯明皿と考えられる。

684 は口径 12.1 cm、器高 1.3 cm、体部内外面に指オサエの後ナデを施す。

686 は土師器杯である。口径 14.5 cm、器高 3.5 cm、口縁部にヨコナデ、体部外面に指オサエ、体部内面にナデを施す。

687 は土師器甕である。口径 17.7 cm、残存高 16.5 cm、口縁部が外反し、端部は肥厚する。口縁部にヨコナデ、胴部外面にナデ、胴部内面に指オサエの後ケズリを施す。

688 は方形の曲物側板で、一辺 39.4 cm、高さ 12.0 cm、厚さ 0.4 cm である。材質はヒ

ノキ科アスナロ属を使用している。

689 は井戸横棧で、長さ 54.5cm、幅が 4.5cm、3.6cm である。

690 は井戸横棧で、長さ 47.0cm、幅が 4.0cm、2.5cm である。材質はブナ科シイ属を使用している。

691 は井戸側板で、幅 28.5cm、高さ 45.0cm、厚さ 4.5cm である。

692 は井戸側板で、幅 24.5cm、高さ 39.5cm、厚さ 3.5cm である。

693 は井戸側板で、幅 20.0cm、高さ 46.0cm、厚さ 4.0cm である。材質はブナ科シイ属を使用している。

694 は井戸北隅木で、長さ 49.0cm、幅が 7.4cm、6.8cm である。

695 は井戸南隅木で、長さ 47.5cm、幅が 7.0cm、5.2cm である。

696 は井戸東隅木で、長さ 46.5cm、幅が 10.5cm、7.5cm である。

697 は井戸西隅木で、長さ 45.7cm、幅が 8.0cm、8.0cm である。

SE22

704 は土師器碗で、上層から出土した。口径 13.0cm、残存高 3.1cm、口縁部は外反し、外面にヨコナデを施す。

705 は須恵器杯蓋で、残存率 20%、口径 15.0cm、残存高が 5.5cm である。端部は沈線が施されているが、平らに近い。稜は形骸化しており、直下に沈線を施して表現している。天井部には反時計回りの回転ヘラケズリが施され、MT15 型式のものと考えられる。

706 は須恵器壺で、口縁部から肩部までが残存し、復元口径 17.0cm、残存高 8.2cm である。口縁部に段を有し、口頸部は短く、文様帯を施さない。外面は平行叩き目文の叩き板で調整され、内面には同心円文の当て具痕を残す。TK23~MT15 型式と推定される。

第 43 トレンチ

SP27

701 は土師器皿である。口径 15.2cm、器高 2.7cm、残存率 10%、口縁端部が肥厚する。口縁部にヨコナデ、体部外面にケズリを施す。

SE24

707 は土師器甕で、下層から出土した。口径 19.0cm、残存高 6.5cm、残存率 20%、口縁部は外反する。口縁部にヨコナデ、胴部は外面にタテハケ、内面にナデを施す。

第 53 トレンチ

包含層

710 は土錘である。全長 3.2cm、径 1.2cm。

711 は土馬で、脚部のみ残存している。残存高 5.6cm。

SD56

703 は土師器碗で、口径 13.3cm、器高 8.8cm。口縁部外面にヨコナデ、口縁部内面にヨコハケ、体部外面に指オサエの後タテハケ、体部内面に指オサエを施す。

708 は土師器甕で、口径 19.8cm、残存高 15.0cm、残存率 10%。口縁部は内湾し、

端部が肥厚する。口縁部にヨコナデ、胴部は外面にナナメハケ、内面にケズリを施す。

709 は土師器甕鍋で、口径 27.0 cm、器高 22.1 cm、くの字状を呈する口縁部は、端部が肥厚し、胴部は扁球形を呈する。口縁部にヨコナデ、胴部外面にハケ、胴部内面にヨコハケおよびケズリを施す。

(3) E地区

本調査中央東区

耕作溝

699、700 は土師器皿である。

699 は、口径 9.2 cm、器高 1.7 cm、残存率 20%。口縁部にヨコナデ、体部外面に指オサエ、体部内面にナデを施す。

700 は口径 13.6 cm、器高 2.4 cm、残存率 10%、口縁は「て」字状を呈する。口縁部にヨコナデ、体部外面に指オサエ、体部内面にナデを施す。

702 は土師器杯で、口径 15.5 cm、残存高 3.9 cm、残存率 25%。口縁部にヨコナデ、体部外面に指オサエ、体部内面にナデを施す。

SE36

698 は土師器皿で、口径 5.9 cm、底径 3.4 cm、器高 1.1 cm、残存率 15%。口縁部にヨコナデを施し、底部に糸切り痕が残る。煤が付着していることから、灯明皿と考えられる。井戸は近世以降のものであり、周辺からの混入品である。

第6章 平成16年度調査

C地区C調査区の下層について、前年度から継続して調査を実施した。また、西に延伸する新葛下川流路予定地において、中軸線より北をF地区、南をG地区として第54、第55 トレンチを設定し試掘調査実施後、本調査を行った。総調査面積は4,743㎡である。

1 遺構

(1) C地区

前年度で調査を完了した上層遺構面の基盤層である、旧河道部分について調査を行った。調査面積は1,640.0㎡である。

C調査区

SE43

調査区中央、SR15右岸で検出した円形溜井戸で、直径0.95m、深さは0.8m。

SE44

SE43同様、SR15右岸で検出した方形井戸。長辺1.1m、短辺0.8m、深さ0.35m。

SD69

第3遺構面で検出した。第3次調査で検出した同遺構の南延伸部である。他に古墳時代から奈良時代の河川2条など、数基の遺構を確認している。

SR15

幅20.0m～30.0m、深さ0.7m～1.2mで、調査区南東隅から北西隅へ流れる。埋土は砂層、粘土層、砂質土層に大別され、河道の埋没過程をある程度推測することができる。河道内には、直径0.1m～0.3m、長さ約1.5mの木製杭を用いた護岸施設、堤防状施設、橋脚施設が構築されていた。護岸施設は調査区南東、中央、北西部で、堤防状施設は北西部で検出した。これらは、直径0.1m未満、長さ2.0m未満の木製杭を並立させ、内側に土砂を入れる構造になっている。橋脚遺構は南岸に残されており、直径約0.3mの木柱が直立させて打ち込まれ、2本で1対を成す。

流路内および埋土からはサヌカイト割片、土師器、須恵器、被熱痕のある凝灰岩切石、円筒埴輪、蛇紋岩製勾瓦、木製鋤、軒丸瓦、軒平瓦、埴、斎巾、墨香土器、土馬、馬廬などが出土した。

SR16

調査区東端で検出した、幅30.0m以上、検出長60.0m、深さ0.7m～1.2mの自然流路で、トレンチ南東隅でSR15と重複する。河床標高値から、南から北へ流下しているものと考えられ、埋土は粗砂層、粘土層、砂質土層に大別される。古式土師器、木製品、古墳時代後期の土師器、須恵器などが出土しており、特に木製鞍は出土例が少なく稀少である。また、この鞍の直近で5世紀前半に比定される古式土師器が出土している。

(2) F地区

C地区の西側延長部北半。基本層序は第Ⅰ層が現水田耕土で層厚約0.2mの褐灰色砂質土、第Ⅱ層は層厚約0.05mの明褐色砂質土で現水田床土、第Ⅲ層は灰オリーブ砂質土で層厚約0.05m、黄灰色砂質土からなる層厚約0.1mの第Ⅳ層、黄褐色粘質土で層厚0.2m～0.4mの第Ⅴ層である。第Ⅲ、Ⅳ層は古墳時代から近世の遺物包含層、第Ⅴ層は古墳時代から中世の遺構基盤層になっている。この向で縦横の耕作溝、柱穴、区画溝、井戸など約450基の遺構を検出した。また、飛鳥時代から奈良時代にかけての遺物が出土している。

第54 トレンチ

南北4.0m、東西10.0mの試掘トレンチ。基本層序は、上層から順に層厚0.2mの造成土、0.2mの耕作土、0.1mの床土、0.7mの遺物包含層、明黄褐色粘質土からなる基盤層である。この基盤層上で耕作溝2条、井戸1基を検出した。

SD74

東西方向の素掘溝で、幅1.0m、深さ0.5m。SD75との交差部で土師器皿1点、甕3点が出土した。

SD75

南北方向の素掘溝で、幅0.7m、深さ0.5m。トレンチ北壁付近で石組列を検出した。

SE39

直径2.0mの円形掘形で、縦板を方形に組んだ枠をもつ。

SR15

C地区から延伸するSR15の埋土と考えられる砂層を基盤層以深で検出した。須恵器の長頸壺が1点出している。

(3) G地区

F地区の南に隣接する調査区で、基本層序は同じである。以下、第Ⅴ層上面で検出した遺構について述べる。

G調査区

SB77

南北3間分。隠し扉の可能性が考えられる。

SB79

梁間2間、桁行3間の南北棟。柱間は梁間、桁行ともに2.0m。

SB80

梁間2間、桁行3間の南北棟で総柱建物。柱間は梁間1.6m、桁行1.2m。

SB81

梁間2間、桁行4間の南北棟。柱間は梁間1.8m、2.2m、桁行1.4m～1.6m。

SB82

梁間2間、桁行2間の南北棟。柱間は梁間1.6m、桁行1.8m。

SB83

梁間2間、桁行3間の南北棟。柱間は梁間1.6m、桁行は南1間が1.2m、北2間は

1.4m～1.6m。

SB84

梁間2間、桁行3間の南北棟。柱間は梁間2.0m、桁行1.6m。

SE45

調査区西半で検出した長径0.8m、短径0.5m、深さ0.45mの楕円形井戸。底が抜けた土師器の把手付甕2個体を積み重ねて井戸枠としている。甕は8世紀の所産である。

SE46

長径約2.5m、短径約2.3m、深さ約2.1mで楕円形掘形を有する井戸で、調査区中央で検出した。上方は方形に板材を並べ立て、下方は曲物側板を二段に積み上げて井戸枠を構築している。枠内からは土師器皿6点に加え鉄製刀子、木製櫛が出土した。皿の裏側には「天」、「東」、「西」などの漢字や記号が墨書されており、建物群の呼称あるいは機能に関わるものと考えられる。

SE47

調査区東半で検出した直径0.9m、深さ0.85mの円形井戸。内部から平安時代の土器が出土している。

SE48

直径4.2m、深さ1.4mの円形井戸で、飛鳥時代の平瓦を転用して集水施設を構築しており、埋土には土師器、須恵器のほか墨書土器が包含されていた。

当調査区でもF地区同様、縦横に走る耕作溝の掘削深度が第V層にまで及んでおり、SE45はその上面を破壊されていた。また、SE47は耕作溝を切って築かれていることから、これらの溝は平安時代後半に掘られたと考えられる。

第55 トレンチ

G調査区南側に設定した東西6.0m、南北10.0mの試掘トレンチ。耕作溝、ピットを確認した。

2 遺物

(1) C地区

C調査区

SE43

716は土師器杯で、口径12.8cm、器高3.5cm、完形。口縁部にヨコナデ、体部外面に指オサエ、体部内面にナデを施す。底面に「十」と墨書がある。

環濠居館

SD67

719は中層出土。713～715、717、718、720は下層出土。

713、714は土師器皿である。口縁部にヨコナデ、体部外面に指オサエ、体部内面にナデを施す。

713は口径9.2cm、器高2.1cm、残存率98%。

714は口径9.8cm、器高1.7cm、残存率98%。

715は土師器杯で、下層下底部から出土した。口径15.4cm、器高3.2cm、残存率98%、口縁部が肥厚する。口縁部にヨコナデ、体部外面にケズリ、体部内面にナデを施す。

717は土師器羽釜で、口径26.6cm、残存高9.2cm、残存率10%。外反する口縁部は、端部が肥厚し、胴部には髷を貼り付ける。口縁部にヨコナデ、胴部外面に指オサエの後ナデ、胴部内面にナデを施す。

718は瓦質土器碗で、口径19.3cm、残存高5.0cm、残存率20%。口縁部にヨコナデ、体部外面にケズリの後ミガキ、体部内面にはナデを施す。

719は瓦質土器鉢で、口径12.8cm、残存高6.3cm、残存率98%、中層から出土した。口縁部は内湾し、外面にヨコナデ、胴部内外面に指オサエの後ナデを施す。また、煤が付着している。

720は片口の瓦質土器鉢で、口径32.4cm、底径11.9cm、器高14.0cm、残存率40%。口縁部にヨコナデ、胴部外面に指オサエ、胴部内面にナデを施す。

SD68

712は土師器皿で、上層から出土した。口径7.4cm、器高1.4cm、残存率98%、口縁部にヨコナデ、体部外面に指オサエ、体部内面にナデを施す。

SR16

調査区東端で検出された旧河道である。15年度調査から継続して調査しており、同一の遺構の下層である。須恵器、土師器、縄文土器、瓦器、瓦などが出土している。

土師器は高杯、碗、甕が中心であり、須恵器は杯蓋、杯身、高杯蓋、有蓋高杯、無蓋高杯、高杯などが出土している。その年代は、古墳時代中期から古墳時代後期のものが多く出土している。721～782、784、785は土師器、786～812は須恵器、783は製塩土器である。

723はミニチュアの土師器碗で、最上層から出土した。口径7.7cm、残存高4.7cm、残存率60%、手捏ねで成形される。口縁部にヨコナデ、体部内外面に指オサエの後ナデを施す。

721はミニチュアの土師器碗で、最上層から出土した。口径4.2cm、器高3.3cm、残存率60%。手捏ねで成形され、尖底を呈する。口縁部にヨコナデ、体部外面に指オサエの後ナデ、体部内面に指オサエおよびナデを施す。

722はミニチュアの土師器碗で、口径6.3cm、器高2.7cm、残存率30%。口縁部にヨコナデ、体部内外面に指オサエの後ナデを施す。

724は土師器杯で、口径14.1cm、器高5.2cm、完形。口縁部にヨコナデ、体部外面に指オサエ、内面にナメハケおよび指オサエの後ナデを施す。

725～735は土師器高杯である。

725は口径15.8cm、残存高6.4cm、残存率40%、杯部のみ残存している。口縁部にヨコナデ、外面にタテハケの後、暗文ミガキ、内面にハケの後、放射線状の暗文ミガキを施す。

726は口径14.2cm、残存高5.3cm、残存率50%、杯部のみ残存している。口縁部にヨコナデ、杯部内外面にナデを施す。

727は口径12.4cm、残存高9.0cm、脚底部を欠損している。口縁部にヨコナデ、杯

部外面に指オサエの後ナデ、杯部内面にナデ、脚部は外面に面取りを施し、内面にはしぼり痕が残る。

728 は口径 14.6 cm、底径 9.5 cm、器高 12.8 cm。口縁部にヨコナデ、杯部外面に指オサエの後タテハケ、杯部内面にナデを施す。脚部は外面を面取りし、内面にはしぼり痕が残る。脚底部外面にヨコハケ、脚底部内面に指オサエの後ハケを施す。

729 は口径 18.2 cm、底径 12.6 cm、器高 12.6 cm。口縁部にヨコナデ、杯部内外面にナデ、脚部は外面にミガキ、底部外面にヨコナデ、底部内面にケズリを施す。また、脚部内面にしぼり痕が残る。

730 は口径 12.8 cm、残存高 9.7 cm、残存率 30%、脚底部を欠損している。杯部は碗形を呈し、脚部に円形透孔が 2 方残存している。口縁部にヨコナデ、杯部内外面にナデを施す。脚部は外面を面取りし、内面にしぼり痕が残る。また、脚部内面にケズリを施す。

731 は口径 14.4 cm、底径 10.5 cm、器高 11.8 cm、残存率 99%。杯部は碗形を呈する。口縁部にヨコナデ、杯部内外面にナデを施す。脚部は外面に面取り、内面にケズリ、底部外面にはナデ、脚底部内面には指オサエの後ケズリを施す。

732 は口径 18.0 cm、底径 9.8 cm、器高 11.8 cm、残存率 50%、杯部に稜をもつ。口縁部にヨコナデ、杯部外面に指オサエの後ナデ、杯部内面にはナデを施す。脚部は外面に面取り、底部外面にヨコナデ、底部内面に指オサエの後ナデを施す。また、脚部内面にはしぼり痕が残る。

733 は口径 13.5 cm、底径 8.7 cm、器高 10.5 cm。口縁部にヨコナデ、杯部外面に指オサエの後ナデ、杯部内面にナデの後、放射線状の暗文を施す。脚部は外面を面取りし、内面にはしぼり痕が残る。また、脚底部外面をナデ、脚底部内面を指オサエの後ケズリで仕上げる。

734 は口径 18.1 cm、底径 13.2 cm、器高 14.0 cm。口縁部にヨコナデ、杯部内外面にミガキ、脚部は外面にミガキ、内面にケズリ、底部外面にナデ、底部内面にはケズリを施す。

735 は口径 17.3 cm、底径 12.7 cm、器高 15.6 cm。口縁部にヨコナデ、杯部外面にミガキ、杯部内面にナデ、脚部は内外面にナデ、底部にヨコナデを施す。

736～746、748 は土師器碗である。

736 は最上層から出した。口径 12.9 cm、器高 4.8 cm、残存率 80%、口縁端部が外に突出する。口縁部にヨコナデ、体部外面に指オサエの後ケズリ、体部内面にナデを施す。また、煤が付着している。

737 は口径 14.0 cm、器高 5.8 cm、残存率 99%、口縁端部が外に突出する。口縁部外面にヨコナデ、内面にヨコハケ、体部外面にケズリ、体部内面に指オサエの後ナデを施す。

738 は口径 16.0 cm、器高 5.1 cm、残存率 70%、口縁端部は外に突出する。口縁部にヨコナデ、体部外面にナデ、内面に板ナデを施す。

739 は口径 12.7 cm、器高 5.6 cm、残存率 95%、口縁端部が外に突出する。口縁部にヨコナデ、体部外面に指オサエの後ナデ、体部内面にナデを施す。

740 は口径 14.1 cm、器高 5.2 cm、完形、口縁端部が外に突出する。口縁部にヨコナ

デ、体部外面に指オサエの後ケズリ、体部内面にはナデを施す。また、底部に穿孔が施されている。

741は口径13.3cm、器高5.1cm、残存率95%、口縁端部が外に突出する。口縁部にヨコナデ、体部外面に指オサエの後ナデ、体部内面にナデを施す。

742は口径12.0cm、器高5.5cm、残存率90%、口縁部は直立する。口縁部にヨコナデ、体部外面に指オサエ、体部内面にはナデを施す。

743、744は最上層から出土した。口縁部にヨコナデ、体部外面にナデの後ミガキ、体部内面にナデを施す。743は口径11.6cm、器高5.8cm、残存率80%。744は口径11.4cm、器高6.4cm、残存率95%。

745は口径14.0cm、器高6.0cm、残存率80%、口縁部は内湾する。口縁部にヨコナデ、体部外面に指オサエの後ナデ、体部内面にナデを施す。

746は口径12.8cm、器高5.5cm、残存率95%。口縁部にヨコナデ、体部外面にナデ、内面に指オサエの後ナデを施す。

748は口径18.0cm、器高7.8cm、残存率20%、口縁部は直立する。口縁部にヨコナデ、体部は外面にケズリ、内面にナデを施す。

747は土師器鉢で、口径13.8cm、器高7.6cm、残存率85%、口縁部は内湾する。口縁部にヨコナデ、胴部は外面に指オサエの後ケズリ、内面に板ナデを施す。指オサエおよびナデを施す。

749は土師器小型鉢で、口径9.6cm、器高8.6cm、残存率85%、口縁部がやや内湾し、胴部は球形を呈する。口縁部にヨコナデ、胴部外面にタテハケおよびヨコハケ、胴部内面に指オサエの後ケズリを施す。

750は土師器小型丸底壺で、口径6.8cm、器高6.1cm、残存率75%。口縁部が外傾し、胴部は球形を呈する。口縁部にヨコナデ、胴部外面にケズリ、胴部内面に板ナデを施す。

751は土師器小型丸底壺である。口径9.5cm、器高9.1cmの完形で、二重口縁を有する。口縁部にヨコナデ、胴部外面にケズリ、胴部内面には板ナデを施す。

752は土師器小型丸底壺で、口径10.3cm、器高10.2cm。口縁部がやや内湾し、胴部は球形を呈する。口縁部にヨコナデ、胴部外面にナデ、下半のみケズリ、胴部内面に指オサエの後ナデを施す。

753は土師器壺である。口径6.8cm、残存高12.1cm、残存率75%、口縁端部を欠損している。口縁部が外傾し、胴部は球形を呈する。口縁部にヨコナデ、胴部外面にナデ、下半にはナメハケ、胴部内面にナデ、下半にケズリおよび指オサエを施す。

754は土師器壺で、残存高11.9cm、残存率40%、胴部のみ残存している。胴部は球形を呈し、外面にナデ、内面には指オサエの後ケズリを施す。

755は土師器壺で、口径10.8cm、器高13.0cm、残存率90%。外傾する口縁部は端部が肥厚し、胴部は球形を呈する。口縁部に指オサエの後ヨコナデ、胴部は外面にハケおよびナデ、内面に指オサエおよびナデを施す。また、煤が付着している。

756は土師器壺で、口径9.4cm、器高15.1cm、残存率90%、口縁部は外傾し、胴部は球形を呈する。口縁部にヨコナデ、胴部外面にナメハケ、胴部内面に指オサエの後ナデを施す。また、煤が付着している。

757 は土師器壺で、口径 11.6 cm、器高 14.3 cm、残存率 99%。口縁部が外傾し、胴部は球形を呈する。口縁部にヨコナデ、胴部内外面にケズリ、胴部内面にケズリおよび指オサエの後ナデを施す。

758 は土師器大型壺である。口径 20.0 cm、残存高 12.5 cm、残存率 20%、口縁部はくの字状を呈し、端部が肥厚する。口縁部外面にタテハケ、内面にヨコハケ、胴部外面にタテハケおよびヨコハケ、胴部内面にケズリを施す。

759～782、784、785 は土師器甕である。

759 は口径 14.7 cm、残存高 20.8 cm、残存率 30%。口縁部はやや内湾し、胴部が球形を呈する。口縁部外面にタテハケの後ヨコナデ、胴部外面にナナメハケおよびヨコハケ、胴部内面にはケズリを施す。また、煤が付着している。

760 は口径 11.2 cm、器高 14.7 cm、残存率 90%。口縁部が外傾し、胴部は球形を呈する。口縁部外面にヨコナデ、内面にヨコハケ、胴部外面にタテハケ、胴部内面に指オサエおよびナデを施す。また、煤が付着している。

761 は口径 11.2 cm、器高 12.2 cm、残存率 40%。口縁部が外反し、胴部は球形を呈する。口縁部外面にヨコナデ、内面にヨコハケ、胴部は外面にナナメハケ、内面にヨコナメハケを施す。また、煤が付着している。

762 は口径 13.8 cm、器高 12.0 cm、残存率 70%。口縁部がくの字状を、胴部は球形を呈する。口縁部にヨコナデ、胴部外面にヨコハケおよびナナメハケ、胴部内面には指オサエおよびナデを施す。また、煤が付着している。

763 は残存高 9.5 cm、残存率 40%、胴部下半のみ残存している。胴部は球形を呈し、外面にタテハケ、内面にはナナメハケを施す。また、煤が付着している。

764 は口径 12.9 cm、残存高 12.9 cm、残存率 40%、口縁部が外傾し、胴部は球形を呈する。口縁部外面にヨコナデ、内面にヨコハケおよびナナメハケ、胴部外面にタテハケ、胴部内面にヨコハケおよびナナメハケを施す。また、煤が付着している。

765 は口径 15.8 cm、器高 19.3 cm、残存率 90%。外反する口縁部は端部が肥厚し、胴部は扁球形を呈する。口縁部にヨコナデ、胴部外面に指オサエの後タテハケ、胴部内面に指オサエを施す。また、煤が付着している。

766 は口径 14.7 cm、器高 19.5 cm、残存率 99%、口縁部が外傾し、胴部は扁球形を呈する。口縁部にヨコナデ、胴部外面にタテハケ、胴部内面に指オサエを施す。また、煤が付着している。

767 は口径 15.3 cm、器高 18.4 cm、残存率 80%、口縁部がくの字状を、胴部は球形を呈する。口縁部外面にヨコナデ、内面にヨコハケ、胴部は外面にナナメハケ、内面に指オサエおよびナデを施す。また、煤が付着している。

768 は口径 27.0 cm、残存高 21.45 cm、残存率 30%。口縁部が外傾し、球形を呈する胴部には把手がとりつく。口縁部外面にヨコナデ、口縁部内面にヨコハケ、胴部外面にヨコハケおよびナナメハケ、胴部内面に指オサエの後ナナメハケを施す。

769 は口径 9.8 cm、器高 13.4 cm、残存率 90%。口縁部が外傾し、胴部は球形を呈する。口縁部外面にタテハケの後ヨコナデ、内面にヨコハケ、胴部は外面にタテハケおよびナナメハケ、内面にケズリを施す。また、器内に炭化物が付着している。

770 は口径 11.0 cm、器高 13.2 cm、残存率 95%。口縁部が外傾し、胴部は球形を呈

する。口縁部外面にヨコナデ、内面にヨコハケ、胴部外面にタテハケおよびナメハケ、胴部内面に指オサエおよびナデを施す。また、煤が付着している。

771は口径11.6cm、器高12.5cm、残存率70%。口縁部が外傾し、胴部は球形を呈する。口縁部外面にヨコナデ、胴部は外面にタテハケ、内面にケズリおよび指オサエの後ナデを施す。また、煤が付着している。

772は口径14.0cm、器高12.8cm、残存率70%。口縁部がくの字状を、胴部は球形を呈する。口縁部にヨコナデ、胴部外面にナデ、下半には粗いハケ、胴部内面に板ナデ、下半には指オサエの後ナデを施す。また、煤が付着している。

773は口径12.2cm、器高15.8cm、残存率75%。口縁部が外傾し、胴部は球形を呈する。口縁部外面にヨコナデ、内面にヨコハケ、胴部外面にナメハケ、胴部内面に指オサエおよびケズリを施す。また、煤が付着している。

774は口径15.4cm、残存高19.4cm、残存率60%、くの字状を呈する口縁部は端部が肥厚し、胴部は球形を呈する。口縁部外面にヨコナデ、内面にヨコハケ、胴部外面にヨコハケおよびナメハケ、胴部内面にはケズリを施す。

775は口径14.0cm、残存高17.0cm、残存率50%。口縁部が外傾し、胴部は球形を呈する。口縁部外面にヨコナデ、内面にヨコハケ、胴部外面にナメハケ、胴部内面に指オサエの後ナデを施す。また、煤が付着している。

776は口径23.1cm、器高13.7cm、残存率30%、口縁部が外反し、胴部は球形を呈する。口縁部外面にヨコナデ、内面にヨコハケ、胴部外面にタテハケ、胴部内面に板ナデを施す。また、煤が付着している。

777は口径13.3cm、器高20.0cm、残存率80%。くの字状を呈する口縁部は端部が肥厚し、胴部は扁球形を呈する。口縁部にヨコナデ、胴部外面にナデ、胴部内面に指オサエの後板ナデを施す。また、煤が付着している。

778は口径9.8cm、器高13.4cmの完形である。口縁部が外傾し、胴部は球形を呈する。口縁部外面にヨコナデ、内面にヨコハケ、胴部は外面にタテハケおよびナメハケ、内面に指オサエの後ケズリを施す。また、胴部に穿孔が施され、煤が付着している。

779は長胴甕で、口径12.7cm、器高23.2cm、残存率60%、口縁部は外傾する。口縁部にヨコナデ、胴部外面にタテハケ、胴部内面には指オサエの後ナデを施す。また、煤が付着している。

780は長胴甕で、口径15.4cm、器高19.4cm、残存率45%。口縁部はくの字状を呈し、端部が肥厚する。口縁部にヨコナデ、胴部外面に指オサエおよびナデ、胴部内面に指オサエの後、板ナデを施す。また、煤が付着している。

781は長胴甕で、口径14.0cm、残存高15.8cm、残存率30%、口縁部は外反する。口縁部にヨコナデ、胴部は外面にタテハケ、内面に指オサエの後、板ナデを施す。また、煤が付着している。

782は二重口縁甕である。口径17.3cm、残存高12.8cm、残存率15%、口縁部は肥厚する。口縁部にヨコナデ、胴部外面にヨコハケおよびタテハケ、胴部内面には指オサエの後ナデおよびケズリを施す。また、煤が付着している。

784は長胴甕で、口径17.5cm、器高30.0cm、残存率90%、口縁部は内湾する。口

縁部外面にヨコナデ、胴部は外面にヨコハケおよびナナメハケ、内面に粗いナナメハケの後ケズリ、下半にはタテハケを施す。

785 は長胴甕で、口径 20.9 cm、器高 40.3 cm、残存率 90%、口縁部は外反する。口縁部外面にヨコナデ、内面にヨコハケ、胴部外面にタテハケおよびナナメハケ、胴部内面にヨコナメハケを施す。また、煤が付着している。

783 は製土土器である。口径 13.2 cm、底径 4.7 cm、器高 22.7 cm、残存率 60%、口縁部が外傾する。胴部は球形を呈し、底部は平底である。口縁部にヨコナデ、胴部外面にタタキ、胴部内面に板ナデおよび指オサエの後ナデを施す。

786 は完形の杯蓋で、口径 12.25 cm、器高 4.4 cm である。内に傾斜する端部はほぼ平らに仕上げられ、稜は非常に鋭く、段を成している。天井部に回転ヘラケズリが施されている。TK208 型式のものと考えられる。

787 は杯蓋で、中層から出土した。残存率 95%、口径 12.3 cm、器高が 4.5 cm である。内に傾斜する端部はほぼ平らで、浅い沈線が施される。稜はやや鋭く、突出して段を成し、天井部の広範囲に反時計回りの回転ヘラケズリが施される。TK23 型式のものと考えられる。

788 は杯蓋で、最上層から出土した。残存率 50%、口径 12.4 cm、器高 4.05 cm である。端部は水平に伸び、断面形は平らに仕上げられ、稜は鋭く、突出している。天井部は、全面に反時計回りの回転ヘラケズリが施されている。TK23 型式のものと考えられる。

789 はほぼ完形の杯蓋で、口径 12.3 cm、器高が 4.5 cm である。内に傾斜する端部はほぼ平らな断面形を呈する。稜はやや鋭く、突出して段を成し、体部は長い。天井部は、広範囲に時計回りの回転ヘラケズリが施されている。TK23 型式のものと考えられる。

790 は完形の杯蓋で、口径 11.6 cm、器高が 4.55 cm である。端部に浅い沈線を施すが、断面形はほぼ平らである。稜はやや鋭く、突出して段を成している。天井部には反時計回りの回転ヘラケズリが施されている。TK47 型式のものと考えられる。

791 はほぼ完形の杯蓋で、口径 12.4 cm、器高が 5.1 cm である。端部は浅い沈線を施すが、ほぼ平らな断面形を呈する。稜はやや鋭く、突出して段を成している。天井部は、やや広範囲に反時計回りの回転ヘラケズリが施されている。TK23～TK47 型式のものと考えられる。

792 は杯蓋で、中層から出土した。残存率は 90%、口径 14.6 cm、器高が 5.7 cm である。端部は沈線を施し、稜はやや鈍いが、突出して段を成している。天井部には時計回りの回転ヘラケズリが施されている。MT15 型式のものと考えられる。

793 はほぼ完形の杯蓋で、上層から出土した。口径 14.2 cm、器高が 4.7 cm である。端部は強く沈線を施し、稜は鋭く、突出して段を成している。天井部は、やや広範囲に反時計回りの回転ヘラケズリが施されている。MT15 型式のものと考えられる。

794 は完形の杯蓋で、中層から出土した。口径 13.1 cm、器高が 5.05 cm である。端部は丸みを帯びるが、沈線を施している。稜はやや鈍いが、突出して段を成している。天井部は、やや広範囲に時計回りの回転ヘラケズリが施されている。MT15 型式のものと考えられる。

795 は完形の杯蓋で、中層から出土した。口径 13.3 cm、器高が 4.6 cm である。端部には沈線を施し、稜は鈍く、段を成していない。天井部には反時計回りの回転ヘラケズリが施されている。MT15~TK10 型式のものと考えられる。

796 は杯蓋で、上層から出土した。残存率 90%、口径 14.5 cm、器高が 5.2 cm である。端部断面は丸く、稜は形骸化しており、沈線によって表現する。天井部には回転ヘラケズリが施されている。TK10 型式のものと考えられる。

797 は完形の高杯蓋で、口径 12.3 cm、器高が 5.7 cm。端部には非常に浅い沈線を施し、稜は鈍いが、突出して段を成している。天井部には反時計回りの回転ヘラケズリが施され、扁平なつまみが付されている。TK23 型式のものと考えられる。

798 は完形の高杯蓋で、口径 11.4 cm、器高が 5.4 cm。端部には沈線を施し、稜はやや鋭く、突出して段を成している。天井部にはやや狭い範囲に回転ヘラケズリが施され、扁平なつまみが付されている。TK23~TK47 型式のものと考えられる。

799 は高杯蓋で、残存率 70%、口径 13.6 cm、器高 5.9 cm。端部には沈線を施し、稜は鋭いが突出していない。天井部には反時計回りの回転ヘラケズリが施され、扁平なつまみが付されている。MT15 型式のものと考えられる。

800 はほぼ完形の杯身で、上層から出土した。口径 11.2 cm、器高が 4.9 cm である。立ち上がりはやや長く、やや内傾して伸び、内に傾斜する端部の断面形は平らである。底部には時計回りの回転ヘラケズリを施しており、受部は非常に長く、外上方へ伸び、鋭い。TK23 型式と考えられる。

801 はほぼ完形の杯身で、上層から出土した。口径 11.1 cm、器高が 4.9 cm である。立ち上がりは長く、やや内傾して伸び、端部は内に傾斜して浅い沈線を施されるが、断面形は平らである。底部には時計回りの回転ヘラケズリを施しており、受部は非常に長く、外上方へ伸び、鋭い。また、底部外面に 1 条のヘラ描きがある。TK23 型式と考えられる。

802 は杯身で、残存率 90%、口径 10.0 cm、器高が 4.8 cm である。立ち上がりはやや短く、ほぼ垂直に伸び、端部は内に傾斜して平らな断面形を呈する。底部には時計回りの回転ヘラケズリを施しており、受部は外上方へやや長く伸び、鋭い。TK23 型式と考えられる。

803 はほぼ完形の杯身で、口径 9.8 cm、器高が 4.5 cm である。立ち上がりはやや長く、ほぼ垂直に伸び、内に傾斜する端部の断面形は平らである。底部には時計回りの回転ヘラケズリを施しており、受部はやや長く、外上方へ伸び、鋭い。TK23 型式と考えられる。

804 はほぼ完形の杯身で、口径 9.8 cm、器高が 4.5 cm である。立ち上がりはやや長く、ほぼ垂直に伸び、端部は内に傾斜して平らな断面形を呈する。底部には時計回りの回転ヘラケズリを施しており、受部はやや長く、外上方へ伸び、鋭い。TK23~TK47 型式と考えられる。

805 はほぼ完形の杯身で、口径 10.5 cm、器高が 4.7 cm である。立ち上がりはやや短く、内傾して伸び、端部には浅い沈線を施すが、断面はほぼ平らである。底部には時計回りの回転ヘラケズリを施しており、受部はやや長く、外上方へ伸び、鋭い。TK47 型式と考えられる。

806 はほぼ完形の杯身で、口径 10.0 cm、器高が 5.2 cm である。立ち上がりはやや長く、内傾して伸び、端部は内に傾斜してほぼ平らな断面形を呈する。底部には反時計回りの回転ヘラケズリを施しており、受部は外上方へやや長く伸びている。TK47 型式と考えられる。

807 は完形の杯身で、口径 10.6 cm、器高が 4.7 cm である。立ち上がりはやや長く、垂直に伸び、端部には沈線を施す。底部には時計回りの回転ヘラケズリを施しており、受部はやや短く、外上方へ伸び、鋭い。TK47 型式と考えられる。

808 はほぼ完形の杯身で、口径 13.0 cm、器高は 5.55 cm である。立ち上がりは長く、ほぼ垂直に伸び、端部には沈線を施している。底部には反時計回りの回転ヘラケズリが施されている。MT15 型式のものと考えられる。

809 はほぼ完形の杯身で、口径 12.6 cm、器高は 5.3 cm である。立ち上がりは長く、ほぼ垂直に伸び、端部には沈線を施している。底部は反時計回りの回転ヘラケズリで調整される。MT15 型式のものと考えられる。

810 はほぼ完形の有蓋高杯で、口径 10.0 cm、器高 9.1 cm である。短脚 3 方向透かしで、方形の窓が設けられている。杯部の立ち上がりはやや長く、ほぼ垂直に伸び、端部に沈線が施される。受部は短く、外上方へ伸び、やや鋭い。底部には狭い範囲に回転ヘラケズリが施される。脚部は透かし窓の直下に突帯を有し、内側に屈曲している。TK47 型式と考えられる。

811 は高杯で、上層から出土した。杯部上部を欠損しており、残存率 70%、残存高 7.8 cm である。短脚で 3 方向に円形の透かし窓を穿ち、その直下に鈍い突帯を施し、屈曲している。円孔透かしであることから有蓋高杯と推定され、TK23～TK47 型式と考えられる。

812 は無蓋高杯で、上層から出土した。残存率 60%、復元口径 18.0 cm、器高 12.5 cm である。杯部の口縁部は外上方へ直線的に伸びるが、端部がさらに外上方へ屈出し、丸く収められている。胴部には 2 条の突帯を巡らせ、両者の間に波状文、同じ高さにつまみを付す。つまみを欠損しているため、対称に付されるか否かは不明である。底部に回転ヘラケズリを施し、底部内面をナデ、その他をヨコナデで調整する。脚部は短脚 4 方向透かしで、透かし窓は方形である。「ハ」の字状に開き、端部は下方へ屈曲している。全面ヨコナデで調整され、杯部に取付け後、ヨコナデで接着している。杯部のつまみ、脚部の形態から TK208 型式のものと考えられる。

(2) F 地区

第 54 トレンチ

SD74

813 は土師器皿で、口径 17.5 cm、器高 3.4 cm、残存率 60%。口縁部にヨコナデ、体部外面にケズリ、体部内面にナデを施す。

814～816 は土師器甕である。

814 は口径 27.2 cm、残存高 10.7 cm、残存率 20%、口縁部は外反し、端部が肥厚する。口縁部にヨコナデ、胴部は外面にタテハケ、内面に指オサエの後、板ナデを施す。

815、816 の口縁部は外反し、端部が肥厚する。また、胴部に把手がとりつく。

815は口径27.8cm、残存高18.0cm、残存率25%、口縁部は外反し、端部が肥厚する。また、胴部に把手がとりつく。口縁部にヨコナデ、胴部外面にナナメハケ、胴部内面には板ナデを施す。

816は口径28.0cm、器高26.6cm、残存率50%である。口縁部は外反して端部が肥厚し、胴部に把手がとりつく。口縁部にヨコナデ、胴部は外面にタテハケおよびナナメハケ、内面に板ナデ、下半には指オサエの後ナデを施す。

817は鉄製の刀子で、残存長5.0cm、幅1.0cm、刀部の厚さ0.4~0.45cmである。

F 調査区

SK63

821、822は上層出土。823は下層出土。

823はミニチュア土器で、口径7.7cm、器高8.8cm、完形である。口縁部が直立し、底部は丸底を呈する。口縁部にヨコナデ、胴部外面にナデ、胴部内面には指オサエの後ナデを施す。

821は土師器高杯で、底径9.8cm、残存高7.9cm、残存率65%、脚部のみ残存している。杯部外面にタテハケ、脚部は外面に面取り、底部外面にケズリ、底部内面に指オサエの後ナデを施す。また、脚部内面にはしぼり痕が残る。

822は土師器小型壺で、口径7.7cm、器高8.8cm、完形である。口縁部が外反し、底部は丸みを帯びた平底を呈する。口縁部にヨコナデ、胴部外面にナデおよびヨコハケ、胴部内面にケズリの後ナデを施す。

SK65

819は土師器皿で、口径16.8cm、器高2.5cm、残存率75%。口縁部にヨコナデ、体部外面に指オサエの後ナデ、体部内面にナデを施す。

825は土師器甕で、口縁部は外反し、端部が肥厚する。口縁部外面にヨコナデ、内面にヨコハケ、胴部外面にタテハケ、胴部内面に指オサエの後ナデを施す。

SK66

818は土師器杯で、口径13.7cm、器高3.2cm、完形である。口縁部にヨコナデ、体部内外面に指オサエの後ナデを施す。

SD82

826は土師器甕で、口径20.8cm、器高23.3cm、残存率70%、口縁部が外反し、胴部は球形を呈する。口縁部にヨコナデ、胴部外面にタテハケおよびナナメハケ、胴部内面に指オサエの後、板ナデを施す。

SD87

820は土師器皿で、口径19.6cm、器高2.55cm、口縁部にヨコナデ、体部は内外面にナデを施す。

SD89

824は土師器甕で、口径26.0cm、器高13.3cm、口縁部は外反し、端部が肥厚する。口縁部外面にヨコナデ、内面にヨコハケ、胴部は外面にナデ、内面に指オサエおよびナデを施す。

(3) G地区

G調査区

建物柱穴

828 は土師器皿で、口径 17.8 cm、器高 2.8 cm、残存率 10%。SP56 から出土した。口縁部にヨコナデ、体部内外面にナデを施す。

829 は土師器皿で、口径 19.8 cm、器高 2.7 cm、残存率 10%。SB84-SP01 から出土した。口縁部にヨコナデ、体部内外面にナデを施す。

827 は土師器杯で、口径 14.8 cm、器高 2.7 cm、残存率 10%。SB75-SP01 から出土した。口縁部にヨコナデ、体部内外面にナデを施す。

830 は土師器杯で、復元口径 19.8 cm、残存高 3.8 cm、残存率 10%。SP55 から出土した。口縁部にヨコナデ、体部内外面にナデを施す。

SE45

831、832 は井戸枠に転用された土師器甕で、底部が打ち欠かされている。831 が一段目、832 が二段目である。ともに胴部に把手がつくが、これも取り去れている。831 は口径 27.2 cm、残存高 24.0 cm、832 は口径 29.1 cm、残存高 22.0 cm である。両者とも口縁部は外反し、端部が肥厚する。胴部は球形を呈し、把手がとりつく。口縁部外面にヨコナデ、内面にヨコハケ、胴部外面にタテハケおよびナメハケ、胴部内面に指オサエの後ナデを施す。また、煤が付着している。

SE46

833~838 は黒書土器、839~843 は土師器、844、845 は木製品である。

833 は土師器皿で、口径 15.8 cm、器高 2.5 cm、残存率 60%。口縁部にヨコナデ、体部外面にケズリ、体部内面にナデを施す。底面に「中」と墨書がある。

834 は土師器皿で、口径 15.8 cm、器高 2.4 cm、完形。口縁部にヨコナデ、体部外面に指オサエの後ケズリ、内面にナデを施す。底面に「四」と墨書がある。

835 は土師器皿で、口径 15.8 cm、器高 2.1 cm、残存率 98%。口縁部にヨコナデ、体部外面に指オサエの後ケズリ、内面にナデを施す。底面に「十」と墨書がある。

836 は土師器杯で、口径 13.8 cm、器高 3.7 cm、完形。口縁部にヨコナデ、体部外面に指オサエ、体部内面にナデを施す。底面に墨書があり、「天」ないし「夫」と思われる。

837 は土師器杯で、口径 13.2 cm、器高 3.5 cm、完形。口縁部にヨコナデ、体部外面に指オサエの後ケズリ、体部内面にナデを施す。底面に「西」、「口」と墨書がある。

838 は土師器杯で、口径 13.3 cm、器高 3.7 cm、完形。口縁部にヨコナデ、体部外面に指オサエの後ナデ、体部内面にナデを施す。底面の2箇所に「西」と墨書がある。

842 は土師器皿で、口径 14.9 cm、器高 2.1 cm、残存率 25%。口縁部にヨコナデ、体部外面に指オサエの後ケズリ、体部内面にナデを施す。

839~841 は土師器杯である。

839 は口径 14.3 cm、器高 3.5 cm、完形。口縁部にヨコナデ、体部外面に指オサエの後ナデ、体部内面にナデを施す。

840 は口径 14.8 cm、器高 3.3 cm、残存率 25%。口縁部にヨコナデ、体部外面に指オサエの後ケズリ、体部内面にナデを施す。また、煤が付着している。

841は口径14.8cm、器高3.1cm完形。口縁部にヨコナデ、体部外面に指オサエの後ケズリ、体部内面にナデを施す。また、煤が付着している。

843は土師器甕で、口径21.4cm、残存高7.4cm、残存率10%。口縁部外面にヨコナデ、内面にヨコハケ、胴部外面に粗いタテハケ、胴部内面に指オサエの後ナデを施す。

844は曲物側板で、直径34.0cm、高さ21.2cm、厚さ0.3cmである。内面には斜格子状の刻み目と垂直方向で平行の刻み目が施されている。

845は横楯で、縦3.7cm、横5.7cm、厚さ0.8cm、櫛歯長2.9cmで残存率は70%である。材質はセンサク科イスノキ属イスノキである。

SE47

853は土師器羽釜で、口径26.7cm、残存高12.5cm。椀内埋土第6層から出土した。口縁部は外反し、端部が肥厚する。また、胴部に鏝を貼り付ける。口縁部にヨコナデ、胴部内外面にナデを施す。また、煤が付着している。

854は刀子で、残存長14.3cm、最大幅1.2cm、最大厚0.5cm、残存刀身部長13.5cm、残存茎部長0.8cmで、刀身先端と茎部の下半部は欠損している。茎部は刀身の刃部側で薄く、背側で厚くなっている。両側で、刃部側がナデ側、背側では角側になっている。

SE48

846、860は墨書土器、847～854、856～859は土師器、855は須恵器である。

846は土師器杯で、口径20.1cm、器高3.4cm。口縁部にヨコナデ、体部外面に指オサエの後ナデ、体部内面にナデを施す。底面に「中」と墨書がある。

860は土師器甕で、口径27.0cm、器高27.6cm、残存率85%。口縁部が外反し、球形を呈する胴部に把手がとりつく。口縁部外面にヨコナデ、内面にヨコハケ、胴部は外面にタテハケおよびナメハケ、内面に指オサエの後ナデを施す。胴部外面に「ノ」を重ねて2重に「〇」の墨書がある、逆「の」字状の記号である。

847は土師器皿で、口径14.9cm、残存高2.1cm、残存率30%。口縁部にヨコナデ、体部外面にケズリ、体部内面にナデを施す。

848～851は土師器杯である。

848は口径11.8cm、器高2.7cm、残存率50%。口縁部にヨコナデ、体部外面に指オサエの後ナデ、体部内面にナデを施す。

849は口径12.9cm、器高3.7cm、残存率95%。口縁部にヨコナデ、体部外面に指オサエ、体部内面にナデを施す。

850は口径13.4cm、器高3.4cm、残存率70%。口縁部にヨコナデ、体部外面に指オサエの後ナデ、体部内面にナデを施す。

851は口径11.8cm、器高3.8cm、完形。口縁部にヨコナデ、体部外面に指オサエ、体部内面にナデを施す。

852は土師器碗で、口径21.6cm、器高7.0cm、残存率45%。口縁部にヨコナデ、体部は外面にケズリ、内面に板ナデを施す。

856～859は土師器甕である。

856は口径18.0cm、器高16.2cm、残存率95%。外反する口縁部は端部が肥厚し、胴部は球形を呈する。口縁部にヨコナデ、胴部外面にタテハケおよびナメハケ、胴

部内面に指オサエの後ナデを施す。また、煤が付着している。

857は口径15.4cm、残存高8.5cm、残存率30%。口縁部外面にヨコナデ、内面にヨコハケ、胴部外面に粗いたてハケ、胴部内面には指オサエの後ナデを施す。

858は口径20.2cm、残存高11.0cm、残存率25%。口縁部は外反し、端部が肥厚する。口縁部外面にヨコナデ、内面にヨコハケ、胴部外面にたてハケ、胴部内面に指オサエの後ナデを施す。また、煤が付着している。

859は口径34.8cm、残存高14.2cm、残存率30%。口縁部は外反し、胴部に把手がとりつく。口縁部外面にヨコナデ、内面にヨコハケ、胴部は外面にたてハケおよびナメハケ、内面に指オサエの後ナデを施す。

855は杯蓋で、残存率40%、復元口径14.2cm、器高が2.2cmである。天井部はふくらみがなく、平らに成形され、口縁端部は下方へ屈曲する。天井部外面はヘラケズリ後ナデ、他はヨコナデによって調整され、非常に扁平な宝珠つまみが付されている。また、内面全体に墨が付着している。奈良時代のものと考えられる。

第7章 平成17年度調査

平成17年度はH、I、J、K、L地区を対象とし、総調査面積は4,764.5㎡である。

1 遺構

(1) H地区

H調査区

H地区H調査区は、区画整理事業地内のほぼ中央にあたる。新河川工事区域内に南北29.0m、東西48.0m、面積1,392.0㎡の東西トレンチを設定した。

現地表面は標高52,800m～53,000m。現代の水路が調査区内を東西方向に横断しており、それによる攪乱の最大深度は1.0mに達する。第Ⅰ層は整地土、第Ⅱ層は層厚0.4m～0.5mの旧耕作土層であり、長期にわたる耕作の痕跡が認められた。重機掘削によってこれらを除きしたところで、調査区西半で黄褐色シルト～粘土の基盤層、東半では河川の粗粒物堆積層が現れる。調査はこの面を遺構面として実施した。また、第Ⅱ層には古代の遺物、少量の瓦器片、磁器片など、中世から近世の遺物が含まれていた。主な検出遺構は、自然河道、井戸、掘立柱建物、ピットであり、平安時代から鎌倉時代を中心とする時期の居住感が形成されていたと考えられる。

耕作溝

ほぼ南北方向に走る約80条を検出した。また、調査区中央において、東西方向に走るものを検出しており、条里地割による境界痕跡の可能性が考えられる。溝埋土からは土師器や須恵器細片、下層からの混入と思われる埴輪片やF1K、磨製石斧、瓦、埴などが出土している。

掘立柱建物

上記耕作溝を除く約450基の遺構中、その大半が柱穴であり、柱痕の残るものが多い。これらから復元できる建物には、ほぼ正方位にのる例と西傾するものがある。さらに、西傾するものの中でもその角度に差異が見られ、時期差を示す可能性がある。

SK72

トレンチ南西で検出した南北33.5m、東西15.5m以上、深さは0.1m程度の土器溜まりである。遺物は、須恵器杯II身のほか土師器甕や高杯、製塩土器、埴輪の破片が出土した。古墳時代後期の遺構と考えられる。

SK75

調査区南東で検出した。南北3.1m、東西2.8m、深さが検出面から0.5mの土坑である。土師器、須恵器、製塩土器片などが出土した。土師器および須恵器は完形のものが多いが、その一部を打ち欠くなどした、祭祀に用いられたと思われる土器が含まれる。また、須恵器は5世紀後半のものと考えられる。

埋納遺構

古墳時代の土器が埋納されたSK74や、石と土器片が埋納されたSK73などの土坑が検出されている。

SE49

調査地中央の北端に位置し、東西長2.9m、南北長2.7m、検出面からの深さ1.6mの平面楕円形を呈する素掘井戸である。埋土からは土師器や須恵器、瓦器碗などとともに砥石や大型の礫が出土した。これらは上層にまとまって包含されており、井戸廃棄時に埋められたものと思われる。遺物の年代観から、廃棄年代は12世紀前半と考えられる。

SE51

トレンチ北東、東壁際に西側半分を検出した。掘形は直径2.0mの平面円形と考えられ、深さは検出面から約0.95mで、井筒に転用された曲物が下層から出土した。曲物は平面円形で直径0.4m、最大高0.25m、厚み0.3cm～0.4cm、内面にはケビキが斜格子状に行われている。側板の上端は失われていたが、箍は上下段とも残存していた。側板の榫皮結合は一列五段以上、箍の結合は上下段ともに二列二段である。内面下端から1.0cm～1.5cmの部分には底板の圧痕と5本分の方形釘孔が見られる。

遺物は土師器、瓦器、黒色土器が主である。完形のものも多く、一部は入れ子状になって出土しており、井戸廃棄時に祭祀が行われた可能性がある。また、土器の年代から、井戸の廃絶は11世紀末から12世紀初頭と考えられる。

SE52

調査地の北東に位置する、南北2.6m、東西2.5m、深さ約1.0mの平面不整形の井戸である。最上層(1、2層付近)から多量の上器片が出土している。上層埋土は約0.1mの厚さで水平堆積しており、徐々に埋没が進行したと考えられる。また、下層埋土の状態から、井筒を設けていた可能性がある。遺物は土師器甕、杯、ミニチュア碗、須恵器甕、杯H蓋、杯身、高杯、甕、磨製石斧、桃や梅の種が出土した。

SE53

調査地の南東、河川埋土層上に位置する南北長3.3m、東西長2.9mの平面楕円形を呈する素掘井戸である。深さは検出面から0.5mと浅く、下層にオリブ黒色の粘土が溜まっていた。遺物は土師器杯、土師器の把手付甕や須恵器の杯身、杯蓋が出土しており、TK217、TK46型式の杯G蓋が下限になる。

SE54

調査区中央で検出した。現代水路跡により北の掘形が一部破壊されていたが、一辺1.9m前後の隅丸方形掘形と考えられる。さらに、検出面から約0.6m掘り下げたところで一辺1.2mの方形井戸枠を検出した。井戸枠の残存高は1.6m、上部構造は不明であるが、南東部に横板の外側に長さ約0.55mの柱が残っていたことから、井戸枠はさらに0.5mの高さがあったものと考えられる。枠内の埋土は灰色粘土で4層に分かれ、中層からは斎串や木簡、墨書土器、打欠きのある土器などがまとまって出土した。また、最下層でも土器が一括して出土しており、井戸廃棄時に一気に埋められたと考えられる。これらの土器は平安時代初頭に比定され、時期差がみられないことから、井戸廃棄時に井泉祭祀が行われたと考えられる。また、土器以外に曲物底板片、斎串、木簡、瓢箪など、木製品も多く出土している。斎串は上層に1本、中層に8本、下層に2本の計11本が包含されていた。大きさは、幅2.0cm～2.8cm、長さ18.0cm～20.0cmの大型、幅2.0cm～2.2cm、長さ15.0cm～17.0cmの中型、幅2.3cm、長さ12.0cm

の小型の三種に大別できる。

SE56

旧河道埋土掘削中に検出したもので、調査区北東に位置する。剃貫きの井戸枠を有するが、掘形を確認することはできなかった。井戸枠は直径 0.45m、最大残存高 0.57m、厚みは 0.03m～0.05mで、内外面に 0.04m～0.07m幅の削り痕跡がみられる。枠内の埋土は 2層に分かれ、土師器、須恵器、木製品、石製品など多量の遺物を包含していた。出土した土器はその大半が 1.0cm～3.0cm程度の細片であり、人為的に割られたものと考えられる。器種は土師器甕、小型丸底壺、須恵器は杯口蓋、甕胴部などである。他に小玉、有孔円盤、木製縦櫛が各 1点出土した。

SR22

調査地東半において検出した、幅 15.0m以上、深さ 0.7m～0.9mの自然河道である。河道に削られた基盤層は青灰色粘土からなる無遺物層である。土層断面に数回にわたる堆積が見受けられることから、一定期間流路となっていたことが考えられるが、遺物は底部で縄文土器の細片が僅かに出土するのみである。

SR23

調査区中央では、南北方向に延びる幅 1.0m～2.0m、深さ約 1.0mの流路を検出した。埋土に遺物は包含されておらず、自然堆積によって埋没している。この流路南端は別の流路に合流して西へ向かうが、これも無遺物であった。

(2) I 地区

I 調査区

I 地区 I 調査区は区画整理事業地のほぼ中央、新河川工事区域の南北 29.0m、東西 44.8m～66.2m、面積 1,682.5㎡を調査対象とした。

現地表面は調査地南端で標高 53.100m～53.400m、北端では 53.700m。第 I 層は盛土層、第 II 層は近年の耕作土層であるが、層厚にして 0.05m前後が調査区西端に残存しているのみであった。第 III 層は褐灰色砂質土の中近世耕作土層で、2層に分かれる。第 IV 層は暗褐色砂質土の遺物包含層、第 V 層が明黄褐色粘質土の遺構基盤層になる。なお、調査区西半は河川の粗粒物が堆積し、第 V 層はこれに削られて青灰色シルト～粘土の地盤が表れていた。なお、調査地は平成 13 年度調査時に設定した第 14 トレンチの大部分を含んでおり、当該調査で確認した中近世の遺構面を第 1 遺構面、その次の面を第 2 遺構面として調査を行った。遺構は耕作に伴う素掘小溝のほか掘立柱建物や井戸、ピット、土坑などが検出されており、飛鳥時代から平安時代の時期を中心とする居住域がひろがっていたと考えられる。また、トレンチ西端において旧河道を検出した。

第 1 遺構面

南北方向に走る耕作溝を検出したのみで、特筆すべき遺構はない。

第 2 遺構面

耕作溝

上層から掘り込まれたと考えられる、南北約 100 条、東西 12 条の耕作に伴う素掘小溝を検出した。埋土からは平安時代末から中世の遺物とともに、下層からの混入と考

えられる古代の土器片が出土している。H地区と同様、調査区中央を東西に走る現代水路跡の周囲において東西方向に延びる溝を検出しており、坪界の可能性が考えられる。

掘立柱建物

検出した柱穴群の配置から、10棟前後の掘立柱建物を復元することができる。これらの掘形は隅丸方形あるいは円形で、最大のもは直径1.0mである。建物の方位には少なくとも4種類が認められ、振れ角が異なることから時期差をもつ可能性がある。

SX12

調査区北東で検出した。遺物は、土師器、須恵器、黒色土器A、B類、瓦器、鉄滓などが出土している。「て」字状口縁の土師器小皿片や大和型黒色土器碗の年代から、12世紀前半の遺構と考えられる。

SX13

調査区南東で検出した土坑で、「て」字状口縁の土師器小皿片や黒色土器B類が出土しているが、全体的に小片のため時期の詳細は不明である。

SX14

SX13の東に位置するこの土坑からは、土師器杯のほか、皿や須恵器の杯蓋などが出土している。これらは、おおよそ飛鳥時代から平安時代のものが中心である。SX13とSX14は遺構の形状および位置関係から、同一遺構であったものが後世の削平により2つに分かれたものと考えられる。

SE57

長径1.3m、短径1.0mの楕円形掘形を持ち、深さは検出面から約1.2mの素掘井戸で、調査区中央北端で検出した。埋土は8層に分かれ、遺物は第6層からまとまって出土した。須恵器の杯身が主で、ほかに須恵器杯蓋や土師器甕、馬歯が出土している。

SE59

調査区南西に位置し、H地区とI地区にまたがって検出した、6個体の曲物を積み上げて井戸枠とした遺構である。平面プランは長径3.3m、短径2.8mの楕円形、深さは検出面から1.2mである。下から一段目と二段目の曲物を囲むように0.15m前後の礫が配置されており、井戸枠を固定する意図があったものと考えられる。

一段目は直径0.38m、残存高0.17m、二段目は直径0.4m弱、残存高0.12mである。二段目は直径0.4m、残存高0.18mであるが、上部に使用されていた曲物の破片などが混入している可能性が高い。四段目は入れ子状になっており、外側に位置する曲物は直径0.45m、高さ0.24mの完形品で、筐は上下ともに遺存している。内側の曲物は直径0.38m、残存高0.23mで、下段の筐のみ残存している。五段目の曲物は、直径0.36m、高さ0.24mの完形品である。また、内面に施されたケビキは、斜格子状になる4段目内側のものを除き、いずれも縦方向である。

井戸内部からは土器や木片などの遺物が多数出土したが、一段目の曲物周辺には井戸廃絶時に投棄されたと考えられる須恵器大甕の破片があり、枠内には礫が詰め込まれていた。また、上部土坑からは瓦器碗や黒色土器の破片のほか、土師器の小皿2点および碗が完形に近い状態で出土している。廃絶時期は12世紀前半であると考えられる。

SE60

調査区中央の南に位置し、掘形は辺約 2.5m の隅丸方形を呈する。検出面から約 0.5m 掘り下げた地点で枠を検出し、底部までの深さは約 3.5m である。枠は下から約 3.0m 分が残存しており、枠板には、横幅が 1.2m～1.3m、長さは 0.2m～0.45m、厚さ 0.05m～0.07m の木材を用いていた。枠内からは大量の土器が出土しているが、第 5～9 層に集中しており、それらには横瓶、甕など古墳時代の土器が含まれる。対して第 10a 層にはほとんど遺物が含まれず同 b 層で再び遺物量が増加し、第 11a 層から最下層である第 12c 層では完形の遺物が多くみられた。遺物は、土器のほか瓦、石、子持勾玉、斎串、木杭が出土している。斎串は 10 本あり、第 11b 層および第 12 層から出土した。これらに加え、墨書土器、穿孔のある土器が多く出土していることから、井戸の廃棄時に井泉祭祀を行ったと考えられる。また、土器の年代から、井戸の廃絶は 8 世紀末から 9 世紀初頭であると考えられる。

SE61

SE60 の北東に位置する。南北 16.0m、東西 18.5m の不整形な掘形で、断面が挿鉢状を呈し、深さは検出面から約 1.0m の井戸である。埋土中層で土師器甕 2 個体と杯、須恵器の小片が出土している。7 世紀後半の遺構と考えられる。

SE63

調査区中央の南端に位置し、北西隅を SE60 に切られている。長径 1.1m、短径 1.0m の楕円形平面を呈し、深さは検出面から約 1.0m である。下層埋土が木片を包含すること、埋土の堆積状況から、井筒を設けていた可能性が考えられる。

遺物は、土師器の丸底壺、須恵器の杯H蓋、製塩土器などが出土している。須恵器が TK217 型式に相当することから、この井戸は 7 世紀中頃に廃絶したと考えられる。

SE64

調査区中央北端で南半を検出した。平面規模は、北半が調査区外に出るため不明であるが、直径約 1.3m の円形になると考えられる。掘形内には直径 0.4m 前後の曲物を用いた井戸枠三段分が遺存していたが、著しく腐朽した状態であった。枠内底部には 2.0 cm 大の砂利が敷かれており、浄水機能を果たしていたと考えられる。また、1.0 cm 大の細礫を混ぜ込んだ土を用いて、枠外周に版築状の裏込めを施している。掘形埋土の土層から、曲物を一段積み毎に裏込め土を流し入れながら構築していったと考えられる。遺物は須恵器、土師器、黒色土器などが出土しており、それらの年代から 11 世紀の井戸であると考えられる。

SE65

SE60 の南西に位置し、掘形北端を検出した。大半が調査区外になるが、平面方形の井戸と思われる。須恵器の杯H蓋、杯H身、製塩土器など、古墳時代後期の土器片が多く出土している。

SR22

調査区西端でH地区に延びる、最大深度 2.0m に達する河道を検出した。埋土上層の灰白色粗砂および黄白色粗砂には縄文土器が包含されていた。

(3) J 地区

J調査区

J地区J調査区は都市計画道路工事区域の北側に位置し、第1次調査の第6、第8、第9トレンチおよび古墳拡張区に隣接、若しくは一部重なる。

5層に分かれ、第I層は整地土層、第II層は部分的に残る耕作土層、第III層は旧耕作土層、第IV層は部分的に残る包含層、第V層が基盤層である。第III層はさらに3層に分かれる。調査は、重機掘削により現代から近世の耕作土層を除去した面で第1遺構面(中世から近世)を検出した。ただし南側は、かつての植林による攪乱を受けていたため、やや深く掘り下げたところ、第2遺構面とほぼ同一の遺構検出状況となった。次に、重機により第2遺構面(古代から中世)を検出し、部分的に残っていた包含層、沼状遺構埋土および旧河道埋土を人力掘削し、調査区の中央に基盤層(明黄褐色粘質土)、南端と北端の下層にそれぞれ無遺物の旧河道と沼状遺構を確認した。

耕作溝

第1遺構面でも東西約90条、南北約30条を検出した。第2遺構面でも東西約30条、南北約15条を確認したが、上層からのものも混じる。東西、南北方向ともにほぼ正方位にのって掘削されている。埋土は下層の包含層の影響から、北では暗褐色粘質土、南では褐灰色砂質土あるいは灰褐色砂質土を呈するものが多い。遺物は土師器、須恵器が主で、黒色土器、瓦器は僅かである。

掘立柱建物

調査区中央東部で検出した。柱穴の大きさは一辺0.35m～0.5mの隅丸方形で、桁行3間以上、梁間2間の正方位にのる建物である。掘形から出土した遺物から、平安時代の建物と考えられる。

SK77～SK81

平面規模は長辺3.0m～4.0m、短辺1.0m～2.0m、深さは0.4m～0.45mである。埋土は上から順に明黄褐色砂質土、灰白色粘質土、黄色粘質土で構成される。遺物は土師器と須恵器が少量出土している。

SX16

調査区北側において、耕作土層を除去後、東西14.0m以上、南北15.0mにわたってひろがる暗灰黄色粘質土～粘土層を検出した。層厚は0.25m前後で、埋土の状態や深さなどから沼状を呈していたと考えられる。検出面は、人間が住む以前に流れていたと考えられる旧河道の最上層にあたる。また、調査区北東部には無数の人の足跡が残されていた。古墳時代の土師器小片が僅かながら出土しており、当該期の遺構と考えられる。

SX17

調査区南端に位置する河道の北西に位置する。平面規模は南北12.0m、東西5.0m以上であったと考えられ、深さは約1.0mである。北側のSX16が河川埋土最上層の窪地にできたもので、埋土も粘質土～粘土であったのに対して、当遺構の埋土は砂質土や砂を基本としていることから、上述の旧河道と一体のものと考えられる。埋土を除去すると青灰色粘土の基盤層がひろがっており、底部には牛の蹄跡が確認された。また、近接する南西隅の高まりからは人の足跡を検出している。SK80や斜行溝の下層であることから、古墳時代のものと考えられる。

SE66

調査区の中央西側で検出した。南北1.2m、東西1.1mの隅丸方形の掘形をもつ井戸で、深さは検出面より約1.0mである。枠は一辺約0.7mの方形で、一面あたり3枚から4枚の板を用いた縦板組構造であった。枠底部から0.1m～0.25m上方の内側に、椀木が井桁状に組み合わされて固定される。そのため縦板には、椀木が当たる箇所に深さ約2.0cmの削り込みが施される。さらに枠内には直径0.42m、高さ0.3m、厚さ3.0mmの曲物を設置していた。曲物の周囲にあたる椀木の下の層(第8層)には4.0cm以下の砂利混じりの土を、曲物内の最下層に3.0cm以下の砂利が敷き詰められていた。これは、浄水装置としての機能を有していたと考えられる。遺物は、枠内埋土に0.2m～0.3mの凝灰岩切石片、土師器、須恵器、黒色土器などが包含されていた。土器の年代から平安時代初頭に廃絶したと考えられる。

SE67

調査区南西に位置する。直径1.1m～1.2mの円形掘形を有し、深さは1.1mの遺構である。一辺約0.55mの方形井戸枠は、底から0.8m分が残存していた。枠材は厚さ0.02m前後に加工され、横椀は納穴を作って組み合わせている。そのため、隅柱は用いられていない。上部0.2mは外側にさらに板材を重ねており、縦板組に変化していると考えられることから、井戸枠は一度作り直された可能性も考えられる。遺物は枠内埋土第3層から土師器の皿および甕が出土している。土器の年代から、奈良時代末から平安時代初頭に廃絶したと考えられる。

SD97

碗底部に11孔の穿孔を施した土器が出土した。

SD98

土師器杯の完形品、底部に「西」と墨書された碗が出土している。この墨書土器は、奈良時代末から平安時代初頭頃に比定される。

斜行溝

ほぼ正方位にのる東西および南北方向の耕作溝の下から、斜行溝を数条検出した。調査地を横断するSD100は幅約1.5m、全長約16.5m、深さは最大0.25m、SD101は幅約0.3m、全長4.0m、深さ0.05mである。埋土は基盤層とほぼ同色の黄褐色砂質土と暗灰黄色粘質土であるが、河川埋土層上ではその色調や質を変える。異なる角度で数度の掘削が考えられるが、上下関係は不明である。時期の確定は難しいが、SD100から須恵器、甕、SD101からは須恵器杯II蓋が出土しており、古墳時代の可能性が高いと考えられる。遺構面は後世の耕作によってその大部分が削平されているが、本来は調査区全体に斜行溝がひろがっていたと考えられる。また、L地区第59および第60トレンチで検出した古墳時代の斜行溝と方位がほぼ一致する。

SR24

調査区の南西隅において葛下川の旧河道を確認した。これは、C地区およびF地区で検出されたSR15に繋がる。埋土は、洪水によって堆積したと思われる灰白色、灰色および黄色粗砂、細砂、粘土、シルトなどで構成される。検出面から2.5m以上掘り下げた地点で、流木に加え土師器、須恵器、瓦、埴、馬の骨などが多数出土した。土器は完形に近いものが目立ち、さらに底部に穿孔を施した土器など祭祀に使用された

と考えられる遺物が含まれる。また、北東部の岸付近では杭列を検出している。これらの杭は垂直方向に3本、水平方向に3本から5本打ち込まれており、護岸施設の一部と考えられる。なお、出土遺物は主に飛鳥時代と平安時代に比定されるが、古墳時代後期のものも少量含む。

(4) K地区

K調査区

事業地の南東に位置する都市計画道路工事区域にあたり、南北 20.0m、東西 16.8m、面積 336.0㎡を調査対象とした。

現地表面の標高は 51.900m～52.000mである。第Ⅰ層の旧耕作土層直下に堆積する第Ⅱ層において耕作溝を確認し、第Ⅰ遺構面とした。この第Ⅱ層はさらに4～5層に細分することができる。第Ⅲ層は黄褐色シルト～粗粒堆積物からなる自然堆積層(基盤層)で、第Ⅱ遺構面として調査を行った。

耕作溝群

耕作に伴う南北方向の素掘小溝を検出した。埋土中からは土師器、須恵器、黒色土器のほか、瓦器、陶磁器、埴輪が多く出土している。特に、下層から巻き上げられたと考えられる古墳時代の土器および埴輪が大半を占める。

SP59～SP61

調査区南西の南壁付近で、一辺 0.5m、深さ 0.3mの隅丸方形の柱穴を3基検出した。これらは 1.3mの間隔で並んでおり、竪立柱建物の一部と考えられる。遺物は「て」字状口縁の小皿や羽釜など、平安時代中頃のものが出土している。

SX19～SX21

耕作溝上面を検出した段階で部分的に露出していた、土器細片を多く含む包含層を埋土とする遺構である。これらは溝状あるいは土坑状を呈しているが、おそらく自然地形の落ち込みと考えられる。SX18は全長 5.7m、幅 0.55m～0.85m、深さ 0.1m前後の溝状遺構で、古墳時代中期から後期の土師器、須恵器片を多く含み、底面には踏み込み状の凹凸がみられる。SX19はそれと並行する溝状遺構であるが前者と比べて浅く、遺物が少ない。この両者を挟んで、方形土坑を2基検出した。北側のSX20は隅丸方形で規模は長辺 5.0m、短辺 2.8m、深さ約 0.1mであり、埋土に土器片、馬歯細片を包含する。南側のSX21は長辺 3.9m、短辺 2.8m、深さ約 0.1mである。埋土に土器細片が多く含まれることから土器廃棄場所と考えられる。

SE68

調査区北西隅において検出した、長径 0.8m、短径 0.55m、深さ 0.9mの楕円形の掘形をもつ井戸である。埋土は上層がシルト、下層が暗青灰色粘土。最上層から土師器の二重口縁壺、底部では2本の木が交差した状態で検出され、さらにその下から土師器の直口壺が出土した。何れの木にも人為的な切断面がみられ、一方は杭状に先端を尖らせていた。

SR26

調査区東側を南北方向に延びる幅 1.5m、深さ 0.4mの流路である。埋土はラミナの見える粗粒堆積物からなる。遺物には土師器小皿や羽釜、黒色土器がみられる。また、

最下底から一辺 0.6 cm の方孔をもつ、径 1.9 cm～2.0 cm の銅銭が出土した。これは周縁が一部残存しているが、腐蝕が激しく文字の有無は不明である。

SR27

調査区北西に位置し、東西方向に延びている。幅 2.3m～5.3m、深さ 1.4m の流路を 13.8m にわたって検出し、埋土である粗粒堆積物上層から縄文時代前期に比定される大藏山式の土器片が出土した。

(5) L 地区

第 59 トレンチ

調査区は山崎川南端部の東側、東西方向に延びる街路工事区域にあたる。設定したトレンチは東西 32.0m、南北 6.0m、面積 192.0 m²である。

現地表面の標高は 52.600m～52.800m。第Ⅰ層は整地土、第Ⅱ層は旧耕作土(黄灰色、褐色)層で、両層を合わせた層厚は 0.5m～0.9m である。第Ⅲ層は西端を除き河川の埋土層である。調査は、第Ⅱ層において 3 面の遺構面を設定して実施した。重機掘削により現代～近世の耕作土層を除去し、第 1 遺構面(中世～近世)を検出した。次に重機掘削で検出した古代～中世の面を第 2 遺構面として調査を行い、さらに調査区の東側 3 分の 1 を人力で掘削し、第 3 遺構面(古墳～古代)とした。この面では、斜行溝、ビット、土坑などを検出した。また、小片が多いため不確実ではあるが、当トレンチの遺物は古墳時代のものが大半を占め、飛鳥時代に入る遺物は僅かである。加えて、平安時代の遺物は黒色土器 1 点のみであることから、奈良時代から平安時代にかけての土地利用はほとんどなかったと考えられる。

耕作溝

第 1 遺構面において、中近世の耕作溝群を検出した。南北方向の溝のみであったが、重複が激しく何条あるかは確認できなかった。第 2 遺構面においても正方位にのる古代の耕作溝を確認し、小型丸底壺などの完形に近い遺物が出土しているが、これらは下層からの巻き込みと考えられる。

掘立柱建物

トレンチ西端において、明黄褐色粘質土からなる基盤層を検出し、当該層上で掘立柱建物の柱穴を確認した。直上に中世耕作土が堆積していることから、古墳時代以降の遺構面は削平されていると考えられるため、建物の時期は不明である。

SD90

幅 0.4m、深さ約 0.1m、後述する第 60 トレンチの SD95 に繋がる。古墳時代から飛鳥時代の遺物が出土している。

SD91～93

幅 0.6m～0.9m、深さ約 0.1m で、北で西に約 45 度傾く斜行溝である。溝の中には小さい土器溜まりが数箇所みられ、遺物は古墳時代の土師器甕片、須恵器の杯身片、サヌカイト片などが出土している。

第 60 トレンチ

第 59 トレンチの東に隣接し、山崎川南端部の東側を東西方向に延びる街路工事区域

にあたる。トレンチは東西 24.0m、南北 6.0m、面積 162.0 m²である。

現地表は標高 53.000m前後。第Ⅰ層は現代～近世の耕作土で層厚は 0.2m～0.3mである。第Ⅱ層は層厚 0.3m～0.4mの耕作土層で、薄い細砂層を挟みながら数層にわたって堆積する。また、調査区西側において第 59 トレンチ東部と同一の遺物包含層を検出し、これを第Ⅲ層とした。層厚は 0.2m前後である。重機掘削により第Ⅰ層を除去後、第Ⅱ層を第Ⅰ遺構面、第Ⅲ層を古墳時代の遺構基盤層と考え第Ⅱ遺構面として調査を行った。主な検出遺構は耕作溝、土坑、ピット、溝である。また、調査区南西隅において、上層遺構として遺物を包含する河川埋土、下層遺構として調査区全面にひろがる河川粗粒物堆積層を確認した。なお、後者は遺物を包含していなかった。

耕作溝群

調査区中央に位置する高まり部分で、上層から切り込まれた耕作溝約 10 条を検出した。これらは南北方向に走っており、埋土からは本来あった包含層の遺物と考えられる土師器、須恵器細片が出土した。

ピット群

調査区東側および中央で検出した、直径 0.2m～0.3m、深さ 0.05m～0.1mの遺構群である。上面は耕作によって削平されている可能性が高く、遺物は僅かに土師器や須恵器の細片が出土しているのみである。

SK71

平面形状は直径約 0.8mの円形を呈し、深さは約 0.6mである。埋土中から、完形に近い古墳時代の長胴甕 1点と高杯が出土した。

SX11

調査区南西隅で検出した遺構である。深さ 0.1m前後で、埋土は SD96 と同じである。検出当初は自然地形による落込みと思われたが、第 59 トレンチの SD96 に繋がる溝と考えられる。埋土中に古墳時代の土師器片、ササカイト片を多数含む。

SD95

第 59 トレンチの SD90 に繋がる、幅 0.4m、深さ 0.1m前後の東西溝である。埋土は黄灰色シルト～粘土であり、耕作溝のそれとは異なっている。古墳時代から飛鳥時代の遺物が出土している。

SD96

北西から南東に向かって延びる長さ 8.0m、幅 1.0m、深さ 0.45mの斜行溝で、埋土は褐灰色シルト～粘土である。古墳時代の甕口縁および高杯、ササカイトの剥片が出土した。

2 遺物

(1) H地区

H調査区

SK72

871 は土師器甕で、口径 28.0 cm、残存高 21.0 cm、口縁部が外反し、球形を呈する胴部に把手がとりつく。胴部内外面にナナメハケおよびタテハケを施す。

870 は土師器甕で、口径 19.0 cm、器高 28.6 cm、口縁部が内湾し、球形を呈する胴

部に把手がとりつく。胴部外面にナナメハケおよびヨコハケ、胴部内面にナナメハケの後ケズリ、下半にはナデを施す。

SK74

873 は須恵器杯蓋で、復元口径 13.0 cm、残存高が 4.2 cm である。端部は沈線が施され、ややシャープである。稜はやや鈍いが、突出して段を成している。天井部にやや広範囲の回転ヘラケズリが施されている。稜がやや甘い印象を受けるが、小型であることから、TK23～TK47 型式のものと考えられる。

SK75

868 は土師器直口壺で、口径 10.4 cm、残存高 9.5 cm、口縁部は外傾する。口縁部にヨコナデ、胴部外面にナデ、胴部内面には指オサエの後ナデを施す。

867 は土師器直口壺で、口径 10.4 cm、器高 13.7 cm。口縁部は外傾し、外面にヨコナデ、内面にヨコハケ、胴部は外面にタテハケおよびナナメハケ、胴部内面にナデを施す。また、煤が付着しており、底部には穿孔が施されている。

866、878～880 は土師器甕である。

866 は小型で、口径 11.2 cm、器高 11.0 cm、口縁部が外傾し、胴部は球形を呈する。口縁部外面にヨコナデ、口縁部内面にヨコハケ、胴部外面にタテハケおよびナナメハケ、胴部内面に指オサエの後ナデを施す。

878 は長胴甕で、口径 18.8 cm、器高 33.0 cm、口縁部がくの字状を呈する。口縁部外面にヨコナデ、口縁部内面ヨコハケ、胴部外面にタテハケ、胴部内面に板ナデ、ケズリおよび指オサエの後ナデを施す。また、煤が付着しており、底部には穿孔が施されている。

879 は長胴甕で、口径 19.0 cm、器高 33.7 cm、口縁部がくの字状を呈する。口縁部外面にヨコナデ、口縁部内面ヨコハケ、胴部外面にタテハケ、胴部内面に板ナデを施す。また、煤が付着している。

880 は口径 29.6 cm、残存高 21.2 cm、口縁部はくの字状で、球形を呈する胴部に把手がとりつく。口縁部外面にヨコナデ、口縁部内面にヨコハケ、胴部外面にナナメハケおよびタテハケ、胴部内面に指オサエおよびナデを施す。

877 は製塩土器で、口径 7.7 cm、器高 3.8 cm。碗形を呈し、体部外面に指オサエの後ナデ、体部内面には指オサエおよびナデを施す。

872 は須恵器杯蓋で、口径 12.0 cm、器高が 4.2 cm である。端部に不明瞭な沈線が施されているが、断面形は平らに近い。稜は鋭角で、段を成している。天井部の広範囲に回転ヘラケズリが施されている。体部がやや短いが、小型であることから TK23～TK47 型式のものと考えられる。

874 は須恵器杯身で、口径は 11.2 cm、器高が 4.6 cm である。立ち上がりは比較的長く、ほぼ垂直に伸び、端部には不明瞭な沈線を施しているが、断面形はほぼ平らである。底部のやや狭い範囲に反時計回りの回転ヘラケズリを施しており、受部はやや長く、やや外上方に伸び、鋭い。小型ではあるが、全体的に作りが甘いため、TK23～TK47 型式と考えられる。

875 は須恵器有蓋高杯で、口径 11.1 cm、器高が 9.6 cm で、底径が 9.3 cm である。短脚 3 方向透かしで、透かし窓は長方形である。脚部をカキ目で調整し、底部は段を成

す。杯部の端部には沈線を施し、受部は短く、外上方へ伸び、やや鋭い。また、底部の回転ヘラケズリは広範囲に及んでいる。TK23 型式のものと推定される。

876 は須恵器壺であるが、底部を欠損しており、甕の可能性もある。復元口径 9.8 cm、残存残存高が 7.7 cm である。口縁部に段は見られず、端部は丸い。胴部は口縁部とほぼ同じ幅で、肩部の張りが見られず丸みを帯び、口頸部に 2 条の稜を有する。その稜の間、および胴部中央のカキ目上方に波状文を施す。TK23～TK47 型式前後のものと推定される。

SE49

864、865 は土師器皿である。

864 は口径 10.0 cm、器高 1.7 cm、口縁部は「て」字状を呈する。口縁部にヨコナデ、体部外面に指オサエ、体部内面にナデを施す。

865 は口径 10.2 cm、器高 2.2 cm。口縁部にヨコナデ、体部外面に指オサエ、体部内面にナデを施す。

869 は土師器羽釜で、口径 13.2 cm、残存高 9.2 cm、残存率 30%。口縁部は外反して端部が肥厚し、胴部には鈎が貼り付けられる。口縁部にヨコナデ、胴部は外面にナデ、内面に板ナデを施す。

861～863 は瓦器碗である。

861 は口径 15.3 cm、底径 5.3 cm、器高 5.8 cm、口縁部にヨコナデ、外面に指オサエの後ミガキ、内面に圏線状ミガキ、見込みにナデの後平行な暗文ミガキ、底部ナデを施す。また、底に高台を貼り付ける。

862 は口径 15.5 cm、底径 5.3 cm、器高 5.7 cm、底に高台を貼り付ける。口縁部にヨコナデの後ミガキ、外面に指オサエの後ナデ、内面に圏線状ミガキ、見込みにナデの後平行な暗文ミガキ、底部にはナデを施す。

863 は底径 5.8 cm、残存高 3.8 cm、口縁部を欠損している。外面にナデ、内面に圏線状ミガキ、見込みおよび底部にナデを施す。また、底に高台を貼り付ける。

SE50

881、882 は土師器皿である。

881 は口径 9.7 cm、器高 1.9 cm。口縁部にヨコナデ、体部外面にナデ、体部内面に指オサエの後ナデを施す。

882 は口径 10.0 cm、器高 1.6 cm、口縁部は「て」字状を呈する。口縁部にヨコナデ、体部外面にナデ、体部内面に頭庄の後ナデを施す。

SE51

883～885 は土師器皿である。

883 は口径 9.8 cm、器高 1.9 cm、口縁部にヨコナデ、体部は外面に指オサエ、内面にナデを施す。

884 は口径 9.4 cm、器高 2.0 cm、885 は口径 9.4 cm、器高 1.7 cm。口縁部にヨコナデ、体部外面に指オサエの後ナデ、体部内面にナデを施す。

886～889 は土師器杯である。

886 は口径 15.0 cm、器高 3.7 cm、口縁部にヨコナデ、体部は内外面に指オサエの後ナデを施す。

887は口径15.5cm、器高3.5cm、口縁部にヨコナデ、体部外面に指オサエ、体部内面に指オサエの後ナデを施す。また、煤が付着している。

889は口径15.0cm、器高3.1cm、888は口径14.4cm、器高3.2cm。口縁部にヨコナデ、体部は外面に指オサエの後ナデ、内面にナデを施す。

890は土師器碗で、口径13.9cm、器高6.1cm。口縁部にヨコナデ、体部は内外面にナデを施す。また、煤が付着している。

891は黒色土器皿で、口径10.0cm、器高2.3cm。口縁部にヨコナデ、外面にヨコミガキ、内面にヨコミガキ、見込みに平行ミガキ、底部には指オサエの後ナデを施す。

892は瓦器皿で、口径10.0cm、器高2.1cm。口縁部にヨコナデ、底部外面に指オサエ、内面には圏線状ミガキ、見込みにナデの後に平行な暗文ミガキを施す。

893～898は瓦器碗である。

893は底径5.8cm、残存高1.1cm、残存率20%、底部のみ残存している。底部外面にナデ、内面には見込みにナデの後平行ミガキを施す。また、底に高台を貼り付ける。

894は口径15.4cm、残存高5.0cm、残存率25%。口縁部にヨコナデ、体部外面にナデの後ミガキ、体部内面に圏線状ミガキを施す。

895は口径16.6cm、残存高4.7cm、残存率20%。口縁部にヨコナデ、体部外面に指オサエの後ミガキ、体部内面にミガキを施す。

896は口径16.2cm、残存高5.4cm、残存率40%。口縁部にヨコナデ、体部外面に指オサエ、ナデの後ミガキ、体部内面に圏線状ミガキを施す。

897は口径15.4cm、底径5.9cm、器高5.9cm、底に高台を貼り付ける。口縁部にヨコナデ、体部外面に指オサエの後ミガキ、体部内面に圏線状ミガキ、見込みにナデの後に平行な暗文ミガキを格子状に重ね、底部ナデを施す。

898は口径15.3cm、底径5.5cm、器高6.6cm、底に高台を貼り付ける。口縁部にヨコナデ、体部外面に指オサエの後ミガキ、体部内面に圏線状ミガキ、見込みにナデの後に暗文ミガキ、底部ナデを施す。

SE52

調査地北東部に位置し、平面不整形の井戸である。須恵器、土師器、石製品などが出土し、その年代は古墳時代中期から飛鳥時代を示している。須恵器は杯蓋、杯身、高杯、甕、壺、甕などが出土し、そのほとんどが古墳時代後期のものと思われる。899～904は土師器、905～911は須恵器である。

899はミニチュアの土師器碗で、口径6.0cm、器高3.4cm。外面に指オサエの後ナデ、内面に指オサエおよびナデを施す。

900はミニチュアの土師器碗で、口径8.8cm、器高3.5cm。外面に指オサエの後ナデ、内面にナデを施す。

901は手捏ねの土師器杯で、口径12.6cm、器高3.8cm。口縁部にヨコナデ、体部外面に指オサエの後ナデを施す。

902は土師器壺で、胴部のみ残存している。残存高は10.8cm、胴部は球形を呈する。内外面にナデを施す。

903は土師器壺で、口径21.7cm、残存高9.0cm、口縁部は外反する。口縁部内面にヨコハケ、胴部は外面にタテハケ、内面に指オサエの後ナメハケを施す。

904 は土師器甕で、口径 20.0 cm、残存高 16.5 cm、口縁部はくの字状を呈する。胴部外面にタテナメハケ、胴部内面にナデを施す。

905 は杯蓋で、口径 11.4 cm で、残存高が 5.0 cm である。端部に不明瞭な沈線が施されており、やや鋭い。稜はやや鋭く、突出している。天井部には広範囲に回転ヘラケズリが施されている。稜線から端部が長く、TK208～TK23 型式のものと考えられる。

906 は杯蓋で、口径 12.7 cm、器高が 4.8 cm である。端部に不明瞭な沈線が施されているが、平らに近い断面形を呈する。稜は形骸化しており、沈線によって表現されている。天井部には狭い範囲に反時計回りの回転ヘラケズリが施され、やや小型であることから TK47～MT15 型式のものと考えられる。

907 は杯蓋で、口径 11.6 cm、器高が 4.4 cm である。端部に不明瞭な沈線が施されており、やや鋭い。稜はやや鋭く、突出している。天井部の広範囲に回転ヘラケズリが施され、小型であることから、TK47 型式のものと考えられる。

908 は杯身で、口径は 10.6 cm、器高が 4.4 cm である。立ち上がりは比較的長く、やや内傾しているが、ほぼ垂直に伸び、端部には沈線が施されている。底部に反時計回りの回転ヘラケズリが施され、受部は短く、やや外上方に伸び、鈍い。小型ではあるが、全体的に作りが甘いため、TK47～MT15 型式と考えられる。

909 は高杯で、杯部を欠損している。残存高が 7.1 cm、底径が 10.3 cm である。短脚 4 方向透かしで、透かし窓は長方形である。脚部をカキ目で調整し、底部は段を成す。TK208 型式のものとして推定される。

910 は甕で、口縁部を欠損しており、残存高は 7.1 cm、器幅が 9.6 cm である。頸部がやや細いと推定され、肩部は張りがやや強く、屈曲している。底部は回転ヘラケズリで調整されている。胴部には 2 条の沈線を描き、その間に列点文を施し、円形の透かし孔を穿つ。MT15 型式前後のものと思われる。

911 は甕で、口径が 18.2 cm、残存高が 19.2 cm である。口端部は段を成し、外反する口頸部は短く、文様帯を施さない。胴部外面は平行叩き日文の叩き板で調整され、内面には同心円文の当て具痕が残る。TK23～MT15 型式前後のものとして推定される。

SE53

調査地南東で検出された、平面楕円形の素掘井戸である。須恵器、土師器などが出土し、その年代は古墳時代後期から飛鳥時代を示している。

917 は土師器杯で、口径 15.2 cm、器高 3.1 cm、口縁端部が肥厚する。口縁部にヨコナデ、体部外面に指オサエ、体部内面にはナデの後、放射線状および連弧文状の暗文を施す。

924 は土師器甕で、口径 21.6 cm、残存高 21.0 cm、口縁部は外反し、胴部に把手がとりつく。口縁部外面にヨコナデ、内面にヨコハケ、胴部外面にタテハケ、胴部内面にナデを施す。また、煤が付着している。

912 は須恵器杯蓋で、口径 15.2 cm、器高が 3.7 cm である。端部は丸く仕上げられ、稜は完全に消滅している。天井部に反時計回りの回転ヘラケズリが施され、MT85～TK43 型式のものと考えられる。

913 は須恵器杯蓋で、口径は 11.0 cm、残存高が 2.2 cm である。口縁端部は外方へ短く張り出し、丸く収められる。口縁部内面のかえりは、口端部と同程度に下方に伸び

る。天井部は回転ヘラケズリによって成形され、宝珠つまみを欠損している。TK217～TK46のものと考えられる。

SE54

調査区中央で検出し、横板組隅柱横棧留の枠を用いていた。須恵器、土師器、墨書土器、木筒、斎串などが出土している。その年代は平安時代初頭を示しており、この時期に一気に埋設されたと思われる。914～916、918～923、925、926は土師器、934～937は須恵器、933は黒色土器、938～944、946は木製品、945は鉄製品である。

914～916は土師器皿である。

914は口径17.6cm、残存高3.3cm、残存率10%。口縁部にヨコナデ、体部外面にケズリ、体部内面にナデを施す。

915は口径16.3cm、器高2.6cm、残存率25%。口縁部にヨコナデ、外面にケズリ、体部内面にナデを施す。また、底面に漆が付着している。

916は口径21.0cm、器高3.15cm。口縁部にヨコナデ、体部は外面にナデ、内面にナデの後、放射線状の暗文を施す。

918、919、920、922は土師器杯である。

918は口径18.0cm、器高4.3cm、口縁端部が肥厚する。また、底に「戸」?と墨書が見られる。口縁部にヨコナデ、体部外面に指オサエ、ケズリの後ヨコミガキ、体部内面にナデを施す。

919は口径19.8cm、残存高4.1cm。口縁部にヨコナデ、体部外面にケズリの後ヨコミガキ、体部内面にナデを施す。

920は口径11.8cm、残存高3.7cm、残存率10%。口縁部にヨコナデ、体部外面に指オサエ、体部内面にナデを施す。

922は口径17.6cm、器高4.7cm、口縁端部が肥厚する。口縁部にヨコナデ、体部外面にタテハケ、ケズリの後ヨコミガキ、体部内面にナデ、底部に指オサエの後ケズリを施す。

921は土師器碗で、口径13.2cm、残存高4.2cm。口縁部にヨコナデ、体部外面にナデの後ヨコミガキ、体部内面にナデの後放射線状の暗文を施す。

923、925～932は土師器甕である。

923は口径14.1cm、器高12.4cm、口縁部は外反して端部が肥厚し、胴部は球形を呈する。口縁部にヨコナデ、口縁部内面にヨコハケ、胴部外面にタテハケおよびナメハケ、胴部内面に指オサエの後、板ナデを施す。また、煤が付着している。出土時には器面に植物遺体が付着していたことから、器体は網籠に包まれていたと推定される。

925は口径17.0cm、器高15.8cm、口縁部にヨコナデ、口縁部内面にヨコハケ、胴部外面にタテハケおよびナメハケ、胴部内面に指オサエの後、板ナデを施す。また、煤が付着している。

926は口径18.0cm、残存高16.6cm、口縁部は外反して端部が肥厚し、胴部は球形を呈する。口縁部にヨコナデ、口縁部内面にヨコハケ、胴部外面にタテハケ、胴部内面に指オサエの後ナデを施す。また、煤が付着している。

927は口径17.4cm、残存高14.7cm、口縁部は外反して端部が肥厚し、胴部は球形

を呈する。口縁部にヨコナデ、口縁部内面ヨコハケ、胴部外面にタテハケおよびナメハケ、胴部内面にナデを施す。

928 は口径 16.5 cm、器高 17.0 cm、口縁部は外反して端部が肥厚し、胴部は球形を呈する。口縁部にヨコナデ、口縁部内面にヨコハケ、胴部外面にタテハケおよびナメハケ、胴部内面に指オサエの後ナメハケを施す。

929 は口径 16.2 cm、器高 18.9 cm、口縁部は外反して端部が肥厚し、胴部は球形を呈する。口縁部にヨコナデ、口縁部内面にヨコハケ、胴部外面にタテハケおよびヨコハケ、胴部内面に指オサエの後ナメハケを施す。

930 は口径 17.3 cm、器高 16.5 cm、口縁部が外反し、胴部は球形を呈する。口縁部にヨコナデ、胴部外面に指オサエ、胴部内面に板ナデを施す。また、煤が付着している。

931 は口径 22.0 cm、器高 18.6 cm、口縁部は外反して端部が肥厚し、胴部は球形を呈する。口縁部にヨコナデ、口縁部内面ヨコハケ、胴部外面にタテハケ、胴部内面に指オサエの後ナデを施す。また、煤が付着している。

932 は口径 21.0 cm、器高 19.9 cm、口縁部は外反して端部が肥厚し、胴部は球形を呈する。口縁部にヨコナデ、口縁部内面にヨコハケ、胴部外面にタテハケおよびナメハケ、胴部内面には指オサエの後ナデを施す。

933 は黒色土器肌で、口径 15.4 cm、器高 3.0 cm。口縁部にヨコナデ、体部外面に指オサエの後ヨコミガキ、体部内面に指オサエの後ヨコミガキ、さらに暗文ミガキを施す。

934 は長頸壺で、枠内埋土から出土した。残存高 16.8 cm、胴部は 13.5 cm で口縁部を欠損している。外反する口頸部はやや細く、ほぼ直下へ踏ん張る高台はやや短い。肩部は張っていない。平安時代初頭のものと考えられる。

935 は長頸壺で、枠内埋土から出土した。復元口径 10.5 cm、残存高 6.9 cm、胴部以下を欠損している。口頸部は外反し、口縁部が段を成している。平安時代初頭のものと思われる。

936 は長頸壺で、枠内埋土から出土した。底径 8.2 cm、残存高 12.1 cm で頸部以上を欠損している。短い高台が付されており、外方へ踏ん張っている。肩部は張っていない。平安時代初頭のものと考えられる。

937 は長頸壺で、枠内埋土から出土した。残存高 17.2 cm、胴部器幅は 17.2 cm、口縁部を欠損している。外反する口頸部はやや細く、底部に付される短い高台は、やや外方へ踏ん張っている。肩部は張っていない。平安時代初頭のものと考えられる。

938 は壺形で、長さ 11.85cm、幅 2.25cm、厚さ 1.0cm である。

939 は壺形で、長さ 14.85cm、幅 2.22cm、厚さ 0.5~1.0cm である。先端を欠いている。

940 は壺形で、長さ 16.83cm、幅 2.0cm、厚さ 0.5~1.0cm である。

941 は壺形で、長さ 18.1cm、幅 2.4cm、厚さ 0.1~2.5cm である。

942 は壺形で、長さ 18.4cm、幅 2.3cm、厚さ 1.5~2.0cm である。

943 は壺形で、長さ 18.7cm、幅 2.0cm、厚さ 0.2cm である。先端を欠き、均等な厚さである。

944は斎串で、長さ19.55cm、幅2.85cm、厚さ1.0～2.5cmである。先端を欠いている。

946は木簡で、長さ36.8cm、幅11.1cm、厚さ0.5～1.0cmで、中層から出土した。長辺に4ヶ所、短辺に1ヶ所の穿孔が施され、孔には植物遺体が残存していた。このことから、曲物の底板を転用した木簡であると考えられる。また、一方の面には刀子で削った痕跡がある。両面に墨書されているが、一面は板を横長に用い、もう片面は縦長に使うて文字を記している。横長に用いた面をa面、縦長に用いた面をb面とする。

a面には「小支石(人名)」が「七月」の「十二日」、「十四日」、「十七日」、その他判読できない2日の合計「五日」間の「田刈(稲刈り)」の「上日(勤務日程)」が記述されている。またその後、「半魚(鮎)」を「二百八十」尾売却したとの記述があり、その売却方法として「前売」が「六十」尾、「後売」が「百六十」尾、「家売」が「五十」尾、判読できない売り方で「十」尾売却し、合計が前述の「二百八十」尾と合致している。その後、「岡桑」、「告麻呂」、「七月」の記述が確認できるが、判読できない箇所が多く内容を確認できない。なお、4ヶ所合点が確認できることからこの文章を推敲していたのではないかと考えられる。

b面には右端に「和世(早稲)種」は「三月六日」に蒔き、「小須流女」という稲の品種は「十一日」に「蒔く」との記述がある。右下の「臨傷臨位別口持」は習書したものであると考えられる。上部中央には「種蒔日」との記述が確認できるが、その下の文章は伊福部述の解文を書くために削って消されているため、わずかに文字が残っているが判読できない。解文とは律令に定められた公文書の様式のひとつで、下級官司が上級官司に上申する際に用いる書式であり、宛先は自明なので通常省略されている。そのためここでも宛名は記述されていない。当時の文書では、発給者・受取人及び文書の様式名などの次に内容を示す題名のような短文をつける規則があり、この解文「伊福部連豊足解」にも「進上御馬事」との記載が確認できる。以降の内容は、「右(豊足)」が「今日」「命」が危なく「死」にそうである。「依此(したがって)」「御馬」を「飼うことが「不堪(たえられない)」と訴えている。さらに、この文に続けて「右仍豊足」は「重」い「病」で「御馬飼不堪」。「伏」して「乞」う、と先程の文章とほぼ同じ内容の記載が読み取れる。そのあと「畏公」に「不仕奉(お仕えすることができない)」と続け、再び「至死在_レ畏公不_レ仕奉_也在_レ□□」と同じ意味の文章が続いている。何度も同じ内容を書いていることから、豊足の解文を何度も推敲したことが分かる。

945は鈎で、縦4.9cm、横3.5cmである。

SE55

951は土師器皿で、口径9.8cm、器高1.0cm、口縁部は「て」字状を呈する。口縁部にヨコナデ、体部内外面にナデを施す。

952は土師器杯で、口径14.7cm、器高3.8cm、口縁部にヨコナデ、体部内外面に指オサエの後ナデを施す。

SE56

調査区北東で検出し、剣抜きの井戸枠を使用する井戸である。須志器、土師器、木

製品、石製品などが出土し、その年代は古墳時代中期から後期を示している。953 が土師器、948～950 が須恵器、955、956 が石製品、954 が木製品である。

953 は土師器甕で、胴部のみ残存しており、残存高は 11.5 cm。外面にタテハケ、内面に指オサエの後ナデを施す。

947 は製塩土器で、口径 3.9 cm、器高 8.6 cm。外面に指オサエの後ナデ、内面に指オサエおよびナデを施す。

948 は杯蓋で、上層から出土した。口径 12.5 cm、器高が 4.8 cm である。端部はやや鋭角に仕上げられている。稜はやや鋭く、突出している。また、天井部のやや広範囲に時計回りの回転ヘラケズリが施される。やや小型であることから、TK23～TK47 型式のものと考えられる。

949 は甕あるいは壺である。胴部以下を欠損しており、復元口径 12.6 cm、残存高が 4.7 cm である。口縁部に段を、口頸部中央に稜を設け、両者間に波状文を施す。端部はやや鋭角で、ほぼ垂直に伸びている。TK23～TK47 型式のものと推定される。

950 は甕である。頸部以上を欠損しており、残存高が 12.2 cm、復元器幅が 14.9 cm である。張りが弱い肩部は丸みを帯び、沈線を施している。また、胴部に波状文を巡らせ、円形の透かし孔を穿つ。TK23～TK47 型式のものと思われる。

955 は完形の白玉で、直径 0.55 cm、高さ 0.22 cm、孔径 0.2 cm である。

956 は有孔円盤で、高さ 1.4 cm、厚さ 0.4 cm、孔径 0.2 cm である。

954 は井戸枠材で、木を削り抜いている。最大長 58.4 cm、最大径 46.0 cm、最大厚 4.8 cm であり、内外面ともに 4.0～5.5 cm の幅でノミの痕跡をとどめている。底部の一部に長方形に切り込んでいる。

(2) I 地区

I 調査区

SP57

963 は須恵器杯身で、残存率 80%、口径 12.6 cm、器高 4.9 cm である。内傾する立ち上がりはやや短く伸び、端部は丸い。底部に反時計回りの回転ヘラケズリを施しており、受部はやや長く、水平に伸び、鋭い。TK10 型式と考えられる。

SP58

957 は須恵器杯蓋で、残存率 45%、復元口径 13.5 cm、残存高 4.4 cm である。端部にわずかに沈線が施され、鈍い印象を受ける。稜はやや鋭く突出し、段を成している。端部から稜までは 2.4 cm で、天井部に反時計回りの回転ヘラケズリが施されている。TK23 型式のものと考えられる。

959 は須恵器杯蓋で、残存率 45%、復元口径 12.6 cm、残存高 5.0 cm である。端部は内に傾斜し、わずかに沈線を施すが、ほぼ平らである。稜は鋭く、突出して段を成している。端部から稜までは 2.3 cm で、天井部に時計回りの回転ヘラケズリが施されている。TK23 型式のものと考えられる。

964 は須恵器杯身で、残存率 30%、復元口径 12.2 cm、残存高 5.1 cm である。立ち上がりはやや短く、ほぼ垂直に伸び、端部は丸いが内側にわずかに沈線が施されている。底部には反時計回りの回転ヘラケズリを施しており、受部はやや長く、水平に伸び、

鈍い。TK10 型式にあたると思われる。

SX12

966 は瓦器碗である。口径 14.8cm、残存高 4.8cm、口縁部にヨコナデ、体部外面に指オサエおよびナデの後ミガキ、内面に圏線状ミガキおよび円弧状ミガキを施す。

967 は瓦器碗である。口径 13.3cm、残存高 5.3cm、口縁部にヨコナデ、体部外面にナデの後ミガキ、内面に圏線状ミガキを施す。

SX14

969 は土師器杯である。口径 12.4cm、器高 4.0cm、口縁部にヨコナデ、体部外面に指オサエの後ナデを施す。また、体部外面に「〇」と墨書がある。

971 は大型の土師器碗である。口径 17.7cm、器存高 7.3cm、口縁部にヨコナデ、体部外面に指オサエの後ナデおよびミガキ、内面にナデを施す。

970 は土師器高杯である。脚部のみ残存しており、底径 9.6cm、残存高 5.2cm。杯部内面にナデ、脚部外面に面取り、内面にケズリおよび指頭圧の後ナデ、脚部底面にナデを施す。

SX15

962 はほぼ完形の須恵器杯蓋で、口径 15.9cm、器高が 4.8cm である。端部はほぼ丸く仕上げられるが、浅い沈線が施されている。稜はほぼ消滅しており、直下の沈線によって表現される。天井部外面には反時計回りの回転ヘラケズリが施され、内面は一定方向のナデおよびロクロナデで調整されている。全体的に歪みが見られるが、作りはしっかりとしている。MT85 型式のものと考えられる。

958 は須恵器杯蓋で、残存率 30%、復元口径 13.9cm、残存高が 3.9cm である。端部はほぼ丸く仕上げられているが、内側にわずかに沈線が施されている。稜はほぼ消滅しており、直下の沈線によって表現されている。天井部外面には反時計回りの回転ヘラケズリが施され、内面はロクロナデで調整されている。MT15 型式のものと考えられる。

965 は須恵器杯身で、残存率 40%、復元口径 12.8cm、器高は 6.1cm である。立ち上がりはやや内傾しながら伸び、端部には沈線が施されている。また、底部の狭い範囲に反時計回りの回転ヘラケズリが施されている。立ち上がりは 1.7cm で、受部は長く、ほぼ水平に伸びている。MT15 型式のものと考えられる。

SE57

960 は須恵器杯蓋で、残存率 30%、復元口径 14.1cm、残存高が 4.3cm である。端部はほぼ丸く仕上げられ、稜はほぼ消滅しており、口縁部と天井部の間で屈曲している。天井部外面には狭い範囲に反時計回りの回転ヘラケズリが施され、内面はロクロナデで調整されているが、指紋が残っている。TK10 型式のものと考えられる。

961 は須恵器杯蓋で、残存率 80%、口径 14.8cm、器高が 4.7cm である。端部はほぼ丸く仕上げられるが、浅い沈線が施されている。稜は非常に鈍く、直下の沈線によって表現される。天井部外面には反時計回りの回転ヘラケズリが施され、内面はロクロナデで調整されているが、中心部に一定方向のナデが確認できる。TK10 型式のものと考えられる。

SE59

975、976は掘形上層から出土した。

975は小型の黒色土器A類碗である。口径8.7cm、底径4.4cm、器高3.7cm、鬼高台を貼り付けている。口縁部にヨコナデ、体部外面および底部にナデ、内面にはミガキを施している。

976は瓦器碗である。底部のみ残存しており、底径6.6cm、残存高1.8cm、底に高台を貼り付けている。体部外面にナデ、内面に圏線状ミガキ、見込みにはナデの後平行ミガキを施す。

972、973は上層、974、977、978は井戸枠二段目曲物内から出土している。

972、973は土師器皿で、口縁部が「て」字状を呈する。

972は口径10.3cm、器高2.0cm、口縁部にヨコナデ、体部外面に指オサエ、体部内面にナデを施す。

973は口径10.0cm、器高2.0cm、口縁部にヨコナデ、体部内外面にナデを施す。

974は土師器杯で、口径15.2cm、器高3.6cm、口縁部にヨコナデ、体部外面に指オサエの後ナデ、体部内面にナデを施す。

977は瓦器碗である。底径6.2cm、残存高1.4cmで底部のみ残存している。底に高台を貼付け、底部外面にナデ、内面に圏線状ミガキ、見込みにはナデの後平行ミガキを施す。

978は瓦器碗である。底径15.2cm、残存高5.4cm、口縁部にヨコナデ、底部外面に指オサエおよびナデの後ヨコミガキ、内面に圏線状ミガキ、見込みにはナデの後斜格子状ミガキを施す。

979は井戸枠材で、曲物側板を転用している。直径38.6cm、最大高18.8cm、最大厚0.45cmである。

980は井戸枠材で、曲物側板を転用している。長径44.0cm、短径43.2cm、最大高13.6cm、最大厚0.4cmである。5箇所穿孔している。

981は井戸枠材で、曲物側板を転用している。三重になっており、外側から長径43.0cm、42.5cm、36.4cm、短径42.5cm、41.0cm、35.8cm、最大高7.7cm、16.3cm、17.0cm、最大厚0.6cm、0.45cm、0.4cmである。

982は井戸枠材で、曲物側板を転用している。長径46.8cm、短径46.0cm、最大高23.2cm、最大厚0.4cmである。内面に縦方向および斜め方向の刻目を施している。

983は井戸枠材で、曲物側板を転用している。直径37.8cm、最大高22.4cm、最大厚0.4cmである。2本の帯を施しており、下段の最大幅は3.05cm、上段の最大幅は1.85cmであり、内面は格子状の刻目を施している。

SE60

988、989、985は枠内中層10層（7層）、990、991は中層11層（8層）出土。

986、987、992、994、995、997、999、1000、1001は下層12層（9層）出土。993は枠外最下層出土。

985～987は墨書土器、988～1001は土師器、1004～1007は須恵器、1002は石製品、1003は土製品、1008～1019は木製品である。

985は土師器皿の体部片で、残存高0.45cm、体部内外面にナデを施す。底面に墨書があり、一文字の全体は不明であるが、下の部位は「出」に読める。

986は十師器杯の体部片で、残存高0.5cm、体部内外面にナデを施す。外面に墨書を確認することができ、「丰」や「冢」のような自体であるが、文字の判読はできない。

987は土師器甕の体部片で、残存高26.7cm、体部外面にナナメハケ、内面にナデを施す。外面に墨書がある。顔の一部が表現されており、眼と眉ない髭と推定される。

988は土師器皿で、口縁端部が肥厚する。口縁部にヨコナデ、外面にケズリ、体部内面にナデを施す。

989～993は土師器杯である。

989は口径13.6cm、器高3.6cm、口縁端部が肥厚する。口縁部にヨコナデ、外面にケズリ、体部内面にナデを施す。また、煤が付着している。

990は口径11.8cm、器高3.8cm、口縁部にヨコナデ、体部外面にケズリの後ミガキ、体部内面に指オサエの後ナデを施す。

991は口径11.7cm、器高3.7cm、口縁部にヨコナデ、体部外面にケズリの後ミガキ、体部内面にナデを施す。

992は口径11.8cm、器高3.7cm、底面に木炭紋を有する。口縁部にヨコナデ、体部外面に指オサエの後ナデ、体部内面にナデを施す。

993は口径12.2cm、器高3.8cm、枠内最下層から出土した。口縁部にヨコナデ、外面にケズリ、体部内面にナデを施す。また、体部に穿孔が認められ、煤が付着している。

994、995は土師器碗で、口縁部にヨコナデ、体部外面に指オサエ、体部に内面ナデを施す。

994は口径13.8cm、器高4.8cm、995は口径13.8cm、器高4.6cm。

996は土師器高杯で脚部のみ残存しており、残存高は9.6cm。脚部には8面の面取りを施し、底部外面にヨコナデの後ヨコミガキ、内面に指オサエおよびナデを施す。

997～1001は土師器甕で、口縁部は外反して端部が肥厚する。胴部は球形を呈する。

997は口径15.2cm、器高15.8cm、口縁部にヨコナデ、口縁部内面にヨコハケ、胴部外面にタテハケおよびナナメハケ、胴部内面に指オサエの後ハケおよび板ナデを施す。また、煤が付着している。

998は口径29.3cm、器高17.8cm、口縁部は外反し、端部が肥厚する。口縁部にヨコナデ、口縁部内面にヨコハケ、胴部外面にタテハケおよびナナメハケ、胴部内面に指オサエの後、板ナデを施す。また、煤が付着している。

999は口径17.6cm、器高15.3cm、最下層から出土した。口縁部にヨコナデ、胴部外面に指オサエの後ナナメハケ、胴部内面に指オサエの後、板ナデを施す。

1000は口径21.8cm、器高20.2cm。口縁部にヨコナデ、口縁部内面にヨコハケ、胴部外面にタテハケおよびナナメハケ、胴部内面に指オサエの後、板ナデを施す。また、煤が付着している。

1001は口径20.8cm、器高22.4cm。口縁部にヨコナデ、口縁部内面にヨコハケ、胴部外面にタテハケおよびナナメハケ、胴部内面に指オサエの後、板ナデを施す。また、煤が付着している。

1004は杯身で、残存率30%、復元口径11.0cm、器高3.6cmである。口縁部は外傾して湾曲しながら伸び、端部は丸く収められている。底部に高台は付されていない。

内面中央は一定方向のナデ、底面中央は未調整で、その他はヨコナデで調整されている。TK46 型式にあたると思われる。

1005 は甌で、頸部以上を欠損しており、残存率 50%、残存高 8.1 cm である。肩部の張りが強く、下方へ屈曲し、底部はわずかに丸みを帯びる。体部中央に円孔透かしを施しているが、孔の下半分を打ち欠いている。底面は不定方向のヘラケズリ、胴部より上はヨコナデで調整されている。全体的に器壁が厚く、鈍い印象を受ける。

1006 は小壺で、椀内埋土から出土した。頸部以上を欠損しており、残存高 5.2 cm、底径 3.4 cm である。高台は付されていない。肩部の張りが弱く丸みを帯び、底部にヘラ記号がある。平安時代初頭のもものと推定される。

1007 は横瓶で、復元口径 10.4 cm、残存高が 21.5 cm である。口端部はほぼ水平に仕上げられ、頸部は非常に短く、外反している。胴部内面には、胴部成形時に穿たれた円孔を粘土板でふさいだ痕跡が残っている。頸部はヨコナデによって調整され、胴部中央の外面は平行叩き目文のタタキ板で調整されている。また、内面には同心円紋の当て具痕を残す。側胴部外面は両面とも、成形時の円孔に沿って中心部以外に円心状にカキ目を施し、一部不定方向のカキ目も存在する。中心部はナデで調整されている。古墳時代後期から飛鳥時代と推定される。

1002 は子持勾玉で、残存長 6.5 cm、残存幅 3.6 cm で全体の半分を欠いている滑石製で全面に竹管紋を施している。

1003 は十鐺で、筒状を呈する。全長 4.6 cm、径 2.2 cm。中央部の孔は楕円形で、長径 0.7 cm、短径は 0.5 cm である。

1008 は斎串で、全長 12.5 cm、最大幅 2.05 cm、最大厚 0.15 cm でヒノキ科アスナロ属の木材を使用している。

1009 は斎串で、全長 13.8 cm、最大幅 1.7 cm、最大厚 0.35 cm でヒノキ科ヒノキ属の木材を使用している。先端を欠いている。

1010 は斎串で、全長 15.8 cm、最大幅 1.9 cm、最大厚 0.4 cm でヒノキ科の木材を使用している。

1011 は斎串で、全長 16.5 cm、最大幅 1.9 cm、最大厚 0.15 cm である。

1012 は斎串で、全長 17.0 cm、最大幅 2.0 cm、最大厚 0.2 cm でヒノキ科アスナロ属の木材を使用している。先端を欠いている。

1013 は斎串で、全長 18.4 cm、最大幅 2.4 cm、最大厚 0.2 cm でヒノキ科アスナロ属の木材を使用している。

1014 は斎串で、全長 19.9 cm、最大幅 2.4 cm、最大厚 0.2 cm でヒノキ科アスナロ属の木材を使用している。

1015 は斎串で、全長 20.2 cm、最大幅 1.8 cm、最大厚 0.2 cm でヒノキ科アスナロ属の木材を使用している。

1016 は井戸杵材で、縦 38.5 cm、横 109.5 cm、最大厚 5.3 cm であり、わずかに中央がふくらんでいる。左右の端が欠損していると思われるが、ほぼ対称の長さにかたどっているため不明である。

1017 は井戸杵材で、縦 41.0 cm、横 110.0 cm、最大厚 6.0 cm である。完形と思われる。

1018 は井戸杵材で、縦 33.0 cm、横 110.7 cm、最大厚 7.0 cm であり、わずかに中央が

ふくらんでいる。片側の端が欠損している。

1019 は井戸杵材で、縦 23.0cm、横 108.0cm、最大厚 7.5cm であり、断面は弧を描いている。比較的作りも粗く、木材の外側を利用していると考えられる。

SE61

1026 は土師器杯で、口径 10.9 cm、器高 3.7 cm、上層から出土した。口縁部にヨコナデ、体部外面に指オサエの後ナデ、体部内面にナデを施す。

1028 は土師器甕で、口径 24.1 cm、器高 20.5 cm、上層から出土した。口縁部が外反し、胴部は球形を呈する。口縁部にヨコナデ、胴部外面にタテハケ、胴部内面にヨコハケ、指オサエの後、板ナデを施す。また、胴部に穿孔が施され、煤が付着している。

SE65

1020 は須恵器杯蓋で、残存率 10%、復元口径 11.4 cm、残存高が 4.2 cm である。端部はやや鈍い印象を受けるが、内に傾斜して平らである。稜はやや鋭く、突出して段を成している。端部から稜までは 2.3 cm で、犬井部には反時計回りの回転ヘラケズリが施されている。TK47 型式のものと考えられる。

1022 は須恵器杯身で、残存率 10%、復元口径 10.7 cm、残存高が 3.8 cm である。立ち上がりは垂直に伸び、端部に沈線が施されている。底部の回転ヘラケズリは確認することができないが、ヨコナデで調整されている。受部はやや短く、ほぼ水平に伸び、鈍い印象を受け、立ち上がりは 1.8 cm である。TK47 型式と考えられる。

1024 は須恵器の壺あるいは甕で、頸部以上を欠損しており、残存率 40%、残存高 9.1 cm である。頸部は細いことが確認でき、肩部の張りやや強く、下方へ屈曲し、底部はわずかに丸みを帯びる。胴部にやや粗い列点文を施している。底部内面は回転ヘラケズリ、胴部から内面にかけてはヨコナデで調整されている。また、肩部に重ね焼き痕が残っている。

(3) J 地区

J 調査区

第 1 遺構面

1021 は須恵器杯蓋で、残存率 45%、復元口径 14.2 cm、残存高 4.3 cm である。端部は丸く仕上げられ、稜は鋭くやや突出し段を成している。天井部の全体に時計回りの回転ヘラケズリが施され、端部から稜までは 2.3 cm である。非常に焼きが甘い、全体的にシャープさに欠け、丸く収める技法を取り入れていることから、TK216 型式の可能性も考えられる。

SE66

1027 は土師器皿で、口径 15.0 cm、器高 1.7 cm、枠内最下層から出土した。口縁部にヨコナデ、体部外面に指オサエの後ナデ、体部内面にナデを施す。

1025 は土師器杯で、口径 13.7 cm、残存高 3.4 cm、枠内上層から出土した。口縁部にヨコナデ、体部外面に指オサエの後ナデ、体部内面にナデを施す。

1023 は黒色土器 A 類碗で、枠内上層から出土した。口径 16.0 cm、底径 8.2 cm、器高 4.5 cm、口縁部にヨコナデ、体部外面に指オサエの後ナデ、体部内面にナデを施す。また、煤が付着している。

1029 は井戸杵材で、曲物側板を転用している。直径 41.6cm、帯直径 42.0～42.2cm、下段帯幅 5.8cm、上段帯幅 6.2cm で、縦 0.2cm、横 0.3cm の隅丸方形の孔を穿いている。

1030 は井戸杵材である。井戸の北側で使用されており、全長 67.6cm、最大幅 22.9cm、最大厚 5.1cm である。表面に一边 5.0cm ほどで隅丸方形のほぞを施している。

1031 は井戸杵材である。井戸の北側で使用されており、全長 66.8cm、最大幅 30.4cm、最大厚 5.2cm である。表面に 12.0cm、6.0cm ほどの隅丸で長方形のほぞを施している。

1032 は井戸杵材である。井戸の北側で使用されており、全長 61.7cm、最大幅 18.8cm、最大厚 6.1cm である。表面に一边 5.0cm ほどで隅丸方形のほぞを施している。

1033 は井戸杵材である。井戸の南側で使用されており、全長 87.1cm、最大幅 21.9cm、最大厚 11.5cm である。表面に筋が存在し、円形に孔が開いている。

1034 は井戸杵材である。井戸の南側で使用されており、全長 40.0cm、最大幅 13.8cm、最大厚 3.0cm である。表面は凹凸が激しく状態が悪い。

1035 は井戸杵材である。井戸の南側で使用されており、全長 37.7cm、最大幅 19.3cm、最大厚 6.3cm である。断面はわずかに弧を描いている。

1036 は井戸杵材である。井戸の南側で使用されており、全長 59.4cm、最大幅 24.0cm、最大厚 3.4cm である。板状に加工されている。

1037 は井戸杵材である。井戸の南側で使用されており、全長 90.0cm、最大幅 27.8cm、最大厚 7.2cm である。表面にほぞを施した痕跡が伺える。

SE67

1044 は杵内 3 層、1048 は杵内最下底から出土した。

1044 は土師器甕で、口径 16.4 cm、器高 2.9 cm、底面に墨書がある。口縁部にヨコナデ、体部外面にケズリ、体部内面にナデを施す。また、体部に穿孔が施されている。

1048 は土師器甕で、杵内最下底から出土した。口径 17.2 cm、器高 14.3 cm、口縁部は外反して端部が肥厚し、胴部は球形を呈する。口縁部にヨコナデ、口縁部内面にヨコハケ、胴部外面にタテハケおよびナメハケ、胴部内面にナデを施す。また、煤が付着している。

SD100

1038 は須恵器杯蓋で、残存率 45%、復元口径 11.2 cm、器高が 4.1 cm である。端部は内に傾斜し、ほぼ平らに仕上げられている。稜は鋭く、突出している。天井部に回転ヘラケズリが施され、小型であることから TK23～TK47 型式的ものと考えられる。

1039 は須恵器杯蓋で、残存率 30%、復元口径 12.1 cm、残存高が 4.8 cm である。端部はやや鈍い印象を受けるが、内に傾斜し、断面はほぼ平らである。稜は非常に鋭く突出し、段を成している。端部から稜まで 2.1 cm を測り、天井部には回転ヘラケズリが施されているが、全体的に自然釉が付着しているため砂粒の動きを確認することができない。TK23～TK47 型式的ものと考えられる。

1042 は須恵器甕である。口縁部を欠損しており、残存率 70%、残存高が 8.7 cm である。頭部はやや細く、波状文を巡らせ、肩部の張りはやや強いが丸みを帯びている。胴部にはカキ目を施し、その直上に列点文、円形の透かし孔を施す。TK23 型式的ものと思われる。

(4) K地区

K調査区

耕作溝

1045 は土師器碗で、口径 11.1 cm、器高 5.8 cm、口縁部は外に突出する。口縁部にヨコナデ、体部内外面に指オサエおよびナデを施す。

1046 は土師器の小型鉢で、口径 8.9 cm、器高 6.15 cm。口縁部にヨコナデ、胴部内外面にナデを施す。

1047 は土師器で、残存高 5.35 cm、内外面にハケが施されている。底部の 16 箇所に穿孔が見られることから、甔と推定される。

1041 は施軸陶器で、口径 11.4 cm、残存高 3.4 cm、内外面に施軸する。

1040 は須恵器杯身で、口径は 11.2 cm、器高が 5.4 cm である。立ち上がりは比較的長く、やや内傾して伸び、端部には沈線が施される。底部に回転ヘラケズリを施しており、受部は短く、ほぼ水平に伸び、鈍い。小型であり、全体的に丸みを帯びていることから、TK47 型式と考えられる。

1043 は須恵器器台で、杯部のみ残存しており、口径 24.0 cm、残存高 7.0 cm である。凹線文を巡らせ、その下に波状文を巡らせている。古墳時代のもと思われる。

SD103

1055 は須恵器器台で、脚部以下を欠損している。口径は 48.6 cm、残存高は 10.0 cm である。端部はやや鈍いが、段を成している。沈線を施し、その間に波状文を施す。古墳時代後期のもと考えられる。

SX20

1057、1060 は土師器甕である。

1057 は口径 16.0 cm、残存高 8.9 cm、口縁部は外反する。口縁部にヨコナデ、胴部内外面に指オサエの後ナデを施す。

1060 は長胴甕で、口径 22.7 cm、残存高 24.5 cm、口縁部はくの字状を呈する。口縁部にヨコナデ、胴部外面にタテハケ、胴部内面にナメハケの後ナデを施す。

1050 は須恵器杯身で、復元口径は 10.6 cm で器高が 4.4 cm である。立ち上がりは比較的長く、ほぼ垂直に伸び、端部は内側に傾斜して平らな断面形を呈する。底部のやや狭い範囲に回転ヘラケズリを施しており、受部はやや外上方へ短く伸び、鋭い。TK23 型式と考えられる。

1051 は須恵器杯身で、口径は 14.2 cm、器高は 5.2 cm である。立ち上がりはやや短く、内傾して伸び、端部は丸く収められている。また、底部のやや広範囲に時計回りの回転ヘラケズリが施されている。大型であることから、MT15 型式のもと考えられる。

SX21

1049 は須恵器杯身で、復元口径は 11.0 cm で器高が 4.3 cm である。立ち上がりは比較的長く、やや内傾して伸び、端部には沈線が施されているが、断面形は平らに近い。底部に反時計回りの回転ヘラケズリを施しており、受部はやや外上方へ短く伸び、やや丸い。TK23～TK47 型式と考えられる。

1053 は須恵器無蓋高杯で、脚部以下を欠損している。口径は 17.0 cm で残存高が 6.3

cmである。杯部は浅く、口縁部は直線的に伸び、端部は丸い。稜は鋭く、胴部に波状文を施す。TK47 型式前後と考えられる。

SE68

1058 は土師器二重口縁壺で、口径 11.0 cm、器高 19.4 cm、上層から出土した。口縁端部が肥厚し、胴部は球形を呈する。口縁部にヨコナデ、胴部外面にナデ、下半にはナメハケ、胴部内面に指オサエの後ナデを施す。また、底部に穿孔が見られる。

1059 は土師器直口壺で、口径 11.2 cm、器高 16.6 cm、口縁部が外傾し、胴部は球形を施す。口縁部にヨコナデ、口縁部外面にタテミガキ、胴部外面にナデ、胴部内面に指オサエの後ナデを施す。

SR26

1056 は土師器皿で、口径 11.1 cm、器高 5.8 cm、残存率 55%、口縁部は「て」字状を呈する。口縁部にヨコナデ、体部内外面に指オサエおよびナデを施す。

1052 は須恵器杯蓋で、復元口径 12.6 cm、器高が 3.8 cmである。端部は水平に近く、ほぼ平らな断面形を呈する。稜は非常に鋭く、突出して段を成している。天井部のやや狭い範囲に時計回りの回転ヘラケズリが施され、稜線より口径の方が広い。稜が非常に鋭いなどの特徴を持つが、体部が短いことから TK208～TK23 型式のものと考えられる。

1054 は須恵器器台で、底径 18.8 cm、残存高 10.7 cmで脚部のみ残存している。3段の突帯を巡らせ、その間に波状文を巡らせている。古墳時代のものと思われる。

(5) L地区

第 59 トレンチ

耕作溝

1062 は土師器皿で、口径 15.5 cm、器高 2.6 cm。口縁部にヨコナデ、体部外面にケズリ、体部内面にナデを施す。

1063 は土師器高杯で、残存高 8.0 cm、杯部に稜を有する。脚部は、3方に円形透孔が穿たれている。杯部内外面にナデを施し、脚部は外面を面取りする。また、脚部内面にはしぼり痕が残る。

1065 は土師器小型鉢で、口径 12.2 cm、器高 12.0 cm、口縁部が外反し、胴部は球形を呈する。口縁部にヨコナデ、胴部外面にナデ、胴部内面に指オサエおよびナデを施す。また、底部に穿孔が見られる。

1064 は土師器壺で、胴部のみ残存しており、残存高は 10.8 cm、胴部は球形を呈する。外面にナデ、下半にはナメハケ、内面に指オサエおよびナデを施す。

1066 は土師器壺で、口径 20.6 cm、器高 11.6 cm、口縁部はくの字状を呈する。口縁部にヨコナデ、胴部外面にナデ、胴部内面に指オサエおよびナデを施す。

1068 は土師器二重口縁壺で、口径 14.6 cm、器高 5.8 cm、口縁端部が肥厚する。口縁部にヨコナデを施す。

SD90

1061 は須恵器杯身で、復元口径は 10.1 cm、器高が 5.1 cmである。立ち上がりは比較的長く、やや内傾して伸び、端部には沈線を施す。底部に時計回りの回転ヘラケズ

リを施しており、受部は短く、やや外上方へ伸び、やや鋭い。小型で、全体的に丸みを帯び、やや作りが甘いことから TK17～MT15 型式と考えられる。

SD93

1069 は土師器長胴甕で、口径 15.2 cm、器高 27.2 cm、口縁部は外反する。口縁部にヨコナデ、胴部内外面にナデを施す。

第 60 トレンチ

SX11

1067 は土師器壺で、口径 9.8 cm、残存高 4.9 cm、口縁部のみ残存している。口縁部は外傾し、口縁部にヨコナデ、胴部内外面にナデを施す。

SK71

1070 は土師器長胴甕で、口径 18.0 cm、器高 32.9 cm、口縁部はくの字状を呈し、端部が肥厚する。口縁部にヨコナデ、胴部外面にタテハケおよびナナメハケ、胴部内面に指オサエの後ナナメハケ、指オサエの後ケズリを施す。また、煤が付着している。

第8章 平成18年度調査

新葛下川流路の南、事業地のほぼ中央南よりの一帯(K、L、M、N地区)において区画道路および都市計画道路予定地の計2,737㎡(K地区108㎡、L地区390㎡、M地区828㎡、N地区1,411㎡)を調査対象とした。

1 遺構

(1) L地区

第61トレンチ

幅6.0m、全長36.0mの東西トレンチである。

基本層序

現地表面は整地、攪乱による表土である。表土直下に堆積する近代の耕作土とその床土を第Ⅰ層、中世から近世にかけての耕作土層を第Ⅱ層とした。この第Ⅱ層を除去したところ、黄褐色粘質土～粘土からなる遺構基盤層に達し、これを第Ⅲ層とした。調査は、第Ⅱ層上で明確に耕作溝を検出することができる面まで機械掘削を行い第Ⅰ遺構面とし、第Ⅲ層を第Ⅱ遺構面として行った。現地表の標高は、最も高いところで53.424m、低いところで53.060mである。なお、層厚は表土が約0.3m、第Ⅰ層は0.25m～0.3m、第Ⅱ層は約0.4mであった。

第1遺構面

中世から近世の耕作に伴う素掘小溝および杭跡を検出したのみで、特筆すべきものはない。

第2遺構面

トレンチ中央部で南北方向の溝状遺構1基(SD104)、その東側で沼状遺構2基(SX22, 23)を検出した。遺物は黒色土器碗、土師器片、瓦器片、羽釜片などに加えて瓦、熱破砕した自然石が数点出土している。総体として黒色土器碗および土師器皿の破片が圧倒的に多い。トレンチ西部ではピットを数基検出しており、それらには底部に自然石をもつ柱穴が含まれる。また東部では、南東から北西方向へ抜ける流路の西岸層を検出した。以上の通り、柱穴はあるものの建物を復元することはできず、第Ⅱ層が堆積する以前の段階では居住域や耕作地としての利用がなされていなかったと考えられる。

SX22

東西長約10.0m、南北長が最大約4.5m、最大深度約0.3m。東西に設定したセクションの土層断面において水が流れた痕跡は認められず、浅い沼状を呈していたと思われる。埋土中からは土師器皿、および黒色土器碗の高台が大量に出土した。とりわけ後者は、意図的に体部を打ち欠いたと思われるものが多数を占める。

SX23

SX22の西隣にひろがる東西約6.5m、最大南北長2.0mの遺構。SX22の埋土と同じ堆積土によって埋没していることから、一連のものと考えられる。出土遺物はSX22と同様、黒色土器片、土師器片が主である。

SD104

SX23の西に隣接し、トレンチを南北に縦断する、幅約2.0m、深さ約0.88mの流路である。また、平面での検出状況、および埋土の堆積状況からはSX23との切り合い関係を見て取ることはできず、一連のものである可能性が高い。

第63 トレンチ

南北6.0m、東西28.0mの東西トレンチで第61トレンチの南西約50.0mに位置する。

基本層序

基本的に、北に位置する第61トレンチと同じである。現地表は標高52.900m～53.100m。第Ⅲ層は西半ではしっかりとした黄色粘土であるが、東へいくにつれて砂粒分が増加する。また、第61トレンチに比して第Ⅱ層が薄く、層厚は0.2m～0.3mである。

第1遺構面

中世以降の耕作溝およびピット数基を検出したのみであった。

第2遺構面

井戸1基(SE69)、土坑2基(SK82, 83)に加え、上層から切り込まれたピット数基をトレンチ西端で検出した。SE69はトレンチ中央西寄り、SK82はトレンチ東部の北壁際に位置する。また、トレンチ東端では河の氾濫によると思われる砂層がひろがっていた。

SK82

トレンチ東端の北壁際に検出した、南北1.9m以上、東西約1.0mの土坑である。須恵器、土師器、黒色土器、瓦が出土している。

SK83

SK82の南側にひろがる砂層中で検出した、南北0.75m、東西0.6mの楕円形の土器溜まりである。須恵器の杯身、土師器高杯の身が出土した。

SE69

楕円形は検出面で南北2.5m、東西2.3mの方形を呈する。井戸枠は一辺約1.0mの方形で検出面から底部までの深さは約5.0m、方形縦板組によって構築されている。

遺物は土師器、須恵器片、黒色土器、瓦片、斎串、瓢箪などが出土した。枠内埋土中層からは飛鳥時代の軒丸瓦片が出土しているが、その一方で枠内最底部から10世紀末に比定される黒色土器が出土している。このことから、井戸の廃絶が少なくとも平安時代後半以降であり、枠の構造から構築時期は早くとも奈良時代中頃以降と考えら

れる。

(2) M地区

第62 トレンチ

第61 トレンチの東延長上に全長36.0mの東西トレンチを設定した。

基本層序

表土および近世以降の耕作土層は削平を受けていたが、第Ⅱ層以下の層序はL地区と同様である。第Ⅱ層の耕作溝が明確にみえる状態まで機械掘削を行い第1遺構面とし、直下の第Ⅲ層を第2遺構面とした。現地表面は標高52.900m～53.000m、各層の層厚は第Ⅰ層が約0.3m、第Ⅱ層が0.15m～0.2mであった。

第1遺構面

中世の耕作溝、および近世以降の耕作に伴う杭跡を検出したのみである。

第2遺構面

主な遺構は柱穴とピットで、掘立柱建物2棟を復元することができる。また、北西端部は第61 トレンチから重機による攪乱が続いていた。

SB91

梁間2間、桁行3間の東西棟。柱間は梁間1.3m、桁行は東2間が1.5m、西1間が1.8m。

SB92

梁間1間、桁行1間の東西棟。柱間は梁間3.4m、桁行4.0m。

第64 トレンチ

第62 トレンチから約45.0m南に設定した南北6.0m、東西31.0mの東西トレンチである。

基本層序

表土および近世以降の耕作土層(第Ⅰ層)は削平されており、床土が僅かに残存する程度であった。現地表は標高53.100mで、第Ⅱ層以下は他のトレンチと同様である。ただし、第Ⅱ層の層厚は薄いところで0.3m、厚いところで0.45mと、第62 トレンチよりも薄い。第Ⅲ層もまた他トレンチ同様に黄色～黄褐色粘質土をベースとするが、上層(第Ⅱ層)からの混ざり込みと思われる砂粒分を多く含む。

第1遺構面

中世から近世の耕作に伴う素掘小溝以外に近世以降の井戸2基、ピット数基を検出した。耕作溝の密度は低く、L地区第63 トレンチと同程度であった。

第2遺構面

土坑6基、柵列の柱穴4基を検出した。トレンチ西端で検出した土坑では、少量の土器類と瓦に加えて熟破砕を起こした石が出土している。柵列に関してはいずれも土

層から切り込まれたものと考えられ、中近世の耕作あるいは開発に伴う遺構と思われる。

第65 トレンチ

M地区東端に設定した東西6.0m、南北68.0mの南北トレンチで、第62トレンチとほぼ直行する。

基本層序

L、M地区の他のトレンチと同様である。現地表の標高は52.900m～53.100m、表土の層厚が0.1m～0.3m、第Ⅰ層が床土のみ残存しており約0.1m、第Ⅱ層は約0.5mである。

第1遺構面

主な遺構は中世から近世の耕作溝である。耕作深度は第62トレンチとの交差部付近で最も深くなっており、トレンチ西壁断面には畦畔らしき痕跡が認められた。主な遺物は土師器、須恵器、黒色土器である。

第2遺構面

掘立柱建物2基と約60基のピットを検出した。また、数基のピットの底部には根石として用いたと思われる石や瓦が置かれていた。

SB93

南北4.0m、東西3.5m。西に延びる可能性があり、東西棟と思われる。

SB94

梁間2間の東西棟で、東1間分を検出した。柱間は梁間1.6m、桁行1.5m。

(3) K地区

第66 トレンチ

第65トレンチから南延長上60.0mでこれに直行する幅4.0m、全長27.0mの東西トレンチを設定した。

基本層序

他のトレンチ同様、中世の耕作土層(第Ⅱ層)直下に第Ⅲ層を確認した。第Ⅱ層(第1遺構面)まで機械掘削を行い、第Ⅲ層を第2遺構面として調査を実施した。現地表面は標高55.300m～55.600m、東部のみ表土が残存しており層厚は0.05m～0.2m、第Ⅰ層の層厚は西半で0.3m～0.4m、東半で0.2m～0.3m、第Ⅱ層が0.1m～0.3mである。

第1遺構面

耕作に伴う素掘小溝を検出したが、その密度は低い。遺物は土師器、須恵器、黒色土器が少量出土した。なお、柱穴などは検出されなかった。

第2遺構面

SX24

トレンチ東端に流路状にひろがる遺構(SD105)内で検出した土器溜まりである。平面形は直径約0.6mの円形を呈し、土師器甕、甕等が出土した。

SD105

トレンチ東端部で検出した、南北方向に走る流路である。埋土からは双孔円盤が未製品を含めて2点、瑠璃1点が出土した。

(4) N地区

第67トレンチ

M地区の東に隣接する地区で、都市計画道路予定地に北端で東西16.0m、南端で東西23.0m、南北長66.0mのトレンチを設定した。

基本層序

I、M地区と同じく、表土および第I層直下に中世の耕作上層(第II層)が堆積し、その下に第III層を確認した。また、トレンチ西半では比較的純粋な第III層が堆積しているが、中央部から東にかけては河の氾濫によると思われる砂粒分を含む。なお、トレンチ東半では第II層以深の遺構が旧河道埋土を基盤として構築されていることから、当該埋土を第III層の一部とした。

調査は第II層の耕作溝が明確に確認できる面を第1遺構面とし、第III層を第2遺構面として行った。なお、基本層序およびトレンチ東半の自然河道内の堆積状況を確認するために東西方向のサブトレンチを3本設定した。

第1遺構面

耕作溝のほか、現代の攪乱2基を検出した。主な遺物は土師器、須恵器、黒色土器、瓦である。

第2遺構面

第III層では柱穴と土坑あわせて約300基、8棟の掘立柱建物、河川の旧流路1条、井戸4基を検出した。柱穴は掘立柱建物のものを含め、明瞭に柱痕を残すものが多いが、遺物は少ない。井戸4基のうち3基は枠をもたない、素掘りの井戸である。枠を有する1基については、掘形の一边が3.0mの方形で、検出面から最低部までの深さが約2.1m、井戸枠は横材を組み合わせた構造で一边約0.8mの方形である。また、素掘井戸のうちの1基は直径約0.4mの曲物が集水施設として用いられ、深さは約0.5mであった。

掘立柱建物群

これらの柱穴埋土には遺物が殆ど含まれていないが、第1遺構面で検出した耕作溝埋土、および第II層中に包含される遺物が平安時代後期以降のものが主であることから、機能した時期をある程度想定することができよう。

SB95

梁間2間、桁行3間の南北棟。柱間は梁間1.7m、桁行2.0m。

SB96

梁間1間、桁行1間の南北棟。柱間は梁間3.0m、桁行4.5m。

SB97

梁間2間、桁行3間の南北棟。柱間は梁間2.0m、桁行は北1間が2.5m、南2間が2.0m。

SB98

梁間1間、桁行1間の南北棟。柱間は梁間2.0m、桁行3.7m。

SB99

梁間2間、桁行3間の南北棟。柱間は梁間1.6m、桁行1.5m～1.7m。

SB100

北辺の東1間と東辺の北2間を検出した。南北棟と思われる。柱間は梁間1.7m、桁行2.1m。

SB101

梁間2間、桁行2間でほぼ正方形の平面プラン。柱間は梁間1.7m、桁行1.8m。

SB102

梁間2間、桁行2間の南北棟。柱間は梁間1.2m、桁行1.5m。

SE71

検出面の掘形は一辺約3.0mの方形で井戸枠の内寸は一辺約0.8m、底部までの深さは約2.1mである。井戸枠構造は平面方形で、全幅約1.3m、高さ約0.2m、厚さ約3.0cmの板を井桁状に組み上げた「積み上げ式横板組相欠き仕口型」を採る。また、最下部の三段は栽頭四角錐を伏せた形状になっており、最低部の枠内寸を一辺0.6mとしている。井戸地上部では、木製枠の直上にあたる位置で石列を検出しており、枠内上層埋土内からも自然石が数点出土していることから、石積みの地上施設が構築されていたと思われる。枠内からは土師器、須恵器、黒色土器、種子に加え、横櫛、下駄などの木製品が出土している。

SE72

直径約1.2mの円形掘形で深さは約0.5m、集水施設として直径約0.4mの曲物を底部に設置してあった。掘形および枠内からは土師器、須恵器、黒色土器、瓦が出土した。

SR29

トレンチ東部を南北に走る旧河道である。サブトレンチの断面観察では数度にわたる氾濫を確認することができた。東西に大きく蛇行しており、氾濫のたびにその形を変えていたものと思われる。ほぼ無遺物に近く、サヌカイト製石器と剥片が少量出土するのみという状況であった。そのため、この旧河道が機能した時期についての詳細は不明である。しかし、当河道埋土を基盤として築かれた上述の掘立柱建物群が平安

時代後期以前に機能していたと考えられることから、遅くとも平安時代には埋没していたものと推定される。

2 遺物

(1) L地区

第61トレンチ

第Ⅱ層(耕作土層)、SX22、23からのものが中心である。

SX22・23

土師器、黒色土器が中心で少量の須恵器、瓦器、瓦があり、輪の羽口が2点出土している。土師器は大半を皿が占め、碗、杯、高杯、甕、壺類、羽釜が少数ある。黒色土器はA類、B類とも出土しており、器種は碗が大半であるが、体部に対し高台の出土点数が極端に多い。A類では高台が63個体、体部が約14個体分、B類はそれぞれ25個体、約6個体分である。これらの内には意図的に高台部を残して割ったとみられるものが多数ある。瓦器は皿が3個体、碗は10個体で、そのうち高台は少なくとも4個体ある。

1071～1106は土師器皿で、口縁部は「て」字状を呈する。

1071は口径12.4cm、器高2.5cm、残存率35%。口縁部にヨコナデ、体部内外面にナデを施す。

1072は口径9.8cm、器高1.9cm、残存率95%。口縁部にヨコナデ、体部内外面にナデを施す。

1073は口径9.8cm、器高2.0cm、残存率35%。口縁部にヨコナデ、体部内外面にナデを施す。

1074は口径9.3cm、器高1.6cm、残存率90%。口縁部にヨコナデ、体部内外面にナデを施す。

1075は口径9.0cm、器高1.1cm、残存率80%。口縁部にヨコナデ、体部内外面にナデを施す。

1076は口径9.6cm、器高1.6cm、残存率60%。口縁部にヨコナデ、体部外面に指オサエの後ナデ、体部内面にナデを施す。

1077は口径9.4cm、器高1.6cm、残存率50%。口縁部にヨコナデ、体部外面に指オサエの後ナデ、体部内面にナデを施す。

1078は口径9.8cm、器高1.8cm、残存率30%。口縁部ヨコナデ、体部外面に指オサエおよびナデ、体部内面にナデを施す。

1079は口径9.6cm、器高1.8cm、残存率55%。口縁部にヨコナデ、体部内面にナデを施す。また、底部に静止糸切り底を観察することができる。

1080は口径9.8cm、残存高2.4cm、残存率45%。口縁部にヨコナデ、体部内外面にナデを施す。

1081は口径8.8cm、器高1.4cm、残存率30%。口縁部にヨコナデ、体部内外面にナデを施す。

1082 は口径 9.7 cm、器高 1.4 cm、残存率 50%、口縁部にヨコナデ、体部内外面にナデを施す。

1083 は口径 9.4 cm、器高 1.6 cm、残存率 45%、口縁部にヨコナデ、体部内外面にナデを施す。

1084 は口径 9.8 cm、器高 1.6 cm、残存率 35%、口縁部にヨコナデ、体部内外面にナデを施す。

1085 は口径 9.6 cm、器高 1.5 cm、残存率 50%、口縁部にヨコナデ、体部内外面に指オサエおよびナデを施す。

1086 は口径 9.8 cm、器高 1.0 cm、残存率 50%、口縁部にヨコナデ、体部外面に指オサエおよびナデ、体部内面にナデを施す。

1087 は口径 9.0 cm、器高 1.1 cm、残存率 40%、口縁部にヨコナデ、体部外面に指オサエおよびナデ、体部内面にナデを施す。

1088 は口径 9.0 cm、器高 1.2 cm、残存率 40%、口縁部にヨコナデ、体部外面に指オサエおよびナデ、体部内面にナデを施す。

1089 は口径 10.1 cm、器高 1.2 cm、残存率 30%、口縁部にヨコナデ、体部外面に指オサエおよびナデ、体部内面にナデを施す。

1090 は口径 9.3 cm、残存高 1.5 cm、残存率 98%、口縁部にヨコナデ、体部外面に指オサエおよびナデ、体部内面にナデを施す。

1091 は口径 9.4 cm、器高 1.5 cm、残存率 60%、口縁部にヨコナデ、体部外面に指オサエおよびナデ、体部内面にナデを施す。

1092 は口径 9.5 cm、器高 1.5 cm、残存率 80%、口縁部にヨコナデ、体部外面に指オサエおよびナデ、体部内面にナデを施す。

1093 は口径 9.9 cm、器高 1.5 cm、残存率 45%、口縁部にヨコナデ、体部外面に指オサエおよびナデ、体部内面にナデを施す。

1094 は口径 9.7 cm、器高 1.5 cm、残存率 30%、口縁部にヨコナデ、体部外面に指オサエおよびナデ、体部内面にナデを施す。

1095 は口径 9.6 cm、器高 1.5 cm、残存率 20%、口縁部にヨコナデ、体部外面に指オサエおよびナデ、体部内面にナデを施す。

1096 は口径 9.5 cm、器高 1.6 cm、残存率 98%、口縁部にヨコナデ、体部外面に指オサエおよびナデ、体部内面にナデを施す。

1097 は口径 9.7 cm、器高 1.6 cm、残存率 80%、口縁部にヨコナデ、体部外面に指オサエおよびナデ、体部内面にナデを施す。

1098 は口径 9.6 cm、器高 1.7 cm、残存率 30%、口縁部にヨコナデ、体部外面に指オサエおよびナデ、体部内面にナデを施す。

1099 は口径 10.1 cm、器高 1.7 cm、残存率 30%、口縁部にヨコナデ、体部外面に指オサエおよびナデ、体部内面にナデを施す。

1100 は口径 10.2 cm、器高 1.9 cm、残存率 80%、口縁部にヨコナデ、体部外面に指オサエおよびナデ、体部内面にナデを施す。

1101 は口径 9.4 cm、器高 2.1 cm、残存率 80%、口縁部にヨコナデ、体部外面に指オサエおよびナデ、体部内面にナデを施す。

1102 は口径 9.8 cm、器高 1.3 cm、残存率 35%、口縁部にヨコナデ、体部外面に指オサエおよびナデ、体部内面にナデを施す。

1103 は口径 9.6 cm、器高 1.4 cm、残存率 45%、口縁部にヨコナデ、体部外面に指オサエおよびナデ、体部内面にナデを施す。

1104 は口径 10.0 cm、器高 1.6 cm、残存率 60%、口縁部にヨコナデ、体部外面に指オサエおよびナデ、体部内面にナデを施す。

1105 は口径 9.7 cm、器高 1.9 cm、残存率 50%、口縁部にヨコナデ、体部外面に指オサエおよびナデ、体部内面にナデを施す。

1106 は口径 17.8 cm、器高 2.6 cm、残存率 30%、口縁部にヨコナデ、体部外面に指オサエおよびナデ、体部内面にナデを施す。

1107～1124 は 1 師器皿である。

1107 は口径 8.2 cm、器高 1.6 cm、残存率 30%、口縁部にヨコナデ、体部内外面にナデを施す。

1108 は口径 10.5 cm、残存高 2.3 cm、残存率 30%、口縁部にヨコナデ、体部内外面にナデを施す。

1109 は口径 15.0 cm、器高 2.9 cm、残存率 30%、口縁部にヨコナデ、体部内外面にナデを施す。

1110 は口径 13.9 cm、器高 3.1 cm、残存率 30%、口縁部にヨコナデ、体部内外面にナデを施す。

1111 は口径 9.6 cm、器高 1.1 cm、残存率 80%、口縁部にヨコナデ、体部外面に指オサエおよびナデ、体部内面にナデを施す。

1112 は口径 9.6 cm、器高 2.15 cm、残存率 90%、口縁部にヨコナデ、体部外面に指オサエおよびナデ、体部内面にナデを施す。

1113 は口径 10.8 cm、器高 1.6 cm、残存率 30%、口縁部にヨコナデ、体部外面に指オサエおよびナデ、体部内面にナデを施す。

1114 は口径 9.4 cm、器高 2.1 cm、残存率 95%、口縁部にヨコナデ、体部外面に指オサエおよびナデ、体部内面にナデを施す。

1115 は口径 10.1 cm、器高 2.0 cm、残存率 95%、口縁部にヨコナデ、体部外面に指オサエおよびナデ、体部内面にナデを施す。

1116 は口径 9.8 cm、器高 2.1 cm、残存率 75%、口縁部にヨコナデ、体部外面に指オサエおよびナデ、体部内面にナデを施す。

1117 は口径 13.4 cm、器高 2.3 cm、残存率 40%、口縁部にヨコナデ、体部外面に指オサエおよびナデ、体部内面にナデを施す。

1118 は口径 9.4 cm、器高 1.7 cm、残存率 95%。口縁部にヨコナデ、体部内面にナデを施す。また、底部外面に静止糸切り痕が認められる。

1119 は口径 9.8 cm、器高 1.7 cm、残存率 40%。口縁部にヨコナデ、体部内外面にナデを施す。

1120 は口径 9.8 cm、器高 1.7 cm、残存率 20%。口縁部にヨコナデ、体部外面に指オサエおよびナデ、体部内面にナデを施す。

1121 は口径 9.4 cm、器高 1.6 cm、残存率 95%。口縁部にヨコナデ、体部内面にナデ

を施し、底部外面には静止糸切り痕が残る。

1122 は口径 9.6 cm、器高 1.7 cm、完形。口縁部にヨコナデ、体部内面にナデを施し、底部外面には静止糸切り痕が残る。

1123 は口径 9.8 cm、器高 1.6 cm、完形。口縁部にヨコナデ、体部内面にナデを施し、底部外面には静止糸切り痕が残る。

1124 は口径 14.0 cm、器高 3.8 cm、残存率 40%。口縁部にヨコナデ、体部内外面にナデを施す。

1125～1127 は土師器杯である。

1125 は口径 11.9 cm、器高 3.3 cm、残存率 55%。口縁部にヨコナデ、体部内外面にナデを施す。また、体部内面に放射線状の暗文がわずかに残っている。

1126 は口径 13.9 cm、器高 3.1 cm、残存率 25%。口縁部にヨコナデ、体部内外面にナデを施す。

1127 は口径 12.8 cm、器高 3.4 cm、残存率 20%。口縁部にヨコナデ、体部内外面にナデを施す。

1128～1133 は土師器碗である。

1128 は底径 7.7 cm、残存高 1.8 cm、残存率 80%、1129 は底径 4.8 cm、残存高 2.1 cm、残存率 40%。両者とも底部のみ残存している。体部内面および底部にナデを施す。底に高台を貼り付ける。

1130 は口径 14.8 cm、底径 6.8 cm、器高 5.3 cm、口縁部にヨコナデ、体部内外面および底部にナデを施す。底には高台を貼り付ける。

1131 は底径 6.6 cm、残存高 2.1 cm、底に高台を貼り付け、体部内面および底部にナデを施す。

1132 は底径 7.0 cm、残存高 1.8 cm、残存率 60%。底に高台を貼り付け、体部内面および底部にナデを施す。

1133 は底径 6.0 cm、残存高 2.7 cm、底に高台を貼り付け、体部内面および底部にナデを施す。

1134 は土師器台付壺で、底径 10.8 cm、残存高 3.2 cm、底部のみ残存している。底に高台を貼り付け、体部内面および底部にナデを施す。

1135 は土師器台付壺で、底径 12.6 cm、残存高 3.5 cm、底部のみ残存しており、底に高台を貼り付ける。胴部内面および底部にナデを施す。

1136 は土師器壺で、口径 15.0 cm、残存高 5.5 cm、残存率 10%、口縁部は外反し、端部が肥厚する。口縁部にヨコナデ、胴部外面にナデ、胴部内面に指オサエおよびナデを施す。

1137 は黒色土器A類杯で、口径 13.4 cm、残存高 2.6 cm、残存率 35%。口縁部にヨコナデ、体部外面に指オサエおよびナデ、体部内面にナデを施す。

1138、1139 は黒色土器A類碗で、底部のみ残存している。底に高台を貼り付け、体部内面にミガキ、底部にナデを施す。1138 は底径 5.9 cm、残存高 1.3 cm、1139 は底径 6.8 cm、残存高 1.6 cm。

1140～1147、1150～1158 は黒色土器A類碗、1149 は黒色土器B類碗であり、1140～1142、1149、1150 は底部のみ残存している。

1140 は底径 7.7 cm、残存高 2.2 cm、体部内面および底部にナデを施す。底には高台を貼り付ける。

1141 は底径 6.8 cm、残存高 1.8 cm、体部内面にミガキ、底部にナデを施す。底には高台を貼り付ける。

1142 は底径 6.9 cm、残存高 2.1 cm、体部内面にミガキ、底部にナデを施す。底には高台を貼り付ける。

口縁部にヨコナデ、体部外面および底部にナデ、体部内面にミガキを施す。

1143 は底径 6.8 cm、残存高 1.8 cm、底部のみ残存している。底に高台を貼り付け、体部内面にミガキ、底部にナデを施す。

1144 は底径 7.0 cm、残存高 2.1 cm、底部のみ残存している。底に高台を貼り付け、体部内面にミガキ、底部にナデを施す。

1145 は底径 7.3 cm、残存高 1.9 cm、底部のみ残存している。底に高台を貼り付け、体部内面にミガキ、底部にナデを施す。

1146 は底径 7.4 cm、残存高 1.9 cm、底部のみ残存している。底に高台を貼り付け、体部内面にミガキ、底部にナデを施す。

1147 は底径 8.0 cm、残存高 1.9 cm、底部のみ残存している。底に高台を貼り付け、体部内面にミガキ、底部にミガキおよびナデを施す。

1149 は底径 5.5 cm、残存高 1.3 cm。体部内面にナデの後暗文ミガキ、底部にナデを施す。また、底に高台を貼り付ける。

1150 は底径 6.3 cm、残存高 2.1 cm、残存率 80%。体部内面にミガキ、底部にナデを施す。底には高台を貼り付ける。

1151 は底径 6.7 cm、残存高 1.4 cm、底部のみ残存している。底に高台を貼り付け、体部内面にミガキ、底部にナデを施す。

1152 は底径 6.9 cm、残存高 1.8 cm、底部のみ残存している。底に高台を貼り付け、体部内面にミガキ、底部にナデを施す。

1153 は底径 7.3 cm、残存高 2.1 cm、底部のみ残存している。底に高台を貼り付け、体部内面にミガキ、底部にナデを施す。

1154 は底径 7.5 cm、残存高 1.5 cm、底部のみ残存している。底に高台を貼り付け、体部内面にミガキ、底部にナデを施す。

1155 は底径 7.6 cm、残存高 2.3 cm、底部のみ残存している。底に高台を貼り付け、体部内面にミガキ、底部にナデを施す。

1156 は口径 15.0 cm、底径 7.1 cm、器高 5.1 cm、残存率 30%、底に高台を貼り付ける。口縁部にヨコナデ、体部外面および底部にナデ、体部内面にミガキを施す。

1157 は口径 14.4 cm、底径 7.3 cm、器高 5.7 cm、底に高台を貼り付ける。口縁部にヨコナデ、体部外面および底部にナデ、体部内面および見込みに平行ミガキを施す。

1158 は口径 15.9 cm、底径 7.6 cm、器高 6.1 cm、残存率 20%、底に高台を貼り付ける。

1148、1159、1160、1161、1165～1167 は黒色土器B類碗、1163 黒色土器A類碗である。

1148 は底径 5.8 cm、残存高 2.1 cm、底部のみ残存している。体部内面にミガキ、底

部にナデを施す。底には高台を貼り付ける。

1159 は口径 14.4 cm、底径 5.8 cm、器高 5.1 cm。口縁部にヨコナデ、体部内外面にミガキ、底部にナデを施す。底には高台を貼り付ける。

1160、1161、1163、1165～1167 は底部のみ残存しており、底には高台を貼り付ける。

1160 は底径 6.4 cm、残存高 1.8 cm、体部内面および底部にナデを施す。

1161 は底径 6.6 cm、残存高 1.7 cm、体部内面にミガキ、底部にナデを施す。

1163 は底径 6.7 cm、残存高 2.4 cm、体部内面にミガキ、底部にナデを施す。また、底面に「×」のヘラ描きがある。

1165 は底径 6.2 cm、残存高 2.4 cm、体部内面にミガキ、底部にナデを施す。

1166 は底径 7.2 cm、残存高 1.8 cm、体部内面にミガキ、底部にナデを施す。

1167 は底径 7.2 cm、残存高 2.7 cm、体部内面にナデおよびミガキ、底部にナデを施す。

1164 は瓦質土器碗で、底径 6.4 cm、残存高 1.6 cm、残存率 70%、底部のみ残存している。また、底部および体部内面にナデを施し、底に高台を貼り付ける。

1162、1168～1170 は瓦器碗である。

1162 は底径 7.0 cm、残存高 1.2 cm、残存率 50%。体部内面にミガキ、底部にナデを施すし、底には高台を貼り付ける。

1168 は底径 6.3 cm、残存高 1.4 cm、残存率 60%、底部のみ残存している。底部にナデ、内面見込みに平行な暗文ミガキを施し、底に高台を貼り付ける。

1169 は底径 6.3 cm、残存高 1.9 cm、残存率 55%、底面に「×」のヘラ描きがある。体部内面にミガキ、底部にナデを施し、底には高台を貼り付ける。

1170 は口径 14.4 cm、底径 6.2 cm、残存高 5.1 cm。口縁部にヨコナデ、体部外面に指オサエおよびナデの後ミガキ、体部内面にはヨコミガキ、底部にナデ、見込みに格子状の暗文ミガキ、底面に暗文ミガキを施す。また、底に高台を貼り付ける。

1171、1172 は輪羽口で、1171 は残存長 5.7 cm。1172 は残存長 5.7 cm。

1173～1178 は須恵器である。

1173 は杯蓋で、残存率 30%、復元口径 11.0 cm、器高が 2.8 cm である。口縁端部は外下方へ張り出し、丸く収められる。口縁部内面にかえりを持ち、口縁端部と同程度に下方に伸びる。天井部は回転ヘラケズリによって成形され、宝珠つまみが付されている。TK217 のものと考えられる。

1174 は杯身で、残存率 60%、復元口径 9.6 cm、器高 3.5 cm である。口縁部はやや長く、外傾して直線的に伸び、端部を丸く収めている。口縁部と底部の境界は屈曲している。内面中央はナデ、口縁部はヨコナデで調整されている。MT21 型式前後にあたると考えられる。

1175 は杯身で、残存率 30%、復元口径 11.7 cm、器高 3.5 cm である。口縁部はやや短く、外傾して直線的に伸び、端部を丸く収めている。底部にはヨコナデで高台を貼り付けている。内面中央はナデ、口縁部はヨコナデで調整されている。TK48 型式にあたると考えられる。

1176 は杯身で、残存率 25%、復元口径 14.2 cm、器高 1.9 cm である。口縁部は非常

に短く、外傾して直線的に伸び、端部を丸く収めている。口縁部と底部の境界は屈曲している。底面は未調整、その他はヨコナデで調整されている。MT21 型式前後にあたると考えられる。

1177 は高杯で、杯部を欠損しており、残存率 10%、復元底径 11.0 cm、残存高 8.6 cm である。脚部は短脚で、3 方向に方形の透かし窓が穿たれている。端部の上方に稜を設け、下方に屈曲する。文様帯は施されず、ヨコナデで調整されている。TK47 型式前後と推定される。

1178 は壺で、体部および胴部が残存している。残存率 20%、残存高 9.0 cm である。肩部の張りはほとんどなく、丸みを帯びている。胴部にやや粗い列点文を施している。底部内面は回転ヘラケズリ、胴部から内面にかけてはヨコナデで調整されている。肩部に重ね焼き痕が残っている。

第 63 トレンチ

1179 は第Ⅲ層埋土に包含されていた。土師器皿で、口径 12.0 cm、器高 2.6 cm、残存率 90%。口縁部にヨコナデ、体部外面に指オサエおよびナデ、体部内面にナデを施す。体部内面に墨書（塗り）がある。

SK82

1180～1182 は土師器高杯である。

1180 は口径 12.9 cm、底径 8.6 cm、器高 10.9 cm、残存率 40%。口縁部にヨコナデ、杯部外面にナデ、杯部内面にナデ、脚部は外面および底部外面にナデを施す。また、脚部内面にしぼり痕が残る。

1181 は脚部のみ残存しており端部を欠損している。復元底径 13.0 cm、残存高 5.6 cm、脚部の透孔は円形で、3 方に穿たれ、脚部内外面にナデを施す。

1182 は残存高 7.6 cm、残存率 40%、口縁端部および脚底部を欠損している。口縁部にヨコナデ、杯部外面にナデの後、暗文状のミガキ、杯部内面にナデ、脚部は外面にナデを施す。また、脚部内面にしぼり痕が残る。

1191、1192 は土師器甕である。

1191 は口径 11.0 cm、残存高 6.4 cm、残存率 35%、口縁部が外反する。口縁部にヨコナデ、胴部外面にヨコナメハケ、胴部内面にナデを施す。

1192 は口径 14.7 cm、残存高 13.4 cm、口縁部がくの字状を呈する。口縁部にヨコナデ、口縁部内面にヨコハケ、胴部外面にタテナメハケ、胴部内面に指オサエの後ナデを施す。

1190 は須恵器杯身で、口端部を欠損しており、残存率は 35%、残存高 4.3 cm である。口縁部は外傾して直線的に伸び、底部にはヨコナデで高台を貼り付けている。内面中央はナデ、口縁部はヨコナデで調整されている。MT21 型式にあたると考えられる。

SK83

1183～1187 は土師器高杯である。

1183 は下層から出土した。口径 12.6 cm、残存高 4.9 cm、残存率 40%、杯部のみ残存している。口縁部にヨコナデ、杯部内外面にナデを施す。

1184は最下層から出土した。口径12.8cm、残存高4.9cm、残存率60%、杯部のみ残存している。口縁部にヨコナデ、杯部内外面にナデを施す。

1185は最下層から出土した。口径14.0cm、残存高5.5cm、残存率60%、杯部のみ残存している。口縁部にヨコナデ、杯部内外面にナデを施す。

1186は最下層から出土した。口径11.6cm、残存高4.4cm、杯部のみ残存している。口縁部にヨコナデ、杯部外面にナメハケ、杯部内面にナデを施す。

1187は下層から出土した。脚部のみ残存しており、口径は12.7cm、残存高が4.9cm。透孔は円形で、一方のみ残存している。杯部内外面にナデ、脚部外面に面取り、脚部内面にケズリを施す。また、脚部内面にはしぼり痕が残る。

1188は土師器鉢で、口径11.0cm、器高8.2cm、残存率40%、下層から出土した。口縁部にヨコナデ、胴部外面にナメハケ、胴部内面には指オサエの後、板ナデを施す。

1189は完形の須恵器杯身で、口径11.2cm、器高5.0cmである。立ち上がりはやや短く、内傾して伸びる。底部に回転ヘラケズリを施しており、受部は短く、水平に伸びている。MT15型式と考えられる。

SE69

黒色土器、土師器、須恵器、瓦、鉄製品がある。また、枠内からは素糸八弁蓮華紋軒丸瓦が出土した。

1193、1194、1195、1196は全五段ある横椽のうち三段目のもので、1193は東面、1194は西面、1195は南面、1196は北面の部材である。東西の材は両端を凹形、南北のものは凸形に加工され、表面はすべての面で精緻にはつりが施されている。全長が約2.1mで同様のものが東面で4枚、西面で3枚、南面で3枚、北面で3枚の合計13枚用いられていた。

1197は土師器で、残存厚0.45cm。外面に墨書がある。胴部外面に指オサエおよびナデ、胴部内面にナデを施す。

1198～1202は土師器皿である。

1198は3段目枠内から出土した。完形で、口径13.7cm、器高2.6cmである。口縁部にヨコナデ、体部外面に指オサエおよびナデ、体部内面にナデを施す。

1199は3段目枠内から出土した。口径13.0cm、器高2.7cm、残存率95%である。口縁部にヨコナデ、体部外面に指オサエおよびナデ、体部内面にナデ、一部にハケを施す。また、内面に墨が付着している。

1200は3段目枠内から出土した。口径13.0cm、器高2.9cm、残存率60%である。口縁部は「て」字状を呈し、外面にヨコナデ、体部外面に指オサエおよびナデ、体部内面にナデを施す。

1201は4段目枠内から出土した。口径15.1cm、器高2.6cm、残存率45%である。口縁部にヨコナデ、体部外面に指オサエおよびナデ、体部内面にナデの後ハケを施す。

1202は4段目枠内から出土した。口径18.0cm、器高1.6cm、残存率50%である。口縁部にヨコナデ、体部内外面にナデを施す。

1203は土師器甕で、3段目枠内から出土した。完形で、口径15.9cm、器高14.0cm。

口縁部は外反して端部が肥厚し、胴部は球形を呈する。口縁部にヨコナデ、胴部外面にナデ、胴部内面に指オサエの後ナデを施す。

1205 は掘形から出土した。製塩土器と思われる、口径 8.6 cm、残存高 6.7 cm、口縁部にヨコナデ、胴部内外面にナデを施す。

1207～1212、1214 は黒色土器 A 類碗である。

1207 は口径 14.8 cm、底径 7.8 cm、器高 5.45 cm、残存率 70%。口縁部にヨコナデ、体部外面に指オサエおよびナデ、体部内面にミガキ、見込みにミガキの後、平行ミガキ、底部にナデを施す。また、底に高台を貼り付ける。

1208 は 3 段目枠内から出土した。口径 15.7 cm、底径 8.4 cm、器高 5.5 cm、口縁部にヨコナデ、体部外面にケズリ、体部内面にミガキの後、連弧状の暗文ミガキ、見込みに平行ミガキ、底部にナデを施す。また、底に高台を貼り付ける。

1209 は口径 15.8 cm、器高 4.5 cm。口縁部にヨコナデ、体部外面に指オサエおよびナデ、体部内面にミガキ、見込みに平行な暗文ミガキを施す。

1210 は底径 7.9 cm、残存高 1.7 cm、底部のみ残存している。底に高台を貼り付け、体部内面にミガキ、底部にナデを施す。

1211 は底径 9.0 cm、残存高 1.6 cm 底部のみ残存している。底に高台を貼り付け、体部内面にミガキ、底部にナデを施す。

1212 は口径 15.0 cm、残存高 4.2 cm、残存率 45%。口縁部にヨコナデ、体部外面にケズリ、体部内面にミガキを施す。

1214 は 3 段目枠内から出土した。底部のみ残存しており、底径 8.7 cm、残存高 1.2 cm である。底に高台を貼り付け、体部内面にミガキ、見込みにミガキの後、輪花状の暗文ミガキ、底部にナデを施す。

1213 は黒色土器 A 類鉢で、口径 17.3 cm、底径 10.1 cm、器高 11.7 cm、口縁部は内湾し、底に高台を貼り付ける。口縁部にヨコナデ、胴部外面にナデ、胴部内面にナデの後ヨコミガキ、見込みに平行ミガキ、底部にはナデを施す。

1215 は黒色土器 B 類碗で、掘形から出土した。底径 8.5 cm、残存高 1.6 cm、底部のみ残存しており、底に高台を貼り付ける。体部内面に平行ミガキ、底部にナデを施す。

1204 は黒色土器の小型鉢で、枠内最低部から出土している。口径 6.3 cm、残存高 4.1 cm、残存率 60%、口縁部は外反し、外面にヨコナデ、胴部外面にヨコミガキ、指オサエの後ナデ、胴部内面にナデを施す。

1216 は平瓦で凸面は縄叩き、凹面は無調整。1218 も平瓦で凸面は横縄叩き、凹面は無調整である。1217 は軒丸瓦であるが、瓦当部は残存していない。

1206 は鉄製の釘で、残存長 7.4 cm、幅 0.6 cm である。

(2) M 地区

第 62 トレンチ

遺物は大半が第 II 層耕作溝からのもので、土師器、黒色土器を主体に須恵器、瓦がある。また、複弁八弁蓮華紋軒丸瓦が出土している。

耕作溝

1219 は土師器皿である。口径9.1 cm、器高1.6 cm、残存率50%、口縁部は「て」字状を呈する。口縁部にヨコナデ、体部外面に指オサエの後ナデ、体部内面にナデを施す。

1221 は一辺3.0 cm前後の土師器である。円盤様の形状で、中央に孔が穿たれ、内外面にナデを施す。皿を転用したものか。

1234、1235 は黒色土器A類碗である。

1234 は底径7.6 cm、残存高1.8 cm、底部のみ残存している、底に高台を貼り付ける。体部内面にミガキ、底部にナデを施す。

1235 は底径6.5 cm、残存高2.3 cm、底部のみ残存しており、底に高台を貼り付ける。体部内面にミガキ、底部にナデを施す。

1233 は須恵器甕である。口縁部のみが残存しており、残存率20%、復元口径21.6 cm、残存高8.3 cmである。端部はほぼ丸く仕上げられ、頸部は短く、「く」の字状に屈曲し、文様帯は施されない。胴部外面は平行明き日文の明き板で調整され、内面の上部には同心円文の当て具痕を残す。奈良時代のもものと推定される。

1236 は陶器碗である。底部のみ残存しており、底径が6.5 cm、残存高は2.3 cm。底に高台があり、体部内外面に軸葉がかかる。

第65 トレンチ

Ⅱ層精査

1225 は須恵器杯蓋で、残存率60%、復元口径10.4 cm、器高が4.0 cmである。端部は丸く仕上げられ、稜は完全に消滅し、口縁部と端部との境界は明瞭さを欠く。天井部には回転ヘラケズリが施され、他はヨコナデで調整されている。TK217 型式のもものと考えられる。

耕作溝

1220 は土師器皿である。口径9.2 cm、器高1.3 cm、残存率50%、口縁部は「て」字状を呈する。口縁部にヨコナデ、体部外面に指オサエ、体部内面にナデを施す。

1237 は製塩土器である。口径10.7 cm、残存高5.1 cm、残存率20%、口縁部にヨコナデ、胴部外面に指オサエおよびタテハケ、胴部内面にナデを施す。

1228 は須恵器杯身で、東西溝埋土から出土した。底部のみ残存しており、残存率30%、残存高が1.8 cmである。短い高台が付されており、下方へ踏ん張り、脚端部はほぼ水平である。底部全体が回転ヘラケズリ後ヨコナデで調整される。TK48~MT21 型式のもものと考えられる。

1229 は須恵器杯身で、南北溝埋土から出土した。底部のみ残存しており、残存率10%、残存高が2.0 cmである。短い高台が付されており、下方へ踏ん張り、脚端部はほぼ水平である。底部全体が回転ヘラケズリ後ヨコナデで調整され、TK48~MT21 型式のもものと考えられる。

(3) K地区

第66 トレンチ

耕作溝

1226 は須恵器杯蓋で、残存率 40%、復元口径 9.5 cm、器高 3.1 cm である。端部は丸く、口縁部内面にかえりを持っていない。天井部は、狭い範囲を粗い回転ヘラケズリで調整される。全体的に丸く、小型であることから、TK217 型式前後にあたるものと考えられる。

SX24

1241～1249 は土師器、1223～1232 は須恵器である。

1241 は土師器杯で、口径 10.8 cm、器高 3.1 cm、残存率 25%。口縁部にヨコナデ、体部外面に指オサエおよびナデ、体部内面にはナデの後、放射線状の暗文を施す。

1242～1247 は土師器高杯である。

1242 は杯部のみ残存している。口径 17.4 cm、残存高 4.2 cm、残存率 50%で、稜を有する。口縁部にヨコナデ、杯部内外面にナデを施す。

1243 は杯部のみ残存しており、残存高は 2.0 cm、口縁部を欠損している。内外面にナデを施す。

1244 は脚部のみ残存している。底径 11.6 cm、残存高 3.1 cm、残存率 10%で、内面にしぼり痕が残る、脚底部にはヨコナデを施す。

1245 は脚部であるが、底部を欠損しており、残存高は 9.5 cm。外面に面取りを施し、内面にはしぼり痕が残る。

1246 は脚部であるが、底部を欠損しており、残存高は 6.5 cm。外面に面取りを施し、内面にはしぼり痕が残る。

1247 は脚部であるが、底部を欠損しており、残存高は 6.2 cm。外面に面取りを施し、内面にはしぼり痕が残る。

1248、1249 は土師器甕である。

1248 は長胴甕で、口径 21.0 cm、残存高 24.8 cm、残存率 30%、口縁部は外反する。口縁部にヨコナデ、胴部外面にタテハケ、胴部内面にヨコナメハケを施す。

1249 は口径 22.0 cm、器高 31.5 cm、残存率 30%。口縁部は外反して端部が肥厚し、球形を呈する胴部に把手がとりつく。口縁部にヨコナデ、胴部外面にタテハケおよびナデ、胴部内面にヨコナメハケおよびナデを施す。

1222 は杯蓋で、残存率 20%、復元口径 13.4 cm、残存高 3.1 cm である。しっかりとした作りで、端部に沈線が施している。稜はやや突出して段を成している。天井部の回転ヘラケズリは確認できない。やや大型であり、MT15 型式のものと考えられる。

1223 は杯蓋で、残存率 15%、復元口径 14.0 cm、器高 4.3 cm である。端部に沈線が施されるが、やや鈍い感じを受ける。稜はほとんど突出せず、沈線によって表現されており、形骸化している。また、天井部の狭い範囲に回転ヘラケズリが施されている。大型であり、MT15 型式のものと考えられる。

1224 は杯蓋で、残存率 10%、復元口径 12.2 cm、残存高 3.5 cm である。端部は丸く仕上げられ、稜は突出せず、沈線によって表現されており、形骸化している。天井部は、狭い範囲に回転ヘラケズリが施されている。かなり小型ではあるが、TK10 型式のものと考えられる。短頸甕の蓋の可能性もある。

1230 は有蓋高杯で、脚部以下を欠損しており、残存率 30%、復元口径 10.4 cm、残

存高が 5.1 cm である。脚部は方形の 3 方向透かしであると思われる。杯部の端部には沈線を施し、立ち上がりは内傾してやや短い。受部は短く、外上方へ伸び、やや鋭い。底部の回転ヘラケズリは広範囲にわたっている。やや小型ではあるが、MT15 型式のものと同と推定される。

1231 は蓋で、底部のみが残存している。残存率 10%、残存高が 6.4 cm、底部は回転ヘラケズリによって調整されている。平瓶の可能性もある。

1232 は甔で、残存率は 80%、復元口径 10.4 cm、器高 10.5 cm である。口端部は 2 段で、2 条の沈線間に波状文を施す。やや太い頸部に波状文を巡らせ、肩部の張りはやや弱く、丸みを帯びている。胴部はカキ目で調整され、その直上に刺突文、円形の透かし孔を施す。TK23 型式のものと思われる。

SD105

1227 は須恵器杯蓋で、最下層から出土した。残存率 30% で、復元口径 11.0 cm、器高が 3.2 cm である。口縁端部は外下方へ張り出し、丸く収められる。口縁部内面にかえりを持つが、非常に弱く、小さい。天井部は回転ヘラケズリによって成形され、宝珠つまみが付されている。TK46 型式のものと考えられる。また、底部の砂を篩ったところ、木製品 1 点を含む双孔円盤 2 点、サヌカイト製石器 3 点出土した。

1238 は双孔円盤で、直径 2.1 cm の不定円形を呈し、厚みは約 0.4 cm である。表裏とも平坦で、両端から各々 0.5 cm 内側の位置に直径約 0.2 cm の孔が穿たれている。

1239 は双孔円盤の未成品である。長径 2.2 cm、短径 1.8 cm の楕円形で、厚みは最も薄い箇所が 0.1 cm、厚い部分で 0.6 cm である。片面は平らであるが、もう一面は鼓状を呈する。直径約 0.2 cm の穿孔を施すが、貫通していないことから、未成品と思われる。

1240 は瑠璃で、直径 1.5 cm、厚み 0.5 cm である。片面中央部に 1.0 cm × 1.2 cm × 1.3 cm の三角形を呈する僅かな突起を有するが、これは製作過程においてできたものと思われる。

(4) N 地区

第 67 トレンチ

第 II 層

1250 は土師器杯で、口径 14.2 cm、器高 3.0 cm、残存率 60%、底面に墨書がある。口縁端部が肥厚する。口縁部にヨコナデ、体部外面に指オサエの後ナデ、体部内面にナデを施す。

1253 は黒色土器 A 類碗で、復元口径 14.0 cm、残存高 4.5 cm、口縁端部および高台を欠損している。口縁部にヨコナデ、体部外面に指オサエ、体部内面にヨコミガキ、見込みに平行ミガキ、底部にナデを施す。

1259 は土馬である。脚部のみ残存しており、残存長は 7.9 cm、幅が 2.0 cm。

耕作溝

土師器、須恵器、瓦が出土している。

1255 は須恵器円面碇で、南北溝から出土した。残存率 20%、口径 11.9 cm、残存高

2.4 cmである。全体をヨコナデで調整している。天井部と体部の間に稜があり、その下方に方形の透かし窓を施している。

SB96-SPO1

1251は土師器杯で、口径11.0 cm、器高3.0 cm、残存率35%。口縁部にヨコナデ、体部内外面にナデを施す。

SB99-SPO6

1252は完形の土師器杯で、口径14.4 cm、器高3.1 cmである。口縁部にヨコナデ、体部外面に指オサエおよびナデ、体部内面にナデを施す。

SK84

1258は土師器甕で、残存高22.3 cm、残存率20%。口縁部を欠損しており、胴部のみ残存している。また、胴部には把手がとりつく。胴部外面にタテハケ、下半にはナデ、胴部内面にナデを施す。

SK85

1254は土師器皿で、口径19.3 cm、器高2.6 cm、残存率50%、口縁端部が肥厚する。口縁部にヨコナデ、体部外面にナデ、体部内面にナデの後、放射線状および連弧文状の暗文を施す。

SK86

1257は須恵器横瓶で、口径11.0 cm、残存高18.6 cm、残存率25%。口端部が丸く、口頸部は外上方へ屈曲している。胴部外面は格子風叩き目文の叩き板で調整され、内面には同心円文の当て具痕が残っている。

SE71

1259、1260、1261、1262は井戸杵材である。1262は底部材で、建築用材の転用と思われる。

1263～1289は土師器、1290～1299、1301は黒色土器、1300は須恵器である。

1263～1268は土師器皿である。

1263は土師器皿で、椀内中層から出土した。口径13.2 cm、残存高1.6 cm、残存率15%。口縁部にヨコナデ、体部外面に指オサエおよびナデ、体部内面にナデを施す。

1264は椀内下層から出土した。口径14.8 cm、器高2.9 cm、残存率70%、口縁部にヨコナデ、体部外面に指オサエおよびナデ、体部内面にナデを施す。

1265は椀内下層から出土した。口径14.4 cm、器高3.0 cm、残存率85%、口縁部にヨコナデ、体部外面に指オサエおよびナデ、体部内面にナデを施す。

1266は椀内下層から出土した。口径15.4 cm、器高2.7 cm、残存率40%、口縁部にヨコナデ、体部外面に指オサエおよびナデ、体部内面にナデを施す。

1267は椀内下層から出土した。口径15.0 cm、器高2.8 cm、残存率60%、口縁部にヨコナデ、体部外面に指オサエおよびナデ、体部内面にナデを施す。

1268は椀内下層から出土した。口径15.4 cm、器高2.3 cm、残存率25%、口縁部にヨコナデ、体部外面に指オサエおよびナデ、体部内面にナデを施す。

1269～1280は土師器杯である。

1269は口径15.4 cm、残存高2.85 cm、残存率35%。口縁部にヨコナデ、体部外面に

指オサエおよびナデ、体部内面にナデを施す。

1270 は口径 15.5 cm、器高 2.8 cm 残存率 20%。口縁部にヨコナデ、体部外面に指オサエおよびナデ、体部内面にナデを施す。

1271 は口径 14.6 cm、器高 3.0 cm、残存率 40%、口縁部にヨコナデ、体部内外面にナデを施す。

1272 は口径 14.4 cm、器高 2.65 cm、残存率 50%。口縁部にヨコナデ、体部は外面に指オサエおよびナデ、内面にナデを施す。

1273 は口径 14.4 cm、器高 3.1 cm、残存率 90%。口縁部にヨコナデ、体部は外面に指オサエおよびナデ、内面にナデを施す。

1274 は口径 14.5 cm、器高 3.0 cm、残存率 50%。口縁部にヨコナデ、体部は外面に指オサエおよびナデ、内面にナデを施す。

1275 は口径 14.4 cm、器高 3.2 cm、残存率 80%。口縁部にヨコナデ、体部は外面に指オサエおよびナデ、内面にナデを施す。

1276 は口径 17.8 cm、器高 3.9 cm、残存率 35%。口縁部にヨコナデ、体部外面に指オサエおよびナデ、体部内面にナメハケおよびヨコハケを施す。

1277 は口径 18.4 cm、器高 3.3 cm、残存率 15%、口縁部にヨコナデ、体部外面にナデ、体部内面にナデおよびハケを施す。

1278 は口径 14.0 cm、残存高 2.8 cm、残存率 25%。口縁部にヨコナデ、体部外面に指オサエおよびナデ、体部内面にナデを施す。

1279 は枠内下層から出土した。口径 16.2 cm、残存高 2.3 cm、残存率 15%、口縁部にヨコナデ、体部外面にケズリ、体部内面にナデを施す。

1280 は枠内中层から出土した。口径 14.2 cm、器高 3.3 cm、残存率 65%。口縁部にヨコナデ、体部外面に指オサエおよびナデ、体部内面にナデおよびナメハケを施す。

1281～1289 は土師器甕である。

1281 は中層から出土した。口径 17.4 cm、残存高 2.2 cm、口縁部は外反し、端部が肥厚する。口縁部にヨコナデを施す。

1282 は口径 27.0 cm、残存高 4.0 cm、残存率 10%、口縁部は外反し、端部が肥厚する。口縁部にヨコナデ、胴部内外面にナデを施す。

1283 は掘形から出土した。口径 19.5 cm、残存高 6.2 cm、口縁部は外反する。口縁部にヨコナデ、口縁部内面にヨコハケ、胴部内外面にナデを施す。

1284 は中層から出土した。口径 30.0 cm、残存高 5.0 cm、口縁部は外反し、端部が肥厚する。口縁部にヨコナデ、胴部内外面にナデを施す。

1285 は枠内底部から出土した。胴部のみ残存しており、残存高は 16.7 cm、外面にナメハケ、内面にナデを施す。

1286 は枠内底部から出土した。胴部のみ残存しており、残存高は 13.6 cm、外面にタテハケ、内面にナデを施す。

1287 は枠内底部から出土した。口径 18.3 cm、器高 16.0 cm、口縁部にヨコナデ、胴部外面に指オサエおよびナデ、胴部内面にナデを施す。

1288 は枠内下層から出土した。土師器甕で、口径 26.4 cm、残存 12.8 cm、口縁部は外反して口端部が肥厚し、胴部は球形を呈する。口縁部にヨコナデ、胴部外面にナメ

メハケ、胴部内面に指オサエおよびナデを施す。

1289は口径26.2cm、器高24.5cm、外反する口縁部の端部が肥厚し、胴部は球形を呈する。口縁部にヨコナデ、口縁部内面にヨコハケ、胴部外面にナメハケ、胴部内面に板ナデを施す。

1290～1299は黒色土器A類碗である。

1290は口径16.0cm、底径6.4cm、器高4.2cm、底に高台を貼り付ける。口縁部にヨコナデ、体部内外面および底部にナデを施す。

1291は口径17.5cm、底径8.2cm、器高5.0cm、残存率60%、底に高台を貼り付ける。口縁部にヨコナデ、体部外面に板ナデ、体部内面にヨコミガキ、見込みに平行ミガキ、底部に指オサエおよびナデを施す。

1292は口径19.8cm、底径11.2cm、器高5.5cm、底に高台を貼り付ける。口縁部にヨコナデ、体部外面に指オサエおよびナデ、体部内面にヨコミガキの後、連弧状の暗文ミガキ、見込みに平行ミガキ、底部に指オサエおよびナデを施す。

1293は口径14.6cm、器高3.2cm、残存率70%。口縁部にヨコナデ、体部外面にナデ、体部内面にミガキを施す。

1294は柁内中層から出土した。口径16.6cm、残存高3.6cm、残存率15%、口縁部にヨコナデ、体部外面にケズリ、体部内面にヨコミガキを施す。

1295は柁内中層から出土した。口径18.0cm、残存高4.9cm、残存率15%、口縁部にヨコナデ、体部外面にミガキ、体部内面にヨコミガキを施す。

1296は柁内中層から出土した。口径16.6cm、底径8.8cm、器高4.5cm、残存率40%、底に高台を貼り付ける。口縁部にヨコナデ、体部外面に板ナデ、体部内面にヨコミガキ、見込みに平行ミガキの後円弧状の暗文ミガキ、底部にナデを施す。

1297は底部のみ残存しており、底径は7.0cm、残存高が1.6cm。高台を貼り付け、底面にヘラ描きがある。体部内面にミガキ、底部にナデを施す。

1298は底部のみ残存しており、柁内中層から出土した。底径7.4cm、残存高0.9cm、残存率40%、底に高台を貼り付ける。体部内面にミガキ、底部にナデを施す。

1299は掘形から出土した。底径6.4cm、残存高0.8cm、底部のみ残存している。高台を貼り付け、体部内面にミガキ、底部にナデを施す。

1301は黒色土器鉢で、口径19.2cm、残存高7.8cm、残存率25%、口縁部は外反する。口縁部にヨコナデ、胴部外面に指オサエの後ミガキ、胴部内面にナデの後ミガキを施す。

1300は須恵器杯で、残存率5%、復元口径17.4cm、残存高2.1cmである。口縁部は外傾し、端部は丸く収められている。

SE72

1302は黒色土器A類碗で、底径6.6cm、残存高2.1cm、底部のみ残存しており、底に高台を貼り付ける。口縁部にヨコナデ、体部外面にナデ、体部内面にミガキ、底部にナデを施す。

その他の遺構

1307～1309は土師器皿である。

1307は完形で、SP78から出土した。口径9.0cm、器高1.4cm、口縁部にヨコナデ、

体部外面に指オサエの後ナデ、体部内面にナデを施す。

1308 は SP77 から出土した。口径 12.5 cm、器高 3.1 cm、残存率 80%、口縁部にヨコナデ、体部内外面にナデを施す。

1309 は SP76 から出土した。口径 13.5 cm、器高 3.05 cm、残存率 40%、口縁部にヨコナデ、体部外面に指オサエの後ナデ、体部内面にナデを施す。

1310、1311 は土師器杯である。

1310 は SP69 から出土した。口径 12.1 cm、器高 3.0 cm、残存率 50%、口縁部にヨコナデ、体部外面に指オサエおよびナデ、体部内面にはナデの後、放射線状および連弧文状の暗文を施す。

1311 は SP75 から出土した。口径 12.3 cm、器高 2.95 cm、残存率 60%、口縁部にヨコナデ、体部外面に指オサエの後ナデ、体部内面にナデの後、放射線状の暗文を施す。

1312 は土師器片口鉢で、SP70 から出土した。口径 19.6 cm、器高 8.7 cm、残存率 40%、口縁部は内湾する。口縁部にヨコナデ、胴部外面にヨコミガキ、胴部内面にナデを施す。

1303～1305 は黒色土器A類碗である。

1303 は SP72 から出土した。口径 16.8 cm、底径 8.1 cm、器高 4.4 cm、残存率 40%、口縁部にヨコナデ、体部外面に指オサエの後ナデ、体部内面にヨコミガキ、見込みに平行ミガキ、底部にナデを施す。また、底に高台を貼り付ける。

1304 は SP71 から出土した。底部のみ残存しており、底径は 8.4 cm、残存高が 1.1 cm、底に高台を貼り付ける。体部内面にミガキ、底部にナデを施す。

1305 は SP73 から出土した。底部のみ残存しており、底径は 6.0 cm、残存高が 1.2 cm、底に高台を貼り付ける。体部内面にミガキ、底部にナデを施す。

1306 は須恵器小壺で、SP74 から出土した。頸部以上を欠損し、残存率 60%、残存高が 6.3 cm である。体部は楕円形を呈し、底部には外方へ開く高台を付している。胴部はヨコナデ、底部はヘラ切り後未調整である。

第9章 平成19年度調査

平成19年度は土地区画整理事業地の東南端部(K地区)および北東端部(J地区)において、3本のトレンチを設定し、全1,745㎡を対象に発掘調査を実施した。

1 遺構

(1) K地区

第68 トレンチ

当事業地の最東南部において、都市計画道路敷設予定地に9.0m×66.0m、附帯道路敷設予定地に7.5m×65.5mのトレンチを設定した。調査面積は1,085.0㎡である。基本層序

基本層序は、上から順に現代耕作土、黄茶褐色砂質土(第Ⅰ層)、灰色粘質土、茶褐色砂質土、暗褐色砂質土、灰色砂層、黄褐色粘質土からなる第Ⅱ層、黒褐色粘質土、黄褐色粘質土(第Ⅲ層ベース)である。南から北に向かって地形が低くなっており、北半は耕作土層の下に厚い砂層が存在する。調査は、重機削削により第Ⅰ層を除去した面を第1遺構面とし、同時および部分的に検出した下層遺構面を第2遺構面として行った。第1遺構面から第2遺構面を構成する耕作土層下には、一部地表化した上層(第Ⅲ層上面)や砂層が認められ、その直下に堆積する黄褐色粘質土(第Ⅲ層)を第3遺構面として遺構検出を行った。

第1遺構面

耕作に伴う素掘小溝が主な遺構であるが、南北方向の溝が主で、東西方向のものは少数であった。この面で検出した耕作溝は現在の区画に合致し、土地が大きく3分割されている様子を見て取ることができる。南北方向のものは、トレンチ北半と南半でその方向性に違いが認められ、北半に掘られた溝がやや東に傾いている。東西に走る区画溝の周囲では同方向の耕作溝を検出しており、区画と畦畔を意識していたことが窺える。また原地形は、現代の土地区画に則して、南から北に向かって地形が低くなっており、調査区北側では耕作土が厚く堆積している。出土遺物は、土師器、須恵器、黒色土器、瓦器、陶器、製塩土器、円筒埴輪、形象埴輪、瓦、石器(石鏃ほか)で、下層遺構を反映してか、古墳時代の遺物が多く出土している。

第2遺構面

第1遺構面から部分的に掘り下げて検出した斜行溝5条と、それに附帯する耕作溝群が主な遺構である。また、上面で検出したピットや小溝等の下層遺構を当遺構面のものとした。調査区南端部のピットは完掘し、中央部付近のそれらは第3遺構面調査時に完掘した。第1遺構面で検出した耕作溝の下層にあたる斜行溝群は、やや弧状を呈し、調査地の東側へと伸びる。これらは条里に沿わない溝であり、合流部分で南北方向、あるいはやや屈曲した南北方向の耕作溝と接続し、それらには新旧が認められる。この周辺では、安定した基盤層(第Ⅲ層上面)の高まりを有すること、斜行溝に新田の切り合い関係が認められることから、条里を意識した土地利用を行ったと思われる。

る。出土遺物は、土師器、須恵器、黒色土器、円筒埴輪、形象埴輪、瓦、石器等である。

また、耕作土層下には一部に地表面化した黄褐色土層(第Ⅱ層ベース)と砂の堆積が認められ、調査区北半では、地表面化した耕作面が少なくとも2面程度存在することが看取できる。耕作土層下の砂層は河川氾濫等による自然堆積層と考えられ、その上面では古代の土師器甕がほぼ完形で出土している。この砂層直下でSE75を検出したことから、平安時代以降に河川氾濫等が調査区の南半中央部に及んだものと推測される。出土遺物は少ないが、古墳時代から古代の遺物が中心で、土師器、須恵器、円筒埴輪、石器等が出土した。また、特筆すべきものとして縄文時代前期に比定される土器(北白川下層ⅡA式)がある。これは、当遺跡で出土した前期縄文土器のうち最古のものである。

第3遺構面

黄褐色粘土からシルト～粘質砂を基盤層として、古墳時代の土坑6基、井戸1基(SE74)、溝2条と、平安時代の井戸2基(SE73、75)、ピットを検出した。古墳時代の土坑6基は、トレンチ南半において第1遺構面検出時、包含層と考えた黒褐色土を埋土とする遺構群である。ピットは約70基を確認したが、これらはトレンチ中央西側と南西側に集中している。北半は旧葛下川の河川氾濫等により基盤層が薄く、井戸1基以外の遺構は確認できなかった。原地形は、各遺構が集中する南半に安定した基盤層が形成されており、中央から北側に向かって低くなっていく。

ピット

トレンチ西半中央部付近で30基、西半南端部付近で約30基を検出している。埋土の色調には茶褐色と黒褐色があり、上層から掘り込まれたものも含まれる。時期不詳であるが、古代から中世の遺構と思われる。土師器、須恵器、製塩土器等が出土している。

SK87

調査区南端で検出した。一辺約4.0m～4.5mの不定形な平面を有し、深さは0.2m～0.4mである。北側は上層から切り込まれた東西耕作溝により破壊され、西側の一部がやや鋭角となる。埋土は3層に分かれ、最上層は耕作に影響を受けた黒褐色土、上層は黒褐色土、下層は基盤層である黄褐色土を含む。遺物は最上層から上層に集中し、下層にはほとんど包含されない。土師器、須恵器、円筒埴輪、形象埴輪、製塩土器等が出土している。

SK88

SK87の北側で検出した、中央が南北辺約2.0m、東西辺3.0mの隅丸長方形で、深度は最大0.5mである。北側に南北約1.0m、東西約2.0mの浅い落込みがあり、SK89と接している。最上層には、耕作に影響を受けた黒褐色土の遺物包含層が堆積する。埋土は粘質土～シルトからなる自然堆積層で、遺物を一括して上層の窪みに廃棄したような状況が窺える。下層からも少量の遺物が出土している。土師器、須恵器、円筒埴輪、形象埴輪、製塩土器がある。

SK89

SK88の北側で検出した、平面が東西辺約3.0m、南北辺約2.0mの隅丸長方形の土

坑。検出段階で周囲の十坑との切り合いを確認することができず、基盤層において各土坑との判別を行ったために、深さは 0.15m となった。埋土およびその堆積状況は SK87 と同様である。遺物は、土師器、須恵器、製塩土器が少量出土している。

SK90

SK89 の北側で検出した。一辺約 3.0m～4.0m の不定形な掘形をもち、深さは 0.1m～0.3m である。最上層は黒褐色土の遺物包含層で、下層から巻き上げられた遺物が多く出土する。上層は黒褐色土、下層は基盤層を含んだ埋土が堆積する。遺物は、土師器、須恵器、円筒埴輪、製塩土器、弥生土器が出土している。

SK91

SK89 の西側で検出した、東西 0.9m～1.25m、南北 2.5m の平面楕円形の十坑。北側に向かって深くなり、深さは約 1.0m である。砂層に到達するまで掘り込まれていることから、素掘りの井戸として利用されたものと思われる。最上層は黒褐色包含層、上層は黒褐色土、中層以下は暗灰緑色土である。遺物は最上層から中層に集中し、下層からは木製品が出土している。他の遺構よりも圧倒的に遺物量が多く、廃棄坑と思われる。土師器、須恵器、製塩土器、円筒埴輪、種子、木板片、木製品(紡績具)が出土している。

SK92

調査区南西側で検出した、東西 0.9m、南北 1.25m の偏楕円形、深さ 1.0m の遺構である。掘形が砂層まで到達しており、最下層に土師器甕が 1 個体完形で埋置されていることから、素掘り井戸と考えられる。出土遺物は、土師器、須恵器、円筒埴輪、製塩土器があるが量は少ない。

SK93

SK87 の東側で検出した。東西辺 0.8m、深さ 0.05m で、平面は楕円形を呈する。当初、SK87 のひろがりと捉えていたが、基盤層上において別遺構であることを確認した。SK87 と同様に、北側は上層からの東西耕作溝によって攪乱を受ける。SK88 南側にも同様の浅い窪みが認められ、本来は北に向かいひろがっていたと思われる。遺物は須恵器が主であるが、大半を SK87 のものとして取りあげた。

SK94

SK89 の東側で検出した、一辺約 0.6m～0.8m の平面楕円形の浅い窪みで、SK89 との判別が下層のベース層であったために、深さは 0.05m～0.1m となった。当初、SK89 と一連と考え掘削を行ったため、遺物の多くは SK89 のものとして取りあげている。土師器、須恵器、製塩土器が出土している。

SE73

調査区北端において、耕作上層、砂粒堆積層を除去した面で検出した。一辺 0.9m 前後の隅丸方形の掘形を有し、現状での深さは 0.7m であった。第 3 遺構面よりも上層から埋没しており、上部堆積は暗灰色粘土で、検出面では長辺約 1.3m の掘形をもつ。井戸枠は、やや粗雑な作りの隅柱横棧留型で、内部には直径 0.4m、高さ 0.26m の曲物が嵌め込まれており、曲物外周には枠構造を保たせるために礫を配していた。遺物は黒色土器等が出土している。

SE74

SK92の西側で検出した、円筒埴輪を井戸枠に使用した遺構。当遺跡では数多くの井戸が検出されているが、円筒埴輪を枠に転用したものは初の出土例である。掘形は二重になっており、外側は南北にそれぞれ張り出しのある、やや歪な平面形を呈する。内側は東西1.7m、南北1.8m、張り出し部を含めた外形の南北長は2.3m、深さは1.3mである。井戸枠は2個体の円筒埴輪を組み合わせて作られており、掘形中央のやや南寄りに設置されていた。検出面では一辺約0.5mの円形で、上段が下段に嵌った状態で出土しており、井戸枠の全高は約1.2mであったと考えられる。また、異なる個体の埴輪片が蓋として透孔に貼り付けられていた。上段の円筒埴輪は口径0.5m、底径0.46m、全長1.27m、下段のものは底径0.44m、高さ0.5m。基底部に欠損部位があり、外周に埴輪片を巻き並べてこれを補完したと思われる。また、透孔の蓋に使われた埴輪片には、掘形埋土に包含されていたものと接合するものが含まれることから、蓋を貼り付けつつ裏込めを行ったと考えられる。

井戸枠に使用された円筒埴輪は6世紀前半に比定されるが、掘形埋土にはこれと同時期の円筒埴輪片が多量に包含されている。このことから、井戸枠に使用したものと同規模の円筒埴輪が一定量持ち込まれていることが理解できる。埋土には土器をほとんど含まないが、井戸枠内の出土遺物から、築造年代は6世紀後半頃と考えられる。また、枠内の埴輪は数個体に復元可能であることから、三段積みの井戸枠であった可能性もある。最下層では、井戸廃棄時の祭祀に伴うものと考えられる畜串、木鏝、種子が出土している。

SE75

南北0.9m前後、東西が1.1m前後、隅丸長方形の掘形をもち、トレンチの中央南寄り検出した。検出面の標高は53.300m、深さは0.4mであった。掘形埋土は黒褐色土と黄褐色土が混じる、固く締まった土である。井戸枠は検出面で一辺約0.6mの方形を呈し、底部には直径0.4mの曲物が高さ約0.08m分のみ残存していた。本来の構造、規模はSE73と同様のものであったと思われる。曲物内は砂礫土が堆積しており、平瓦を包含していた。また、井戸枠内埋土から土師器皿の完形品が出土しており、井戸廃絶時に埋納されたものと考えられる。

SD106

北側が幅0.6m、深さ0.2m、南側は幅0.7m、深さ0.1mの、南北方向に長い溝状遺構である。北側では円筒埴輪が集中して出土し、南側からは土師器、須恵器等が出土した。

SD107

東西幅0.6m～1.4m、深さ0.3m～0.5m。南西から北東に斜行する溝で、調査区外まで延びる。上層に遺物を多く含み、土坑と同様の状況を示す。出土遺物は、土師器、須恵器、円筒埴輪、石器がある。

(2) J地区

第69 トレンチ

調査地は事業地の東北部にあたる。区画道路敷設予定地を調査対象とし、東西5.5m、南北27.3m、面積150.0㎡のトレンチを設定した。

基本層序

上から順に整地土、盛土、現代耕作土、灰茶色砂質土、黒褐色粘質土(第Ⅱ層)、茶灰褐色粘土(第Ⅱ層)、黄褐色粘質土(第Ⅲ層)、砂質土～青灰色粘土に分けられる。また、南側には茶灰色砂質土および下層の砂が堆積していた。

重機で整地土、盛土、耕作土層を除去した面(第Ⅱ層)を第1遺構面(標高 52.400m～52.200m)、その下に現れる茶灰褐色粘質土上面(第Ⅱ層、標高 52.200m)を第2遺構面として調査を行った。両遺構面ともに、トレンチの北半と南半では土層の堆積状況がやや異なり、南半は砂混じりの上層堆積を示す。さらに、基盤層である黄褐色粘質土上面(第Ⅲ層)を第3遺構面として遺構検出作業を行った。

第1遺構面

主要遺構である南北方向の耕作溝に加え、部分的に露出した第2遺構面上で SK96 を検出した。南半には砂を多く含む茶灰色砂質土および下層の砂が堆積しており、耕作溝は明確には認められなかった。出土遺物は土師器、須恵器、黒色土器、瓦器、瓦、石器等で、古墳時代のものも含まれるが平安時代のもものが主である。

第2遺構面

南北、東西方向に走る、あるいは北でやや東に振る耕作に伴う素掘小溝を検出した。南半は茶灰色砂質土および下層の砂層堆積であり、その上面でも耕作溝を検出している。また、主要な遺構として検出したピット6基、土坑2基、井戸1基は主に平安時代の遺構であり、埋没したのち中世以降の耕作地となったことが判る。出土遺物は土師器、須恵器、黒色土器、瓦、石器等で、平安時代のもものが多く、

ピット

調査区中央から南側で6基検出した。いずれも平面円形で一辺0.2m～0.3m、深さ0.1m～0.2mの規模である。礎を根石にしたものもあるが、調査区内では建物にはならない。時期は平安時代から中世と思われる。

SK95

調査区南半で検出した、一辺0.6m前後でやや横長の楕円形平面をもつ、深さ0.3mの遺構である。底を打ち欠き、口縁を下にして埋置した状態の羽釜が出土した。遺構は砂層を切り込んでおり、土器の出土状況から水溜めとしての機能が想定される。羽釜の内側から黒色土器B類碗や土師器が出土しており、平安時代(10世紀後半)の遺構と考えられる。

SK96

SK95の西側で検出しており、平面は楕円形を呈する。規模は南北1.4m、東西1.6m、深さ0.55mである。当初井戸と想定したが、自然堆積した状況を取捨できること、井戸と思われる構造が確認できなかったことから土坑と判断した。出土遺物は土師器で、平安時代の遺構と考えられる。

SE76

トレンチ中央西側で検出した。掘形は隅丸方形で、規模は一辺2.3m、深さ2.4mである。最上層の一部は第2遺構面で検出した南北耕作溝により破壊されていた。井戸枠は二段構造になっており、上部構造は方形縦板組横棧留で内寸0.55m前後である。また、最上部では縦板が二重に重ねられ、外枠が一辺0.8m、内枠が0.7mとなってい

る。外枠に用いられた板材は幅 0.1m～0.5m、長さ 0.4m～0.8m、厚さ 0.05m、外枠最上段の横棧(北辺)は長さ 0.6m、厚み 0.04m～0.06mである。枠内部の構造材には一辺 0.05m～0.2m、長さ 1.0m～1.2m、厚み 1.0m～4.0mの厚い木板を用いる一方、厚み 0.05mのやや薄い板材も挿入されている。内側西南隅の支柱と下段の横棧とが組み合う状況から、内枠の縦隅柱は上下二箇所に納孔を切り、横棧二段で支える構造であることが確認できた。

下部構造は、内寸直径約 0.5mの刳貫き材を用いて築かれていた。やや材の足りない部分に木板を嵌め込んで枠を補強している。井戸枠の高さは 0.9m前後で、北側の方の遺存度が高く、表面に施された面取り加工を観察することができる。さらに枠内中央には一辺 0.4m、高さ 0.3mの曲物(標高 51.450m前後)が設置されていた。

検出面から 0.7m以下の枠内埋土は、有機物を包含する粘土と砂を含んでおり、土師器、須恵器、黒色土器などの遺物が出土した。これらとともに、木製の小型曲物容器、横櫛等の木製品が出土した。10世紀後半の遺構と考えられる。

第3遺構面

黄褐色粘質土～砂質土(第Ⅲ層上面、標高 52.000m前後)であり、トレンチ北半は安定した基盤層がひろがっていた。中央付近からやや南に向かって地形が下がっており、南端は標高 51.800mである。北東隅で東西幅 0.8m、深さ 0.3mの、その南側で幅約 1.0m、深さ 0.3mの北西から南東へ抜ける自然流路を検出した。前者の中央付近西側にできた地形による落込みと後者の間に基盤層が高まりをみせ、その下層に旧流路を検出した。第2遺構面で露頭していた砂層と思われる。旧流路は東南部分に砂が堆積しており、かつ低くなっている。

第70 トレンチ

区画道路予定地上にL字形のトレンチを設定した。また、南北トレンチ部北端において、D田東2号墳の東周濠を検出したことにもない拡張を行った。調査面積は拡張部を含めて 620.99 m²である。

基本層序

当該地域はかつて靴下工場が建っていた場所で、建設時および取壊し時に激しく擾乱を受けていた。擾乱はトレンチ全面にわたってひろがり、その深度は最大で 2.7mを超える。トレンチの東西方向部分はこの擾乱による遺構の破壊が特に著しい。

トレンチの基本層序は、表土および第Ⅰ層、第Ⅱ層、第Ⅲ層に分けられる。現地表面の標高は低いところで 53.300m、高いところで 53.800mであった。表土、第Ⅰ層は近代以降の整地、盛土層で、厚さは 0.8m～1.4mである。第Ⅱ層は中世の耕作土層ユニットであるが、断面観察から少なくとも3時期の耕作面を確認することができた。調査はその3面について、第1遺構面から第3遺構面として行った。層厚は 0.4m～0.8mである。第Ⅲ層は基盤層であり、第4遺構面として調査を行った。

第1遺構面(第Ⅱ層)

遺構は耕作に伴う素掘小溝と杭穴のみで、遺物も皆無に近く土師器、黒色土器の極小片が僅かに出土したのみであった。

第2遺構面(第Ⅱ層)

第1遺構面と同様である。

第3遺構面(第Ⅱ層)

主要な遺構は上記2遺構面と同じく耕作に伴う素掘小溝と杭穴で、遺物も非常に少量である。ただし耕作溝に関して、上層で検出したものと同様のものに加え、幅0.3m～0.5m、深さ0.24m～0.48mの、正方位にのる東西溝を3.5m間隔で数条検出した。

このほかに、西から東へ抜ける流路状の地形内で、平面円形の土器溜まりを検出している(SX25)。掘形直径は約0.4mで、ほぼ同規模の須恵器甕が埋められており、その内部に土師器片が落ち込んでいた。

第4遺構面(第Ⅲ層)

トレンチ東西部中央から南北部南半にかけて、南東から北西へ向けて流れるSR30の東肩を検出している。これはC調査区で検出しているSR16の延伸部と思われる。また、南北部北端において、西へ向かって緩やかに曲がる南北方向の溝を検出した。その埋土を掘削したところ底部から組合式木棺の底板が出土したことから、トレンチを北および西へ拡張して調査を行った。その結果、一辺約8.0mの墳丘を有する方墳が存在し、溝はそれに伴う周壕であることを確認した。これを受けて、この古墳を下田東2号墳とし、第1次調査で発見された下田東古墳を下田東1号墳と改称することとした。この古墳については、章を改めて述べる。これらの他に、生活を示す遺構は検出されなかった。

当トレンチを含む一帯は、すぐ南東に位置する中世環濠が機能した時期には、耕作地として利用されていたと考えられる。また、第Ⅱ層中に平安時代以前の遺物がほとんど包含されないことから、中世に耕地化される以前には土地利用がなされていなかったと見られる。しかし、西へ数百mの地点で下田東1号墳を検出しており、今回検出した2号墳の存在と併せ、古墳時代には事業地北東部が墓域であったという想定も不可能ではないと思われる。

2 遺物

(1) K地区

第68 トレンチ

SK87

土師器杯、高杯、甕、甌、須恵器杯蓋、杯身、有蓋高杯、高杯、壺がある。1313～1329は土師器、1330～1342は須恵器である。

1313、1318～1320は土師器杯である。

1313は口径13.4cm、器高4.7cm、口縁部は内湾気味に立ち上がる。焼成後に内側から穿たれた穿孔が5箇所ある。口縁部にヨコナデ、体部内外面にナデを施す。

1318は口径10.4cm、残存高4.4cm、口縁部は直立し、外面にヨコナデを施す。

1319は口径13.8cm、器高4.5cm、口縁部は外に開く。口縁部にヨコナデ、体部内外面にナデを施す。

1320は口径15.2cm、残存高5.4cm、口縁部は内湾する。口縁部にヨコナデ、体部内外面にナデを施す。

1314～1317は土師器高杯である。

1314 は杯部のみで、残存高は 3.2 cm、口縁端部を欠損している。外面に指オサエおよびナデ、内面にナデを施す。

1315 は脚部が残存しており、残存高は 5.0 cm、口縁部と底部を欠損している。外面に指オサエおよびナデ、面取り、杯部内面にナデ、脚部内面には指オサエを施し、しぼり痕が残る。

1316 は脚部が残存しており、残存高は 4.8 cm、口縁部と底部を欠損している。外面に指オサエおよびナデ、面取り、杯部内面にナデ、脚部内面に指オサエを施し、しぼり痕が残る。

1317 は脚部のみ残存しており、底径 9.4 cm、残存高 6.0 cm。外面にナデ、脚底部の内外面にヨコナデを施し、内面にはしぼり痕が残る。

1322 は土師器鉢で、口径 17.2 cm、現存高 9.9 cm、口縁部はくの字状を呈し、外面にヨコナデを施す。

1321、1323～1328 は土師器甕である。

1321 は口径 12.2 cm、残存高 10.3 cm。口縁部にヨコナデ、胴部外面にタテハケ、胴部内面にナデを施す。

1323 は口径 17.3 cm、残存高 7.9 cm、口縁部はやや内湾し、端部が肥厚する。口縁部にヨコナデ、胴部外面にヨコナメハケ、内面に指オサエおよびナデを施す。

1324 は口径 10.6 cm、残存高 6.1 cm。口縁部にヨコナデ、胴部外面にタテハケ、胴部内面に指オサエおよびナデを施す。

1325 は口径 11.0 cm、残存高 6.1 cm。口縁部にヨコナデ、胴部外面にタテハケ、胴部内面に指オサエおよびナデを施す。

1326 は口径 18.0 cm、残存高 8.9 cm、口縁部は外傾し、外面にヨコナデを施す。

1327 は口径 19.2 cm、残存高 6.9 cm、口縁部はくの字状を呈し、端部が肥厚する。口縁部にヨコナデ、胴部外面にヨコハケ、胴部内面に指オサエおよびナデを施す。

1328 は口径 28.8 cm、残存高 6.1 cm、口縁部はくの字状を呈し、口縁部外面にヨコナデを施す。

1329 は土師器甕で、口径 28.4 cm、残存高 9.0 cm。

1330 は杯蓋で、残存率 50%、口径 12.6 cm、残存高が 4.5 cm である。端部は内へ傾斜し、沈線が施されるが、断面形はほぼ平らである。稜はやや鋭く、突出して段を成し、稜よりも口縁端部の径が大きい。天井部を欠損しているが、広い範囲に回転ヘラケズリが施されている。ON46～TK208 型式のものと考えられる。

1331 はほぼ完形の杯蓋で、口径 12.0 cm、器高が 4.4 cm である。端部は内へ傾斜し、沈線が施されるが、断面形はほぼ平らである。稜は鋭く、やや突出して段を成している。天井部には広範囲に時計回りの回転ヘラケズリが施されている。体部が長く、TK208 型式前後のものと考えられる。

1332 は杯蓋で、残存率 40%、復元口径 12.0 cm、器高が 4.3 cm である。端部は内に傾斜し、沈線が施されるが、断面形はほぼ平らである。稜は非常に鋭く、突出して段を成している。天井部には広範囲に時計回りの回転ヘラケズリが施されている。端部から稜までが長く、TK208 型式前後のものと考えられる。

1333 は杯蓋で、残存率 40%、復元口径 13.2 cm、器高が 5.1 cm である。端部は内に

傾斜し、ほぼ平らに仕上げられている。稜はやや鈍く、やや突出して段を成している。天井部には、やや広めの範囲に時計回りの回転ヘラケズリが施されている。TK47～MT15 型式のものと考えられる。

1334 は高杯蓋で、残存率 50%、口径 11.3 cm、器高 5.5 cm である。端部は内へ傾斜してほぼ平ら断面形を呈し、稜は鋭く、突出する。体部はやや長く、天井部に反時計回りの回転ヘラケズリを施し、扁平なつまみを付す。TK47 型式のものと考えられる。

1335 は杯身で、残存率 40%、復元口径 11.0 cm、器高 4.8 cm である。立ち上がりは長く、やや内傾するが、ほぼ垂直に伸び、内に傾斜する端部はほぼ平らな断面形を呈する。底部の広い範囲に時計回りの回転ヘラケズリを施しており、受部は短く、やや外上方へ伸びている。TK208～TK23 型式のものと考えられる。

1336 は杯身で、残存率 70% で、口径 11.0 cm、器高 5.3 cm である。立ち上がりは長く、やや内傾するが、ほぼ垂直に伸び、端部は内へ傾斜して沈線を施される。底部の広い範囲に反時計回りの回転ヘラケズリを施しており、受部は短く、やや外上方へ伸びている。TK23 型式のものと考えられる。また、ヘラ記号を底部に描く。

1337 は杯身で、残存率 50%、復元口径 10.5 cm、器高 5.2 cm である。立ち上がりは長く、やや内傾しながら伸びる。端部は内へ傾斜し、断面はほぼ平らである。底部の広範囲に反時計回りの回転ヘラケズリを施しており、受部は短く、ほぼ水平に伸びている。TK23 型式のものと考えられる。

1338 は杯身で、残存率 75%、口径 10.6 cm、器高 4.5 cm である。立ち上がりはやや長く、ほぼ垂直に伸び、端部は内へ傾斜して平らな断面形を呈する。底部の広範囲に時計回りの回転ヘラケズリを施しており、受部は短く、やや外上方に伸び、やや鋭い。TK23 型式のものと考えられる。ヘラ記号を底部に描く。

1339 は杯身で、残存率 55%、復元口径 11.0 cm、器高 4.8 cm である。立ち上がりはやや長く、外反ししながら伸び、わずかに内に傾斜する端部は、ほぼ平らな断面形を呈する。底部の広い範囲に反時計回りの回転ヘラケズリを施しており、受部は短く、ほぼ水平に伸びている。TK23～TK47 型式のものと考えられる。

1340 はほぼ完形の杯身で、口径 10.2 cm、器高 4.6 cm である。立ち上がりは長く、ほぼ垂直に伸び、端部は丸く仕上げられている。底部のやや広い範囲に反時計回りの回転ヘラケズリを施しており、受部は短く、ほぼ水平に伸びている。端部は丸いが、TK47 型式のものと同定される。

1341 は短頸蓋で、肩部以下を欠損している。残存率 40%、口径 10.0 cm、残存高が 4.4 cm である。外傾する口頸部は屈曲し、短く伸びる。端部は水平で、平らにおさまられている。TK208 型式前後と同定される。

1342 は蓋で、頸部以上を欠損している。残存率 50%、残存高が 11.0 cm、胴径 13.5 cm である。肩部はやや張っているが、丸みを帯びている。底部外面は平行叩き目文の叩き板で調整される。

SK88

土師器杯、高杯、壺、甗、須恵器杯蓋、杯身、高杯、甕、製塩土器、埴輪がある。

1343～1358、1370、1371 は土師器、1359～1369 は須恵器である。

1343～1346 は土師器杯である。

1343 は口径 10.2 cm、器高 3.7 cm、口縁部にヨコナデ、体部外面にナデ、内面に指オサエおよびナデを施す。

1344 は口径 11.8 cm、器高 6.0 cm、口縁部は直立する。口縁部にヨコナデ、体部内外面にナデを施す。

1345 は口径 11.7 cm、器高 6.6 cm、口縁部は内湾する。口縁部にヨコナデ、体部外面にタテハケおよび指オサエ、体部内面にナデを施す。

1346 は口径 12.2 cm、器高 5.5 cm、口縁部は直立し、端部が外に突出する。口縁部にヨコナデ、体部内外面に指オサエおよびナデを施す。

1347、1348 は土師器高杯で、杯部のみ残存している。

1347 は口径 14.6 cm、残存高 3.3 cm、口縁部にヨコナデ、杯部内外面にナデを施す。

1348 は残存高 2.4 cm、内外面にナデを施す。1347 に胎土が類似する。

1355 は土師器鉢で、口径 17.8 cm、残存高 8.6 cm、口縁部はくの字状を呈する。口縁部にヨコナデ、胴部内外面にナデを施す。

1349 は土師器甗で、口径 12.7 cm、残存高 12.4 cm、口縁部は外傾し、胴部は球形を呈する。底部を欠損している。口縁部にヨコナデ、胴部外面にナデ、内面に指オサエおよびナデを施す。

1350 は土師器甗で、口径 12.0 cm、残存高 5.8 cm、口縁部は外傾する。口縁部にヨコナデ、口縁部内面にヨコナメハケ、胴部外面にタテハケおよびヨコハケ、胴部内面に指オサエの後ナメハケを施す。

1351 は土師器甗で、口径 12.8 cm、残存高 5.0 cm、口縁部はくの字状を呈する。口縁部にヨコナデ、胴部外面にナデ、胴部内面に指オサエおよびナデを施す。

1352 は土師器甗で、口径 15.4 cm、残存高 4.1 cm、口縁はくの字状口縁を呈し、端部が肥厚する。口縁部にヨコナデ、胴部は外面にタテハケ、内面にヨコハケを施す。

1353 は土師器甗で、口径 19.8 cm、残存高 6.2 cm、口縁部はくの字状を呈する。口縁部にヨコナデ、胴部外面にタテハケ、胴部内面にナデを施す。

1354 は土師器甗で、口径 21.6 cm、残存高 9.5 cm、くの字状口縁を呈する。口縁部にヨコナデ、胴部は外面にナメハケ、内面に指オサエの後、板ナデを施す。

1356 は土師器甗で、口径 16.7 cm、残存高 9.0 cm。口縁部にヨコナデ、胴部外面にタテハケ、内面に指オサエおよびナデを施す。

1357 は土師器甗で、口径 24.6 cm、残存高 8.3 cm、口縁部は内湾する。口縁部にヨコナデ、胴部外面にタテハケ、胴部内面にナデを施す。

1358 は土師器甗で、口径 21.8 cm、残存高 12.5 cm、くの字状口縁を呈する。口縁部にヨコナデ、口縁部内面にヨコハケ、胴部外面にタテハケ、胴部内面にヨコハケを施す。

1371 は土師器甗で、口径 27.8 cm、残存高 6.3 cm、くの字状口縁を呈する。口縁部にヨコナデを施す。

1370 は土師器甗で、胴部のみ残存しており、残存高は 13.3 cm である。2箇所に穿たれた透孔は、ややカーブをもち、円形に復元することができる。内面に指オサエを施す。

1359 は完形の杯蓋で、口径 13.6 cm、器高が 5.2 cm である。端部は内に傾斜し、沈

線が施される。稜はやや鈍いが、やや突出して段を成している。また、天井部には時計回りの回転ヘラケズリが施されている。TK23～TK47 型式のものと考えられる。

1360 はほぼ完形の杯蓋で、口径 15.7 cm、器高が 5.7 cm である。端部は丸く仕上げられ、稜は非常に鈍く、あまり突出していない。天井部の狭い範囲に時計回りの回転ヘラケズリが施されている。MT15～TK10 型式のものと考えられる。

1361 は杯身で、残存率 70%、口径 10.1 cm、器高 4.6 cm である。立ち上がりは長く、外反しながら伸び、内へ傾斜する端部はやや鈍い。底部には時計回りの回転ヘラケズリを施しており、受部は短く、ほぼ水平に伸びている。TK23 型式のものと考えられる。また、底面に十字のヘラ記号を施す。

1362 はほぼ完形の杯身で、口径 11.5 cm、器高 5.3 cm である。立ち上がりはやや長く、内傾しながら伸び、端部はやや丸く、沈線が施される。底部に反時計回りの回転ヘラケズリを施しており、受部は短く、やや外上方へ伸びている。TK47～MT15 型式と考えられる。

1363 はほぼ完形の杯身で、口径 12.5 cm、器高 5.1 cm である。立ち上がりはやや長く、内傾しながら伸び、端部は丸く収められていて、鈍い印象を受ける。底部に反時計回りの回転ヘラケズリを施しており、受部は短く、ほぼ水平に伸びている。やや大型であり、MT15 型式と考えられる。

1364 はほぼ完形の杯身で、口径 12.6 cm、器高 5.1 cm である。立ち上がりはやや長く、内傾しながら伸び、端部は丸く収められている。底部には時計回りの回転ヘラケズリを施しており、受部は短く、やや外上方へ伸びている。MT15 型式と考えられる。

1365 は杯身で、残存率 50%、復元口径 14.2 cm、器高は 5.2 cm である。立ち上がりはやや長く、やや内傾しながら伸び、端部には沈線が施されるが、鈍い印象を受ける。底部は時計回りの回転ヘラケズリで調整される。大型であり、TK10 型式のものと考えられる。

1366 は完形の杯身で、口径 12.5 cm、器高 5.2 cm である。立ち上がりはやや長く、ほぼ垂直に伸び、端部は丸く収められている。底部に反時計回りの回転ヘラケズリを施しており、受部は短く、外上方へ伸びている。MT15 型式と考えられる。

1367 は杯身で、残存率 70%、復元口径 11.0 cm、器高 4.5 cm である。立ち上がりはやや短く、内傾しながら伸び、端部は丸く収められている。底部に回転ヘラケズリを施しており、受部は短く、ほぼ水平に伸びている。小型ではあるが、MT15～TK10 型式と考えられる。

1368 は甕で、残存率 10%、復元口径 17.4 cm、残存高が 4.1 cm、頸部以下を欠損している。口頸部は「ハ」の字状をしており、口端部は突帯を巡らす、鈍い。頸部にカキ目を施している。

1369 は甕で、胴部以下を欠損している。残存率 20%、復元口径 15.4 cm、残存高が 12.5 cm である。口頸部は短く、外傾しながら伸びる。口端部は突帯を巡らせ、鋭い印象を受ける。外面は平行叩き目文の叩き板で調整された後カキ目を施し、内面には同心円文の当て具痕が残る。TK23 型式前後と推定される。

SK89

1381 は土師器甕で、口径 19.0 cm、残存高 4.0 cm、口縁部は内湾する。口縁部にヨコナデ、胴部内外面にナデを施す。

1386 は須恵器杯身で、残存率 20%、復元口径 10.8 cm、器高 5.4 cm である。立ち上がりは長く、ほぼ垂直に伸び、端部には沈線が施している。底部は広い範囲に時計回りの回転ヘラケズリを施しており、受部は短く、ほぼ水平に伸びている。TK23 型のものと考えられる。

1387 は須恵器器台の脚部で、残存率 10%、残存高 13.3 cm である。突帯を巡らせ、その間に波状文を描く。また、方形の透かしを穿っている。

SK90

土師器杯、鉢、高杯、甕、甌、須恵器杯蓋、杯身、壺、甕、製塩土器、埴輪がある。1372～1380、1382～1385 は土師器、1388～1397 は須恵器、1398 は石製品である。

1372～1374 は土師器杯である。

1372 は口径 11.0 cm、器高 3.3 cm、口縁部は外に開き、端部が外に突出する。口縁部にヨコナデ、体部外面にナデ、体部内面に指オサエおよびナデを施す。

1373 は口径 10.8 cm、器高 3.3 cm、口縁端部が外に突出する。口縁部にヨコナデ、体部内外面にナデを施す。

1374 は口径 14.8 cm、器高 3.6 cm、口縁部は外に開き、端部が外に突出する。口縁部にヨコナデ、体部内外面および底部にナデを施す。

1375～1378 は土師器高杯である。

1375 は脚部のみ残存しており、残存高は 6.0 cm である。外面にナデ、面取り、杯部内面にナデを施し、脚部内面にはしぼり痕が残る。

1376 は底径 9.8 cm、残存高 7.8 cm、脚部のみ残存している。外面を面取りし、指オサエおよびナデ、内面に指オサエを施す。また、しぼり痕が残る。

1377 は残存高 3.2 cm、杯部のみ残存しており、口縁端部を欠損している。外面に指オサエおよびナデ、内面にナデを施す。

1378 は残存高 5.5 cm、脚部のみ残存しているが、脚底部を欠損している。外面にナデおよび面取り、内面に指オサエを施す。また、しぼり痕が残る。

1379、1380 は土師器鉢である。

1379 は小型の鉢で、口径 9.0 cm、残存高 5.0 cm、口縁部にヨコナデ、胴部内外面にナデを施す。

1380 は口径 11.8 cm、残存高 5.8 cm、口縁部が内傾する。口縁部にヨコナデ、胴部内外面にナデを施す。

1383 は土師器甌の底部である。透孔の一部で、厚さ 1.0 cm、透孔はカーブを描き、円形から楕円形を呈し、他のものよりも大きい。底部外面に指オサエおよびナデ、内面にナデを施す。

1382、1384、1385 は土師器甕である。

1382 は口径 20.1 cm、残存高 6.8 cm、くの字状口縁を呈する。口縁部にヨコナデ、胴部外面にナメハケ、内面にナデを施す。

1384 は口径 19.1 cm、残存高 8.0 cm、口縁はくの字状を呈し、端部が肥厚する。口縁部にヨコナデ、胴部外面にヨコナメハケ、内面にナデを施す。

1385 は口径 28.0 cm、残存高 8.5 cm、口縁部にヨコナデ、胴部外面にヨコハケおよびナメハケ、内面にナデを施す。

1388 は杯蓋で、残存率 20%、口径 14.0 cm、器高が 5.0 cm である。端部は内に傾斜してほぼ平らな断面形を呈するが、沈線が施されている。稜は鈍く、突出せず形骸化している。天井部には、広範囲に反時計回りの回転ヘラケズリが施されている。MT15 型式のものと考えられる。

1389 は杯蓋で、残存率 55%、口径 14.0 cm、器高が 4.7 cm である。端部は丸いが、沈線が施している。稜はやや鈍いが、突出して段を成している。天井部には、やや広めの範囲に反時計回りの回転ヘラケズリが施されている。MT15 型式のものと考えられる。

1390 は杯蓋で、残存率 40%、口径 14.7 cm、器高が 4.4 cm である。端部は内に傾斜してほぼ平らな断面形を呈し、稜は鈍く、突出せず形骸化している。天井部には、やや広範囲に反時計回りの回転ヘラケズリが施されている。MT15~TK10 型式のものと考えられる。

1391 は杯蓋で、残存率 40%、復元口径 14.0 cm、残存高が 4.5 cm である。端部は丸いが、沈線が施されている。稜は非常に鈍く、形骸化している。天井部には、反時計回りの回転ヘラケズリが施されている。TK10 型式のものと考えられる。

1392 は杯身で、残存率 70%、口径 11.7 cm、器高 5.2 cm である。立ち上がりは長く、ほぼ垂直に伸び、端部はやや丸く、沈線が施される。底部に反時計回りの回転ヘラケズリを施しており、受部はやや外上方に伸びている。TK47~MT15 型式と考えられる。

1393 は杯身で、残存率 50%、復元口径 14.0 cm、器高 5.6 cm である。立ち上がりはやや長く、内傾して伸び、端部には沈線が施されている。底部に反時計回りの回転ヘラケズリを施しており、受部は短く、外上方へ伸びている。TK10 型式と考えられる。

1394 は杯身で、残存率 25%、復元口径 14.0 cm、器高 4.8 cm である。立ち上がりはやや長く、ほぼ垂直に伸びる。端部には沈線を描き、底部に反時計回りの回転ヘラケズリを施す。受部は短く、ほぼ水平に伸びている。内面に同心円文の当て具痕が残る。TK10 型式と考えられる。

1395 はほぼ完形の杯身で、口径 12.5 cm、器高 4.8 cm である。立ち上がりは内傾してやや長く伸び、端部は鈍く、沈線が施されている。底部には反時計回りの回転ヘラケズリを施しており、受部は短く、外上方へ伸びている。MT15 型式と考えられる。

1396 は壺で、体部以下を欠損している。復元口径 12.9 cm、残存高が 7.9 cm である。口縁部に段を有し、口頸部には文様帯を施さないがヘラ描きがあり、外反している。

1397 は甕で、胴部以下を欠損している。復元口径 19.1 cm、残存高が 10.3 cm である。口縁部に段を有し、口頸部は屈曲しており、文様帯は施されない。外面は平行叩き目文の叩き板で調整後ヨコナデで調整され、内面は同心円文の当て具痕が残る。

1398 は砥石で、長さ 5.7cm、幅 4.65cm、厚さ 2.15cm である。

SK91

土師器杯、鉢、高杯、壺、甕、甔、須恵器杯蓋、杯身、壺、甕、製塩土器、木製品がある。1399~1425 は土師器、1427~1444 は須恵器、1426 は木製の紡績具で、中央に柄孔がある。

1399～1401 は土師器杯である。

1399 は口径 12.8 cm、器高 5.2 cm、口縁端部が外に突出する。口縁部にヨコナデ、胴部内外面にナデを施す。

1400 は口径 11.4 cm、器高 6.4 cm、口縁部は内湾し、端部が外に突出する。口縁部にヨコナデ、体部内外面にナデを施す。

1401 は口径 13.0 cm、残存高 5.0 cm、口縁部は内湾し、端部が外に突出する。口縁部にヨコナデ、体部内外面に指オサエおよびナデを施す。また、煤が付着している。

1404～1406 は土師器高杯である。

1404 は杯部から脚部が残存しているが、脚底部を欠損している。口径 15.6 cm、残存高 9.0 cm、口縁端部が外に突出する。口縁部にヨコナデ、杯部外面にタテハケ、杯部内面にナデ、脚部外面に面取り、脚部内面にナデを施し、しぼり痕が残る。

1405 は口径 18.4 cm、残存高 6.8 cm、口縁端部が外に突出する。口縁部にヨコナデ、内外面にはナデを施す。

1406 は脚部のみ残存しており、底径 9.2 cm、残存高 3.2 cm である。外面にナデ、内面に指オサエおよびヨコハケを施す。

1402 は土師器鉢で、口径 7.0 cm、器高 5.8 cm、口縁部は内傾し、胴部は平底を呈する。口縁部にヨコナデ、内外面にナデを施す。

1403 は土師器鉢で、口径 11.4 cm、残存高 8.4 cm。口縁部にヨコナデ、胴部外面にナデ、胴部内面にナデおよびヨコハケを施す。

1409 は土師器鉢で、口径 11.5 cm、器高 12.6 cm。口縁部にヨコナデ、胴部外面にナデ、内面に指オサエの後ナデを施す。

1410 は土師器鉢で、口径 12.4 cm、残存高 6.8 cm。口縁部にヨコナデ、胴部外面にナデおよびヨコミガキ、内面に指オサエおよびナデを施す。

1407 は土師器壺である。口径 10.1 cm、残存高 9.4 cm、口縁部は外傾し、胴部は球形を呈する。また、底部を欠損してしる。口縁部にヨコナデ、外面にナデおよびヨコミガキ、内面に指オサエおよびナデを施す。

1408 は土師器甕である。口径 11.4 cm、残存高 13.9 cm。口縁部にヨコナデ、胴部外面にタテハケ、胴部内面にナデ、下半には指オサエ、ヨコハケおよびナメハケ、底部にタテハケおよびナデを施す。

1411 は土師器甕である。口径 34.6 cm、残存高 30.8 cm、口縁部は外に開き、胴部に把手がとりつく。口縁部にヨコナデ、胴部外面にタテハケ、下半にはナデ、胴部内面にナデを施す。

1412 は土師器甕である。口径 15.2 cm、残存高 3.6 cm、口縁部にヨコナデ、内面にヨコハケを施す。

1413 は土師器甕である。口径 15.0 cm、残存高 9.3 cm、口縁部にヨコナデ、胴部内面にヨコハケおよびナデを施す。

1414 は土師器甕である。口径 12.8 cm、残存高 7.0 cm、口縁部にヨコナデ、口縁部内面にヨコハケ、胴部に指オサエおよびナデを施す。

1415 は土師器甕で、口径 15.2 cm、残存高 7.4 cm、口縁部はくの字状を呈する。口縁部にヨコナデ、胴部外面にタテハケ、胴部内面に粗いヨコハケを施す。

1416 は土師器甕で、口径 20.2 cm、残存高 9.1 cm、口縁部はくの字状を呈する。口縁部外面にヨコナデ、胴部内面に指オサエおよびナデを施す。

1417 は土師器甕で、口径 19.6 cm、残存高 9.7 cm、口縁部はくの字状を呈する。口縁部外面にヨコナデ、胴部外面にナナメハケ、胴部内面に指オサエおよびナデを施す。

1418 は土師器甕で、口径 13.9 cm、残存高 10.4 cm、口縁部はくの字状を呈する。口縁部外面にヨコナデ、胴部は外面にヨコハケおよびナナメハケ、内面に指オサエおよびナデを施す。

1419 は土師器甕で、下層から出土した。口径 17.6 cm、残存高 8.5 cm、口縁部はくの字状を呈する。口縁部外面にヨコナデ、口縁部内面にナナメハケ、胴部は外面にナナメハケ、内面にナナメハケを施す。

1420 は土師器甕で、下層から出土した。口径 20.4 cm、残存高 8.6 cm、口縁部はくの字状を呈する。口縁部外面にヨコナデ、胴部は外面にナナメハケ、内面に指オサエおよびナデを施す。

1421 は土師器甕で、下層から出土した。口径 14.6 cm、残存高 8.0 cm、口縁部はくの字状を呈する。口縁部外面にヨコナデ、口縁部内面にヨコハケ、胴部は外面にヨコハケ、内面に指オサエの後ナデを施す。

1422 は土師器甕で、下層から出土した。口径 14.8 cm、残存高 8.1 cm、口縁部は内湾する。口縁部にヨコナデ、胴部外面にタテハケおよびナナメハケ、胴部内面に指オサエおよびナデを施す。

1423 は土師器長胴甕で、下層から出土した。口径 19.9 cm、器高 32.2 cm、口縁部はくの字状を呈する。口縁部にヨコナデ、胴部外面にタテハケ、ナナメハケおよびナデ、胴部内面に指オサエおよびナデを施す。また、外面に煤が付着している。

1424 は土師器甕で、底部の 2 箇所に通孔を穿ち、ヘラケズリを施す。

1425 は土師器甕である。口径 21.7 cm、底径 10.4 cm、器高 17.8 cm、胴部に把手がつけられる。底部の透孔は 2 箇所あり、扁平な楕円形に復元することができる。中央に円形、周囲に扁平な垂楕円形の透孔を配すると推定される。口縁部にヨコナデ、胴部外面にタテハケ、胴部内面にタテハケおよびナデを施す。また、内面に煤が付着している。

1427 は杯蓋で、残存率 60%、口径 11.8 cm、器高が 4.9 cm である。内に傾斜する端部はほぼ平らに仕上げられている。稜は鋭く、突出して段を成している。天井部には、時計回りの回転ヘラケズリが施されている。TK208~TK23 型式のものと考えられる。

1428 は杯蓋で、残存率 50%、復元口径 11.8 cm、器高が 4.6 cm である。内に傾斜する端部はほぼ平らに仕上げられ、稜は鋭く、突出して段を成している。天井部には、時計回りの回転ヘラケズリが施されている。TK23 型式のものと考えられる。

1429 は杯蓋で、残存率 50%、復元口径 12.2 cm、器高が 4.6 cm である。端部は内に傾斜して、ほぼ平らに仕上げられ、稜は鋭く、突出して段を成している。天井部には、時計回りの回転ヘラケズリが施されている。TK23~TK47 型式のものと考えられる。

1430 は杯蓋で、残存率 20%、復元口径 13.8 cm、器高が 4.8 cm である。端部は丸みを帯びるが、沈線が施されている。稜はやや鈍いが、突出して段を成している。天井部は回転ヘラケズリで調整される。MT15 型式のものと考えられる。

1431 は杯蓋で、残存率 50%、口径 15.4 cm、器高が 5.0 cm である。内に傾斜する端部はほぼ平らであり、稜は鋭く、突出している。天井部の広範囲に、反時計回りの回転ヘラケズリが施されている。かなり大型ではあるが、TK47～MT15 型式のものと考えられる。

1432 は杯蓋で、残存率 25%、復元口径 15.2 cm、残存高が 5.3 cm である。端部は丸いが、やや鋭い。稜は非常に鈍く、形骸化してほぼ消滅している。天井部には、時計回りの回転ヘラケズリが施されている。TK10～MT85 型式のものと考えられる。

1433 はほぼ完形の杯身で、口径 11.1 cm、器高 5.1 cm である。立ち上がりはやや長く、ほぼ垂直に伸び、内に傾斜する端部はほぼ平らに仕上げられる。底部の広範囲に回転ヘラケズリを施しており、受部は短く、水平に伸び、やや鋭い。TK23 型式と考えられる。

1434 は杯身で、残存率 80%で、口径 10.6 cm、器高 4.8 cm である。立ち上がりは比較的短く、わずかに内傾するがほぼ垂直に伸び、端部は内に内傾してやや反っている。底部の広範囲に反時計回りの回転ヘラケズリを施しており、受部は短く、外上方に伸び、やや鈍い。また、外面に 4 条のヘラ記号を描いている。TK23～TK47 型式と考えられる。

1435 は杯身で、残存率 30%、復元口径 11.2 cm、残存高 5.2 cm である。立ち上がりは長く、内傾するがほぼ垂直に伸び、端部には沈線が施されて窪んでいる。底部の広範囲に時計回りの回転ヘラケズリを施しており、受部は短くやや鈍く、外上方に伸びている。外面に 4 条のヘラ記号を描いている。TK47 型式と考えられる。

1436 はほぼ完形の杯身で、口径 13.0 cm、器高 4.9 cm である。立ち上がりは短く、やや内傾して伸び、内に傾斜する端部はほぼ平らに仕上げられている。底部に時計回りの回転ヘラケズリを施しており、受部は短く、外上方へ伸び、やや鈍い。TK47 型式と考えられる。

1437 は杯身で、残存率 90%、口径 12.6 cm、器高 5.2 cm である。立ち上がりはやや長く、内傾して伸び、端部は鋭く、沈線が施されている。底部に反時計回りの回転ヘラケズリを施しており、受部は短く、外上方へ伸び、やや鈍い。MT15 型式と考えられる。

1438 は杯身で、残存率 80%、口径 11.7 cm、器高 5.1 cm である。立ち上がりは比較的長く、内傾して伸び、端部は内に傾斜してほぼ平らな断面形を呈するが、沈線が施されている。底部に反時計回りの回転ヘラケズリを施しており、受部は短く、ほぼ水平に伸び、非常に鈍い。また、内面に同心円文の当て具痕が残る。比較的小型ではあるが、MT15 型式と考えられる。

1439 はほぼ完形の杯身で、口径 11.8 cm、器高 5.4 cm である。立ち上がりは内傾しながら伸び、端部は丸く収められ、鈍い。底部に反時計回りの回転ヘラケズリを施しており、受部は短く、外上方へ伸び、やや鋭い。MT15 型式と考えられる。

1440 は有蓋高杯で、脚部以下を欠損している。残存率 60%、復元口径 14.6 cm、残存高 6.5 cm である。立ち上がりは内傾してやや長く伸び、端部は鈍い。底部に時計回りの回転ヘラケズリを施しており、受部は短く、ほぼ水平に伸び、鋭い。脚部の透かし孔は 3 方向である。MT15～TK10 型式と考えられる。

1443は有蓋高杯で、残存率80%、口径14.4cm、器高18.4cmである。三方二段透かしの長脚で、透かし窓は上下とも方形である。また窓には、刀子状の刃物を用いた痕跡が見られる。脚部の上段と下段の境界に2状の沈線が施され、下段の細い沈線下方に波状文を巡らせる。大きく内傾する杯部立ち上がりはやや短く伸び、端部が丸く収められる。受部には蓋の破片が一部附着しているが、杯内面と立ち上がりには袖が付着していない。すなわち、蓋をかぶせた状態で焼成されたと考えられる。TK10型式と考えられる。

1441は無蓋高杯で、脚部以下を欠損している。残存率40%、復元口径13.8cm、残存高6.2cmである。杯部の口縁部は外へ開き、文様帯は施されない。また口縁部と底部の境界には、鈍い稜が施されている。脚部の透かしは3方向であると推定される。TK10型式のものと考えられる。

1442は甕で、残存率80%、復元口径12.4cm、器高11.8cmである。口縁部は胴部より大きく、二段口縁で波状文を巡らせる。口縁端部は水平で、頸部は短く、波状文を巡らせている。肩部の張りはやや強く、楕円形に近い。胴部には2条の沈線を描き、両者間に櫛歯状の刺突文を施し、および円孔透かしを穿つ。底部は平行叩き目文の叩き板で調整されている。TK17型式のものと思われる。

1444は甕で、胴部以下を欠損している。残存率10%、復元口径20.2cm、残存高が8.7cmである。口縁部に段を有し、屈曲する頸部はカキ目で調整されている。外面は平行叩き目文の叩き板で調整され、内面には同心円文の当て具痕が残る。古墳時後期のものと考えられる。

1426は木製品で、長辺24.0cm、短辺17.0cm、器高7.8cm、紡績具と考えられる。平面は長方形、断面は扇根形を呈する。中央には平面形四角形で、断面ハの字状の柄孔が穿たれている。孔は上部が長辺3.4cm、短辺3.0cm、下部が一辺10.0cm四方である。

SK92

1451は土師器杯で、口径13.6cm、残存高4.4cm、口縁部にヨコナデを施す。

1452は土師器高杯で、口径16.1cm、残存高5.1cm、杯部のみ残存している。口縁端部は外に突出する。口縁部にヨコナデ、杯部外面に指オサエおよびナデ、杯部内面にナデを施す。

1453、1454は土師器甕である。

1453は口径20.2cm、残存高8.0cm、口縁部はくの字状を呈し、端部が肥厚する。口縁部にヨコナデ、胴部外面にヨコナメハケ、胴部内面にナデを施す。

1454は口径14.2cm、器高18.0cm、くの字状を呈する口縁部は端部が肥厚し、胴部は球形を呈する。口縁部にヨコナデ、口縁部内面にヨコハケ、胴部にタテハケおよびヨコハケ、胴部にナデを施す。また、煤が付着している。

1455は土師器甕で、口径24.4cm、残存高6.0cm。口縁部にヨコナデ、口縁部内面にヨコハケを施す。

SE73

1445～1449は黒色土器、1450は土師器、1447、1448は曲物内から出土した。

1450は土師器杯で、口径12.4cm、残存高3.2cm。口縁部にヨコナデ、体部内外面お

よび底部にナデを施す。

1445～1449 は黒色土器A類碗である。

1445 は口径 15.0cm、底径 7.7cm、器高 5.8cm。口縁部にヨコナデ、体部内外面および底部にナデを施し、底に高台を貼り付ける。

1446～1449 は体部外面および底部にナデ、内面にミガキを施し、底に高台を貼り付ける。1446 は底径 8.7cm、残存高 1.6cm。1447 は底径 8.8cm、残存高 1.9cm。1448 は底径 6.4cm、残存高 1.4cm。1449 は高台のみ残存しており、底径 6.2cm、残存高 1.4cm である。

SE74

井戸堀形および枠内からは、多量の円筒埴輪片を中心として土器、木鐮、斎串などの木製品が出土している。土器類は甕、壺などの貯蔵具のみで供膳具が見受けられず、6世紀後半から7世紀にかかると思われるが確定することはできない。埴輪片は6世紀前半の所産で、井戸枠に使用された円筒埴輪から、直径 0.5m前後で残存長は 1.3m前後と推測されるものが少なくとも 10 点は含まれている。これらは粗い刷毛状工具を使用し、成形時には第 1 次調整を消さずそのまま第 2 次調整を施しており、粗雑な作りをみせる。斎串は全長が判るもの 4 点、先端部のみ残存するものが 4 点あり、全長 12.5cm～14.0cm、幅 1.2cm～1.8cm である。木鐮については 2 種確認でき、ひとつは細く扁平な板で製作されており、もう 1 種は厚みがある。1456～1470 は埴輪、1471～1475 は土師器、1476～1480 は須恵器、1481～1493 は木製品である。

1460 は井戸枠上段を構成していた。口縁部から底部残存がしており、口径 50.4cm、底径 46.6cm、器高 127.0cm である。口縁部は外傾し、端部が突出して稜を有する。胴部には、10.0～13.0cm 間隔で計 11 条の箍を巡らせ、円形の透孔を穿つ。透孔は、上から 3、4、7、10 段目の各 2 方、6、8、9 段目の各 1 方に配されている。また、3、4 段目のものが各々ほぼ対向するが、全体を通しての透孔の配置に規則性は認められない。外面には粗いナメハケ、内面は口縁部にナメハケおよびヨコナメハケ、下半から基底部にはナデを施す。底部は約 1/4 残存しているが、下段の円筒埴輪 1459 内に挿入しやすいう、井戸枠構築の段階で割られたと思われる。

1459 は井戸枠下段にあたる。胴部下半から底部にかけて残存しており、底径が 50.0cm、残存高は 50.9cm である。箍は 4 条で、約 13.0～15.0cm 間隔で貼り付けられる。基底部から 1 条目の箍までは約 9.0cm で幅が狭い。透孔は下から 3 段目に 2 箇所、5 段目に 1 箇所穿たれる。外面にタテナメハケ、内面にタテハケを施し、内面にはノミ工具のケズリ痕が残る。井戸構築時、欠損部分を 1457、1458、1459 で塞ぎ補強していた。

1456～1458 は 1459 の透孔および欠損部を塞いでいた円筒埴輪である。

1458 は口縁部から胴部上半が残存しており、口径 49.0cm、残存高は 44.4cm である。4 条の箍を上から約 10.0cm 間隔で巡らせ、透孔は上から 3 段目の 2 箇所に穿つ。外面に粗いタテハケ、内面にナデを施す。1459 の透孔を塞いだ破片と、基底部の欠損部にあてた破片などに分かれていた。

1456、1457 は、ともに 1459 の基底部の欠損部に充当されていた胴部片である。胎土、調整等から同一個体と判断した。外面に細いタテナメハケ、内面にナデを施し、

約 10.0 cm 間隔で箍をめぐらす。1456 は残存高 29.6 cm で箍 3 条が残存し、1457 は残存高 28.0 cm で、箍 3 条、透孔 2 箇所である。

1466 は 1460 の上から 7 段目にある透孔 2 箇所を塞いでいた胴部片である。残存高は 36.0 cm で、胴部に 10.0 cm～12.0 cm 間隔で 4 条の箍を巡らせる。透孔は 1 箇所が残存している。外面に粗いタテハケ、内面にナデを施す。

1463 は 1460 の上から 4 段目に穿たれた透孔を塞いでいた。口縁部の破片で、口径 57.0 cm、残存高 17.5 cm、口縁部が外に開く。箍 1 条が残存しており、外面にタテハケ、内面にナデを施す。

1467、1469、1470 は胴部片で、胎土、調整等から同一個体と考えられる。胴部外面にタテハケ、内面にナデを施し、箍の間隔は 10.0 cm～13.0 cm である。

1467、1469 は、1460 の上から 3 段目の透孔を塞いでいた。前者は残存高 21.7 cm で箍が 2 条、後者は残存高 28.5 cm で箍が 3 条、透孔が 1 箇所が残存している。

1470 は、1460 の上から 3 および 4 段目の透孔を塞いでいた。残存高は 30.7 cm、箍が 3 条、透孔が 1 箇所が残存している。

1461、1462、1464、1465 は井戸枠内、1468 は掘形から出土した。

1461 は口縁部から胴部上半にあたり、口径 43.0 cm、残存高 53.3 cm である。箍は 5 条で、その間隔は 7.0～11.0 cm、透孔は上から 3 段目の 2 方に穿たれる。外面に粗いタテハケ、内面にナデを施す。

1462 は口縁部が残存しており、口径 43.4 cm、残存高 22.8 cm である。約 9.0 cm 間隔で 2 条の箍を巡らせ、上から 3 段目の 1 方に透孔を穿つ。外面にヨコナメハケ、内面にナデを施す。

1464 は口縁部から胴部上半が残存しており、口径 46.8 cm、残存高 44.5 cm である。約 10.0 cm 間隔で 4 条の箍を巡らせ、上から 3 段目に 2 方、4 段目に 1 方の透孔が穿たれる。外面にタテナメハケ、内面にヨコナメハケを施す。

1465 は口縁部が残存しており、口径 43.4 cm、残存高 21.5 cm である。約 8.0 cm 間隔で 2 条の箍を巡らせ、透孔は上から 3 段目の 1 方に穿つ。外面にヨコナメハケ、内面にナデを施す。

1468 は残存高 20.8 cm、約 9.0 cm 間隔で 2 条の箍を巡らせる。外面にタテハケ、内面にナデを施す。また、山形状のヘラ描きがある。

1471 は土師器長頸壺で、口径 10.0 cm、器高 18.7 cm、口縁部が外傾する。胴部は扁球形で、丸底を呈する。口縁部にヨコナデの後外面タテミガキ、口頸部内面にナデ、胴部は外面にナデのちヨコミガキ、下半にはヘラケズリ、内面には指オサエおよびナデを施す。また、口頸部内面にはしぼり痕が残る。

1472 は土師器壺で、口径 9.0 cm、残存高 5.0 cm、口縁部にヨコナデを施す。

1473 は土師器壺で、底径 8.0 cm、残存高 8.7 cm、胴部のみ残存している。胴部は扁台形を呈する。胴部外面にタテナメハケの後ヨコミガキ、下半にはヘラケズリ、胴部内面にナデを施す。

1474 は土師器甗で、口径 28.0 cm、残存高 6.5 cm。口縁部にヨコナデ、外面にタテハケ、内面にナデを施す。

1475 は土師器甗で、口径 31.8 cm、残存高 25.3 cm。口縁部にヨコナデ、口縁部内面

にヨコハケ、胴部外面にタテハケ、下半にヨコミガキ、胴部内面に板ナデを施す。

1476 は杯身で、掘形埋土上層から出土した。残存率 25% で、復元口径 13.4 cm、残存高は 3.7 cm である。立ち上がりは短く、ほぼ垂直に伸び、端部は丸く取められている。底部に回転ヘラケズリが施されている。大型であることから、TK10 型式のものと考えられる。

1477 は杵内埋土上層から出土した。甕あるいは壺であると推定される。頸部以上および底部を欠損しており、残存率は 20%、残存高が 12.2 cm である。肩部の張りはやや弱く、丸みを帯び、2 条の沈線が施されている。胴部に文様帯はなく、円形の透かし孔も確認できない。

1478 は壺で、掘形埋土下層から出土した。頸部以下を欠損し、復元口径 13.0 cm、残存高が 5.9 cm である。口縁部に段を有し、口頸部には 2 条の沈線を施し、胴部は漏斗状をなしている。

1479 は広口壺で、杵内埋土下層から出土した。残存率は 80% で、復元口径 12.0 cm、器高が 13.7 cm である。口頸部は屈曲しており、短い。底部を回転ヘラケズリで調整し、胴部にカキ目で文様帯を施す。

1480 は大甕で、杵内埋土下層から出土した。胴部以上を欠損しており、残存率は 20%、残存高 21.0 cm である。外面は格子目風叩き目文の叩き板で調整され、内面には同心円文の当て具痕が残っている。

木製品 1481～1493 は井戸杵内最下層から出土した。1481～1488 が齋申、1489～1493 は木鎌である。1481～1485 は全長 12.5 cm～14.0 cm、幅 1.2 cm～1.8 cm である。1486～1488 は端部のみ遺存しているが、同様の規模であったと推測される。木鎌は 2 種確認でき、1490 は厚みがあり、1491、1493 は細く扁平に製作されている。

1481 は全長 12.8 cm、幅 1.8 cm、厚み 0.1 cm～0.2 cm。

1482 は全長 13.0 cm、幅 1.6 cm～1.7 cm、厚み 0.1 cm 5～0.2 cm。

1483 は全長 14.0 cm、幅 1.7 cm、厚み 0.1 cm～0.2 cm。

1484 は全長 13.1 cm、幅 1.4 cm、厚み 0.2 cm。

1485 は残存長 4.1 cm、幅 2.2 cm、厚み 0.15 cm。

1486 は残存長 3.0 cm、幅 1.8 cm、厚み 0.15 cm。

1487 は残存長 5.8 cm、幅 1.3 cm、厚み 0.2 cm。

1488 は残存長 1.8 cm、幅 1.2 cm、厚み 0.15 cm。

1489 は全長 6.4 cm、最大幅 2.2 cm、幅 0.8 cm～0.9 cm、厚み 0.6 cm～0.8 cm。

1490 は残存長 5.0 cm、最大幅 0.8 cm、幅 0.5 cm、厚み 0.2 cm。

1491 は残存長 5.7 cm、最大幅 0.9 cm、幅 0.8 cm、厚み 0.2 cm。

1492 は残存長 6.9 cm、幅 0.6 cm～0.9 cm、厚み 0.2 cm。

1493 は全長 7.2 cm、幅 0.4 cm、厚み 0.3 cm。

SE75

1494 は土師器皿で、口径 13.8 cm、器高 2.4 cm、口縁部にヨコナデを施し、体部外面を指オサユ、内面をナデで調整する。

1497 は黒色土器碗で、口径 15.0 cm、器高 4.4 cm、口縁部にヨコナデ、体部内外面にナデを施す。

SD106

- 1495～1507は土師器、1508～1510、1512～1514、1516は須恵器である。
- 1495、1496は土師器杯で、口縁部にヨコナデ、内外面にナデを施す。
- 1495は口径12.0cm、残存高4.6cm。1496は口径11.9cm、残存高4.8cm。
- 1498、1499は土師器高杯である。
- 1498は残存高5.7cm。杯部内外面にナデ、脚部外面に面取り、脚部内面に横方向のケズリを施す。
- 1499は残存高5.3cm。外面にナデを施し、内面にしぼり痕が残る。
- 1500は土師器壺で、口径11.0cm、残存高6.5cm、口縁部にヨコナデを施す。
- 1501～1506は土師器甕である。
- 1501は台付で、底径7.0cm、残存高6.2cm、脚部のみ残存している。外面、胴部内面および脚部内面にナデを施す。
- 1502は口径23.8cm、残存高13.2cm。口縁部にヨコナデ、胴部外面にタテハケ、胴部内面にヨコハケの後指オサエを施す。
- 1503は口径19.0cm、残存高11.9cm。口縁部にヨコナデ、胴部外面にナデ、胴部内面に指オサエおよびナデを施す。
- 1504は口径20.2cm、残存高5.1cm、口縁部にヨコナデを施す。
- 1505は口径22.4cm、残存高11.2cm、胴部外面にタテハケが残る。
- 1506は口径24.4cm、残存高7.7cm。口縁部にヨコナデ、胴部外面にタテハケ、内面にナデを施す。
- 1507は土師器甕で、残存高7.4cm、透孔を2箇所に分つ。胴部外面にタテハケ、胴部内面にヨコハケを施す。
- 1508は杯蓋で、残存率50%、口径13.2cm、残存高が4.35cmである。端部に沈線が施されるが甘い感じを受け、稜は非常に鈍く、形骸化している。天井部のやや広めの範囲に回転ヘラケズリが施されている。TK47～MT15型式のものと考えられる。
- 1509は杯蓋で、残存率70%、口径13.6cm、器高が4.45cmである。内に傾斜する端部は平らに近いが甘い印象を受け、稜はやや鋭く、突出している。天井部は広範囲に反時計回りの回転ヘラケズリが施されている。MT15型式のものと考えられる。
- 1510は杯蓋で、残存率30%、口径13.6cm、残存高が3.75cmである。端部に深い沈線が施され、凹みが大きい。稜は鈍く、あまり突出していない。天井部は、やや広い範囲に回転ヘラケズリが施されている。MT15～TK10型式のものと考えられる。
- 1512は杯身で、残存率80%、口径10.6cm、器高5.5cmである。立ち上がりは長く、内傾するがほぼ垂直に伸び、端部には沈線を施す。底部のやや狭い範囲に時計回りの回転ヘラケズリを施しており、受部は短く、ほぼ水平に伸び、鈍い印象を受ける。全体的に丸みを帯びており、TK47型式のものと推定される。
- 1513は杯身で、残存率50%、口径11.4cm、器高5.3cmである。立ち上がりは長く、わずかに内傾するがほぼ垂直に伸び、端部には沈線を施す。底部のやや狭い範囲に時計回りの回転ヘラケズリを施されている。受部は短く、ほぼ水平に伸び、鈍い印象を受ける。やや扁平であるが、TK47型式のものと推定される。
- 1514は杯身で、残存率50%、口径10.2cm、器高4.45cmである。立ち上がりはやや

短く、内傾するがほぼ垂直に伸び、端部には沈線が施される。底部に時計回りの回転ヘラケズリを施しており、受部は短く、ほぼ水平に伸び、鈍い印象を受ける。全体的に丸みを帯びており、TK47 型式のものと推定される。また、底部外面にヘラ描きが見られる。

1516 は高杯で、残存率 50%、底径 11.6 cm、残存高 6.65 cm である。有蓋高杯の脚部で、円孔透かしを持つと思われる。古墳時代後期のものと推定される。

SD107

1511 は須恵器杯蓋で、残存率 85%、口径 14.5 cm、器高が 4.5 cm である。端部は丸く、稜はほぼ消滅している。天井部には反時計回りの回転ヘラケズリが施されている。MT85 型式のものと考えられる。

1515 は須恵器杯身で、残存率 20%、復元口径 13.7 cm、残存高 4.45 cm である。立ち上がりはやや短く、内傾しながら伸び、端部は丸い。底部に回転ヘラケズリを施しており、受部は短く、外上方へ伸びている。TK10～MT85 型式と考えられる。

その他の遺構

1517 は須恵器無蓋高杯で、第Ⅱ層包含層から出土した。杯部のみ残存している。残存率は 20%、復元口径 16.9 cm、残存高 5.85 cm である。口縁部は外反し、端部は丸く収められる。胴部には 2 段の明瞭な稜が付き、波状文を巡らせている。文様帯より下部につまみ痕を確認することができるが、欠損しているため、2 個対称に付くかは不明である。ON46 型式前後のものと推定される。

(2) J 地区

第 69 トレンチ

SK95

集水のために枠として設置した羽釜と、その内部から出土した土師器、黒色土器がある。

1518～1520 は土師器碗である。

1518 は口径 14.6 cm、底径 7.0 cm、器高 5.85 cm、底に高台を貼り付ける。口縁部にヨコナデ、体部は外面にナデ、内面にミガキ、底部にナデを施す。

1519 は口径 14.6 cm、残存高 4.7 cm、口縁部にヨコナデ、体部外面にナデ、体部内面にヨコミガキを施す。

1520 は口径 14.6 cm、残存高 4.7 cm、口縁部にヨコナデ、体部外面にナデ、体部内面にヨコミガキを施す。

1526 は土師器羽釜で、口径 23.6 cm、残存高 22.6 cm、口縁部は外反し、端部が肥厚する。胴部は球形を呈し、鏝を貼り付け、底部は打ち搔かれている。口縁部にヨコナデ、胴部は外面にナデ、内面にナデを施す。また、煤が付着している。

1521 は黒色土器 B 類碗で、口径 8.2 cm、残存高 2.2 cm、底部のみ残存しており、高台を貼り付ける。底部外面にミガキおよびナデ、内面にミガキを施す。羽釜内から出土した。

SK96

1524 は土師器皿で、口径 8.6 cm、器高 1.6 cm。口縁部にヨコナデ、体部外面に指オ

サエ、体部内面にナデを施す。

1525 は土師器碗で、高台のみ残存しており、底径 7.8 cm、残存高 1.7 cm である。

SE76

上部構造の井戸枠内から土師器、黒色土器、下部構造内の埋土から一辺 16.0 cm、枠高 6.5 cm、板厚 0.4 cm の小型曲物、その内部から木製横櫛、井戸枠内最下層では土師器、羽釜、黒色土器が出土している。掘形からは土師器杯、皿や、須恵器杯蓋、黒色土器碗が、上部構造の井戸枠内から土師器杯、皿、甕や、黒色土器碗が、下部構造から土師器皿、甕、羽釜、黒色土器碗、皿が出土した。

1527～1542、1548～1552 は土師器、1543～1547 は黒色土器、1553～1557 は木製品である。

1527 は土師器皿で掘形上層から出土した。口縁部にヨコナデ、口径 13.0 cm、残存高 2.2 cm。体部外面に指オサエの後ナデ、内面ナデを施す。

1528、1529 は土師器皿で、口縁部が「て」字状を呈する。口縁部にヨコナデ、体部外面に指オサエ、内面にナデを施す。

1528 は口径 12.5 cm、器高 1.7 cm で井戸枠内上部構造から出土した。1529 は口径 10.4 cm、器高 2.5 cm で井戸枠内下部構造から出土した。

1530～1540 は土師器杯で、1530～1532 の口縁部は外方に開く。口縁部にヨコナデ、体部に指オサエ、内面にナデを施す。

1530 は口径 15.3 cm、器高 2.8 cm で掘形上層から出土した。1531 は口径 15.3 cm、器高 2.8 cm で掘形上層、1532 は口径 14.6 cm、器高 2.4 cm で掘形上層から出土した。

1533 は口径 14.0 cm、器高 2.8 cm で掘形下層から出土した。口縁部にヨコナデ、体部外面に指オサエおよびナデ、内面にナデを施す。

1534 は口径 14.0 cm、器高 3.0 cm で掘形下層から出土した。口縁部にヨコナデ、体部外面に指オサエおよびナデ、内面にナデを施す。

1535 は口径 15.8 cm、器高 2.6 cm で掘形下層から出土した。口縁部にヨコナデ、体部に指オサエおよびナデを施す。

1536 は口径 17.0 cm、器高 2.7 cm で掘形上層から出土した。口縁部にヨコナデ、体部外面にナデ、体部内面にナデの後、放射線状の暗文を施す。

1537 は口径 14.0 cm、残存高 3.3 cm で井戸枠内下部構造から出土した。口縁部にヨコナデ、体部外面に指オサエ、内面にナデを施す。

1538 は口径 14.0 cm、器高 3.3 cm で井戸枠内下部構造から出土した。口縁部にヨコナデ、体部外面に指オサエ、内面にナデを施す。

1539 は口径 12.7 cm、器高 3.0 cm で井戸枠内下部構造から出土した。口縁部にヨコナデ、体部外面に指オサエ、内面にナデを施す。

1540 は口径 13.0 cm、器高 2.9 cm で井戸枠内下部構造から出土した。口縁部にヨコナデ、体部内外面にナデを施す。

1541 は土師器碗で、口径 11.7 cm、器高 4.1 cm で掘形下層から出土した。口縁部にヨコナデ、体部外面に指オサエおよびナデ、内面にナデを施す。

1545 は土師器碗で、底径 8.2 cm、残存高 2.6 cm、底部のみ残存し井戸枠内上部構造から出土した。底部に高台を貼り付け、体部内外面にナデを施す。

1542、1548～1551は土師器甕である。

1542は口径37.0cm、残存高5.0cmで井戸枠内下部構造から出土した。口縁部にヨコナデを施す。また、煤が付着している。

1548は口径23.4cm、残存高3.8cmで掘形下層から出土した。口縁部は外反し、端部が肥厚する。口縁部にヨコナデ、口縁部内面にヨコハケ、胴部にナデを施す。

1549は口径17.6cm、残存高3.7cmで井戸枠内下部構造から出土した。口縁部外面にタテハケの後ヨコナデ、口縁部内面にヨコハケ、胴部は外面にタテハケ、内面にナデを施す。

1550は口径18.4cm、残存高5.4cmで井戸枠内下部構造から出土した。口縁部にヨコナデ、口縁部内面にヨコハケ、胴部にナデを施す。また、外面に煤が付着している。

1551は口径32.0cm、残存高6.8cm掘形下層、口縁部は外反し、端部が面をつくる。口縁部にヨコナデ、胴部外面にタテハケ、胴部内面にナデを施す。

1552は土師器羽釜で、口径25.5cmで井戸枠内下部構造から出土した。残存高7.0cm。外反する口縁部の直下に罫を貼り付ける。口縁部にヨコナデ、胴部内外面にナデを施す。また、煤が付着している。

1543は黒色土器A類杯で、口径13.0cm、残存高1.7cm、高台を欠損し井戸枠内下部構造から出土した。口縁部にヨコナデ、体部外面にケズリ、内面にミガキを施す。

1544は黒色土器A類碗で、口径20.8cm、残存高4.7cmで掘形上層から出土した。体部は外面に指オサエおよびナデ、内面にヨコミガキを施す。

1546は黒色土器A類碗で、底径7.8cm、残存高2.3cm下部構造え井戸枠内から出土した。底部が残存しており、高台を貼り付ける。外面にナデ、内面に平行ミガキを施す。

1547は黒色土器B類鉢で、口径15.4cm、残存高2.2cmで井戸枠内下部構造から出土した。口縁部は外に突出する。口縁部にヨコナデ、胴部外面にナデを施す。

1553は井戸枠材で、東側で使用されていた。長方形の板で長辺89.5cm、短辺28.0cm、最大厚3.5cmである。

1554は井戸枠材で、一木を割り抜いている。全長112.0cm、直径49.5cmである。

1555は横楯であるが、両端が遺存していないため、全幅は不明である。残存幅4.2cm、長さ4.0cm、箭の長さは3.2cm、厚み1.0cm～0.3cm。

1556は井戸枠材で曲物底板を転用している。残存幅18.6cm、残存長6.0cm、厚さ0.6cmである。

1557は曲物で、底板と側板が遺存している。底板は一辺15.8cm、厚み0.4cm。側板の直径は14.8cm、高さ6.8cm。底板と側板は4箇所留められている。

その他の遺構

1522は須恵器杯身で、東サプトレンチ砂層から出土した。残存率は70%、口径11.6cm、器高が4.1cmである。立ち上がりは短く、やや内傾しながら伸び、端部は丸く収められている。底部には反時計回りの回転ヘラケズリを施しており、受部は短く、水平に伸びている。TK10型式と考えられる。

1523は須恵器杯身で、第Ⅱ層埋土から出土した。残存率50%、復元口径10.0cm、器高が4.5cm、高台が付されている。口縁部は外傾し、端部は丸く仕上げられている。

高台は短く、下方へ踏ん張り、脚端面は水平である。体部はヨコナデ、底部はナデで調整されている。小型ではあるがTK48型式のものと考えられる。

第70 トレンチ

大半が第Ⅱ層あるいは耕作溝埋土に含まれていたものであり、遺構に伴うものは僅少である。また、旧河道埋土から数点出土している。

SX25

須恵器の大甕と土師器の大型高杯が各1点出土している。

1563は口径30.6cm、残存高18.8cmと大型の土師器高杯であるが、脚底部を欠損している。杯部に稜をもち、口縁部が外傾する。口縁部にヨコナデ、口縁部内面にヨコハケ、体部外面にタテハケおよびナメハケ、杯部内外面にナデを施す。また、脚部内面にしぼり痕が残る。

1564はほぼ完形の須恵器大甕で、口径22.0cm、器高45.7cmである。口縁部は朝顔形に外反し、端部は上下に鋭い稜を持つ。口頸部は端部付近に稜を有し、カキ目で調整されている。文様帯は見られない。胴部は肩がやや張っていてイチジク形を呈し、外面を平行叩きの叩き板で調整した後、カキ目を施す。内面は同心円文の当て具痕をすり消している。TK208型式のものと考えられる。

SR30

1558、1559は土師器、1560、1561は須恵器である。

1558、1559は土師器甕である。

1558は口径16.6cm、残存高7.1cm、口縁部は外反する。口縁部にヨコナデ、胴部外面にタテハケおよびナメハケ、胴部内面にナデを施す。

1559は口径12.0cm、器高17.3cm、口縁部はくの字状を呈して端部が肥厚し、胴部は球形を呈する。口縁部にヨコナデ、胴部外面にタテハケおよびナメハケ、胴部内面にナデを施す。また、煤が付着している。

1560はほぼ完形の杯身で、口径12.2cm、器高4.9cmである。立ち上がりはやや長く、ほぼ垂直に伸び、端部は丸く取められ、鈍い。底部に時計回りの回転ヘラケズリを施しており、受部は短く、ほぼ水平に伸びている。また、内面に輪積み痕が残る。

MT15型式と考えられる。

1561は有蓋高杯で、脚部以下を欠損している。残存率30%、口径10.7cm、残存高4.75cmで、焼成は甘い。杯部の立ち上がりはやや長く、ほぼ垂直に伸び、端部には沈線が施される。底部に反時計回りの回転ヘラケズリを施しており、受部はやや長く、ほぼ水平に伸び、鋭い。脚部は全く残存していないが、杯底部に透かし窓の割り付けと思われるヘラ描きがあることから、有蓋高杯と推定される。TK47型式と考えられる。

その他の遺構

1562は須恵器小壺で、第Ⅲ層から出土した。残存率90%、口径4.1cm、底径3.45cm、器高9.45cmである。口端部に段を持ち、全体をヨコナデで調整している。底面には糸切り痕が残っている。

第10章 平成20年度調査

1 遺構

(1) K地区

第71トレンチ

第8次調査では事業地東部における都市計画道路予定地の一部を調査した。平成19年度に調査された67トレンチと68トレンチの間の区域に、T字形のトレンチを設定した。トレンチ全体の長さは約45.0m、北区の幅は約20.0m、面積は554.0㎡である。

基本層序

第1層から第Ⅲ層に大別される。第Ⅰ層は近現代の耕作土層および遺物包含層、第Ⅱ層は中世から近世の耕作土層、第Ⅲ層は基盤層である。調査は重機で第Ⅰ層を除去後、第Ⅱ層を第1遺構面、第Ⅲ層を第2遺構面として行った。主な遺構は耕作に伴う素掘溝で、その他にピットや溝、土坑、井戸などを検出した。主な遺物は土師器、須恵器、黒色土器、瓦などである。

第1遺構面

SX31

トレンチ北端で検出した。調査区外へ延びるため、全体を確認することはできなかったが、平面方形を呈すると考えられる。東西2.3m、検出面からの深さは0.4m程度である。人頭大ほどの円形礫以外に目立った遺物は出土していない。遺構の性格は不明である。

SX32

トレンチ中央から南半にかけて検出した浅い沼状遺構で、一連のものと思われる。土師器、須恵器、黒色土器の破片などが出土している。これらの遺物から、平安時代前半頃のものと考えられる。

SX34

トレンチ北端で検出した羽釜を埋設した土坑で、南北0.64m、東西0.68mで楕円形を呈し、深さは0.22mである。底部を欠いた羽釜が逆さに埋設され、内部には須恵器製の胴部片が入れられていた。土坑は西半部で標高52.500m付近に段を有しているが、東半部では明確な段は確認されなかった。羽釜は、東側にやや傾いた状態で、掘り込んだ地山上に直接置かれている。鏝は北側で一部欠けている。須恵器片は羽釜に立て掛けるようにして入れられているが、地山には接していない。このことから、羽釜内をある程度埋め戻してから須恵器片が入れられたと推定することができる。羽釜より上の層（土層断面図第1層）では土器片とともに炭化物も検出されている。羽釜は9～10世紀のものと考えられる。

SX35

トレンチ北区で検出した平面方形の遺構で、東西径1.7m、南北径2.0m、深さ0.3mである。須恵器や土師器、黒色土器や瓦器の破片が出土している。10世紀頃の遺物と考えられる。柱穴などは確認されなかった。

北区で検出した。平面は不定円形で長径 1.45m、短径 1.25m、検出面からの深さが最大 0.83m の遺構である。木製の井戸枠および集水施設が設置されていた。

井戸枠は「縦板組隅柱横棧どめ」（宇野 1982）で、平面形態は東西辺がやや長い方形になっている。井戸枠の隅柱間の距離は、北辺および南辺が 0.59m、東辺が 0.44m、西辺が 0.35m である。残存状態が良くないため本来の形態が不明瞭な部分もあるが、隅柱は概ね角柱状を呈しており、底部付近で太く、上方でやや細くなっている。ただし、必ずしも丁寧に整形されたものではなく、きれいに面が作り出されていない部分もある。特に北東隅のものは底部がほとんど角柱状に整形されておらず、根付近の部位が使用されたことを良好に示す。4本ある隅柱のうち北西隅、南東隅、南西隅の3本は上端が原形を保っているとは判断でき、U字状の挟りが入れられている。この挟りは方向が揃えられており、東西方向に溝が走るようになっている。また、隅柱に枘穴は観察できない。

隅柱間の縦板についてみると、北辺と南辺では、やや内傾しているが原位置をほぼ保った状態で3枚ずつ残存していた。これらのうち北辺の一番東側のものは、北辺が集水施設の上端よりも上方に位置しており、原位置から動いている可能性がある。他の縦板は、底辺が集水施設の上端よりも下方に位置している。残存数は3枚であるが、北辺、南辺とも比較的大きな隙間があるため、本来は最低でも4枚あったものと考えられる。西辺では、内側に倒れ込んだ状態で3枚が検出された。縦板が本来の形状であったならば、この3枚で隙間なく西辺を覆うことができたと考えられる。東辺の縦板と認められるものは検出されなかった。縦板は厚さ2.2cm程度で、底部は面を有している。上部では薄くなり、上端は底部のような面を持たないが、これは上方が本来の形態を保っていないものと考えられよう。

横棧は北辺のものが1本残存しており、縦板の内側を通るようにして隅柱間に渡されていた。おそらく、隅柱が横棧を支持していたものと思われるが、横棧の両端が残っていなかったためその構造は確認できなかった。しかし、隅柱に枘穴がないことを考えると、横棧が検出されたのは隅柱の上端よりやや下方であるが、本来は隅柱の上に横棧を載せて支持しており、それが井戸の崩壊に伴って少し落ち込んだと考えるのが最も妥当であろう。ただしこの場合、U字状の挟りは東西方向の横棧を支持するには都合が良さそうであるが、当然存在したであろう南北方向の横棧を同時に隅柱上に置くには適していないように思われる。なお、横棧は現状で縦板を支えられないと考えられるほど細いことから、本来の規模を備えていないと思われる。また、西辺中央の縦板が現状で長さ約0.5mあり、これを北辺や南辺の縦板と同じように立てた場合、その上端が隅柱よりも0.2m程度上方に位置する。このことから、本来は検出された状態よりも上部にまで井戸枠構造があった可能性が高いと考えられる。その場合、隅柱の上に支柱を置くといった構造が考えられる。また、井桁や井尻などの存在については不明である。

集水施設には底を抜いた曲物が用いられているが、内側と外側にそれぞれ別個の曲物を配置した二重構造となっている。この集水施設の軸と井戸枠の軸は揃えられていない。内側の曲げ物は長径0.52m、短径0.39m、高さは0.25mである。上端と下端

に横帯が巡っており、下段の帯には容器本体を貫いて多数の穿孔が施されている。この孔の中には、木の目釘が遺存しているものもある。上段の帯にはこのような穿孔が認められないことから、帯を留めるためというより底板を留めていたものである可能性がある。曲物の概ね長軸、短軸線上にあたる位置に縦帯があり、容器本体と上下段帯の間に挟み込むようにして付けられている。

外側の曲物は内側の曲物よりひとまわり大きく、最大径約 0.65m の不定円形を呈すると考えられ、高さは 7.0 cm である。外側の曲物はさらに二重になっているが、全周が遺存していないため、2 個体の曲物を重ねているのか、1 個体の曲物が 2 周しているのか判別することができない。

上記枳材の他に、土器が出土している。それらの中で、井戸に伴うと考えられるものとして土師器皿が 1 点ある。曲物内から出土したもので、枳内最下底からではなく、この土器の下から木片も検出されているが、完形であり穿孔が施されていることから井戸に伴うものであると判断した。おそらく、井戸の廃棄の際に埋め戻しながらこの土器を投入して祭祀を行ったと考えられる。

最後にこの井戸の年代であるが、廃棄に伴うと考えられる土器から 10 世紀に廃棄されたものと推定できる。

SD109

トレンチ南区の中央部で南西から北東に走る溝である。長さ 11.2m 分を検出し、最大幅は約 3.0m、最小幅 2.2m である。主な遺物は須恵器、土師器、黒色土器で、古墳時代の遺物も含まれるが、これは下にある旧流路からの混入品と思われる。埋没時期は平安時代前半と考えられる。

第 2 遺構面

ピット少数のほか、河川の旧流路、そしてそれに伴う杭列などを検出した。

SR31

トレンチを南北に縦断しており、砂の堆積状況および現在の葛下川の流れから、南から北に向かって水が流れていたものと判断できる。南支流、西支流が存在し、トレンチ南区中央よりやや南で合流して SR31 となる。また、合流部分のやや南で、杭列を伴う流路も検出した。この杭列がある箇所が微高地になっており、一段低くなる杭列北側および西側で南支流と合流している。杭列は、トレンチ南区中央付近でも検出しており、北区と南区の境付近においても SR31 内で杭を 1 本検出している。

旧流路からは石器、縄文土器、土師器、須恵器、埴輪、瓦などが出土している。このうち、石器や縄文土器については数が少ないため、旧流路の時期を判定できるものではないと考えられる。そのほかの遺物から、古墳時代から奈良時代の旧流路と判断される。

自然木

第Ⅲ層とした黄褐色土層よりも下から、立った状態の木を 2 本検出している。この層は、これまでの調査で無遺物、無遺構とされる層である。時期については決め手がないため、木の自然科学分析によって時期を決める必要がある。

2 遺物

(1) K地区

第71トレンチ

Ⅱ層埋土

1566は土師器皿で、口径13.5cm、残存高2.3cm。口縁部にヨコナデ、体部内外面に指オサエののちナデを施す。

1567は土師器皿で、口径17.0cm、器高2.9cm。口縁部にヨコナデ、体部外面に指オサエののちナデ、内面にナデを施す。

1576は黒色土器A類碗で、底径7.0cm、残存高1.1cm。底部のみ残存しており、底に高台を有する。体部内外面にナデを施す。

Ⅲ層埋土

1570は土師器杯で、口径13.0cm、器高2.55cm。口縁部にヨコナデ、外面にナデ、内面にナデの後、放射線状および連弧文状の暗文を施す。

1571は土師器杯で、口径13.0cm、残存高3.3cm。口縁部にヨコナデ、外面にナデ、内面にナデの後、放射線状の暗文を施す。

耕作溝

1565は土師器蓋で、つまみ径4.0cm、残存高3.5cm、つまみ部のみ残存している。

1568は土師器杯で、口径12.0cm、残存高4.35cm。口縁部にヨコナデ、体部外面に指オサエ、内面にはナデの後、放射線状の暗文を施す。

1569は土師器杯で、口径14.0cm、残存高3.4cm。口縁部にヨコナデ、体部外面に指オサエの後ナデ、内面にはナデの後、放射線状の暗文を施す。

1572は土師器杯で、口径15.1cm、底径9.0cm、器高3.3cm。底に高台を有する。口縁部にヨコナデ、体部内外面にナデを施す。

1573は土師器碗で、底径7.0cm、残存高2.15cm。底部のみ残存しており、底に高台を有する。内外面にナデを施す。

1578は土師器壺で、口径18.1cm、残存高6.6cm、口縁部は外反する。口縁部にヨコナデ、体部外面にヨコハケおよびナメハケ、体部内面に指オサエおよびナデを施す。

1577は黒色土器A類碗で口径10.0cm、底径3.4cm、残存高2.1cm。底に高台を貼り付け、口縁部にヨコナデ、体部外面にナデ、内面にナデの後ヨコミガキを施す。

1579は黒色土器A類碗で、口径26.0cm、残存高7.8cm。口縁部にヨコナデ、体部内外面にナデののちヨコミガキを施す。

1575は瓦器碗で、底径4.2cm、残存高1.15cm、底部のみ残存している。底に高台を貼り付け、体部外面に指オサエおよびナデ、内面にミガキを施す。

1574は須恵器杯身で、耕作溝埋土から出土した。残存率80%、口径10.5cm、器高が3.7cmである。端部は丸く仕上げられ、口縁部は湾曲しながら上方へ伸び、底部には時計回りの回転ヘラケズリが施されている。全体的に作りが粗雑であることから、TK48型式のものと考えられる。しかし、回転ヘラケズリが時計回りであることを鑑みると、TK48型式としてはやや特殊と言える。あるいは、TK10型式前後に比定される短頸壺蓋の可能性もある。

SP79・80

1586 は土師器皿で、口径 15.0 cm、器高 2.0 cm。口縁部にヨコナデ、体部内外面にナデを施す。

SX26

1582 は土師器皿で、口径 13.5 cm、器高 2.6 cm、残存率 12%。口縁部にヨコナデ、体部外面に指オサエののちナデ、内面にナデを施す。

1591 は黒色土器A類碗で、底径 6.6 cm、残存高 0.7 cm。底部のみ残存しており、高台を有する。外面にナデを施しているが、内面の調整は不明である。

SX27

1589 は土師器甕で、口径 28.8 cm、残存高 4.4 cm、口縁部は外反する。口縁部にヨコナデ、口縁部内面にヨコハケ、胴部内外面にナデを施す。

SX28

1581 は土師器皿で、口径 14.0 cm、残存高 2.1 cm。口縁部にヨコナデ、体部外面に指オサエおよびナデ、体部内面にナデを施す。

1584 は土師器杯で、口径 14.0 cm、残存高 2.65 cm。口縁部にヨコナデ、体部外面に指オサエおよびナデ、内面にはナデの後、放射線状の暗文を施す。

SX29

1580 は土師器皿で、口径 9.3 cm、器高 1.4 cm。口縁部にヨコナデ、体部外面に指オサエの後ナデ、内面にナデを施す。

SX30

1594 は瓦器碗で、口径 14.1 cm、底径 4.8 cm、残存高 5.2 cm。底に高台を貼り付ける。口縁部にヨコナデ、体部外面に指オサエおよびナデの後ヨコミガキ、内面に圏線状ミガキ、見込みにナデの後、連弧状の暗文ミガキを施す。

SX31

1583、1585、1587、1588、1590 は土師器、1596、1597、1599、1600 は須恵器、1593 は黒色土器である。

1583 は土師器皿で、口径 15.5 cm、残存高 2.6 cm。口縁部にヨコナデ、体部外面に指オサエ、内面にナデを施す。

1585 土師器皿で、口径 16.0 cm、残存高 1.9 cm。口縁部は「て」字状を呈する。口縁部にヨコナデ、体部内外面にナデを施す。

1587 は土師器皿で、口径 20.7 cm、底径 7.8 cm、器高 3.3 cm。口縁端部は肥厚し、底に高台を有する。口縁部にヨコナデ、体部外面にナデ、内面にはナデの後、二段放射線状の暗文を施す。

1588 は土師器甕で、口径 22.7 cm、残存高 5.4 cm。口縁部は外反し、端部が肥厚する。口縁部にヨコナデ、胴部内外面にナデを施す。

1590 は土師器盤で、口径 30.6 cm、残存高 3.4 cm。口縁部にヨコナデ、体部外面に指オサエおよびナデの後、格子状のミガキ、体部内面にナデを施す。

1592 は黒色土器A類碗で、底部のみ残存しており、底径 6.6 cm、残存高 1.7 cm。底に高台を貼り付け、内外面にナデを施す。

1593 は黒色土器A類碗で、口径 13.8 cm、残存高 3.8 cm。口縁部にヨコナデ、外面

に指オサエおよびナデ、内面にミガキを施す。

1596は杯身で、残存率15%、復元口径12.2cm、器高3.9cmである。立ち上がりはやや短く、内傾しながら伸び、端部は丸い。底部には反時計回りの回転ヘラケズリを施しており、受部は非常に鈍く、やや外上方へ短く伸びる。MT85型式にあたると思われる。

1599は無蓋高杯で、杯部の大部分を欠損している。残存率40%、底径7.6cm、残存高3.9cmである。底部には時計回りの回転ヘラケズリを施し、内面をロクロナデで調整しているが、輪積み痕が残っている。脚部は非常に短く、円形の透かし孔を3方向に設け、端部はほぼ水平に作られている。ヨコナデで調整されているが、杯部と接着する際、外面にヨコナデ、内面には不定方向のナデを施す。古墳時代末期のものと思われる。

1597は小壺で、頸部以上を欠損している。残存率60%、底径3.8cm、残存高6.3cmである。肩部はやや張っているが、丸みを帯びている。底部の両面は無調整で、その他はヨコナデで調整されている。また、底面には糸切り痕が残っている。

1600は壺で、口縁部のみ残存している。残存率10%、復元口径30.1cm、残存高9.6cmである。端部は外上方へ弱く屈曲する。口縁部に3条の沈線を施し、その間に櫛状工具で左下がりのキザミを入れている。キザミの上半分にノコギリ刃状の細かい凹凸が見られるため、櫛状工具を鋭角に押し当て、手をやや寝かせて工具を引き抜くことで施紋したと考えられる。

SX32

1595は須恵器杯蓋で、残存率30%、復元口径13.1cm、残存高3.8cmである。端部は内に傾斜し、平らで鋭い印象を受ける。稜はやや鋭く、非常に突出して段を成している。天井部全面に時計回りの回転ヘラケズリが施されており、非常に丁寧な作りをしている。OX46~TK208型式のものと考えられる。

SX33

1602は土師器甕で、口径21.8cm、残存高5.1cm。口縁部は外反し、端部が肥厚する。口縁部にヨコナデ、胴部外面にナデ、胴部内面に指オサエの後ナデを施す。

1598は黒色土器A類碗で、底径6.4cm、残存高2.0cm。底部のみ残存しており、高台を有する。外面にナデ、内面にミガキを施す。

SX34

1603は土師器羽釜で、口径24.8cm、器高22.4cm。口縁部は外反し、胴部に鏝を貼り付ける。杵として使用するために、底部が打ち插かれている。口縁部にヨコナデ、体部内外面にナデを施す。また、煤が付着している。

SX36

1601は土師器皿で、口径20.2cm、残存高2.8cm。口縁部にヨコナデ、体部外面にナデ、内面にナデの後、放射線状の暗文を施す。

SE77

1604は土師器皿で、口径11.8cm、器高2.2cm、口縁部は「て」字状を呈する。口縁部にヨコナデ、体部内外面に指オサエの後ナデを施す。焼成後、底部に円孔が穿たれている。また、煤が付着している。

1605 は土師器皿で、口径 14.2 cm、残存高 2.1 cm、北半第 3 層から出土した。口縁部が「て」字状を呈し、口縁部にヨコナデ、体部外面に指オサエ、体部内面にナデを施す。

1606 は土師器杯で、南半最下層から出土した。口径 13.2 cm、器高 3.5 cm、口縁部にヨコナデ、体部内外面にナデを施す。

1607 は黒色土器 A 類碗で、北半第 4 - 6 層から出土した。口径 16.4 cm、残存高 4.0 cm、口縁部にヨコナデ、体部外面にナデ、内面にミガキを施す。

1608 は黒色土器 A 類碗で、井戸枠内埋土に包含されていた。底径 6.4 cm、残存高 2.0 cm、底部のみ残存しており、高台を有する。外面にナデ、内面にミガキを施す。

1610 は木製の井戸枠材で、縦板として使用されていた。残存長 25.0 cm、最大幅 18.4 cm、最大厚 2.8 cm である。上半は欠損していると考えられる。

1609 は木製の井戸枠材で、横板として使用されていた。残存長 24.0 cm であり、断面は楕円形を呈する。半分以上欠損していると考えられる。

1611 は木製の井戸枠材で、縦板として使用されていた。残存長 25.9 cm、最大幅 7.4 cm、最大厚 1.55 cm である。横方向の断面は弧を描いており、側面の一部は加工当時の姿をとどめていると考えられる。

1612 は木製の井戸枠材で、縦板として使用されていた。残存長 30.8 cm、最大幅 16.8 cm、最大厚 2.7 cm である。縦方向および横方向の断面は弧を描いているが大部分が欠損していると考えられる。

1613 は木製の井戸枠材で、縦板として使用されていた。残存長 25.7 cm、最大幅 10.1 cm、最大厚 3.9 cm である。縦方向の断面は弧を描いており、側面の一部は加工当時の姿をとどめていると考えられる。

1614 は木製の井戸枠材で、縦板として使用されていた。残存長 26.9 cm、最大幅 17.2 cm、最大厚 3.9 cm である。横方向および縦方向の断面は弧を描いているが、加工面は残存していないと考えられる。

1615 は木製の井戸枠材で、北東の隅柱として使用されていた。角柱状を呈していたと考えられるが、2 つに破損しておりその詳しい様相は不明である。残存長 36.6 cm で先端は U 字状の加工を施している。2 面は、加工によって成形されたと考えられる平らな面が確認できる。

1618 は木製の井戸枠材で、北西の隅柱として使用されていた。2 面は角柱状を呈していたと考えられるが、他の面はやや丸みを帯びている。残存長 40.9 cm で先端は U 字状の加工を施しているが、片側の先端は欠損している。2 面は、加工によって成形されたと考えられる平らな面が確認でき、他の面は自然木のまま成形をしておらず丸みを帯びている。U 字状の加工を施した反対の面は、4 回もしくは 5 回の斧状の工具で切り取られた痕跡が確認できる。

1616 は木製の井戸枠材で、南東の隅柱として使用されていた。角柱状を呈していたと考えられるが、1 つの面はえぐれるように欠損している。残存長 35.8 cm で先端は U 字状の加工を施している。3 面は、加工によって成形されたと考えられる平らな面が確認できる。

1617 は木製の井戸枠材で、南西の隅柱として使用されていた。角柱状を呈していた

と考えられるが、1つの面はえぐれるように欠損している。残存長 40.3cm で先端はU字状の加工を施している。2面は、加工によって成形されたと考えられる平らな面が確認できる。

SD108

1621は土師器皿で、口径 9.3 cm、器高 1.2 cm。口縁部は「て」字状を呈する。口縁部にヨコナデ、体部外面に指オサエの後ナデ、内面にナデを施す。

1622は土師器皿で、口径 8.9 cm、器高 1.4 cm。口縁部は「て」字状を呈する。口縁部にヨコナデ、体部内外面にナデを施す。

SD109

1626は土師器皿で、口径 18.8 cm、器高 3.5 cm、口縁端部が肥厚する。口縁部にヨコナデ、体部外面にケズリ、底部外面に指オサエおよびナデ、内面にはナデの後、放射線状および連弧状の暗文を施す。また、底面に格了状の線刻がある。

1628は土師器皿で、口径 17.6 cm、残存高 2.0 cm、口縁部にヨコナデ、体部内外面にナデを施す。

1623は土師器杯で、口径 9.6 cm、器高 2.4 cm、口縁部にヨコナデ、体部内外面にナデを施す。

1624は土師器碗で、口径 9.6 cm、器高 4.15 cm。口縁部にヨコナデ、体部外面に指オサエののちナデ、内面に指オサエの後ナデを施す。

1619は須恵器杯身である。残存率 30%、復元口径 15.6 cm、器高 4.1 cm、高台が付されている。口縁部は外傾して直線的に伸び、端部は丸く仕上げられている。高台は短く、外方へ踏ん張り、全体をヨコナデで調整している。全体的に作りが甘く、粗雑である。奈良時代のもと考えられる。

1620は須恵器壺である。底部のみ残存しており、残存率は 20%、底径 8.4 cm、残存高が 5.1 cm である。やや長い高台が付され、外方へ伸び、端部外側へ尖っている。底部は反時計回りの回転ヘラケズリ、高台と内面はヨコナデで調整され、底部内面は未調整である。TK217~TK48 型式のもので推定される。

SD110

1627は土師器杯で、口径 14.8 cm、器高 2.8 cm。口縁部にヨコナデ、体部内外面にナデを施す。また、底面に木葉文状の線刻がある。

SR31

1625、1629、1630、1636~1639は土師器、1631~1635は須恵器である。

1625は土師器碗で、口径 16.0 cm、器高 4.8 cm。口縁部にヨコナデ、体部外面に指オサエおよびナデ、内面にナデを施す。

1630は土師器甕で、口径 18.6 cm、残存高 5.5 cm。口縁部は外反し、端部が肥厚する。口縁部にヨコナデ、胴部外面にタテハケ、胴部内面に指オサエおよびナデを施す。

1629は土師器高杯で、脚部のみ残存しており、残存高 5.8 cm。外面にナデ、内面に指オサエを施す。また、内面にはしぼり痕が残る。

1637は土師器碗で、口径 19.8 cm、器高 5.0 cm。口縁端部が肥厚し、口縁部にヨコナデ、体部外面に指オサエおよびナデの後ヨコミガキ、体部内面にナデを施す。

1636は土師器甕で、口径 13.1 cm、残存高 10.8 cm。口縁部が外反し、体部は球形を

呈する。口縁部にヨコナデ、胴部外面にタテハケおよびヨコハケ、内面に指オサエおよびナデを施す。

1638 は土師器長胴甕で、口径 21.8 cm、残存高 22.3 cm、口縁部は外反する。口縁部にヨコナデ、口縁部内面にヨコハケ、胴部外面にタテハケ、胴部内面に指オサエの後ナデを施す。

1639 は土師器長胴甕で、口径 24.4 cm、残存高 31.0 cm、口縁部は外反する。口縁部にヨコナデ、胴部外面にタテハケ、胴部内面に板ナデ、下半のみ指オサエの後ナデを施す。

1631 は杯蓋で、下層から出土した。残存率 70%、口径 11.3 cm、器高 4.1 cm、宝珠つまみは付されていない。端部は丸く収められ、口縁部と体部が一体のものとなり、両者の境界は不明瞭である。フォルムは丸みを帯びているが、やや扁平である。底部は回転ヘラケズリ、底部内面は一定方向のナデ、他はヨコナデで調整されている。全体的に作りが粗雑で、焼成も甘く焼きムラができています。TK217 型式前後のものであろう。

1632 は杯蓋で、下層から出土した。残存率 80%、復元口径 10.1 cm、器高 4.2 cm、宝珠つまみは付されていない。端部は丸く収められ、口縁部と体部の境界は不明瞭であるが弱く屈曲し、やや丸みを帯びている。底部は反時計回りの回転ヘラケズリ、底部内面はロクロナデ、他はヨコナデで調整されている。全体的に作りが粗雑で、焼成も甘く焼きムラができていますことから、TK217 型式前後のものと考えられる。

1633 は杯身で、旧河道埋土下層から出土した。残存率 10%で、復元口径 11.0 cm、残存高が 3.8 cm である。立ち上がりはわずかに内傾しながら伸び、端部には浅い沈線が施されている。底部には時計回りの回転ヘラケズリを施しており、受部はやや長く、ほぼ水平に伸び、鋭い。TK47 型式と考えられる。

1634 は杯身で、下層から出土した。残存率 10%、復元口径 15.8 cm、器高 3.3 cm で、高台が付されている。口縁部は外傾し、直線的に伸びる。端部はやや鋭いが、丸く仕上げられている。高台は短く、外方へ踏ん張り、全体をヨコナデで調整している。TK48 型式のものと考えられる。

1635 は大甕で、下層から出土した。胴部以下を欠損しており、残存率は 10%、復元口径 25.1 cm、残存高 10.8 cm である。端部はやや鋭く、口縁部に段を持っている。頸部は非常に短く、外上方へほぼ直線的に伸びる。外面は平行叩き日文の叩き板で調整後、部分的にカキ目を施し、内面には同心円文の当て具痕が残っている。TK43 型式前後のものとして推定される。

南支流

1640～1646 は土師器、1647 は土製品である。

1640 は土師器皿で、口径 9.7 cm、器高 1.5 cm。口縁部にヨコナデ、体部外面に指オサエ、内面にナデを施す。

1641 は土師器皿で、体部のみ残存しており、残存高 0.7 cm。外面にナデ、内面にナデの後、放射線状および連弧文状の暗文を施す。

1642 は土師器皿で、口径 18.8 cm、残存高 2.7 cm。口縁部にヨコナデ、外面にナデ、内面にはナデの後、放射線状の暗文を施す。

1643 は土師器皿で、口径 22.7 cm、器高 2.9 cm、口縁端部が肥厚する。口縁部にヨコナデ、内外面にナデ、内面ナデの後、放射線状の暗文を施す。

1644 は土師器甕で、口径 20.0 cm、残存高 6.4 cm、口縁部は外反する。口縁部にヨコナデ、胴部内外面にナデを施す。

1645 は土師器甕で、体部のみ残存しており、残存高は 12.5 cm である。胴部外面にタテハケおよびナメハケ、胴部内面に指オサエの後ナデを施す。

1646 は土師器甕で、口径 20.0 cm、残存高 6.4 cm、口縁端部を欠損している。口縁部は外反し、胴部は球形を呈し、把手がとりつく。口縁部にヨコナデ、胴部外面にタテハケおよびナメハケ、胴部内面に指オサエおよびヨコナメハケを施す。

1647 は土鉢である。円筒形を呈し、全長 2.65 cm、最大径 0.8 cm、中央に穿たれた孔は円形で直径約 0.3 cm である。

素掘溝

1648～1651 は須恵器である。

1648 は杯蓋で、残存率 20%、復元口径 13.7 cm、残存高 3.6 cm である。端部は内に傾斜して平らで、稜より外側へ突出している。稜はやや鋭く、突出して段を成している。犬井部には反時計回りの回転ヘラケズリが施されている。TK23 型式のものと考えられる。

1649 は杯身で、残存率 40%、復元口径 9.8 cm、残存高 4.4 cm である。立ち上がりはわずかに内傾しながら伸び、端部には浅い沈線が施されるが、非常に鈍い印象を受ける。底部には反時計回りの回転ヘラケズリを施しており、受部はやや長く、ほぼ水平に伸び、鋭い。MT15 型式と考えられる。

1650 は杯身で、残存率 50%、復元口径 9.6 cm、器高 3.4 cm である。立ち上がりは非常に短く、内傾しながら伸び、端部は丸く仕上げられている。底部外面にはわずかに回転ヘラケズリが施される。内面はナデ、他はヨコナデで調整されている。立ち上がりが短く、かなり小型であることから、TK217 型式のものと考えられる。

1651 は杯身で、残存率 30%、復元口径 14 cm、器高 3.6 cm で、高台が付されている。口縁部は外傾し、端部は丸く仕上げられている。高台は短く、外方へ踏ん張り、脚端面は水平である。体部はヨコナデ、底部はナデで調整している。TK48～MT21 型式のものと考えられる。

その他の遺構

1655 は土師器長胴甕で、攪乱 A-2 から出土した。胴部のみ残存しており、残存高 20.0 cm。胴部外面にタテハケおよびヨコハケ、胴部内面に指オサエの後ナデを施す。

1656 は土師器長胴甕で、攪乱 A-2 から出土した。口径 21.6 cm、残存高 31.0 cm、口縁部は外反する。口縁部にヨコナデ、胴部外面にタテハケ、胴部内面に指オサエの後ヨコハケを施す。

1653 は黒色土器 A 類碗で、西側側溝から出土した。底径 6.6 cm、残存高 1.8 cm、底部のみ残存しており、底に高台を有する。外面にナデ、内面にミガキを施す。

1654 は須恵器壺で、北半犬走り攪乱から出土した。胴部の大部分を欠損しており、残存率は 15%、復元口径 20.2 cm、器高 8.7 cm である。口縁端部に段を持つが、非常に鈍い印象を受ける。頸部は非常に短く、文様帯は施していない。外面は格子風叩き

目文の叩き板で調整され、内面は同心円文の当て具痕を残している。

1652 は須恵器提瓶で、側溝掘削中に出土した。胴部を欠損している。残存率 10%、復元口径 10.1 cm、残存高 5.1 cm である。口端部は非常に鋭い稜を上下に設け、内面の端部近くに浅い沈線を施している。頸部は非常に短く、漏斗状を成すが、あまりくびれていない。外面は全てヨコナデで調整されている。MT15 型式前後の、提瓶初源期のもものと推定される。

第11章 主な遺構・遺物の詳細

1 下田東1号墳

第1次調査において、第5トレンチで前方部端を検出した。これを受けて第6、第9トレンチに囲まれた範囲 500.0 m²を拡張し、ほぼ全形を確認した。ただし、調査区外に出る周濠の前方部、後円部の一部は未調査である。

(1) 遺構

当古墳は、基底部での規模が後円部直径約 16.0m、前方部幅約 10.0m、前方部長約 5.0mで、墳丘部全長は 21.0mとなる帆立貝型の前方後円墳である。墳丘の周囲には幅 3.5m～5.0m、残存深度 0.6m～0.8mの周濠が巡る。残存状況は極めて悪く、墳丘の盛土や埋葬施設(主体部)は後世の開墾などによって大規模に削平されていた。したがって、基盤層(第V層)を削り出して造られた墳丘基底部および周濠の下半部が辛うじて遺存している状況であった。墳丘が削平された時期は、後円部の墳丘部上で検出された幅 0.15m～0.9m、深さ 0.1m～0.4mの溝から9世紀頃に比定される完形の土師器皿、碗が複数出土したことから、平安時代前期と考えられる。この溝は後円部背後の周濠上に延伸して渡り堤付近で調査区外へ抜けており、あたかも後円部に沿って構築されているようにみえる。このことから、この溝が開削された時期には墳丘の盛土が一部残っていた可能性がある。また、遺物の中には一辺約 0.1m、厚さ 0.03mの凝灰岩切片が1点みられるが後世の混入品である可能性が高く、盛土の外装化粧などは施されていないと考えられる。

周濠埋土は、上から暗褐色粘質土、鈍い黄褐色砂粒混じりシルト、褐灰色シルトの3層に分かれる。最下層を中心に自然木や枝葉、実などの植物遺体が多量に堆積していた。上層から中層にかけては埴輪片や須恵器が多数含まれており、後世の墳丘破壊時に崩落、埋没したと考えられる。中層から出土する埴輪片は大片であり、その場で押し潰されたような破損状況を示す円筒埴輪もみられた。一方、上層に含まれる埴輪片は小片が中心であった。後円部北東の周濠内には、基盤層の削り出しによって幅約 1.7m～2.0mの渡り堤が造られており、濠底部からの高さは 0.25m～0.4mである。この渡り堤付近で長径約 1.5m、短径約 1.0m、深さ約 0.15mの上坑が検出され、土師器の長胴甕が横に寝かした状態で埋設されていた。

(2) 遺物

遺物の多くは周濠内部から出土している。取上げは、周濠をⅠ区(西側)、Ⅱ区(南側)、Ⅲ区(東側)、Ⅳ区(北側)の4分割して行った。

①埴輪

円筒埴輪

川西宏幸編年V期に属するもので、底部調整、突帯貼付けにおける断続ナデ技法、須恵質埴輪の存在から奈良県、菅原東遺跡の埴輪窯で製作された可能性が指摘できる。

1657は周濠Ⅰ区から出土した。3条4段が完存しており、口径28.2cm、器高42.0cm、底径21.7cm、最大器壁1.4cmである。粘土紐を輪積み成形し、口縁部はラッパ状に開く。外面に右下がりの粗いナナメハケを施すが、基部から2段目は所々ナデによって消され、内面には斜め方向のナデが見られる。その後、外面には基部から12.0cm、19.0cm、27.0cm、36.0cmの位置に幅1.5cm、高さ0.4cmの突帯が付される。突帯断面は低い台形を呈し、上面はナデによってやや内湾している。2段目と3段目の、対向する位置に最大径6.9cmの円形透かし孔が穿たれ、4段目に波形の線刻記号が施される。胎土は密で明褐色を呈し、焼成は良好である。

1658は周濠Ⅰ区から出土した。基底部を欠損しており、3条4段分が残存している。口径26.5cm、残存高34.0cm、器壁は最大1.4cmである。粘土紐を輪積み成形し、口縁部は窄まり気味であるが、ラッパ状に開く。外面に右下がりの粗いナナメハケを施しているが、基部と2段目ではナデによってハケ目が消されている。内面には斜め方向のナデを施している。その後、外面には基部側から5.0cm、11.3cm、19.3cmの位置に幅1.0cm、高さ0.6cmの突帯が付される。突帯断面は低い台形を呈し、上面はナデによってやや内湾している。3段目の対向する位置に、直径6.0cmの円形透かし孔が穿たれている。胎土は密で褐色を呈し、焼成は良好である。

1659は周濠Ⅰ区から出土した。基底部を欠損しており、口径26.3cm、残存高35.3cm、器壁は最大1.4cmである。2条3段分が残存しているが、3条4段に復元することができる。粘土紐を輪積み成形し、口縁部は窄まり気味であるが、ラッパ状に開く。外面に右下がりの粗いナナメハケ、内面に斜め方向のナデを施している。その後、外面には、基部側から8.3cm、17.8cm、20.3cmの位置に幅1.0cm、高さ0.6cmの突帯が付される。突帯断面は低い台形を呈し、上面はナデによってやや内湾している。3段目の対向する位置に、直径6.9cmの円形透かし孔が穿たれ、4段目に半月状の線刻記号が施される。胎土は密で明褐色を呈し、焼成は良好である。

1660は周濠Ⅱ区から出土した。基底部を欠損しており、口径25.3cm、31.0cm、器壁は最大1.2cmである。2条3段分が残存しているが、3段4条に復元することができる。粘土紐を輪積み成形し、口縁部はラッパ状に開く。外面に右下がりの粗いナナメハケ、内面に斜め方向のナデを施している。その後、外面の基部側から5.5cm、15.5cm、26.5cmの位置に幅1.5cm、高さ0.6cmの突帯が付される。突帯断面は低い台形を呈し、上面は平坦である。3段目の対向する位置に、直径7.2cmの円形透かし孔が穿たれている。胎土は密で明褐色を呈し、焼成は良好である。

1661は周濠Ⅳ区から出土したもので、基底部を欠損しており、口径28.5cm、残存高21.0cm、器壁は最大1.2cmである。2条3段分が残存しているが、3条4段に復元される。粘土紐を輪積み成形し、口縁部は窄まり気味であるが、ラッパ状に開く。外面に右下がりの粗いナナメハケを施しているが、所々にヘラズリが散見され、内面には斜め方向のナデを施している。その後、外面の基部側から0.5cm、7.5cm、16.5cmの位置に幅1.0cm、高さ0.6cmの突帯が付される。突帯断面は低い台形を呈し、上面はナデによってやや内湾している。3段目の対向する位置に直径6.5cmの円形透かし孔を穿ち、4段目に波状の線刻記号を施す。胎土は密で褐色を呈し、焼成は良好である。

1662は周濠Ⅱ区から出土した。基底部に欠損しており、口径26.3cm、残存高25.0cm、器壁1.4cmである。2条3段分が残存しているが、3条4段に復元される。粘土紐を積み上げて成形されており、口縁部はラップ状に開く。外面に右下がりの粗いナメハケを施しているが、所々にヘラケズリが散見される。内面には斜め方向のナデを施している。その後、外面には基部から4.5cm、11.5cm、19.0cmの位置に幅1.0cm、高さ0.6cmの突帯が付される。突帯断面は低い台形を呈し、上面はナデによってやや内湾している。また、2段目と3段目に直径6.0cmの円形透かし孔が、対向する位置で穿たれ、4段目に「×」状の線刻記号が存在する。胎土は密で褐色を呈し、焼成は良好である。

1663は周濠Ⅲ区から出土した。3条4段で完存しており、口径22.3cm、残存高40.2cm、底径14.3cm、最大器壁1.3cmである。粘土紐を輪積み成形し、口縁部は窄まり気味であるが、ラップ状に開く。外面全体にタテハケ、内面にタテ方向のナデを施している。その後、外面には基部から10.0cm、18.3cm、25.3cm、33.3cmの位置に幅1.0cm、高さ0.6cmの突帯が付される。突帯断面は低い台形を呈し、上面はナデによって内湾している。2段目と3段目の、対向する位置に直径5.7cmの円形透かし孔が穿たれている。胎土は密で褐色を呈し、焼成は良好である。

1664は周濠Ⅳ区から出土した。3条4段で完存しており、口径26.5cm、残存高41.3cm、底径17.7cm、最大器壁1.5cmである。粘土紐を輪積み成形し、口縁部は窄まり気味であるが、ラップ状に開く。外面に右下がりの粗いナメハケを施しているが、基部はナデによって消され、内面には斜め方向のナデを施す。その後、外面の基部から9.2cm、16.2cm、25.2cm、34.2cmの位置に幅1.0cm、高さ0.6cmの突帯が付される。突帯断面は低い台形を呈し、上面は平坦ながらやや高さを保っている。2段目と3段目の対向する位置に直径6.9cmの円形透かし孔が穿たれ、4段目に弧状の線刻記号が施される。胎土は密で褐色を呈し、焼成は良好である。

盾形埴輪

1665は盾面上端部分の破片で、周濠Ⅱ区から出土した。幅9.0cm、高さ8.0cm、最大厚1.4cmである。粘土板による成形で、器面は内外面ともにナデで調整され、縁に沿って線刻が1条施される。胎土は密で褐色を呈し、焼成は良好である。

1666は盾面上端部分の破片で、周濠Ⅲ区から出土した。幅11.3cm、高さ10.2cm、最大厚1.5cmである。粘土板による成形で、器面は内外面ともにナデで調整され、縁に沿って線刻が1条施される。胎土は密で褐色を呈し、焼成は良好である。

1667は盾面上端部分の破片で、周濠Ⅲ区から出土した。幅10.2cm、高さ13.6cm、最大厚1.5cmである。粘土板による成形で、器面は内外面ともにナデで調整され、縁に沿って線刻が1条施される。胎土は密で褐色を呈し、焼成は良好である。

1668は盾面上端部分の破片で、周濠Ⅲ区から出土した。幅7.0cm、高さ2.0cm、厚さ1.1cmである。粘土板による成形で、器面は内外面ともにナデで調整され、縁に沿って線刻が1条施される。胎土は密で褐色を呈し、焼成は良好である。

1669は盾面上端部分の破片で、周濠Ⅳ区から出土した。幅12.0cm、高さ7.5cm、最大厚1.3cmである。粘土板による成形で、器面は内外面ともにナデで調整され、縁に沿って線刻が1条施される。胎土は密で褐色を呈し、焼成は良好である。

蓋形埴輪

1670は笠部の一部で周濠Ⅰ区から出土した。笠部残存復元径32.5cm、高さ8.2cm、厚さ1.6cmである。粘土板による成形で、器面は内外面ともにナデで調整される。胎土は密で褐色を呈し、焼成は良好である。

1671は笠部縁の破片で周濠Ⅰ区から出土した。残存長辺10.0cm、残存短辺3.0cm、厚さ1.5cmである。器面は、外面にハケを施した後、端部を一定方向のナデで調整し、内面にはナデを施す。胎土は密で褐色を呈し、焼成は良好である。

1672は飾り部分の破片で、周濠Ⅱ区から出土した。幅5.0cm、高さ5.5cm、最大厚1.2cmである。粘土板による成形で、器面は内外面ともにナデで調整され、縁に沿って線刻が1条施される。胎土は密で褐色を呈し、焼成は良好である。

1673は飾り部分の破片で、周濠Ⅲ区から出土した。幅5.3cm、高さ6.2cm、最大厚1.4cmである。粘土板による成形で、器面は内外面ともにナデで調整され、縁に沿って線刻が1条施される。胎土は密で褐色を呈し、焼成は良好である。

1674は飾り部分の破片で、周濠Ⅳ区から出土した。幅6.6cm、高さ8.5cm、最大厚1.8cmである。粘土板による成形で、縁に沿って線刻が1条施される。器面は内外面ともにナデで調整されている。胎土は密で褐色を呈し、焼成は良好である。

家形埴輪

1675は入母屋造りの切妻屋根部分で、周濠Ⅱ区とⅢ区から出土した。屋根部分の高さ33.0cm、上端幅57.0cm、下端幅30.0cm、奥行き17.0cm。破風部分は高さ49.0cm、厚さ2.0cm、下端幅33.0cmである。破風のついた屋根両端と中央部分の破片を確認している。屋根部分、破風部分ともに粘土板成形であり、屋根部分の両端で破風部分が接合される。屋根部分外面はナデの後にヨコハケを施し、内面はナデで調整されている。外面のヨコハケは、屋根に葺かれた茅を表現していると思われる。破風部分外面は逆U字形の形状に沿ってナデを施すが、一部でハケによる同一方向の2次調整が見られる。屋根部分はヨコハケに粗密の差が大きく、2個体である可能性が高い。胎土は密で褐色を呈し、焼成は良好である。

鶏形埴輪

1677は雄の鶏形埴輪で、周濠Ⅱ区から出土した。頭部の高さ5.0cm、幅6.0cm、厚さ4.0cm、鶏冠は高さ、幅ともに1.0cm、耳朶は径約2.0cmである。頭部の核となるのは粘土球で、これを粘土板で挟み込み、ナデで成形している。鶏冠は、粘土板の縁端部にヘラ状工具で鋸歯状に切り込みを入れて表現されている。耳朶は、環状にした小粘土紐を側頭部に貼り付け、眼は工具による円形刺突痕で表現している。鼻先から嘴にかけては、欠損しているため不明である。胎土は密で褐色を呈し、焼成は良好である。

1678は雌の鶏形埴輪で、周濠Ⅱ区から出土した。頭部の高さ8.0cm、幅6.0cm、厚さ5.0cmである。粘土板で頭部の核となる粘土球を挟み込み、ナデで成形している。粘土板縁端部をナデることによって、頭頂から鼻先までを表現する。鼻先を欠損しており、耳と眼は工具による円形刺突痕で表される。後背頭部にはハケ調整が認められるが、頭部以下を欠損しているため不明である。胎土は密で褐色を呈し、焼成は良好である。

馬形埴輪

1676は周濠Ⅰ区から出土した。右側胸繁と右後脚、左側胸繁から左前後脚、尻繁を失っている。復元寸法は全長103.0cm、高さ84.0cmと推定される。頭部寸法は長さ20.0cm、眼孔位置での幅20.0cm、鼻先での幅10.0cmである。眼、鼻、口は穿孔によって表現されており、各寸法は左右眼孔幅5.0cm、高さ1.5cm、鼻孔径0.5cm、口は幅6.0cm、高さ0.2cm、鬣は粘土板による別成形で、長さ30.0cm、高さ10.0cmである。また、尻尾は長さ8.0cmとなっている。裝飾部は、引き手が長30.0cm、幅1.0cm、手綱が長50.0cm、幅1.0cm、f字形鏡板は長さ5.0cm、幅3.0cm。鞍校前輪、後輪ともに幅20.0cm、高さ10.0cm、厚さ1.0cm、居木は長さ、幅ともに20.0cm。輪鍔は長さ20.0cm、幅8.0cm×5.0cm、障泥の高さ30.0cm、幅20.0cm、「米」字形革紐長40.0cm×30.0cm、幅2.0cmである。上端幅57.0cm、下端幅30.0cm、奥行き17.0cmである。

粘土板を円筒状に成形した脚部に、胸部となる粘土板、鞍校、障泥、頸部、鬣を貼り付ける、さらに、別に作成された円筒状の頭部が接合されている。また、前後両脚、尻繁には直径3.0cmの円孔が穿たれている。外面全体を一定方向のナデで調整した後、各所に粘土紐を貼り付け、馬具などの裝飾品等を表現する。

頭部は、ヘラ切りによる穿孔で眼および口、刺突による穿孔で鼻孔を表現した後、引き手、手綱、f字形鏡板を貼り付ける。鬣はタテハケによって美しい毛並みが表現されており、その先端には、折り合わせて撚りをかけた粘土紐によって結鬚が表現されていたと考えられる。鞍校は、胴部に貼り付けた三日月状の粘土板をナデ成形した後、一定方向のハケ調整を施して前輪および後輪とする。居木は平行する2条の線刻によって表現され、そこから下垂する輪鍔、障泥も同様に線刻で表現される。ただし、障泥にはタテハケで2次調整が施されている。また、鞍校背後から尻繁にかけて粘土紐貼り付けによって革紐が表されている。これを上から見ると「米」字形に垂れ下がりが、交点となる部分に雲珠が配され、側胴部にはハート形の杏葉が垂下する。尻繁を欠損しているが、1.0cm羽の細い粘土紐を最大径3.0cmの太い粘土紐へ螺旋状に巻き付けた尻尾が残存している。胎土は密で褐色を呈し、焼成は良好である。

人物形埴輪

男子像3体分、女子像2体分を確認している。服飾部分の破片が出土しているものもあり、それ以上の軀体数になる可能性もある。

1679は馬飼形埴輪である。頭部および腕から肩、胴体部までにかけての破片が周濠Ⅱ区から出土した。復元全高68.0cm、左腕は最大径6.0cm、復元長20.0cmである。頭部は長さ16.4cm、眼孔位置での幅13.8cm、鼻先での奥行き18.0cm、側頭部には長さ13.0cm、幅2.4cm、最大厚1.4cmの美豆良が表現されている。眼は幅3.0cm、高さ1.0cm、口は幅3.0cm、高さ0.4cmの穿孔で表現され、鼻は長さ4.0cm、高さ1.8cm、鼻孔径0.5cmである。復元にあたっては、奈良県、管鉾山1号埴例を参考にした。頭部破片は、側頭部に美豆良があり、一定方向のハケメによって頭髪を表現していたと考えられる。眉、髭はヘラによる線刻、眼、鼻孔および口は穿孔により表現しており、鼻は尖るようにして高い。左腕を挙げていることから、馬の手綱を引いていたと考えられる。外面はナデで調整されており、肩から脇にかけて刺痕痕跡がある。首から胸

にかけてはヨコナデで調整されており、側胸部に円形の透かし孔が穿たれている。丁寧なハケメ調整や、穏やかな表情をしている点が上記馬形埴輪と共通しており、同一の作者による製品と考えられる。このことは、馬形埴輪と馬飼形埴輪が一对のものであることを示唆する。胎土は密で褐色を呈し、焼成は良好である。

1680は巫女形埴輪で、頭部および衣装である意須比の一部が周濠Ⅰ区とⅣ区から出土した。全高66.4cm、頭部長20.0cm、眼孔位置での頭部幅10.4cm、鼻先での奥行き10.4cm、左右眼孔高0.9cm、幅2.6cm、鼻は復元長6.5cm、復元高1.0cm、口は幅3.8cm、高さ0.5cmである。頭部は復元長14.0cm、幅9.4cm、最大厚1.6cmの古代島田器で装飾され、意須比は復元最大幅36.4cm、下端幅28.0cm、奥行き22.5cmである。頭部は、眼と口が穿孔、耳と鼻は粘土紐貼り付けによって表現されている。胎土は赤褐色を呈し、白色砂粒を含んでいる。大阪府蕃上山古墳、奈良県勢谷茶白山古墳、鳥土塚古墳出土遺物を参考に全体復元を行った。これらは、頭部に連珠首飾りをかけ、胸部に意須比を織い、胸部上半には褌をかけているという特徴を有する。

1681は武人形埴輪である。頭部に加え、両腕から胴体にかけての破片、胴体部の衣装の一部が周濠Ⅱ区から出土した。弓を持ち、鞍を背負っている。頭部に板ナデを施しているが、額に鉢巻状のものを巻いていたような痕跡があり、冠や冑のような冠物が貼りつけられていたと考えられる。眼と口は穿孔によって表現され、両眼の上下には鰐と考えられる線刻が施されている。また、鼻は孔に近いような深い線刻で表現される。口唇部は上下が分離しているため正確にはわからないが、若干大きめに口を開けていると考えられる。胎土は橙褐色を呈し、白色砂粒を含んでいる。

1682は武人形埴輪で、周濠Ⅱ区から頭部が出土した。美豆良を結び、眼、鼻孔および口は穿孔、眉は線刻で表現される。また、鼻から口元や頬にかけて三日月状の鰐が、へらによる線刻で表されている。この線描の類例は奈良県岩見遺跡、四条古墳でも出土している。胎土は橙褐色を呈し、白色砂粒を含んでいる。

1683は巫女形埴輪で、頭部から肩にかけての部分が周濠Ⅳ区から出土した。頭部はナデによって表現される。臉から頭頂部にかけてを欠損しているため、頭髪の様子は不明である。眼と口は穿孔、鼻孔は刺突文、耳および鼻は粘土紐貼り付けで表現されている。また、首左側を中心にタテハケによる調整を見て取ることができる。胎土は黄味がかかった灰白色を呈し、白色砂粒を含んでいる。

②土師器

周濠埋土から出土した土師器は1704と1705である。

1704は土師器把手付碗で、口径12.2cm、器高10.7cm、周濠Ⅳ区埋土から出土した。口縁部は直立する。口縁部にヨコナデ、体部は外面に指オサエの後タテハケ、内面に指オサエの後ナデ、底部外面には指オサエの後ナデを施す。

1705は土師器甕で、口径13.5cm、残存高14.5cm、周濠Ⅱ区埋土から出土した。口縁部は外反する。口縁部外面にヨコナデ、口縁部内面にヨコハケ、胴部外面にタテハケ、胴部内面に指オサエの後ナデを施す。

③須恵器

下田東1号墳の周濠からは杯蓋、杯身が多数出土しその他高杯蓋、短頸壺、壺などが出土している。その多くが田辺編年のⅡ期にあたる時期のものと考えられ、特にMT15型式の特徴を持ったものを多数確認することができる。

1684は杯蓋で、下田東1号墳周濠Ⅲ区埋土から出土した。残存率60%、口径12.6cm、器高5.2cmである。内に傾斜する端部には浅い沈線を施すが、断面形は平らに近い。稜はやや鋭く、段を成すがあまり突出していない。直下の沈線で稜を表現しているにとどまり、形骸化が始まっていると考えられる。天井部には全体の三分の一ほどの範囲に回転ヘラ削りが施されているが、回転方向は不明である。体部が2.7cmと非常に長いという古い特徴を持つが、端部の形態、稜の形骸化、回転ヘラケズリの範囲を鑑み、TK47型式のものと考えられる。下田東1号墳周濠出土須恵器の中で最古型式と言えるであろう。

1685は杯蓋で、Ⅲ区埋土から出土した。残存率45%、復元口径13.2cm、器高が4.5cmである。端部は浅い沈線を施されているが丸みを帯び、全体的に甘く感じられる。稜はほぼ消滅しており、直下の沈線によって表現される。また、反時計回りの回転ヘラケズリが天井部全体に施される。体部はやや高いが、扁平でやや大型であることから、MT15型式のものと考えられる。

1686は杯蓋で、Ⅲ区埋土から出土した。完形で、口径12.5cm、器高4.7cmである。端部は内側に浅い沈線が施されているが、ほぼ丸く収められている。稜はやや鋭いが形骸化しており、直下の沈線によって表現される。天井部の狭い範囲に反時計回りの回転ヘラケズリが施され、やや小型ではあるがMT15型式のものと考えられる。

1687は杯蓋で、Ⅲ区埋土から出土した。残存率50%で、口径14.2cm、器高は5.6cmである。端部を欠損しているため不確定ではあるが、丸く仕上げられていると考えられる。体部は2.0cm以上とやや長く、わずかに外側へ湾曲している。稜は形骸化が始まっており、非常に鈍く、外側へはほとんど突出しない。天井部には時計回りの回転ヘラケズリが施され、やや丸みを帯びる。全体的に扁平で大型化が始まっており、作りがやや甘くなっていることから、MT15型式のものと考えられる。

1688は杯蓋で、Ⅰ区埋土から出土した。残存率25%、復元口径15cm、器高は4.6cmである。端部は丸く収められ、稜はほぼ消滅しており、明瞭な段を成していない。天井部のやや広範囲に反時計回りの回転ヘラケズリが施される。MT15型式のものと考えられる。

1689は杯蓋で、Ⅰ、Ⅱ区境界埋土から出土した。残存率30%、復元口径15.5cm、残存高4.4cmである。端部はほぼ丸く仕上げられるが、内面に浅い沈線が施されている。稜はほぼ消滅しており、直下に浅い沈線を施すことで表現されている。天井部に回転ヘラケズリが施されているが、回転方向は確認できない。TK10型式のものと考えられる。

1690は杯蓋で、Ⅲ区埋土から出土した。残存率35%、口径13.0cm、残存高3.8cmである。端部は丸く仕上げられ、やや鈍い印象を受ける。稜は完全に失われ、天井部と口縁部の境界で屈曲している。天井部には時計回りの回転ヘラケズリが広範囲に施されている。回転ヘラケズリの範囲が広く、削りの方向が時計回りではあるが、端部の形態や稜が消滅していることから、TK43型式のものと考えられる。

1691 は高杯蓋で、Ⅰ区埋土から出土した。復元口径 15.0 cm で、残存高が 5.2 cm である。端部はやや鋭く、稜は形骸化しており、明瞭な段を成していない。天井部はやや狭い範囲に回転ヘラケズリが施され、つまみの痕跡であろう盛り上がりを確認することができる。MT15 型式のものと考えられる。

1692 は杯身で、Ⅳ区埋土から出土した。残存率 30%、復元口径 11.0 cm、器高 4.3 cm で、全体的に薄く作られている。立ち上がりはやや短く、内傾しながら伸びる。端部は内に傾斜し、断面形はほぼ平らに仕上げられるが、浅い沈線を確認することができる。底部のやや狭い範囲に時計回りの回転ヘラケズリが施され、受部は非常に長く、外上方へ伸び、鋭い。全体的に扁平であるが、端部や受部がシャープであることから TK47～MT15 型式のものと考えられる。

1693 は杯身で、Ⅲ区埋土から出土した。残存率 25% で、復元口径 11.3 cm、残存高 4.8 cm である。立ち上がりはやや短く、内湾しながら伸び、端部には沈線が施され、外側がやや突出している。水平に伸びる受部は非常に長く、丸く収められるがやや鈍い印象を受ける。底部全体の三分の一に及ぶ回転ヘラケズリは反時計回りである。全体的に扁平でやや小型ではあるが、MT15 型式のものと考えられる。

1694 は杯身で、Ⅲ区埋土から出土した。残存率 80%、口径 10.8 cm、器高が 4.6 cm である。立ち上がりは内傾してやや短く伸び、外上方へ屈曲する端部を丸く収めている。底部に施された時計回りの回転ヘラケズリは全体の三分の一に及ぶ。受部はやや鋭く、外上方へやや短く伸びる。小型ではあるが、全体的に扁平であり MT15 型式と考えられる。

1695 は杯身で、Ⅲ区埋土から出土した。残存率 90% で、口径 12.4 cm、器高 5.25 cm である。やや内傾する立ち上がりはやや長く、わずかに内湾しながら伸びる。端部には沈線が施されるが、鈍い印象を受ける。底部には、やや広範囲に反時計回りの回転ヘラケズリが施されている。全体的に扁平ではあるが、やや丸みをおびていて大型であることから MT15 型式のものと考えられる。

1696 は杯身で、Ⅲ区埋土から出土した。残存率 50% で、復元口径 12.4 cm、器高 4.95 cm である。立ち上がりはやや長く、わずかに内傾しながら伸び、端部は丸く仕上げられる。底部には、反時計回りの回転ヘラケズリがやや広範囲にわたって施される。全体的に扁平ではあるが、やや丸みをおびていて大型であることから MT15 型式のものと考えられる。

1697 は完形の杯身で、Ⅳ区埋土から出土した。口径 13.0 cm、器高 5.0 cm である。立ち上がりは短く、やや内傾しながら伸びる。端部は丸く収められており、わずかに垂直方向に屈曲する。底部の狭い範囲に反時計回りの回転ヘラケズリが施され、受部は短く、外上方へ伸び、丸く収められている。大型で全体的に扁平であることから、TK10 型式のものと考えられる。

1698 は杯身で、Ⅳ区埋土から出土した。残存率 90%、口径 12.8 cm、器高 4.8 cm である。短い立ち上がりは非常に内傾しており、わずかに外反しながら伸び、端部は丸く収められている。底部に反時計回りの回転ヘラケズリを施しており、凹線が施される受部は短く、外上方へ伸びる。全体的に扁平であり MT85 型式と考えられる。

1699 は杯身で、Ⅳ区埋土から出土した。ほぼ完形で、口径 12.0 cm、器高 4.4 cm で

ある。やや内傾する立ち上がりは非常に短く、外反しながら伸び、端部は丸く鈍い印象を受ける。底部の狭い範囲に反時計回りの回転ヘラケズリを施しており、受部は短く、外上方へ伸び、丸く仕上げられる。全体的に厚みが一定ではなく粗雑感があることから、MT85 型式にあたると思われる。

1700 は完形の杯身で、Ⅲ区埋土から出土した。口径 12.4 cm、器高 3.8 cm である。著しく内傾する立ち上がりは非常に短く、端部は丸く仕上げられているがやや鋭い。底部には反時計回りの回転ヘラケズリが施される。全体的に扁平で、TK209 型式のものと考えられる。

1701 は短頸壺で、Ⅳ区埋土から出土した。残存率 25%、復元口径 8.6 cm、最大径 13.5 cm、器高 8.7 cm である。口縁部は垂直方向に屈曲する短い口縁を持ち、端部は丸く収められている。胴部の肩は張って屈曲し、底部には時計回りの回転ヘラケズリが施される。底部内面はロクロナデで調整され、胴部および口縁部はヨコナデで調整されている。MT15 型式のものと考えられる。

1702 は壺で、Ⅲ区埋土から出土した。残存率 10%、復元口径 14.4 cm、残存高は 10.4 cm である。端部は上方へやや鋭く尖り、外側へわずかに稜を持つ。頸部はやや短く、外反しながら伸び、胴部の肩はやや張っている。頸部以下にカキ目が施されるが、波状文や突帯などは施されていない。

④石製品

1703 は砥石で、Ⅲ区から出土し、残存長 13.7 cm である。

2 下田東 2 号墳

(1) 遺構

当古墳は、第 7 次調査の第 70 トレンチ北端部において検出した。当初、北から西に屈曲する溝状遺構を検出し、埋土を掘削したところ遺構底部から組合式木棺の底板が出土したため、北および西へトレンチを拡張した。その結果、当該遺構は周濠を含めた全体規模が東西 11.3m、南北 11.5m 以上、一辺約 8.0m の墳丘を有する方墳の周濠であることが判明した。周濠は北側で最も幅が広く 2.7m 以上、木棺が出土した東側は 2.6m、西側は 2.2m、南側で 1.5m～1.9m、深さは 0.45m～0.5m である。墳丘は既に削平されており、主体部の痕跡、副葬品等を確認することはできなかった。

また、周濠を検出した時点では墓坑の掘形および木棺材の抜き取り痕跡は観察されなかった。加えて、木棺出土地点に残したセクション断面においても上記痕跡は観察されず、周濠埋土は木棺が出土した東側、他の三方とも自然堆積によるもので、その時期については差は認められない。これらのことから、少なくとも底板は古墳築造時あるいはそれから間もない時期から濠が埋没するまでの間に、出土地点に存在していたと考えられる。また、出土した底板には側板および蓋板が組み合わされていた痕跡は見受けられない。すなわち、木棺として組み立てられてはならず、底板のみであった可能性が高い。また、木棺底板直下から TK23～TK47 に属すると考えられる須恵器の杯身 2 点と杯蓋 4 点が出土している。これらは原位置を保っているものとみられ、木棺材

と期を同じくして置かれたと思われる。したがって、古墳の築造時期は5世紀後半から6世紀初頭に想定することができる。

周濠の埋没時期については、埋土に黒色土器が僅かではあるが含まれることから、平安時代には完全に埋没していたと考えられるが、主体部の削平時期は不明である。

(2) 遺物

①木棺底板

1714は組合式木棺の底板である。樹種は高野槇で、板目取りの板材を使用している。年輪年代測定およびAMS-14C年代測定を行ったところ、前者では449年、後者では415年(中心値)という結果が得られた。全長約290.0cm、幅は広端部で65.2cm、狭端部で49.0cm、厚さは広端部で10.0cm、狭端部で7.5cmである。側板があたる部分には幅8.7cm～11.1cm、深さ0.6cm～1.0cmの段差を付けており、小口板を落とし込むために削り込まれた小溝部分は広端側が長辺54.5cm、短辺11.6cm～13.0cm、深さ1.8cm～2.0cm、狭端側は長辺40.5cm、短辺9.8cm～11.8cmで深さ0.8cm～1.2cmである。また、短辺の両端に縄掛け突起状の造出しが完全な形で残っており、その長さは広端側のものが18.5cmと20.0cm、厚さはそれぞれ6.5cmと8.4cm、狭端側は長さ17.0cmと18.0cm、厚さ5.3cmと5.6cmである。これらは広端側の1箇所を除き、ほぼ側板がのる延長線上に付けられている。なお、緊結金具の痕跡は認められず、突起部にも縄を掛けた痕跡を確認することはできない。内寸は全長が194.0cm、広端(頭側)幅が45.0cm、狭端(脚側)幅が33.0cmで、長短比は各々1:0.231、1:0.170となる。また、広端幅と狭端幅では1:0.733である。これらを人和高田市三倉堂遺跡出土の各木棺および大阪府土保山古墳1号木棺の内寸比と比較すると、第32表ようになる。構造については、底板以外の部材が出土していないため不明であるが、従来の組合式木棺の中仕切り板を小口板とし、底板のものと対になる突起を持った蓋を組み合わせたと推定される。当木棺に近い作りであったと思われる三倉堂4号木棺は、内寸全長180.0cm、広端幅42.0cm、狭端幅31.0cmで長短比が1:0.233、1:0.172、広端幅と狭端幅では1:0.738となり、今回出土したものと非常に近い数値を示す。両端が腐蝕して失われているために外寸は不明であるが、内寸においては当遺跡出土の底板とほぼ同規模であったと考えられる。また、木棺の内寸高(深さ)は広端部、狭端部とも38.0cmで内寸全長との比率は1:0.211となる。これらをもとに下田東2号墳出土木棺の深さを復元すると、広端側で40.7cm～41.0cm、狭端側で40.4cm～41.0cmという数値を得ることができる。また、三倉堂2、3号木棺および土保山古墳1号棺についても、内寸の寸法比において比較的近い数値を示す。これは、内部空間すなわち遺骸を納めるスペースが木棺全体の規模あるいは構造の差違とは無関係に、ある程度の規格に基づいて設けられたことを示唆するものといえよう。

②土師器

1706は二重口縁壺で、残存高4.9cm、口縁端部を欠損している。口縁部にヨコナデ、胴部内外面にナデを施す。

1707は壺で、口径10.6cm、器高12.0cm、外傾する口縁部は端部が肥厚し、胴部は

球形を呈する。口縁部にヨコナデ、口縁部内面にヨコハケ、胴部外面にタテハケおよびナナメハケ、胴部内面にナデを施す。南周濠中央底部から出土した。

③須恵器

木棺直下から杯身2点、杯蓋4点が出土した。これらの年代はTK23~TK47を示している。大部分に重ね焼き痕を観察することができ、自然釉薬がかかっている。加えて、表面はやや粗い印象を受ける。また、1709の杯蓋と1712の杯身はセットとなり、重ね合わせて焼成されている。

1708は完形の杯蓋で、口径12.0cm、器高4.7cmである。端部から稜までの高さは2.2cmで、全体的にはやや扁平である。端部はやや内傾しているが、断面形はほぼ平らに仕上げられ、やや鋭い印象を受ける。稜は鋭く、やや突出して段を成している。天井部は、広範囲を時計回りの回転ヘラケズリで調整される。TK23型式のものと考えられる。また、焼成がわずかに甘く、自然釉薬が全く付着していないことに加え、色彩も他の5点に比してやや薄く、重ね焼きの痕跡も全く見られない。これらのことから、共存する他の須恵器とは異質なもの感じられる。

1709は完形の杯蓋で、口径11.1cm、器高4.8cm、端部から稜までが1.8cmとやや低く、作りもやや甘い印象を受ける。端部は内に傾斜し、浅い沈線が描かれるが断面形は平らで、やや作りが甘い印象を受ける。稜はやや鋭角で、体部より突出して段を成している。天井部には広範囲に時計回りの回転ヘラケズリが施されている。外面の大部分に自然釉薬がかかっており、端部および天井部には、重ね焼きによる他個体の一部が付着している。小型で、TK23~TK47型式のものと考えられる。1712の杯身の受部に付着する粘土と一致することから、1712と重ね合わせて焼成されたことがわかる。

1710は完形の杯蓋で、口径11.8cm、器高4.4cm、端部から稜まで2.3cmとやや高いが、全体的には扁平である。端部は内に傾斜しているが、ほぼ平らに仕上げられ、浅い沈線が施されている。稜は鈍く、あまり突出していない。天井部の広範囲を回転ヘラケズリで調整するが、回転方向は不明である。また、天井部の大部分に自然釉薬がかかっている。TK23~TK47型式のものと考えられる。

1711は完形の杯蓋で、口径11.4cm、器高4.8cm、端部から稜までの高さは2.2cmである。端部は内に傾斜しているが、やや丸みを帯び、沈線が施される。天井部の広範囲に時計回りの回転ヘラケズリが施され、稜はやや鈍く、あまり突出していないが段を成す。全体的に丸みを帯びた形状を呈する。天井部に重ね焼きによる他個体の一部が付着している。TK23~TK47型式のものと考えられる。

1712はほぼ完形の杯身で、口径は9.6cm、器高4.7cm、端部から受部までは1.7cmで、やや丸みを帯びている。立ち上がりはやや長く、わずかに内傾するが、ほぼ垂直に伸び、端部には深い沈線が施される。底部の広範囲にわたって時計回りの回転ヘラケズリを施しており、水平に伸びる受部はやや短く、鈍い。TK23~TK47型式と考えられる。受部に1709の一部が付着しており、重ね合わせて焼成したと考えられる。

1713は完形の杯身で、口径は10.0cm、器高4.8cm、端部から受部までは1.7cmで、全体的にやや扁平である。立ち上がりは比較的長く、わずかに内傾するが、ほぼ垂直

に伸び、端部には浅い沈線が施される。底部には広範囲に時計回りの回転ヘラケズリを施す。受部はやや長く、ほぼ水平に伸び、やや鋭い。受部に、杯蓋と重ね合わせて焼成した痕跡が残るが、セットになるものは出土していない。かなり小型で、TK23～TK47 型式と考えられる。

(3) まとめ

当木棺底板出土時の、現地の状況をまとめると以下ようになる。

- ・平面観察では木棺設置に伴う掘形を確認することができなかった
- ・木棺材取上前後のセクション断面においても掘形はみえない
- ・平面、断面ともに蓋および側板の抜取り痕跡が認められない
- ・周濠埋土の堆積状況が木棺底板上層と他の三箇所ではほぼ同じであり、同時期に埋没したと考えられる
- ・底板は頭側を北に向け、ほぼ正方位にのっている
- ・木棺直下のみに須恵器の杯身、杯蓋が置かれている
- ・周濠埋土内に黒色土器片が包含される

上記須恵器から、古墳築造および底板が置かれた時期は5世紀後半から末であり、埋土に黒色土器片が含まれることから、周濠は平安時代には完全に埋没したと考えられる。出土状況からは、「少なくとも周濠の埋没が始まる時点では、既に底板のみが存在していた」ということ以外不明であるといわざるを得ない。しかし、底板およびその直下の須恵器は原位置を保っていると思われ、何らかを意図した行為であった可能性は否定できず、5世紀末から6世紀にかけての葬送儀礼についての検討を要する。また、今後、類例が検出されることが期待される。

したがって今回の成果としては、「組立式木棺の底板で縄掛け突起状の装置が残存している」上例は前例がなく、この種の木棺の構造を解明するうえで貴重な資料となること、さらに「木棺直葬墓において、同様の突起の痕跡を意識しながら調査を進める必要性を提示した」ことが挙げられよう。また、当古墳の検出は下田東1号墳の存在と併せ、当事業地北東部一帯が築域として利用されていた可能性を示唆し、下田地域における古墳築造の変遷をたどるうえで有益な資料になり得るであろう。

3 井戸

当遺跡では多くの井戸が検出されており、多様な枠構造を検出している。当説では、これらのうち井戸枠を有する井戸について、その枠構造について述べる。

(1) 挿入式円形丸太割り抜き型

丸太材を割り抜いて作った円形井戸枠を使用する。一木を割り抜く例と、分割して割り抜く例とがあり、前者を2基、後者を1基検出している。

SE21

D地区第40トレンチで検出した、長径2.2m、短径2.0mの平面円形の井戸である。深さは2.5mで、井戸枠は直径1.0mのケヤキを半裁して割り抜き、合わせ口にしてい

る。

SE56

I地区H調査区で検出した。一本削り抜き型の井戸枠を有する。枠直径は0.45m、残存最大高0.57m、厚さは3.0cm～5.0cmである。

SE76

J地区第69トレンチで検出した。掘形は一边2.3mの隅丸方形、深さは2.4mである。枠は、1段構造で、上段が組立式方形縦板組隅柱横棧留型、下段が丸太一本削り抜き型を用いる。上部構造の規模は一边0.55m前後の方形、下部構造は外径0.5m、内径0.4m余り。さらに、削り抜き材内部に直径0.4m、高さ0.3mの円形曲物が設置されており、集水装置として機能したと考えられる。

(2) 組立式方形縦板組型

縦板や横棧などの枠材を使用して掘形内で井戸枠を組み立て、裏込め土を充填してそれを固定する。古代から中世にかけて最も盛行した型式のひとつとされる。また、横棧を支持する方法によって隅柱型、支柱型、柱を用いないものに分類される。

SE20

D地区第40トレンチで検出した。掘形は長径3.0m、短径1.5mの平面楕円形で、深さは2.1mである。枠は一边1.4m、隅柱横棧留型で、内部に一边0.8m、高さ0.4mの方形曲物側板を転用した集水弁を設置する。

SE36

E地区本調査中央東区で検出した。隅柱横棧留型の井戸枠を有する。

SE66

J地区J調査区で検出した。南北約1.2m、東西約1.1mの隅丸方形掘形で、深さは約1.0m。枠は一边0.7m、隅柱、支柱とも使用しない。厚さ5.0cm前後の縦板を各辺3～4枚使用し、内面の桟木が当たる部分には深さ2.0cm程度の桟を作る。底部には直径0.42m、高さ約0.31m、厚さ約3.0mmの曲物を設置し、集水装置とする。

SE69

L地区第63トレンチで検出した。検出面で南北2.5m、東西2.3mの方形掘形、検出面から底部までの深さは約5.0mである。井戸枠は一边約1.0mの方形で支柱横棧留型に属し、外寸は0.97m、内寸0.86mである。横棧は、両端を凹型、凸型に加工した材を2本ずつ組み合わせて方形の枠としたものを0.8m～1.0m間隔で五組用い、四隅に支柱を立てる。側板は上下2段になっており、上段側板には幅0.12m～0.16m、長さ約2.0m(残存部)、厚さ約1.0cm(現状)のものを一边あたり6枚、下段側板には幅0.35m～0.45m、長さ約2.1m、厚さ約2.5cmのものを一边あたり2～3枚用いている。

SE73

K地区第68トレンチで検出した。一边0.9m前後の隅丸方形の掘形を有し、現状での深さは0.7mであった。井戸枠はやや粗雑な作りの隅柱横棧留型と考えられるが、横棧は出土していない。枠内部には直径0.4m、高さ0.26mの曲物が嵌め込まれており、曲物外周には礫を配する。この礫は枠を保たせるためのものと思われる。

(3) 組立式横板組型

四隅や枠内側に沿って杭を打ち込み横板を支持する杭留型と、四隅に隅柱を立て、それらに設けた溝に横板を落とし込む隅柱型とがある。前者を1基検出した。

SE54

H地区H調査区で検出した。掘形は一辺約1.9mの隅丸方形で、深さは約2.4m。井戸枠は一辺1.2mの方形で杭留型に属する。横板は幅1.2m、高さ0.12m～0.3m、厚さ7.0cm前後のものを用い、7段から9段に積み上げる。検出時の残存高は約1.6mであったが、横板を支持する杭の残存状況から、更に約0.5mの高さがあったと考えられる。

(4) 積み上げ式横板組型

四隅を相欠き組にして積み上げる相欠き仕口型と、四隅を納組みして各段の高さを揃えながら積み上げる井籠型がある。当遺跡では前者のみ検出している。

SE60

I地区I調査区で検出した。掘形は一辺2.5mの隅丸方形、深さは約3.5mである。井戸枠構造は相欠き仕口型、内寸は一辺約0.6mで、枠板は幅1.2m～1.3m、高さ0.2m～0.45m、厚さ5.0cm～7.0cmのものが12段分残存していた。

SE71

N地区第67トレンチで検出した。検出面の掘形は一辺約3.0mの方形で井戸枠の内寸は一辺約0.8m、底部までの深さは約2.1mである。井戸枠構造は平面方形で、全幅約1.3m、高さ0.15m～0.2m、厚さ約3.0cmの板を井桁状に組み上げた相欠き仕口型である。また、最下部の三段は裁頭方錐を伏せた形状になっており、最低部の枠内寸を一辺0.6mとしている。浄水施設は設置されていなかった。また、木製枠の直上にあたる位置では石列を検出しており、埋土内からも自然石が数点出土していることから、地上に露出する井戸最上部は石積みとして化粧をしていたと思われる。

(5) 積み上げ式曲物組型

曲物を複数積み上げて井戸枠を構築する。使用される曲物は円形が多く、奈良時代に出現したとされる。

SE28

C地区C調査区で検出した。長径0.9m、短径0.8mの楕円形掘形を有する、深さ0.4mの円形溜井戸である。底部中央に直径0.35m、高さ0.15mの円形曲物側板が設置されており、土層断面の観察から、もう一段積み上げられていたと見られることから、積み上げ式曲物組型の枠を有していたと考えられる。

SE46

G地区G調査区で検出した。長径約2.5m、短径約2.3mの楕円形掘形を有し、深さは約2.1mである。円形曲物側板を3段に積み上げた枠を有するが、最上段は板材を方形に立て並べることから、挿入式縦板組型との複合型式と考えられる。

SE59

I地区I調査区で検出した。曲物は5段に積まれており、1段目は直径0.38m、残存高0.17m、2段目は直径0.4m、残存高0.12m、3段目は直径0.4m、残存高0.18m。4段目は2個体が入れた状になっており、外側の個体が直径0.45m、高さ0.24m、内側の個体は直径0.38m、残存高0.23m、5段目は直径0.36m、高さ0.24mである。

SE64

I地区I調査区で検出した。直径約1.3mの円形掘形を有し、深さは約0.8m。直径0.4m前後の曲物を3段組にして井戸枠を構築する。

(6) 積み上げ式結桶組型

複数の結桶を積み重ねて井戸枠を構築する。11世紀後半に北部九州で出現し、15世紀になって西日本でも構築されるようになった(鐘方正樹「井戸の考古学」)。

SE25

C地区C調査区環濠居館跡西側区画北西隅で検出した。掘形は直径6.0m、深さ5.0mの円形で、井戸枠上部は格子状に組まれた蓋で覆われていた。また、この蓋は建築部材を転用して造られたものと考えられる。枠は、幅0.2m、全長1.8m、厚さ約0.1mの板材を円形に立て並べ、編んだ竹材で組んだ結桶を積み上げる。枠外径は約1.1m、内径は約1.0mである。4段目の桶を確認した時点で、掘削深度が5.0mに達したため、崩落の危険性を鑑み調査を断念した。そのため、5段目以下は未確認である。

(7) 積み上げ式土器・埴輪組型

法量などが近似する土器や円筒埴輪の既製品を積み上げ、井戸枠に転用するもの。

SE45

G地区G調査区で検出した。長径0.8m、短径0.5m、深さ0.45mの平面楕円形である。底を抜いた把手付甕2個体を上下に積み重ね、井戸枠とする。

SE74

K地区第68トレンチで検出した。南北2.3m、東西1.7mの平面楕円形で、深さは1.3m。2個体の円筒埴輪を上下に積み重ねた井戸枠を有する。上段のものは口径0.5m、底径0.46m、全高1.27m、下段は底径0.44m、残存高0.5mである。また、透孔にはこれらとは異なる個体の埴輪片が蓋として貼り付けられていた。透孔の蓋に使われた埴輪片には、掘形から出土したものと接合するものが含まれることから、蓋を貼り付けつつ裏込めを行ったと考えられる。同様の例は、奈良県秋篠・山陵遺跡、大阪府太井遺跡、日置荘遺跡、はざみ山遺跡、新池遺跡などで認められる。

4 旧河道

(1) SR03

①遺構

本調査北区、および南区で検出した旧河道であり、埋土は二層に分かれる。上層は

暗褐色砂質土を主な埋土とする、幅 5.0m~10.0m、深さ 0.2m~0.4mの蛇行流路である。5世紀後半から6世紀中頃に比定される土師器、須恵器などが大量に出土した。下層は砂と礫を埋土とする、幅 3.0m~5.0m、深さ 0.2m~0.5mの流路である。石製品、縄文土器、弥生土器の細片を包含していた。

南から北へ流れている旧河道と考えられ、L地区第63トレンチ、第59トレンチ、第60トレンチを経由する流路と本調査南区の南側からの流路が本調査南区付近で合流すると考えられる。本調査北区以北は、第25トレンチ西端を進み、本調査北西区を通過しさらに北進していると考えられる。

②遺物

上層からは古墳時代のものを中心とした遺物が大量に出土し、下層からは縄文土器、および弥生土器のいずれも細片が出土している。その上層からは、須恵器、土師器、製塩土器などが出土し、特に古墳時代後半のものが多い。須恵器は杯蓋、杯身、高杯蓋、有蓋高杯、無蓋高杯、壺、小壺、長頸壺、甕、平瓶、横瓶、提瓶、鉄鉢などが出土しており、その年代は初期須恵器と呼ばれるものから平安時代までのものが出土していて、特に出土量が多い時期のものはない。

土師器

1715~1719はミニチュア土器である。

1715は手捏ね成形の土師器碗で、口径 4.5 cm、器高 2.2 cm、体部内面に指オサエ、体部内面に指オサエおよびナデを施す。

1716は土師器碗で、口径 3.4 cm、底径 2.7 cm、器高 3.9 cm。口縁部が直立し、底部は平底を呈する。内外面ともに指頭圧痕が残る。

1717は土師器壺で、口径 3.0 cm、器高 4.7 cm。口縁部が外傾し、底部は丸みを帯びるが平底である。口縁部にヨコナデ、胴部内外面に指オサエの後ナデを施す。

1718は手捏ね成形の土師器壺で、口径 5.3 cm、器高 4.9 cm。口縁部にヨコナデ、胴部は外面に指オサエの後ハケ、下半のみケズリ、内面には指オサエを施す。

1719はミニチュアの土師器壺で、口径 13.4 cm、器高 4.8 cm。口縁部は外反し、胴部が球形を呈する。手捏ねで成形され、口縁部をヨコナデ、胴部外面をケズリ、胴部内面は指オサエの後ケズリで調整される。

1720は土師器杯で、口径 13.1 cm、器高 5.3 cm、口縁部にヨコナデ、体部外面に指オサエの後ナデ、体部内面にナデの後、放射線状の暗文を施す。

1721は土師器杯で、口径 14.0 cm、器高 5.2 cm、口縁部にヨコナデ、体部は外面にケズリ、内面にナデを施す。

1722は土師器高杯で、口径 16.0 cm、残存高 5.8 cm、杯部のみ残存しており、口縁端部が突出する。口縁部にヨコナデ、体部外面に指オサエの後ナデ、胴部内面にナデを施す。

1723は土師器高杯の杯部で、口径 16.0 cm、残存高 6.6 cm、残存率 40%。口縁部にヨコナデ、内外面にナデを施す。

1724は土師器高杯で、脚底部を欠損している。口径 14.2 cm、残存高 8.2 cm、口縁部にヨコナデ、杯部外面に指オサエの後タテハケ、杯部内面にナデを施す。脚部は外

面に面取りを施し、内面にはしぼり痕が残る。

1725 は土師器高杯で、杯部のみ残存しており、口径は 15.2 cm、残存高が 4.7 cm。口縁端部が外に突出する。口縁部にヨコナデ、胴部内外面にナデを施す。

1726 は土師器高杯で、口径 15.9 cm、残存高 5.7 cm、杯部のみ残存しており、口縁端部が突出する。口縁部にヨコナデ、胴部は外面にタテハケ、内面にナデを施す。

1727 は土師器高杯で、底径 9.3 cm、残存高 7.65 cm、脚部のみ残存している。外面に面取り、内面に指オサエを施す。また、内面にはしぼり痕が残る。

1728 は土師器高杯で、底径 9.7 cm、残存高 7.4 cm。杯部外面をタテハケ、脚部外面を面取りで仕上げ、脚部内面に指頭圧痕、しぼり痕が残る。また、脚底部外面に指オサエの後ナデ、脚底部内面には指オサエの後ヨコハケを施す。

1729 は土師器高杯である。脚部のみ残存しており、口径が 10.9 cm、残存高は 7.5 cm。脚部外面を面取りで仕上げ、脚部内面に指頭圧痕、しぼり痕を残す。脚底部は外面に指オサエの後ナデ、内面に指オサエを施す。

1730 は土師器高杯であるが、脚部以外を欠損しており、底径 8.6 cm、残存高 7.8 cm、2 方に円形透孔が残存している。外面に面取り、内面に指オサエ、底部外面に指オサエの後ナデを施し、内面にはしぼり痕が残る。

1731 は土師器高杯で、底径 6.8 cm、残存高 7.0 cm、脚部の 3 方に円形透孔が穿たれる。杯部は内外面に指オサエおよびナデ、脚部外面に面取り、脚内面に指オサエ、脚底部には指オサエの後ナデを施す。また、内面にはしぼり痕が残る。

1732 は土師器高杯で、底径 8.7 cm、残存高 7.2 cm、口縁部を欠損している。脚部には円形透孔が 3 方に穿たれ、内面にしぼり痕が残る。杯部内外面にナデ、脚部外面に面取り、脚部内面に指オサエ、脚底部にはナデを施す。

1733 は土師器高杯の脚部で、底径 13.8 cm、残存高 7.4 cm。外面は面取りされ、内面には指頭圧痕、しぼり痕が残る。脚底部は内外面に指オサエの後ナデを施す。

1734 は土師器高杯で、口径 16.0 cm、底径 10.3 cm、器高 13.8 cm、口縁端部が外に突出する。口縁部にヨコナデ、杯部外面に指オサエおよびナデ、杯部内面にナデ、脚部外面には面取り、脚部内面に指オサエ、脚底部外面に指オサエの後ナデを施す。また、脚内面にはしぼり痕が残る。

1735～1752 は土師器碗である。

1735 は口径 13.8 cm、器高 5.2 cm。口縁部は外に突出する。口縁部にヨコナデ、体部外面に指オサエの後ケズリ、体部内面には指オサエの後ナデを施す。

1736 は口径 13.5 cm、器高 5.4 cm。口縁部は外に突出する。口縁部にヨコナデ、体部外面に指オサエの後ケズリ、体部内面には指オサエの後ナデを施す。

1737 は小型碗で、口径 7.7 cm、器高 4.6 cm、口縁端部が内湾する。口縁部にヨコナデ、体部内外面に指オサエの後ナデを施す。

1738 は口径 14.5 cm、器高 6.3 cm、口縁端部が外に突出する。口縁部にヨコナデ、体部内外面に指オサエの後ナデを施す。

1739 は口径 11.6 cm、器高 5.4 cm、口縁端部が外に突出する。口縁部にヨコナデ、体部外面に指オサエ、体部内面には指オサエの後ナデを施す。

1740 は口径 13.8 cm、器高 6.4 cm、口縁端部が外に突出する。口縁部にヨコナデ、

体部は外面にケズリ、内面にナデを施す。

1741 は口径 13.6 cm、残存高 5.8 cm。口縁部にヨコナデ、体部外面に指オサエの後タテハケ、体部内面には指オサエの後ナデを施す。

1742 は口径 12.5 cm、器高 4.7 cm、口縁端部が外に突出する。口縁部にヨコナデ、体部外面に指オサエの後ケズリ、体部内面には指オサエの後ナデを施す。

1743 は口径 13.8 cm、器高 5.4 cm、口縁端部が外に突出する。口縁部にヨコナデ、体部外面に指オサエおよびナデ、体部内面にナデを施す。

1744 は口径 11.2 cm、器高 7.4 cm、口縁部にヨコナデ、体部は内外面にナデを施す。

1745 は口径 14.4 cm、器高 5.1 cm、口縁部にヨコナデ、体部外面に指オサエの後ナデ、体部内面にナデを施す。

1746 は口径 15.8 cm、器高 6.6 cm、口縁部にヨコナデ、体部外面に指オサエ、体部内面に指オサエの後ナデを施す。

1747 は口径 13.9 cm、器高 5.3 cm、口縁部が直立する。口縁部にヨコナデ、体部外面に指オサエの後ケズリ、体部内面にナデを施す。

1748 は口径 13.0 cm、器高 5.2 cm、口縁部は内湾する。口縁部にヨコナデ、体部外面に指オサエの後ケズリ、体部内面には指オサエの後ナデを施す。

1749 は口径 12.5 cm、器高 4.2 cm。口縁端部が外に突出する。口縁部にヨコナデ、体部内外面に指オサエおよびナデを施す。

1750 は口径 12.9 cm、器高 4.6 cm、口縁端部が外に突出する。口縁部にヨコナデ、体部は内外面に指オサエの後ナデを施す。

1751 は口径 13.2 cm、器高 4.8 cm、口縁端部が外に突出する。口縁部にヨコナデ、体部外面に指オサエ、体部内面にナデが施される。

1752 は把手付で、口径 9.2 cm、器高 6.2 cm、口縁端部は直立する。底部は丸みを帯び、体部に把手が1つとりつくが欠損している。口縁部にヨコナデ、体部外面にハケおよびナデ、体部内面に指オサエの後ナデを施す。

1753 は土師器鉢で、口径 10.7 cm、器高 8.7 cm、口縁部は外に開き、胴部に穿孔、底部にはヘラ描きがある。口縁部にヨコナデ、胴部外面にナデ、胴部内面に指オサエの後ケズリ、下半のみ指オサエの後ナデを施す。

1754 は土師器鉢で、口径 9.6 cm、器高 8.2 cm。口縁部が外に開き、胴部は扁球形を呈する。口縁部にヨコナデ、胴部は外面にタテハケ、内面にナデを施す。

1764 は古備系土師器鉢で、口径 48.2 cm、残存高 15.5 cm。口縁部は受け口状を呈する。口縁部にヨコナデ、胴部外面にナデ、胴部内面にケズリを施す。

1755 は土師器の直口壺である。口径は 10.0 cm、残存高 10.5 cm、口縁部が外傾する。口縁部にヨコナデ、胴部は内外面に指オサエおよびナデを施す。

1756 は土師器の直口壺で、口径は 8.2 cm、器高が 13.6 cm である。口縁部が外傾し、胴部は球形を呈する。口縁部にヨコナデ、胴部内外面にナデを施す。また、胴部外面にヘラ描きがある。

1757 は土師器直口壺で、口径 9.1 cm、残存高 10.5 cm、口縁部および底部を欠損している。口縁部が外傾し、胴部は球形を呈する。口縁部にヨコナデ、胴部外面にタテハケ、胴部内面に指オサエの後ナデを施す。

1758は土師器直口壺で、残存高10.6cm、口縁部および底部を欠損している。口縁部が外傾し、胴部は扁球形を呈する。また、底部に穿孔が施されている。口縁部外面にヨコナデ、口縁部内面にヨコハケ、胴部外面にハケ、胴部内面に指オサエおよびナデを施す。

1759は土師器直口壺で、口縁部および底部を欠損しており、残存高は11.7cmである。口縁部は外傾し、胴部が扁球形を呈する。口縁部にヨコナデ、胴部は外面にナデ、内面に指オサエおよびナデを施す。

1760は土師器直口壺で、口径10.1cm、器高14.7cm。口縁部は外傾し、胴部が扁球形を呈する。また、胴部および底部に穿孔を施す。口縁部にヨコナデ、胴部外面にナデ、胴部内面には指オサエおよびナデを施す。

1761は土師器壺で、残存高11.6cm、胴部のみ残存している。胴部は球形を呈し、焼成後に穿孔を行う。外面にヨコハケ、内面に指オサエおよびナデを施す。

1762は土師器壺で、残存高11.7cm、胴部のみ残存している。胴部は扁球形を呈し、外面にナメハケ、内面には指オサエの後ナメハケを施す。

1763は土師器壺で、残存高11.0cm、胴部は球形を呈する。外面にナデおよびケズリ、内面に指オサエおよびナデを施す。

1765は布留式の土師器甕である。口径10.8cm、器高11.0cm、口縁部が外反し、胴部は球形を呈する。口縁部にヨコナデ、胴部外面にタテハケ、下半にはヨコおよびナメハケ、胴部内面にケズリ、底部に指オサエを施す。

1766は土師器の小型甕で、口径10.4cm、器高10.4cm。口縁部はくの字状、胴部は球形を呈する。口縁部にヨコナデ、胴部外面にハケ、胴部内面に指オサエおよびナデを施す。

1767は土師器甕である。口径9.6cm、器高9.7cm、口縁部がくの字状、胴部は球形を呈する。口縁部は外面にヨコナデ、内面にヨコハケ、胴部は外面に指オサエの後タテハケ、さらに細かいナメハケ、内面にはナメハケおよびナデを施す。

1768は土師器甕で、口径12.8cm、残存高12.8cm。外反する口縁部の端部が肥厚し、胴部は球形を呈し、底部には穿孔が施される。口縁部外面にヨコナデ、口縁部内面にヨコハケ、胴部は外面にタテハケ、内面に指オサエの後ナデを施す。

1769は土師器甕で、口径14.5cm、器高17.3cm。口縁部はくの字状、胴部は球形を呈する。口縁部にヨコナデ、胴部外面にナデ、胴部内面に指オサエの後ナデを施す。

1770は土師器甕で、口径14.0cm、残存高17.5cm、口縁部が外反し、胴部はやや扁球形を呈する。口縁部にヨコナデ、胴部は外面にタテハケ、内面にナデを施す。

1771は土師器甕で、口径12.8cm、残存高8.0cm、口縁部はくの字状を呈する。口縁部にヨコナデ、胴部内外面に指オサエを施す。

1772は土師器甕である。口径8.2cm、残存高13.6cm、口縁部外面にヨコナデ、口縁部内面にヨコハケ、胴部は外面にナデ、内面に指オサエの後ナデを施す。

1773は土師器長胴甕で、口径16.0cm、器高5.8cmである。口縁部は直立し、外面にヨコナデ、胴部外面に指オサエの後タテハケ、胴部内面には指オサエの後ハケを施す。

1774は土師器長胴甕で、口径19.0cm、器高28.6cm、口縁部が外反する。口縁部に

ヨコナデ、胴部外面にナデ、胴部内面に指オサエおよびナデを施す。

1775は土師器長胴甕で、口径15.0cm、残存高26.8cm、口縁部はくの字状を呈し、端部が肥厚する。口縁部にヨコナデ、胴部外面にヨコハケおよびタテハケ、胴部内面に指オサエおよびケズリを施す。

1776は土師器甕で、口径12.3cm、残存高9.0cm、口縁部外面にヨコナデ、内面にヨコハケを施す。胴部は外面をタテハケ、内面を指オサエおよび板ナデで調整する。

1777は土師器甕で、口径20.1cm、残存高7.5cm。口縁部がくの字状を呈する。口縁部にヨコナデ、胴部外面にナナメハケ、胴部内面に指オサエの後ナデを施す。

1778は土師器甕で、口径18.0cm、残存高10.8cm、残存率40%である。口縁部はくの字状、胴部は球形を呈する。口縁部にヨコナデ、胴部内外面に指オサエおよびナデを施す。

1779は土師器甕で、口径22.8cm、残存高10.0cm、口縁部はくの字状を呈する。口縁部にヨコナデ、胴部外面にヨコナメハケ、胴部内面には指オサエの後ナデを施す。

1780は土師器甕である。口径12.8cm、器高21.7cm、くの字状口縁で、胴部は扁球形を呈する。口縁部にヨコナデ、胴部外面にヨコハケおよびタテハケ、胴部下半のみナデ、胴部内面には指オサエの後、板ナデを施す。また、煤が付着している。

1781は山陰系土師器甕で、口径16.8cm、残存高20.0cm、口縁部は受け口状を呈する。口縁部にヨコナデ、胴部外面にナナメハケ、胴部内面に指オサエおよびナデを施す。

1782は土師器甕で残存高21.8cm、口縁部を欠損している。胴部に把手がとりつき、底部に透孔を穿つ。胴部外面にタテハケ、胴部内面に板ナデを施す。

1783～1786は製塩土器である。

1783は口径6.4cm、器高7.9cm、口縁部にヨコナデ、胴部外面に指オサエおよびナデ、内面に指オサエを施す。

1784は口径4.0cm、残存高5.5cm、口縁部から胴部残存しており、胴部外面にタタキ、胴部内面に指オサエおよびナデを施す。

1785は口径4.5cm、残存高4.0cm、1786は口径3.9cm、残存高4.4cm。両者とも口縁部から胴部が残存しており、胴部内外面に指オサエを施す。

須恵器

須恵器は、杯蓋、杯身、高杯蓋、有蓋高杯、無蓋高杯、甕、壺、短頸壺、甕などが出土し、古墳時代後半のものが特に多く出土している。

1787は杯蓋で、残存率80%、口径12.6cm、器高4.4cmである。端部は外側へ尖り、稜は非常に鋭く、突出して段を成している。天井部に時計回りの回転ヘラケズリが施されている。ON46～TK208型式のものと考えられる。

1788は杯蓋で、完形である。口径12.8cm、器高4.05cm、内に傾斜する端部は平らに仕上げられ、稜は非常に鋭く、段を成している。天井部に回転ヘラケズリが施されている。TK208型式のものと考えられる。

1789は完形の杯蓋である。口径12.7cm、器高4.3cm。端部は内に傾斜して平らに仕上げられるが、浅い沈線を施す。稜はやや鈍いが、段を成している。天井部に時計回りの回転ヘラケズリが施されている。TK208型式のものと考えられる。

1790 は杯蓋で、ほぼ完形、口径 12.1 cm、器高 4.6 cm である。端部は内傾して平らに仕上げられ、稜はやや鈍く、あまり突出していない。天井部に時計回りの回転ヘラケズリが施されている。TK208 型式のものと考えられる。

1791 は杯蓋で、残存率 80%、口径 11.9 cm、器高 4.65 cm である。端部は内傾して平らに仕上げられ、稜はやや鈍く、あまり突出していない。天井部に時計回りの回転ヘラケズリが施されている。TK208 型式のものと考えられる。

1792 は杯蓋で、残存率 95%、口径 11.9 cm、器高 5.1 cm である。端部は内外両側に突出し、稜はやや鋭く、突出して段を成している。天井部に時計回りの回転ヘラケズリが施されている。TK208 型式のものと考えられる。

1793 は杯蓋で、残存率 75%、口径 11.7 cm、器高が 4.8 cm である。端部は内に傾斜して平らに仕上げられ、稜はやや鋭く、突出して段を成している。天井部には広範囲に時計回りの回転ヘラケズリが施されている。TK208～TK23 型式のものと考えられる。

1794 は杯蓋で、残存率 90%、口径 12.6 cm、器高が 4.7 cm である。端部に沈線が施され、稜はやや鈍いが、突出して段を成している。天井部には反時計回りの回転ヘラケズリが施される。TK208～TK23 型式のものと考えられる。

1795 は完形の杯蓋で、口径 12.2 cm、器高が 4.2 cm である。内に傾斜する端部の断面形はほぼ平らで、稜は鋭く、突出している。天井部には時計回りの回転ヘラケズリが施されている。TK208～TK23 型式のものと考えられる。

1796 は杯蓋で、残存率 95%、口径 12.8 cm、器高が 4.8 cm である。端部は外側が稜のように突出し、稜は非常に鋭く、突出して段を成している。天井部には時計回りの回転ヘラケズリが施されている。TK208～TK23 型式のものと考えられる。

1797 は杯蓋で、残存率 95%、口径 11.8 cm、器高が 4.4 cm である。端部は内傾して平らに仕上げられ、稜は鋭く、突出して段を成している。天井部には広範囲に反時計回りの回転ヘラケズリが施されている。TK208～TK23 型式のものと考えられる。

1798 は完形の杯蓋である。口径 12.8 cm、器高が 5.1 cm。端部は内に傾斜し、平らである。稜はやや鋭く、突出して段を成している。天井部にはやや広範囲に反時計回りの回転ヘラケズリが施される。TK23 型式のものと考えられる。

1799 はほぼ完形の杯蓋で、口径 12.0 cm、器高が 4.2 cm である。端部には浅い沈線を施し、稜はやや鈍く、あまり突出していない。天井部には時計回りの回転ヘラケズリが施されている。TK23 型式のものと考えられる。

1800 はほぼ完形の杯蓋で、口径 11.7 cm、器高が 4.4 cm である。端部に浅い沈線を施し、稜はやや鈍いが、突出して段を成している。天井部には広範囲に時計回りの回転ヘラケズリが施されている。TK23 型式のものと考えられる。

1801 はほぼ完形の杯蓋で、口径 12.3 cm、器高が 4.5 cm である。端部はやや甘い作りであるが平らな断面形で、稜はあまり突出しておらず、やや鈍い。天井部には時計回りの回転ヘラケズリが施されている。TK23 型式のものと考えられる。

1802 はほぼ完形の杯蓋で、口径 12.2 cm、器高が 4.8 cm である。内に傾斜する端部の断面形はほぼ平らである。稜はやや鋭く、突出している。天井部には時計回りの回転ヘラケズリが施されている。TK23 型式のものと考えられる。

1803 は杯蓋で、残存率 90%、口径 13.1 cm、器高が 5.2 cm である。端部は浅い沈線

を有し、稜はやや鋭く、突出して段を成している。天井部には反時計回りの回転ヘラケズリが施される。TK23 型式のものと考えられる。

1804 は杯蓋で、残存率 90%、口径 12.4 cm、器高が 4.4 cm である。端部はやや丸く仕上げられ、稜はやや鋭く、わずかに突出する。天井部には反時計回りの回転ヘラケズリが施されている。TK23 型式のものと考えられる。

1805 は完形の杯蓋である。口径 12.5 cm、器高が 4.5 cm、端部は丸みを帯びて甘い印象を受ける。稜も非常に鈍いが、やや突出している。天井部には反時計回りの回転ヘラケズリが施される。TK23 型式のものと考えられる。

1806 は完形の杯蓋で、口径 11.9 cm、器高が 4.4 cm である。端部は沈線を施され、稜はやや鈍いが、突出している。天井部には時計回りの回転ヘラケズリが施されている。TK23 型式のものと考えられる。

1807 はほぼ完形の杯蓋で、口径 11.9 cm、器高が 5.2 cm である。内に傾斜する端部の断面形はほぼ平らで、稜はやや鈍いが、突出している。天井部には時計回りの回転ヘラケズリが施される。TK23～TK47 型式のものと考えられる。

1808 は杯蓋で、ほぼ完形である。口径 12.1 cm、器高が 4.5 cm である。端部は浅い沈線を施されるが、断面形はほぼ平らである。稜は鋭く、突出して段を成している。天井部には、時計回りの回転ヘラケズリがやや広範囲に施されている。TK23～TK47 型式のものと考えられる。

1809 は杯蓋で、ほぼ完形、口径 12.4 cm、器高が 5.1 cm である。端部に浅い沈線を施し、稜はやや鈍いが、突出している。天井部には広範囲に時計回りの回転ヘラケズリが施されている。TK23～TK47 型式のものと考えられる。

1810 は完形の杯蓋で、口径 11.6 cm、器高が 4.65 cm である。端部はやや尖っているが、鈍い印象を受ける。稜はやや鈍いが、突出している。天井部には反時計回りの回転ヘラケズリが施されている。TK47 型式のものと考えられる。

1811 は杯蓋で、残存率 90%、口径 11.8 cm、器高が 4.95 cm である。端部はほぼ丸いが、やや鋭い印象を受ける。稜は非常に鋭く、突出して段を成している。また、天井部の狭い範囲を反時計回りの回転ヘラケズリで調整する。TK47 型式のものと考えられる。

1812 は杯蓋で、ほぼ完形、口径 12.4 cm、器高が 4.7 cm である。端部は非常に内に傾斜し、ほぼ平らである。稜はやや鋭く、突出して段を成している。天井部の狭い範囲を反時計回りの回転ヘラケズリで調整するが、頂部はヘラ切り後、未調整である。TK47 型式のものと考えられる。

1813 は杯蓋で、残存率 95%、口径 11.9 cm、器高が 4.3 cm である。端部は非常に鈍い印象を受けるが、浅い沈線が施されている。稜はやや鈍いが、突出して段を成している。天井部には回転ヘラケズリが施されている。TK47 型式のものと考えられる。

1814 は杯蓋で、残存率 90%、口径 12.6 cm、器高が 4.0 cm である。端部はほぼ平らであるが、浅い沈線が施されている。稜は非常に鈍く、ほとんど突出していない。天井部には反時計回りの回転ヘラケズリが施されている。MT15 型式のものと考えられる。

1815 は杯蓋で、残存率 70%、口径 13.8 cm、器高が 5.4 cm である。端部はほぼ平ら

であるが、甘い印象を受ける。稜はほとんど突出せず、直下の沈線によって表現される。天井部には反時計回りの回転ヘラケズリが施されている。MT15 型式のものと考えられる。

1816 は杯蓋で、口径 14.9 cm、器高が 4.6 cm である。端部はほぼ丸く仕上げられ、稜はほぼ消滅しており、直下の沈線によって表現される。天井部には反時計回りの回転ヘラケズリが施されている。TK10 型式のものと考えられる。

1817 は高杯蓋で、残存率 50%、復元口径 12.2 cm、器高 5.1 cm で扁平なつまみが付されている。端部は内に傾斜して平らに仕上げられるが鋭い。鋭い稜は段を成し、天井部は回転ヘラケズリで調整され、体部が長い。TK208 型式のものと考えられる。

1818 は高杯蓋で、残存率 60%、口径 14.1 cm、器高 5.9 cm。扁平でやや小型のつまみが付されている。端部はわずかであるが内に傾斜し、ほぼ平らに仕上げられている。稜は鋭く、突出して段を成し、体部が非常に長い。天井部外面に回転ヘラケズリ、天井部内面にはロクロナデ、その他はヨコナデで調整され、天井部には櫛描き列点文を施す。TK208 型式のものと考えられる。

1819 は高杯蓋である。口径 13.1 cm、器高 5.4 cm、端部はわずかに尖り、稜は非常に鋭く、段を成している。天井部に回転ヘラケズリが施され、扁平なつまみが付されている。TK208 型式のものと考えられる。

1820 は完形の高杯蓋である。口径 12.2 cm、器高 5.6 cm、ほぼ平らな端部は内に傾斜し、非常に鋭い稜は段を成している。天井部は時計回りの回転ヘラケズリで調整され、扁平なつまみが付されている。TK208 型式のものと考えられる。

1821 は完形の高杯蓋である。口径 12.4 cm、器高 5.2 cm、端部に浅い沈線を施すが鈍い印象を受け、稜はやや鋭く、突出している。天井部に反時計回りの回転ヘラケズリが施され、扁平なつまみが付されている。TK23 型式のものと考えられる。

1822 は高杯蓋で、上層から出土した。口径 13.1 cm で、器高が 6.0 cm、端部は外反し、稜はやや鋭く、突出している。天井部に時計回りの回転ヘラケズリが施され、やや扁平なつまみが付されている。TK23 型式のものと考えられる。

1823 は高杯蓋である。残存率 90%、口径 12.8 cm、器高が 5.5 cm、端部には沈線が施されるが、非常に甘い印象を受ける。稜は鋭く、突出している。天井部には時計回りの回転ヘラケズリが施され、扁平なつまみが付されている。TK23 型式のものと考えられる。

1824 は高杯蓋である。残存率 80%、口径 12.4 cm、器高が 5.0 cm、内に傾斜する端部は平らに仕上げ、稜は鋭く、突出している。天井部には時計回りの回転ヘラケズリが施され、扁平なつまみが付されている。TK23 型式のものと考えられる。

1825 は高杯蓋で、上層から出土した。復元口径 12.4 cm で、器高が 6.0 cm、端部は外反し、稜は鋭く、突出している。天井部に反時計回りの回転ヘラケズリが施され、やや扁平なつまみが付されている。やや小型であり、TK23 型式のものと考えられる。

1826 は高杯蓋である。残存率 75%、口径 12.6 cm、器高が 6.0 cm、端部はほぼ平らに仕上げられ、稜はやや鋭く、突出して段を成している。天井部には反時計回りの回転ヘラケズリが施され、扁平なつまみが付されている。TK23 型式のものと考えられる。

1827 は高杯蓋で、残存率 90%、口径 12.1 cm、器高が 5.6 cm。扁平なつまみが付さ

れている。内に傾斜する端部はほぼ平らに仕上げられ、やや鋭く、突出する稜は段を成し、直下には沈線を施す。天井部には反時計回りの回転ヘラケズリが施されている。TK23 型式のものと考えられる。

1828 は高杯蓋で、残存率 80%、口径 13.1 cm、器高が 5.6 cm。扁平なつまみが付されている。内に傾斜する端部はほぼ平らに仕上げられ、稜はやや鋭いがあまり突出していない。天井部には時計回りの回転ヘラケズリが施されている。TK23 型式のものと考えられる。

1829 は高杯蓋で、ほぼ完形である。口径 11.8 cm、器高が 5.8 cm で、扁平なつまみが付されている。端部には極めて浅い沈線が施されるがほぼ平らで、稜は鋭く、突出している。天井部には時計回りの回転ヘラケズリが施されている。TK23～TK47 型式のものと考えられる。

1830 は高杯蓋で、残存率 90%、口径 12.5 cm、器高が 5.9 cm。端部は内に傾斜してほぼ平らに仕上げられるが、浅い沈線も施され、やや鈍い稜はあまり突出していない。天井部には時計回りの回転ヘラケズリが施され、扁平なつまみが付されている。TK47 型式のものと考えられる。

1831 は完形の高杯蓋で、口径 12.8 cm、器高が 5.5 cm である。端部には沈線が施され、稜はやや鈍いが、突出して段を成している。天井部には反時計回りの回転ヘラケズリが施され、扁平なつまみが付されている。TK23 型式のものと考えられる。

1832 は完形の高杯蓋で、口径 12.7 cm、器高が 5.7 cm である。端部には沈線が施され、稜はやや鈍く、突出している。天井部には時計回りの回転ヘラケズリが施され、扁平なつまみが付されている。TK23～TK47 型式のものと考えられる。

1833 は完形の高杯蓋で、口径 11.9 cm、器高が 5.2 cm である。内に傾斜する端部はほぼ平らで、稜はやや鋭く、突出している。天井部には反時計回りの回転ヘラケズリが施され、扁平なつまみが付されている。TK47 型式のものと考えられる。

1834 は杯身で、残存率 55%、口径 10.6 cm、器高 4.05 cm である。立ち上がりは長く、ほぼ垂直に伸び、端部は丸く収められている。底部は、全面に時計回りの回転ヘラケズリを施している。受部はやや長く、ほぼ水平に伸び、非常に鋭い。TK216 型式と推定される。

1835 は杯身で、残存率 90%、口径 9.8 cm、器高 5.0 cm である。立ち上がりは長く、やや内傾して伸び、端部は比較的鋭い。底部全面に時計回りの回転ヘラケズリを施している。受部は短く、ほぼ水平に伸び、やや鋭い。TK216 型式と推定される。

1836 は杯身で、残存率 45%、復元口径 11.4 cm、器高 5.5 cm である。立ち上がりは非常に長く、垂直に伸び、端部はほぼ丸く収められている。底部には時計回りの回転ヘラケズリを施している。受部は非常に短く、外上方へ伸び、やや鈍い。TK216～OX46 型式と考えられる。

1837 は杯身で、口径 10.7 cm、器高 4.8 cm である。立ち上がりは非常に長く、やや内傾しながら伸び、端部は鋭く、尖っている。底部に時計回りの回転ヘラケズリを施している。受部は短く、ほぼ水平に伸び、やや鈍い。TK216～OX46 型式と推定される。

1838 は杯身で、ほぼ完形、口径 10.9 cm、器高 5.3 cm である。立ち上がりは非常に長く、やや内傾しながら伸び、端部は丸く収められている。底部には時計回りの回転

ヘラケズリを施している。受部はやや長く、外上方へ伸び、やや鈍い。TK216～ON46型式と考えられる。

1839は杯身で、残存率40%、復元口径11.4cm、残存高が5.0cmである。立ち上がりは長く、垂直に伸び、内傾して平らな端部には浅い沈線が施される。底部は反時計回りの回転ヘラケズリで調整され、外上方に伸びる受部は非常に長く、鈍い。底部調整が反時計回りであるが、TK208型式と考えられる。

1840は杯身で、残存率90%、口径10.4cm、器高が5.1cmである。立ち上がりは垂直に長く伸び、外反している。端部は丸く仕上げている。底部には、広範囲に時計回りの回転ヘラケズリを施しており、鋭い受部はほぼ水平に長く伸びる。底部外面に1条のヘラ記号を描いている。TK208型式と考えられる。

1841は杯身で、残存率80%、口径10.9cm、器高が4.8cmである。立ち上がりは外反して垂直に長く伸びる。平らな端部はわずかに内傾し、鋭い印象を受ける。底部には時計回りの回転ヘラケズリを施しており、受部は非常に長く、ほぼ水平に伸びる。底部外面に4条のヘラ記号を描いている。TK208型式と考えられる。

1842は杯身で、残存率45%で、復元口径11.0cm、残存高が5.0cmである。立ち上がりは長く、やや内傾しながら伸び、端部には内に傾斜して平らである。底部には時計回りの回転ヘラケズリを施しており、受部は非常に長く、外上方に伸び、鋭い。TK208～TK23型式と考えられる。

1843はほぼ完形の杯身で、口径10.9cm、器高が4.4cmである。立ち上がりはやや長く、垂直に伸び、端部は内傾してほぼ平らである。底部には反時計回りの回転ヘラケズリを施しており、受部はやや長く、ほぼ水平に伸び、鈍い。TK23型式と考えられる。

1844は杯身で、残存率90%、口径11.2cm、器高が4.9cmである。長く伸びる立ち上がりはやや内傾するがほぼ垂直で、端部は内に傾斜して平らな断面形を呈する。底部には時計回りの回転ヘラケズリを施しており、ほぼ水平に伸びる受部は短く、やや鈍い。TK23型式と考えられる。

1845は杯身で、残存率85%、口径10.5cm、器高が4.9cmである。立ち上がりはやや長く、やや内傾しながら伸び、端部は内に傾斜して平らである。底部には時計回りの回転ヘラケズリを施しており、受部は非常に長く、外上方に伸び、鋭い。TK23型式と考えられる。

1846は杯身で、上層から出土した。復元口径は9.6cm、残存高が4.6cmである。立ち上がりはやや長く、ほぼ垂直に伸びる。端部には沈線が施されているが、ほぼ平らである。底部にはやや広範囲に反時計回りの回転ヘラケズリを施しており、受部はやや長く、上外方に伸び、比較的鋭い。小型であり、TK23型式と考えられる。

1847は完形の杯身で、口径11.5cm、器高が4.8cmである。立ち上がりは長く、やや内傾しながら伸び、端部は内に傾斜して平らである。底部には時計回りの回転ヘラケズリを施しており、受部はやや長く、水平に伸び、鋭い。TK23型式と考えられる。

1848は杯身で、上層から出土した。口径は10.8cm、器高が5.2cmである。立ち上がりはやや長く、ほぼ垂直に伸び、端部は外上方へ屈曲し、沈線が施されている。底部にはやや狭い範囲に反時計回りの回転ヘラケズリを施しており、受部は外上方へ伸

び、鋭い。小型であり、TK23 型式と考えられる。

1849 は杯身で、残存率 50%、復元口径 10.8 cm、器高が 4.8 cm である。立ち上がりはやや内傾して長く伸び、やや内に傾斜する端部の断面形はほぼ平らである。底部には時計回りの回転ヘラケズリを施しており、ほぼ水平に伸びる受部は長く、やや鋭い。TK23 型式と考えられる。

1850 は杯身で、ほぼ完形、口径 11.3 cm、器高が 5.2 cm である。立ち上がりはやや長く、ほぼ垂直に伸び、端部に沈線が施されている。底部には反時計回りの回転ヘラケズリを施しており、受部はやや長く、やや外上方に伸び、鋭い。底部外面に 1 条のヘラ記号を描いている。TK23 型式と考えられる。

1851 は完形の杯身で、口径 10.5 cm、器高が 4.8 cm である。立ち上がりはやや長く、ほぼ垂直に伸びる。端部は内傾して平らであり、鋭い印象を受ける。底部には時計回りの回転ヘラケズリを施す。受部はやや短く、やや外上方へ伸び、鈍い。TK23 型式と考えられる。

1852 は完形の杯身で、口径 10.75 cm、器高が 5.3 cm である。立ち上がりは長く、ほぼ垂直に伸び、端部には沈線が施されている。底部には時計回りの回転ヘラケズリを施しており、ほぼ水平に伸びる受部はやや短く、鋭い。TK23 型式と考えられる。

1853 は杯身で、残存率 70%、復元口径 10.9 cm、器高が 4.7 cm である。立ち上がりはやや長く、ほぼ垂直に伸び、端部は内に傾斜して平らである。底部には時計回りの回転ヘラケズリを施しており、ほぼ水平に伸びる受部は鋭く、やや長い。TK23 型式と考えられる。

1854 はほぼ完形の杯身で、口径 10.4 cm、器高が 4.7 cm である。立ち上がりは長く、内傾しながら伸び、端部には沈線が施されている。底部には時計回りの回転ヘラケズリを施しており、受部はやや長く、外上方へ伸びるが、鈍い印象を受ける。TK23 型式と考えられる。

1855 は完形の杯身で、口径 10.3 cm、器高が 5.1 cm である。立ち上がりはやや長く、わずかに内傾しながら伸び、端部には浅い沈線が施される。底部には時計回りの回転ヘラケズリを施しており、受部は長く、外上方へ伸びるが、鈍い印象を受ける。TK23 型式と考えられる。

1856 は杯身で、残存率 80%、口径 10.8 cm、器高が 5.1 cm である。ほぼ垂直に伸びる立ち上がりはやや長く、端部は内に傾斜して平らであるが、浅い沈線が施されている。底部には反時計回りの回転ヘラケズリを施しており、受部はほぼ水平に伸び、やや長い。TK23～TK47 型式と考えられる。

1857 は杯身で、残存率 95%、口径 10.9 cm、器高が 5.1 cm である。ほぼ垂直に伸びる立ち上がりはやや長く、端部にはやや深い沈線が施されている。底部には反時計回りの回転ヘラケズリを施しており、受部はやや長く、外上方へ伸びているが、鈍い印象を受ける。TK23～TK47 型式と考えられる。

1858 は完形の杯身で、口径 10.8 cm、器高が 5.1 cm である。立ち上がりはやや長く、内傾しながら伸び、端部には深い沈線が施されている。底部には時計回りの回転ヘラケズリを施しており、受部はやや長く、外上方へ伸びているが、鈍い印象を受ける。TK23～TK47 型式と考えられる。

1859 は完形の杯身で、口径 10.9 cm、器高が 4.75 cm である。ほぼ垂直に伸びる立ち上がりは長く、端部には沈線が施されている。底部には反時計回りの回転ヘラケズリを施しており、受部は非常に長く、外上方へ伸び、鋭い。TK23～TK47 型式と考えられる。

1860 は杯身で、残存率 80%、口径 11.5 cm、器高が 4.8 cm である。立ち上がりは長く、ほぼ垂直に伸び、端部には浅い沈線が施されている。底部には反時計回りの回転ヘラケズリを施しており、受部はやや短く、外上方へ伸び、鋭い。TK23～TK47 型式と考えられる。

1861 は杯身で、残存率 95%、口径 10.8 cm、器高が 5.6 cm である。立ち上がりは長く、やや内傾しながら伸び、内に傾斜する端部は平らであるが、甘い印象を受ける。底部には反時計回りの回転ヘラケズリを施しており、ほぼ水平に伸びる受部は長い。TK23～TK47 型式と考えられる。

1862 は杯身で、残存率 80%、口径 10.6 cm、器高が 4.9 cm である。立ち上がりはわずかに内傾してやや長く伸び、端部には深い沈線が施している。底部には反時計回りの回転ヘラケズリを施しており、受部は外上方へやや長く伸び、やや鋭い。TK23～TK47 型式と考えられる。

1863 は杯身で、残存率 80%、口径 9.8 cm、器高が 4.8 cm である。立ち上がりは垂直に長く伸び、端部は内に傾斜して平らである。底部には反時計回りの回転ヘラケズリを施しており、受部はほぼ水平にやや短く伸びている。TK23～TK47 型式と考えられる。

1864 は杯身で、残存率 75%、口径 10.9 cm、器高が 4.95 cm である。立ち上がりは僅かに内傾し、端部はほぼ平らである。底部には時計回りの回転ヘラケズリを施しており、やや長い受部はほぼ水平に伸び、鈍い。TK47 型式と考えられる。

1865 はほぼ完形の杯身で、口径 10.7 cm、器高が 4.6 cm である。立ち上がりはほぼ垂直に長く伸び、端部には沈線が施されている。底部には反時計回りの回転ヘラケズリを施しており、ほぼ水平に伸びる受部はやや長く、鈍い印象を受ける。底部外面にヘラ記号が存在する。TK47 型式と考えられる。

1866 は杯身で、残存率 50%、復元口径 10.4 cm、器高が 5.1 cm である。立ち上がりはやや内傾して長く伸び、内に傾斜する端部はほぼ平らな断面形を呈するが、浅い沈線が施す。底部には反時計回りの回転ヘラケズリを施しており、ほぼ水平に伸びる受部は短く、やや鋭い。TK47 型式と考えられる。

1867 は杯身で、残存率 75%、復元口径 10.8 cm、器高が 4.9 cm である。内傾する立ち上がりは湾曲しながら伸び、端部には浅い沈線が施されるが、ほぼ平らである。底部には時計回りの回転ヘラケズリを施しており、ほぼ水平に伸びる受部はやや長く、鋭い。TK47 型式と考えられる。

1868 は杯身で、残存率 95%、口径 10.7 cm、器高が 4.9 cm である。立ち上がりは垂直に伸び、端部にはやや深い沈線が施されている。底部には反時計回りの回転ヘラケズリが施され、鋭い受部はほぼ水平に伸び、やや長い。TK47 型式と考えられる。

1869 はほぼ完形の杯身で、口径 10.7 cm、器高が 4.8 cm である。立ち上がりはほぼ垂直に伸び、端部はほぼ平らである。底部には時計回りの回転ヘラケズリを施しており、ほぼ水平に伸びる受部はやや長く、鋭い。TK47 型式と考えられる。

1870 は完形の杯身で、口径 11.2 cm、器高が 4.8 cm である。立ち上がりは長く、やや内傾するがほぼ垂直に伸び、端部には沈線が施されている。底部には時計回りの回転ヘラケズリを施しており、ほぼ水平に伸びる受部は短く、鈍い印象を受ける。TK47 型式と考えられる。

1871 は完形の杯身で、口径 9.9 cm、器高が 4.8 cm である。立ち上がりはほぼ垂直に伸び、端部は丸く仕上げられている。底部には反時計回りの回転ヘラケズリを施しており、受部は短く、外上方へ伸びている。TK47 型式と考えられる。

1872 は完形の杯身で、口径 10.1 cm、器高が 5.5 cm である。立ち上がりは内傾し、端部は鈍く、尖っている。底部には反時計回りの回転ヘラケズリを施しており、やや短い受部は、ほぼ水平に伸びる。TK47 型式と考えられる。

1873 は杯身で、残存率 95%、口径 10.6 cm、器高が 5.0 cm である。立ち上がりは垂直に伸び、内に傾斜する端部は平らである。底部には時計回りの回転ヘラケズリを施しており、やや短い受部はほぼ水平に伸び、鈍い印象を受ける。TK47 型式と考えられる。

1874 は杯身で、残存率 55%、口径 12.0 cm、器高は 4.5 cm である。立ち上がりはほぼ垂直に伸び、ほぼ平らな端部には浅い沈線が施される。底部には時計回りの回転ヘラケズリが施され、受部はやや長く、ほぼ水平に伸びている。MT15 型式のものと考えられる。

1875 は杯身で、上層から出土した。復元口径は 11.7 cm で器高が 4.8 cm である。立ち上がりはやや内傾しているが、ほぼ垂直に伸び、端部は丸い。底部に反時計回りの回転ヘラケズリを施しており、受部は短く、やや外上方へ伸び、鈍い。底面にヘラ記号が描かれている。やや小型ではあるが、MT15 型式と考えられる。

1876 は杯身で、残存率 70%、口径 12.4 cm、器高 4.9 cm である。立ち上がりは内傾し、端部には浅い沈線が施されている。底部には時計回りの回転ヘラケズリが施され、受部はやや長く、ほぼ水平に伸びる。MT15 型式のものと考えられる。

1877 は完形の杯身で、口径 11.8 cm、器高 4.95 cm である。立ち上がりはやや長く、内傾して伸び、端部は丸い。底部には時計回りの回転ヘラケズリを施しており、やや外上方へ伸びる受部は鈍く、非常に短い。TK10 型式にあたると思われる。

1878 は杯身で、最上層から出土した。口径は 12.4 cm、器高が 4.9 cm である。立ち上がりは短く、著しく内傾しながら伸びている。底部にはやや広範囲に反時計回りの回転ヘラケズリを施しており、受部は短く、外上方へ伸び、端部が丸く収められる。MT85 型式前後にあたると思われる。

1879 は杯身で、上層から出土した。復元口径は 12.6 cm、器高が 5.1 cm である。立ち上がりは短く、内傾しながら伸びている。底部にはやや広範囲に反時計回りの回転ヘラケズリを施しており、受部は短く、外上方へ伸び、端部が丸く収められる。TK10 ～MT85 型式にあたると思われる。

1880 は杯身で、残存率 50%、復元口径 13.0 cm、器高 4.2 cm である。内傾する立ち上がりは非常に短く伸び、端部は丸い。底部に回転ヘラケズリを施しており、外上方へ伸びる受部は短く、丸い断面形を呈する。MT85 型式と考えられる。

1881 は杯身で、残存率 80%、口径 12.2 cm、器高 4.3 cm である。立ち上がりはやや

短く、内傾しながら伸び、端部は丸い。底部には時計回りの回転ヘラケズリを施しており、やや外上方へ伸びる受部は長く、鈍い。TK10 型式にあたりと考えられる。

1882 は完形の有蓋高杯で、口径 10.8 cm、器高 8.5 cm。短脚で、3 方向に方形の透かし窓が穿たれている。脚端部の上下に突帯を巡らせ、段を成している。杯部の立ち上がりはやや内傾してやや長く伸び、端部には浅い沈線が施されている。長い受部はやや鋭く、外上方に伸びる。底部は反時計回りの回転ヘラケズリで調整されている。TK23 型式と考えられる。

1883 は有蓋高杯で、口径 11.4 cm、器高 9.7 cm。短脚で、3 方向に方形の透かし窓が穿たれている。脚端部の上下に突帯を巡らせ、段を成している。杯部の立ち上がりはやや内傾してやや長く伸び、端部には沈線が施されている。ほぼ水平に伸びる受部はやや鈍く、やや長い。底部は時計回りの回転ヘラケズリで調整されている。TK23 型式と考えられる。

1884 は有蓋高杯で、口径 10.7 cm、器高 8.7 cm。短脚で、3 方向に方形の透かし窓が穿たれている。脚端部の上下に突帯を巡らせ、段を成している。杯部の立ち上がりはやや内傾してやや長く伸び、端部には浅い沈線が施されるが、断面形はほぼ平らである。短い受部はやや鈍く、ほぼ水平に伸びる。底部は時計回りの回転ヘラケズリで調整されている。TK23～TK47 型式と考えられる。

1885 は完形の有蓋高杯で、口径 10.1 cm、底径 8.8 cm、器高 9.8 cm。脚部は非常に短く、3 方向に円形の透かし窓が穿たれ脚端部は下方に屈曲し、上下に突帯を設け、カキ目を施している。杯部の立ち上がりはやや内傾してやや長く伸び、端部には沈線を描く。水平に伸びる受部は鋭く、やや短い。底部は反時計回りの回転ヘラケズリで調整されている。TK23～TK47 型式と考えられる。

1886 は有蓋高杯で、残存率 60%、口径 11.2 cm、底径 8.1 cm、器高 8.6 cm。脚部は非常に短く、3 方向に円形の透かし窓が穿たれ、端部付近に稜を設ける。端部は鋭く、上下に突出して段を成す。杯部の立ち上がりは長く、垂直に伸び、端部には沈線が施している。受部はやや長く、水平に伸びる。底部は時計回りの回転ヘラケズリ、体部は外面内面ともにヨコナデで調整されている。TK208 型式と推定される。

1887 は有蓋高杯で、復元口径 10.9 cm、底径 9.1 cm、復元器高 8.6 cm。脚部は短脚で、3 方向に方形の透かし窓が穿たれている。端部は上下に稜を有し、下方に屈曲する。杯部の立ち上がりはやや長く、内傾しながら伸び、端部は丸く収められている。受部はやや短く、水平に伸び、やや鈍い。底部は反時計回りの回転ヘラケズリで調整されている。TK208～TK23 型式と推定される。

1888 は完形の有蓋高杯で、口径 10.9 cm、底径 8.4 cm、器高 9.3 cm。脚部は短脚で 3 方向に方形の透かし窓が穿たれている。端部は上下に突帯を有し、下方に屈曲する。杯部の立ち上がりはやや長く、内傾するが、ほぼ垂直に伸び、端部は内に傾斜して平らである。受部はやや長く、外上方へ伸びる。底部は反時計回りの回転ヘラケズリ、脚部の外面はカキ目、内面はヨコナデで調整されている。TK23 型式と推定される。

1889 は完形の有蓋高杯で、口径 10.5 cm、底径 8.7 cm、器高 9.25 cm。脚部は短脚で、3 方向に方形の透かし窓が穿たれている。端部は上下に突帯を有し、下方に屈曲する。杯部の立ち上がりはやや長く、ほぼ垂直に伸び、端部は内傾して平らである。受部は

長く、水平に伸び、鋭い印象を受ける。底部は時計回りの回転ヘラケズリ、脚部はヨコナデで調整されている。TK23 型式と推定される。

1890 は有蓋高杯で、残存率 60%、口径 9.8 cm、底径 9.1 cm、器高 8.9 cm。脚部は短脚で、3 方向に方形の透かし窓が穿たれている。脚部の端部は上下に突帯を有し、下方に屈曲する。杯部の立ち上がりはやや内傾してやや長く伸び、端部は丸く収められている。やや長く伸びる受部は鋭く、水平である。底部は反時計回りの回転ヘラケズリで調整されている。TK23～TK47 型式と考えられる。

1891 は無蓋高杯で、残存率 40%、復元口径 17.2 cm、残存高 7.7 cm である。脚部を欠損しているが、短脚 3 方向透かしで、透かし窓は方形であると推定される。杯部の口縁部は外上方へ直線的に伸びるが、口縁端部でさらに外上方へ屈曲し、断面は丸形を呈する。体部には 2 条の突帯を巡らせ、その間に波状文を施している。調整は全てヨコナデである。TK208～TK23 型式のものと考えられる。

1892 は無蓋高杯で、残存率 75%、復元口径 16.6 cm、器高 10.0 cm である。杯部の口縁部は外反しながら伸び、端部は丸く収めている。胴部には 2 条の突帯を巡らせ、その下部に波状文を施している。脚部は短脚 3 方向透かしで、方形の透かし窓である。端部は上方へ稜を施され、下方へ屈曲している。底部外面は時計回りの回転ヘラケズリ、底部内面はロクロナデ、その他はヨコナデで調整されている。TK23 型式のものと考えられる。

1893 は無蓋高杯であるが、脚部を欠損している。残存率は 40%、口径 16.6 cm、残存高 7.1 cm。杯部の口縁部は外上方に直線的に伸びるが、口縁端部でさらに外上方へ外反し、丸く収めている。胴部には 2 条の突帯を巡らせ、その下部に波状文を施す。底部外面は回転ヘラケズリ、底部内面はロクロナデ、その他はヨコナデで調整されている。TK23～TK47 型式のものと考えられる。

1894 は無蓋高杯で、残存率は 90%、口径 11.6 cm、器高 7.7 cm。口縁端部はほぼ平らであるが、浅い沈線が施されている。口縁部と胴部の境界には弱い稜を設け、杯部の底部は回転ヘラケズリで調整される。非常に短い脚部には透かし窓が穿たれず、カキ目をほどこしている。端部は下方へやや鋭く屈曲している。TK23～TK47 型式相当のものと考えられる。

1895 は無蓋高杯で、上層から出土した。脚部以下を欠損しており、復元口径は 15.6 cm、残存高が 7.1 cm である。杯部は浅く、口縁部は外上方へ向かって直線的に開き、無文である。杯部にやや鋭い稜を施している。脚部を欠損しているが、3 方向透かしと推測できる。MT15 型式前後のものと考えられる。

1896 は無蓋高杯で、残存率 50%、口径 10.5 cm、残存高 3.7 cm で脚部を欠損している。口縁端部はやや鋭く尖り、外反しながら伸びている。胴部中央に列点文を施し、底部は回転ヘラケズリで調整される。脚部は 4 方向透かしで、方形の透かし窓である。小型で特殊な製品と言える。

1897 は甕で、残存率 40%、口径 10.0 cm、器高 9.65 cm で、胴部と口縁部はほぼ同じ器幅である。口縁端部はほぼ水平で、二段口縁を呈する。非常に短い頸部は外傾して直線的に伸び、波状文が巡る。肩部は張りが弱く、丸みを帯び、文様帯は施されない。また、胴部中央に穿孔透かしが穿たれる。胴部はヘラナデ、他はヨコナデで調整して

いる。TK23 型式のものと思われる。

1898 は完形の甗で、口径 9.8 cm、器高 9.7 cm、器幅 9.7 cm であり、口径と器幅がほぼ同じである。平らに仕上げられる口端部はほぼ水平で、口縁部は段を成し、さらにその下部に稜を設ける。肩部は張りがやや弱く丸みを帯びているが扁平であり、胴部はイチジク形である。底部はほとんど尖らず、丸みを帯びている。頸部に波状文、胴部上部に 2 条の沈線を描き、その間に列点文および円孔透かしを施す。TK23 型式のものと思われる。

1899 は甗で、残存率 70%、口径 11.4 cm、器高 15.7 cm、器幅 15.6 cm。口径よりも器幅が大きい。口端部は水平で平らに仕上げ、口縁部に稜を設ける。肩部はやや張り、胴部は楕円形を呈する。底部は尖らず、丸みを帯びている。頸部に波状文、胴部に 2 条の沈線を描き、その間に列点文および円孔透かしを施す。胴部文様帯の下部に櫛歯状の工具で回転ヘラケズリ、底部内面はナデ、その他は回転ナデで調整されている。TK208 型式のものと思われる。

1900 は甗で、残存率 85%、口径 10.1 cm、器高 9.9 cm、器幅 9.9 cm で、口径と器幅がほぼ同じである。平らに仕上げられる口端部はほぼ水平で、口縁部は段を成している。肩部は張りがやや弱く丸みを帯びているが扁平であり、胴部はイチジク形である。底部はあまり尖らず、丸みを帯びている。頸部に波状文、胴部上部に 2 条の沈線を描き、その間に列点文および円孔透かしを施す。胴部および底部にヘラ記号が見られる。TK23 型式のものと思われる。

1901 は甗であるが、口縁端部を欠損している。残存率 60%、残存高 8.7 cm である。外傾して直線的に伸びる頸部は非常に短く、波状文を巡らせている。肩部の張りは弱く、丸みを帯びて楕円形を呈する。胴部中央に円孔透かしと波状文を施している。TK23～TK47 型式のものと思われる。

1902 は甗であるが、口縁部を欠損している。残存率 60%、残存高 9.2 cm である。頸部は外傾して直線的に短く伸び、波状文を施している。肩部は非常に強く張り、全体的に楕円形を呈し、胴部中央に波状文および円孔透かしを施している。底部は平行叩き目文の叩き具で調整され、底部中央に穿孔がある。TK23～TK47 型式のものと思われる。

1903 は甗で、残存率 95%、口径 12.1 cm、器高 12.9 cm である。口端部に浅い沈線を施し、頸部は短く、外傾して直線的に伸び、カキ目が施されている。肩部はやや強く張っており、胴部中央に円孔透かしを穿ち、それよりも上半にカキ目を施している。TK23～TK47 型式のものと思われる。

1904 は壺で、復元口径 10.0 cm、残存高が 14.5 cm である。口端部は丸く仕上げられ、口頸部は凸部があり、そこに波状文が巡る。さらに凸部の上下に稜を設けている。胴部の肩はわずかに張るがやや扁平で、波状文が巡る。底部はヘラナデ、他はヨコナデで調整されている。古墳時代のものと推定される。

1905 は壺である。胴部以下を欠損しており、残存率は 30%、口径 21.1 cm、残存高 13.2 cm である。口縁部は上下に設けられた稜が突出し、端部付近にもやや鈍い稜が施されている。肩部の張りは確認できないが、全体的に丸みを帯びていると推定される。頸部に 2 つの波状文を巡らせ、胴部外面は平行叩き目文の叩き板、内面は無文の当て

具で調整されている。TK208 型式前後のものと同定される。

1906 はほぼ完形の短頸壺である。口径 10.1 cm、器高が 7.3 cm、口縁端部は丸く収められ、頸部は短く、垂直に屈曲している。胴部は非常に扁平であるが、やや丸みを帯びる。内面はロクロナデ、口縁端部から胴部上部までがヨコナデ、胴部中央がカキ目で調整されている。底部は 2 段階の回転ヘラケズリを施しており、外周(胴部側)が時計回り、内周(底側)が反時計回りで調整されている。底部に 3 条のヘラ記号、および重ね焼き痕が残存している。TK23～TK47 型式と考えられる。

1907 は短頸壺で、残存率 90%、口径 8.7 cm、器高が 9.1 cm である。口縁端部は丸く収められ、僅かに外方へ屈曲する頸部は短い。胴部は非常に扁平であるが、やや丸みを帯びている。内面はロクロナデ、口縁端部から胴部上部まではヨコナデで調整され、胴部中央に波状文が巡る。底部は平行叩き目文の叩き板で調整されている。TK23～TK47 型式と考えられる。

1908 は短頸壺で、残存率 60%、口径 7.1 cm、器高が 5.9 cm である。端部は丸く収められ、短い頸部は垂直に屈曲し、胴部はやや扁平である。端部から胴部上部までがヨコナデで調整され、底部は時計回りの回転ヘラケズリで調整されている。また、内部に有機物の付着物が残っている。

1909 は壺であるが、頸部以上を欠損している。残存率は 70%、残存高が 11.0 cm である。肩部はやや張っているが丸みを帯び、底部外面は平行叩き目文の叩き板で調整されている。

1910 は甕で、残存率 60%、口径 14.2 cm、器高 20.4 cm である。口縁端部に段を持ち、下方へ突出している。頸部は非常に短く、波状文を巡らせている。肩部はやや張り、全体的に楕円形である。外面は平行叩き目文の叩き板で調整されるが、底部には同一の叩き具を用いて格子状の痕跡を残す。また、内面は同心円文の当て具痕をすり消す。TK208～MT23 型式のものと同定される。

1911 は甕であるが、底部以下を欠損している。残存率 50%、口径 22.3 cm、残存高 32.5 cm である。口縁端部は上下にやや鈍い稜を持ち、非常に短い頸部には文様帯は施さないがヘラ記号を描いている。肩部はやや張り、底部は失われているために不明瞭であるが、全体的に楕円形である。外面は平行叩き目文の叩き板で調整した後カキ目を施し、内面は同心円文の当て具痕を丁寧にすり消す。TK208～MT23 型式のものと同定される。

1912 は甕で、残存率 95%、口径 17.2 cm、器高 23.9 cm である。口縁端部に段を持ち、頸部に波状文を巡らせている。肩部はさほど張っておらず、全体的に丸みを帯びている。外面は平行叩き目文の叩き板で調整され、内面は同心円文の当て具痕を残す。TK47～MT15 型式のものと同定される。

1913 は甕で、残存率 50%、復元口径 19.8 cm、器高 33.9 cm である。口縁端部は上下に鈍い稜を持ち、非常に短い頸部には文様帯を施さない。肩部はほとんど張らず、全体的に丸みを帯びている。外面に平行叩き目文の叩き板で調整した後カキ目を施し、内面は同心円文の当て具痕をナデによってすり消している。TK23 型式のものと同定される。

1914 は甕で、残存率 25%、復元口径 22.2 cm、残存高 28.5 cm である。口縁部は朝顔

形に外反し、端部は上下にやや鈍い稜を持つ。胴部は肩が張っておらず丸い。外面に平行叩きを施した後、わずかにナデを行う。内面には同心円文の当て具痕を残す。TK23～TK47 型式のものと考えられる。

石製品

1915 は播り石と推定され、最大長 27.4cm、最大幅 8.2cm、5.7cm である。

1916 は管玉で、全長 0.4cm、直径 0.65cm、孔径 0.2cm である。

(2) SR15

①遺構

C 地区 C 調査区で検出された旧河道で、幅 20.0m～30.0m、深さ 0.7m～1.2m で調査区の南東隅から北西隅へ流れている。埋土は砂層、粘土層、砂質土層に大別され、直径 0.1m～0.3m、長さ約 1.5m の木製杭を用いた護岸施設、堤防施設、橋脚施設が構築されていた。護岸施設は調査区南東、中央、北西部で、堤防施設は北西部で検出した。これらは、直径 0.1m 未満、長さ 2.0m 未満の木製杭を並立させ、内側に土砂を入れる構造になっている。橋脚遺構は南岸に残されており、直径約 0.3m の木柱が直立させて打ち込まれ、2本で一对を成す。

流路内および埋土からはサヌカイト剥片、土師器、須恵器、被熱痕のある凝灰岩切石、円筒埴輪、蛇紋岩製勾玉、木製鋤、軒丸瓦、軒平瓦、埴、斎串、墨書土器、土馬、馬歯などが出土した。

C 調査区外へ伸びる流路はその後、F 地区 F 調査区、J 地区 J 調査区、下田東 1 号墳の南側、第 17 トレンチを通過しさらに北進する流路と考えられる。

②遺物

土師器

1917～1924 は人面墨書土器である。

1917 は土師器甕の胴部片で、残存高 6.5 cm、外面にハケ、内面にナデを施す。外面に墨で右眼と肩、鼻が表現されている。

1918 は土師器甕の胴部片で、残存高 4.4 cm、外面にハケ、内面にナデを施す。外面に墨で顔の一部分が表現されている。

1919 は土師器甕の頸部片で、残存高 3.1 cm、外面にハケ、内面にナデを施す。外面に墨で眼と肩が表現されている。

1920 は土師器甕で、口径 15.0 cm、残存高 8.1 cm、口縁部は外反し、端部が肥厚する。口縁部外面にヨコナデ、口縁部内面にヨコハケ、胴部外面にナナメハケ、胴部内面に指オサエの後ナデを施す。人面は両眼、肩、鼻が表現されているが、鼻以下を欠損している。他の人面墨書土器は眼が細く表現されているが、当例のみ丸く描かれており、子供を表現した可能性がある。

1921 は土師器甕で、口径 16.8 cm、器高 16.4 cm、口縁部は外反して端部が肥厚し、胴部は球形を呈する。口縁部外面にヨコナデ、口縁部内面にヨコハケ、胴部外面にタテハケおよびナナメハケ、胴部内面に板ナデおよび指オサエの後ナデを施す。人面は、2面が連続して描かれる。1面は肩が広く、両眼、鼻、口、髭が表現されている。も

う1面も両眼、鼻、口、髭が同様に描かれているが、右眼、髭を欠損している。髭の表現から男性と判断することができる。鼻の表現などが両面に共通していることから、一連の図化を行ったと思われる。

1922は土師器甕で、口径17.3cm、残存高16.8cm、口縁部は外反し、端部が肥厚する。胴部は球形を呈し、墨書によって両眼、眉、鼻、口、髭が描かれている。髭の表現から男性と考えられる。もう1点(1924)の墨書土器と鼻の表現が同様であり、書き手は同一人物と思われる。口縁部にヨコナデ、胴部外面にタテハケおよびナメハケ、胴部内面にはナデ、下半のみ指オサエの後ハケを施す。また、煤が付着している。

1923は土師器甕である。体部のみ残存しており、残存高は26.7cm。体部外面にタテハケおよびナメハケ、体部内面に指オサエ後ナデが施される。また、体部外面に人面が二面描かれている。一面は眉毛、眼、髭が表現され、顔の左半分が残存している。もう一面は反対面に描かれており、口、髭部分のみ確認することができる。両面とも全容は不明ではあるが、どちらも髭が表現されており、男性と思われる。

1924は土師器甕で、口径31.1cm、残存高8.0cm、残存率60%、口縁部は外反し、端部が肥厚する。人面は胴部に2面描かれている。1面は両眼、眉、鼻を確認することができるが、顔半分を欠損している。もう1面は反対側にあり、右眼と髭のみ残存している。口縁部外面にヨコナデ、内面にヨコハケ、胴部外面にタテハケ、胴部内面には板ナデを施す。

1931～1942は墨書土器である。

1931は土師器皿で、口径22.0cm、器高2.7cm、口縁端部が肥厚する。底面の墨書は、「妙」か「於」と思われる。口縁部にヨコナデ、体部外面にケズリ、体部内面にナデを施す。

1925は土師器杯で、残存高0.4cm。欠損部位があるため判読できないが、一文字の下部に「山」の文字を読み取ることができる。体部外面に指オサエの後ナデ、体部内面にナデを施す。

1926は土師器杯で、残存高3.1cm、体部外面にケズリ、体部内面にナデを施す。

1927は土師器杯で、口径18.4cm、器高3.1cm、底面に「西」と書かれる。底面中央にも文字があるが、墨書したのちに穿孔されている。口縁部にヨコナデ、体部外面にケズリ、体部内面にナデを施す。また、煤が付着している。

1928は土師器杯で、口径15.0cm、器高3.8cm。外面に逆「の」字状の記号が墨書される。口縁部にヨコナデ、体部外面に指オサエの後ナデ、体部内面にナデを施す。

1929は土師器杯で、口径12.7cm、器高3.5cm、残存率85%。内外面それぞれに螺旋状の墨書を施し、器面を装飾している。また、外面には朱彩が残っている。口縁部にヨコナデ、体部外面に指オサエの後ナデ、体部内面にナデを施す。

1930は土師器杯で、口径14.2cm、器高3.2cm。底面に「日」と書かれる。口縁部にヨコナデ、体部外面に指オサエの後ケズリ、体部内面にはナデを施す。

1932は土師器杯で、口径18.2cm、器高4.2cm、底面に「花術」と墨書されている。口縁部にヨコナデ、体部外面にケズリの後ミガキ、体部内面にナデを施す。

1933は土師器杯で、口径14.5cm、器高2.9cm。底面に逆「の」字状の文字が書かれる。口縁部にヨコナデ、体部外面に指オサエの後ナデ、体部内面にナデを施す。

1934 は土師器杯で、口径 11.9 cm、器高 3.6 cm。底面に墨書があり、「古」?と書かれている。口縁部にヨコナデ、体部外面にケズリ、体部内面にナデを施す。

1935 は土師器杯で、口径 12.2 cm、器高 3.3 cm。底面に梵字「ベイ」と思われる墨書を確認することができる。口縁部にヨコナデ、体部は外面にケズリ、内面にナデを施す。

1936 は土師器杯で、口径 13.7 cm、器高 3.2 cm、底面に墨書がある。口縁部にヨコナデ、体部外面にケズリ、体部内面にナデを施す。

1937 は土師器杯で、口径 16.9 cm、器高 4.2 cm、残存率 30%。底面に「東」の異体字が書かれている。口縁部にヨコナデ、体部外面に指オサエの後ケズリ、体部内面にナデを施す。

1938 は土師器碗で、口径 13.4 cm、底径 8.0 cm、器高 4.0 cm、残存率 50%。底に高台を貼り付け、底面に墨書がある。口縁部にヨコナデ、体部内外面および底部にナデ、見込みに平行ミガキを施す。

1939 は土師器甕の胴部片で、残存高 6.5 cm、外面にハケ、内面にナデを施す。

1940 は土師器甕の胴部片で、残存高 8.3 cm、外面にハケ、内面にナデを施す。

1941 は土師器甕の胴部片で、残存高 10.5 cm、外面にハケ、内面に板ナデを施す。

1942 は土師器甕で、口径 13.6 cm、残存高 7.8 cm、口縁部は外反する。口縁部外面にタテハケの後ヨコナデ、口縁部内面にヨコハケ、胴部は外面にナデ、内面に指オサエおよびナデを施す。また、外面に墨書が見られる。

1943～1945 はミニチュア土器で、土師器高杯である。

1943 は手捏ね成形である。口径 7.8 cm、残存高 4.0 cm、杯部外面に指オサエの後ナデ、杯部内面に指オサエ、脚部外面に面取りを施す。

1944 は手捏ね成形である。脚部のみ残存しており、底径 5.8 cm、残存高 3.7 cm。外面に指オサエの後ナデ、内面に指オサエを施す。また、内面にはしぼり痕が残る。

1945 は杯部のみ残存しており、口径 8.6 cm、残存高 3.0 cm、残存率 20%、口縁部にヨコナデ、杯部内外面にナデを施す。

1946 はミニチュアの土師器壺と思われる。手捏ねで成形されており、残存高は 4.0 cm、残存率 30%である。外面に指オサエおよびナデ、内面に指オサエを施す。また、外面に赤色顔料が残る。

1947 はミニチュアの甗で、口径 1.9 cm、器高 3.0 cm。胴部内外面にナデ、底部外面にケズリを施す。

1948 は土師器ミニチュア甗で、前面のみ残存している。

1949 は土師器ミニチュア甗で、前面のみ残存している。

1950～1999 は土師器皿である。

1950 は口径 10.6 cm、器高 1.6 cm、残存率 97%である。口縁部にヨコナデ、体部外面に指オサエ、体部内面に指オサエの後ナデを施す。

1951 は口径 9.0 cm、器高 1.7 cm、残存率 30%である。口縁部にヨコナデ、体部内外面に指オサエの後ナデを施す。

1952 は口径 16.2 cm、器高 2.3 cm、口縁端部が肥厚する。口縁部にヨコナデ、外面にケズリ、内面にナデを施す。

1953 は口径 15.0 cm、器高 2.2 cm、残存率 90%。口縁部にヨコナデ、体部外面にケズリ、体部内面にナデ、底部外面に指オサエの後ケズリを施す。また、煤が付着している。

1954 は口径 14.9 cm、器高 2.6 cm、残存率 95%。口縁部にヨコナデ、体部外面に指オサエの後ケズリ、体部に内面ナデを施す。

1955 は口径 12.9 cm、器高 2.8 cm、残存率 90%、口縁端部が肥厚する。口縁部にヨコナデ、体部外面に指オサエ、体部内面にナデを施す。また、煤が付着している。

1956 は口径 12.9 cm、器高 2.8 cm、残存率 90%、口縁端部が肥厚する。口縁部にヨコナデ、体部外面に指オサエ、体部内面はナデの後、放射線状および連孤状の暗文を施す。

1957 は口径 20.0 cm、器高 2.4 cm、残存率 25%である。口縁端部は肥厚し、口縁部にヨコナデ、体部外面にケズリ、体部内面にナデを施す。

1958 は口径 19.7 cm、器高 2.0 cm、残存率 20%、口縁端部が肥厚する。口縁部にヨコナデ、体部外面にケズリ、体部内面にナデを施す。

1959 は口径 19.6 cm、底径 15.6 cm、器高 2.7 cm、残存率 10%である。口縁端部は肥厚し、底に高台を貼り付ける。口縁部にヨコナデ、体部は外面にケズリ、内面にナデの後、放射線状の暗文を施す。

1960 は口径 20.7 cm、器高 2.7 cm、口縁端部は肥厚する。口縁部にヨコナデ、体部内外面にナデを施す。

1961 は口径 20.3 cm、器高 3.3 cm、残存率 90%。口縁部にヨコナデ、体部外面に指オサエの後ナデ、体部内面にナデを施す。

1962～1999 は土師器皿で、口縁部が「て」字状を呈する。

1962 は口径 12.7 cm、残存高 2.4 cm、残存率 80%。口縁部にヨコナデ、体部外面に指オサエ、体部内面にナデを施す。

1963 は口径 11.8 cm、残存高 2.3 cm、残存率 40%。口縁部にヨコナデ、体部外面に指オサエ、体部内面にナデを施す。煤が付着していることから、灯明皿と考えられる。

1964 は口径 9.3 cm、器高 1.8 cm、残存率 60%。口縁部にヨコナデ、体部外面に指オサエの後ナデ、体部内面にナデを施す。灯明皿と思われる。

1965 は口径 10.8 cm、器高 1.3 cm、残存率 25%。口縁部にヨコナデ、体部外面に指オサエの後ナデ、体部内面にナデを施す。

1966 は口径 14.3 cm、残存高 3.0 cm、残存率 55%。口縁部にヨコナデ、体部外面に指オサエ、体部内面に指オサエの後ナデを施す。

1967 は口径 14.5 cm、器高 2.3 cm、残存率 40%。口縁部にヨコナデ、体部外面に指オサエ、体部内面に指オサエの後ナデを施す。

1968 は口径 16.5 cm、残存高 3.4 cm、残存率 40%。口縁部にヨコナデ、体部外面に指オサエおよびナデ、体部内面に指オサエの後ナデを施す。

1969 は口径 12.6 cm、残存高 2.8 cm、残存率 40%。口縁部にヨコナデ、体部外面に指オサエおよびナデ、体部内面に指オサエの後ナデを施す。

1970 は口径 13.0 cm、残存高 3.1 cm、残存率 30%。口縁部にヨコナデ、体部内外面に指オサエの後ナデを施す。

1971 は口径 11.9 cm、器高 1.9 cm、残存率 55%。口縁部にヨコナデ、体部外面に指オサエ、体部内面にナデを施す。

1972～1975 は、口縁部にヨコナデ、体部外面に指オサエ、体部内面に指オサエの後ナデを施す。

1972 は口径 11.0 cm、残存高 1.9 cm、残存率 75%。

1973 は口径 13.0 cm、器高 2.1 cm、残存率 60%。

1974 は口径 10.8 cm、器高 1.9 cm、残存率 45%。

1975 は口径 11.8 cm、器高 1.6 cm、残存率 40%。

1976～1979 は口縁部ヨコナデ、体部外面に指オサエ、体部内面にナデを施す。

1976 は口径 10.8 cm、器高 1.4 cm、完形。

1977 は口径 9.8 cm、器高 1.9 cm、残存率 40%。

1978 は口径 11.8 cm、器高 1.6 cm、残存率 45%。

1979 は口径 13.0 cm、器高 2.0 cm、残存率 45%。

1980～1983 は口縁部にヨコナデ、体部外面に指オサエ、体部内面にナデを施す。

1980 は口径 9.0 cm、器高 1.5 cm、完形。

1981 は口径 9.4 cm、器高 1.7 cm 残存率 95%。

1982 は口径 9.7 cm、器高 1.8 cm、完形。

1983 は口径 9.7 cm、器高 1.9 cm、完形。口縁部にヨコナデ、体部外面に指オサエの後ナデ、体部内面にナデを施す。

1984、1985 は口縁部にヨコナデ、体部外面に指オサエ、体部内面に指オサエの後ナデを施す。

1984 は口径 8.9 cm、器高 1.5 cm、残存率 80%。

1985 は口径 12.7 cm、器高 2.1 cm、残存率 90%。

1986 は口径 9.9 cm、器高 1.9 cm、残存率 90%。口縁部にヨコナデ、体部外面に指オサエ、体部内面にナデを施す。

1987 は口径 9.6 cm、器高 1.9 cm、完形で、灯明皿と思われる。口縁部にヨコナデ、体部外面に指オサエ、体部内面に指オサエの後ナデを施す。

1988、1989 は口縁部にヨコナデ、体部内外面に指オサエの後ナデを施す。

1988 は口径 9.7 cm、器高 1.8 cm、残存率 98%。

1989 は口径 11.0 cm、器高 2.3 cm、残存率 98%。煤が付着している。

1990 は口径 10.6 cm、底径 5.9 cm、器高 2.4 cm。底に高台を貼り付ける。口縁部にヨコナデ、体部外面に指オサエ、体部内面にナデ、底部にナデを施す。また、煤が付着している。

1991 は口径 9.8 cm、器高 1.6 cm、残存率 98%。口縁部にヨコナデ、体部外面に指オサエ、体部内面に指オサエの後ナデを施す。

1992 は口径 10.9 cm、器高 2.0 cm、残存率 98%。口縁部にヨコナデ、体部外面に指オサエ、体部内面に指オサエの後ナデを施す。

1993 は口径 11.6 cm、器高 2.4 cm、残存率 98%。口縁部にヨコナデ、体部外面に指オサエ、体部内面に指オサエの後ナデを施す。

1994 は口径 14.6 cm、器高 2.5 cm、完形。口縁部にヨコナデ、体部外面に指オサエ、

体部内面にナデを施す。

1995 は口径 10.8 cm、器高 2.1 cm、残存率 98%、口縁部にヨコナデ、体部外面に指オサエの後ナデ、体部内面にナデを施す。

1996 は口径 10.0 cm、器高 1.9 cm、残存率 98%、口縁部にヨコナデ、体部外面に指オサエ、体部内面にナデを施す。また、煤が付着している。

1997 は口径 9.5 cm、器高 1.7 cm、残存率 40%、口縁部にヨコナデ、体部内外面に指オサエの後ナデを施す。

1998 は口径 10.4 cm、器高 1.7 cm、残存率 98%、口縁部にヨコナデ、体部外面に指オサエ、体部内面に指オサエの後ナデを施す。

1999 は口径 10.1 cm、器高 1.8 cm、残存率 60%、口縁部にヨコナデ、体部外面に指オサエの後ナデ、体部内面にナデを施す。

2000 は上師器杯蓋で、口径 19.3 cm、器高 4.5 cm、宝珠つまみがつく。口縁部にヨコナデ、天井部外面にケズリの後ミガキ、内面にナデを施す。

2001 は上師器杯蓋で、口径 15.4 cm、器高 2.9 cm。口縁部にヨコナデ、天井部外面にナデの後ミガキ、内面にナデを施す。

2002～2024 は上師器杯である。

2002 は口径 13.1 cm、器高 3.7 cm、口縁部にヨコナデ、体部外面に指オサエ、体部内面にナデを施す。

2003 は口径 13.2 cm、器高 4.4 cm。口縁部にヨコナデ、体部内外面に指オサエの後ナデを施す。

2004 は口径 11.8 cm、器高 3.1 cm、残存率 75%。口縁部にヨコナデ、体部外面に指オサエの後ナデ、体部内面にナデの後、放射線状の暗文を施す。

2005 は口径 14.5 cm、器高 3.8 cm、残存率 80%。口縁部にヨコナデ、体部外面に指オサエ、体部内面にナデを施す。

2006 は口径 14.4 cm、器高 3.3 cm、残存率 90%。口縁部にヨコナデ、体部外面に指オサエ、体部内面には指オサエの後ナデを施す。

2007 は口径 12.7 cm、器高 3.8 cm、完形。口縁部にヨコナデ、体部外面に指オサエ、体部内面にナデを施す。

2008 は口径 13.4 cm、器高 2.8 cm、残存率 50%。口縁部にヨコナデ、体部外面に指オサエの後ナデ、体部内面にナデの後、放射線状の暗文を施す。

2009 は口径 13.1 cm、器高 3.7 cm、完形。口縁部にヨコナデ、体部外面に指オサエの後ナデ、体部内面にナデを施す。

2010 は口径 12.4 cm、器高 3.8 cm、残存率 85%。焼成後、体部に穿孔を施す。

2011 は口径 16.4 cm、器高 4.1 cm、完形。口縁部にヨコナデ、体部外面に指オサエの後ケズリ、体部内面にナデを施す。また、煤、炭化物が付着している。

2012 は口径 15.6 cm、残存率 3.8 cm、最下層から出土した。口縁部にヨコナデ、体部外面に指オサエの後ナデ、体部内面にナデの後、放射線状および連弧状の暗文を施す。

2013 は口径 17.2 cm、器高 4.2 cm、最下層から出土した。口縁部にヨコナデ、体部外面に指オサエ、体部内面にナデの後、放射線状の暗文を施す。また、内面に線刻を

施す。

2014 は口径 18.2 cm、器高 4.7 cm、残存率 98%。体部に把手が取り付くが、残存していない。口縁部にヨコナデ、体部外面にケズリの後ミガキ、体部内面にナデを施す。

2015 は口径 21.0 cm、器高 5.9 cm。口縁部にヨコナデ、体部内外面に指オサエの後ナデを施す。

2016 は口径 28.5 cm、底径 21.5 cm、器高 4.6 cm。口縁端部が肥厚し、底に高台を貼り付ける。口縁部にヨコナデ、体部外面にケズリの後ヨコミガキ、体部内面にはナデを施す。

2017 は口径 16.0 cm、器高 3.9 cm、残存率 90%。口縁部にヨコナデ、体部外面にケズリ、体部内面にはナデの後、放射線状の暗文を施す。

2018 は口径 15.0 cm、器高 4.1 cm、残存率 70%。口縁部にヨコナデ、体部外面に指オサエの後ナデ、体部内面にナデの後、放射線状および連弧文状の暗文を施す。

2019 は口径 12.4 cm、器高 4.0 cm、完形。口縁部にヨコナデ、体部外面に指オサエの後ナデ、体部内面にナデを施す。また、内面に「井」状の線刻がある。

2020 は口径 13.4 cm、器高 2.5 cm、完形。内面に「井」状の記号の線刻が施されている。口縁部にヨコナデ、体部外面に指オサエの後ナデ、体部内面にはナデの後、放射線状の暗文を施す。

2021 は口径 12.8 cm、器高 2.9 cm、残存率 97%。口縁部にヨコナデ、体部外面に指オサエの後ナデ、体部内面にナデの後、放射線状および連弧状の暗文を施す。

2022 は口径 13.7 cm、器高 3.7 cm。口縁部にヨコナデ、体部外面に指オサエ、体部内面にナデの後、放射線状の暗文を施す。

2023 は口径 18.4 cm、器高 4.3 cm、残存率 99%。口縁部にヨコナデ、体部内外面にナデを施す。また、内面にはナデの後、二段放射線状および連弧文状の暗文が施される。

2024 は口径 19.6 cm、器高 4.5 cm、残存率 25%、口縁端部が肥厚する。口縁部にヨコナデ、体部外面にケズリの後ヨコミガキ、体部内面にはナデの後、二段放射線状および連弧状の暗文を施す。

2025～2033 は土師器高杯である。

2025 は杯部のみ残存しており、口径 17.0 cm、残存高 4.9 cm、口縁部にヨコナデ、体部外面に指オサエ後ナデ、体部内面にはナデの後放射線状暗文が施される。

2026 は杯部のみ残存している。口径 16.8 cm、残存高 4.7 cm、残存率 25%、稜をもつ。口縁部にヨコナデ、杯部外面に指オサエの後ナデ、杯部内面にナデの後、放射線状および平行の暗文を施す。

2027 は脚部のみ残存しており、残存高は 5.0 cm である。杯部内面にナデ、脚部外面に面取り、脚部内面にナデを施す。

2028 は口径 10.1 cm、残存高 6.8 cm、脚底部を欠損している。口縁部にヨコナデ、杯部は内外面にナデ、脚部外面に指オサエの後ナデを施す。また、脚部内面にしぼり痕が残る。

2029 は口径 11.6 cm、底径 8.7 cm、器高 8.4 cm、残存率 95%。口縁部にヨコナデ、杯部外面に指オサエの後ナデ、杯部内面にナデ、脚部は外面にナデ、底部外面にヨコ

ナデを施す。また、脚部内面にはしぼり痕が残る。

2030は口径16.0cm、底径9.6cm、器高12.2cm。口縁部にヨコナデ、杯部外面をタテハケ、杯部内面をナデを施す。脚部は外面に面取り、脚底部外面にハケ、脚底部内面に指オサエおよびナデを施す。また、脚部内面にはしぼり痕が残る。

2031は口径18.2cm、底径9.6cm、器高13.4cm。口縁部にヨコナデ、杯部内外面にナデ、脚部は外面に面取りを施す。脚底部は外面をナデ、内面を指オサエで調整する。また、脚部内面にはしぼり痕が残る。

2032は脚部のみ残存している。底径14.8cm、残存高11.0cm、残存率35%。脚部は外面を9面に面取りし、内面にナデ、脚底部にヨコナデを施す。

2033は底径17.2cm、残存高20.6cm、脚部のみ残存している。脚部外面は面取りによって七角柱を呈し、内面にケズリが施される。脚底部は外面をナデの後ミガキ、内面をナデで仕上げる。

2034～2040は土師器碗である。

2034は手捏ねで、口径11.7cm、器高5.7cm。口縁部にヨコナデ、体部外面に指オサエ、体部内面に指オサエの後ナデ、底部外面にケズリを施す。

2035は口径14.6cm、底径8.4cm、器高4.4cm、残存率20%、底に高台を貼り付ける。口縁部にヨコナデ、体部内外面にナデを施す。

2036は口径10.4cm、器高3.7cm、残存率30%。口縁部にヨコナデ、体部外面にヨコミガキ、体部内面にナデを施す。

2037は口径12.3cm、器高4.6cm、残存率40%。口縁部にヨコナデ、体部外面に指オサエの後ナデ、体部内面にナデを施す。

2038は口径14.6cm、器高5.7cm、残存率20%。口縁部にヨコナデ、体部外面にナデ、体部内面にナデの後、放射線状の暗文を施す。また、煤が付着している。

2039、2040は口縁部にヨコナデ、体部外面に指オサエ、体部内面にナデを施す。

2039は口径13.1cm、器高4.1cm、完形。2040は口径12.4cm、器高4.1cm、完形。

2044は土師器の大型碗で、口径26.8cm、残存高11.7cm。口縁部にヨコナデ、体部外面に指オサエの後ヨコハケおよびナメハケ、体部内面に指オサエの後、板ナデを施す。

2041は土師器鉢で、口径14.3cm、残存高6.2cm、口縁部は外反する。口縁部にヨコナデ、体部外面に指オサエ、胴部内面には指オサエの後ナデを施す。

2045は土師器鉢で、口径18.2cm、残存高2.8cm、口縁部が外に開き、底に高台を貼り付ける。口縁部にヨコナデ、胴部外面にケズリの後ヨコミガキ、胴部に内面ナデ、底部内面にナデを施す。

2042は土師器鉢で、口径10.0cm、器高8.1cm。最下層から出土した。口縁部が外反し、胴部は球形を呈する。口縁部にヨコナデ、胴部外面にナデ、胴部内面にケズリ、下半にはナデを施す。

2043は土師器の広口鉢で、口径10.0cm、器高8.1cm、残存率90%、口縁部は外反し、底部が丸みを帯びた平底を呈する。口縁部にヨコナデ、胴部内外面に指オサエの後ナデを施す。

2046は土師器壺で、口径14.2cm、器高23.3cm、残存率70%。口縁部が直立し、胴

部は球形を呈し、把手がとりつく。底部は丸みを帯びた平底である。口縁部外面にヨコナデの後タテミガキ、胴部は外面にヨコミガキ、下半のみケズリ、内面に板ナデを施す。

2047～2070 は土師器甕である。

2047 は口径 16.6 cm、残存高 15.4 cm、口縁部が外反し、胴部は球形を呈する。口縁部にヨコナデ、口縁部内面にヨコハケ、胴部外面にタテハケおよびナナメハケ、胴部内面に指オサエの後、板ナデを施す。

2048 は口径 17.6 cm、残存高 10.2 cm、残存率 75%、口縁部が直立する。口縁部にヨコナデ、胴部外面にタテハケの後ナデ、胴部内面にナデを施す。

2049 は口径 19.1 cm、器高 18.7 cm、残存率 80%。口縁部外面にヨコナデ、内面にヨコハケ、胴部外面にタテハケおよびナナメハケ、胴部内面にナデを施す。

2050 は口径 17.2 cm、器高 14.3 cm、口縁部が外反し、胴部は球形を呈する。また、底部に穿孔が施される。口縁部にヨコナデ、口縁部内面にヨコハケ、胴部外面にタテハケおよびナナメハケ、胴部内面に指オサエの後、板ナデを施す。

2051 は口径 28.4 cm、器高 26.6 cm、口縁部が外反し、胴部は球形を呈する。口縁部にヨコナデ、胴部外面にタテハケおよびナナメハケ、胴部内面にはナデを施す。

2052 はほぼ丸形で、口径 13.3 cm、器高 12.9 cm。口縁部が外反し、胴部は球形を呈する。口縁部外面にヨコナデ、内面にヨコハケ、胴部外面にタテハケおよびナナメハケ、胴部内面にナデ、下半のみ指オサエの後ナデを施す。

2053 は丸形で、口径 13.7 cm、器高 13.0 cm。口縁部が外反し、胴部は球形を呈する。口縁部にヨコナデ、胴部外面に粗いタテハケの後ヨコナナメハケ、胴部内面にヨコハケおよびナデを施す。

2054 は口径 15.1 cm、器高 13.9 cm、ほぼ丸形。外反する口縁部は端部が肥厚し、胴部は球形を呈する。口縁部にヨコナデ、胴部外面にヨコハケおよびタテハケ、胴部内面には指オサエの後ナデを施す。また、煤が付着している。

2055 は口径 16.0 cm、残存高 16.8 cm、残存率 95%。外反する口縁部は端部が肥厚し、胴部は球形を呈する。口縁部にヨコナデ、胴部外面にタテハケおよびナナメハケ、胴部内面に指オサエの後ナデを施す。また、煤が付着している。

2056 は口径 16.2 cm、残存高 14.8 cm、口縁部が外反して端部は肥厚し、胴部は球形を呈する。口縁部外面にヨコナデ、内面にヨコハケ、胴部は外面に粗いタテハケおよびナナメハケ、内面に指オサエの後ナデを施す。また、煤が付着している。

2057 は口径 11.8 cm、器高 12.2 cm、口縁部が外反し、胴部は球形を呈する。口縁部にヨコナデ、胴部外面にタテハケおよびナナメハケ、胴部内面に指オサエの後、板ナデを施す。

2058 は口径 14.9 cm、器高 13.0 cm、口縁部が外反し、胴部は球形を呈する。口縁部にヨコナデ、胴部外面にタテハケ、胴部内面には指オサエの後、板ナデを施す。

2059 は丸形の小型甕で、口径 11.9 cm、器高 10.5 cm。口縁部は外反し、胴部は球形、底部は丸みを帯びた平底である。口縁部にヨコナデ、胴部外面にタテハケ、胴部内面に指オサエの後ナデを施す。また、炭化物が付着している。

2060 は口径 15.3 cm、残存高 16.3 cm、口縁部が外反し、胴部は球形を呈する。また、

底部に穿孔を施す。口縁部外面にヨコナデ、口縁部内面にヨコハケ、胴部外面にタテハケ、胴部内面に指オサエの後、板ナデを施す。

2061は口径36.2cm、器高30.1cm、残存率95%。外反する口縁部は端部が肥厚し、胴部は球形を呈する。口縁部にヨコナデ、胴部外面にナデ、胴部内面には指オサエの後、板ナデを施す。

2062は把手付甕で、口径12.0cm、残存高10.5cm、残存率90%、口縁部が外反し、胴部は球形を呈する。口縁部にヨコナデ、胴部外面にタテハケおよびナナメハケ、胴部内面に指オサエの後ナデを施す。また、胴部に穿孔が施されている。

2063は口径29.3cm、残存高12.2cm、口縁部は外反して端部が肥厚し、胴部に把手がとりつく。また、底部が打ち欠かされている。口縁部にヨコナデ、胴部外面にタテハケおよびナナメハケ、胴部内面に指オサエの後、板ナデを施す。

2064は口径24.0cm、残存高20.7cm、残存率90%。口縁部が外反し、球形を呈する胴部には把手がとりつく。口縁部外面にヨコナデ、内面にヨコハケ、胴部外面にタテハケおよびナナメハケ、胴部内面に指オサエの後ナデを施す。また、底部に穿孔が施されている。

2065は口径27.6cm、残存高24.3cm、残存率30%。口縁部が外反して端部は肥厚し、球形を呈する胴部に把手がとりつく。口縁部にヨコナデ、胴部外面にタテハケおよびナナメハケ、胴部内面に指オサエの後、板ナデを施す。

2066は長胴甕で、口径28.6cm、残存高19.1cm、残存率70%。口縁部外面にヨコナデ、内面にヨコハケ、胴部外面にタテハケ、胴部内面には板ナデを施す。

2067は長胴甕で、口径21.3cm、残存高24.6cm、残存率75%、口縁部が外反する。口縁部にヨコナデ、胴部内外面に指オサエの後ナデを施す。また、底部に穿孔が施されている。

2068は長胴甕で、残存高33.2cm、残存率90%、口縁部を欠損している。口縁部にヨコナデ、胴部外面にタテハケ、胴部内面に指オサエの後、板ナデを施す。また、底部に穿孔が施されている。

2069は長胴甕で、口径24.8cm、器高35.1cm、口縁部が外反する。口縁部にヨコナデ、口縁部内面にヨコハケ、胴部外面にタテハケ、下半にはヨコハケ、胴部内面に指オサエの後ナナメハケを施す。

2070は長胴甕で、口径27.2cm、残存高35.5cm、口縁部は外反し、端部が肥厚する。口縁部にヨコナデ、胴部外面にタテハケ、胴部内面には指オサエの後、板ナデを施す。

2071は土師器鍋で、口径33.4cm、残存高5.5cm、残存率30%、口縁部は外反し、端部が肥厚する。胴部は長胴を呈し、把手がとりつく。口縁部外面にタテハケの後ヨコナデ、内面にヨコハケ、胴部は外面に指オサエの後ナデ、内面にナデを施す。

2072は土師器鍋で、口径29.6cm、残存高10.4cm、残存率65%、口縁部は外に開き、端部が肥厚し、胴部には把手がとりつく。口縁部外面にヨコナデ、内面ヨコハケ、胴部外面にタテハケおよびナナメハケ、胴部内面にナデおよび指オサエの後、板ナデを施す。

2073は土師器鍋で、口径35.0cm、器高14.8cm、口縁部が外に開く。口縁部にヨコナデ、胴部内外面にナデ、胴部内面に指オサエの後ナデを施す。

2074 は土師器鍋で、口径 41.0 cm、器高 18.9 cm、残存率 30%。口縁部は外に開き、外面にヨコナデ、胴部外面にタテハケおよびナナメハケ、胴部内面に板ナデを施す。また、煤が付着している。

2075 は土師器羽釜で、口径 24.4 cm、残存高 8.6 cm、残存率 30%、口縁部は外反し、端部が肥厚する。口縁部にヨコナデ、胴部外面にナデ、胴部内面に指オサエおよびナデを施す。また、煤が付着している。

2076 は土師器羽釜で、口径 25.4 cm、残存高 14.2 cm、残存率 50%、口縁部は外反し、胴部に鏝を貼り付ける。口縁部にヨコナデ、胴部外面にナデ、胴部内面には指オサエおよびナデを施す。また、煤が付着している。

2077 は土師器羽釜で、胴部のみ残存しており、残存高 18.7 cm。口縁、鏝を打ち欠いている。溜め井等の杵として使用されたと考えられる。胴部内外面にナデを施す。また、煤が付着している。

2078 は土師器羽釜で、口径 27.3 cm、残存高 28.5 cm、口縁部は外反し、端部が肥厚する。胴部は球形を呈し、底部を打ち欠いている。口縁部にヨコナデ、胴部外面にナデ、下半のみナナメハケおよびヨコハケ、胴部内面に指オサエの後、板ナデを施す。また、煤が付着している。

2079 は土師器羽釜で、口径 23.0 cm、残存高 22.0 cm、残存率 40%、口縁部は外反し、端部が肥厚する。胴部は球形を呈し、鏝を貼り付ける。口縁部にヨコナデ、胴部外面に指オサエの後ナデ、下半には板ナデ、胴部内面に指オサエおよびナデを施す。また、煤が付着している。

2080 は土師器甕と思われる。口径 29.0 cm、残存高 24.5 cm、残存率 33%。口縁部外面にヨコナデ、内面にヨコハケ、胴部外面に粗いタテハケおよびナナメハケ、胴部内面にケズリの後ナデを施す。

2081 は土師器甕で、底径 41.4 cm、残存高 19.4 cm、残存率 15%、底部のみ残存している。外面にタテハケ、内面に板ナデを施す。また、煤が付着している。

黒色土器

2082 は黒色土器 A 類碗で、口径 14.0 cm、底径 7.0 cm、器高 5.1 cm、底に高台を貼り付ける。底面に墨書があり、文字ないし記号が書かれている。口縁部にヨコナデ、体部外面にナデ、体部内面にミガキ、底部にナデを施す。

2083 は黒色土器 A 類杯で、口径 13.4 cm、底径 4.8 cm、器高 2.6 cm、底に高台を貼り付ける。底面に「東」と墨書したのちに凹孔を穿つ。口縁部にヨコナデ、体部外面にケズリ、体部内面にミガキ、底部にナデを施す。

2084 は黒色土器 A 類杯で、口径 18.3 cm、器高 5.0 cm、残存率 80%。口縁部にヨコナデ、体部外面にミガキおよびナデ、体部内面にヨコミガキを施す。

2085 は黒色土器 A 類杯で、口径 14.5 cm、残存高 3.4 cm、残存率 25%。口縁部にヨコナデ、体部外面にケズリ、体部内面にヨコミガキを施す。

2086 は黒色土器 A 類碗で、口径 14.3 cm、底径 6.2 cm、器高 5.2 cm、底に高台を貼り付ける。口縁部にヨコナデ、外面に指オサエの後ミガキ、内面にはミガキを施す。また、器内に付着した漆が残存している。

2087 は黒色土器 A 類碗で、口径 15.0 cm、器高 5.5 cm、残存率 65%。口縁部にヨコ

ナデ、体部外面に指オサエの後ナデ、体部内面にミガキを施す。

2088 は黒色土器A類碗で、口径 15.5 cm、残存高 5.0 cm、残存率 25%。口縁部にヨコナデ、体部外面には指オサエの後ナデ、さらにミガキ、体部内面にヨコミガキを施す。

2089 は黒色土器A類碗で、口径 14.5 cm、底径 6.0 cm、器高 4.2 cm、残存率 25%、底に高台を貼り付ける。口縁部にヨコナデ、体部外面にケズリ、体部内面にヨコミガキ、底部外面にナデを施す。

2090 は黒色土器A類碗で、口径 14.3 cm、底径 7.5 cm、器高 6.5 cm、底に高台を貼り付ける。口縁部にヨコナデ、体部内外面にヨコミガキ、底部にナデ、見込みに平行ミガキを施す。

2091 は黒色土器A類碗で、口径 17.0 cm、残存高 4.3 cm、残存率 30%、口縁部にヨコナデ、体部外面にナデ、体部内面にヨコミガキを施す。

2092 は黒色土器A類碗で、口径 14.8 cm、残存高 4.7 cm、残存率 15%、口縁部にヨコナデ、体部外面にケズリの後ヨコミガキ、体部内面にナデの後ヨコミガキおよび並行ミガキを施す。

2093 は黒色土器B類碗で、口径 18.8 cm、残存高 4.9 cm、残存率 15%。口縁部にヨコナデ、体部外面にヨコミガキ、体部内面にヨコミガキを施す。

2094 は黒色土器B類碗で、口径 16.0 cm、底径 6.5 cm、器高 6.0 cm、底に高台を貼り付ける。口縁部にヨコナデ、外面にナデの後ミガキ、内面にミガキを施す。また、外面にヘラ描きがある。

2095 は黒色土器B類碗で、口径 16.1 cm、残存高 5.0 cm、残存率 15%、高台は剥離している。口縁部にヨコナデ、体部外面にナデ、体部内面にヨコミガキ、見込みに平行ミガキを十字に施す。

2096 は黒色土器B類碗で、口径 10.5 cm、底径 5.0 cm、器高 3.9 cm、底に高台を貼り付ける。口縁部にヨコナデ、体部外面にケズリの後ヨコミガキ、体部内面にヨコミガキを施す。

2097 は黒色土器B類碗で、口径 15.7 cm、底径 6.9 cm、器高 6.2 cm、残存率 75%、底に高台を貼り付ける。底面に「サ」字状のヘラ描きがある。口縁部にヨコナデ、体部外面にナデの後ヨコミガキ、体部内面にはナデの後ヨコミガキおよび並行ミガキ、底部にミガキを施す。

2098 は黒色土器B類碗で、底径 6.6 cm、残存高 2.1 cm、残存率 90%、底部のみ残存している。体部外面にナデ、体部内面に平行ミガキを施す。また、底に高台を貼り付ける。

須恵器

須恵器は杯蓋、杯身、高杯蓋、有蓋高杯、直口壺、大甕などが出土しており、その年代は古墳時代後期のものが多い。

2099 は杯蓋で、残存率 50%で、口径 12.4 cm、器高 4.5 cmである。端部はほぼ水平に仕上げられ、稜は鋭く、突出している。天井部に回転ヘラケズリが施されている。TK208～TK23 型式のものと考えられる。

2100 は完形の杯蓋で、口径 13.0 cm、器高が 5.0 cmである。端部はほぼ平らに仕上

げられ、稜はやや鋭く、突出している。天井部のやや広範囲に時計回りの回転ヘラケズリが施され、やや小型でありTK23型式のものと考えられる。

2101 はほぼ丸形の杯蓋で、口径 13.6 cm、器高が 5.7 cm である。端部はやや鋭く、不明瞭な沈線が施されているが、平らに近い。稜は形骸化しており、沈線によって表現されている。天井部には広範囲に反時計回りの回転ヘラケズリが施され、MT15 型式のものと考えられる。

2102 はほぼ丸形の杯蓋で、口径 12.3 cm、器高が 4.8 cm である。端部は、非常に強く施された沈線によって扶られている。稜はやや鈍く、やや突出している。天井部に反時計回りの回転ヘラケズリが施され、天井部外面に 1 条のヘラ記号を描く。やや小型ではあるが、やや粗雑なためTK47～MT15 型式のものと考えられる。

2103 は杯蓋で、上層から出土した。残存率 40%、復元口径 12.1 cm、器高 4.3 cm である。端部は浅い沈線が施されるが、水平に仕上げられている。稜はやや鈍く、沈線で稜を表現している。天井部のやや広範囲に回転ヘラケズリが施されている。TK47～MT15 型式のものと考えられる。

2104 は杯蓋で、最上層から出土した。残存率 70% で、口径 15.2 cm、器高が 4.8 cm である。端部には浅い沈線を施し、稜は沈線が施される程度である。天井部には反時計回りの回転ヘラケズリが施されている。稜がほぼ消滅していることから、TK10 型式のものと考えられる。

2105 は杯蓋で、残存率 50%、復元口径 15.3 cm、器高が 4.1 cm である。端部にはわずかに沈線が施され、鈍い印象を受ける。稜はほぼ消滅しており、直下の沈線によって表現されている。天井部外面には反時計回りの回転ヘラケズリが施され、内面中心は一定方向のナデで調整されているが、粘土紐の痕跡をとどめている。全体的に非常に粗雑で、粘土の張り付きや凹みが見られる。TK10 型式のものと考えられる。

2106 は杯蓋で、最上層から出土した。残存率 60% で、復元口径 14.1 cm、器高が 4.4 cm である。端部は丸く、稜は消滅しており、浅い沈線状に痕跡をとどめるのみである。天井部には反時計回りの回転ヘラケズリが施されている。稜が消滅していることから、MT85 型式のものと考えられる。

2107 は杯蓋で、最上層から出土した。残存率 45% で、口径 13.6 cm、器高が 3.6 cm である。端部は丸く、稜は沈線が施される程度である。天井部には反時計回りの回転ヘラケズリが施されている。やや小型ではあるが、稜がほぼ消滅しておりTK10 型式のものと考えられる。

2108 は杯蓋で、上層から出土した。残存率 65%、口径 10.7 cm、器高 3.8 cm である。口縁端部と体部は一体のものとなり、丸みを帯びているが、やや扁平である。天井部の粗く狭い範囲に回転ヘラケズリ後ナデを施し、宝珠つまみは付していない。TK217 型式にあたるものであろう。

2109 は高杯蓋で、残存率 80%、口径 11.5 cm、器高が 5.5 cm で扁平なつまみが付されている。端部に沈線を施し、稜はやや鋭く、突出している。天井部に広範囲の回転ヘラケズリが施され、小型であり、TK23～47 型式のものと考えられる。

2110 は杯蓋で、残存率 50%、口径 8.7 cm、残存高 2.6 cm で宝珠つまみを欠損している。天井部は器高が大きく、2 回の強いヨコナデによって階段状に成形されている。

内面のかえりが口端部よりも下方へ突出し、口端部は下外方へ張り出している。天井部内面は一定方向のナデ、その他はヨコナデによって調整されている。TK217 のものと考えられる。

2111 は杯蓋で、上層から出土した。残存率 20%、復元口径 10.8 cm、残存高が 1.3 cm である。口縁端部は短く、下方へ外反し、断面は丸形を呈し、鈍い。口縁部内面のかえりは端部と同程度に下方へ伸びる。天井部には粗い回転ヘラケズリが施されているが、宝珠つまみを欠損している。また、内面に壘が付着している。TK217～TK46 のものと考えられる。

2112 は定形の杯蓋で、上層から出土した。口径 11.3 cm、器高が 2.6 cm である。口縁端部は短く、外下方へ外反して丸く収められており、鈍い。内面のかえりは端部と同程度に下方へ伸びる。天井部には粗い回転ヘラケズリが施され、宝珠つまみはやや扁平である。TK46 のものと考えられる。

2113 は杯蓋で、上層から出土した。残存率 65%、口径 16.4 cm、器高が 4.0 cm である。口縁端部を丸く収め、内面にかえりを持つが、端部より下方へは突出していない。天井部は回転ヘラケズリによって調整され、扁平な宝珠つまみが付されている。TK46 のものと考えられる。

2114 は杯蓋で、上層から出土した。残存率 40%、復元口径 16.6 cm、残存高が 2.6 cm である。口縁端部は下方に屈曲し、内面のかえりは消滅している。天井部はヨコナデによって成形され、非常に扁平な宝珠つまみが付されている。MT21 のものと考えられる。

2115 は杯蓋で、残存率 30%、復元口径 17.6 cm、器高が 2.1 cm である。天井部はふくらみが少なく、平らに成形されている。天井部と口縁部の境界に段を有し、口端部は下方へ屈曲する。全面がヨコナデによって調整され、非常に扁平な宝珠つまみが付されている。奈良時代のものと考えられる。

2116 は杯蓋で、残存率 90%、口径 15.7 cm、器高が 1.9 cm である。宝珠つまみは非常に扁平で、天井部は凹んでいる。天井部と口縁部の境界が盛り上がり、口端部は下方へ屈曲する。天井部はヘラケズリ、他はヨコナデによって調整されている。奈良時代のものと考えられる。

2117 は杯身で、残存率 80%で、口径 10.6 cm、器高 4.5 cm である。非常に長い立ち上がりは垂直に伸び、端部はやや鋭く、丸く収められている。底部には回転ヘラケズリを施し、稜と底部の間に突帯を巡らせる。受部は鋭く、水平に伸びている。初期須恵器で TK216 型式と考えられる。

2118 は杯身で、上層から出土した。残存率 30%、復元口径 10.8 cm、器高が 5.1 cm である。立ち上がりはやや長く、内傾しながら伸び、端部には沈線が施されている。底部には時計回りの回転ヘラケズリを施しており、やや長い受部は上外方に伸び、やや鈍い。小型であり、TK47 型式と考えられる。

2119 はほぼ定形の杯身で、上層から出土した。口径 10.7 cm、器高が 4.9 cm である。ほぼ垂直に伸びる立ち上がりは長く、端部には沈線が施されている。底部には反時計回りの回転ヘラケズリを施しており、受部はやや短く、上外方に伸び、やや鈍い。小型であり、TK47 型式と考えられる。

2120 は杯身で、上層から出土した。残存率 55%、口径 12.4 cm、器高は 4.3 cm である。やや短い立ち上がりはやや内傾しながら伸び、端部は丸く収められている。底部には反時計回りの回転ヘラケズリが施され、内面には平行叩き目文の当て具痕が残っている。MT15 型式のものと考えられる。

2121 は杯身で、上層から出土した。残存率 70%、口径 13.8 cm、器高 4.4 cm である。立ち上がりは短く、やや内傾しながら伸び、端部は丸い。底部には反時計回りの回転ヘラケズリを施しており、ほぼ水平に伸びる受部は鈍く、短い。内面には同心円文の当て具痕が残り、外面には「十」のヘラ記号を描く。TK10 型式にあたると思われる。

2122 は杯身で、上層から出土した。残存率 80%、口径 13.2 cm、器高 5.2 cm である。立ち上がりはやや短く、内傾しながら伸び、端部断面は丸い。底部には反時計回りの回転ヘラケズリを施しており、受部は短く、やや外上方へ伸び、鈍い。TK10 型式にあたると思われる。

2123 は杯身で、上層から出土した。残存率 40%、復元口径は 12.4 cm、器高が 4.5 cm である。やや短い立ち上がりは内傾するが、ほぼ垂直に伸び、端部は丸く収められている。底部の狭い範囲に回転ヘラケズリを施しており、受部は短く、やや外上方へ伸び、丸い。TK10～MT85 型式と考えられる。

2124 は杯身で、口径は 13.5 cm で器高が 4.5 cm である。立ち上がりは短く、内傾して伸び、端部は丸く収められている。底部に反時計回りの回転ヘラケズリを施しており、受部は短く、外上方へ伸びている。全体的に扁平で、大型であることから MT85～TK43 型式と考えられる。

2125 は杯身で、残存率 70%、口径 12.9 cm、器高 3.6 cm である。立ち上がりは短く、非常に内傾しながら伸び、端部は丸く収められ、鈍い。底部に反時計回りの回転ヘラケズリを施しており、外上方へ伸びる受部は鈍い。TK43 型式と考えられる。

2126 は杯身で、残存率 30%、復元口径 11.2 cm、器高が 3.3 cm である。立ち上がりは非常に短く、内傾して伸び、端部は丸く仕上げられている。底部は反時計回りの回転ヘラケズリで調整されている。受部はやや長く、ほぼ水平に伸び、鈍い印象を受け、立ち上がりは 0.9 cm である。TK43 型式と考えられる。

2127 は杯身で、残存率 20%、復元口径 11.5 cm、器高が 4.1 cm である。立ち上がりは非常に短く、内傾して伸び、端部は丸く仕上げられている。底部は回転ヘラケズリで調整されているが、磨滅していて方向は確認できない。受部はやや長く、ほぼ水平に伸び、鈍い印象を受け、立ち上がりは 1.0 cm である。TK43 型式と考えられる。

2128 は杯身で、残存率は 90%、口径 9.5 cm、残存高 3.4 cm である。やや扁平で、立ち上がりは非常に短く内傾している。底部には反時計回りの回転ヘラケズリ、内面中央はナデ、その他はヨコナデで調整されている。また、底部に「II」字状のヘラ描きが施されている。TK217 型式にあたると思われる。

2129 は完形の杯身で、上層から出土した。口径 8.6～11.2 cm、器高 2.8 cm であるが、歪みが激しい。立ち上がりは非常に短く、大きく内傾して伸び、端部は丸く仕上げられている。受部と端部はほぼ同じ高さである。底部に回転ヘラケズリが施され、かなり小型であることから TK217 型式のものと考えられる。

2130 は杯身で、上層から出土した。残存率 60%、復元口径 11 cm、器高が 3.8 cm で、

高台は付されていない。口縁部はわずかに外傾し、やや歪みながら伸び、端部断面は丸く仕上げられている。底部はヘラ切り後ナデで調整されていると推定され、TK217～TK46 型式のものと考えられる。

2131 は杯身で、復元口径 14.3 cm、器高が 4.3 cm で高台が付されている。口縁部は外傾し、端部断面は丸く仕上げられている。短い高台は外方へ踏ん張り、脚端面はほぼ水平である。底部全体に回転ヘラケズリ後ナデで調整され、TK48 型式のものと考えられる。

2132 は杯身で、残存率 20%、復元口径 13.9 cm、器高 3.2 cm である。口縁部はやや短く、外傾して直線的に伸び、端部を丸く収めている。底部にはヨコナデで高台を貼り付けている。内面中央はナデ、口縁部はヨコナデで調整されている。TK48 型式にあたると考えられる。

2133 は杯身で、口径は 15.8 cm、器高が 4.3 cm で高台が付されている。口縁部は外傾し、直線的に伸びる。端部は丸く仕上げられている。高台は短く、外方へ踏ん張り、全体をヨコナデで調整している。TK48 型式前後のものと考えられる。

2134 は杯身で、残存率 50%、口径 16.2 cm、器高 3.1 cm である。口縁部はやや短く、外傾して直線的に伸び、端部は丸く収められている。また、底部の高台はヨコナデで貼り付けられている。内面中央はナデ、口縁部はヨコナデで調整されている。MT21 型式にあたると考えられる。

2135 は杯身で、口径は 11.6 cm で器高が 8.5 cm である。短い高台が付され、器高が非常に高く、深い。全面がヨコナデによって調整されており、飛鳥時代初頭のものとして推定される。

2136 は杯身で、残存率 45%、復元口径 17.6 cm、器高が 6.6 cm で高台が付されている。口縁部は外傾して直線に伸び、端部は丸く仕上げられている。底部は回転ヘラケズリ、他はヨコナデで調整され、短い高台は下方へ踏ん張る。TK48 型式のものと考えられる。

2137 は杯身で、残存率 40%、復元口径 14.0 cm、器高が 7.7 cm である。外傾する口縁部はわずかに外反しながら伸び、端部は丸く仕上げられている。底部は回転ヘラケズリ、他はヨコナデで調整されている。また、底部にはヘラ記号が描かれている。奈良時代のものと考えられる。

2138 は有蓋高杯で、残存率 90%、口径 10.4 cm、器高が 9.1 cm である。短脚で、長方形の透かし窓が 3 方向に穿たれ、底部は段を成す。杯端部は丸みを帯び、沈線が施され、受部は短く、外上方へ伸び、やや鋭い。また、杯部底部の狭い範囲に時計回りの回転ヘラケズリが施されている。小型ではあるが、やや粗雑感があることから、TK47～MT15 型式のものとして推定される。

2139 は有蓋高杯で、口径 10.4 cm、器高が 9.1 cm である。短脚 3 方向透かしで、底部は段を成し、透かし窓は長方形である。杯部の端部は鈍く、ほぼ丸く仕上げられる。受部は短く、外上方へ伸び、やや鋭い。杯底部の回転ヘラケズリは狭い範囲に施される。小型ではあるが、やや粗雑感があることから、MT15 型式のものとして推定される。

2140 は無蓋高杯で、上層から出土した。杯部のみ残存しており、残存率 25%、復元口径 17.0 cm、残存高 6.8 cm である。口縁部は外上方へ直線的に伸びるが、端部で上方

へ屈曲し、丸く収められている。上から2条の突帯、波状文、つまみの順で施され、底部はヘラケズリで調整されている。つまみの位置から ON46 型式以前のもと考えられる。

2141 は高杯で、上層から出土した。脚部のみ残存しており、残存率 50%、底径 14.8 cm、残存高 14.0 cm である。長脚 3 段透かしで、二方向に方形の透かし窓を設けている。上段と下段の境界、および下段の下方に 2 条の沈線を施している。透かし窓は、ヘラ状の工具を用いて穿たれたと思われる。MT85 型式前後のもと考えられる。

2142 は甕で、口縁部を欠損しており、残存率は 80%、残存高 15.2 cm である。長頸化しており、胴部より口縁部の方が大きいと思われる。頸部は長く漏斗状に開き、櫛描き列点文を巡らせている。肩部の張りは強く、胴部には 2 条の沈線を施し、その間に櫛描き列点文、および円孔透かしを施している。TK10 型式のものと思われる。

2143 は甕で、残存率 75%、口径 13.0 cm、器高 13.6 cm である。胴部より口縁部の方が大きい。頸部は長く漏斗状に開き、櫛描き列点文が巡らされ、口端部は鈍く、段を成している。肩部の張りは弱く、丸みを帯び、文様帯は施されていない。胴部に円孔透かしが施されている。古墳時代後期後半のものと思われる。

2144 は壺で、上層から出土した。残存率 75%、口径 17.7 cm、器高が 20.8 cm である。口端部はやや甘いが下に稜を持ち、段を成す。また、口頸部は文様帯を有さないが、外反している。底部は反時計回りの回転ヘラケズリを施し、胴部外面はヨコナデ、内面はナデで調整されている。MT85 型式前後と推定される。

2145 は壺で、残存率 90%、口径 14.6 cm、器高が 19.5 cm である。口端部はやや甘いが段を持ち、口頸部には文様帯を施さない。胴部外面は格子風叩き目文の叩き板で調整され、内面には同心円文の当て具痕を残す。古墳時代後期と推定される。

2146 は壺で、上層から出土した。残存率 35%、復元口径 18.4 cm、器高が 25.3 cm である。口端部はやや甘いが段を成し、短い口頸部は外反する。また、文様帯は施されない。胴部外面は平行叩き目文の叩き板で調整され、内面には同心円文の当て具痕が残る。飛鳥時代から奈良時代のもので推定される。

2147 は壺で、上層から出土した。胴部以上を欠損しており、残存率は 25%、底径 12.0 cm、残存高 12.9 cm である。短い高台が付されており、外方へ踏ん張っている。胴部外面は回転ヘラケズリ、内面はヨコナデで調整されている。奈良時代のもので推定される。

2148 は小型の短頸壺で、上層から出土した。残存率 45%、復元口径 4.8 cm、器高が 4.2 cm である。底部外面は反時計回りの回転ヘラケズリ、他はヨコナデで調整されている。また、外面に赤色顔料が付着している。

2149 はほぼ球形の小型短頸壺で、上層から出土した。口径 6.9 cm、器高 7.4 cm、底径 4.2 cm である。胴部の下半は反時計回りの回転ヘラケズリ、他はヨコナデで調整されている。奈良時代のもので考えられる。

2150 は壺で、口径が 5.8 cm、器高が 8.7 cm である。口縁は短く、ほぼ垂直に伸びている。底部を反時計回りの回転ヘラケズリ、胴部をヨコナデで調整する。TK48 型式前後のもので推定される。

2151 は長頸壺で、口端部および高台の大部分を欠損している。残存率 90%、残存高

21.5 cmである。細い頸部は長く、外反しながら伸びている。胴部に列点文を施し、その上下に沈線を巡らせている。高台は長いと思われ、外方へ踏ん張っている。肩部は非常に張っており、屈曲している。飛鳥時代前半のものと考えられる。

2152 は長頸壺で、口端部を欠損しており、残存率 90%、底径 5.2 cm、残存高 23.5 cmである。やや短い高台が付されており、外方へ踏ん張っている。肩部は非常に張っており、屈曲している。底部に穿孔がある。飛鳥時代～奈良時代のものと考えられる。

2153 は長頸壺で、口縁部を欠損している。残存率 80%、底径 6.8 cm、残存高 13.0 cmである。口頸部は外反し、高台は短く、下方へ踏ん張る。胴部の下半にはヘラケズリ、上半にはヨコナデが施される。平安時代のもと思われる。

2154 は長頸壺で、口径 11.2 cm、器高 16.5 cmである。口頸部はやや短く、外傾して伸び、口縁部は屈曲する。肩部は張りが弱く、丸みを帯びている。底部に付された高台はやや短く、外へ踏ん張っている。古墳時代後期から飛鳥時代初頭のものと考えられる。

2155 は甕で、復元口径 19.5 cm、残存高 17.2 cmである。口端部は非常に甘く、内側に段を成す。口頸部は短く、「く」の字状に外反しており、文様帯を有さない。胴部外面は格子風叩き目文の叩き板で調整され、内面の上部には同心円文の当て具痕を残す。TK48 型式前後と推定される。

2156 は直口甕で、口縁部から肩部までが残存しており、復元口径 23.0 cm、残存高 14.4 cmである。口端部はほぼ水平に仕上げられ、口頸部は短いが「く」の字状に屈曲しており、文様帯は施されない。胴部外面は平行叩き目文の叩き板で調整され、内面には同心円文の当て具痕を残している。頸部にはヘラ記号が存在している。飛鳥時代と推定される。

2157 は人甕で、口縁部から肩部までが残存しており、復元口径 24.5 cm、残存高 20.0 cmである。口端部は非常に甘く、断面は丸形を呈する。口頸部は短いが「こ」の字状に外反しており、文様帯は施されない。胴部外面は平行叩き目文の叩き板で調整されている。内面は同心円文の当て具痕をすり消すが、完全には消されていない。また、頸部にはヘラ記号が描かれている。TK23 型式前後と推定される。

2161 は大甕で、口縁部から肩部までが残存しており、復元口径 28.0 cm、残存高 17.0 cmである。口端部は鈍い。口頸部は短いが「く」の字状に屈曲しており、文様帯を有さない。胴部外面は平行叩き目文の叩き板で調整され、その後に強い横方向のカキ目が施され、内面には同心円文の当て具痕を残している。平安時代のもので推定される。

2158 は平瓶で、口端部を欠損している。残存率 90%、残存高 10.1 cmで、胴部の中心から離れて口縁部が存在している。口縁部は漏斗状を呈すと推定され、胴部は扁平であるが丸みを帯び、底部はわずかに尖り気味である。飛鳥時代のもので推定される。

2159 は平瓶である。残存率 90%、外径 22.6 cm、残存高 8.7 cmで、胴部の中心から離れて口縁部が存在し、把手が付されている。口縁部は漏斗状を呈すと推定され、胴部は扁平、底部は平らに仕上げられる。奈良時代のもので推定される。

2160 は横瓶で、頸部以上を欠損している。残存率 90%、残存高 17.0 cmである。外面は格子目風叩き目文の叩き板で調整され、内面には同心円文の当て具痕が残る。

2162 は提瓶で、残存率 60%、口径 5.8 cm、器高 20.4 cm である。外反する口縁部は短く、端部は丸い。胴部両側に付く耳は短く、形式化した鉤形を呈する。胴部にカキ目を施し、両面ともにややふくらみを持つ。TK10 型式にあたるものであろう。

2163 は提瓶で、残存率 95%、口径 11.8 cm、器高 26.3 cm である。外反する口縁部は短く、端部は鈍い段を成す。口縁付近に稜を持ち、胴部両側に付く耳は環状である。胴部にカキ目は施されず、ナデで調整される。また、両面ともにふくらみを持たない。TK10 型式にあたるものであろう。

2164 は鉄鉢で、残存率 25%で、復元口径 23.2 cm、残存高が 9.9 cm である。内彎する口縁を持ち、端部には沈線が施されるが、やや鈍い印象を受ける。底部は反時計回りの回転ヘラケズリ、底部内面は一定方向のナデ、他の部分はヨコナデによって調整されている。TK48 型式前後のものと同定される。

土製品

2169 は土製紡錘車で、全高 1.5 cm、径 2.4 cm。平面円形、側面長方形で、中央に孔を穿ち、外面にナデを施す。

2165 は土馬で、頭部のみ残存している。馬面の表現が施されている。

2166 は土馬で、脚部のみ残存している。断面は円形で、径 3.0 cm。残存高が 8.7 cm である。

2167 は土馬で、胴部左側のみ残存している。胴部に沈線を施し、脚部は断面扇楕円形である。

2168 は土馬で、脚部のみ残存している。断面は円形で、径 3.0 cm。残存高 7.1 cm。

2170 は土馬で、後脚が残存している。断面は円形で、径 2.8 cm。

2171 は土馬で、左脚が残存している。断面は円形で、径 1.3 cm。

2172 は土馬で、胴部から脚部のみ残存している。断面は円形で、残存高 10.5 cm。胴部には円孔が穿たれ、鞍の表現があり、脚は左後脚と思われる。

木製品

2174 は鋤で、全長 106.1 cm、鋤身長 28.9 cm、鋤身幅 13.5 cm、鋤身厚 3.0 cm、柄長 56.2 cm、柄厚 3.2 cm、把手長 17.2 cm、把手幅 8.6 cm である。ブナ科コナラ属アカガシ亜属の木材を使用している。

2175 は鋤で、SR16 から出土した。全長 116.2 cm、鋤身長 36.2 cm、鋤身幅 16.6 cm、鋤身厚 0.4 cm～3.6 cm、柄長 80.0 cm、柄厚 3.6 cm、把手幅 10.5 cm で把手は T 字状を成している。ブナ科コナラ属アカガシ亜属の木材を使用している。

金属製品

2173 は青銅製の素紋鏡で、直径 3.3 cm、厚さ 0.1 cm、紐の幅 0.9 cm、高さ 0.2 cm、厚さ 0.1 cm である。

5 瓦埴類

当遺跡では、全 8 次わたる調査において中世以降のものを含め、3017 点の瓦が出土している。しかし、これらの大半が旧河道埋土あるいは中世の耕作土層に含まれていたものであり、遺構にともなって出土したものは少数である。また、軒瓦、丸平瓦ともに文様、凸面調整あるいは製作技法に一定の傾向が見られず、様々な種類が出

土している。

(1) 軒丸瓦

瓦当を欠くものを含め、総数で27点25個体出土している。最古のものは7世紀第Ⅱ四半期まで遡り、最も新しいもので中世の巴紋軒丸瓦が出土している。

GM1

2176は奈介八弁蓮華蓮華紋軒丸瓦で、船橋廃寺式に分類される。6次調査において井戸の枠内から出土した。この井戸は奈良時代中頃以降に構築され、平安時代後半に廃絶したと考えられる。中房および瓦当外縁部を欠損しているが、蓮弁約2枚分弱が残存している。瓦当厚は1.8cm、胎土は粗く、砂礫を多量に含む砂質土である。焼成は良好で灰色を呈し、硬質である。

GM2

2177は1次調査出土の単弁十六弁蓮華紋軒丸瓦である。1点のみ出土しており、瓦当直径20.0cm前後、中房直径は6.6cm、瓦当厚は2.0cm。1+8の蓮子を配し、子葉はやや肥厚するが全体的には扁平である。類似するものが王寺町放光寺(片岡王寺)で出土しているが、異范である。瓦当裏面はヘラケズリの後ナデ調整を施し、瓦当下半周縁および裏面端部を斜めに面取りする。接合時、丸瓦凹面に縦方向のキザミが施される。胎土は粗く、砂粒、細礫を含む。焼成は良好で明灰色を呈し、硬質である。

GM3

2178は複弁八弁蓮華紋軒丸瓦で、6次調査において平安時代から中世の遺物包含層から出土した。瓦当厚2.3cm、中房部を欠損しているため、蓮子の配置は不明である。蓮弁および子葉は肥厚し、立体的に表現される。瓦当周縁に面達鋸齒紋を配しており、川原寺式に分類される。瓦当裏面にはナデ調整を施す。また、外周にヘラケズリを施すが、1.0cm程度の范のかぶりを観察することができる。胎土は密な砂質土で、焼成は悪く、淡褐色を呈し、軟質である。

GM4

2179は川原寺式に属す複弁八弁蓮華紋軒丸瓦で、4次調査で出土した。瓦当厚2.3cmで、蓮子の配置は不明。蓮弁、子葉、中房ともに大きく盛り上がり肉厚に表現する。瓦当裏面はヘラケズリで仕上げる。細礫を含み砂分の多い密な胎土で、焼成は悪く、淡灰色を呈する軟質の瓦である。

GM5

2180は複弁八弁蓮華紋軒丸瓦である。1次調査において1点出土している。瓦当直径16.6cm、内区直径12.6cm、中房直径は5.1cmである。蓮弁がやや盛り上がるが、全体に扁平である。蓮子の配置は1+6+10で、外区に鋸齒歯紋を施し、幅約1.0cmの扁平な周縁は素文である。尼寺北廃寺出土のNKM9と同范であり、河内妙見寺でも同范品が出土している。また、約1.0cmの范のかぶりを観察することができ、瓦当裏面はナデによって調整される。丸瓦は、右下がりの粗いキザミを凸面に施し接合される。砂粒、細礫を含むやや密な胎土で、焼成は悪く浅黄色を呈し、軟質である。

GM6

2181は4次調査において3点2個体出土している。平城宮6282型式B種a同范の複弁八弁蓮華紋軒丸瓦である。瓦当直径16.0cm、内区直径8.8cm、中房直径は4.5

cmで、蓮子は1+6に配置する。外区内縁に珠文帯、外区外縁に線範歯紋を施す。瓦当裏面および外周は横方向のヘラケズリで仕上げる。やや密な胎土は、細礫を含み砂分が多い。焼成は悪く黄灰～灰白色を呈し、軟質である。

GM7

2182は左巻きの三巴紋軒丸瓦と考えられるが小片のため確定はできない。3点2個体出土している。厚み1.1cm、周縁部で1.6cmである。瓦当面は幅約0.2cmの圈線によって内外区に分けられ、外区に直径0.7cmの珠文を配置し、周縁は幅1.2cmの平坦な無文帯とする。また、瓦当外周にヘラケズリを施す。

GM8

2183は右巻きの三巴紋軒丸瓦と考えられる。2点出土しており、厚みは0.9cm、周縁部で1.6cm。外区には直径1.1cmの珠文を配置し、周縁は幅2.0cmの平坦な無文帯である。外周には幅約0.4cmの范のかぶりを観察することができる。

その他

2184は複弁蓮華紋と思われるが、瓦当の大部分を欠損しているため、型式は不明である。丸瓦凸面の先端から幅約2.5cmを浅く面取りし、端面および凹面は無加工で瓦当と接合される。細礫を含む密な胎土で、焼成は良好で明灰色を呈する硬質の瓦である。

2185は瓦当のほぼ全てを欠損しており、弁区と周縁区を区画する圏線と思われる紋様が残存するのみであるため、型式等は不明である。瓦当は、その剥離状態から、直径17.0cm前後、厚み2.5cm程度であったと思われる。筒部の厚みは約1.5cmで、凹凸両面に縦方向のキザミを施すが、凹面側のそれは非常に粗雑である。端面は無加工で瓦当に接合され、凹凸両面に極少量の粘土を補填する。その後、凸面側を縦方向の丁寧なケズリ、凹面側を縦方向の粗いケズリで調整する。

(2) 軒平瓦

出土総数は、瓦当を欠損しているものを含め12点11個体である。

GH1

2189は四重弧紋軒平瓦で、1次調査において出土した。川原寺651Cに酷似する。瓦当厚3.2cmで、型挽きによって分割前に施文する。弧線の幅は第1弧線が0.7cm、第2および第3弧線が0.8cm、第4弧線が0.75cmで丸みを帯び、凹線の深さは0.2cm～0.3cmでV字形に近い断面形を呈する。瓦当部分は貼付段顎で、凸面側において0.6cm～0.8cmの范のかぶりを確認することができる。顎部および平瓦部凸面に横方向のナデを施し、瓦当端部凹面側を面取りする。側面は、分割後に凹面を浅く面取りした後凸面に深い面取りを施し、最後に瓦当端部の凹面側を切り取る。したがって、分割破面は残らず、断面は三角形になる。胎土は細礫を少量含み、やや粗い。焼成は比較的良好で硬質、色調は浅黄色を呈する。

GH2

2190は四重弧紋軒平瓦で、4次調査において出土した瓦である。瓦当厚3.2cm、分割前に型挽きで施文する。弧線の幅は第1弧線が0.6cm、第2弧線が0.7cm、第3弧線が0.55cm、第4弧線が0.6cmで丸みを帯びる。凹線は深さ0.5cm前後で断面はU字

形である。瓦当部分は貼付段頸で、0.3 cmの范のかぶりを観察することができる。凸面側は平瓦部とともに横方向のナデ調整を行うが、凹面は無調整である。側面は凸面側のみ面取りを行い、断面は台形状を呈する。胎土は細礫を含む密な砂質土で、焼成は悪いが比較的硬質、橙～淡橙色を呈する。

GH3

2191は四重弧紋軒平瓦で、6次調査で出土した。残存瓦当厚2.2 cm、型挽きの施文である。弧線の幅は、第2弧線が0.5 cm以上、第3弧線が0.7 cm、第4弧線が0.8 cmで丸みを帯びるが、GH1、GH2よりもやや平坦である。凹線の深さは0.4 cmと0.2 cmでU字形の断面形を示す。貼付の段頸で、平瓦部は剥離して火われている。凸面側は横方向のナデを施すが、0.7 cmの范のかぶりを観察することができる。胎土はやや粗く、細礫を少量含む。焼成は悪く灰白色を呈し、軟質である。

GH4

2192は四重弧紋軒平瓦である。6次調査で出土しており、残存瓦当厚1.5 cm、型挽きによる施文と考えられる。弧線の幅は第1弧線、第2弧線ともに0.7 cmで平坦であるが、第3、4弧線は瓦当下半部が失われているため不明である。凹線の深さは0.3 cmで断面形はU字形になっている。凹面側に横方向の粗雑なナデ調整を施すが、0.5 cm～0.7 cmの范のかぶりと思われる痕跡を残す。胎土はやや粗く、細礫を少量含む。焼成は悪く、灰白色を呈し、軟質である。

GH5

2193は四重弧紋軒平瓦である。6次調査で出土した。残存瓦当厚1.4 cm、型挽きによる施文と考えられる。弧線の幅は第3弧線が0.8 cm、第4弧線が0.7 cmで丸みを帯びる。第1、2弧線は不明。凹線は深さが0.3 cmで台形の断面形を呈する。凸面側にはナデ調整を施し、0.7 cmの范のかぶりが残る。胎土は密な砂質土で、良好に焼成されており、灰色を呈する硬質の瓦である。

GH6

平城宮6664型式I種の均整忍冬唐草紋軒平瓦である。4次調査で1点、6次調査において柱穴底部から1点が出土した。後者は2194で、出土状況から根石の代わりとして用いられたものと考えられる。貼付段頸で瓦当面を形成し、横縄叩きの平瓦が接合される。瓦当厚は6.2 cm、凹面は縦方向のナデを施し、瓦当端部を面取りする。頸部凸面に横方向のナデ調整を行うが、平瓦部は無調整である。出土した2点とも、屋根に葺き上げた際に付着したと考えられる朱が平瓦部凸面に残存している。胎土は砂粒、細礫を含むやや密な砂質土で、焼成は悪く外面は明灰色、内部は浅黄灰色～灰白色を呈し、軟質である。

GH7

平城宮6721型式C種の均整忍冬唐草紋軒平瓦。1次調査および4次調査で各1点出土している。2195の頸部は曲頸で、瓦当厚は5.7 cm、凹面側の端部を面取りする。凸面は端部に約1.5 cmの平坦部を残し、横方向のナデを施している。平瓦部は縦方向のヘラケズリで調整する。胎土は粗く、細礫を含む。焼成は悪く、外面が黒灰色、内部は明灰～灰白色を呈し、やや軟質である。

(3) 丸瓦

総点数は 1055 で、玉縁式、行基式ともに出土している。玉縁部の残存するものが 119 点、行基式の完形品が 1 点、行基式と思われるものが 11 点あり、小片ないし筒部のみ残存しているものが 819 点、中世以降のものが 105 点出土している。1 次調査で出土した瓦は、筒部に釘穴を穿っている。

玉縁式 A

筒部に粘土を補填して玉縁を成形する。2198 は最大残存長 17.0 cm、幅 16.4 cm、筒部の厚さ 2.3 cm、玉縁の残存長は最大 3.8 cm、厚さ 1.7 cm である。筒部および玉縁部凸面は縄引き後横ナデ、凹面は無調整である。側面は、分割後に凹凸両面とも面取りを施す。また、玉縁を上にして、凹面の右端から 2.2 cm 前後に粘土板の合わせ目が表れている。玉縁の取付角度は 95° になる。胎土は粗く、細礫を少量含む。焼成は良好で明灰色を呈するが、やや軟質である。

2196 は最大残存長 12.0 cm、厚み 1.8 cm。筒部凸面は横ナデ、凹面は無調整である。側面は、分割後に凹凸両面を面取りする。胎土は細礫を多量に含む砂質土で、焼成は比較的良好で明灰～浅黄色の色調を呈する硬質の瓦である。

2197 は残存長 11.4 cm、幅 13.5 cm、玉縁全長が 5.4 cm、狭端幅は 9.0 cm、厚みは筒部で 1.7 cm、玉縁部で 1.1 cm。玉縁の取付角は 90° である。筒部凸面は横ナデで叩き痕跡を消した後に縦ナデ、玉縁部凸面は横ナデを施し、凹面は無調整である。また、横ナデを施した後、玉縁基部に幅 0.4 cm、深さ 0.2 cm 弱の沈線を入れる。この玉縁基部の沈線は川原寺 1 B、1 C、1 D に見られる特徴と一致する。側面は、分割後に筒部凸面、玉縁部凹凸両面を面取りする。胎土は密な砂質土で、焼成は悪いがやや硬質、色調は灰白色を呈する。

玉縁式 B

筒部と玉縁を一体成形するもの。2202 は、最大残存長 17.8 cm、玉縁部全長 4.3 cm、取付角 105°、厚みは筒部が 1.7 cm 前後、玉縁部は 0.9 cm。筒部、玉縁部とも凸面を横ナデで調整し、凹面は無調整である。側面は、分割後に筒部凸面を浅く面取りする。胎土には細礫を含み焼成はやや不良、色調は浅黄橙を呈する軟質の製品である。

玉縁式 C

筒部と玉縁部を別粘土で成形するもの。2201 は玉縁全長 7.0 cm、取付角は 100°、厚みは筒部が 1.0 cm～1.2 cm、玉縁部は 1.0 cm。成形時、筒部の上端を L 字形に折り曲げ、その上に帯状の別粘土を貼り付けて玉縁を作る。凹凸両面とも横ナデで調整し、分割後に側面凹面側を面取りする。胎土は密な砂質土、色調は淡橙色を呈し軟質である。

2199 は最大残存長 7.0 cm、玉縁残存長 4.3 cm、取付角度 100°、厚みは筒部が 1.7 cm、玉縁部は 1.2 cm。玉縁の成形は 2201 と同様の方法による。筒部凹面、玉縁部凹凸両面を横ナデで調整し、分割後の面取りは施さない。胎土はやや密な砂質土、焼成は悪く橙～淡橙色を呈し軟質である。

2200 は最大残存長 7.5 cm、厚み 1.8 cm。2 枚の粘土板をそれぞれ模骨の玉縁部と筒

部に巻き付け、肩部に紐状の補填粘土を充填して接合する。胎土は粗い砂質土、焼成は良好で灰色を呈し硬質である。

行基式

1次調査において、旧河道内から完形品が1点出土している。2203は、粘土板巻付け技法によって作られ、全長39.4cm、広端幅19.5cm、狭端幅12.5cm、最大厚2.0cm、最小厚1.2cmである。凸面は縦ナデの後に横ナデを施されるが、部分的に縄叩きの痕跡を残している。凹面は無調整で、分割後に側面の凹凸両面とも浅く面取りするが、分割破面を残す。

(4) 平瓦

平瓦は総点数1676、うち凸面調整の判別が可能であったのは819点で、内訳は縄叩き397点、横縄叩き54点、斜格子叩き148点、陰陽逆転斜格子叩き4点、凸面布目63点、ナデ消し153点である。

縄叩き

観察できた叩き痕跡は8種類である。

A

2204は粘土板桶巻き作りで、残存幅は12.0cm、厚さ1.8cm。縄1本の幅は0.3cm、深さ0.2cm、叩き具の幅は約3.4cmで縄の数は10本である。側面は凸面のみ面取りを施し、断面は三角形を呈する。胎土に細礫を含み、焼成は良好で硬質、色調は明灰～灰白色を呈する。出土点数は59点である。

B

2205は粘土板桶巻き作りで、残存長21.0cm、残存幅14.0cm、最小厚2.0cm、最大厚2.3cm。縄は幅0.4cm前後、深さ0.2cmで、1.0cmあたり3本の痕跡が残る。また、端部から3.3cmの範囲をナデ消す。側面は凹面側を僅かに面取りするが、凸面は無調整である。胎土は密、焼成は良好で硬質、灰色を呈する。出土点数は44点である。

C

2206は桶巻き作りで、残存長14.0cm、厚さ2.5cm。縄の幅は0.2cm～0.3cm、深さ0.2cm、縄の密度は1.0cmあたり3本である。胎土は細礫を含んだ密な砂質土、焼成は良好で硬質、色調は明灰色を呈する。出土点数は23点である。

D

2207は厚み1.7cmで、縄の幅0.2cm、深さ0.2cmの叩きを施す。これとは別に、幅0.4cm、深さ0.3cmの縄叩き痕跡が観察できる。叩き具に太さの異なる2種の縄が巻かれていたためと思われる。縄の密度は1.0cmあたり3本である。胎土は細礫を少量含む密な砂質土、焼成は良好で淡緑灰色を呈し、硬質である。出土点数は5点である。

E

2208は粘土板桶巻き作りで、残存幅12.6cm、厚さ2.1cm。縄の幅は0.2cm～0.4cm、深さ0.3cm、縄の密度は1.0cmあたり2本。側面は凸面側を深く面取りする。胎土は細礫を含む密な砂質土、焼成は比較的良好で硬質、外面は淡緑灰色、内部は淡褐灰色を呈する。出土点数は10点である。

F

2209は厚み1.9 cm、縄の幅0.4 cm、深さ0.2 cm、1.0 cmに2～3本という密度である。胎土はやや密で細礫を含む砂質土、焼成は悪く軟質、色調は明灰色を呈する。出土点数は11点である。

G

2210は残存長7.0 cm、残存幅10.2 cm、厚さ2.0 cm、縄の幅は0.4 cm、深さ0.2 cm、密度は1.0 cmに2本。端面は凹凸両面とも無調整で、側面は両面を浅く面取りする。胎土は密な砂質土、焼成は悪く軟質で、褐橙～褐灰色を呈する。出土点数は8点である。

H

2211は残存長9.8 cm、残存幅10.0 cm、厚み1.8 cm、縄の幅は0.4 cm、深さ0.3 cm弱、密度は1.0 cmに3本である。端面は凸面から凹面側に向かってやや深く面取りする。側面については、凸面は無調整であるが、凹面を浅く面取りする。胎土は細礫を含む砂質土、焼成は悪く軟質で、色調は緑灰色を呈する。出土点数は2点である。

横縄叩き

叩き具は7種類を確認した。

A

2212は粘土板桶巻き作りで、残存長20.8 cm、狭端部の幅25.0 cm、厚み2.0 cm。縄の幅0.4 cm、深さ0.2 cm、1.0 cmあたり2本の縄痕跡が残る。また、狭端面を下にして左端の凸面には5.5 cmの幅で斜格子叩きが施されている。側面は凹凸両面を面取りするが、端面は無調整である。細礫を含む密な胎土で、焼成は良好、硬質である。色調は灰白色を呈する。出土点数は12点である。

B

2213はS型の粘土板桶巻き作りで、残存長14.5 cm、最小厚2.1 cm、最大厚2.6 cm。縄の幅0.4 cm、深さ0.3 cm弱、叩き具の幅約3.1 cmで、縄の数は単位あたり7本である。側面の凹面側は狭端側から広端側へ向けて2.0 cm幅でヘラケズリを施し、凸面側は深めに面取りする。胎土は細礫を含む密な砂質土、焼成は悪く浅黄橙色の色調を呈するが、比較的硬質である。出土点数は25点である。

C

2214は桶巻き作りで厚みは2.0 cm、縄の幅0.3 cm弱、深さ0.1 cm、1.0 cmあたり5本と細かく浅い叩きが施される。胎土は細礫を含む粗い砂質土、焼成は比較的良好で硬質、色調は黒灰～褐灰色を呈する。出土点数は2点である。

D

2215は桶巻き作りで残存長16.5 cm、最小厚1.8 cm、最大厚2.3 cm。縄の幅は0.5 cm、深さ0.3 cm、1.0 cmあたり2本の粗い叩きである。凹面側から分割し、側面の凸面側に0.5 cm～0.7 cm幅でヘラケズリを施す。胎土は細礫を多量に含む粗い砂質土、焼成は良好で比較的硬質、色調は暗灰～灰色を呈する。出土点数は2点である。

E

2216は桶巻き作りで残存長15.3 cm、厚さ1.6 cm。縄の幅は0.5 cm、深さ0.3 cm～0.5 cm、叩き具の幅は4.2 cmで単位あたりの縄の数は6本である。側面は凹凸両面を

面取りし、狭端部は凹面、凸面とも調整を行わない。胎土はやや粗い砂質土、焼成は悪く灰白色を呈するが、硬質である。出土点数は3点である。

F

2217は桶巻き作りで残存長15.1cm、厚み1.9cm。縄の幅0.5cm、深さ0.3cmで、1.0cmあたりの縄の数は2本である。側面の凹面側に0.6cm幅でヘラケズリを施し、凸面側をやや深く面取りする。胎土は細礫を含むやや粗い砂質土、焼成は比較的良好で浅黄～灰白色を呈し、硬質である。出土点数は3点である。

G

2218は厚さ2.3cmで、縄の幅0.5cm、深さ0.2cm強、1.0cmあたりの本数は2本である。胎土は細礫を多量に含む粗い砂質土、焼成は悪く軟質、色調は浅黄～淡橙色を呈する。出土点数は1点。

斜格子叩き

斜格子叩きの叩き具は12種類を確認した。

A

2219は、残存長16.8cm、残存幅18.5cm、厚さ1.8cm。凹面は鈍で端部を幅0.7cm程度削る。0.7cm×0.7cm、深さ0.4cm前後の正斜格子が1.5cm×1.7cmに4つ配置される。胎土は密で、焼成は良好、硬質、色調は灰色を呈する。出土点数は21点である。

B

2220は、厚さ1.5cm、0.8cm×0.7cm、深さ約0.4cmの斜格子が2.1cm四方の範囲内に4つ配置される。胎土はやや密な砂質土、焼成は悪く軟質、色調は黄灰～淡橙色を呈する。出土点数は9点である。

C

2221は、残存長20.3cm、残存幅22.4cm、厚さ2.0cm、桶巻き作りの瓦である。0.8cm×0.8cm、深さ0.5cmの斜格子が1.6cm×2.1cmに4つ含まれる。分割後の側面調整はされていない。長石、チャートを含む胎土で、焼成は良好で硬質、色調は灰白色を呈する。出土点数は11点である。

D

2222は、厚さ2.9cmで桶巻き作りである。上辺1.0cm、下辺1.6cm、高さ0.5cmの台形の格子で、深さは0.1cm強。分割後に側面凸面側を深く面取りする。細礫を少量含む密な胎土で、焼成は比較的良好でやや軟質、色調は灰白～淡橙色を呈する。出土点数は12点である。

E

2223は、桶巻き作りで厚さ2.1cmである。0.7cm×0.6cm、深さが0.3cm弱の縦長斜格子を、1.4cm×1.3cmの範囲内に4つ施す。凹面は縦方向のナデ調整を行い杵板圧痕を磨り消す。胎土は細礫を含む密な砂質土、焼成は悪くやや軟質、色調は外面が黒灰色、内部は灰白色を呈する。出土点数は9点である。

F

2224は桶巻き作りのS型で、全長41.0cm、狭端側全幅22.0cm以上、広端側全幅約32.0cm、厚さは狭端部で2.2cm、広端部で2.6cmである。1.0cm×0.7cm、深さ0.4cmの斜格子を、2.3cm×2.0cmの範囲に4つ含む。側面は凹凸両面を浅く面取りするが、

狭端部および広端部は両面とも無調整である。出土点数は2点である。

G

2225は桶巻き作りで全長40.7cm、狭端側全幅25.0cm、広端側全幅約31.0cm、厚さは最大2.5cm、最小1.5cmである。1.1cm×0.8cm、深さ0.4cmの横長斜格子を、2.6cm×2.3cmの範囲内に4つ配置する。Fと同様、側面は凹凸両面を浅く面取りするが、分割破面を残す。狭端部および広端部は両面とも無調整。胎土は細礫を含む密な砂質土で、硬質に焼成されている。色調は褐灰色を呈する。出土点数は1点である。

H

2227は粘土板桶巻き作りのS型で残存長35.5cm、残存部全幅25.8cm、厚みは最大2.5cm、最小1.8cm。斜格子は0.8cm×0.9cm、深さ0.4cm前後で、1.9cm×2.0cmの範囲内に4つ含まれる。側面は凹面を0.3cm～1.3cm、凸面を0.5cm～1.6cmの幅で面取りし、分割破面を残す。狭端部は凹凸両面とも無調整。胎土は密な砂質土で、硬質に焼成されている。色調は灰白色を呈する。出土点数は2点である。

I

2226は桶巻き作りで残存長22.5cm、残存幅16.0cm、厚み1.8cm～2.6cm。0.7cm×1.2cm、深さ0.2cm弱の縦長斜格子を、1.9cm×2.2cmの中に4つ配する。叩き具のサイズは横約8.0cm、縦約7.3cmである。凹面に粗い縦方向のナデを施し、側面の凸面側を深く面取りする。胎土は細礫を多量に含む粗い砂質土、焼成が悪く淡灰～灰白色を呈するが、硬質である。出土点数は22点である。

J

2230は桶巻き作りで残存長20.5cm、残存幅14.5cm、厚み1.6cm。0.6cm×0.8cmの縦長の斜格子で深さ0.3cm強、1.5cm×1.5cmの範囲に4つ配置される。凸面側から分割後、側面の凹面側に縦方向のナデを施し、凸面側を深く面取りする。細礫を含むやや密な胎土、焼成はやや良好で硬質、褐灰～褐色の色調を呈する。出土点数は11点である。

K

2228は桶巻き作りで残存長12.0cm、残存幅12.6cm、厚さ2.0cm。0.5cm×0.7cm、深さ0.3cmの縦長斜格子を、1.5cm×1.4cmの範囲に4つ配する。側面は、凸面側に0.8cm～1.3cmの幅で縦方向のナデ調整を施し、凹面側は1.2cm幅で浅く面取りする。細礫を含むやや粗い砂質土、焼成は悪く軟質、色調は灰白色を呈する。出土点数は4点である。

L

2229は残存長11.3cm、残存幅9.0cm、厚さ1.9cm～2.1cm。0.5cm×0.5cm、深さ0.2cm～0.4cmの斜格子を1.2cm×1.3cmの中に4つ含む。側面は凹面側を幅1.0cm弱で浅く、凸面側を幅1.5cmで深く面取りする。端面の凸面側も幅1.0cm弱でやや深く面取りするが、凹面側は無加工である。密な胎土で焼成は良好、色調は灰色を呈する。出土点数は1点である。

陰陽逆転斜格子叩き

A

2点出土している。2231は厚み1.7cm、斜格子は1.2cm×1.0cm、凹線の幅が0.8

cm、深さは0.2 cm。側面は凹凸両面を浅く面取りする。胎土は細礫を含むやや密な砂質土で、焼成は悪く軟質、色調は淡黄灰色を呈する。出土点数は2点である。

B

2232 は厚み1.9 cm、斜格子の大きさは0.9 cm×1.3 cm、凹線の幅がcm、深さは0.2 cm。細礫を含むやや密な胎土で、焼成は悪く軟質で、淡橙色の色調を呈する。出土点数は1点である。

C

2233 は厚み1.7 cm、斜格子は1.4 cm×1.3 cmで、3.1 cm×2.8 cmの範囲内に4つ配置され、凹線の幅がcm、深さは0.5 cmである。細礫を含む粗い胎土で、焼成は悪く軟質で灰白色を呈する。出土点数は1点である。

凸面布目

全63点出土しており、完形が1点、ほぼ完形のもの1点ある。

1次調査で出土している2234は完形で、粘土板挿型内巻き作りと考えられる。全長41.0 cm、狭端幅22.0 cm、広端幅28.2 cm、最小厚2.0 cm、最大厚2.2 cmである。凸面に残る桝板圧痕は9枚分で、幅は狭端を上にして、狭端側で左から順に2.0 cm、3.2 cm、2.5 cm、3.3 cm、3.2 cm、3.1 cm、2.6 cm、2.5 cm、1.7 cm、広端側で順に4.5 cm、3.5 cm、3.3 cm、3.1 cm、3.4 cm、3.0 cm、3.0 cm、3.1 cm、4.4 cm。布の綴じ付け間隔は、広端側から順に5.6 cm、4.3 cm、4.5 cm、4.2 cm、3.7 cm、4.7 cm、5.2 cm、4.2 cm、3.5 cmである。凹面は縦方向の丹念なヘラケズリを施すが、狭端側の端面から1.5 cm、広端側の端面から5.5 cmの範囲で、横方向の板状工具の痕跡が観察できる。また、狭端側の凹凸両面をヘラケズリによって幅0.4 cm～1.0 cm面取りしている。分割裁線は狭端側から広端側へ入れられ、分割後の側面調整によって側面の断面形は三角になる。胎土はやや粗く細礫を含む。焼成は良好で硬質、色調は明灰色を呈する。

2235は最大残存長23.0 cm、最大残存幅13.2 cm、厚さ2.2 cm。残存している桝板圧痕は7枚分で、広端を下にして左から幅0.7 cm以上、2.2 cm、2.3 cm、2.0 cm、2.2 cm、2.2 cm、1.6 cm以上。左から2枚目、3枚目にかけて粘土板の合わせ目が現れている。凹面に縦方向のヘラケズリを施し、側面は分割破面を残しながら凹凸両面を面取りする。そのため断面は台形状を呈する。胎土は密な砂質土、焼成は悪く軟質、色調は外面が黒色、内部は灰～灰白色を呈する。

2236は残存長19.0 cm、残存幅16.9 cm、厚さ1.9 cm。桝板の幅は、狭端側を上にして、左から1.6 cm以上、1.5 cm、1.6 cm、1.7 cm、1.9 cm、1.7 cm、2.1 cm、2.3 cm、2.3 cm以上である。左から6枚目に粘土板の合わせ目が現れている。凹面を縦方向のヘラケズリで調整し、側面は凸面側を大きく面取りするため、断面は三角形になる。細礫を多量に含むやや粗い胎土で、焼成は悪くやや硬質、色調は外面が淡橙色、内部は黒灰色を呈する。

2238は残存長24.2 cm、残存幅14.2 cm、最小厚1.6 cm、最大厚1.8 cm。広端側を下にして、左から幅1.2 cm以上、1.9 cm、2.4 cm、2.2 cm、2.3 cm、2.2 cm、1.7 cm、2.0 cmの桝板圧痕が残り、桝板間の段差をナデによって平滑に仕上げる。布の綴じ付けは四段あり、桝板右半から右端に7.0 cm、5.0 cm、5.6 cmの間隔で観察することができる。凹面に縦方向のヘラケズリを施し、側面は凹凸両面を面取りすることに加え、凸面側

右端に残る杵板の布目圧痕をケズリによって消す。断面は三角形になる。細礫を少量含むやや密な胎土で、焼成は良好で硬質、色調は暗灰色を呈する。

2237は残存長9.5cm、残存幅12.5cm、厚さ1.6cm。狭端を上にして、左から幅0.8cm以上、1.8cm、1.9cm、2.2cm、1.9cm、1.8cm、1.0cm以上の杵板痕跡が残る。端部から2.1cm、7.3cmで杵板の左端に布の綴じ付け痕跡を確認することができる。また、左から1枚目と2枚目、2枚目と3枚目の杵板の間には約0.3cmの段差が付けられている。凹面に縦方向のヘラケズリを施し、板状工具の痕跡を完全に消している。側面は凹凸両面を面取りしており、断面は三角形になる。胎土はやや密で細礫を含む。焼成は悪く軟質、色調は淡橙色を呈する。

2239は残存長21.5cm、残存幅12.4cm、最小厚2.0cm、最大厚2.6cm。広端を下にして、左から幅1.2cm以上、2.3cm、2.3cm、2.0cm、2.4cm、2.0cmの杵板圧痕が残る。また、広端から2.0cm、6.2cm、11.3cm、16.9cmの位置で、杵板の左半から左端に布の綴じ付けを確認することができる。また、右端から2枚目と3枚目の杵板間には幅0.8cm、高さ0.2cmの、布の圧痕を残さない凸線状の縦帯がみられ、後者の右端には布の綴じ紐の痕跡が残っている。これらの特徴から、桶型の組合せ部分と思われる。凹面は縦方向のヘラケズリで調整されるが、僅かながら部分的に板状工具の痕跡を残す。側面は凸面側を大きく面取りし、断面は台形状を呈する。胎土は密な砂質土、焼成は良好で硬質、色調は暗灰～黄灰色を呈する。

2240は残存長27.0cm、残存幅18.3cm、厚さは最小1.5cm、最大2.1cm。杵板の幅は、広端を下にして、左から1.8cm、1.8cm、2.4cm、2.2cm、2.7cm、2.4cm、2.5cm、1.8cmである。凹面に縦方向のヘラケズリを施し、側面は凹凸両面を面取りで仕上げるため、断面は三角形になる。細礫を含むやや粗い胎土で、焼成はやや良好、色調は外面が黒灰色、内部が灰白色を呈する。

2241は残存長20.0cm、残存幅20.5cm、厚さ1.8cm。杵板の幅は、広端を下にして、左から1.0cm、2.8cm、1.9cm、2.4cm、1.6cm、2.5cm、2.6cm、2.3cm、2.6cm、1.5cm、1.4cm以上である。広端から5.8cm、11.2cm、17.0cmの位置で、杵板右端部に布を綴じ付ける。左から9枚目から10枚目にかけてS型の粘土板合わせ目が見られている。凹面に縦方向のヘラケズリを施し、側面は凹面側を大きく面取りすることで三角形の断面を呈する。胎土は細礫を少量含むやや密な砂質土、焼成は悪いが硬質で、外面は黒灰～灰白色、内面は灰白色を呈する。

2242は残存長8.5cm、残存幅16.0cm、厚みは2.0cm。杵板の幅は、端部を上にして左から1.5cm、2.8cm、1.8cm、2.0cm、2.2cm、2.3cm、2.2cmである。端部から1.8cm、4.7cmの位置で杵板中央から左半部に布が綴じ付けられる。凹面には、縦方向の丁寧なヘラケズリを観察することができる。分割後に凹凸両面を浅く面取りしており、断面は台形状を呈する。胎土は細礫を含むやや密な砂質土、焼成はやや悪いが硬質である。色調は灰白色を呈する。

2243は残存長16.7cm、厚さ2.0cm。杵板圧痕の幅は、広端面を下にして、左から1.0cm以上、2.4cm、2.5cm、2.0cm、2.0cm、2.8cmである。広端から0.5cm、2.9cm前後、7.9cm～8.5cm、13.1cm～14.0cmで、杵板中央から左半に布を綴じ付ける。凹面は縦方向のヘラケズリで調整されるが、板状工具の痕跡を観察することができる。

胎上はやや粗い砂質土で細礫を含む。良好な焼成ではないが硬質で、灰白色を呈する。

2244は残存長9.2cm、厚み2.5cm。端面を下にして左から1.7cm以上、2.4cm、2.0cm、2.6cm、2.0cm、2.2cmの桤板圧痕が残る。端面から4.5cmで桤板中央部に布の縦じ付け痕跡がみられる。また、凸面に糸切り痕跡を観察することができる。凹面には縦方向のヘラケズリを施す。胎土は細礫を含むやや密な砂質土、焼成は悪く比較的硬質、色調は明灰～灰白色を呈する。

2245は残存幅9.0cm、厚さ1.9cm。桤板の幅は広端を下にして、左から1.3cm、1.8cm、2.0cm、1.8cmで、布は桤板の左端に縦じ付けられる。凹面に縦方向のヘラケズリを施し、側面は凹凸両面を浅く面取りするが分割破面を残す。したがって断面形状は台形になっている。胎土は細礫を含む粗い砂質土、焼成は悪いが比較的硬質である。色調は灰白色を呈する。

2246は凸面に糸切り痕跡を残し、厚さは2.2cm。糸切り痕跡のある側を下にして、左から幅1.3cm以上、2.3cm、2.4cm、1.0cm以上の桤板痕跡が残る。また、下から3.8cm、9.1cmの桤板右端部に布の縦じ付けがあり、凹面に縦方向のヘラケズリが施される。胎土は密な砂質土、焼成は悪く比較的硬質、色調は灰白色を呈する。

2247は厚さ2.3cm。観察できる桤板の枚数は5枚で、幅は各々、広端を下にして左から1.5cm以上、2.5cm、2.8cm、3.3cm、2.2cm以上。広端から5.2cm、桤板の右端部に布の縦じ付け痕跡を残す。右から1枚目から2枚目にかけて、S型の粘土板の合わせ目が現れている。凹面には縦方向のヘラケズリが施される。細礫を含むやや粗い胎土で、焼成は悪くやや硬質、灰白色の色調を呈する。

2248は残存長13.0cm、残存幅12.5cm、最小厚1.3cm、最大厚1.6cm。桤板の幅は、広端を下にして、左から1.8cm以上、2.0cm、2.1cm、2.1cm、1.9cm、2.1cm、1.2cm以上。凹面にヘラケズリが施されているが、かすかに板状工具の痕跡が残る。胎土は細礫を含むやや密な砂質土、焼成は悪く軟質、外面は明灰色、内部は灰白色を呈する。

2249は残存長12.2cm、残存幅10.8cm、厚み1.8cm。観察できる桶の枚数は5枚で、幅は各々2.6cm、1.7cm、2.3cm、2.2cm、2.6cmである。凹面には、縦方向の丁寧なヘラケズリを施す。分割後に側面凹面側を0.7cm、凸面側を1.1cm～1.6cm面取りしており、三角形の断面を呈する。

2250は残存長14.5cm、残存幅9.5cm、最小厚1.7cm、最大厚2.0cm。左から幅1.2cm以上、2.1cm、2.5cm、2.1cmの桤板圧痕が残る。左から2枚目および3枚目の桤板痕跡が一段高くなっており、3枚目に粘土板の合わせ目が現れている。この部分の桤板を外側に突出させることで、粘土板を合わせる指標とした可能性が考えられる。胎土は細礫を含む密な砂質土、焼成は悪く軟質、色調は外面が黒灰色、内部は明灰色を呈する。

(5) 鷗尾

1次調査において、葛下川旧流路と考えられる河道内から2点出土している。2252は頂部付近の破片で、厚みは4.3cm～4.5cmである。内区には2.5cm～3.9cmの鱗、中央区には直径4.5cm～4.8cmの連珠文帯、外区には3.0cm～4.3cmの鱗を篋によって割

り付けした後、削り出しによって表現する。ケズリは縦方向で、外区の鱗が逆段、内区のそれは正段である。内区と中央区、中央区と外区を区画する縦帯は幅 1.0 cm～1.5 cm で、これも削り出す前に篋で割り付けを行う。また、各珠文中心に残る針痕跡から、連珠文帯はコンパス状工具を用いて割り付けられたと考えられる。裏面にも、幅 4.0 cm～5.1 cm の鱗を逆段に削り出して表現するがヘラケズリは横方向で、先端部から順に作られる。また、この鰭尾は粘土板を用いず、粘土塊を積み上げて作られている。胎土は密な砂質土、焼成は良好で硬質である。色調は明灰色を呈する。

2251 は尾の立ち上がり部と思われる。厚みは 4.2 cm、外区の鱗の幅は 4.5 cm、中央区の縦帯の幅は 1.5 cm～1.8 cm、連珠の直径は 5.8 cm である。鱗は内側から外側に向かうヘラケズリによって、逆段に表現される。これらの文様も 2252 と同様、削り出す前に篋を用いて割り付けを行う。連珠中央にはコンパス状工具の針痕跡が残る。裏面には、内区側から外区側へ向かう横方向のヘラケズリによって、逆段の鱗を削り出す。胎土、焼成は 2252 と同様である。

この 2 点の鰭尾は、製作技法、施文技法、焼成、胎土等が同様であることから、同一個体とみられるが接合はしない。また、鳥坂寺で出土する鰭尾に類似する。

(6) その他

当遺跡で出土した軒丸瓦の内には、瓦当を欠損しているものの、丸瓦との接合方法を観察することのできるものが数点ある。2186 は、丸瓦筒部の凹凸両面に幅 0.3 cm～0.5 cm の縦方向のキザミを施し、瓦当に接合した後、両面とも縦方向のヘラケズリで仕上げている。2187 は、丸瓦筒部の凸面を端部から約 1.2 cm 斜めに削り取っているが、瓦当裏面に差し込まず、載せただけの状態で接合されたと思われる。接合後、凸面を縦方向のヘラケズリ、凹面側をナデで調整する。2188 は、丸瓦筒部の凹凸両面、端面とも

に無加工で瓦当に接合されていたようである。

2253 は道具瓦と思われる。6 次調査で出土したもので、長辺の残存長 12.2 cm、短辺の残存長 10.7 cm、厚み 3.2 cm～3.6 cm。粗い刷毛状の工具で外面調整を行い、側面中央には篋で幅 0.3 cm、深さ 0.3 cm の沈線を 1 条描く。胎土は密で細礫を少量含む。焼成は良好で硬質である。色調は外面が淡橙色、内部は灰色を呈する。同種あるいは同一個体と思われる破片がこの他に 4 点出土しているが、用途は不明である。

(7) 埴

1 次調査で 4 点、4 次、5 次および 6 次調査で各 2 点出土している。

2254～2257 は 1 次調査、2258、2259 は 4 次調査、2260、2262 は 5 次調査、2261、2263 は 6 次調査出土である。

2254 は長辺が残存長 17.7 cm、短辺が 15.3 cm、厚みは最薄部で 2.7 cm、最大部で 4.5 cm である。外面は粗いケズリで調整される。胎土は細礫を含む密な砂質土、焼成は良くはないが硬質で、色調は浅黄色を呈する。

2255 は、長辺の残存長 16.4 cm、短辺の残存長 11.9 cm、厚み 4.1 cm。外面は、一方の面に櫛状工具による縦および斜め方向の条痕が残り、その裏面はヘラケズリとナデ

で調整される。櫛状工具の幅は2.7 cm、条痕1本の幅は0.5 cmで単位あたり4本が施文される。胎土は粗く、細礫を含む。焼成は悪いが比較的硬質で、淡橙色を呈する。

2256 は長辺の残存長11.5 cm、短辺の残存長7.6 cm、厚み3.7 cm。外面にナデ調整を施す。胎土は細礫を含む密な砂質土。焼成は悪く、色調は淡橙色を呈し、軟質である。

2257 は長辺の残存長6.3 cm、短辺の残存長5.8 cm、厚み5.0 cm。外面は、一方の面に櫛状工具によると思われる縦方向の条痕を残す。この条痕1本の幅は0.4 cmである。胎土は密な砂質土で、焼成は悪く軟質、色調は淡橙色を呈する。

2258 は最大残存長9.5 cm、最大残存幅8.4 cm、厚さ3.6 cm。表裏両面および側面をヘラケズリないしナデで仕上げ、端部には面取りを施す。胎土は密な砂質土、焼成は良好で硬質である。色調は黄灰～灰白色を呈する。

2259 は最大残存長20.4 cm、最大残存幅23.5 cm、厚さ4.5 cm。表面を幅3.7 cm前後の櫛状工具によって粗いヘラケズリで調整し、裏面および側面に同心円文の叩き痕跡が残る。同心円は直径5.4 cm、五重圏である。また、表面側端部を面取りし、裏面には側端部から約3.3 cmの幅でヘラケズリを施す。表面には、ひび割れ、煤の付着などの被熱痕跡が見受けられる。胎土は密な砂質土で、細礫を含む。焼成は良好で硬質、色調は灰色～淡灰色を呈する。

2260 は残存長11.4 cm、幅13.6 cm、厚さ4.0 cmで、外面にナデ調整を施すが、一部に縄叩きの痕跡が残る。密な胎土で、焼成は良好、硬質である。色調は灰白色を呈する。

2261 は長辺の残存長11.5 cm、短辺の残存長10.8 cm、厚み6.2 cmである。外面にはナデ調整を施す。胎土は密で、焼成は悪く軟質、色調は淡橙色を呈する。

2262 は残存長25.0 cm、幅10.7 cm、最小厚4.4 cm、最大厚5.0 cmの平面長方形である。表面には0.7 cm×0.7 cm、深さ0.3 cmの斜格子叩きが施され、裏面および側面はナデで調整される。胎土は密で、焼成は良好。外面は淡黄灰色、内部は淡橙色を呈し、硬質である。

2263 は長辺の残存長11.0 cm、短辺の残存長7.0 cm、厚み5.0 cm～5.5 cm、外面調整はナデによる。胎土は礫を多量に含む密な砂質土で、焼成は悪く軟質、色調は淡橙色を呈する。

(8) まとめ

上述したように、下田東遺跡では7世紀前半に遡り得るものから中世に比定されるものまで、数種の軒瓦が出土している。出土点数は、瓦当を欠損しているものを含めて軒丸瓦が27点25個体、軒平瓦が12点11個体である(表31-1)。紋様については、軒丸瓦は船橋庵寺式の素弁八弁蓮華紋、川原寺式の複弁八弁蓮華紋、尼寺北庵寺および太子町妙見寺同范の複弁八弁蓮華紋(GM5)、王寺町放光寺(片岡王寺)山土例と同文の単弁十六弁蓮華紋(GM2)、さらに平城京6282Ba同范、三巴文の瓦当が出土している。とりわけGM5は下田東遺跡出土例が最も范の状態が良好であり、次いで尼寺北庵寺例、最も崩れているのが妙見寺例であることから、下田東遺跡例が最も先行すると考えられる。軒平瓦では四重弧紋、平城京66641、6721Cと同范のものが

出上している。四重弧紋軒平瓦は軒丸瓦と同様、尼寺廃寺出土例に比して、より精緻である。また 66641(GH6)は平城京1期後半に比定される瓦であるが、出土した2個休とも平瓦部凸面に朱が残存していることから、かつて建物の軒先を飾っていたものと考えられる。6282Ba(GM6)と6721C(GH7)は組み合い、共に平城京Ⅲ期初頭(Ⅲ-1)に比定され、平城京で主体的に使用される時期がある。軒瓦以外では、丸瓦は総点数1055点中、玉縁式が119点、行基式12点、判別不能819点、中世以降のもの105点である。平瓦は総点数1676点中、凸面調整の判別が可能なもの819点、判別不能なもの414点、中世以降のもの443点である。また、平瓦の凸面調整については、縄叩き、横縄叩き、斜格子叩き、凸面布目などがある。それらの出土点数は上記819点中、縄叩きが397点で48%と最も多く、ナデ消しが153点で19%、斜格子叩きが148点で18%と続き、次いで凸面布目が63点で8%、横縄叩きが54点で7%となっており、縄叩きが最も多い(表31-2)。またこれらは、粗雑な作りをみせる例もあるが全体的には比較的丁寧に作られている。とりわけ凸面布目平瓦は出土したほぼ全てが、凹面を非常に丹念に磨り消すことによって板状工具の痕跡を残さない。これは、尼寺北廃寺で出土している凸面布目平瓦が、ほとんどすべて凹面に板状工具の痕跡を残すことと対照的である。また、下田東遺跡では軒丸瓦、軒平瓦ともに川原寺式の紋様構成を有するものが出土している。平瓦についても、斜格子叩き平瓦、陰陽逆転斜格子叩き平瓦、横縄叩き平瓦、凸面布目平瓦は川原寺創建時に用いられている。下田東遺跡におけるこの4種の出上数をあわせると269点で33%となり、縄叩き平瓦に次ぐ数値が得られる。このことから、平瓦についても相対的に川原寺の系統に属する製品が比較的多い出土傾向を示すということができよう。創建期の川原寺で用いられた瓦は主に五條市荒坂瓦窯で製作され、後に別の瓦窯に生産地が移ると考えられている。また、川原寺寺域内でも瓦窯が確認され(川原寺瓦窯)、ここでも創建期の瓦が焼かれていたことが明らかになっている。しかし、川原寺創建期の瓦はこの荒坂・川原寺両瓦窯で焼かれた製品とは胎土、焼成が異なる一群が存在する。この一群を川原寺Ⅲ群としたうえで、『弘福寺三網蝶』の記述から現在の馬見丘陵南側の瓦窯(広瀬郡瓦窯と仮称)で作られたと想定し、近隣に位置する下田東遺跡や広陵町百済寺から川原寺出土資料に類似した瓦が出土することがそれを補強するという意見が出されている。

下田東遺跡において7世紀代の瓦が出土することは、当遺跡内あるいは周辺に瓦葺き建物が存在したことを想起させる。しかし、これまでの調査では基壇など、建物の存在を直接的に示す遺構は検出されていない。また、瓦の総出土点数も多いとは言えず、特定の建物に葺き上げられていたと考えるには纏まりを欠いている。すなわち、瓦葺き建物の存在を想定することは困難であると言わざるを得ない。その一方で、その出土傾向から、川原寺と当遺跡の間に何らかの関係性のあったことを示唆する資料であるといえよう。このことについては、『弘福寺三網蝶』の記述およびそれをもとにした上述の想定に従えば、下田東遺跡は馬見丘陵南麓にあったとされる広瀬郡瓦窯(仮称)から製品供給先である川原寺への中継地ないし集積地としての機能を果たした可能性が考えられる。しかし、馬見丘陵北側では下牧瓦窯などが確認されているが、南側では瓦散布地が数カ所確認されているのみであり、現在のところ瓦窯の存在は確

認められていない。また、当遺跡では川原寺創建期の瓦と同様の凸面調整を施される平瓦が多く出土しているが、第四節で記したように同種の叩きであっても、その叩き具の数が非常に多い。さらに、平瓦自体の製作技法、焼成具合、胎土などが遺跡内で一定していない。これらの点を鑑みると、これらの瓦は特定の瓦窯から持ち込まれたものと見することは困難なように思われる。すなわち、当遺跡が瓦の中継・集積地であったと想定するならば、広瀬郡瓦窯（仮称）から川原寺へという特定の供給元と供給先を結ぶのではなく、不特定多数の生産地から飛鳥地方への瓦輸送における中継・集積機能を果たしていたのではなからうか。しかし、製品としての瓦を大量に集積、保管しておくためには相応の施設が必要になると考えられるが、当遺跡においてそのような施設の存在を示す遺構は検出されていない。また、7世紀代のものに加えて平城京式軒瓦も出土しており、とりわけ6664Iが平城京五条五坊十三坪で出土していることは、平城京周辺と北葛城地方との関係性を考えるうえで非常に示唆的である。

下田東遺跡出土の瓦については今後、川原寺出土例や平城京出土例などとの比較検討にむかえ、その生産地を特定していく必要がある。それにより、馬見丘陵南麓にあったとされる瓦窯の存在および当該瓦窯製品の流通、さらには下田東遺跡を中心とした北葛城地方と飛鳥地方、平城京周辺地域との関連性について検討することが可能になると思われる。

- *1 花谷 浩 2003「飛鳥の川原寺式軒瓦」『飛鳥白鳳の瓦づくりVI—川原寺式軒瓦の成立と展開（1）—』奈良文化財研究所
- 小谷徳彦 2003「川原寺の丸・平瓦」『飛鳥白鳳の瓦づくりVI—川原寺式軒瓦の成立と展開（1）—』奈良文化財研究所
- *2 松村恵司・富永里菜 2004「Ⅱ 検出遺構 3 川原寺の遺構」『川原寺寺域北限の調査 飛鳥藤原第119-5次 発掘調査報告』奈良文化財研究所
- *3 小谷徳彦・寛 和也 2004「Ⅲ 出土遺物 4 瓦埴類」『川原寺寺域北限の調査 飛鳥藤原第119-5次 発掘調査報告』奈良文化財研究所
- *4 泉森 皎 1976「古墳時代」『香芝町史』香芝町役場
- 泉森 皎 1977「歴史時代の遺跡」『上牧町史』上牧町役場

6 縄文土器

(1) 平成13年度調査

2264 は第17トレンチSR01から出土した。残存率は10%未満、残存長3.1cm、厚さ0.3cmで、爪形文を施している。

2265 は第19トレンチ第6層から出土した。深鉢で、厚さ0.45cmであり貼付凸帯を施している。

2266 は第19トレンチ第6層から出土した。深鉢で、残存長4.1cm、厚さ0.5cmである。

2267 は第19トレンチ第6層から出土した。深鉢で、残存長5.9cm、厚さ0.7cmであり、突帯および縄文を施している。

2268 は第19トレンチ第6層から出土した。深鉢で、残存長3.1cmであり、刺突文、

沈線、縄文を施している。

2269 は第 19 トレンチ第 6 層から出土した。深鉢で、厚さ 0.7cm であり、沈線および縄文を施している。

2270 は第 19 トレンチ第 6 層から出土した。深鉢で、残存長 4.9cm、厚さ 0.75cm であり、縄文を施している。

2271 は第 19 トレンチ第 6 層から出土した。深鉢で、残存長 5.0cm、厚さ 0.6cm であり、縄文を施している。

2272 は第 19 トレンチ第 6 層から出土した。深鉢で、残存長 2.4cm、厚さ 0.6cm であり、沈線および縄文を施している。

2273 は第 19 トレンチ第 6 層から出土した。深鉢で、残存長 3.2cm、厚さ 0.7cm であり、沈線および縄文を施している。

2274 は第 19 トレンチ第 6 層から出土した。深鉢で、残存長 4.2cm、厚さ 0.7cm であり、沈線を施している。

2275 は第 19 トレンチ第 6 層から出土した。深鉢で、残存長 2.6cm、厚さ 0.6cm であり、縄文を施している。

2276 は第 19 トレンチ第 6 層から出土した。深鉢で、残存長 3.0cm、厚さ 0.6cm であり、沈線および縄文を施している。

2277 は第 19 トレンチ第 6 層から出土した。深鉢で、残存長 3.3cm、厚さ 0.5cm であり、縄文および爪形文を施している。

2278 は下田東 1 号墳南側周濠から出土した。残存高 3.8cm、底径 3.2cm である。

2279 は第 19 トレンチ第 5 層から出土した。鉢で、復元口径 25.0cm、残存高 8.4cm であり、線刻を施している。

2280 は第 23 トレンチ SD05 から出土した。残存高 2.7cm、底径 4.4cm である。

2281 は第 19 トレンチ第 6 層から出土した。深鉢で、復元口径 34.8cm、残存高 4.8cm であり、沈線によって文様を施している。

(2) 平成 14 年度調査

2282 は本調査北区北東部から出土した。残存長 7.6cm、厚さ 0.6cm であり、羽状縄文を施している。

2283 は本調査北区北東部から出土した。残存長 4.9cm、厚さ 0.6cm であり、沈線を施している。

2284 は本調査北区北東部から出土した。残存長 10.5cm、厚さ 0.6cm であり、貝によって条痕を施している。

2285 は本調査北区南東部から出土した。残存長 4.0cm で、口縁部外側に刺突文を施している。

2286 は本調査北区北東部から出土した。残存長 4.6cm、厚さ 0.5cm であり、沈線によって文様を施している。

2287 は本調査北区南東部から出土した。残存長 7.4cm、厚さ 0.7cm であり、縄文を施している。

2288 は本調査北区北東部から出土した。把手で残存長 8.0cm、幅 11.5cm である。

2289 は本調査北区南東部から出土した。残存長 8.2cm、厚さ 0.7cm であり、貝により条痕を施している。

2290 は本調査北区北東部から出土した。把手で残存長 6.6cm、幅 13.4cm であり、沈線により装飾を施している。

2291 は本調査北区南東部から出土した。復元口径 21.0cm、厚さ 0.8cm であり、沈線を施している。

2292 は本調査北区南東部から出土した。浅鉢で、復元口径 35.6cm、厚さ 0.7cm であり、ヘラ描き沈線による山型文を施している。

2293 は本調査北西区 SR13 から出土した。残存長 3.2cm、厚さ 0.6cm であり、沈線を施している。

2294 は本調査北西区 SR13 から出土した。残存長 7.1cm、厚さ 0.5cm である。

2295 は本調査北西区 SR13 から出土した。残存長 4.1cm、厚さ 0.6cm であり、口縁部に沈線を施している。

2296 は本調査北西区 SR13 から出土した。残存長 4.8cm、厚さ 0.8cm であり、沈線を施している。

2297 は本調査北西区 SR13 から出土した。残存長 5.5cm、厚さ 0.5cm であり、沈線文を施している。

2298 は本調査北西区 SR13 から出土した。復元口径 23.4cm、残存長 12.7cm、厚さ 0.45cm であり、条痕を施している。

(3) 平成 15 年度調査

2299 は C 地区 C 調査区 SR16 から出土した。残存長 5.0cm、厚さ 0.65cm であり、馬蹄形の粘土紐を貼り付けている。

2300 は C 地区 C 調査区 SR16 から出土した。厚さ 0.7cm であり、爪形文を施している。

2301 は C 地区 C 調査区 SR16 から出土した。残存長 3.6cm、厚さ 0.6cm であり、突帯を貼り付け刻目を施している。

2302 は C 地区 C 調査区 SR16 から出土した。残存長 4.3cm、厚さ 0.6cm である。

2303 は C 地区 C 調査区 SR16 から出土した。残存長 6.5cm、厚さ 0.5cm であり、沈線および縄文を施している。

2304 は C 地区 C 調査区 SR16 から出土した。残存長 4.3cm、厚さ 0.7cm であり、縄文および突帯を施している。

2305 は本調査中央東区 SR03 から出土した。残存長 3.7cm、厚さ 0.6cm であり、沈線を施している。

2306 は本調査中央東区 SR03 から出土した。残存長 3.2cm、厚さ 0.6cm であり、沈線を施している。

2307 は本調査中央東区 SR03 から出土した。残存長 4.5cm、厚さ 0.6cm であり、沈線を施している。

2308 は本調査中央東区 SR03 から出土した。残存長 4.2cm、厚さ 0.65cm であり、5 条の沈線および刻目を施している。

2309 は本調査中央東区 SR03 から出土した。残存長 5.5cm、厚さ 0.6cm であり、口縁部に突帯を施している。

2310 は本調査中央東区 SR03 から出土した。残存長 3.8cm、厚さ 0.75cm であり、ヘラ描き沈線を施している。

2311 は本調査中央東区 SR03 から出土した。残存長 9.7cm、厚さ 0.8cm であり、2条の突帯を施している。

2312 は本調査中央東区 SR03 から出土した。残存高 7.3cm であり、装飾した文様を施している。

2313 は本調査中央東区 SR03 から出土した。残存長 5.5cm、厚さ 0.6cm であり、口縁部に突起を貼り付け、外側に陰線文様を施している。

2314 は本調査中央東区 SR03 から出土した。残存長 5.7cm、厚さ 0.65cm であり、ヘラ描きの文様を施している。

2315 は本調査中央東区 SR03 から出土した。残存長 7.2cm、厚さ 0.9cm であり、円形の棒状のもので深い刺突を施し文様としている。

2316 は本調査中央東区 SR03 から出土した。残存長 3.9cm であり、装飾した文様を施している。

2317 は本調査中央東区 SR03 から出土した。残存長 4.8cm、厚さ 0.55cm であり、沈線を施している。

2318 は本調査中央東区 SR03 から出土した。残存長 5.5cm、厚さ 0.6cm であり、沈線および縄文を施している。

2319 は本調査中央東区 SR03 から出土した。残存長 3.3cm、厚さ 0.5cm であり、櫛歯状の条線を施している。

2320 は本調査中央東区 SR03 から出土した。残存長 3.6cm、厚さ 0.55cm であり、突帯を施している。

2321 は本調査中央東区 SR03 から出土した。残存高 3.7cm、底径 7.0cm である。

2322 は本調査中央東区 SR03 から出土した。残存高 2.3cm、底径 4.7cm である。

2323 は本調査中央東区 SR03 から出土した。残存高 2.8cm、底径 5.0cm である。

2324 は本調査中央東区 SR03 から出土した。残存高 3.1cm、底径 8.1cm であり、内面にススが付着している。

2325 は本調査中央東区 SR03 から出土した。残存高 7.5cm、底径 4.3cm である。弥生土器の可能性もある。

2326 は本調査中央東区 SR03 から出土した。残存高 8.2cm、復元口径 21.7cm である。

(4) 平成 16 年度調査

2327 は C 地区 C 調査区 SR16 から出土した。残存長 6.3cm、厚さ 0.65cm であり、突帯および爪形文を施している。

2328 は C 地区 C 調査区 SR16 から出土した。残存長 5.4cm、厚さ 0.7cm であり、爪形文および縄文を施している。

2329 は C 地区 C 調査区 SR16 から出土した。残存長 5.3cm、厚さ 0.5cm であり、縄文を施している。

2330 はC地区C調査区SR15から出土した。鉢で、口径8.9cm、器高8.5cm、底径3.7cmである。

2331 はC地区C調査区SR16から出土した。残存高7.0cm、底径14.0cmである。

2332 はC地区C調査区SR16から出土した。多角形土器で、残存高7.0cm、底径10.4cmであり、縄文を施している。

(5) 平成17年度調査

2333 はH地区H調査区SR22から出土した。残存長6.3cm、厚さ0.5cmであり、条痕および沈線を施している。

2334 はH地区II調査区SR22から出土した。残存長12.8cm、厚さ0.7cmであり、条痕を施している。

2335 はH地区II調査区SR22から出土した。残存長4.7cm、厚さ0.8cmであり、押型文および沈線を施している。

2336 はH地区II調査区SR22から出土した。残存長3.6cm、厚さ0.6cmであり、口縁部に刻目を施している。

2337 はH地区H調査区SR22から出土した。残存長5.2cm、厚さ0.7cmであり、沈線を施している。

2338 はH地区II調査区SR22から出土した。残存高3.6cm、底径17.0cmである。

2339 はL地区第59トレンチSR19から出土した。残存長3.8cm、厚さ0.5cmであり、貼付突帯を施している。

2340 はL地区第59トレンチSR19から出土した。残存長4.0cm、厚さ0.6cmであり、貼付突帯および刻目を施している。

2341 はL地区第59トレンチSR19から出土した。残存長6.95cm、幅6.3cmであり、沈線を施している。

2342 はL地区第59トレンチSR19から出土した。残存長4.9cm、厚さ0.7cmであり、沈線を施している。

2343 はL地区第60トレンチSR20から出土した。残存長3.95cm、厚さ0.65cmであり、縄文を施している。

2344 はL地区第60トレンチSR20から出土した。残存長5.9cm、厚さ0.6cmであり、縄文を施している。

2345 はL地区第60トレンチSR20から出土した。残存長5.6cm、厚さ0.65cmであり、縄文を施している。

2346 はL地区第60トレンチSR20から出土した。残存長7.45cm、厚さ0.7cmであり、刻目突帯を施している。

2347 はL地区第60トレンチSR20から出土した。残存長9.6cm、幅10.7cmであり、条痕および沈線を施している。

2348 はL地区第60トレンチSR20から出土した。残存長5.9cm、厚さ0.6cmであり、縄文および沈線を施している。

2349 はL地区第60トレンチSR20から出土した。残存長5.9cm、厚さ0.6cmであり、縄文を施している。

2350 はL地区第59 トレンチ SR19 から出土した。残存長 11.2cm、幅 11.6cm であり、条痕を施している。

2351 はL地区第60 トレンチ SR20 から出土した。残存長 4.5cm であり、沈線を施している。

2353 はL地区第60 トレンチ SR20 から出土した。残存長 4.4cm、厚さ 0.6cm であり、爪形文を施している。

2354 はL地区第60 トレンチ SR20 から出土した。残存高 4.85cm、底径 7.05cm である。

2355 はL地区第60 トレンチ SR20 から出土した。復元口径 35.7cm、残存高 15.3cm であり、凹線文を施している。

(6) 平成 20 年度調査

2352 はK地区第71 トレンチ SR31 から出土した。深鉢で残存長 4.4cm であり、爪形文を施している。

7 弥生土器

調査地内のほぼ全域で弥生土器の出土が認められたが、その出土量は多くない。またこれらの遺物は、旧河道や弥生時代以降の遺構および耕作土層に混入したものであり、弥生時代の遺構は検出されていない。旧河道についても古墳時代から平安時代に包含される。総量の約半数は SR15 からの出土で、時期は弥生後期を中心に前期のものまでであるが、連続性はなく断続的である。ただし前期の遺物については、縄文晩期の土器が出土しており、周辺遺跡からも連続性が窺える。後期後半から庄内並行期に比定される遺物の出土増加については、南方に存在する古墳時代前期の鎌田遺跡との関連性を示唆する。当調査地周辺には弥生時代の遺跡は認められていないが、今調査における遺物の出土により、弥生時代における下田地域の動向を窺うことができよう。

平成 13 年度調査では、旧河道内砂層に包含され、平成 14 年度調査では縄文砂層、SR03、SR13、平成 15 年度調査では E 地区 F 調査区 SR03、C 地区 C 調査区 SR16 などから出土している。平成 16 年度調査では C 地区 C 調査区 SD67 中層、C 地区 C 調査区 SR15、C 地区 C 調査区 SR16 などから出土し、平成 17 年度調査では L 地区 59 トレンチ SR19、平成 19 年度次調査では K 地区 68 トレンチ SK90 から出土した。

2356 は高杯で、口径 17.6 cm、残存高 4.0 cm、杯部のみ残存している。口縁部にヨコナデ、体部内外面にナデを施す。弥生後期に比定される。

2357、2358 は平成 14 年度調査、縄文砂層から出土した。

2357 は壺で、底径 8.4 cm、残存高 8.5 cm、底部は平底を呈し、焼成後に穿孔が施されている。外面にミガキ、内面に指オサエおよびナデを施す。弥生前期に比定される。

2358 は壺で、底径 10.4 cm、残存高 3.5 cm、底部は平底を呈する。外面にナデ、内面に指オサエおよびナデを施す。弥生前期に比定される。

2359 は壺で、第 25 トレンチ SF04 から出土した。底径 5.0 cm、残存高 3.2 cm、底部のみ残存しており、平底を呈する。内外面とも磨滅によって調整は不明である。弥生前期に比定される。

2360 は甃で、底径 7.1 cm、残存高 5.7 cm、底部のみ残存している。平底を呈し、外面は磨滅のため調整は不明であるが、指オサエが残る。内面には指オサエおよびナデを施す。弥生前期に比定される。

2361 は壺で、底径 6.0 cm、残存高 2.9 cm、底部のみ残存している。平底を呈し、外面に指オサエの後ナデ、内面に指オサエを施す。弥生前期から中期に比定される。

2362 は壺で、底径 7.1 cm、残存高 5.4 cm、底部のみ残存している。平底を呈し、内外面にナデを施す。弥生前期から中期に比定される。

2363、2364 は壺である。2363 は口縁部のみ残存しており、口径 18.7 cm、残存高 3.6 cm。口縁部は外反し、頸部に沈線が巡る。弥生前期から中期に比定される。2364 は底径 5.0 cm、残存高 1.2 cm、底部のみ残存しており、平底を呈する。弥生前期から中期に比定される。

2365 は鉢で、口径 4.0 cm、残存高 3.0 cm、口縁部のみ残存している。口縁端部が垂下し、口縁部にヨコナデ、列点文を施す。弥生中期に比定される。

2366 は広口壺で、口径 15.4 cm、残存高 1.4 cm、口縁部のみ残存している。口縁端部が垂下し、凹線文を施して円形浮文を貼り付ける。口縁部にヨコナデの後、端部内面に刺突文を巡らせる。弥生中期に比定される。

2367 は壺で、残存高 4.0 cm、口頸部片である。突帯が 3 条巡り、胴部内外面にナデを施す。弥生中期に比定される。

2368、2369、2371 は壺である。底部のみ残存している。

2368 は底径 3.4 cm、残存高 1.9 cm、上げ底を呈し、底部内外面にナデを施す。弥生後期に比定される。

2369 は底径 4.0 cm、残存高 2.1 cm、平底を呈し、底部内外面にナデを施す。弥生後期に比定される。

2370 は小型壺で、底径 4.4 cm、残存高 3.9 cm、底部のみ残存しており、上げ底を呈する。底部内外面にナデを施す。弥生後期末、庄内並行期に比定される。

2371 は壺で、底径 3.4 cm、残存高 4.1 cm、底部のみ残存している。底部は平底を呈し、内外面に指オサエおよびナデを施す。

2372 は壺で、底径 4.3 cm、残存高 2.3 cm、底部のみ残存している。外面にハケ、内面にナデを施す。

2373 は壺で、底径 6.2 cm、残存高 3.6 cm、底部のみ残存している。外面に指オサエおよびナデ、内面にナデを施す。

2377 は本調査北区北東部 SR03 I 層、2374 は本調査北区北東部 SR03 I・II 層出土。2375、2376、2383、2384 は本調査北西区 SR13 から出土した。

2374 は甃で、底径 8.6 cm、残存高 4.0 cm、底部のみ残存している。平底を呈し、内外面にナデを施す。弥生前期に比定される。

2375 は甃で、底径 4.4 cm、残存高 3.9 cm、底部のみ残存している。平底を呈し、外面にケズリ、底面にナデ、内面に指オサエおよびナデを施す。弥生中期に比定される。

2376 は甃で、残存高は 5.7 cm。口縁部は外反し、端部に刻み目を施す。また、頸部に沈線を 2 条巡らせる。口縁部にヨコナデ、胴部外面に指オサエの後ナデ、胴部内面に指オサエの後、板ナデを施す。弥生前期に比定される。

2377 は甕で、底径 3.0 cm、残存高 2.2 cm、底部のみ残存している。平底を呈し、外面にタタキ、内面にナデを施す。弥生後期に比定される。

2378 は甕で、底径 3.8 cm、残存高 1.7 cm、底部のみ残存している。上げ底を呈し、外面にタタキ、内面にナデを施す。弥生後期に比定される。

2379 は甕で、底径 5.4 cm、残存高 2.7 cm、底部のみ残存している。底部外面にタタキ、内面にナデを施す。弥生後期に比定される。

2380 は甕で、底径 4.5 cm、残存高 2.9 cm、底部のみ残存している。上げ底を呈し、外面にタタキ、内面にナデを施す。弥生後期に比定される。

2381 は甕で、底径 3.7 cm、残存高 3.0 cm、底部のみ残存している。平底を呈し、外面にタタキ、内面にナデを施す。弥生後期に比定される。

2382 は甕で、底径 3.7 cm、器高 3.0 cm、底部のみ残存している。平底を呈し、外面に指オサエおよびタタキ、内面に板ナデを施す。また、煤が付着している。

2383 は甕で、底径 2.6 cm、残存高 6.1 cm、胴部下半から底部のみ残存している。底部は尖り気味の平底を呈する。底部外面にタタキ、タタキの後ケズリ、内面には指オサエの後、縦方向のナデを施す。庄内並行期に比定される。

2384 は甕で、口径 12.6 cm、底径 3.3 cm、器高 14.2 cm、口縁部は外反し、底部が平底を呈する。口縁部にヨコナデ、胴部外面にタタキ、内面に指オサエの後、板ナデ(ケズリ)、底面にナデを施す。弥生後期末に比定される。

2385 は甕で、口径 13.0 cm、器高 22.1 cm、口縁部がくの字状を呈する。口縁部にヨコナデ、胴部外面にタタキ、胴部内面にナデを施す。また、煤が付着している。庄内並行期に比定される。

2386～2401 はC地区C調査区SR15 から出土した。

2386 は蓋で、径 5.3 cm、残存高 3.6 cm、天井部のみ残存している。天井部は凹みを有し、内外面にナデを施す。弥生中期に比定される。

2387 は高杯で、残存高 5.6 cm、脚柱部のみ残存している。中央で、外面に面取り、内面にナデを施す。弥生中期に比定される。

2388 は広口壺で、口径 7.1 cm、残存高 5.4 cm、口縁端部のみ残存している。口縁部にヨコナデを施し、端部に円形浮文を貼り付ける。弥生後期に比定される。

2389 は広口壺で、口径 30.0 cm、残存高 2.1 cm、口縁端部のみ残存している。口縁は垂下し、凹線文が施され、貼り付けの円形浮文を有する。また、口縁部にヨコナデの後、内面に綾杉文を施す。弥生中期に比定される。

2390 は二重口縁壺で、口径 24.6 cm、残存高 7.3 cm。内外面にナデを施す。弥生後期に比定される。

2391 は壺で、底径 5.3 cm、残存高 3.0 cm、底部のみ残存している。平底を呈し、外面に指オサエおよびナデ、内面にナデを施す。弥生前期から中期に比定される。

2392 は壺で、底径 5.0 cm、残存高 4.2 cm、上げ底を呈する。外面に指オサエおよびナデ、内面にナデを施す。弥生後期に比定される。

2393 は壺で、底径 3.0 cm、残存高 2.4 cm、上げ底を呈する。外面に指オサエおよびナデ、内面に板ナデを施す。弥生後期に比定される。

2394 は壺で、底径 2.4 cm、残存高 2.0 cm、上げ底を呈する。外面に指オサエおよび

ナデ、内面に板ナデを施す。弥生後期に比定される。

2395 は壺で、底径 2.7 cm、残存高 2.5 cm、上げ底を呈する。外面にナデ、内面に板ナデを施す。弥生後期に比定される。

2396 は壺で、底径 5.1 cm、残存高 2.8 cm、底部のみ残存している。平底を呈し、外面に指オサエおよびナデ、内面に板ナデを施す。弥生中期に比定される。

2397 は壺で、底径 7.1 cm、残存高 5.4 cm、底部のみ残存している。平底を呈し、内外面にナデを施す。弥生前期から中期に比定される。

2398 は壺で、底径 5.4 cm、残存高 5.4 cm、底部のみ残存している。平底を呈し、内外面にナデを施す。弥生前期から中期に比定される。

2399 は甕で、口縁部のみ残存している。口縁部は外に開き、外面にヨコナデ、端部に刻み目を施す。また、ヘラ描き沈線を 2 条巡らせる。弥生前期に比定される。

2400 は甕で、底径 4.0 cm、残存高 3.0 cm、底部のみ残存している。外面にタダキ、内面にナデを施す。弥生後期に比定される。

2401 は甕で、底径 7.1 cm、残存高 6.2 cm、底部のみ残存している。平底を呈し、内外面にナデを施す。弥生中期に比定される。

8 石器

(1) 平成 14 年度調査

2402 は石鏃で、本調査北区北西部素掘溝から出土した。最大長 2.05cm、最大幅 1.3cm、最大厚 0.25cm である。

2403 は石鏃で、本調査北区南東部縄文砂層から出土した。最大長 2.2cm、最大幅 1.8cm、最大厚 0.35cm である。

2404 は石鏃で、本調査北区 SB06 から出土した。最大長 2.25cm、最大幅 1.6cm、最大厚 0.3cm である。

2405 は石鏃で、本調査北区南東部第 4 層から出土した。最大長 2.6cm、最大幅 1.8cm、最大厚 0.3cm である。

2406 は石鏃で、本調査北区南東部縄文砂層から出土した。最大長 2.8cm、最大幅 1.7cm、最大厚 0.3cm である。

2407 は石鏃で、本調査北区南西部素掘溝から出土した。最大長 3.2cm、最大幅 1.3cm、最大厚 0.3cm である。

2408 は有茎石鏃で、本調査北区南東部縄文砂層から出土した。最大長 3.3cm、最大幅 2.1cm、最大厚 0.4cm である。

2409 は有茎石鏃で、本調査北区北西部 2～5 層から出土した。最大長 3.15cm、最大幅 1.7cm、最大厚 0.4cm である。

2410 は石鏃で、本調査北区北西部素掘溝から出土した。最大長 2.05cm、最大幅 1.3cm、最大厚 0.25cm である。

2411 は有茎石鏃で、本調査北西区 SR13 から出土した。最大長 4.7cm、最大幅 1.8cm、最大厚 0.5cm である。

2412 は尖頭器で、本調査北区南東部縄文砂層から出土した。最大長 4.7cm、最大幅 2.0cm、最大厚 0.4cm である。

2413 は石錐で、第25 トレンチ第5層から出土した。最大長 2.75cm、最大幅 0.95cm、最大厚 0.6cm である。

2414 は石錐で、本調査北区南東部縄文砂層から出土した。最大長 4.7cm、最大幅 3.4cm、最大厚 0.7cm である。

2415 は石剣で、本調査北区北東部縄文砂層から出土した。最大長 29.5cm、最大幅 4.5cm、最大厚 2.2cm である。

2416 は石剣で、本調査北区南東部縄文砂層から出土した。最大長 15.8cm、最大幅 3.6cm、最大厚 2.3cm である。

2417 は石匙で、第25 トレンチ3・4層から出土した。最大長 3.3cm、最大幅 5.1cm、最大厚 0.6cm である。

2418 は石匙で、本調査北区北西部2～5層から出土した。最大長 3.9cm、最大幅 5.5cm、最大厚 0.7cm である。

2419 は削器もしくは石匙で、本調査北西区SR13から出土した。最大長 3.4cm、最大幅 5.5cm、最大厚 0.9cm である。

2420 は削器で、本調査北区南東部縄文砂層から出土した。最大長 4.9cm、最大幅 9.1cm、最大厚 1.0cm である。

2421 は削器もしくは棒器で、第25 トレンチ素掘溝から出土した。最大長 9.0cm、最大幅 3.6cm、最大厚 1.6cm である。

2422 は削器で、本調査北区南東部縄文砂層から出土した。最大長 7.6cm、最大幅 4.9cm、最大厚 1.2cm である。

(2) 平成15年度調査

2423 は石鏃で、E地区本調査中央東区SR03から出土した。最大長 1.8cm、最大幅 1.25cm、最大厚 0.4cm である。

2424 は石鏃で、E地区本調査中央東区SR03から出土した。最大長 1.65cm、最大幅 1.35cm、最大厚 0.3cm である。

2425 は石鏃で、E地区本調査中央東区SR03から出土した。最大長 2.0cm、最大幅 1.45cm、最大厚 0.3cm である。

2426 は石鏃で、A地区本調査西区素掘溝から出土した。最大長 2.5cm、最大幅 1.4cm、最大厚 0.4cm である。

2427 は石鏃で、A地区本調査西区素掘溝から出土した。最大長 2.25cm、最大幅 1.6cm、最大厚 0.5cm である。

2428 は石鏃で、C地区C調査区第5層から出土した。最大長 2.8cm、最大幅 1.9cm、最大厚 0.35cm である。

2429 は石鏃で、E地区本調査中央東区SR03から出土した。最大長 2.8cm、最大幅 1.5cm、最大厚 0.3cm である。

2430 は石鏃で、F地区本調査中央東区SR03から出土した。最大長 2.85cm、最大幅 1.8cm、最大厚 0.4cm である。

2431 は石鏃で、F地区本調査中央東区SR03から出土した。最大長 2.6cm、最大幅 2.1cm、最大厚 0.55cm である。

2432 は石鏃で、E地区本調査中央東区SR03から出土した。最大長2.95cm、最大幅1.9cm、最大厚0.45cmである。

2433 は異形石器で、E地区本調査中央東区SR03から出土した。最大長3.75cm、最大幅1.8cm、最大厚0.4cmである。

2434 はナイフ型石器で、A地区第35トレンチSR11から出土した。最大長5.1cm、最大幅1.3cm、最大厚1.05cmである。

2435 は石匙で、E地区本調査中央東区SR03から出土した。最大長4.95cm、最大幅7.05cm、最大厚0.65cmである。

2436 は楔形石核で、C地区C調査区第5層から出土した。最大長3.3cm、最大幅2.9cm、最大厚0.9cmである。

2437 は楔形石核で、C地区C調査区SR16から出土した。最大長3.75cm、最大幅2.8cm、最大厚1.1cmである。

2438 は削器で、E地区本調査中央東区SR03から出土した。最大長6.2cm、最大幅3.1cm、最大厚1.3cmである。

2439 は搔器で、C地区C調査区第5層から出土した。最大長6.5cm、最大幅4.35cm、最大厚1.1cmである。

2440 は石匙で、C地区C調査区第1～4層から出土した。最大長6.6cm、最大幅4.8cm、最大厚0.5cmである。

2441 は削器で、A地区本調査西区SR11から出土した。最大長6.6cm、最大幅3.85cm、最大厚1.0cmである。

2442 は石鏃で、D地区第53トレンチ第3層から出土した。最大長7.3cm、最大幅4.5cm、最大厚1.3cmである。

2443 は削器で、E地区本調査中央東区SR03から出土した。最大長7.6cm、最大幅4.4cm、最大厚1.5cmである。

(3) 平成16年度調査

2444 は石鏃で、C地区C調査区SR15から出土した。最大長2.15cm、最大幅2.2cm、最大厚0.4cmである。

2445 は石鏃で、G地区G調査区SR18から出土した。最大長1.6cm、最大幅1.7cm、最大厚0.2cmである。

2446 は石鏃で、C地区C調査区SR15から出土した。最大長2.4cm、最大幅1.5cm、最大厚0.8cmである。

2447 は石鏃で、C地区C調査区SR15から出土した。最大長2.5cm、最大幅1.6cm、最大厚0.4cmである。

2448 は石鏃で、C地区C調査区排土から出土した。最大長2.8cm、最大幅1.8cm、最大厚0.4cmである。

2449 は石鏃で、C地区C調査区SR15から出土した。最大長2.65cm、最大幅1.9cm、最大厚0.5cmである。

2450 は石鏃で、C地区C調査区SR15から出土した。最大長2.6cm、最大幅1.4cm、最大厚0.3cmである。

2451 は石鏃で、C地区C調査区SR16から出土した。最大長3.6cm、最大幅1.8cm、最大厚0.5cmである。

2452 は石鏃で、C地区C調査区SR15から出土した。最大長3.4cm、最大幅1.7cm、最大厚0.4cmである。

2453 は石鏃で、C地区C調査区SR15から出土した。最大長2.0cm、最大幅1.5cm、最大厚0.35cmである。

2454 は石鏃で、C地区C調査区SR15から出土した。最大長4.35cm、最大幅1.4cm、最大厚0.65cmである。

2455 は石鏃で、C地区C調査区SR15から出土した。最大長3.2cm、最大幅1.6cm、最大厚0.35cmである。

2456 は石鏃で、C地区C調査区SR15から出土した。最大長3.6cm、最大幅2.8cm、最大厚0.5cmである。

2457 は石鏃で、C地区C調査区SR15から出土した。最大長4.0cm、最大幅1.8cm、最大厚0.7cmである。

2458 は石鏃で、C地区C調査区SR15から出土した。最大長4.5cm、最大幅2.7cm、最大厚0.7cmである。

2459 は石鏃で、C地区C調査区SR15から出土した。最大長5.0cm、最大幅2.9cm、最大厚0.55cmである。

2460 は石鏃で、C地区C調査区SR15から出土した。最大長6.05cm、最大幅1.75cm、最大厚0.75cmである。

2461 は石槍で、C地区C調査区SR15から出土した。最大長5.2cm、最大幅2.7cm、最大厚1.1cmである。

2462 は石錐で、C地区C調査区SR16から出土した。最大長7.9cm、最大幅2.2cm、最大厚0.9cmである。

2463 は磨製石斧で、C地区C調査区SR15から出土した。最大長7.4cm、最大幅2.9cm、最大厚0.75cmである。

2464 は削器で、C地区C調査区SR15から出土した。最大長3.8cm、最大幅5.95cm、最大厚0.55cmである。

2465 は削器で、C地区C調査区SR15から出土した。最大長4.6cm、最大幅6.2cm、最大厚0.8cmである。

2466 は削器で、G地区G調査区第1～4層から出土した。最大長4.1cm、最大幅7.1cm、最大厚1.1cmである。

2467 は石匙で、C地区C調査区SR16から出土した。最大長7.7cm、最大幅2.7cm、最大厚0.5cmである。

2468 は石鏃で、C地区C調査区SR15から出土した。最大長4.5cm、最大幅7.2cm、最大厚0.8cmである。

2469 は削器で、C地区C調査区SR15から出土した。最大長4.1cm、最大幅9.8cm、最大厚1.2cmである。

(4) 平成18年度調査

2470 は石鏃で、N地区第 67 トレンチ 3層から出土した。最大長 1.75cm、最大幅 1.3cm、最大厚 0.25cmである。

2471 は石鏃で、N地区第 67 トレンチ SR29 から出土した。最大長 3.15cm、最大幅 2.2cm、最大厚 0.3cmである。

2472 は剥片で、M地区第 65 トレンチ 3層から出土した。最大長 2.4cm、最大幅 4.1cm、最大厚 0.85cmである。

2473 は削器で、M地区第 64 トレンチ 3層から出土した。最大長 3.4cm、最大幅 4.8cm、最大厚 1.2cmである。

2474 は 2次加工のある剥片で、M地区第 65 トレンチ 3層から出土した。最大長 9.3cm、最大幅 3.05cm、最大厚 1.3cmである。

2475 は石核で、L地区第 61 トレンチ 3層から出土した。最大長 3.6cm、最大幅 5.0cm、最大厚 1.6cmである。

2476 は削器で、M地区第 65 トレンチ素掘溝から出土した。最大長 6.75cm、最大幅 5.4cm、最大厚 1.3cmである。

2477 は削器で、K地区第 66 トレンチ SX24 から出土した。最大長 4.6cm、最大幅 7.9cm、最大厚 1.3cmである。

2478 は石核で、N地区第 67 トレンチ SX24 から出土した。最大長 6.6cm、最大幅 8.4cm、最大厚 2.8cmである。

(5) 平成 19 年度調査

2479 は石鏃で、K地区第 68 トレンチ 1～2層から出土した。最大長 3.25cm、最大幅 2.15cm、最大厚 0.7cmである。

2480 は石鏃で、K地区第 68 トレンチ 1～2層から出土した。最大長 2.1cm、最大幅 1.9cm、最大厚 0.5cmである。

2481 は石鏃で、K地区第 68 トレンチ素掘溝から出土した。最大長 2.55cm、最大幅 1.15cm、最大厚 0.4cmである。

2482 は石鏃で、K地区第 68 トレンチ素掘溝から出土した。最大長 2.2cm、最大幅 1.5cm、最大厚 0.35cmである。

2483 は石鏃で、K地区第 68 トレンチ SD107 から出土した。最大長 1.9cm、最大幅 1.9cm、最大厚 0.4cmである。

2484 は石鏃で、K地区第 68 トレンチ SD107 から出土した。最大長 1.85cm、最大幅 1.7cm、最大厚 0.35cmである。

2485 は石鏃で、K地区第 68 トレンチ SK88 から出土した。最大長 2.55cm、最大幅 1.45cm、最大厚 0.3cmである。

2486 は石鏃で、K地区第 68 トレンチ素掘溝から出土した。最大長 1.65cm、最大幅 1.6cm、最大厚 0.35cmである。

2487 は石鏃で、K地区第 68 トレンチ 3層から出土した。最大長 2.05cm、最大幅 1.65cm、最大厚 0.8cmである。

2488 は石鏃で、K地区第 68 トレンチ 2層から出土した。最大長 2.25cm、最大幅 1.6cm、最大厚 0.4cmである。

2489 は石鏃で、K地区第 68 トレンチ 2 層から出土した。最大長 2.85cm、最大幅 1.8cm、最大厚 0.3cm である。

2496 は削器で、K地区第 68 トレンチ素掘溝から出土した。最大長 4.6cm、最大幅 6.05cm、最大厚 1.7cm である。

(6) 平成 20 年度調査

2490 は石鏃で、K地区第 71 トレンチ SE77 から出土した。最大長 2.85cm、最大幅 1.6cm、最大厚 0.3cm である。

2491 は石鏃で、K地区第 71 トレンチ SR31 から出土した。最大長 2.4cm、最大幅 1.85cm、最大厚 0.35cm である。

2492 は石鏃で、K地区第 71 トレンチ SR31 から出土した。最大長 2.2cm、最大幅 1.25cm、最大厚 0.35cm である。

2493 は石鏃で、K地区第 71 トレンチ SR31 から出土した。最大長 2.1cm、最大幅 1.55cm、最大厚 0.25cm である。

2494 は石鏃で、K地区第 71 トレンチ SR31 から出土した。最大長 2.6cm、最大幅 2.2cm、最大厚 0.35cm である。

2495 は異形石器で、K地区第 71 トレンチ SR31 から出土した。最大長 4.4cm、最大幅 2.25cm、最大厚 0.45cm である。

第12章 まとめ

平成13年度調査は、近鉄五位堂駅前北第二上地区画整理事業地内において実施した試掘調査であったが、遺構は存在しないという当初の想定を覆す成果を得た。なかでも特筆すべきは、5世紀末に築造されたと考えられる下田東1号墳の検出である。墳丘部は完全に削平されていたものの、当古墳は馬見丘陵南西側の平地における初めての検出例となった。これによって、周濠を備え多種多様な墳輪を有する帆立貝型古墳を河川氾濫原に築造していたことが明らかになった。また、古墳南側で検出した旧河道の埋土は古墳時代から平安時代にかけての遺物を豊富に包含しており、それらには7世紀中葉から後半に比定される軒丸瓦、軒平瓦、鴟尾のほか、凝灰岩切石、須恵器円面硯、墨書土師器、人面墨書土器、土馬、馬歯、畜串などが含まれていた。

平成14年度調査では、下田東1号墳から西へ約20m離れた微高地上に、古墳時代から平安時代にかけての掘立柱建物群跡が存在することが判明した。この微高地は南東から北西方向に流れる2条の旧河道に挟まれている。古墳時代には、当該区域を囲い込む区画溝としてこれらが安定して機能したために、上記の建物群が営まれ得たと考えられる。北側を走るSR03は、出土遺物から見て古墳時代後期まで存続したようである。加えて、これら旧河道の埋土は下田東1号墳築造期の土師器、須恵器を多数包含しており、古墳祭祀が行われたことを示唆する。奈良時代から平安時代には大型の掘立柱建物が造営され、最大のもので梁間4.5m(2間)×桁行11.5m(5間)という規模を有する。また、正方位を意識してL字状に建物が配置されており、付近では石帯などの遺物が出土している。これらの遺構、遺物は、官衙に類する機能を持った建物の存在を想起させる。このように、5世紀末(古墳時代中期末)から建物群が形成され、それらは9世紀から10世紀頃(平安時代)まで機能していたと考えられる。その後、11世紀後半には集落が廃絶して近在に移り、13世紀頃に全面が耕地化されていった様子を上層埋土および遺構から見て取ることができる。このほか、SR03下層では縄文時代前期から晩期、弥生時代前期の土器、石器などが多数出土している。事業地内および周辺では、当該期にまで遡る生活痕跡を示す遺構は確認できないことから、上流の狐井遺跡付近にそれを求めることができよう。

平成15年度調査では、事業地の東側と南側で新たに遺構が確認され、事業地内全域に遺構が分布することが明らかになった。AおよびB地区では、旧河道流路の他には顕著な遺構が存在しなかった。これは、元来遺構の稀薄な区域であったうえに、後世の水口開発に伴って削平を受けていることによると考えられる。また、E地区では本調査中央区西端において、埋没したSR11上で新たに掘立柱建物跡を検出した。これを受けて行った、西に位置するB地区へ伸びる埋没河道上における調査によって、遺構は山崎川寄りに集中し、初田川寄りでは稀薄になることが判明した。

C地区では、土壌化した堆積土上に多くの遺構を検出した。特に、調査区南半で未知の環濠居館を検出したことは大きな成果であった。環濠の平面プランは、検出した北端部の形状から、「日」字形になることが予想される。また、この環濠は全体が条

里制地割に則って半町四方に配置され、これらに囲まれた空間は中央を走る南北方向の濠によって東西に区画される。濠の規模、形状には2種類を認めることができるが、両者の土層堆積状況は相似しており、相互の切り合い関係も認められない。したがって、これらの相違は居館が建築段階での設計によるものと考えられる。また、この環濠居館が機能していたと考えられる室町時代前半における当地域の支配者層として、岡氏一族、下田氏が挙げられる。彼らに関する遺跡としては、これまでに丘陵側の下田城跡、瓦口城跡、平地側のヘモンド城址跡、狐井城跡が知られている。これらとの関係の中で、下田地域の室町時代における支配者層の動きを示す資料として有意義な成果を得た。D地区では、全域にわたってひろがる古墳時代から中世にかけての遺構を確認した。なかでも蛇行して走る溝が、耕作痕跡もしくは土地開発に関わる素掘小溝の施工方向を規制していることは注目に値する。

平成16年度調査はC調査区のD層遺構と、C地区に隣接するF、G地区を対象として実施した。C調査区で検出した主な遺構は、熊谷川ないし葛下川の旧流路と見られるSR15およびSR16であった。両者は流下方向が異なっているが、出土遺物から、SR16が先行すると考えられる。前者の川岸には護岸施設、堤防状施設、橋脚が構築されていた。また、それぞれの場所で人面黒土器、土馬などが出土したことから、これらを用いた律令祭祀が行われていたと考えられる。

また、南半ではこれら旧河道内に堆積した埋土を基盤として室町時代中期の環濠居館が築かれていることに加え、調査区内では鎌倉時代以降に機能したと考えられる流路が確認されないため、SR15は遅くとも鎌倉時代にはその機能を停止していたと考えられる。

F調査区では、トレンチ北東端部でSR15西岸の一部を確認するとともに、そのすぐ西側では飛鳥から平安時代の掘立柱建物群と井戸を検出した。掘立柱建物群は小規模ではあるが南北棟が整然と配置されており、飛鳥時代の建物群は数棟ながら区画溝を伴い、整地層は瓦を包含していた。この建物群の西方約250mの地点では平成14年度調査において、奈良時代から平安時代にかけての大型建物群を検出しており、当遺跡において中枢機能を果たした施設が置かれていた可能性が高い。この建物群は平安時代に最大規模となるが、12世紀末頃には全面が耕地化されていったと考えられる。当遺跡ではこれらの遺構に加え、都城あるいは官衙などで見られるものと同種の遺物が出土している。これらのことから、官衙に類する機能を持つ施設の造営を想定することができ、葛下郡衙との関連が注目される。葛下郡衙は字「コオリ」が残る大和高山市材木町、あるいは当遺跡の南東約3km地点に位置する葛城市新在家などが候補地として挙げられるが、未だ発掘調査による確認はされていない。

平成17年度調査では、平安時代まで事業地中央部に営まれた遺跡の中核部が、中世にはいつてC地区を中心とした東部へ移ることを確認した。H、I調査区では飛鳥時代から平安時代にかけての大型掘立柱建物群を検出した。西に位置する平成14年度調査の中央北および南区、東接する平成16年度調査のF調査区においても同様の建物群を確認している。また、II調査区で検出したSE54の枠内から平安時代の木簡が出土するなど、律令期における下田東遺跡の中核部が事業地中央部であったという想定を補強する成果を得た。また、J調査区南端部ではSR15の一部が検出され、平成13年度

調査時と同様に人面墨書土器や斎巾、底部に穿孔のある土器など、律令祭祀に関わると考えられる遺物が出土した。C調査区では中世環濠居館の一部が検出され、その環濠から14世紀後半から15世紀前半の遺物が出土しているが、この南西に位置するK調査区に同時期の遺物が集中している。このことから、当該期の生活域がC地区を中心として展開されていたと考えられる。なお、K調査区では遺構に伴わないもの、円筒埴輪片、人物埴輪片、その他形象埴輪片が出土している。

平成18年度調査では、L地区に設定した第61トレンチのSX22内から、土師皿および意図的に体部を取り去ったと思われる黒色土器碗の高台が多量に出土した。当該遺構は、常に浅く水が溜まっている沼地状の地形を形成していたと思われる。また、遺構埋土の堆積状況、上記出土遺物の様相から、いわゆるゴミ捨てとして利用されたとは考え難く、水辺祭祀などが行われた可能性を示唆するものといえよう。また、同地区第63トレンチのSE69では、枠内から7世紀前半に比定される軒丸瓦片が出土した。これは平成13年度調査で出土した鳥尾の年代に合致し、現在の五位堂、下田周辺に瓦葺き建物が存在したという想定を補強し得るが、当事業地内で実施した一連の調査ではそれらの存在を示す遺構を検出するには至っていない。また、M地区第65トレンチで検出した柱穴内からは平城宮6664型式I種の軒平瓦が出土している。これは根石代わりに利用されたものと思われるが、平瓦部凸面側に朱が残存していることから、元末建物に葺かれていたものを再利用したと考えられる。N地区第67トレンチでは、C地区およびJ地区で検出したSR15の一部と思われる流路に加え、この流路埋土層を基盤として築かれた掘立柱建物数基を検出した。このことは、当トレンチの東に位置する環濠居館が機能した時期における居住域が、C地区からN、K地区にかけての一带であったという想定を補強する。また、これらの建物が廃絶した後にトレンチ全面が耕地化されるが、耕作土の堆積状況から、河の氾濫と耕作地としての開発が交互に繰り返されていた様子が復元される。また旧葛下川の、事業地東端部における氾濫の様相、および中世における、耕作地としての土地利用の在り方が明らかになった。

平成19年度調査では、K地区に設定した第68トレンチにおいて円筒埴輪を枠に転用した井戸を検出したが、その他に顕著な遺構は確認されなかった。また、この井戸は古墳時代後期に構築されたと考えられ、香芝市内では初の検出例となった枠構造を有する。事業地北東端部のJ地区第70トレンチでは下田東2号墳を検出し、その周濠底部から組立式木棺の底板が出土した。この底板について特筆すべきは、短辺の両端に縄掛け突起状の作り出しを持っていることである。ただし、突起には縄を掛けた痕跡が見られないため、実際にはどのような用途に用いられたかは不明であるが、既知の組立式木棺構造に新たな一種を加える成果であろう。また、当古墳の内約100m地点には下田東1号墳が位置しており、古墳時代後期において、事業地北東部を墓域として利用していたと想定される。

第20年度調査では、中世から近世の耕作に伴う多数の素掘小溝、長方形を呈し「縦板組隅柱横棧留め」の枠構造を有し、集水施設に底部を欠いた曲物を利用した井戸を検出した。これらの他に、底部を打ち欠いた羽釜を逆さに埋設した土坑、河川の旧流路、そしてそれに伴う杭列などを検出した。また、第II遺構面よりさらに下の、既往の調査で無遺物、無遺構とされた層から、立った状態の自然木を検出している。

以上、全8次にわたる発掘調査の結果、平成13年度の事業地北東域における試掘、確認調査に始まって以降、西域での平成14年度調査、東域、南城の平成15年度調査においても縄文時代から中世にかけての遺構が存在し、遺物が含まれていることを確認することができた。これらによって、河川氾濫原であるこの地域には遺跡が存在しないという従来の認識を覆すこととなった。すなわち、古墳時代には中央部から西部東半を居住域とし、SR15を境界として中央北東部から北東部を墓域とする土地利用の在り方を復元することができる。ただし、遺構に伴わないものの、東南端部でも形象埴輪片などが出土しており、何らかの土地利用が行われていた可能性が考えられる。また、西部の居住域に営まれた掘立柱建物群は平安時代まで存続したと考えられ、中央部においても平安時代の遺構が検出されている。一方、中央南部では古墳時代から平安時代の遺構は稀薄であり、生活痕跡が認められない。葛下川を中心とした、周囲を流れる河川の旧流路およびその氾濫による土砂堆積が顕著に見られることと合わせ、当該地域は居住域としても生産域としても適した環境ではなく、永らく湿地帯であったと考えられる。中世にはいと遺跡の中心は東部に移り、SR15、SR16埋土を基盤として環濠居館が築かれる。それに伴い、かつて居住域であった中央部、西部は耕作地を主とした生産域へと変化する。それと機を同じくして、中央南部をも耕地化していくが、耕作土層中には河川氾濫によると思われる砂粒分が含まれており、水害と耕作を繰り返していたと考えられる。また、事業地東部は近世まで当遺跡の中核として機能したと考えられ、中央部および西部は中世に耕地化されて以降、近代には水田地帯となり現在に至る。

下田東遺跡の範囲については、馬見丘陵裾が北限および東限になり、西限は耕作地化以前の、地形が高く遺構が稀薄である初田川付近と考えられる。南限については、当遺跡と近似した関係にある狐井遺跡の北限を鑑みる必要がある。狐井丘陵の影響を受けた生活圏と、葛下川に制約された生活圏の区分が可能か否か、今後、隣接する遺跡の性格などを考慮しながら考察していく必要がある。

報告書抄録

ふりがな	しもだひがしいせき
書名	下田東遺跡
副書名	
巻次	
シリーズ名	香芝市文化財調査報告書
シリーズ番号	第12集
編著者名	山下 隆次 小島 靖彦 辰巳 剛一 清岡 廣子 湯本 繁 金松 誠 波多野 篤 福田 由里子 藤田 智子 三好 栄太郎
編集機関	香芝市教育委員会
所在地	〒639-0293 奈良県香芝市本町1397番地 TEL 0745-76-2001
発行年月日	西暦2011(平成23)年3月31日

所在地	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
奈良県香芝市 下田東遺跡 他	奈良県香芝市 下田東3丁目・ 狐井	29210	98	34度 32分 21秒	135度 42分 46秒	20010814 ? 20081031	4,5932.5㎡	大和郡市計画・ 五位堂駅北北二 土地区画整理事 業

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
下田東遺跡 他	旧河道 集落 古墳	縄文時代 ? 室町時代	旧河道、溝、 土坑、柱穴、 井戸、掘立 柱礎物、帆 立貝型古墳、 方墳など	土師器、須恵器、黒 色土器、縄文土器、 瓦器、瓦埴師、石 器、石製品、土製品、 木製品、埴輪など	縄文時代から近世にわたる遺構や遺物が検 出され、中でも奈良時代から平安時代にか けての掘立柱建物群や、周濠から各種の形 象埴輪が出土した下田東1号墳、また、周 濠から両端に縄掛け突起状の作り出しをも つ組合式木棺の底版が出土した下田東2号 墳、さらに、平安時代の井戸から種々日な どが記された木簡など、貴重な遺物が出土 した。

下田東遺跡

香芝市文化財調査報告書 第12集

2011(平成23)年3月31日

- 編 集 香芝市教育委員会
〒639-0292 奈良県香芝市本町1397番地
TEL. 0745-76-2001
- 発 行 香芝市・香芝市教育委員会
〒639-0292 奈良県香芝市本町1397番地
TEL. 0745-76-2001
- 印 刷 堀内印刷株式会社
〒635-0067 奈良県大和高田市春日町1丁目9番10号
TEL. 0745-52-0557 FAX.0745-23-2330
-
-